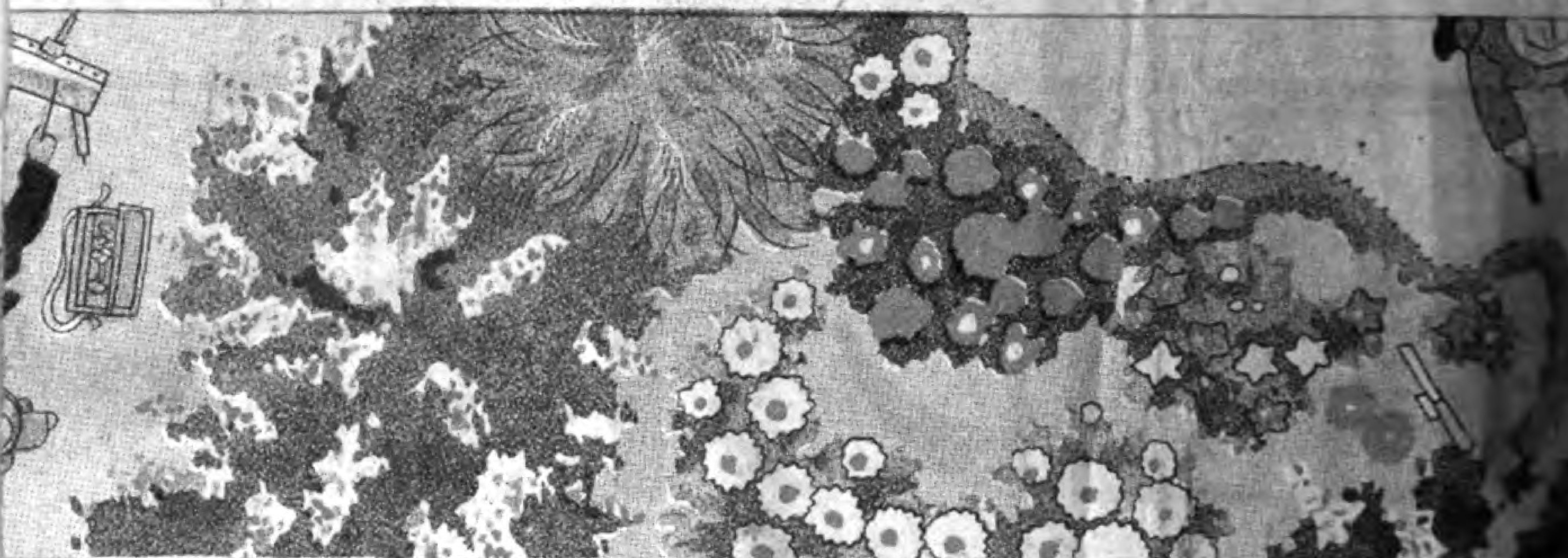
JAN 11 '46



△活殺自在（見本御請求は必らず雜誌名御記入の上御申込みを希ふ）

見本進呈

心身鍛練 交靈感應 氣合術通信講習

附、古往今來百般靈術悉く詳解

◎心身鍛錬活殺自在、判斷記憶斷行力養成法、無病長壽術、靈動法、大本教、神降しの眞法、一喝萬病救治法、金剛力不死身術、刺針術、鐵火術、不動金縛り法、刀の刄渡り、火渡り法、護身白刄取り法を始めあらゆる百般の靈術を會得せしむ希望者には御申越次第見本送呈す。

東京市京橋區京橋電車交叉點前（日活前）

天玄洞本院

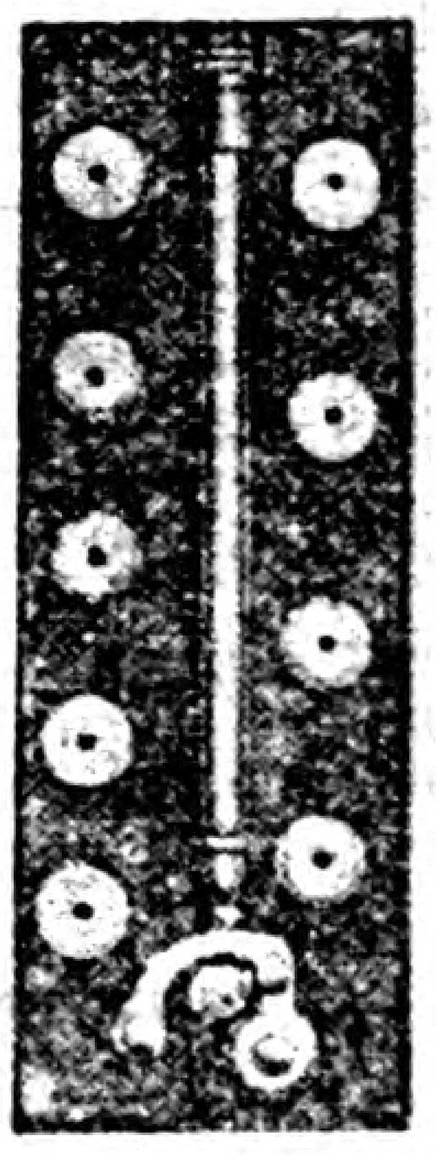
◎最後に來れ!!

無代進呈 ワキガ藥

●斷じて從來アリフレたるが如き一時押への誇大廣告の賣藥類に非ず今回始めて創見せられたる的確藥なり如何なる頑固のワキガも救治せしむ論より證據、手術、藥療、服藥等にても根治せぬ人は雜誌名記入の上御申越次第右の發見藥無代にて秘密に送呈す（業務擴張の爲左記へ移轉）

東京市京橋區常盤町一番地

グランド社



輪轉式直線描線器

（一名定規要ラズ筆線器）

＝諸官衙御用品＝

軸の先に各種樣々な齒車を取付ければ、直線、曲線、點線、リーダー線、その他思ふまゝの線が描ける最新發明品。特に製圖家學生諸氏の時間經濟の爲め是非机上にお備へ遊ばさねばならぬ必然の武器であります。至急御用命を。



定軸式（描畫盤十種）一圓

旋轉式（括轉盤七種）三圓

送料（內地二二 外地四五）

東京市本鄉區駒込坂下町四八

大日本雄辯會講談社代理部

振替東京六六二九番

色白くなる

色黒き方、赤き方、アレ性、ニキビ、ソバカス、吹出物、脂肪顏、日にやけた御方は三錢切手封入御手紙下さい。色白く美しくなる良藥を封書でお知らせ致します。皆樣より引もきらず澤山の禮狀がまゐります。

東京市本郷區本郷二丁目十三番地

久保とも子

『キング』で見し旨お書添へを願ひます。

謹告

光榮

本會廿五年間の業績顯著なりとて

藍綬褒章を下賜せらる

本會創立以來廿六年間通信敎授に依つて公衆の利益を興し、其功績著名なりとの理由により、今般本會主事に對し榮譽ある藍綬褒章を下賜せられたのであるが、本會は會長始め職員一同此の優渥なる皇恩に感泣して、今や全力を傾倒して講義錄の改訂に、通信敎授法の完成に努めてゐる。

大日本國民中學會

創立は日本で一番古く内容は日本で一番新しい

中學講義錄

小學校卒業生

のうちいろ〳〵な事情で上の學校へ行けない諸君は日本で一番信用の厚い基礎の强固な本會へ入會して名實共に日本第一の中學講義錄に就いて學べ!!

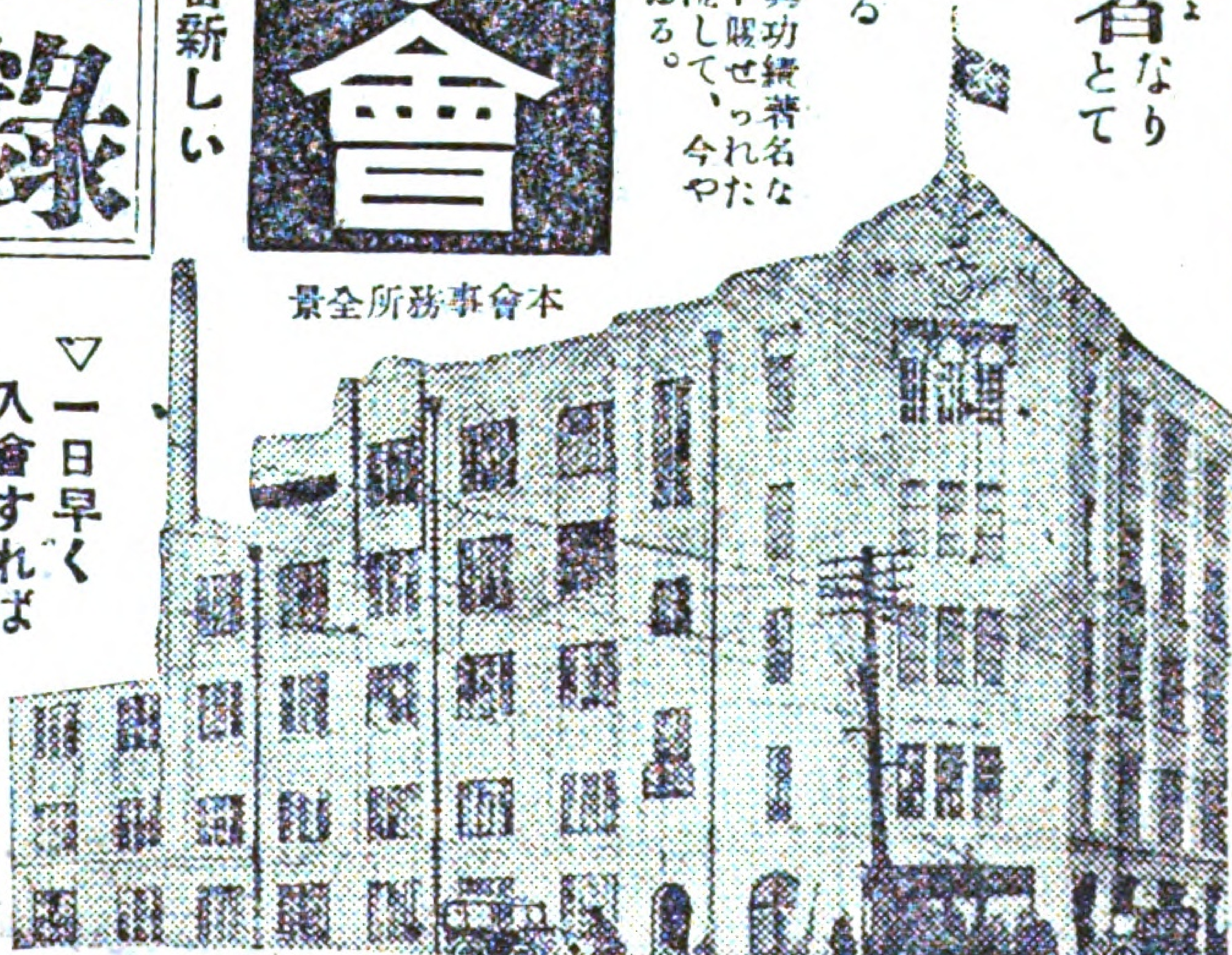
本會の特長

一、基礎が固い
二、信用が厚い
三、學制が正しい
四、内容が新しい
五、講師が偉い
六、會費が廉い
七、卒業が早い
八、指導が良い
九、教授法が巧い
十、成功が確い

◎獨學で立派に中學卒業が出來る!!

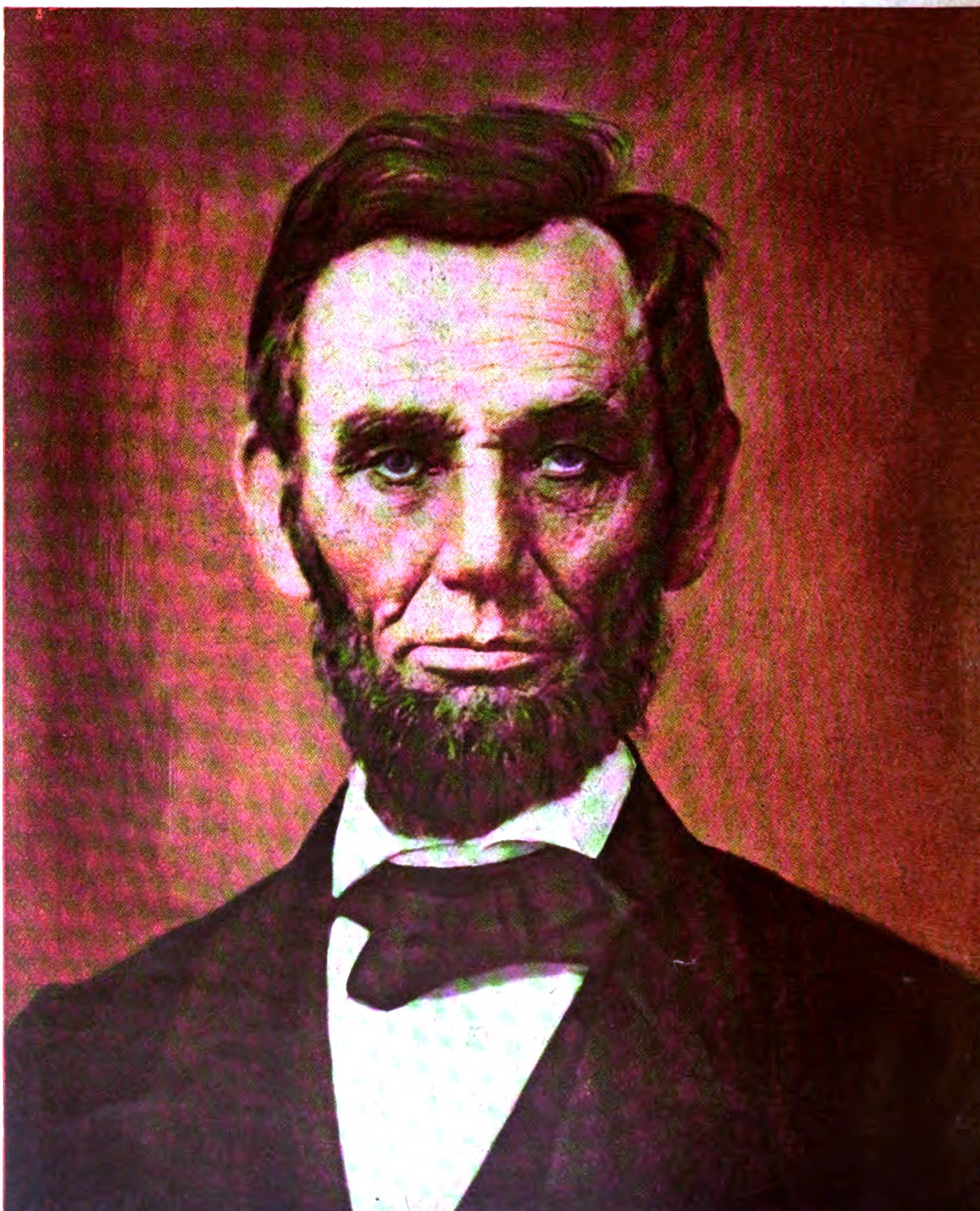
講義見本規則無代進呈

▽一日早く入會すれば
▽一日早く成功出來る



本會事務所全景

東京駿河臺 大日本國民中學會 電話神田 一一一一・二一一一・三一一一番 振替東京 四二〇〇番



リンカーン　世界英傑畫譜（其の十）　（本文參照）

秋の流れに洗ぐ





何處だらう蜩が啼いてゐる。水面を渡るそよ風にも何となく秋の聲がする。サア障子も張替へよう。秋蠶もあがつた。珠玉の樣な眞澄の流れに脛を沒してものを洗へば、ヒンヤリ秋の涼氣が身に沁みて來る。秋だ、秋だ、萬象の靜もる秋だ。又しても蜩の聲が聞えて來る。

通信教授 音樂講義錄

居乍ら自宅で獨習できる講義錄のお蔭でお琴やヴァイオリンがこんなによく出來る樣になりました



僞物

ハガキにて申込次第
各科規則書進呈

注意

專賣特許

賜天覽台覽

秋月作尺八、朝日ヴァイオリン、琴譜本、複音大正琴

通信教授 音樂講義錄

- 大好評百五十版 ヴァイオリン科
- 大好評八十三版 マンドリン科
- 大好評五十五版 ハーモニカ科
- 大好評百四十八版 尺八科
- 大好評九十一版 琴曲科
- 大好評三十八版 三味線科

通信教授 音樂名曲樂譜集

- ヴァイオリン マンドリン 獨習名曲集秘書
- 泰西名曲集講義錄
- 大悲曲集
- 各國子守唄集
- 時代映畫伴奏樂譜全集
- 西洋キネマ樂譜全集
- ハーモニカ樂譜全集
- 尺八追分の獨習
- 尺八俗謠と民謠の獨習

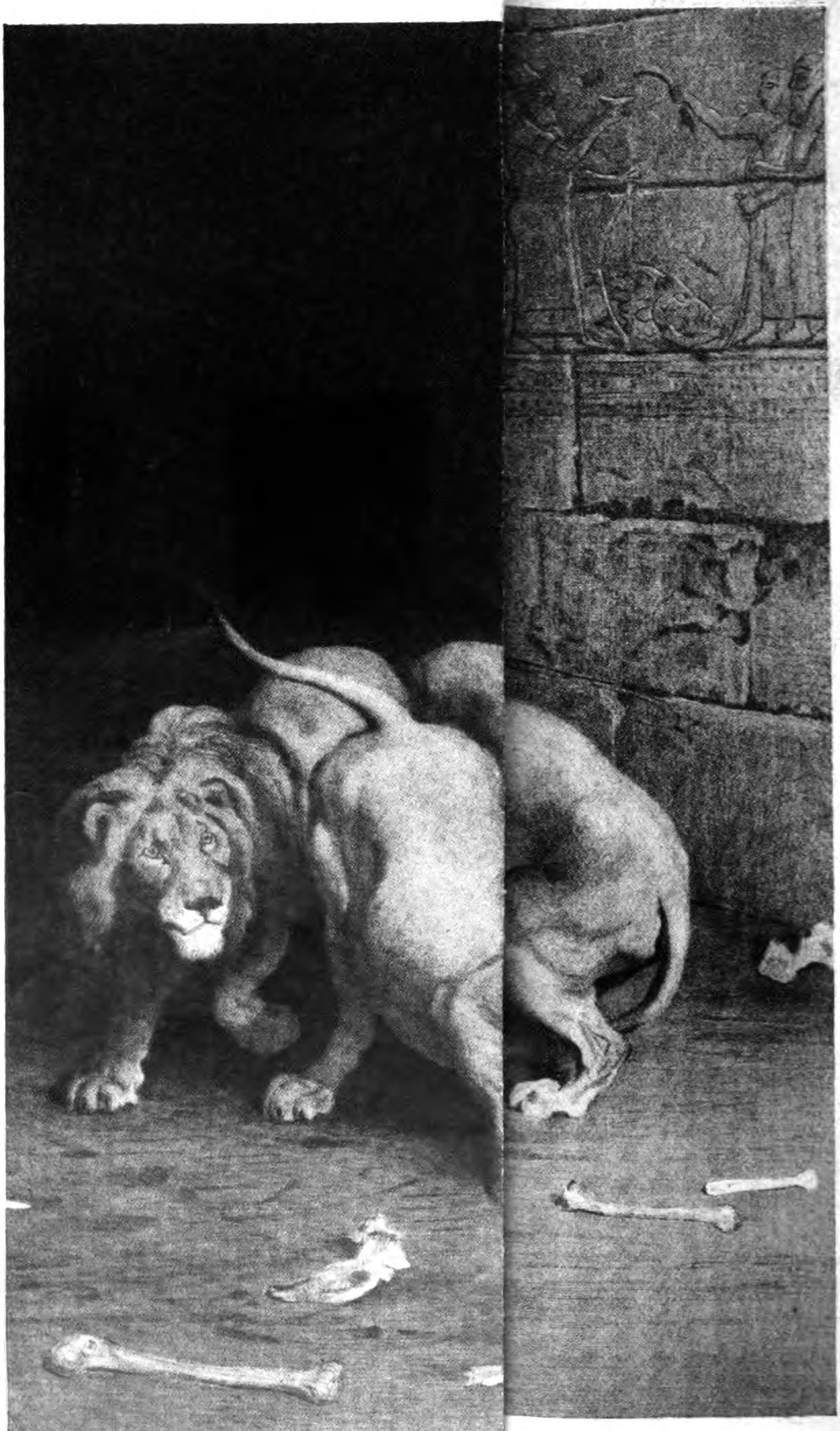
（見本進呈）

東京神田區須田町 家庭社

◎音樂が通信教授などで出來るものかと云ふ人あらばそは此の本會專賣の巧妙なる方法を知らぬからであります。即ち本會講義錄による時は上記各科希望の樂器を居ながらにして直接教師に就て學ぶより、ヨリ以上の效果と便利が多數あります。されば三ケ月を出ずして人の前で奏せる位にキツトなれます。論より證據ハガキにて上記各科の内希望の科目を明記して御申込次第くはしき規則書を進呈します

上記の各樂譜は勇しき行進曲、舞踊曲、面白集、壯快なる曲集、可愛い童謠、淋しき小夜曲、國歌の部、歌謠の部、支那名曲の部、和曲の部等の名曲を全部集めたもの、斯界第一流の執筆に本會獨特の新發明の工夫を施し總て演奏上の注意、解說迄つけてある今迄になき良書。

發行所 東京神田區須田町二番地 振替東京二七〇〇八番 大日本家庭音樂會 東京支部



正義は神の

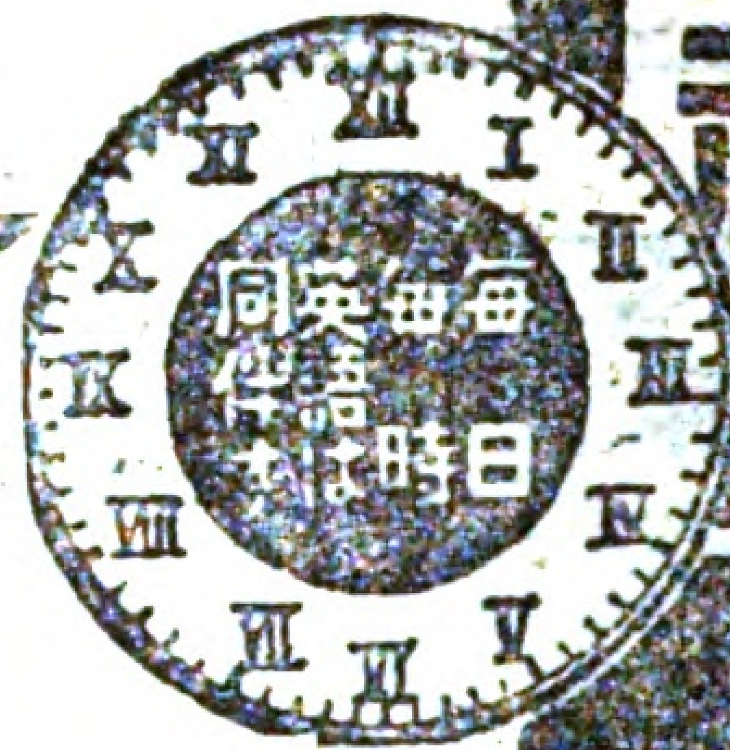
（は涙ぐましい感激にみちた物語りが
野辺地先生のお話を御参照下さい。）



上は明石海岸、下は銚子海岸



研究社
英語通信講座



天地爽涼の秋だ。君の頭腦は水の如く澄んで攻學の心頻に動く。此好季節を逸せず毎夜二時間を本講座の英語獨習に割いて他日の活躍に備へ給へ。斷じて君は誑かれず！

・十月新學期・
新會員歡迎

岡倉先生責任執筆

■英語のみは本專門講座に頼れ
■見本を讀む丈でも力が附く

君は必ず知る、現代社會の重要なる地位の鍵が先づ英語の分る青年に託されてゐる事を！ 而も在來の無理解なる講義錄に英語獨學を斷念せし君よ、本講座を信ぜよ。ＡＢＣから僅十五ケ月で中學卒業・實檢・專檢・遞信・鐵道・警察受驗の資格を約束する。（内容見本獨學案内附贈呈）

東京市麴町區富士見町六丁目
研究社通信學部
振替口座東京三〇八五番



讀書の秋

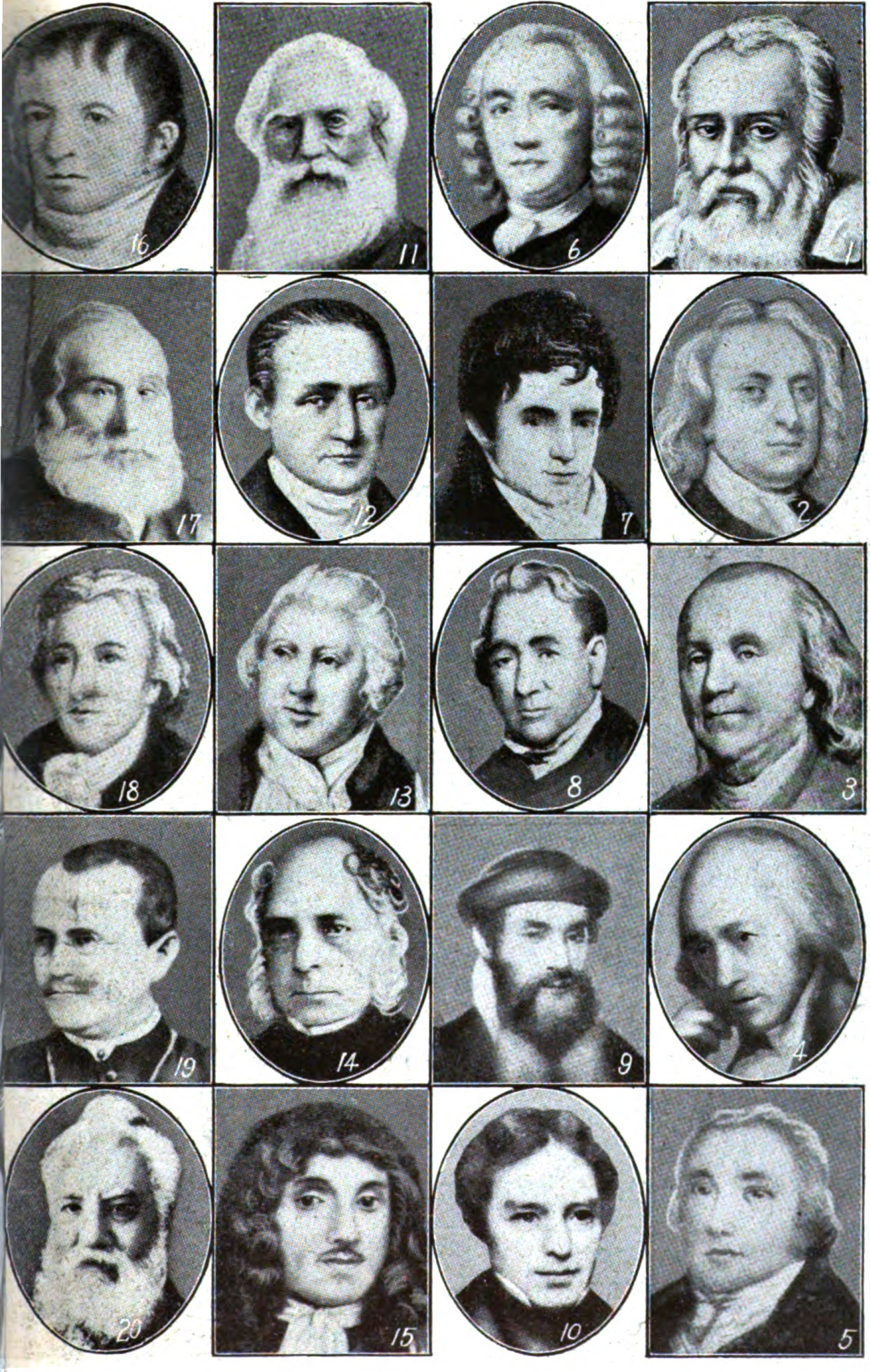
それからどうして？
お祖父さま
早くお次が聞きたいわ
牛若丸は笛吹いて
カラリコロリと
五條の橋を
渡つて居る時辨慶が
ヌツと闇から出て來たの
早くお次が聞きたいわ

（寫眞は樞密顧問官鐮田榮吉閣下と御令孫）

近代文明

近代文明の礎石となり、人類の行手に明るい燈火を灯して來れたのは何と云つても科學者の力が大である。茲に重要なる發明發見をした主なる科學者を御紹介しよう。

1ガリレオ(伊)天體觀測其他。2ニュートン(英)引力の法則其他。3フランクリン(米)避雷針。4ワット(英)蒸汽機關。5ゼンナー(英)種痘。6ハリスン(英)羅針盤。7フルトン(伊)汽船。8スチブンソン(英)汽車。9グーテンベルヒ(獨)活版。10ファラデー(英)感應電氣、氣體を液化。11モールス(米)電信。12ニープス(佛)寫眞。13アークライト(英)紡績其他。14ベッセマー(英)冶金。15フック(和蘭)顯微鏡。16グレートヘッド(英)潛水艇。17パーキン(英)アニリン染料。18カートライト(英)蒸

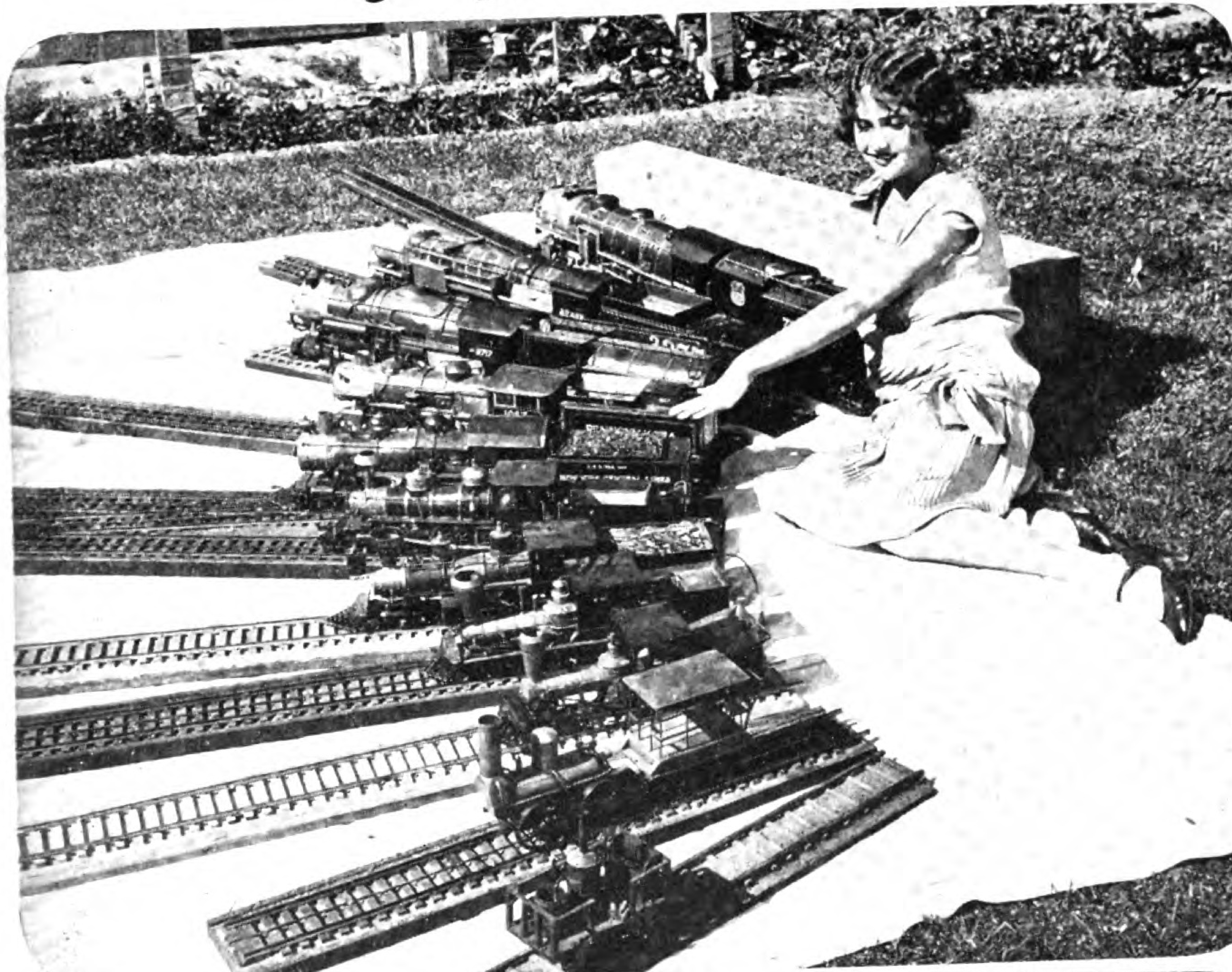


の大恩人



汽機關。19メンデル(墺)遺傳法則。20ベル(米)電話。21エヂソン(米)蓄音器、活動寫眞其他。22ホー(米)輪轉印刷機。23バンバーク(英)農作物品種改良。24マルコニー(伊)無線電信。25レントゲン(獨)X光線。26キューリー夫人(佛)ラヂウム。27シンガー(米)ミシン機。28コッホ(獨)結核菌。29北里柴三郎(日)血精療法其他。30エールリッヒ(獨)サルバル酸。31秦佐八郎(日)同上。32ツエッペリン(獨)飛行船。33カーチス(米)水上飛行機。34ライト(米)飛行機。35高峰讓吉(日)チアスターゼ其他。36イーストマン(米)寫眞フイルム。37野口英世(日)スピロヘーテ菌其他。38ミルン(英)地震計。39鈴木梅太郎(日)オリザニン其他。40フォード(米)自動車。

文明は移る





(上圖)ズラリと並んだ機關車は近代科學の成果を物語るもの。米國加州の博覧會に出品された模型、一番下方は今から四十年前のものでそれから順次改良發達して最上方(十年前)の様になつた。(下圖)都市計畫の完備された理想的の都市として評判のもの。放射狀道路、環狀道路は實に整然としてゐる。これは獨逸ドレスデン市の博覧會に出品された模型である。こうして科學の進歩は一歩々々新らしい世界を築いて行く。

まだニキビがあるの？



女學生「あなたのニキビはまだ治らないの？マア隨分ね、わたしなんかモウすつかり治つたワヨ。」

大學生「ヤほんたうだね、貴女は何んで治したの？例の僕が使つて居たアレ？それとも○○○○？××××？

女學生「違ふわよ、ソンナこと云つて居るから貴女のニキビは治らないぢやないの、私の使つた藥は有名の小川先生のマーシーよ。」

大學生「エ？マーシー？あゝ新聞で度々見て居た新しいニキビの専門藥あれなの、ソンナにキク藥かね マーシーは。」

女學生「だから貴女は時代遅れだと云ふのよ、今私達の學校だつてニキビの藥でマーシーを使はない者は無い位よ、それで又不思議にキクわ、今私達のクラスでニキビのある者は殆んどないわよ。」

大學生「ホ、ーさうかね、道理で此頃君の所へくるエスさんなども綺麗になつたと思つた、やつぱり男の方が顏の手入れでは時代遅れかナ、僕はまだマーシーのそれ程キクことを知らなかつた爲に色々の藥に迷つて隨分金を捨てゝ居たんだ、今から直に買つて行つて使つて見よう、ドウもありがたう。」

女學生「それがイゝわ、キットびつくりする程キクわよ。」

こんな會話が或郊外の田園都市で散歩らしい若い男女からもれた。

マーシーは今賣出しのドクトル・オブ・ファーマシー小川鼎重先生が其専門である應用藥學に基いて在外十七年の研究から得た方法で自身責任製劑して居る藥で彼の人にはキクが此の人にはキカない、此の體質にはキクがあの體質にはキカぬと云ふ藥ではなく全人類に効果絶大の世界的ニキビ取藥で内用は變質外用はバイキン撲滅と云ふ根本的ニキビ取り藥です。

一日を延ばさず只今からお使ひ下さい……マーシーは今全國到る處の藥局藥店で賣つて居りますが發賣以來日も淺いから若し行き渡つて居ない時や品切れの時は直接製造元へ雜誌キングの愛讀者なる旨を書添へ御申込下されば小川先生著ニキビの根本的治療法一冊無代進呈致します

定價

内用 マーシー

七日分	七十五錢
十五日分	一圓五十錢
四十五日分	四圓
特別難症用	十圓

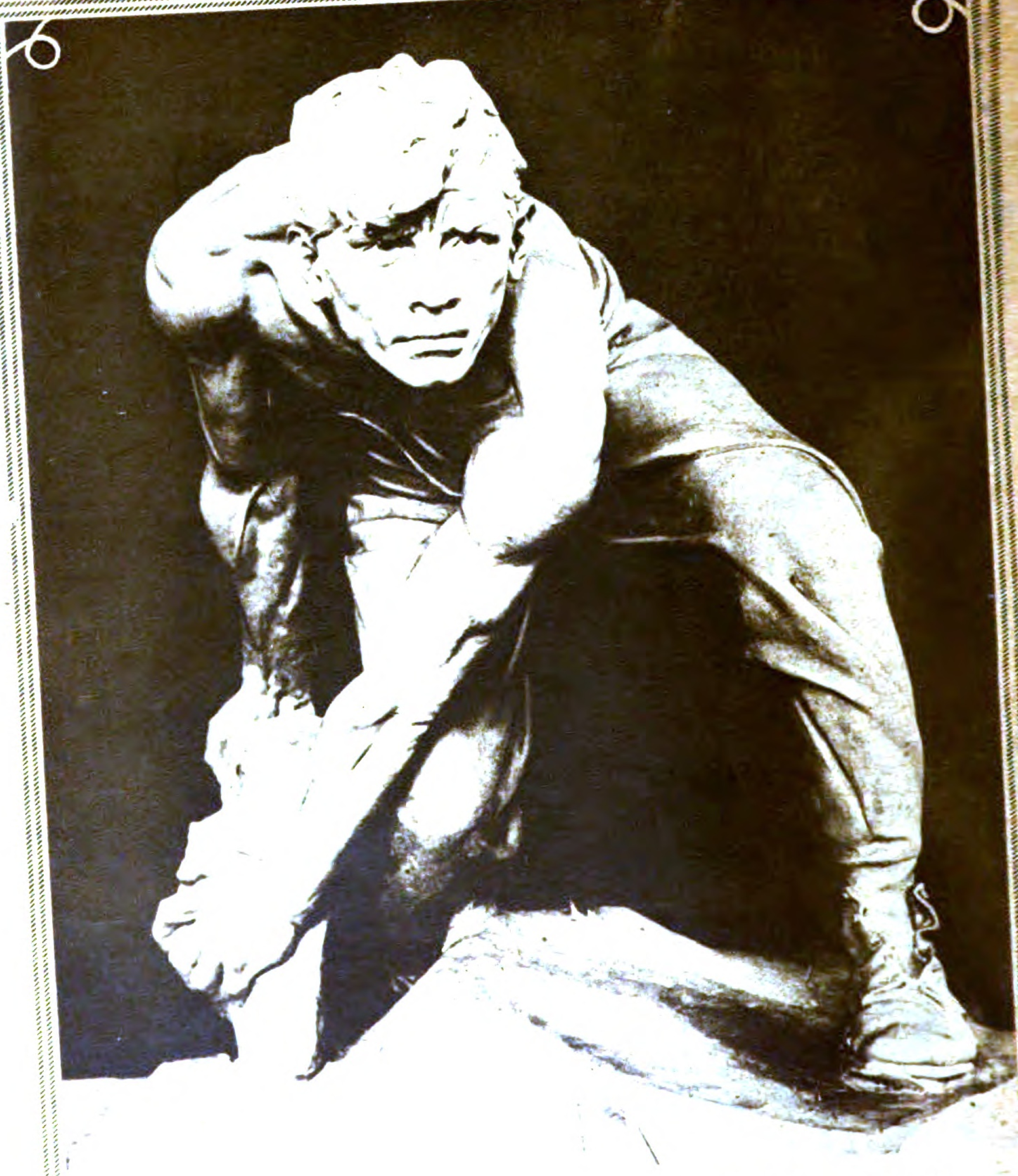
外用 マーシー

試用形	五十錢
中形	一圓
大形	二圓
特大形	三圓

書留送料内地十八錢
海外 十五錢代金引
換小包廿七錢 海外代引御斷

製造及發賣元 小川研究所
東京市神田區表神保町十番地
電話神田一七四八 振替東京六四四三〇

◎[illegible]（振替東京六六二九）でも便宜御取次致します



勞働

◇勞働は不斷の聖火である。良心の明りとなりて人々の胸底に燃ゆ。

——ワシントン

◇休息と幸福とは人々の渇望する所。夫等は唯勞働によつてのみ獲らる。

——トマス・ア・ケムピス

これは露國著名の名彫刻家シエードル氏の傑作『勞働者』で好評嘖々たるもの。





葡萄の房長く垂れて
軒くらし
蜂のつぶやく
こゑきこゆなり

秋の



白き粉をふけるやうなる亞米利加の大きメロンの黄の色ぞよき

金絲雀を庭に放てば無花果にゆかずざくろのゑみわれし實に

枝ながら青き林檎はとりきたり大き花瓶を出してさし見る



2

(1)龍虎の玉を爭ふ様な壯快極まりなきラクロス。(球戯の一種)

(2)お母さんお婆さん迄幾歳になつても運動を忘れず、亞鈴を振上げてオ一二、オ一二。

(3)大きな〳〵球を手先から手先へ渡して敵陣へ侵入させる新式運動法。米國のアンゼル博士の新考案に成るものだ。



3



1





(6)同じく米國の選手ボーエン女史。高跳びの猛練習をやつてゐる美しきスタイルである。

(7)ホッケー競技に熱中する婦人連。斯道の人に云はせると ホッケーは最も婦人に相應はしい競技だと云ふ。





(4)英國の農村に行はれる愉快な山野抜渉競走。男も女も子供も参加して歩き難い山野を競走する。寫眞は婦人の一隊が韋駄天に駈出した刹那。

(5)砲丸投、圓盤投に於て世界的に有名な女流選手米國リ、アン嬢の模範的姿勢。

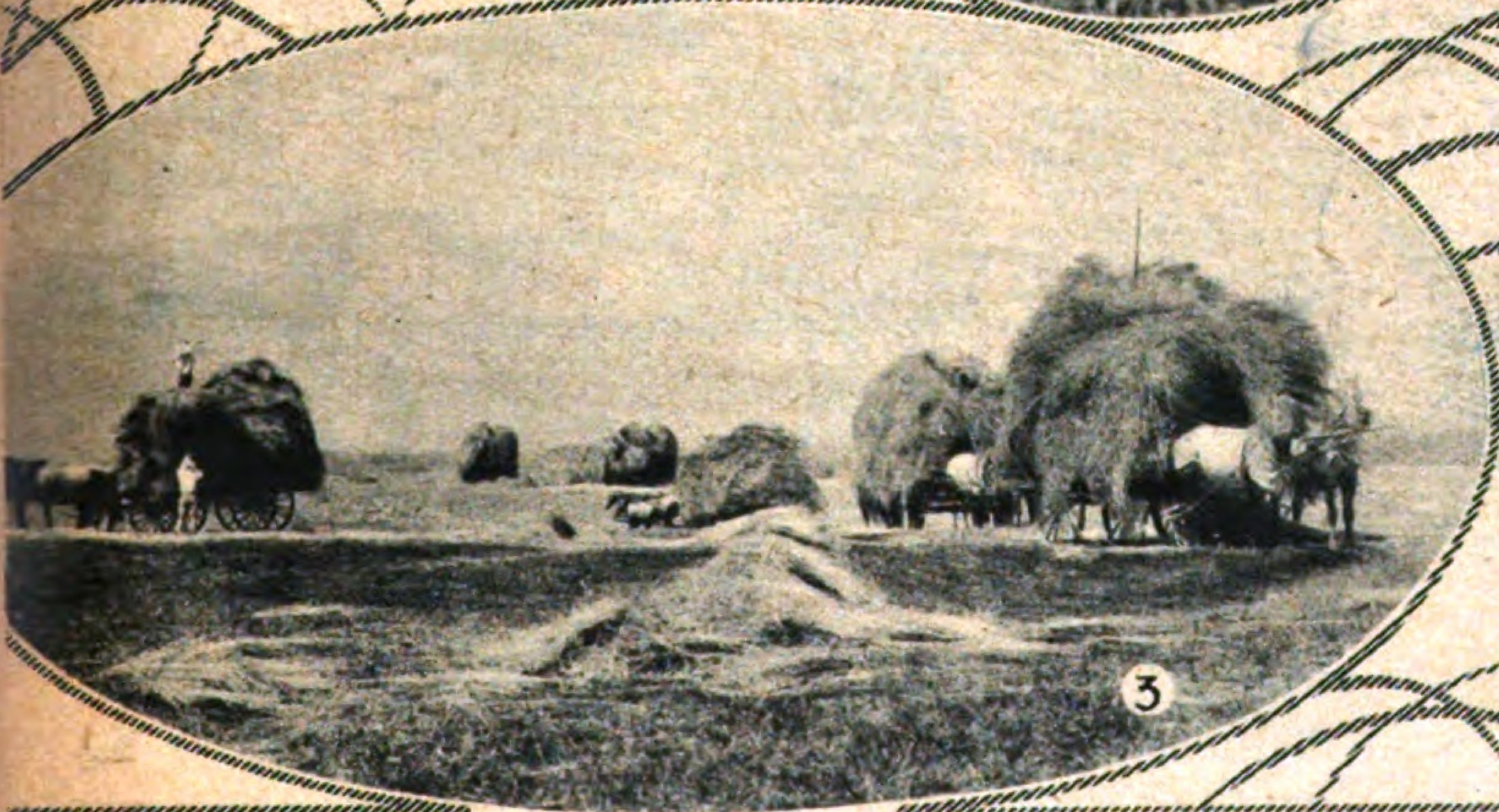
放



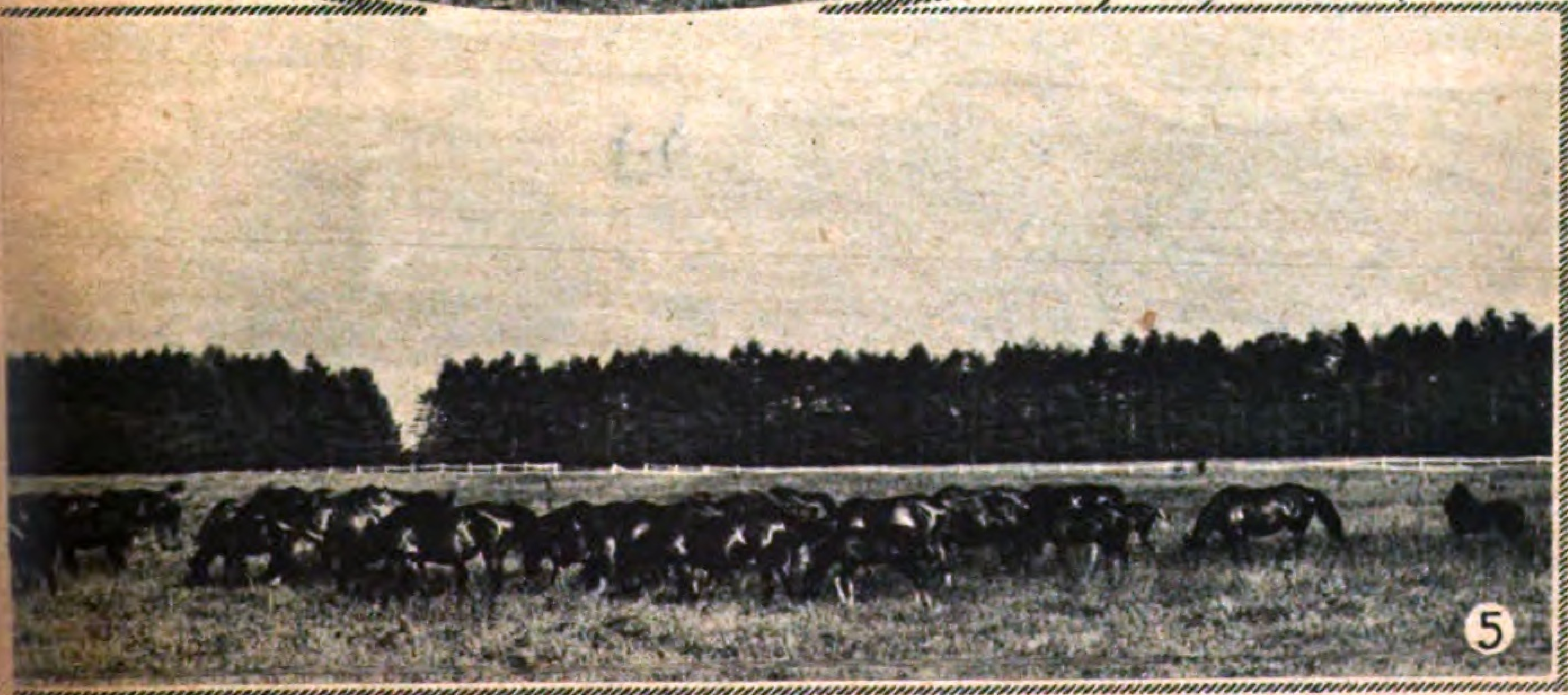


①

秋の野や草の中行く風の音——芭蕉。 何處から來るであらう。そして何處へ去り行くのであらう。風は颯々と葉末を渡つて行く。あゝ限りなき天の高さを知る秋だ！ あゝ極みなき地の廣さを知る秋だ！ 萬物は稔り、萬物は成育する時、誰か大自然の前に感謝の念を捧げずに居られよう。殊に秋の平和は牧場に於て表徵される。肥馬群れ居て天に嘶き、群羊睦みて地に草を食むのも懷しき秋の風物である。玆に全國の主なる牧場を一巡して見よう。



③



⑤

(1)は千葉縣三里塚宮内省下總牧場の乳牛放牧。此處には此の外各種の家畜が飼育されてゐる。(2)岩手縣岩手郡小岩井農場の乳牛放牧。(3)同上刈取りたる牧草を馬車に積込みの所。(4)千餘頭の緬羊を飼育しつゝある北海道空知郡瀧川種羊場。農林省の所管で廣さは千七百餘町歩に及んでゐる。(5)は北海道靜内郡に在る帝室林野局札幌支局新冠出張所の牧場で寫眞は蕃殖牝馬の一部。(6)は青森縣上北郡に在る農林省所管の奥羽種馬牧場。種付の牝馬放牧。


2


4


6



鵜飼と鷹狩





上圖は支那の漁師が、鵜を連れてこれから漁に出かけようといふ所。日本の永良川では裝束を着け篝火を焚いて、床しい風情を見せますが、支那では簡單に行ひます。しかし、鵜はよく馴らされてゐて、舷に並んで水に飛込み巧みに魚を啣へて上つて來ます。下圖は蒙古キルギース人の酋長が、獵用の黑鷲を携へ、羚羊の狩りに出かける所。日本の鷹狩によく似てゐます。荒涼たる蒙古の山中、猛鷲高く翔つて羚羊を追ふ樣は、壯快の極みであります。

處女見よ

家庭を樂しく

◎秋哀し薄命佳人の遺跡を訪ねて

佳人を偲ぶ、寫眞と名畫を添へた大家の名文、淸秋絶好の讀物！

◇悲絶！橘大隊長戰死の眞相

（誤傳を正すべく内田軍曹の手記公開！）

◇五分間で忽ち美しくなる朝化粧

（寫眞入で、直ぐに役立つ美容の秘傳！）

◎新婚夫婦和合の秘訣

結婚生活の幸福がこゝにある。悉くが婦人方の見逃せぬ體驗の公開！

◇夫にこうして貰つた時一番嬉しかつた

◇新妻時代に一番困つた事、嬉しかつた事

◇どうしたら夫の氣心が早く呑みこめるか

◇私が新世帶を持つた時の失敗ばなし

◇勤めに出る夫を持つ新妻の模範奥樣ぶり

◇夫が外から歸つて來た時の五分間

◇夫は妻の何處に理解を持つべきか？

◇新郎新婦に贈る言葉…一流名士執筆

◇嫁入仕度を手輕に整へる婦人職業

（上品な家庭内職、都合よい婦人職業！）

◇紳士淑女の心得

（之丈はぜひ心得て置かねば人に卑げすまれる！）

人妻見よ

幸福にする!!

◎縁遠い娘が早く良縁を得る娘の心得 母の心得

世の婦人方にこの心得がありますか？ぜひ幸福の扉をお開き下さい！

◇大評判の新型流行手藝さまざま

（五十錢で出來る又と得難い手藝品色々）

◇重いぢ疾を民間藥で全治

（難病を全治して喜ぶ方々の體驗談）

◎婦人方熱讀の名小說

▽若く美しき未亡人の悩み『母』鶴見祐輔

▽近代男女の戀の諸相 戀愛小說『双鏡』久米正雄

▽紅涙潸々悲戀に泣く『綠衣の聖母』長田幹彦

上の三大篇の外、上司小劍、大佛次郎其他一流大家の名作多數、婦人小說では天下に比なき內容、ぜひ御覽下さい！

◇婦人倶樂部十月號には右の外驚異の大讀物數十篇！

知識、修養、趣味、娛樂、慰安、悉く一册にあり、切に御一讀を奬む

婦人倶樂部十月號（定價）八十錢（送料四錢）東京本鄉 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）



恥しやニキビ男に雀斑女

色黒赤顔吹出物等は、すてゝおかれぬ毒素の作用
五大學者の協力研究したハルナー最新療法に限る

ニキビソバカス色黒症などの皮膚障害は體内胃腸内に發生する毒素から腸自家中毒を起し血液が毒化して主に顔面へ吹出す病的障害であると云ふ原因が最近世界的に確定された學理である、されば是等の病症に惱む人は舊式化粧液や塗藥許りでは効めがない特種な化學的内服藥で體内の悪い血毒素を淨血してこそ眞から自然と色白美顔になります「流石は歐米」!!!内服藥療法は一般に賞美され非常な成績で流行して居りますから日本でも適當な有効物の出現は青春男女の熱望であります然し外國藥の効力は體質食物風土上など全然異ふ我々日本人東洋人種には往々有害な悪作用があるので我が醫藥學界で有名な藥學博士島田耕一先生藥學士越澤渦滿先生ドクトル敷津林先生等の五大學者協力苦心して發見した唯一の美身藥ハルナーは青年男女紳士淑女から溢るゝ歡喜、禮讃、激賞されて大評判効果は的確!!信用絶對であるから日本全國は勿論東洋南洋に行渡つて到る處の藥局藥店で熱心に取次販賣して居ります。ニキビソバカス吹出の方は御心配御無用今スグ御試驗あれ、美は人生の花、清新は永遠に輝く





試驗藥送り升

藥價は二圓三圓五圓等ですが此の際スグに實驗熱望の方は五拾錢だけ振替口座東京一七二〇一番へ拂込むか切手又は爲替同封書留郵便で御送金下されば特別試驗藥に左記の美本を無代添附してスグ〳〵送藥します。

五大博士學士共著 最新 白色美顔の秘訣書 無代進呈

最新世界的白色美顔の學理をハルナー發見五大學者が解り易く親切詳細に説明してある數十頁の美本を今回美容指導宣傳の爲めドナタへも無代進呈するから希望者は『キング』愛讀者「美本請求」とハガキへ書いて左記の東京の濟生堂製藥所へ御申込あれスグ進呈します。

東京市京橋區楽地橋際
合資會社 **濟生堂製藥所**
振替口座東京一七二〇一番 電話京橋(56) 一〇二七番 五五二三番



『釣れた！　釣れた！　大きな奴が釣れた！』と大はしやぎにはしやいでニコ〳〵して居るのは、野球ファンに御馴染の米國本壘打王、ルース（左）とゲーリッグ（右）

下は米國拳闘界の英雄ジャック・デムプシーが、カリフオルニアの或る病院を訪れ足の不具になつた子供達のために今お伽噺を讀み聞かせて居る所です。大選手の日常は何と無邪氣ではありませんか。

奇拔な動

(1) 天晴れ野球選手になりすました豹の茶目坊、發矢！と球を受け取つて『ヤツ今度はナイスボールだ』と一寸氣取つたスタイル。



1

(3) スッカリ元老にでもなつたつもりのブルドッグ君、咳一咳し乍ら『思想國難ぢやの何ぢやのと俺にや此の頃の時世が氣に食はん』と一寸慷慨の表情よろしくある處を御覽下さい。



3

(2) 『吾輩は元來樂天家でノオ』とお行儀の惡いひぐま君、人さへ見ればこんな失禮な恰好をし乍ら巧みに物をねだる。中々隅におけない外交官だ。



2

(4) 『どうも此の頃は退窟でね。一番將棋でもさしにやつて來ませんか。』と河馬君はトンデモない大きな口を開けて欠伸の連發。こんなに怠けてゐると人間なら忽ち首だ。



4

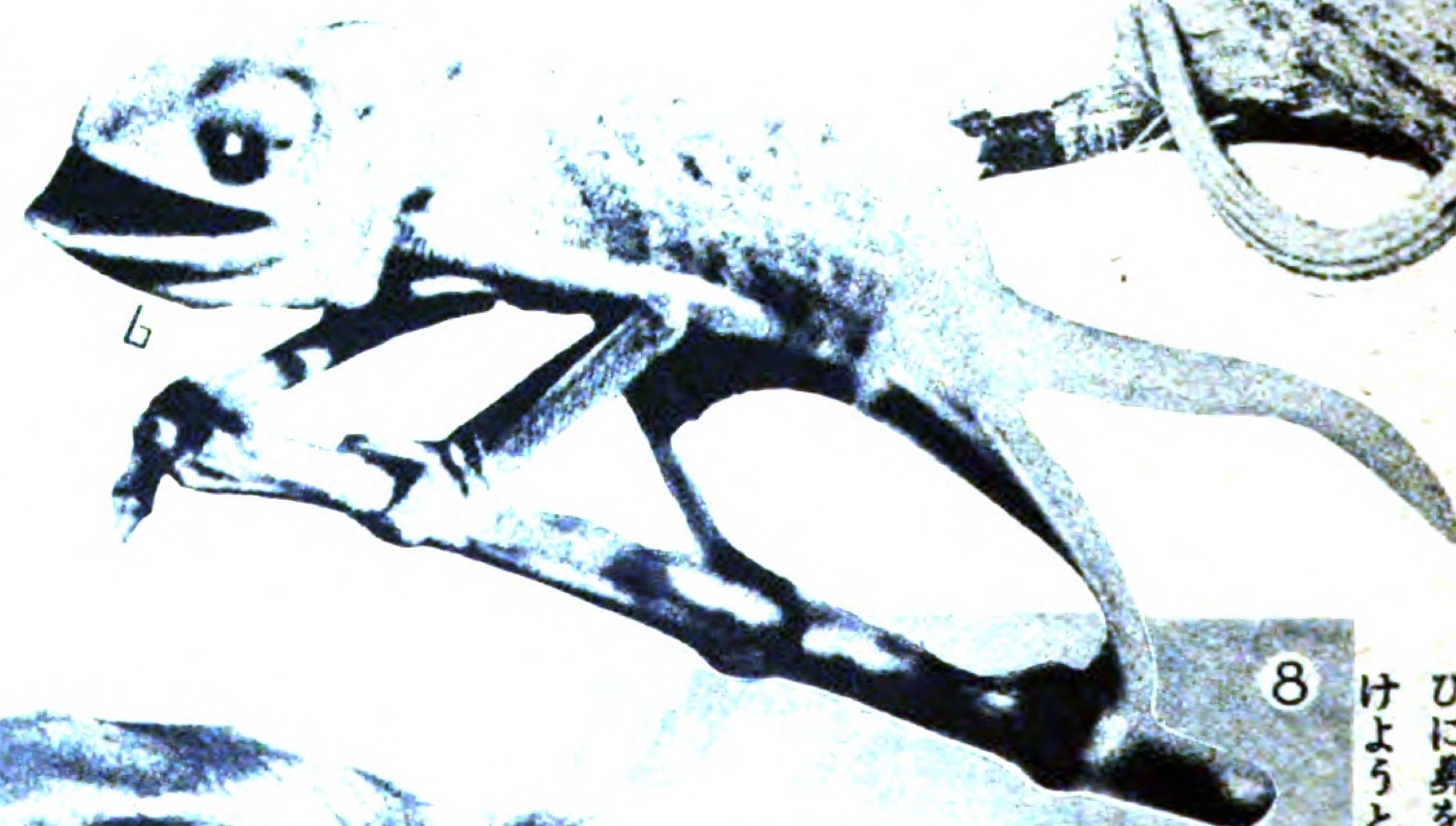


(5)スワ！天下の一大事？とでも云ふ様な吃驚仰天の表情をして居るのはオーストラリアの蜥蜴。首の周圍には珍らしい襞がある。

(7)『痛い〳〵兄さん痛いよ。戯談はお止しつたら』弟猿は指を嚙まれて悲鳴をあげて居る。成程これぢや痛そうな顔付だ。誰か早く止めなくちや……。



(6)瓢輕者のカメレオン。浮世の樣子はどんなだなと云つた工合に木の天頂に登つて目をパチクリ。



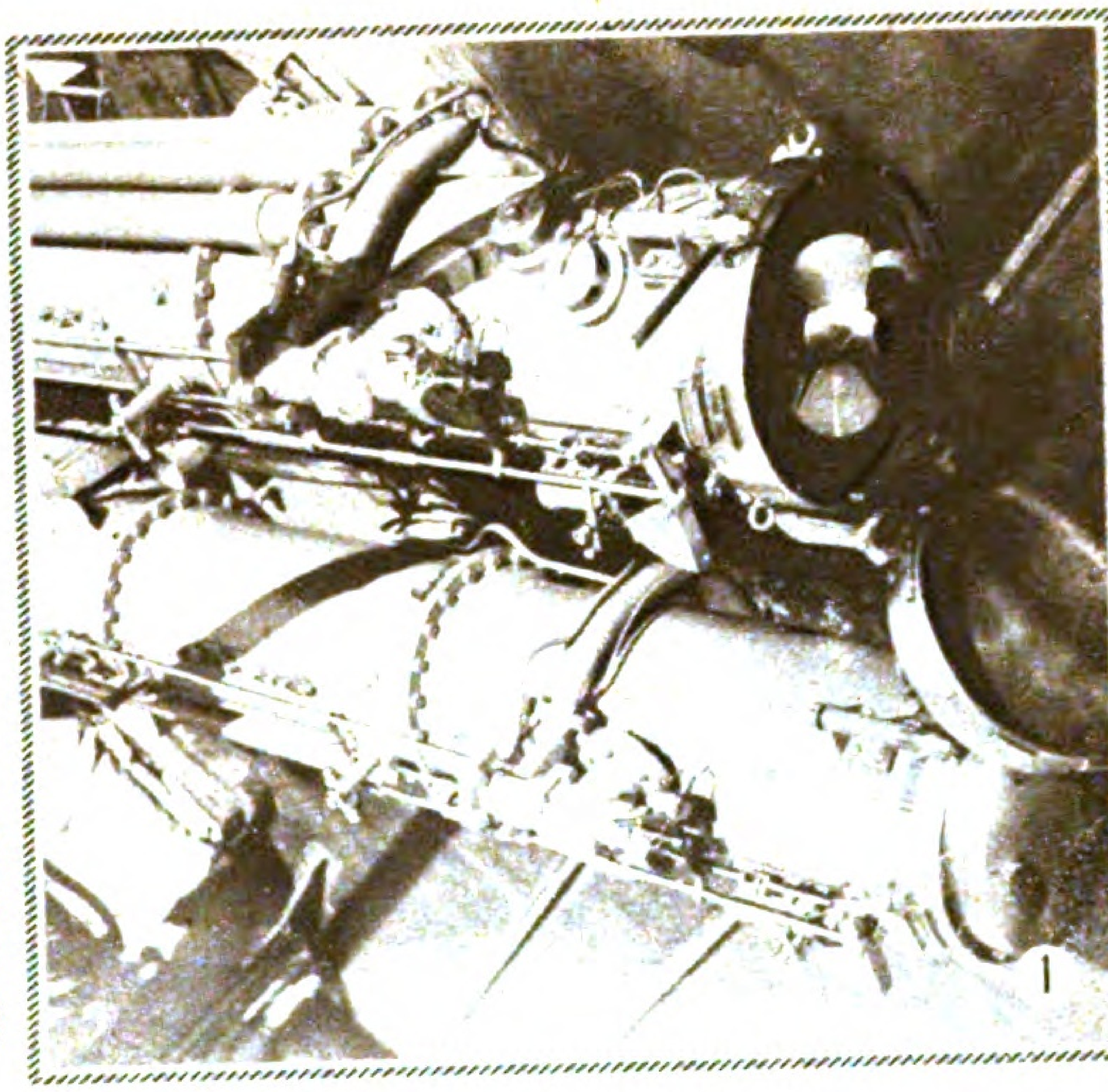
(8)これは又罪のない象の子供の仲好し振り。互ひに鼻を巻きつけてこれから活動でも見に出かけようと、コッソリ相談中。



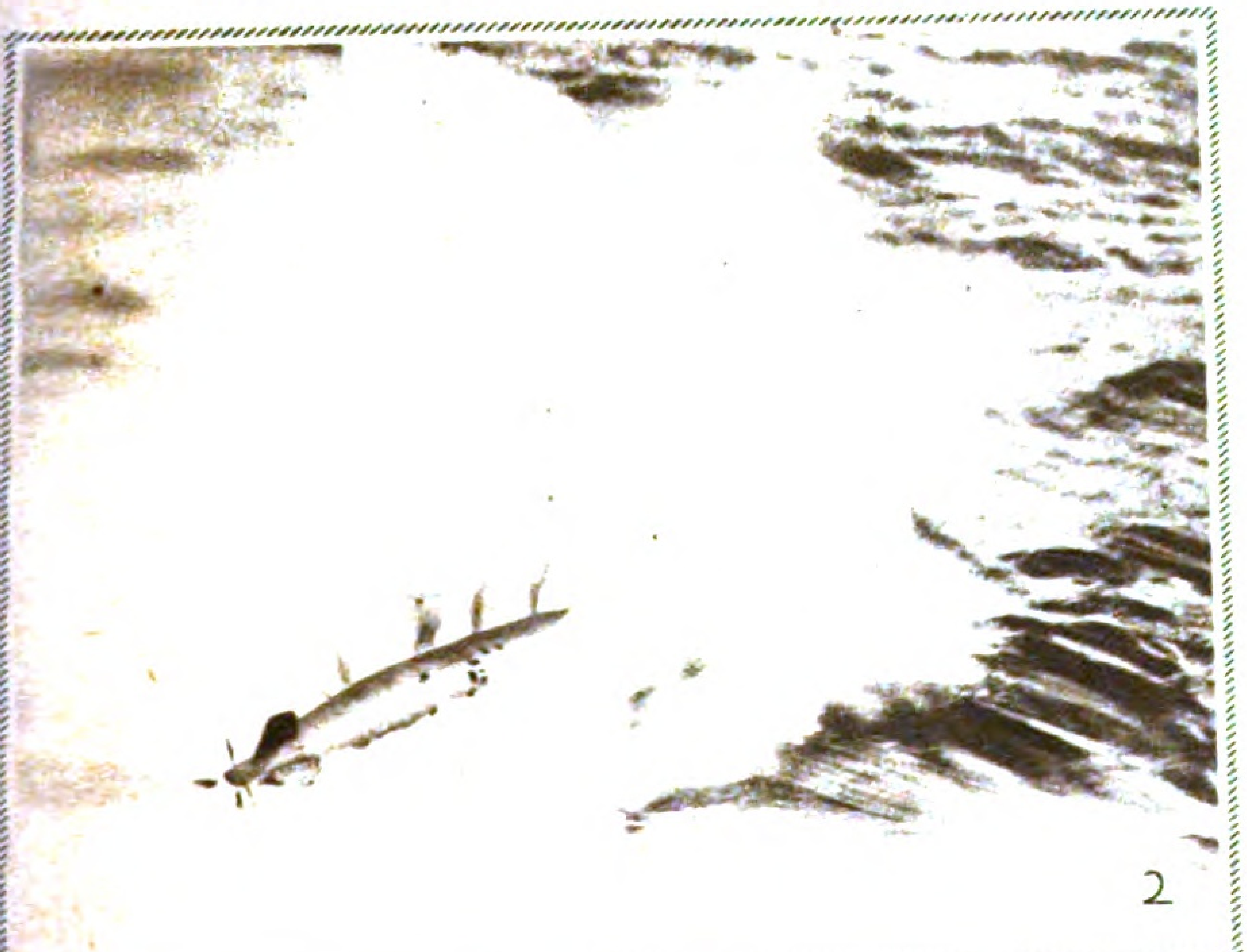
最近兵器の

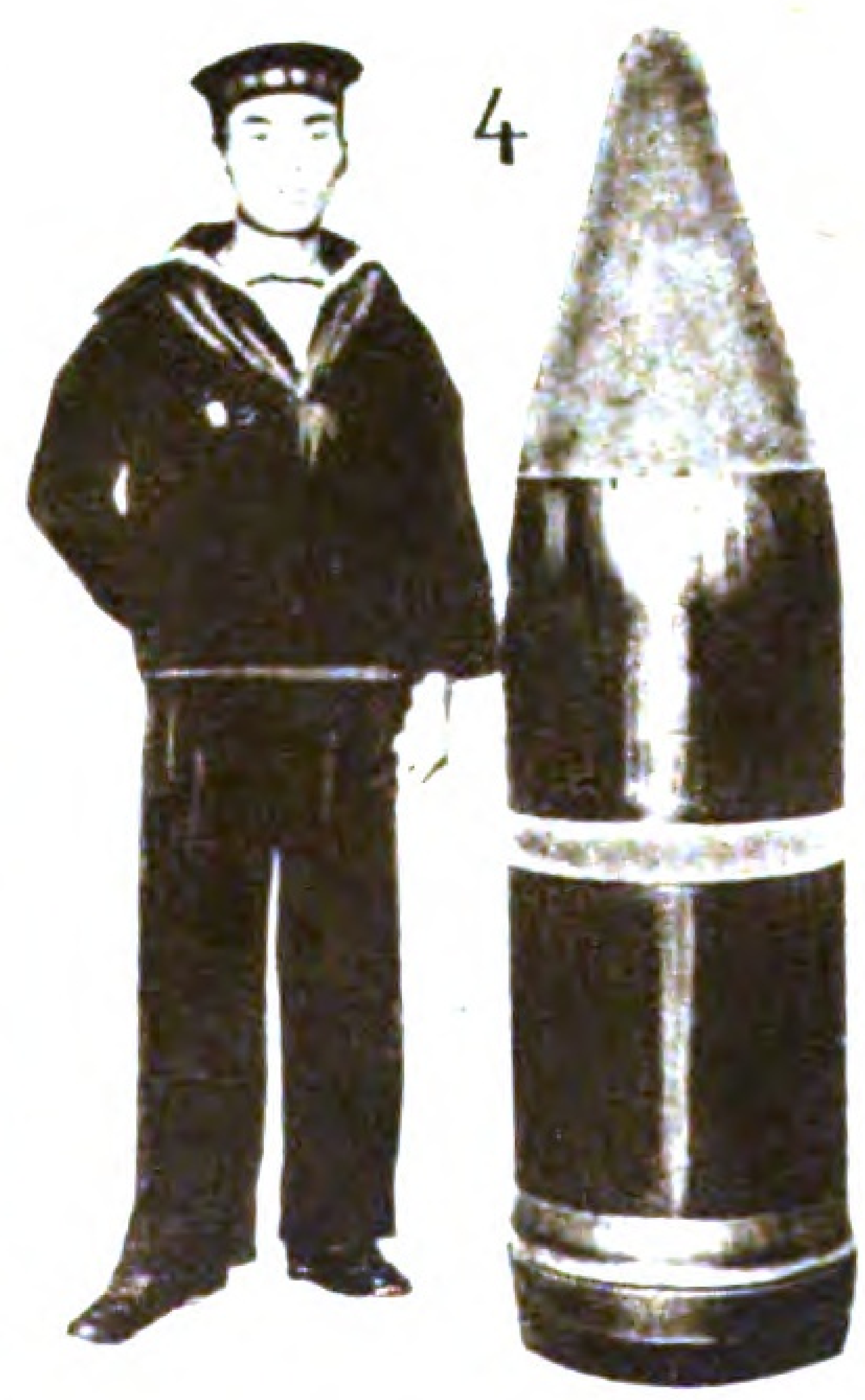
世界各國の兵器は愈々精巧を極め、戰爭は科學と科學の戰ひとなつた。1は魚形水雷發射管。2は發射された水雷驀進の光景、音もたてずサッと海中に飛込み、自らプロペラを回轉、高速度で驀進し、一擊以て敵艦を屠るその偉力！　命ぜられた方向と深度を保つて進むその巧緻！　これこそ正に海の怪魔である。3は行動敏速隼のやうな自働自轉車。4は直徑四十糎の巨彈。5は砲身の長さ十間もある巨砲から巨彈發射の刹那で、重量一噸の巨彈は富士山より數千尺も高い處を飛超えて七里も先へ届く。それが僅か一

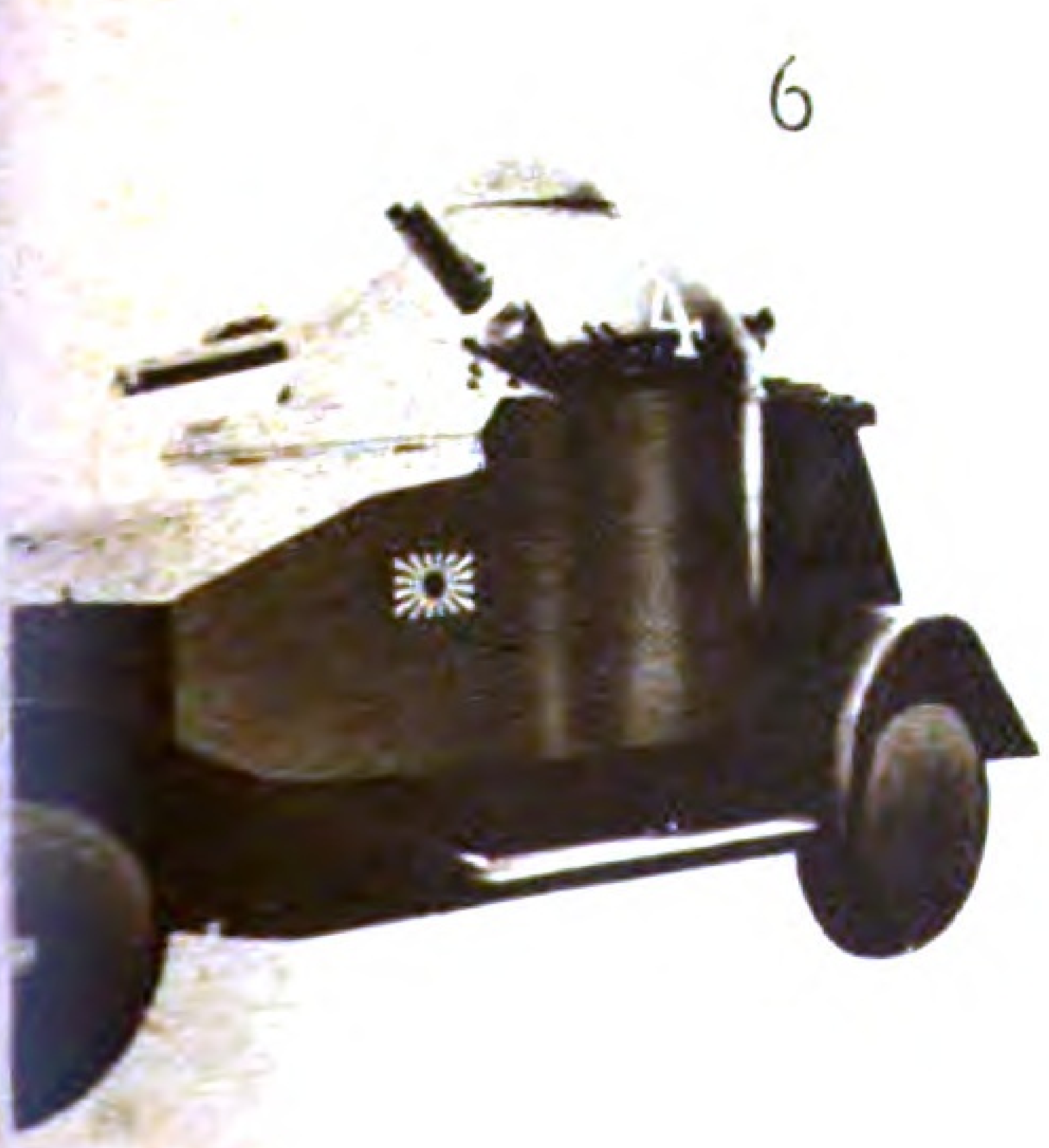


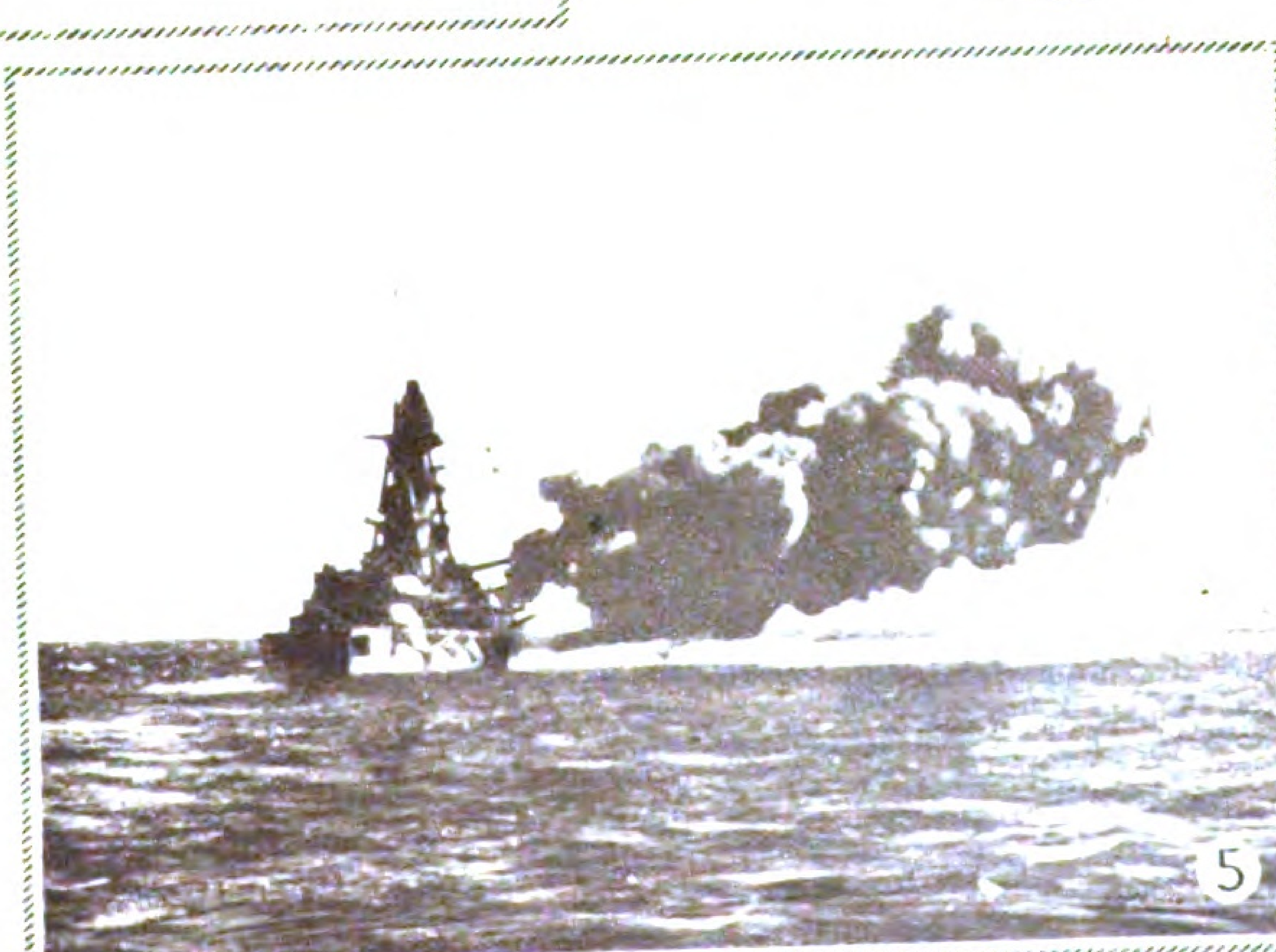


1 魚形水雷發射管
2 魚形水雷驀進（伏見宮博義王殿下御撮影）
3 陸戰隊用自動自轉車
4 巨彈
5 巨彈發射の光景
6 陸戰隊用タンク
（以上海軍）



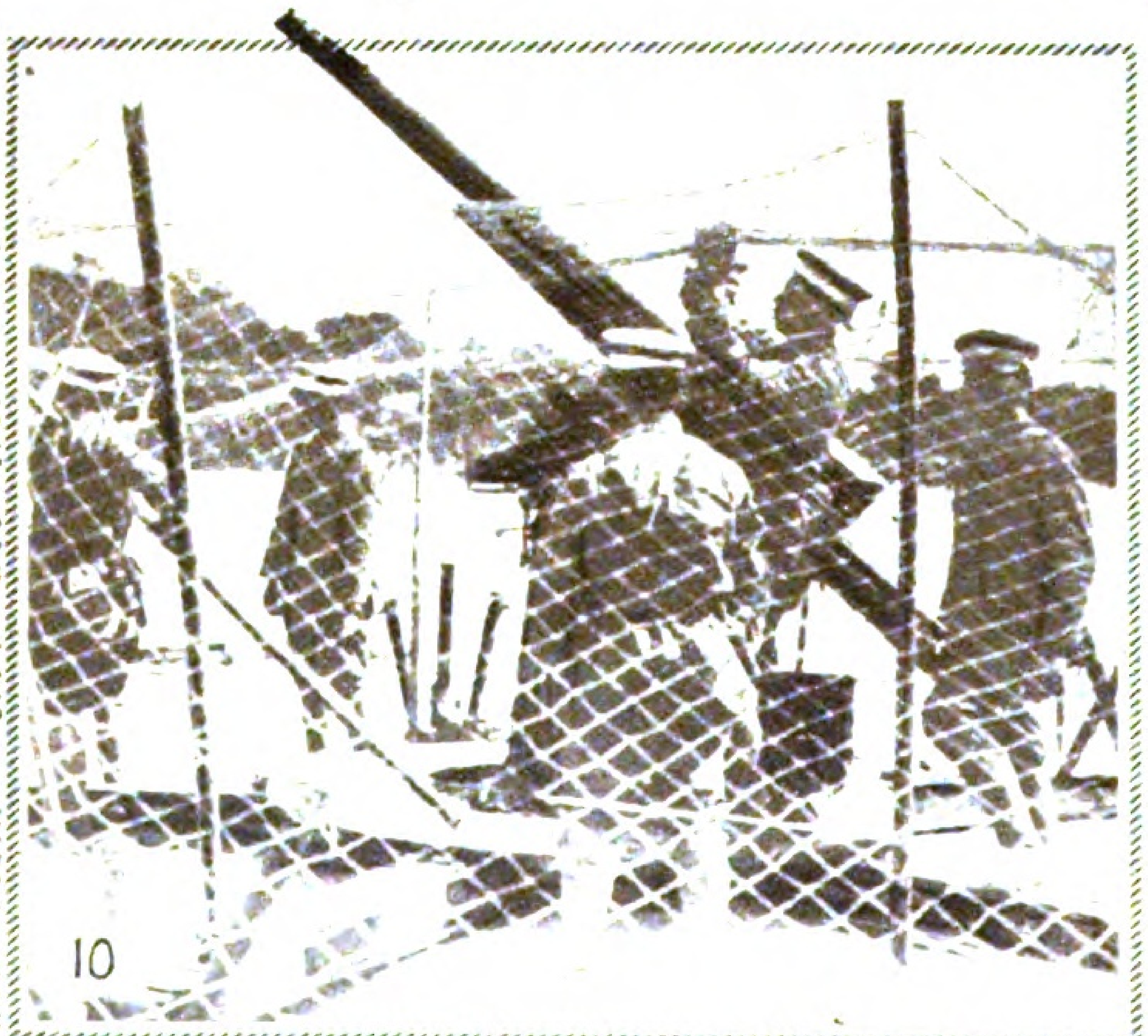




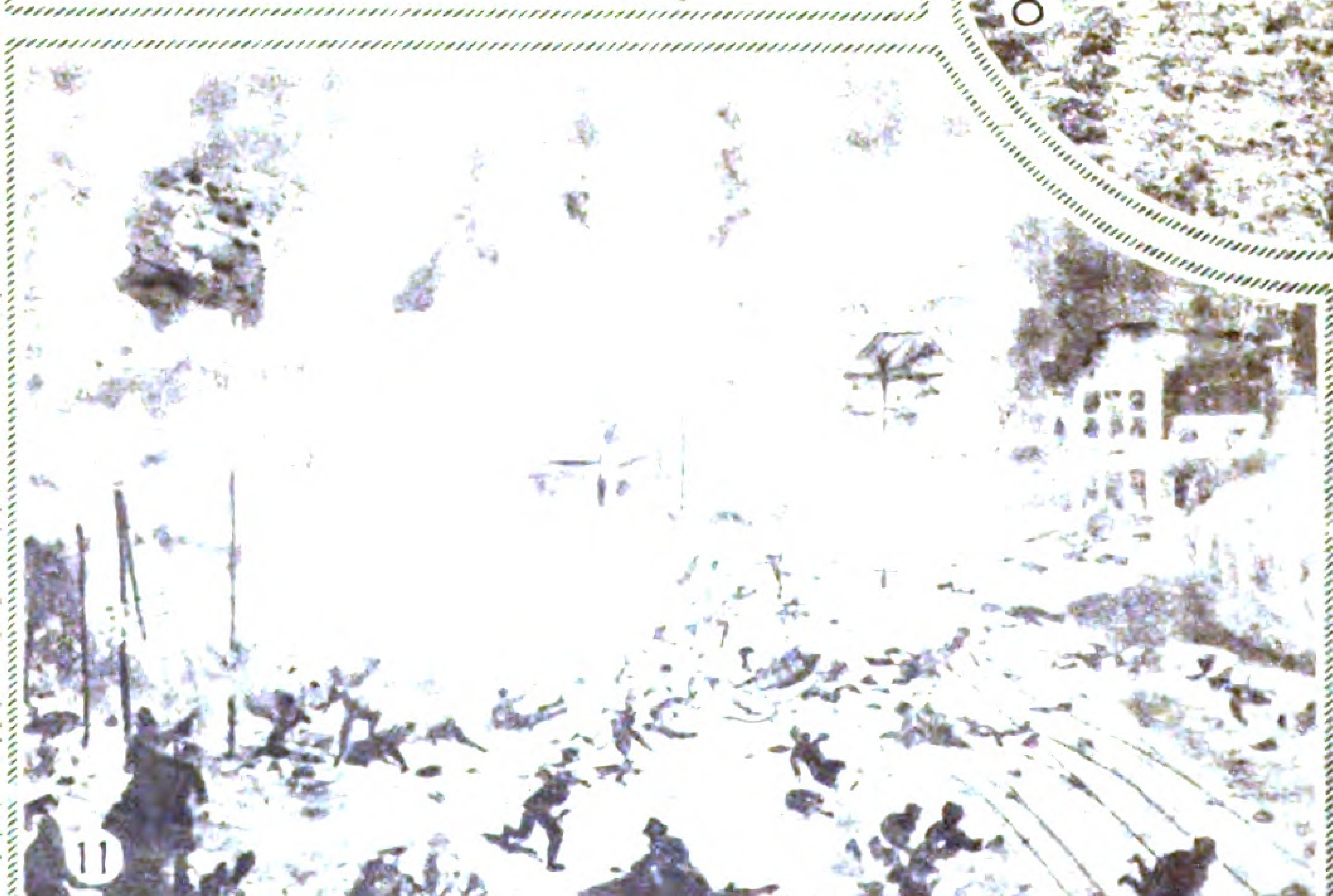














7 蜂巣型聴音器
8 タンクの活躍
9 巨大なる爆弾
10 高射砲と偽装
11 恐るべき毒瓦斯戦
（以上陸軍）

本文三一二頁『驚嘆すべき新兵器』御参照下さい。

分の間とは驚くの外はない。6は海陸両軍を通じ最新式の戦車。7は飛行機の来襲を逸早く偵察する聴音器で喇叭型のものもある。音響によつて敵機の位置が精確に測定される。8は戦車隊の猛襲。9は重量四千瓩の爆弾、これを空中から落されたら丸ビルのやうな巨大な建築物も忽ち粉砕されて了ふ。10は飛行機を射落す高射砲で、聴音器の測定に應じ標準を決めて發砲する。金網は姿を隠す偽装である。11は恐ろしき毒瓦斯戦の光景。敵飛行機の襲来を受けた市街は忽ちにして修羅の巷と化して了ふ。

(3)恰度米國のコロラドの峡谷を思はせる様な此の雄大な絶景は海抜四千尺花蓮港研海支廳下太魯閣峡の一部。臺灣八景の一として有名の地である。





(2)生蕃の五美人である。スッカリ内地の着物を着て内地語も上手。誰が見ても立派な内地人だ。

(4)蕃人の親子三人が、蕃人特有の正装をした處。最も進化した蕃人の間には此の頃靑年會だの夜學會だのが出來て居る。

(5)交通不便の蕃地に在つて唯一の交通機關は圖の様な變つたもの。これ



(1)まるでお相撲の櫓の様だ。これは蕃社が自衛のために作つた見張所である。日本第二の高峰次高山の麓にある。蕃地平穩の今日は滅多に用ゐられない。



(6)生蕃婦が一種の哀調を帯びた蕃歌を唄ひ乍ら粟搗をしてゐる處。



で人間でも荷物でも運んで行くのも面白い。

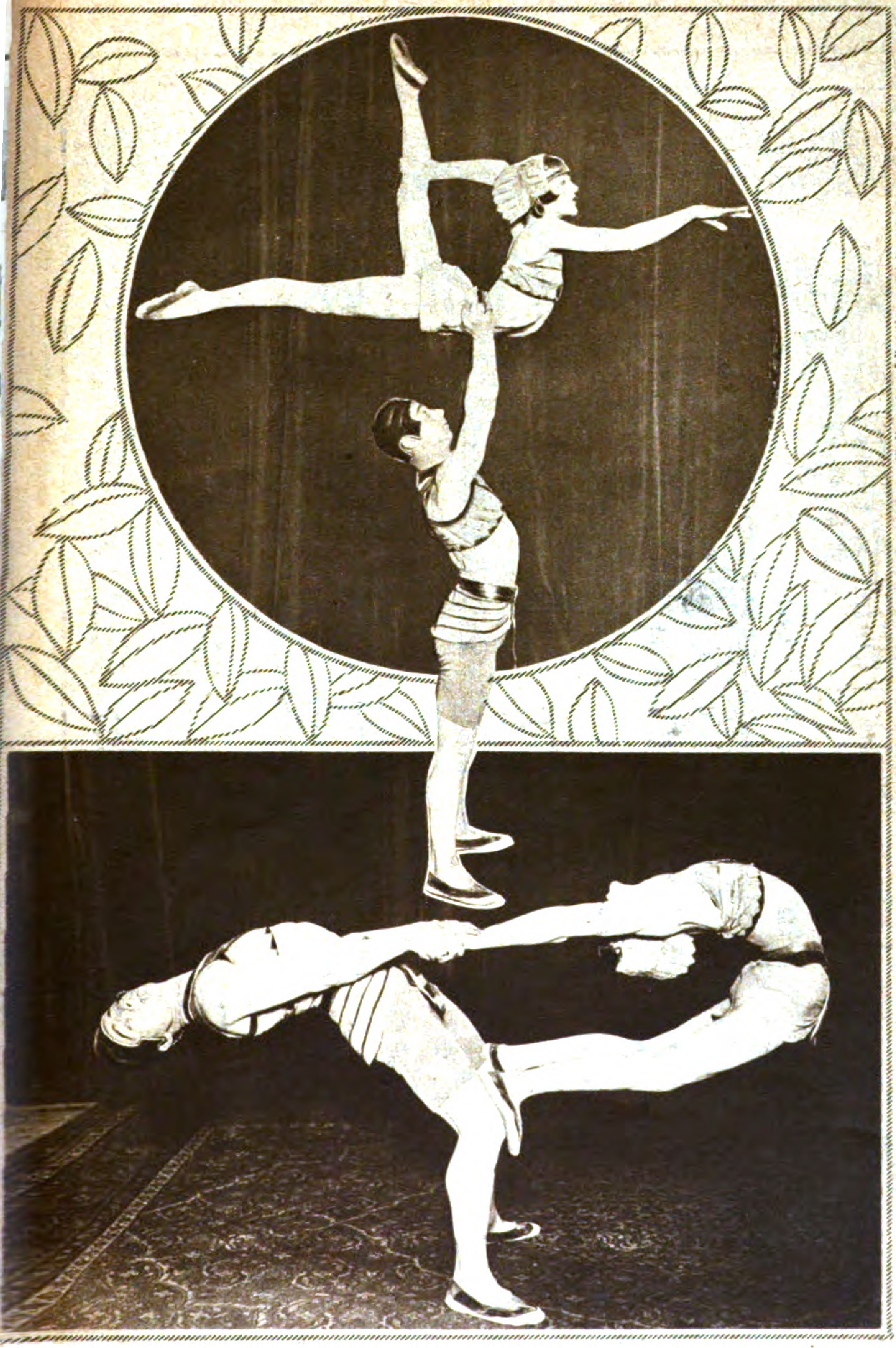
(7)二人の生蕃人が一つの器から仲良く酒を呑んでゐるのも一寸珍らしい奇習である。

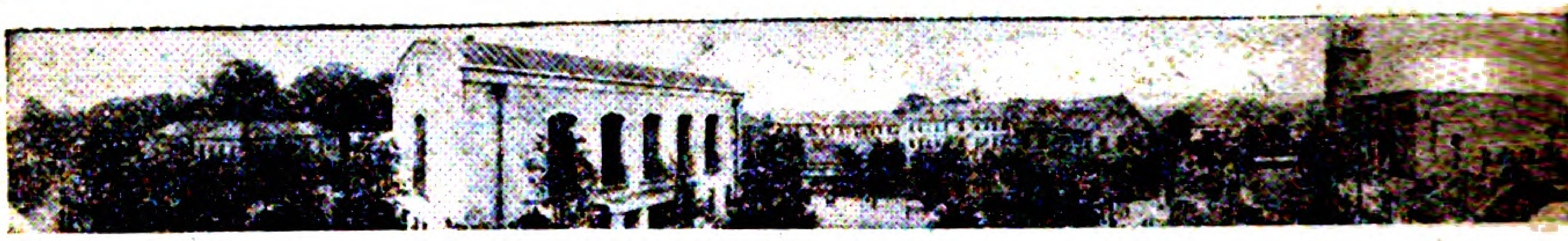




輕業の妙技

最近ドイツ、フランス、アメリカ等に輕業師の斬新な力技輕業が流行し、體操舞踊等にも盛んにその技巧が取り入れられてゐます。寫眞はベルリンの輕業師ベルント君が相手の女優と共に驚くべき得意の妙技を示しつゝある所。此の自由自在の姿態は迚も人間業とは思ひません。





（早稻田大學校舍の一部）

勉學の好時節－新學年開始

中學校・商業學校・女學校へ入學する代りに早稻田大學の

中學講義

獨學で中學全科を完全に學び立身出世の端緒を與へる講義錄

毎月一回發行
學費月一圓廾錢
一ケ年半修了

商業講義

商業上の最新智識を最も平易に働きながら覺えられる講義錄

毎月一回發行
學費月一圓廾錢
一ケ年修了

女學講義

女として知らねばならぬ常識と技藝を解り易くかいた講義錄

毎月一回發行
學費月一圓廾錢
一ケ年修了

各講義錄共
內容見本進呈

入學の絶好機

十月一日
第一號發行

特典

▼大學との連絡
▼奬學金
▼講習會聽講
▼校外生大會
▼巡會講演會
▼大學圖書館の解放
▼質問の解答
▼卒業後の指導
▼卒業證授與
▼賞品及賞狀

東京牛込 **早稻田大學出版部** 振替東京一一二
電話牛込三四五・三四六

政治經濟・法律・文學・電氣工學
以上各講義共新學年開始見本進呈

大好評忽再版!!

天下大熱狂！不朽の長篇小說！

□菊池幽芳先生著□

妖美

妖艶の化身の樣な美人の奇怪な秘密をめぐつて起る深刻な人生大悲劇

如何なる男性も惱殺せずに置かぬ樣な妖艶な姿態を持ち乍ら、生れながらに背負はされた奇怪な秘密の爲に、數奇變轉を極めた一生を送る謎の女性千鶴子の運命悲劇である、彼女が自分の秘密を守る爲めに、多くの女性を敵とし、男性に對してはあらゆる媚態と、秘戯を弄して捕虜にすべく努力するその徑路は寧ろ悲壯である。――熱烈なる戀の情景あり、一讀淚を催す人情美の場面あり。ハラ〳〵する樣な探偵的興味あり。文壇の元老菊池先生が、今迄のどの作よりも傑作也と自信する作、切に一讀を奬む。

御申込次第圖書目錄進呈

人物語

咄！意外な事實！

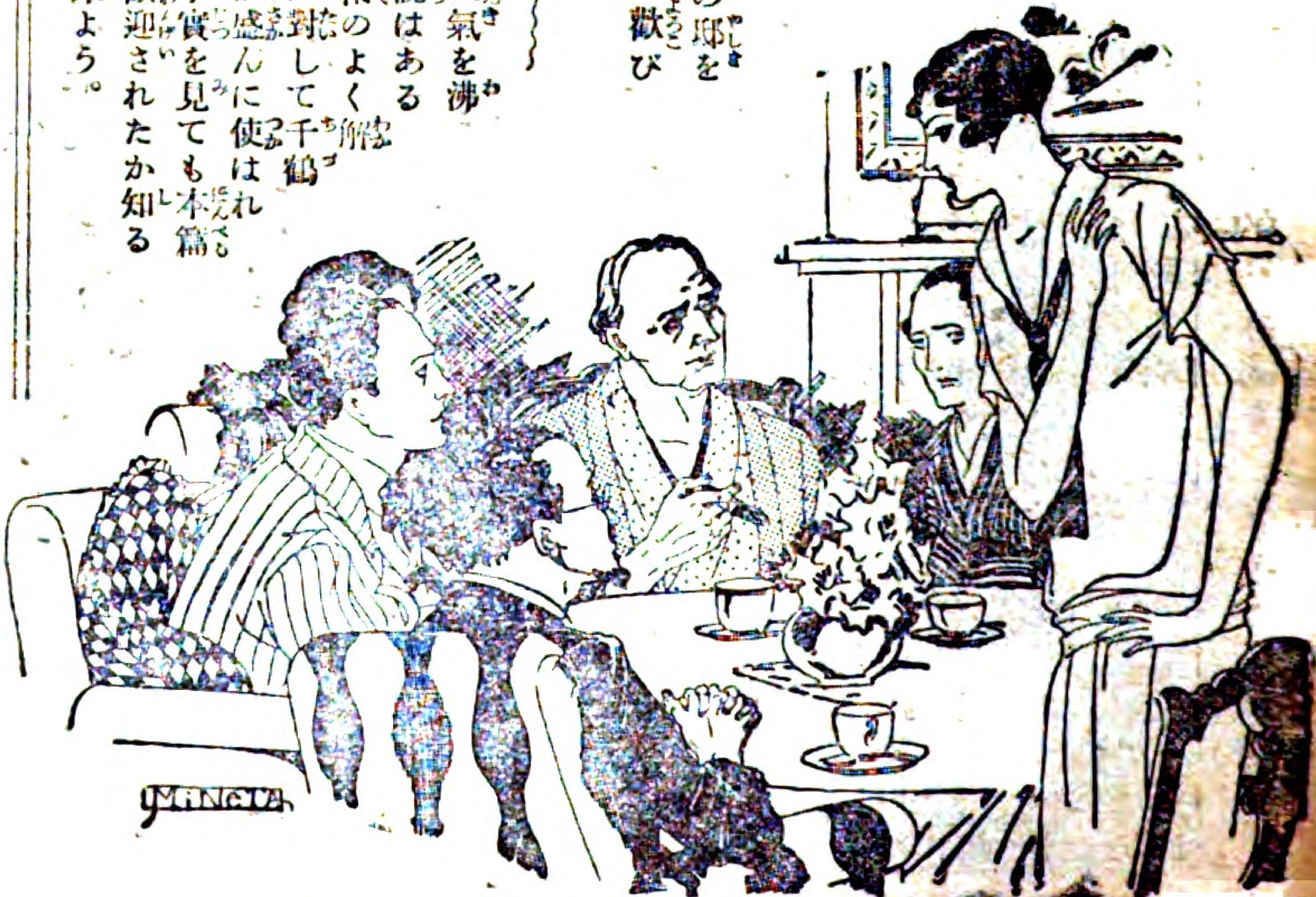
妖美人千鶴子が語る！

「信一さんと八重子さんが、御結婚なすった曉にはいふまでもなく此の邸でお暮しになるお考へでせうが、その場合私はどうなるでせう？千鶴子をどう遊ばす考へですか？——皆さんがどう仰言つても私は此のお邸を去らない。このお邸を私の自由にさして頂きます。いゝえ。私には伯父の遺產全部と此の邸を要求する權利があるのです、」……結納を取交して歡びに醉ふ滿座の中で、千鶴子が語る意外な事實！

驚嘆すべき人氣

本篇曾て講談倶樂部誌上に發表さるや、その人氣は非常なもので、讀書界は勿論、社交界文壇擧げて熱狂感嘆し、本篇に對する讚嘆感謝の投書は日々山をなし、雜誌界空前の盛觀を呈した。恐らく大正昭和に於て

これ程の人氣を沸かした小說はあるまい。性格のよく解らぬ婦人に對して千鶴子の言葉が盛んに使はれたといふ事實を見ても本篇が如何に歡迎されたか知ることが出來よう。



□再　版

▲四六判羽二重表紙函入
▲背金文字入極美本
▲定價二圓三十錢（送料十四錢）

東京本鄕駒込坂下町
大日本雄辯會講談社
—（振替東京三九三〇）—

偉人出世のスタート

蹴られたニユートン

鈴木彥次郎

ニユートンは生れつき器用だつたので、少年時代は細工物に熱中して、肝心の學問はとかく不勉强勝ちであつた。

或日も、小さな水車をつくり、友達に見せ鼻高々に誇つてゐると、それを見た級中首席の少年、『ふん、なか〱よく出來てゐるね。だが、唯器用にたよつて造つたつて學理に合つてなきや自慢にならんぜ、君にその說明ができるかね』『――』さうなると、ニユートンは平常の不勉强が祟つて巧く說明がつかぬ、少年は鼻でせせら笑つた。『おい、說明出來なきや唯の大工に變りないぢやないか。つまらん自慢はするな！』と云ふと、常に彼の器用自慢を小憎らしく思つて居たその少年は、いやといふ程、彼の腰を蹴飛ばした。と共に、他の友達等も一齊に『大工、大工』とはやし立てるのであつた。この侮蔑にニユートンは思はず口惜泣きに泣きそこに打俯してしまつた。その翌日からのニユートンは、眞に生れ變つたやうな勉强家となつた。そして間もなくその少年を追越し級中の首席を占めるやうになつた。『あの時、彼に蹴られなかつたら、僕はただの大工で終つたであらう！』世界の大學者になつた老ニユートンは、よくさういつて、腰のあたりを撫まはして笑つた。

――寺內萬治郎畫



蕃山と近江の馬子

木山國彦

『何しろ二百兩の大金を馬の脊に置き忘れたのだもの、愈よないとなれば俺の首は飛ぶ』近江路のある宿屋の前、もう夜更といふに、飛脚はさう云ひながら泣きわめいてゐる。取りまく村人も慰めやうもなく思案に暮れてる。

所へ突然驅け込んで來た賤しげな男。飛脚の顏を見ると、大喜びの聲をあげ、

『おゝ先刻のお客様、忘れた財布は俺が持つて來ただ。家へ歸つて馬を休めようとしたら、この財布があるだ。俺アびつくりして宙を飛んで持つて來たよ』と手にした財布を渡した。

飛脚はまるで生返つたやうな喜びで、早速禮金を馬子へやらうとした。所が馬子は不審顏『冗談ぢやねい、忘れた金をかへしたとて禮を貰つてなるものか。俺ア村の中江藤樹先生のいはつしやる事をしたまでのことだよ』と云ひ後もふりむかずスタスタ歸つていつた。

それを人陰で見てゐた青年の熊澤蕃山。

『ああ學徳の偉大さは始めてわかつた。藤樹先生の徳は馬子に迄及んでゐる。それにひきかへ才氣のみに賴つて來た自分が情けない』

ハタと膝を打つて悟り、心から發奮してすぐさま藤樹先生の敎を受け、徳を積み學をさめ、遂に後世までも傳はる大學者大政治家になつた。

——尾竹國觀畫





機智の閃めき

小泉長三

徳川九代の將軍家重は、ある年の正月諸侯を引見し新年拜賀の禮を受けるにさきだち、式場の用意を檢分しようと近習小姓を從へて書院へ行つて見た。

ちやうど坊主が青銅の大火鉢へ火を盛らうとしてゐたとき、俄かに現はれた將軍の姿に一人の坊主は狼狽し、思はず臺十能から大きな烈火の一塊りを疊の上へ落した。『あ』と言つたが手の出しようがない。見る〳〵火は疊について煙りを吹きはじめた。

その時、將軍の後にゐた十一二歲の兒小姓の一人が、つと走り出て疊の火をわが振袖で掴み取り、緣側から庭へ投げ捨て、袖へ移つた火は手水鉢の水を注いで消した。兒小姓の機轉に皆ほつと息を吐いたが、將軍はつく〴〵兒小姓をながめ、

『龍助、立つて手を擧げろ』『はい』『向ふへ向け』『はい』『不思議ぢやなう。おまへは火を袖で掴み、袖へ火がついたのを水で消したであらう』『さやうでございます』『それが、おまへの袖に焦跡もなく、また水に濡れたところもないではないか』

『いゝえ、ございます。御覽下さりませ』龍助は下着の袖を拔き出して見せた。そこにはくろ〳〵と焦跡が水に濡れてゐた。上着を損じては今日の御用を缺かなければならない。それを咄嗟の間に分別して下着の袖を以て火を掴んだ用意に、將軍はすつかり感心してしまつた。將軍に俊敏を認められたこの龍助少年こそ、小身の小姓から身を起して大名となり、老中首席を占めて、權威飛ぶ鳥も落すといはれた田沼主殿頭意次である。

——石井朋昌畫

杵の空音

井箆節三

日本のヴァイオリン王と呼ばれ、世界屈指のヴァイオリン製作者として今もなほ七十の老齢を以てヴァイオリン製作に心魂を打ち込んでゐる、名古屋の鈴木政吉翁は、その父祖が尾張藩のお手先同心七石二人扶持の侍で、三味線作りを内職にしてゐたので、御維新後も、それで渡世してゐたが、『文明開化』の風潮に連れて、三味線などの製作では糊口が出來なくなり、明治二十年、二十九歳の時には、大晦日の夜になつても、餅を搗く金が無かつた。しかしながら、兩親は、わが子の三味線師に心配をさせぬためであらう、『せめては杵の音だけでもさせよう。』といふので、臺所口へ臼と杵とを持ち出した。店の間には、若い三味線師の政吉翁が、一挺のヴァイオリンを、ある人から一週間、しかも夜だけと限つて貸して貰ひ、六日前から徹夜で、その構造を研究してゐるのであつたが、今夜が最後の一夜とて、その寸法を計り直したり、構造を眺め廻したりしてもう夢中である。そこへ臺所から兩親がカタコトと打ち鳴らす空しい杵の音が響いて來た。カタコトと鳴る杵の音は、親の深い情と共に、暗然として瞑目した此の哀れな三味線師の心の琴に、しみ〲と響き渡つた。それはまア何といふ悲しい音樂であつたらう。『濟みません、濟みません。あゝ、どうぞして此のヴァイオリンといふ物を作り出して、親達を樂にして上げたい！』此の一心こそは、此の哀れな三味線師を、やがてわが日本に於けるヴァイオリン製作の鼻祖となし、遂にはヴァイオリン王としたのであつた。



——山川秀峰畫

柿の實のなやみ

佐野天聲

高橋作左衛門は大阪定番の同心だつた。後には徳川家直參の旗本格にまで出世する程の傑物だが、其頃はまだ極微祿の小身者で、家計も甚だ裕かでなかつた。彼れの屋敷尻には年古る大きな柿樹が二本ばかりあつた。非常に美味いうへに毎年切れなしに能く實つたから、いつぱし家計のたそくになつた。で、美しい眞紅な實が枝もたわわに熟する頃になると、作左衛門は夜も晝もおち／＼眠らないで、無闇に柿盗人を警戒した。或日彼れはさりがたい用事の爲一夜家をあけて翌日歸宅した事がある。何よりも一番心懸りなのは柿樹だから、裏口を覗いて見ると、これはしたり見るも無慘に伐倒されて居る。作左衛門怒るまいことかさながら火の樣になつて妻を叱つた。すると、妻のお雪は良人の前に手をついて『所夫の御勉強を妨げる憎い樹で御さいますから伐倒してしまひました。御勉強が大事か柿實が大事か篤と御賢察下さいまし。』と言つた。怒つては見たものの作左衛門馬鹿でないから、早速妻の諫に從つて、其後は他を顧ずに專心天文學を研究した。寛政七年直參になつた時彼れの祿高は二百俵、異常な出世だと當時の人をして眼を瞠らしたのであつた。

――神保朋世畫





フォードと母の死

大瀧鞍馬

フォードは、まるで決勝線に近づいた競馬騎手のやうに、無我夢中で馬に鞭をくれてゐた。彼のあとには、これも一心に鞭をふるつてゐる一人の老人がつゞいた。『只今！先生も一緒ですよ。先生も……』ヒラリ馬から飛びおりたフォードは、かう叫ぶと、急いで扉を押し開いた。彼は、今、村から七哩離れたデトロイド市から醫師を迎へて來たのである。馬蹄の音を聞きつけて、父が出て來た。『どう、お母様は？』父の睫のぬれてゐるのを見て、彼の聲はおのづと顫へた。『おそかつたよ』『えッ！』フォードは狂氣のやうになつて、母の病室へ駈込んだ。そこには冷たくなつた母が、神の様に靜かに横はつてゐた。老醫師は聽診器を外しながら呟いた。『もう五分早かつたら、どうにか出來たものを、殘念なことをした』これを聞くと牀の上を轉ぶやうに悶え泣いたのはフォードであつた。『あゝ汽車が欲しい。馬の様に何所へでも駈けてゆける汽車が欲しい！』さう云つて、彼は足ずりしながら口惜しがつたが、この時フォードは十四歳の少年であつた。それから彼は機械いぢりに沒頭するやうになつたが、爾來幾春秋、フォードの自動車は、世界到るところを疾驅しつゝある。——嶺田弘畫

燒火箸と燒石

眞下醒容

福島正則はどんな所へ出ても、火鉢の灰を掻きまはす癖があつた。その朝も、例の如く、何氣なく火箸をつかんで驚いた。見ると眞赤に燒けてゐる。併し彼の前には、十二になる子供とはいへ、小姓の又市が畏まつて見てゐる。負嫌ひの正則、顏をしかめながら、眞赤な奴をつかんで掻きまはしてゐたが、やがて怒氣を含んだ聲が『これ、又市！』と呼びかけた。『はツ』と應へて、にじり出た又市、恭しく首をさげた途端、頸筋から背へかけて、飛び上らんばかりの熱さを感じた。正則が襟元から燒石を轉がし込んだのである。だが、又市は燒きつくやうな熱さをぢツと耐へた。『又市、お前熱くはないか』さすが强情な正則もやさしい聲できいた。『はい、私とて生身の身體、燒石の熱くないわけはございませぬ。が、私の身體はもとより殿樣へ差上げましたるもの、その御主君のなされまする事なら、熱い苦しいは愚な事、我が君の見苦しいお癖さへ直していたゞけますれば、たとひ我が身は此場でズダ〳〵に斬られまするとも、何のお怨みには存じませぬ』又市屹となつて言ひはなつた。これを聞くと、正則は『ウーム』といつたきり、二の句もつげなかつた。が、これ以來、正則はこの惡癖をピタリと止めてしまつた。

祿二萬石、福島家の上席家老、吉村又左衞門が出世の緒は即ちこれ。

——齋藤五百枝畫



土方久元と蕪菜

廣岡茂巳

土方久元は、若い頃、奏泉寺といふ寺の一室を借りて勉強してゐたが、その赤貧は骨に徹するばかり、之を見かねた親戚知友達から味噌醬油その他の日用品を贈られて、やつと朝夕の煙を立ててゐるといふ有樣。或夜のこと、久元がさる知人を訪ねると、

『これを持つて歸つて、汁の實にでもするがいゝ』

と云つて、一荷の蕪菜を出してくれた。久元は大喜びで、早速手拭で頰冠りをして、威勢よく肩に擔いで出るには出たが、なか／＼重くて擔ぎきれない。そこをよろ／＼とよろめいた途端、石に躓いたから、ドタリと轉んだ。同時に蕪菜はコロコロ轉げ出して、四邊に散らかるといふ醜體。

膝頭をさすりながら起き上つた久元は、ぢつとこれを見てゐたが、突然叫んだ。

『何だ、このざまは。乞食か何ぞの樣に、他人のものを貰つて喜んだりしてるから、こんな目にも遭ふんだ。糞ッ、意氣地なしめ！　これからどんな事があつても、乞食の眞似なぞすると、決して承知しないぞ！』

我と我が心を叱りつけた久元は、その後一切他人の惠みを受けず、飢ゑと寒さの中で孜々として學にいそしんだが、遂に明治の功臣伯爵土方久元として、青史にその名を垂るゝに至つた。



——石井滴水畫

満天下の
人氣を負ふ

報知新聞の四大讀物

（新聞中の新聞）

菊池寛氏作
田中良氏畫

新女性鑑

文壇の大御所菊池寛氏の力作、新時代の女性を赤裸々に描いて、華麗、虹の如く、芳醇、美酒の如き、最高至上の藝術作品

矢田挿雲氏編
本田穆堂氏畫

太閤記

堂々五ケ年に亘る最大長編、英雄秀吉に對する新解釈、これを大立志傳と見るもよし、物語は漸く本能寺の變に入らんとす

（廣告効果日本一）

吉川英治氏作
山口将吉郎氏畫

江戸三國志

當代第一の人氣作者の傑作、巨盗と妖婦と貴公子と混血少女と、捲き起す愛慾の大狂瀾を見よ、全國日刊新聞中無類の大讀物

野村胡堂氏作
太田雅光氏畫

美男狩

錢屋五兵衛の秘めたる巨富は何處？妖婦、美人、怪剣士、何を爭ふ、現代大衆文藝界に新境地を開く壯大幽艶なる千古の大秘史

日本一面白

賣れる〳〵大評判!!

講談倶樂部 十月號

勇士美人快男兒の大活躍!

素敵に面白い幕末物語!

江戸地獄變

大佛次郎先生 會心の大傑作

花の大江戸を騷がす不敵の怪盜! 之をめぐる疑問の美女と名目明しの大活躍! 眞に息をもつかせぬ面白さ! 到る處大評判!

◎怪盜探偵 襲はれた龍伯……保篠龍緒

◎戰國異聞 死の札嫁御……大倉桃郎

◎白粉の謎 彼女の戀愛……貴司山治

◎殉國軍の學兵 前原一誠……長田秀雄



戀愛漫畫講座

何人も一讀哄笑微苦笑を禁じ得ぬ

(1)戀愛戰術……水島爾保布、田中比左良、細木原青起

(2)戀愛道德……岡本一平

◎理想小說 最後の舞踏……鶴見祐輔

◎長篇小說 富士に題す……佐藤紅綠

◎現代小說 毒草……三上於菟吉

◎大武勇傳 新譯水滸傳……笹川臨風

◎戀愛小說 怪人……中村武羅夫

◎諧謔小說 愚弟賢兄……佐々木邦

い大娯樂雜誌

▲戯曲 天海大僧正（松居松翁）

▲名作物語 湖上の美人（清見陸郎）

◎妖婦の罠 戀情無明佛……土師清二

◎天晴仇討 荒木又右衛門……坂東太郎

◎美女受難 銀の鞭……加藤武雄

◎武侠怪奇 獄門首土藏……行友李風

◎勇士活躍 日本鐵假面……白井喬二

侠客講談傑作ぞろひ

面白い〱飛び上る程面白い

何れも一流講談師の大熱演

▲男の中の男 清水次郎長

▲侠骨々々 祐天仙之助

▲天保侠客 笹川の繁藏

▲上州の大親分 大前田英五郎



見よ！愈々公開された!!

四大探偵事件の眞相

仕立屋銀次事件、ピス健事件、妖婦お龍事件等の一世を震撼した大探偵事件の顛末を夫々事件探査の責任者たる警視、警部諸氏が特に本誌に寄せられし貴重篇。眞に小説よりも面白い！

◇此外快讀物滿載！トテモ面白い講談倶樂部

定價壹圓（送料四錢）東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

識見を高め人物

◇永井柳太郎氏大演説集　定價壹圓五拾錢　送料金八錢

◇鶴見祐輔氏大講演集　定價貳圓貳拾錢　送料金十錢

◇尾崎行雄氏大演説集　定價貳圓　送料金十錢

◇賀川豐彦氏大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇濱口雄幸氏大演説集　定價貳圓　送料金十錢

◇谷本富氏大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇加藤咄堂氏大講演集　定價貳圓　送料十二錢

◇犬養木堂氏大演説集　定價貳圓　送料金十錢

◇高島米峰氏大演説集　定價貳圓　送料金十錢

■發行所　東京本郷區駒込坂下町　大日本雄辯

御申込次第圖書目録進呈

を練るに此の名著

◇新井石禪師大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇高田早苗博士大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇道重信教師大講演集　定價壹圓八拾錢　送料金十錢

◇下村宏博士大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇模範的式辭挨拶五分間演說集　定價壹圓八拾錢　送料金八錢

◇青年雄辯集　定價貳圓　送料金八錢

◇第二青年雄辯集　定價貳圓　送料金八錢

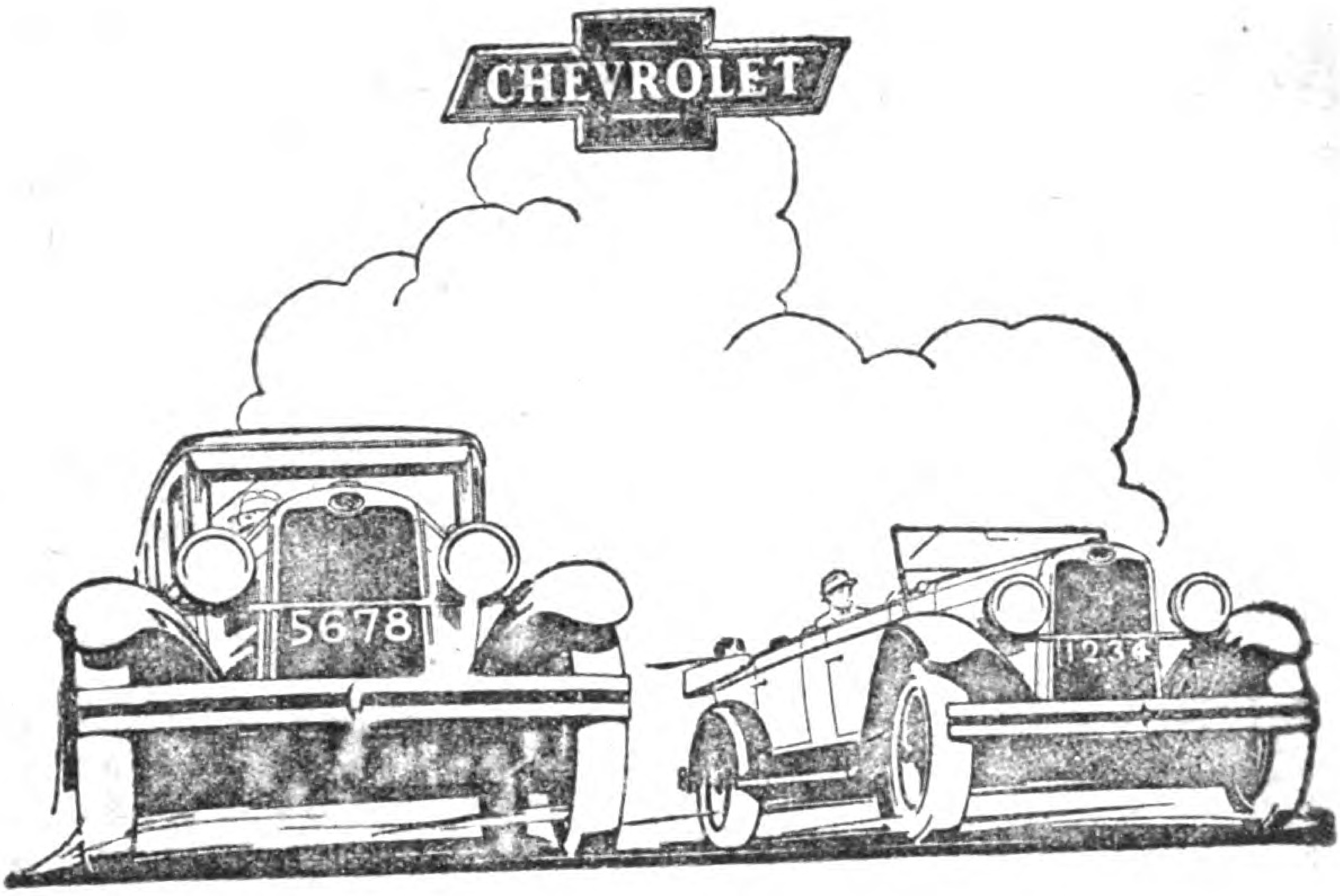
◇加藤咄堂先生著　雄辯の新研究　定價壹圓八拾錢　送料金八錢

◇泰西雄辯集　定價貳圓　送料金八錢

會講談社　振替東京三九三〇

（もし書店に賣切れの節は本社へ御註文下さい）

御申込次第圖書目錄進呈



何故？

新シボレー號は今や到る處に雄飛して居ります。

「何故に新シボレー號は全國津々浦々まで斯くも多數に普及したのでせう？

何故に日本の社會が斯くも素晴しい歡迎を此の新車に與へたのでせう？

理由は明瞭です――乘客がシボレー號の瀟洒な外觀美と愉快な乘心地とを要求してゐるからであります。

斯くして新シボレー號は賢明な購求者の爭ふて選ぶところとなり、同時にタクシー界の寵兒となつたのであります。

幌型　定價　金千九百拾五圓（大阪渡）

セダン型　定價　金貳千四百九拾五圓（大阪渡）

タクシー・セダン型　定價　金貳千五百七拾五圓（大阪渡）

（本車はゼネラル・モータース金融會社による月賦販賣の便あり）

（特約販賣店は全國到る處の重要都市にあり）

日本ゼネラル・モータース株式會社

シボレーはゼネラル・モータースの製品なり



（一）

日露の風雲愈急にして、兩國の衝突は有無の問題ではなく、時の遅速となつた。折も折時も時、青泥窪市街の大厦高樓空を凌ぐペトローフ丁字街の夜陰に、消魂しく起る拳銃の豆を炒る爆聲、物凄い響きが、摩天の高閣に谺して、逆しまに天上から下界へと射撃して來る。大地は凍盡し、右往左往の靴音は、亂拍子に忙て惑ふらしい。拳銃は巡邏兵が何者かを追つて威嚇したので、其目的物は暗黒の中へ、影の如く逸し去つたので有る。

と、東亞旅館の竪樋を猿の如くに傳はつて、スル〳〵と三階の窓の邊まで登つた若い支那人が有る。巡邏兵は曲者が空へ逃げたと知らず、足許の大地をドヤ〳〵と搜索しつゝ有るのが、遙かの脚下に見えたが、彼はいつまでも括り猿のやうに、金の樋に抱き附いて空中に止まるべくも無い、全身は見る〳〵凍つて、血が凝結するばかりになつた。

危機一髪、乘るか反るかで有る。怪漢はチラツと灯の洩れる四階の窓の小縁に縋り附いた。と同時に、重いカーテンが僅かに動いて、半面を硝子戸の中にに現はしたのは、色白く拔けるやうな鮮やかな日本美人、然も半裸體の上半身には、今を限りの春を咲き誇る櫻の刺青。



（二）

『僕は誤つて人に逐はれるもの、御迷惑はかけん。どうぞ暫時入れて下さい。』

案外の日本語、然も歯切のいゝ、鮮やかな東京辯が、此怪しい支那人の口から洩れようとは思はなかつた。

　此窓から入れて貰はなければ、彼は助からぬので有る。脚下數丈の下、岩に飽したやうなコンクリー疊は、嘲笑つて彼を待つて居るのだ。

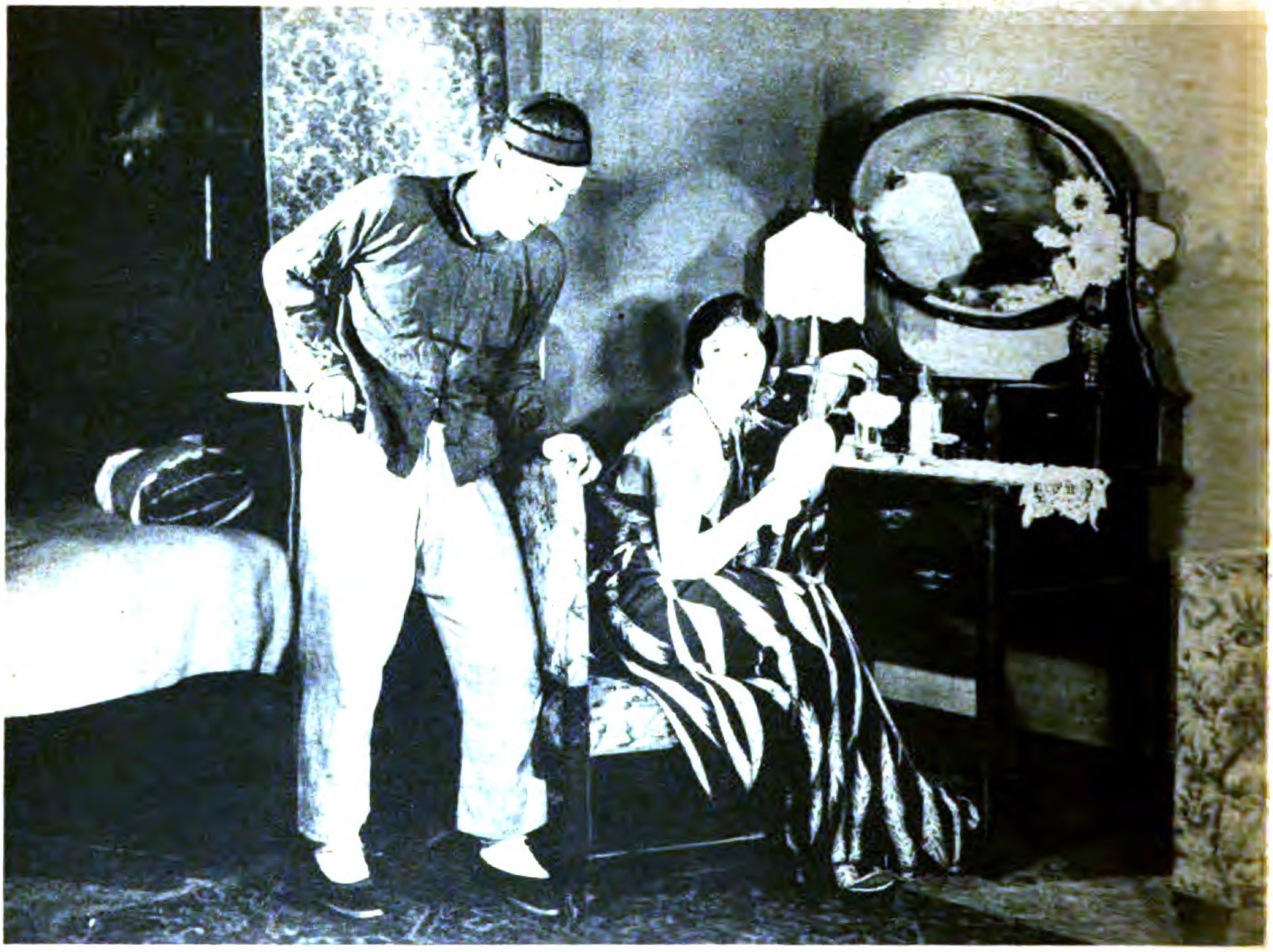
　室内の燈火は忽ちパッと消えた、と共に、窓は音もなくスツト開かれたので有る。灯さへ無ければ、人一人が窓から忍び込んだ現場は、何者にも見られない。

　窓が明くと同時に、白粉臭くいきれた室内の溫暖な空氣は、凍えた怪漢を軟らかく吸ひ込んで了つた。

『今の拳銃の音は、貴君を追廻したんですね。』と、女は其黒目勝の涼しい目で、男の腸の裏まで見透さうとする。

『左樣です、僕は貴君と同じ日本人です。人違ひで逐はれたのです。決して盗賊では有りません。』と、必死に辯疏する。

『左樣ねえ。盗賊よりはもつと恐ろしい方でせう。』と、女はニヤリと朱の唇に凄い微笑みを見せた。



（三）

外は鐵も石も凍るけれど、室内は春より暖かで、窓には一杯の露が綴られ、優しい鬱金香の花が、春の媚めきに醉つて居る。

美人は今蘭湯に蒸された湯上を、心之くばかり化粧して居たので有る。女だてらに雪の肌に刺青した櫻の滿開、敷島の大和心を咲き匂ふ優しい誇か。薔薇の蕾を置き添へた双つの隆起は、暖かい玉と磨かれて、玄妙な線を辷つて行く。

『オホホ、恥かしい處を見られました事、ですけれど、もう少しですから、お粧ひの濟む迄待つて頂戴。』

人を人とも思はなければ、拳銃の音を、烟管叩くとも思つて居ない。男は美人の度胸に呆れ驚くと共に、今言はれた凄い一言に、魂を攫み挫がれたので有る。

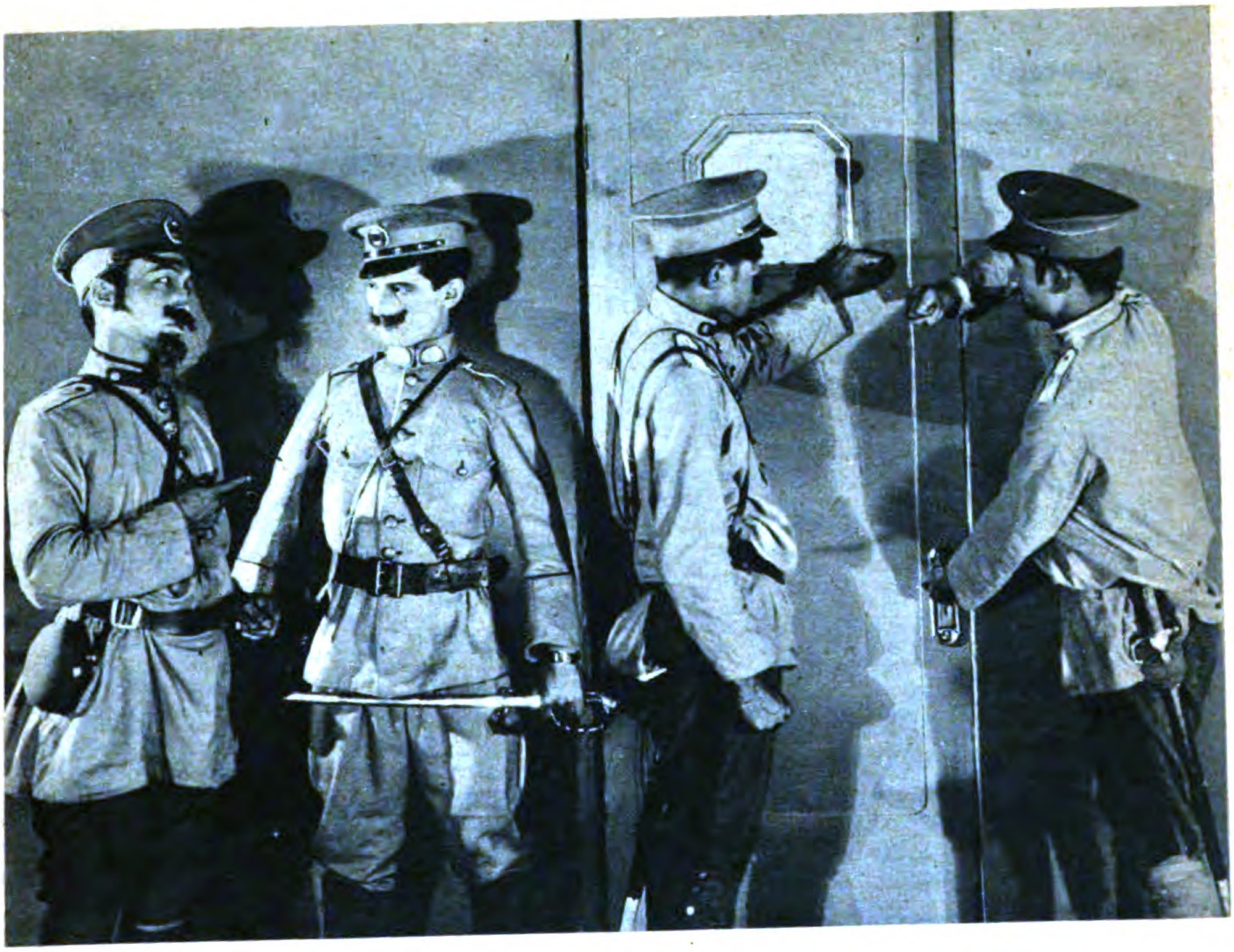
『いゝや、決して怪しい者では有りません。』と、又念を押した。

『嘘よ。』と、鏡に向つた儘、振向もせずに應答した。

『貴君、日探で入つしやるでせう。』

『叱ツ。』と忙てると共に、男は懐中の短刀を握つた。其氣色が歴々と鏡に映るので有る。

『お待ちなさい。……妾だつて日本の女ぢや有りませんか。』と、澄し切つた合せ鏡。



（四）

『アツ、一寸此寢床の下へ隱れて下さい。露助が遣つて來たやうです。』

果して階下を搜索するらしい物音が、忽ちドヤ〳〵と階段を押上つて、早くも室外へ迫つた。

『開けろ〳〵。』

荒々しい叩音が聞えるが、女は澄して鏡を合せて、毛筋一本も大切に磨き上げる。女の美は、命よりも大切なのである。

『開けんか〳〵、開けんければ打毀すぞ。』

靴で蹴立てる亂暴狼藉、外では火のやうに苛立つて居るのだ。

『蒼蠅ねへ、何の用。』と、女は漸く立つて扉を明けた。外から押すのを、不意に内から明けられて、眞先に居た軍曹のヤボスキーは、彈機を食つて、トツ〳〵とよろけ込むと、壁へ額を嫌といふ程打附けた。『やツ、此奴。』

眞赤に激怒する眞向へ、無慙に浴びせかける痛快の露語。

『氣をお附けよ。壁が凹まあね。』

軍曹は驚いて仰向くと共に、俄かに氣を附けの姿勢を取つた。

『ヤツ、大和櫻の貴女。』

彼女は青泥窪守備隊司令官ヤコブ大佐の愛姫だつたのだ。



（五）

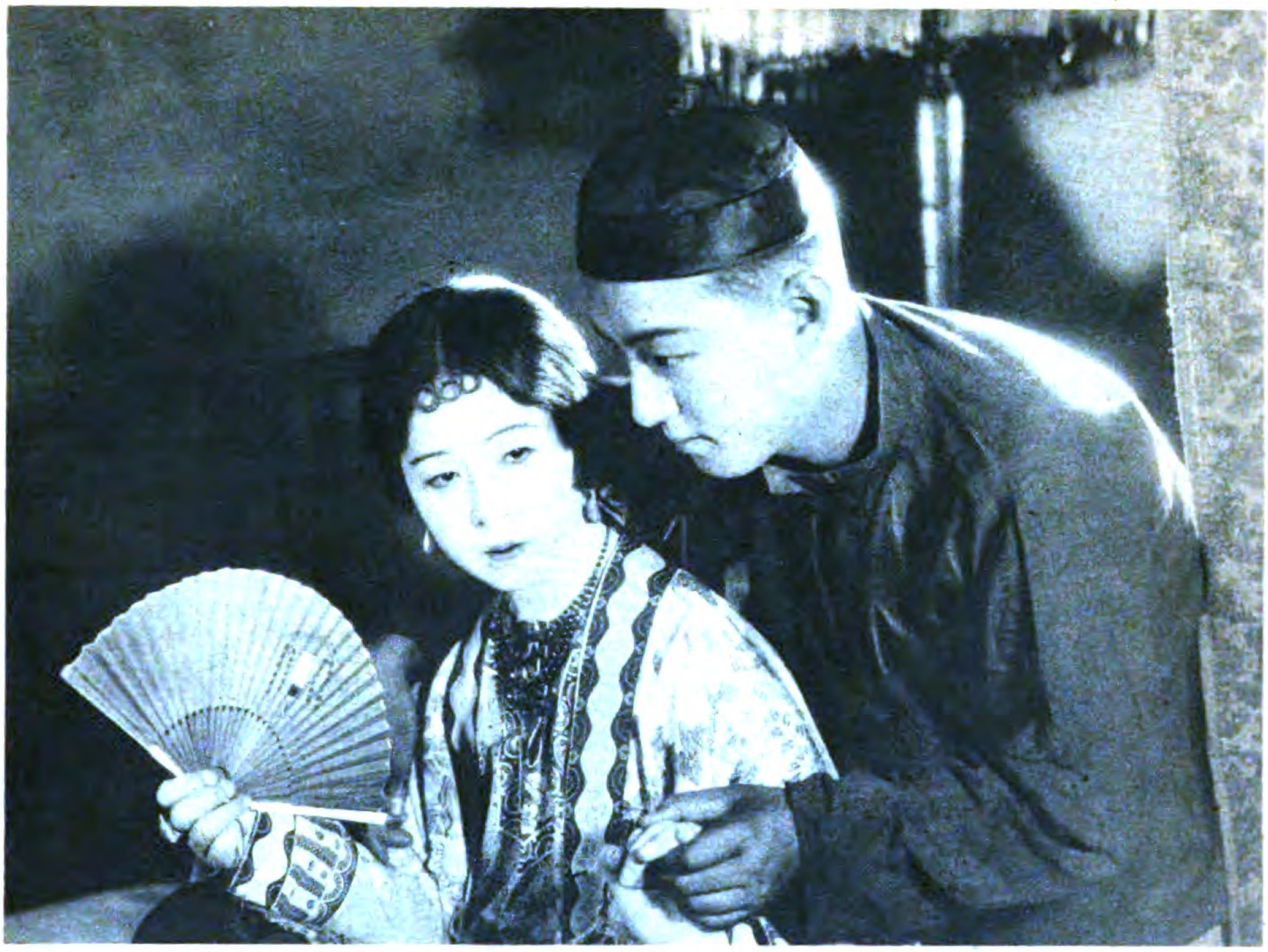
『此室は大和櫻の姐さんの城廓だよ。汝達は何の用が有つて、土足で蹈込んで來たのだい。汝達は妾を何だと思つて居るんだ。西比利亞や滿洲で、拳銃の雨や、洋劍の電光を浴びて來た貴女さ。汝達のやうな薄鈍が、一聯隊で繰出して來たつて、ビクともする姐さんぢやない。第一此櫻の花が承知しないよ。』

グルリと背を向けて、背中一杯爛漫たる櫻の花を見せながら、斜に構へて、卷烟草の烟を薄紫の環に吹く。

勢込んだ軍曹始め六人の兵士は、タジ〳〵となつて、豆鐵砲を食つた鳩のやうに、開いた口も塞がらぬ迄に呆氣に取られる。

『實は怪しい支那人が、此旅館へ入つたやうに認めましたから、夫故捜索に來ました。』

『何を言つてるんだい。支那人の小盜人が飛込んだ位で、割れるやうに扉を叩かれて堪るもんかね。此部屋が怪しいと思つたら、ドシ〳〵入つて手籠に調べて御覽な。汝達の見る通り、只た二間しか無い室だよ。捜して見て若し居なかつたら、汝達はどうするへ。憚り乍ら妾は司令官ヤコブ大佐の、より善き半分で入つしやるんだよ。汝達が營倉へ飛込むのは承知だらうね。』



（六）

『能く解りました。貴君が立派な御勤めが有りながら、御國の爲に、恁して苦心しておいでなさる。妾は嬉しいやうな、悲しいやうな、涙が出て仕方が有りません。ですが其青泥窪の防備圖といふものは、幾ら貴君が營舍へ入つて盗み出さうとしたつて、兎ても奪れませんよ。』

　男は秋山久雄といふ海軍將校、君國の爲に軍服を脱ぎ、青泥窪の荷揚苦力となつて敵の軍機の秘密を盗み出さうと苦心して居るのだ。目睫の間に迫る彼我の大衝突、其瞬間に、開戰第一の偉功を奏するのは一に秘密防備圖奪取の有無に繫はるのだ。

『其大切な繪圖といふのは、ヤコブ司令官が肌身放さず持つて居るに違ひ有りませんもの。』

　秋山の颯爽たる眉宇には當惑の難色が現はれた。

『司令官が持つて居るのですか。』

『だから妾が取つて上げますよ。』と意外の福音。

『然し貴方は司令官の。』

『串戲言つちや不可ません。幾ら妾が露助の持物だつて、妾は日本人ですよ。肉は賣つても心は賣らないのが妾の自慢、醜業婦の魂だつて光つて居ますよ。』



（七）

『ヤボスキー軍曹、曲者は捕縛したか。』

司令部の自室で、ウオツカを呷つて居たヤコブ大佐は、生きた仁王其儘の顔をグルリと向け直した。

『ハイ東亜旅館まで追込むだのですが、どうしても發見されません。』

『東亜旅館へ隠れたと言ふのか。』司令官は苦い顔をした。其處には寵姫大和櫻の貴女が居るのだ。

『東を向いて居る四階の窓から忍び込んだらしいので有ります。』『其處まで知れて居ながら、何故捕縛されん。彼支那人は日探に相違ないのだ。』

『然し其四階には大和櫻の貴女が居られます。』

『馬鹿、大和櫻の部屋へ逃込めば、貴女は必ず貴様達に密告する筈ぢやぞ。』『夫がどうも。』と軍曹はモジ〳〵した。

『どうしたんだ。明瞭と言へ。』と、忽ち百雷の如き怒聲。

『どうも彼支那人は、貴女の情夫では有るまいかと思ひます。』貴女が司令官の持物と知つて居ながら、態と素知らぬ振。

『何情夫だと、怪しからんぞ。よし、乃公が行つて調べてくれる。』果して滿腔の嫉妬を燃し苛り立つて靴音荒く飛出した。



（八）

『何言つてるんですよ。此部屋に誰も居やあしないぢや有りませんか。貴君は餘程どうかして居る。日本で言やあ狐につままれたんですよ。』

盛粧水も滴れんばかりの貴女が、媚めかしく寄添つて酌をするので、ヤコブは始めの意氣組にも似ず、藁で括つた海鼠のやうになつて了つた。

『さうか。何にしても日本人は油斷がならん。支那人を遣つて、軍機の秘密を盗み出さうとして居るからな。』

强られる酒の下地は好なり、貴女が持添へたのを、ゴクリゴクリと呑み乾して居る。『ぢや用心しないと盗まれますよ。』

『何大丈夫だ。最も大切の書類は、チョッキの内懐に入れて、寢るにも起きるにも肌身は放さんわい。』貴女の目はチラリと寢床の下に流れた。若い美男の艶やく眦は莞爾と受けて首肯く。

『今夜は貴君、泊つて行つて可いんでせうね。サア妾のお酌だから、此大きいのでモウ一杯お呑みなさいよ。』

司令官の肩に手をかけて强かける處へ、司令部よりの至急電話、夫を聞濟すと、ヤコブ大佐は忙だしく立上つた。

『急に會議が始まつた、歸りやにやならん。』



(九)

『貴君、妾が酔はして取らうと思つたら、生憎の電話、今ヒョロ〳〵歸つて行きましたが、外は眞暗、風は吹いて居るし、人通りは有りません。此間に後から行つて、擲り仆して取つてお了ひなさい。……さうして此處へ歸つて入つしやい。廣い滿洲に貴君を安全に匿まうのは、此部屋より外有りませんよ。』

貴女に送られた秋山は、堅く感謝の握手を交して、裏梯子から影の如くに立去つた。

外は烟の如き氷雨を交へて、耳を殺ぐが如き朔北の風、其吹き荒る〻魔風の中を、司令部に向つて歩いて行く大佐は、彌が上に過した大酔が、一時に發して、危ふい千鳥足の互の目によろめける後から、野虎の如く飛び懸つた黒い影。呀といふ間に日本柔道極意の當身、巨大な大佐の身體が、山の仆れるが如くに、ドタリと大地へ悶絶すると、黒い影は手早く外套のボタンを外し、軍服の下に着込んだ毛皮のチョツキの内懐から、スルスルと一封の書類を引出すや、忽ち身を飜へして、黒闇々の中に沒し去つた。



（一〇）

『何です秋山さん、貴君は何處へ行かうと言ふんです。』

大和櫻の貴女は屹となつて、秋山の前に立塞がつた。

『折角大切な書類を手に入れたのです。一刻も早く金州の本部へ屆けねばならんのです。』

『夫は不可ません。ヤコブが息を吹返せば、直に大搜索を始めます。迚も貴君が無事に行着く事は出來ません。』

『然し一時一刻を爭ふ大切の書類です。』

『夫が屆けられなくなつたら、どうします。』

『僕より外、屆ける者が有りません。』

『いゝへ有ります。有りますとも。』

貴女の花やかな顏には、烈女の精氣が漲つた。

『誰です。』

『妾です。妾が屆けます。妾なら疑ふ者は有りません。』

『貴女が行つて下さるか。』

『御國の爲です、行かないで何としませう。……ですが妾が歸つて來るまで、貴君は此室を一歩も出ては不可ませんよ。出たらば直に見附りますから。』



（一一）

ヤボスキー軍曹は、胡散な目を光らして、貴女の部屋を叩した。『誰方ですかい。貴女は居ませんよ。』

『扉を明けたのは、貴女が氣に入りの猶太の老婆だつた。

『居なさらんのか。』

軍曹が部屋の中を見廻すと、隅の椅子に腰をかけた一人の支那婦人が、俯向いて刺繡の手すさびをして居る。

『遠方へ行きなすつたか。』

『行先は言ひなさらないが、二三日歸らないと言つて、今朝早く停車場へ行きなすつたのさ。貴女の事だから旦那に內處で、何の用が有んなさるか解らないね。』

軍曹は解らないやうな、解つた顏を顰ました。

『困つたな。司令官が昨夜此處から歸る時に、ひどく酩酊したんで、途中で轉んで怪我をしたんだ。僕は今內處で知らせに來たんだが。』

『ぢや旦那はお酒を飲むだので無く、お酒に飲まれたんだね。カラ意氣地はない。』

猶太一流の皮肉な惡口、軍曹の凄い目は、支那婦人をジロリジロリと見て出て行つた。



（一二）

日露開戰！　昨夜日本艦隊の旅順襲擊！　青泥窪全市は緊張した。人々は目を欹立て、不安の顏を見合した。續いて張出された支那新聞の號外。昨六日日本艦隊は、朝鮮仁川港外に於て、俄艦ワリヤーク、コレーツ二隻と砲火を交へ、砲擊二時間の後、俄艦は港內に、遁竄し來り、ワリヤーク爆沈、コレーツも沈沒したり。

意外の凶報に、全市は湧くが如き混亂に陷入つた。

此夜東亞旅館の裏梯子を忍び出た一人の支那婦人、四邊を見廻して、小路へ消え込まうとすると、バラ〳〵と駈け來つた一隊の巡邏兵、ヤボスキー軍曹は眞先に立つて、

『待てツ。』と大喝した。

『何をツ。』と、支那婦人の口から迸しる鮮やかな日本語、姿容のタド〳〵しきに似ず、柔道の極意を以て、飛懸る敵を投仆し突退け、人礫を打たして奮戰したが、多勢に無勢、誤つて躓く處を、折重なつて高手小手に縛しめた。

『汝ツ、女と見せて男だな。』

ヤボスキー軍曹が怒つて蹴附るのを冷然と見遣た支那婦人。

『今氣が附いたのか、白痴奴。』



（一三）

『老婆、別狀はなかつたかへ。』

四日目の夕方に旅館の四階に妖艶なる姿を現はした大和櫻の貴女。『あゝ貴女、歸りが遲う御座いました。』

『どうしたへ、彼人は。』

『一昨日の晩、妾が油斷して居る中に、裏階段から外へ出なすつたのです。』『支那婦人の扮裝でかい。』

『えゝ左樣です。だが殘念な事には、軍隊に見附かつて、到頭捕縛されて了ひました。』

『何だつて外へ出たんだらう。あれ程言つて置いたに、しやうが無いんだねへ。』貴女は自烈太さうに寢床へ腰を下して、眉に八字を寄せた。猶太の老婆は、申譯なくモジ〳〵する。

『隊へ連れて行かれたんだね。』

『さうらしいのですよ。』

『まだ殺されやしまいね。』と際どい一縷の希望。

『そんな事は無ささうです。軍隊ぢや上を下への大騷動ですから。』貴女は匂やかな息を、太く吐いて呟いた。

『えゝどうなるものか。今度といふ今度は妾が身體を張つて懸るばかりだわ。』



（一四）

露軍青泥窪引揚げの命は、アレキセーフ提督から下された。慷慨悲憤の將校は、自棄酒を呷つて、無念の氣を吐く。傳騎飛び、走卒翔り、天と地とが轉がり廻るやうな騒ぎで有る。

其大混亂の中に、兵營の後庭は忙だしく取片附けられ、一本の柱が立てられると、忽ち荒々しく牽出されたのは、名譽の日探秋山で有る。司令官以下幹部の將校は、無念の目を瞋らして悲運の俘虜を睨まへたが、秋山は反つて快よく微笑を啣んで之を迎へた。敵の秘密書類は既に本部へ托送された。此世に殘る執着は微塵もない。

秋山は後手に柱に括られ、射手三名は銃口を向けて控へた。日探に下された運命は、銃殺の極刑だつたのだ。

一兵卒は白布を取つて、秋山の目を掩ふとしたが、秋山は斷乎首を振つて應じなかつた。

『目隱しは要らん。俺は露兵の射撃の巧拙を見て死ぬのだ。』

銃は直ちに構へられ、指揮官はスラリと指揮刀を拔いた。萬籟聲を呑んで、天地闃として音を絶えた。



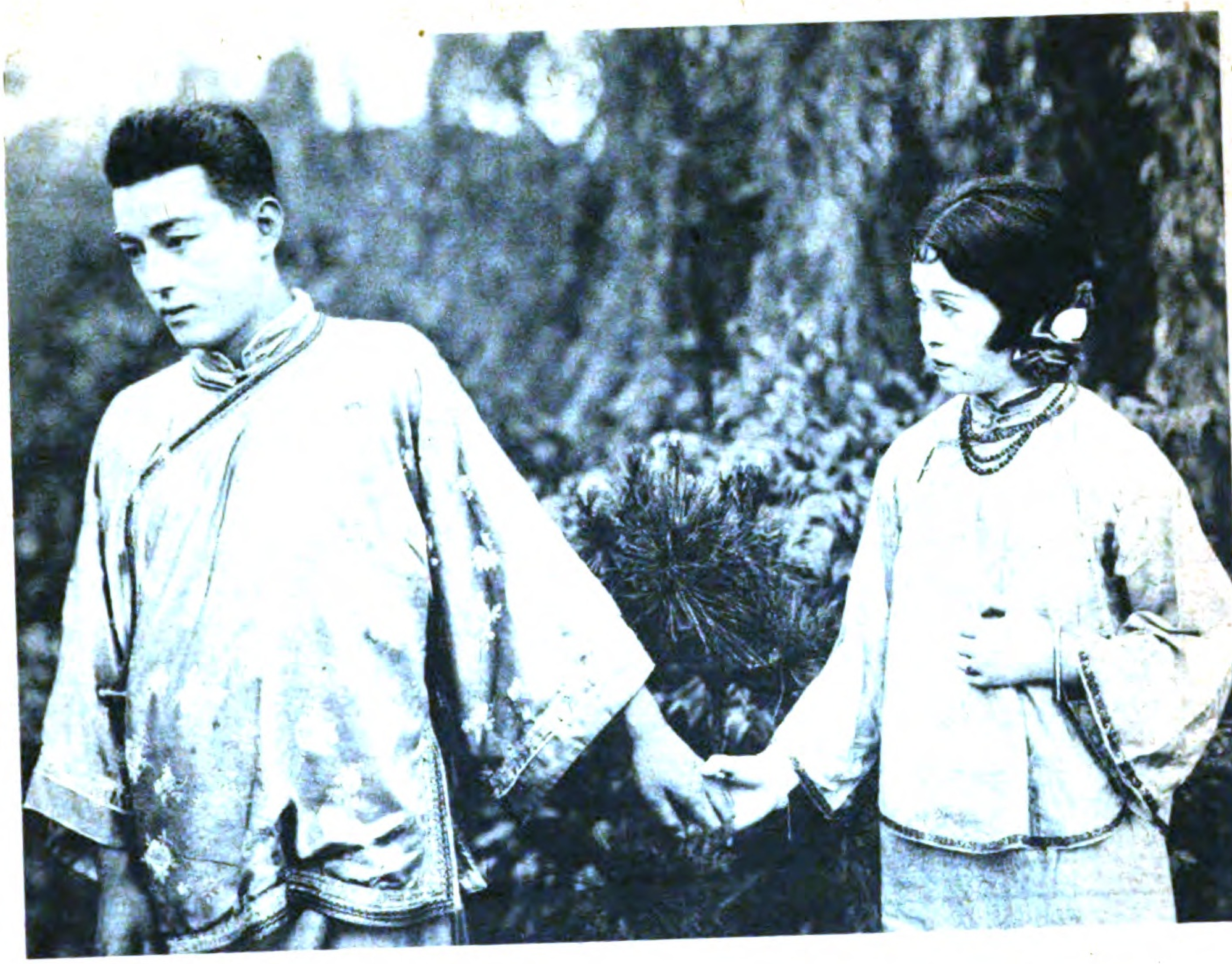
（一五）

盡忠報國の烈士の魂魄は、將に天涯に飛んで、忠義の鬼と化せんとす。暮色漸く迫らんとして、落陽燃えて光無し。

指揮官はヤコブ司令官を見た、司令官は首肯く。方に無言の命令で有る。指揮官の唇は、射ての號令を發せんとして、屹と身構へる途段、大地ビリッと震動したかと思ふと、轟然たる大爆發、空氣は波濤の如く激動して、立てる者は皆突き仆され、起んとすれば煉瓦硝子の破片に打たれ、虛空に飛ばされたのは、筋斗打つて叩き附けられる。血は流れ肉は飛び、此世からなる修羅場の阿鼻叫喚。正しく火藥庫の爆發で有る。炎々たる黑烟は渦を卷いて虛空に吹き上げ、第二第三の爆音は、續け樣に起つた。司令官も傷つけば、參謀も殪れる。下士兵卒は右往左往に逃げ惑ひ、火は見る〳〵兵舍に燃え移つた。

銃刑の射手も指揮官も、何處へ逃げたか飛ばされたか、影も形も見えずして、柱に括さされた秋山のみが、勝利者の如く毅然として立つ。其目前へ綠の黑髮振亂し、處々に傷を負うて、鮮血に塗れつゝ驅け附けたのは、女の一念鐵をも溶す大和櫻の貴女。手早く縛しめの繩を切りほどいて。

『あゝ快い心持だ事。恁麼に旨く爆發しようたあ思ひませんでしたよ。……サア早く逃げませう。』



（一六）

『實に難有い。御禮は口にも筆にも盡せません。貴方のお陰で、書類は無事に届く、僕は命を救はれる。此恩は七生迄も忘れません。』感窮まつて多情多恨の勇士は、湯の如き熱涙を塗ませ、感謝の海に漂よはされた。

『何ですね、御禮なんて。忠臣義士の御役に立つのは妾の本望ぢや有りませんか。』大和櫻は輕く受け流した。殘月空に流れて、微光斜めに美女と美男とを射る。

『貴女、どうか僕と一緒に本國へ歸つて下さらんか。僕は貴女の奴隷となつて、此恩を謝します。僕のやうな者を嫌はなかつたら國へ歸つて僕と同棲して下さらんか。僕は如何なる犧牲を拂つても、貴女を一生大切に保護します。』

握りしめた秋山の掌から男の精魂がネバ〱と溢れた。

『不可ませんよ秋山さん。妾は不仕合で恁麼醜業婦になつたのです。男といふ者は、おくびの出る程飽きて居るのです。……妾は日本といふ男となら、立派に情死しますが、人間の男は大嫌ひ。……秋山さん、之でお別れにしますよ。御國の爲御機嫌宜しう。』

月冴えて霜白く、四顧寂寞として雄魂泣く。

（終）

醜容と健康上の障害

男 女 ふとり過ぎ

僅に十日か二十日間の實驗！

身體に害なく程よくやせてスラリとした美容姿となる

◎男でも女でも肥り過ぎは、デブだのおかめだの豚だのと惡口を云はれる位下品で醜くいから、立派な令孃も知らぬ所へ行くと下女と間違へられる、又歳をふけて見らるゝ損もあり、水氣太りや血太りで血色が惡るいと癩病の筋ではないかと疑はるゝこともあり、それが爲めに、教育もあり心柄もよい良家の令孃でも、可惜嫁入盛りの妙齡を徒らに過ごし容色は益々惡るくなるばかりで一生涯の不仕合せの原因となる例が澤山あります、又太つた人は歩行にも骨が折れる位で自然擧動がノロクなり敏捷を欠きますから、鈍なノロマな人間樣に見られます。

◎身體の肥り過ぎを強壯だなどと思つて居たら大間違です、醫學上肥胖症と稱し、血肉組織中に過剩の脂肪、水氣や其他有毒有害なる不純物が蓄積されたる一種の病狀態であります、それで肥り過ぎた人に限りニキビ其他の出物又は癰疔の如き面にかゝる腫物も發し易い、いろ〳〵の病氣にも罹り易い、運動不如意の爲め胃弱になつたり、心臟が壓迫されて少しの運動にも息切れし恐るべき心臟麻痺となる危險が伴ひ、又眞夏などは人一倍暑さに苦しみ、見る人にさへ暑苦ろしい感じを與へます。



井上醫學博士曰く……

肥滿ノ人ハ心臟ガ障碍セラレテ脈搏ノ不正並ニ結節ヲ發シ熱病ニ對スル抵抗力少ナク肺臟ハ運動ヲ妨害セラレ氣管支加答兒ニ罹リ易ク肝臟ハ肥大シ又動脈硬變、老衰縮腎、糖尿病ヲ併發ス……（井上内科全書）

岡井醫學博士ヨク……

オベシタス即チ肥エ過ギタル人ハ歩行困難、心臟鼓動ノ脈搏不整、心臟肥大、呼吸及困難、其他種々ノ障碍アリ心臟衰弱、腦出血、肺出血ヲ發シ頓死スル事アリ……（臨床醫典）

萬藥品米に於て專門大家の熱心なる研究により理想的一大創製に成功せる中容丸は、ありふれた他の無責任なる得體の知れぬやせ藥と全く異なり、最新醫界に於て其の驚嘆すべき効を推賞されつゝある

實に甲狀腺純質を主藥とし之れに幾多の補佐藥を合理的に配合し成せる最良藥なれば、服用するに隨ひ血肉中に蓄積せる惡脂肪、惡血、酒毒、水氣其の他のあらゆる有害なる不純物質と毒素を肌肉細胞より分離せしめ胃腸の機能をよくしてそれらを體外に排泄するから思ふ通りにスラリと程よくやせて中肉の健康的堅體となり氣分まで輕快になり升、身體がやせ過ぎて骨と皮になる、一度やせても再び太るなどの憂は絶對に有ませんから安心して服用せられよ。

□年若き婦人にて肥せる人
□血ぶくれ、酒ぶとり、脂肥りの人
□ニキビ出で脂で肥滿の人
□月經不順で肥滿し歩行困難な人
□鬱血又は水氣で肥滿なる人

⌒中容丸定價は十日分金二圓、廿日分金五圓五十錢、卅日分金七圓五十錢、四十日金九圓です、大抵ノ方は十日乃至二十日分を試みよ。肥滿甚だしき方は三十日乃至四十日分を求められよ。目下注文に迫はれ直接御申込の方にのみ送藥して居ますから必ず直接御注文下さい　前金申込は送料不要、早速送藥し、ハガキ注文は代金引替で廿錢増にて送藥します。定ほ平素の養生方飲食物の注意等を述べた詳明書も添付して御送します。

發賣元 東京市小石川區表町六十七番

鶴岡藥品部

振替東京一六六八〇番
電話小石川四七九〇番

◎くわしい說明書はハガキで御申越下さい＝無料送呈

鶴見祐輔先生の代表的名著



見よ、大識見！大熱誠！！

修養に志す人は來れ、人物を練らんとする者は見よ、
眞に之れ現代日本の一大文獻！千載不朽の名作！！

中道を歩む心

中道を歩む心は、著者本然の面目にして同時に理想人の境地である、見よ！現代日本及日本人の行くべき道を啓示し、社會の一切に新生命を齎す大精神！

忽四十二版　四六判布裝函入　定價貳圓五拾錢　送料拾四錢

壇上紙上街上の人

歐米日支總ゆる階級の人物と交り「更生日本の要求するものは人である」との結論を得た氏が、燃ゆるが如き情熱を傾けて發表せる世界新人巨人の評傳！

忽二十版　四六判布裝函入　定價貳圓七拾錢　送料拾四錢

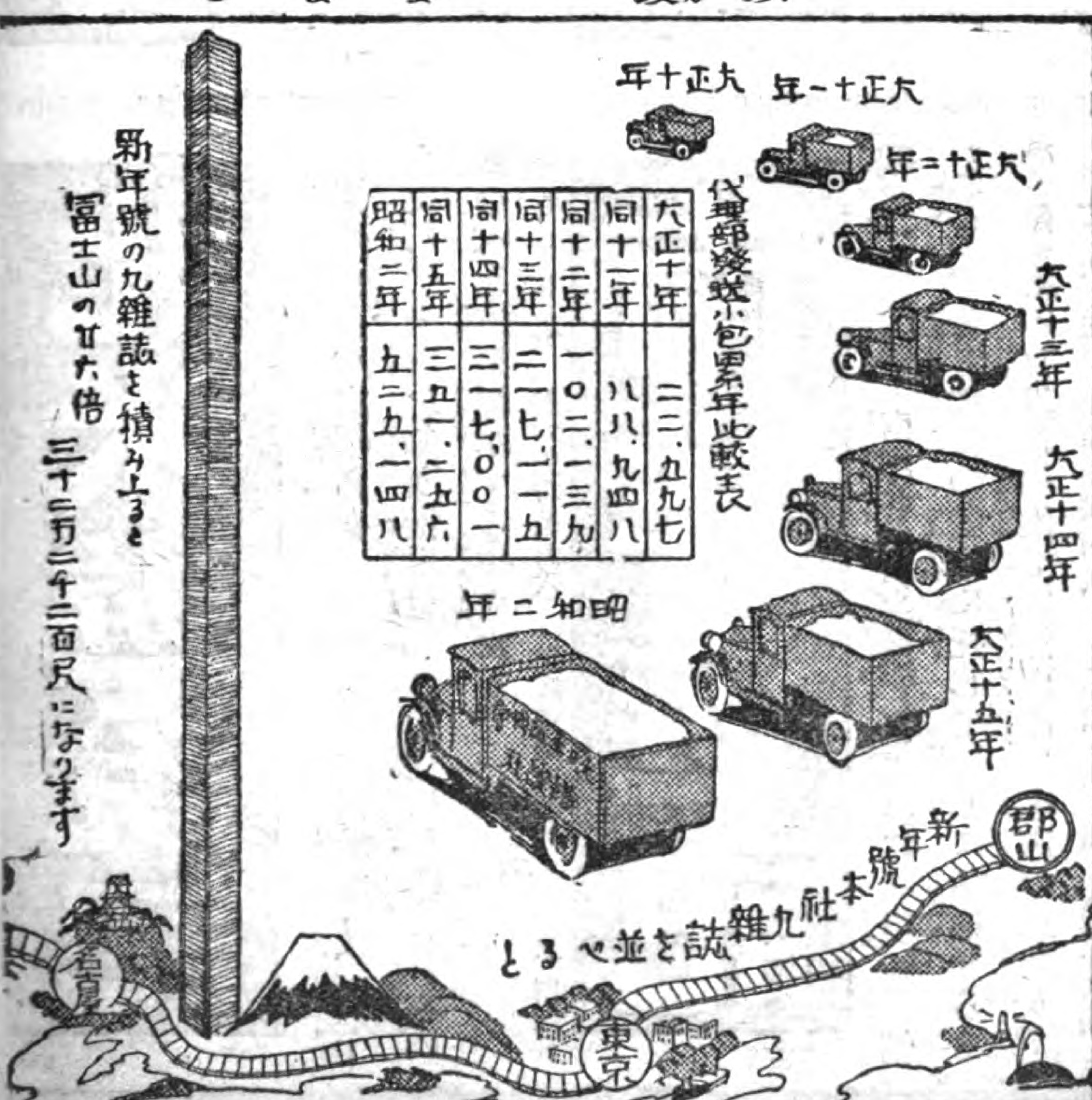
圖書目錄申込次第進呈

◎雑誌は一國文化のシムボル

感謝!!

本社發行の九大雑誌は賣行益〻激增、今や發行部數本邦雑誌總數の七割以上！ 是偏に各位の御熱誠なる御後援の賜ものと厚く御禮申上げます。

下の圖は今度東京婦人子供博覧會で發表しました本社の雑誌發行部數最近の統計であります、就て如何に其尨大な數字を示しつつあるかを御覧下さい。



代理部發送小包累年比較表

年	數
大正十年	二二、九九七
同十一年	八八、九四八
同十二年	一〇二、一三九
同十三年	二一七、一一五
同十四年	三一七、〇〇一
同十五年	三五一、二五六
昭和二年	五二九、一四八





愈々十月一日より發表！

面白い〳〵
感動感激『修養全集』

愉快上品
爲になる『講談全集』

今や、大車輪、印刷製本中

大壯擧！斷じて前になく恐らく後になし

修養全集は……背革、天金函入、壯麗なる大册
講談全集は……高雅なる綾織表裝、函入千二百頁

之が一圓か！と、見る人悉く驚嘆！

全部揃つて十二卷、合計十二圓

どう見ても三四十圓、若くは四五十圓の値打

この機を失しては絶對に再び手に入りません









陸海軍・宗教界方面では

藤井健治郎　槇山榮次　松井簡治　小林一郎
谷本富　横田秀雄　松本文三郎　下村宏
三上參次　高田早苗　赤司鷹一郎　林毅陸
德富猪一郎　深作安文　安藤圓秀　久留島武彦
小川正孝……
八代六郎　河合操　加藤咄堂　佐藤鐵太郎
松村介石　堀内文次郎　賀川豐彦　本郷房太郎

文壇・婦人界方面では

幸田露伴　坪内逍遙　嘉悅孝子　鳩山春子
與謝野晶子　望月紫峰　佐藤紅綠　巖谷小波
吉岡彌生　棚橋絢子　中村武羅夫　山脇房子
前田曙山　村上浪六　本田美禪　佐佐木信綱

（順序不同）

その他各方面の諸名士續々として本擧を賞讃！

全社員を擧げて感激感奮

日夜苦心慘憺、必死の大活動中

今暫くお待ち下さい！　御期待下さい！





既にこの美談あり

本社二大全集の計畫を聞き知りたる製紙、印刷、製本其他諸方面の關係業者數十名は『講談社の今度の計畫は、眞に日本の爲だ我等も講談社を通じて世の爲め國のために盡さう、大にこの壯擧を援助しよう』といふことになつて、七月中旬、本社の固辭をもきかず『二大全集後援會』を組織し、本全集目下定日を設けて百方手段を講じ、本全集普及のため援助せられつゝあります。何といふ涙ぐましい美談でせう！本社同は感激、是非最善のものにして之に應へたいと愈々一心不亂の有樣です。

印刷製本能力に限りあり

日本空前の大部數の見込み！

目下印刷製本能力につき大苦心、能ふ限り大部數を出すやうに努力して居ますが、能力以上になつては何とも致し方なし。

締切日以前に申込みを謝絶することあるべし。

ぜひ いち早くお申込を乞ふ！

早い方から順次配本

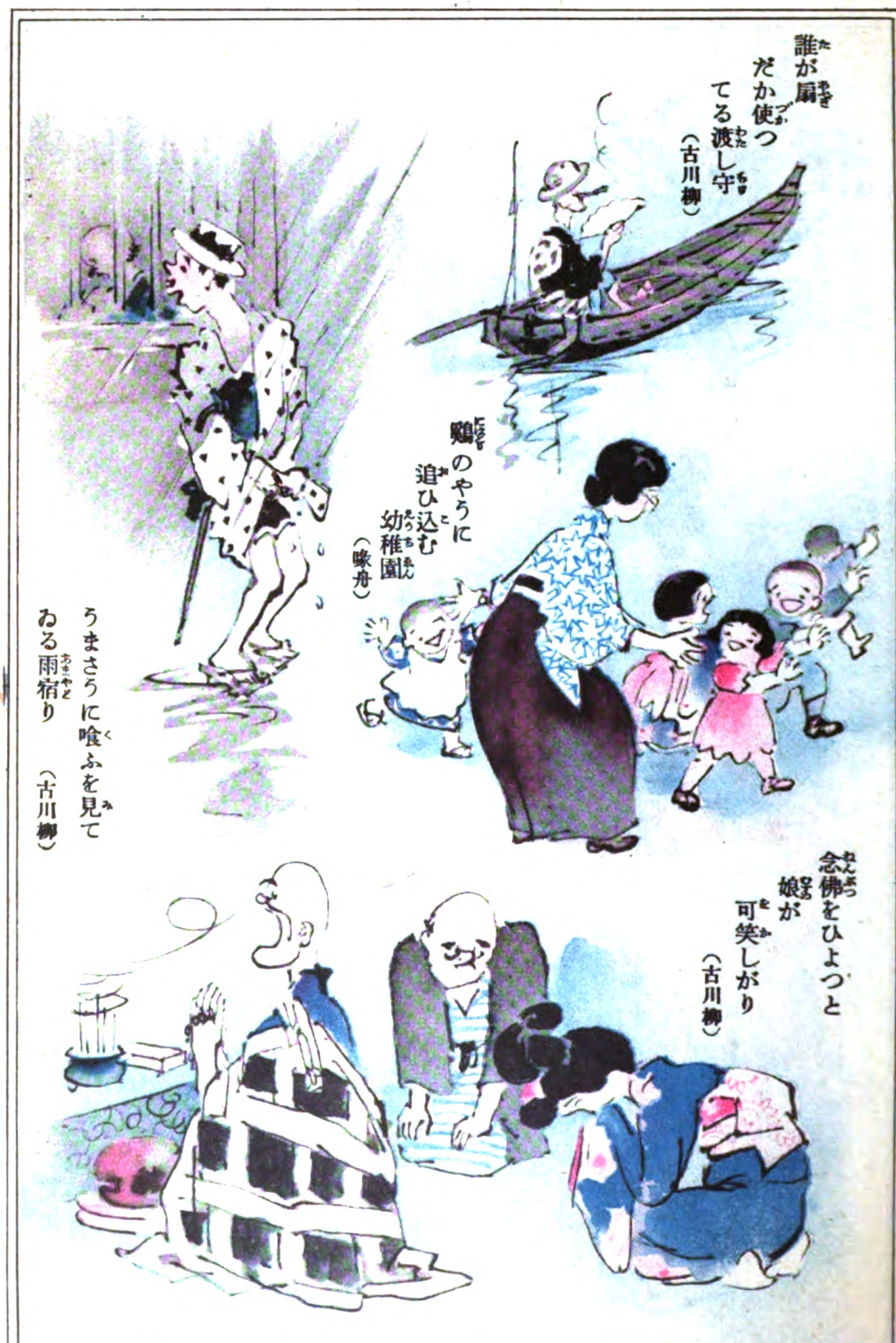
本誌の愛讀者はお申込落ちのないやうくれ〴〵も御注意願ひあげます。





谷脇素文画
新繪本柳樽
月の座へ招けば月を振舞はれ
（古川柳）
御神慮を肩で伺ふ御輿かき
（古川柳）
御輿舁き飛び付く様に一人殖へ
（路舟）


負け將棋
逃げるたんびに
お手は何
（古川柳）
湯治場で
何にも知らぬ
殘念さ
（古川柳）
母親に
モダンガールを
振り向せ
（三太郎）
耳掃除あなた
まかせの姿なり
（新分子）


誰が扇だか使つてる渡し守
（古川柳）
鷄のやうに追ひ込む幼稚園
（喙舟）
うまさうに喰ふを見てゐる雨宿り
（古川柳）
念佛をひよつと娘が可笑しがり
（古川柳）



金屛で見れば戰も面白し
（古川柳）
生醉に心づかひの金屛風
（古川柳）
うたゝねの顔へ一冊家根に葺き
（古川柳）
くつしやみが出さうで嫁は針を置き
（蝶哉）
何馬鹿だどれと父さん肌を脱ぎ
（古川柳）


針箱をさがせば
女房飛んで
來る
（古川柳）
やはらとり
から致したら
どうなさる
（古川柳）
男親舊い軍歌で
寢かしつけ
（糸竹庵）
踊り子
が來る
とそばから碁を
しまひ
（古川柳）


這ひ付くと四五寸のけるまくわ瓜（古川柳）
おとがひで額の筆法はねてほめ（古川柳）
荷車はうしろの人に禮を捨て（みはる）
眼藥に要らぬ大きな口を開け（三日米）
道ばたへすはつて母をせがむなり（古川柳）



折れたかと思へば起る筏さし
（古川柳）



俎板にあるうち亭主取つて喰ひ
（琴波）



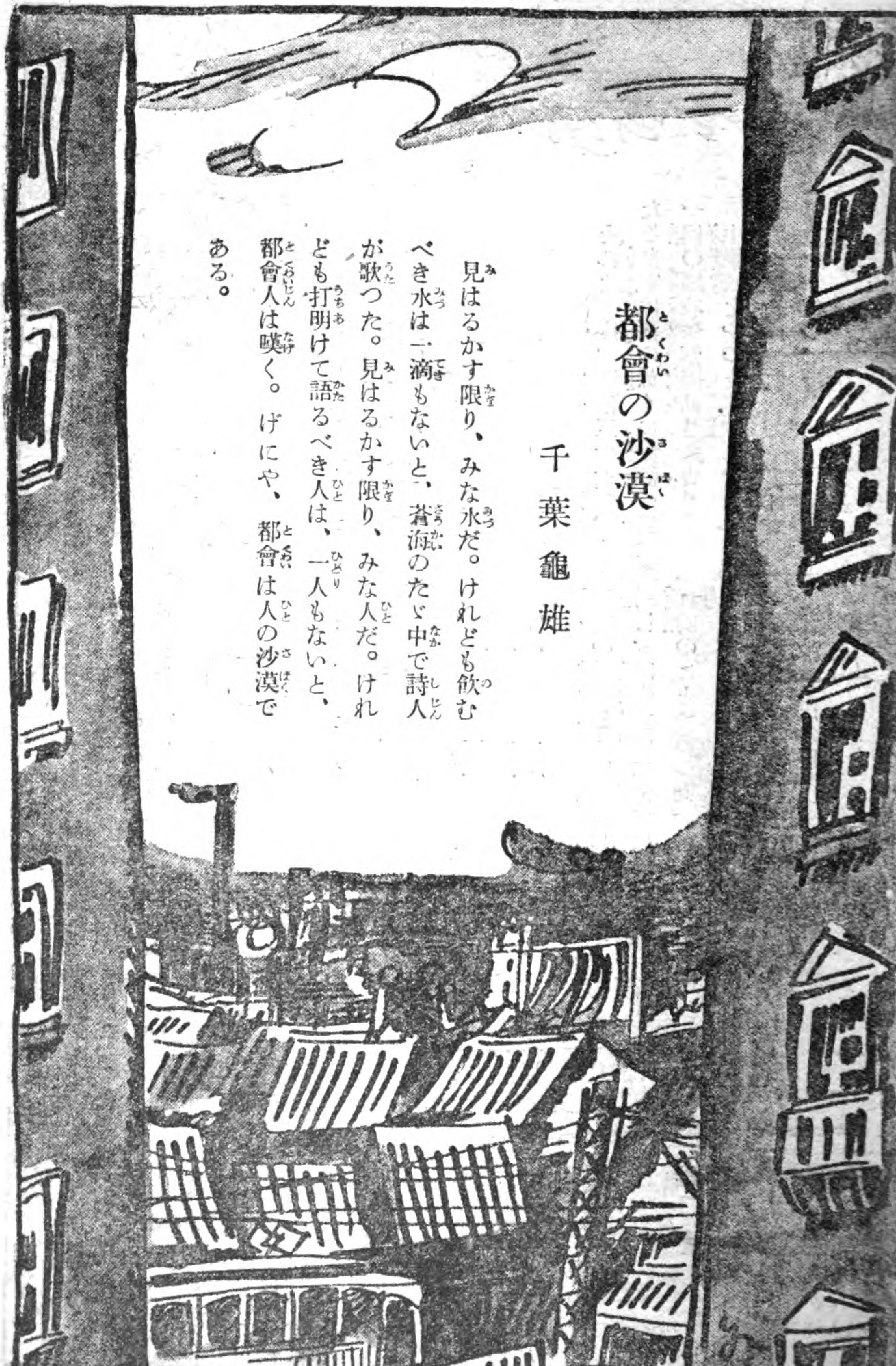
からかさをかついで虹を振りかへり
（非水）



すかしては隱すより猶あらはるゝ
（古川柳）




摺古木へ押をかけたを
公卿衆持ち
（古川柳）
猿田彦鼻を握つて
汗を拭き
（古川柳）
名乗るうち
馬はしばらく
息をつき
（古川柳）
店賃で
いひこめ
られる論語讀み
（古川柳）
長嘶とんぼの
とまる槍の先
（古川柳）



都會の沙漠

千葉龜雄

見はるかす限り、みな水だ。けれども飲むべき水は一滴もないと、蒼海のたゞ中で詩人が歌つた。見はるかす限り、みな人だ。けれども打明けて語るべき人は、一人もないと、都會人は嘆く。げにや、都會は人の沙漠である。



昭憲皇太后

長田幹彦
飛田周山畫

それは丁度、明治三十七年、——日露の戰雲益々暗澹として、今や忠勇なる皇軍は潮の如くに滿洲の野に進出し、西海方面に於ては既に旅順口第一回の總攻擊が開始されようといふ直前のことであつた。

中學校をやつと卒業したばかりの私は、しばらく心身を練り、且つは又志を成す將來の計を確立しようと思つて、その年の春の末から、波靜かな葉山の一色の濱へ居を移してゐた。行つてゐた先は、故文部大臣井上毅氏の別邸で、その頃出征してゐた陸軍中將木下宇三郎氏の夫人や令孃が、その別邸を借りて病を養つてゐたので、そこへ私は用心棒兼居候といふ形で、厄介になつてゐた譯であつた。

木下家と私の家とは、以前から別懇の間柄であつた。中將は當時少佐で、第一軍の參謀として、黒木將軍に隨從し、開戰の當初から滿韓の野に轉戰してゐた。井上家も私の父と同郷の出で、長年知遇を忝うしてゐたので、まことに私にとつては都合がよかつた。井上毅氏といつても今ではもう歷史上の人物で、若い人々は或はその名を知らないかもしれないが、氏は憲法制定當時の一大功臣であり、文部大臣としても實に異數の材であつて、卽ち前鐵道大臣井上匡四郎氏の乃父にあたる人であつた。

私はその當時十八歲で、極端な愛國主義に燃ゆる熱血青年であつた。その時代の總ての青年がさうであつたごとく、私達はまるで寢食を忘れて、滿洲から傳はつて來る戰報を待つた。今のやうに無線電信網が張られてゐるではなし、ラヂオがあるではなし、報道の使命は一つに新聞紙にかゝつてゐた。旅順沖の海戰、大石橋の遭遇戰、やがては遼陽の大決戰、戰捷の快報は每日のやうに號外となつて葉山の濱を賑はゝした。

葉山の御用邸には、當時の國母陛下である、昭憲皇太后が行啓になつてゐた。畏くも、明治大帝は、大元帥陛下として日夜軍國の政務に御軫念あらせられ、我が日本の國運の爲めに、億兆とゝもに申すも畏多いほどの御艱苦を御忍びになつてゐられたのであつた。

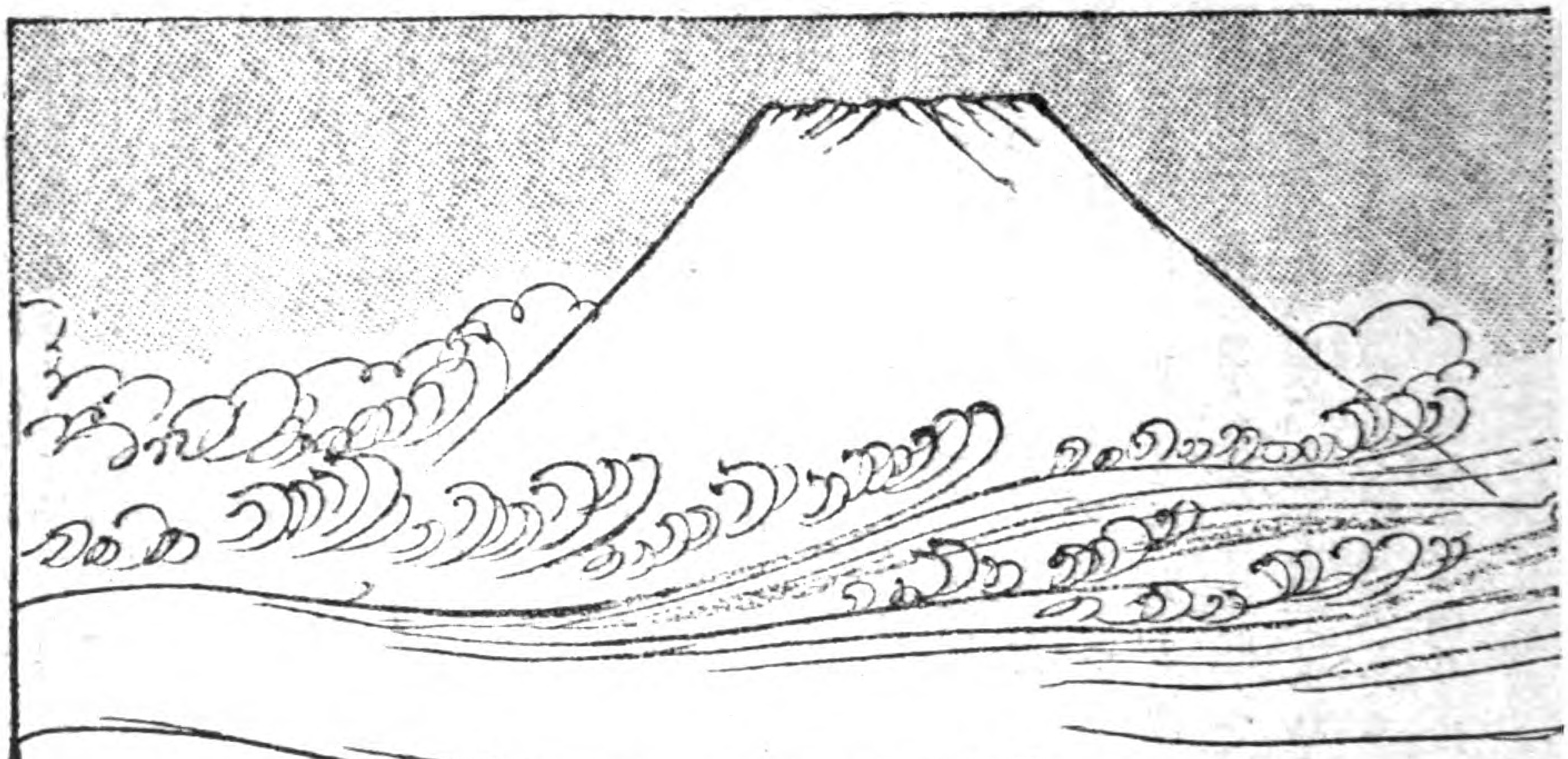
昭憲皇太后が葉山へ御滯在遊ばされた日數は相當に長かつた。いつもは松籟に明け、濤聲に暮るもの寂しい漁村も、戰爭の餘波を受けて、何となく物情恟々としてゐた。敵艦隊が東京灣口を窺窬するといつては、深夜葉山の沖合に驅逐艦隊が潜航してきたり、夜陰を劈いて殷々たる砲聲が聞えたり、さうかと思ふとすぐ上に地藏山では砲臺新設の工事が始まつたり、もう樣々の風聲鶴唳が傳はるので、その都度に我々までが異常の興奮を感じるのであつた。一方又橫須賀の重砲兵聯隊が旅順方面へ出征するといふので、逗子の停車場へいつてみると、來る列車も、來る列車も夥たゞしい砲と軍需品を積載してゐる。それと同時に、橫須賀街道の方からは、國母陛下に御訣別を申上げる爲めに、砲車を曳いた砲兵隊が日に幾度となく、





長蛇の列をつくつて續々行軍して來る。一隊又一隊、御用邸の御門前へ整列しては、悲しげな喇叭を吹奏しながら、將校達は白刃を捧げて心からなる拜禮をしてゆく。陛下は態々御玄關先まで出御になつて、それを御見送りになる。街道の煙塵にまみれながら、皇國のために血と砲彈の巷へ出發していく兵士達の後姿は、全く涙なしにはみられない程、悲壯なものであつた。帝室も、國家も、民衆もすべて同心一體となつて、前古無比の國難にあたつてゐるその壯烈な光景は、今だにはつきり私の記憶に殘つてゐる。これをこそ眞にわが國體の精華ともいふべき醇美の極みであつた。私は一生涯のうちに、あのやうな美しい情景を再び見ることが出來るか何うか、疑ひなきを得ないのである。

或日のこと、私は自分の居間に宛られてゐる別邸の離れの四疊半にゐた。そこは故井上子爵が書齋にしてゐられた室で、硝子戸で仕切られた、見る影もない粗末な座敷であつた。私はそこの窓を開け拂つて、敷居のうへゝ腰をかけ、その時分、隨喜渇仰してゐた英國の熱血詩人バイロン卿の詩集を讀んでゐた。中でもあの有名な『海洋』の詩が一番好きで、私はそれを讀む時には必ず聲をあげて朗讀しずにはゐられなかつた。で、私はいつものやうに片手を高く空へ振り上げながら、もう殆んど暗誦してしまつてゐる最初の章句を大聲で朗吟してゐると、その時、ふッとすぐ下の松林の方で異樣な人聲が聞える。滅多に人の來る家ではないので、私は誰れかと思つて何氣なく後を振顧つてみると、こは如何に、私のゐるところから僅か三間と距らない松林の中に、凡そ十二三人の人影がいつの間に入つ



て來たのか、まるで幻影のやうに立つてゐる。深い砂地なので、無論足音はしないのであつたが、それにしても私はすつかり朗吟に氣を奪はれてゐて、それだけの人數が靜かに入つて來たのを少しも氣づかずにゐたのであつた。

とみると、一番先頭に立つてゐられるのは、朽葉色の洋服を召した、いかにも氣品の高い、貴夫人である。その後に古風なおかいどりを着て、髮をすべらかしに結つた中年の婦人が二三人、その又後にはフロックコートを着た連中が四五人扈從してゐる。その他に、鞘形の琥珀の袴を召した美しい少女が二人立つてゐられるのであつた。

私はそれを見た瞬間、もう體中の血が一時に凍え上るやうな衝動を感じた。はツと思つて、矢庭に窓の敷居から飛び下りると、もう大慌てに慌てゝ先づ硝子戸を閉め、白い金巾のカーテンをあたふた引いてしまつた。外ではつゝましやかに笑つてゐられる聲がかすかに聞えてゐた。

そこへ木下少佐夫人が、これも慌て返つてばたばた入つて來た。その云ふところを聞くと、今實は彼方へ宮内官がみえて、皇后陛下が御二方の姫宮方を御伴れましになつて、突然別邸の松林へ松露を採りに行啓になつたのだといふ。しかも出征中の木下少佐のことを御存知になつてゐて、非公式に拜謁を賜はるのだといふ。

私もそれを聞くと、やつぱり案の定、高貴な方々であつたのかと思つて、もう冷汗が流れ出るやうな心持ちになつた。何にしろ餘りに唐突な出來事なので、私達はどうしてい丶か、唯わくわくするばかりであつた。少佐夫人は靜養に來てゐる體なので、無論改つた紋服の持合はせなぞがあらう筈はない。で、私は賴まれるまゝに、おづおづ宮内官のところへいつて、その由を申出で、そつと内密に指圖を乞ふと、陛下はまことに御氣輕に、平服のまゝ御前へ出ても差支へないから

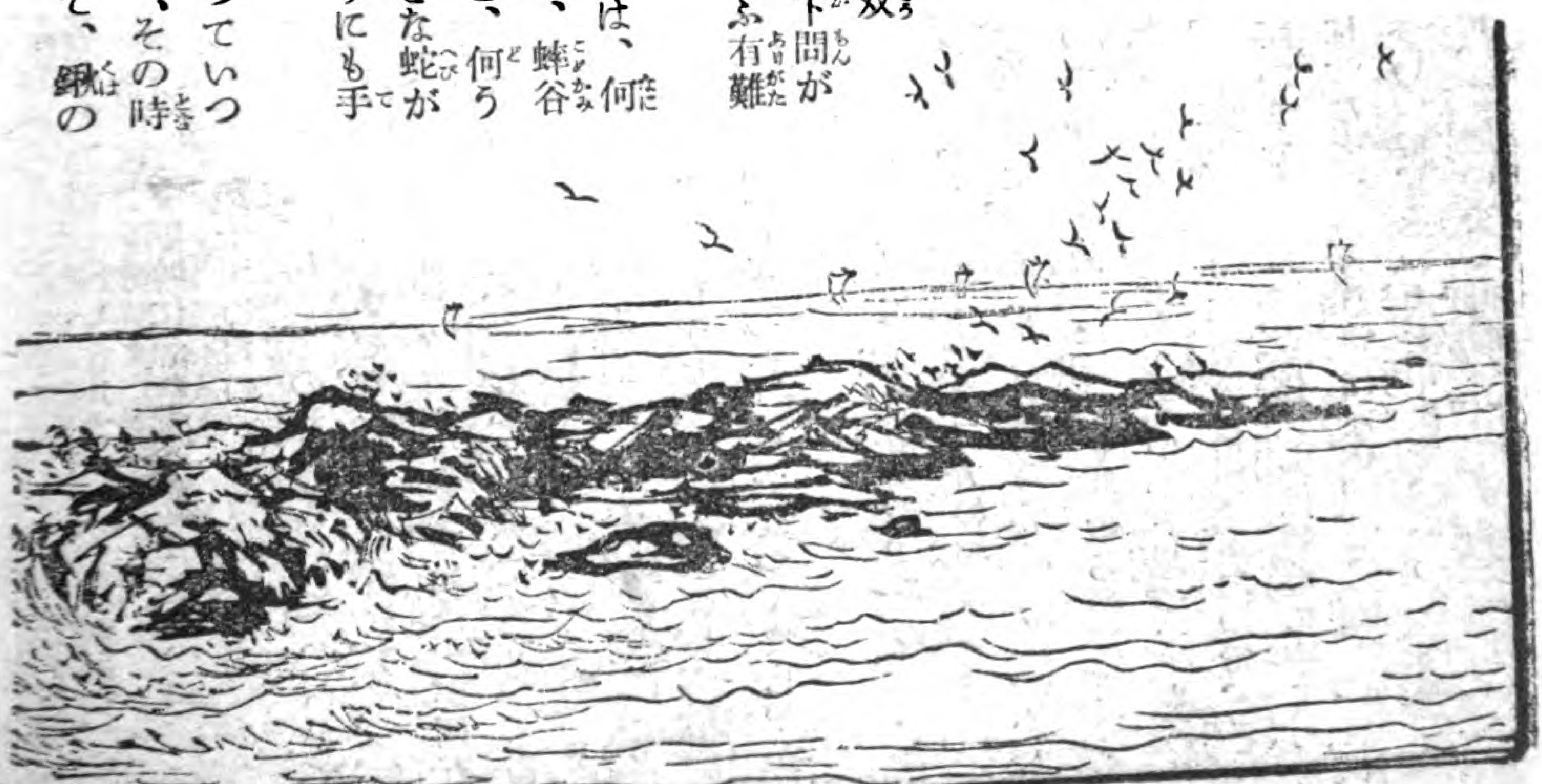
といふ有難い御諚を賜つた。

陛下はそのまゝ深々と繁茂した松林の中へ下りたゝせられ、御二方の姫宮と御一緒に彼方此方と御逍遙になりながら松露を御採取になる。いかにも御打融けられた御遊で、遠くから拝見してゐても、頭が下がるやうだつた。しづかに御談笑遊ばされてゐる玉音が、今でも猶ほ私の耳朶に殘つてゐる。自ら備はる御品位の中にも、御坤德が窺はれ、一寸とした御擧動にも實に優雅な、典麗なところが拝せられた。今から考へると、御二方の姫宮は、現今の朝香宮妃殿下、東久邇宮妃殿下であらせられたやうに思はれる。

少佐夫人はやつと身支度が出來たので、陛下が別邸の緣端で御少憩遊ばされてゐる間に、拝謁の光榮を擔つた。數々の有難い御言葉を賜つたので、夫人はもう双眼に一杯涙を湛へながら退出して來た。少佐出征中の勞苦を思召して、細々と御下問があつたさうで、我々風情にまでかうした御仁慈の厚い御言葉があるとは何んといふ有難いことであらうと云つて、夫人もしばらくは顔さへ得上げなかつた。

そこへ忽如として一大椿事が降つて湧いて來た。ふと耳を欹てると松林の中では、何事が起つたのか、扈從の人々が俄かにわッと立騒ぐ聲が聞える。私ははッとして、蜂谷を引絞られるやうな極度の緊張を覺えながら夢中で松林の方へ飛んでいつた。と、何うしたことか、場所もあらうに、陛下の御前には一間半もあらうかと思はれる大きな蛇が匍ひ出して、傍若無人な姿で彼方此方へのたくり廻つてゐる。扈從の人々は何うにも手の下しやうがないので、たゞあれ、あれと慌てふためくばかりであつた。

私はすぐさま物置へ取つて返し、そこにあつた大鍬を引抱へて、又現場へ走つていつた。元來、私は非常な蛇嫌ひで、四五寸位な奴をみてもぞつとする程であるのに、その時は嫌ひも恐いも無論なかつた。いきなりその蛇の頭へ件の大鍬で一撃を食はせて、鍬の

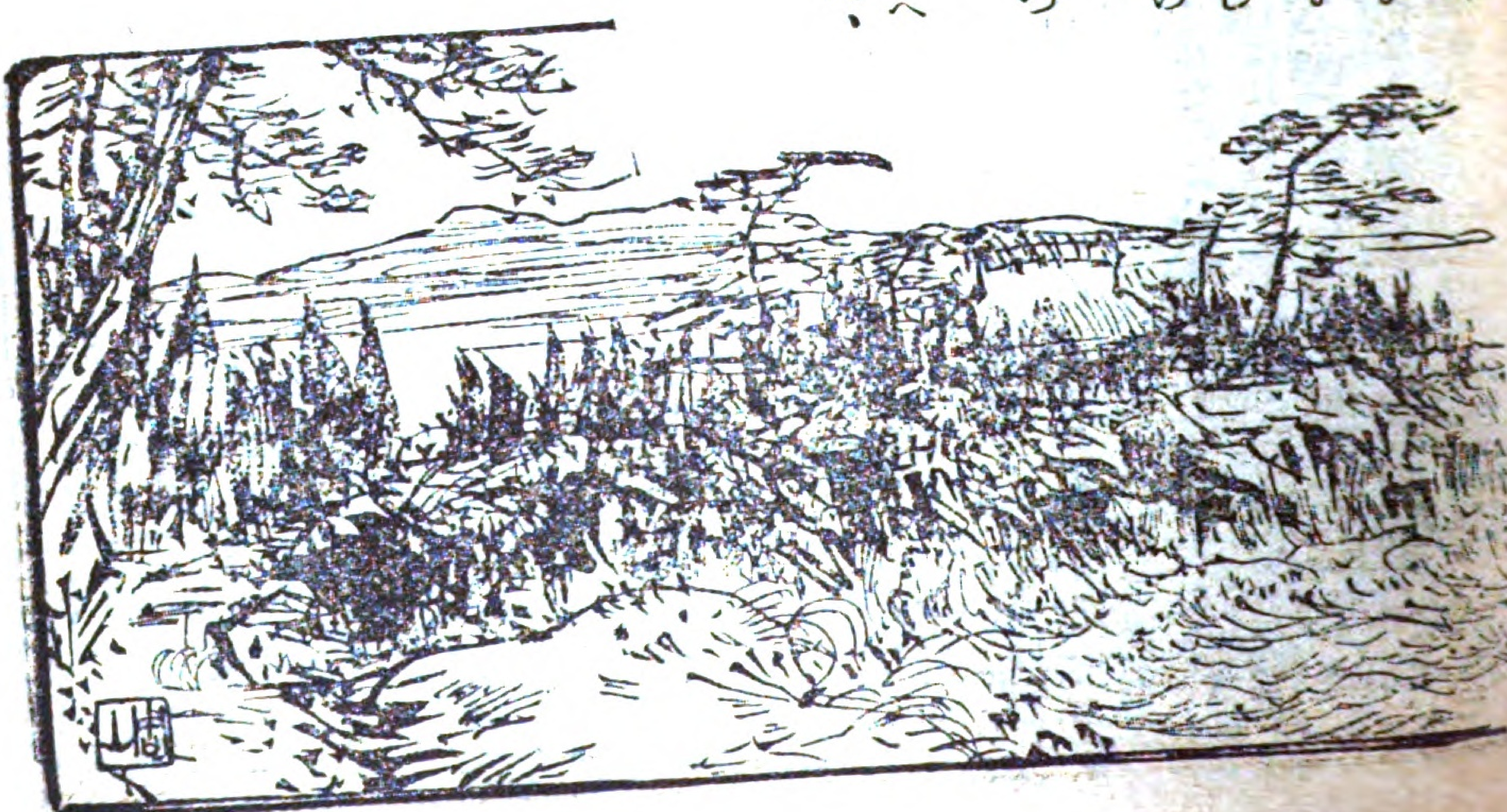


柄へぐるぐる巻きついて來る奴を片手で我武者羅に引摑んで、一刻も早く高貴な方々の御眼に觸れないやうに、そのまゝ海岸へ持つていつて、穴を掘つて埋けてしまつた。埋けてしまふと私は初めて總身に惡寒を覺えて、急にぐつたり力脱けがしてしまつた。別邸へ歸つてみると、陛下をはじめ姫宮方も赤熊手を御執りになつて、さも御樂しさうに御遊を續けられてゐる。その時、私は咫尺の間に陛下の御姿を拜したが、その氣高い御容姿は今だに忘れることが出來ない。私が踵を置いて恭々しく叩頭すると、陛下はにこやかな御微笑を御洩らしになりながら、畏くも御目禮を賜つた。私にとつては、終生忘れることの出來ない感激の極みであつた。

それから一時間ばかり經つて、陛下は庭先の垣根のところから海岸傳ひに御用邸へ還御になつてしまつた。姫宮方はまだ御幼少であつたので、波のさし引く濱の砂地へ、熊手で文字なぞを御書きになりながらさも面白さうに御戯れになつてゐた。

還御になると間もなく、御用邸からは態々御使者があつて、昔風の白木の臺子に、結構な御菓子を盛つたのを御下賜になつた。

もうそれからは二十五年の歳月が夢の如くに經過してしまつた。眞に曠世の聖天子であらせられた、明治大帝も御崩御になる。昭憲皇太后も今はもはや伏見東陵の永遠の玉座に御鎭りになつてしまつた。心なき風雨は御陵の森に騷いで、星霜は幻の如くに移り、歴史は唯徒にその頁を重ねていく。思へば御在世當時の世相は、實に懷かしい限りであつた。君臣一體といはうか、帝室の御威德もさることながら、民心も自ら歸一してゐて、今から顧ると眞に醇美醇朴の極みであつた。勇ましい進軍喇叭を吹き鳴らしながら、轣轆たる砲車を曳いて國難に殉じようとしてゐるあの忠勇義烈な民衆を、御淚をもつて御見送りになつてゐた昭憲皇太后の神々しい御姿は、偉い歴史的な繪巻として、**終生私の胸奥に生きていくことであらう。**





人情美の極致・感動物語

貞烈乃木靜子夫人

堀内信水



ひとしく人情美というても、普通一遍の一時的の人情美の現はれと、至誠天地を貫く崇高な人格的の人情美と、にはおのづから異なる趣があります。勿論、後者の世道人心に及ぼす力の偉大であり且つ永久的であることは言ふまでもありますまい。わが乃木靜子夫人の如き、實にこの意味に於て、崇高なる人情美を發揮せられてゐると思ふので、私はまだ世間にあまりに知られてゐない夫人の事實について少しく述べてみたいと思ひます。

特に、この中の靜子夫人が最期の疑問は、私が數年間研究調査して、こゝに初めて公表するものであることを附記しておきます。

乃木將軍が結婚されたのは、聯隊長當時で、母上が心配されて芝櫻川町の借宅で行はれたのであります。その固めの杯の前に、將軍は花嫁の靜子孃に對つて、二つの相談をされた。即ち、

一、母は頗る嚴格なる性質であるが、よくこれを迎へて、孝養を盡すことが出來るか。

二、軍人は何時死ぬるか分らぬ。不幸にして犬死をせぬとも限らない。扶助料などは下らぬかも知れぬが、その時はどうして子供達を養育してゆく覺悟か。

この第二は、將軍が軍旗を失はれた罪を、時機があらば何時なりとも自刄して之を償はうと決心して居られた、その意味があるものと想はれます。

靜子孃はこれに對して、

『妾は家訓に從うて、父母から短刀を渡されて參りました。一旦、乃木家に嫁ぎました以上は、死をもつて女の道を守る覺悟でございます。また子供はたとひ百姓をいたしましても、立派に育てるつもりでございます』

これを聽いて、將軍は莞爾として、初めて固めの杯を上げられたのであります。

明治二十三年、那須野の百姓家を買はれたのは、即ちこの靜子夫人の結婚當日の誓言によるもので、所有者を夫人の名前にしておかれたのも、實にこの爲めであります。

靜子夫人が、この百姓家へ來て、自ら農事に勵まれたのも、夫人の覺悟が決して其場限りの一時的なものでなかつたことを示してをります。

夫人はまた村の人達に對しても、常にいろ〳〵と世話をされ、金なども與へられた。村人が通行に困るだらうというて、小川に石橋を架けられたのが今日も殘つてをつて、村人達はこれを「靜子橋」とよんで、夫人の徳を偲んでをります。

新聞などに憐れな記事など出ると、夫人は名前を匿して金を惠んで贈られた事も度々で、受けた人は禮狀を出すに困つたといふやうな事もあります。

それから大將の御遺言書は、九月十二日の夜、即ち自刄の前夜に認められ、これが靜子夫人宛になつてをりますから、大將は前夜までは確かに靜子夫人に後事を託する考でをられたわけで、從つて靜子夫人もまだ大將自刄の事は知つてをられない事になつてをります。併しこれが大疑問で、私はその當時よりいろ〳〵と研究し、多くの人について事實をたしかめ、最後に本年七月二十一日、世田ヶ谷に大將の令甥玉木正三君を訪ね、終日詳細に質問して、遂に次の如き結論を得たのであります。

夫人が大將の自刄を覺られたのは、八月中旬のことであらう。夫人は大將が毎日書類の整理などをしてをられるのを感づかれ、

『どうも主人は死ぬつもりでございませう』

と、他に洩らされた事實があります。その他いろ〳〵の點で、大將が自刄の覺悟を、夫人は八月中には十分推知してをられたと推することが出來ます。

大將は一代華族論者でありましたが、板垣伯の如く、人にまで勸められはしなかつた。たゞ自分としては、夫人にも親戚の人にも、再三これを明言してをられるし、尚それでも安心が出來ず、平生玉木正之などにも『この事は遺書にも認める』と申してをられた。併し自刄の直前に、これについて一言も夫人に遺



言らしいことは言はれなかつた。

大將自刄の九月十三日には、大將は夫人と夫人の姉上馬場さだ子さんと姪の英子さんの四人で、愉快に午餐を召上がられてゐる。それから大將と夫人は、二階に上つて、明治天皇の祭壇を準備せられたりした後、夫人は明治天皇から賜はつた葡萄酒を取りに下りられたが、それを持つて二階に上られたきり、お二人は二階の戸の鍵をしめ、一切開く事を許されなかつたのであります。

大將はそこで明治天皇御下賜の葡萄酒を陛下の御神前に供へられ、やがてそれを二人で召上つた後、大將は威儀を正し、夫人に對つて靜かに口を開かれた。

『自分はこれより明治天皇の御供をして相果てる覺悟である。それゆゑ、あなたは私の最後の有樣をとくと確かめて、あとで皆に知らせてくれるやうに………』

この時、初めて大將の口から、この大決心を聽いて、普通の婦人ならば、ワーツとばかりに取亂してしまふのですが、夫人はこれをぢつと耐へて、

『御遺言の御精神は、よく守ります。御心おきなく、御安心遊ばして、どうか陛下の御供を遊ばしまするやうお祈り申上げます』と、立派に答へられた。この時の夫人の心中は、實に熱鐵を呑むやうな思ひであつたに違ひない。千々に砕くる胸の思ひ、せぐり來る萬斛の熱涙を靜かに抑へて、かう答へられた夫人の剛毅健氣な有様は、千載の下なほ懦夫をして起たしむるものがあります。

さすがに大將も、この立派な態度に安心して、徐ろに自刃を遂げられたのであります。夫人は大將の最後を十分に見屆けられた後、自分も亦支度をして、從容として大將のあとを追はれたと推すべきであります。この夫人の最後の態度は、實に見上げたもので、男子といへども、能くなし難しとするところであります。尚、この自刃を夫人に確かめしめたには、大將の先生玉木文之進君自刃の時にも實例があります。

噫、乃木大將を助けて、平生貞節の限りを盡くされた夫人が、その最期に於て、この天地を貫くの大人情美を發揮せられ、大將の名をます〳〵發揚さるにつとめられた其心事に至つては、誰か感激熱涙をそゝがざるものがありませう。私はよく靜子夫人を御知り申上げてをりますので、その沈着温順にして、而も心裡に非凡雄大の御氣象を包んでをられた事を深く信じ、こゝに夫人の眞相を世に著はさんが爲め、今日まで苦心して確め得た事實を發表して、世の參考にしたのであります。

（挿畫 ―― 岩田專太郎）

泰西美談　更に千金

一記者

◇更に千圓

フリッツ・ウイリアム公が或年自分の領地であるクム・ウードと云ふ村で狩りを催ほしたことがあつた家來たちの馬に蹂躪されて、可成り畑が荒された。小作人のヨハンはこれでは全く收穫がありさうに思へぬので、公の許まで訴へて出た。

『いくら損害金をやらうか、それは誠に氣の毒であつたわい。』

『へい、恐れ入りますがあの様子では全く駄目かと思ひます、五百圓頂きたいと存じますので、へい。』

そこで公は百姓の望む儘に五百圓渡された。ところが秋になつて百姓は再び公を訪づれて來た。多分あれでは足りないと云うて訴へて來たのであらうと思つた。ところが百姓は、



『すつかり收穫がありますまいと思つて殿様から五百圓頂きましたが、秋になつて豫想外に豐作でして、先づ平年と變らぬ程もありました。そこで五百圓をお戻しに參りました。』

と云つて五百圓をそこに出した。ウイリアム公はヨハンの正直が嬉しくて堪らず。その五百圓は戻すに及ばぬと云つて納めさせ、更らに千圓を持つて來て、

『何と云ふ嬉しいことを聽くことだらう。お前の息子が二十才になるまでこの千圓を貯へておけ、その時に今日の事情を語つて與へて呉れ。』

公の領地には一度も小作爭議が起らなかつた。



義膽の血汁講

本田美禪

是れは什うだ山吹汁

水戸黄門の愛臣だつた千場仁右衛門高義（小性役二百石）が、不意に同僚に書狀を廻はして、『今夜汁講相催したく候ふにつき、萬障お差しくり、御參講願ひ入り候ふ』と申入れたは、黄門死後十二日目（元祿十三年十二月十八日）の朝だつた。

妙な事を申して來たと怪んだものも少なくなかつた。が、その中には故主黄門、在世の折近侍に向つて、むかし汁講といふ事があつた。其れは云々のものであつたと教訓的に話されたのを覺えてゐる者もあつたので、同狀を見た同僚の五分の一ほどの人數は當夜千場方へ集つて來た。中んづく西山で故黄門の家老をしてゐた大森典膳は淚を流してこの仁右衛門の催しを欣びながら第一にその老體を見せたのだつた。

『是れは好うこそ、お若い衆は什うあらうかと案じてゐたところ意外にも多人數參講になるらしい。さア什うぞ』といつて渠は主人に代つて、後から詰めかけた若侍等を一個々々に客間の方へ案内をしてゐたりした。

客間には客に先立ち、既に大鍋に盛られた汁が客に供すべく疊の上に膳部と共に出されてあつた。膳部は客の數だけあるので、鍋を取り卷いて圓陣を作つたやうに見えてゐる。『御老體』と若侍の一個がいつた。『斯やうに客が集つとるに、肝腎の東道役、仁右衛門殿が見えぬのは什うしたわけで御ざいます』

『其れじや』典膳は主人に代つて言譯するやうな調子で答へた。『今ちよつと仁右衛門の書齋の中を覗いたところが、急な病氣でも起つたと見え、藥を服んでゐるやうだつたで、躬は心得て渠に代つて斯く東道役を勤めてゐるのじや。間もなく癒うなつて見えるであらう。まづ其れまでは心置きなく其の酒盃を擧げられい。皺だらけの手でお氣の毒だが、躬が酌をして進ぜるにより』

『是れはどうも痛み入ります』

『あります、あります』などといつて若侍等は恐縮しつゝ酌を受けたが、旺んで飲む氣にはなり得なかつた。

何にしろ膳の上には、箸と椀と猪口があるだけ。下物になり



さうな物といつては、漬物一片もないのであるから、いかに覺悟してやつて來た汁講の席の酒とはいひでう、美くは咽喉を通らないのだ。

『さア食られい、折角の仁右の馳走じや。遠慮をせずにどしどしと賞翫をしてやらるゝが好い。年寄役に躬から初める』といひながら典膳は椀を取り上げて汁を盛いだが、さすがの渠も妙な顔した。いくら掻きまはしても掬ひ上げても、お玉杓子の親方のやう眞黒くなつた杓子の中に入つて來るものは何もないのだ。たゞ汁だけが渦を卷いては、淡く味噌の香を立てるばかりだ。

『うむー成程』負けぬ氣の典膳は覺えず膝を叩いていつた。『是れでこそ御隱居樣（黄門の事）御繁昌の頃我々に御教訓になつた汁講の御趣意にしつくりと適ふといふもの。是れに一かけの豆腐でも入つて居るやうでは本當の汁講といふわけにはまゐらぬ。うん成程。結構結構！』と舌打ちをして啜り初める。

若侍は面を見合つた。いかに亡君の御教訓追憶のための催しとはいへ、山吹汁は感心しない。仁右衞門の奴、何を血迷ひ、斯うまで人を莫迦に

した悪いたづらをするのかと思ふと腹も立つて來る。が、亡君のお氣に入り、西山荘の今大久保と綽名を取つた典膳が美さうにして啜つてゐるので、杓子を執らぬわけにはゆかない。據なく椀に盛ぎ、不味さうにして啜つてゐると東道ぶりといふ考へか、上下をつけた仁右衛門が其所へ摺足で入つて來た。然もその摺足たるや、下手な能でもやるやうに、白足袋を穿いた爪先を鎌首狀にぐいと立てゝは、一足すツと前へ出し、踵を駈と踏み占めて、やゝ少時は其のまゝでゐる。而うして次に他の歩を運んで、また前のやうに暫く佇む。まつたく素人が能の眞似でもしてゐるやうな鹽梅なのだ。

『旨い〳〵、山吹汁で酒を振舞ふ、其の詫として能の眞似して肴に代へる積りと見えるな』

『だが千場氏のは何流だ』

『寶生か金春か、其れとも喜多か、幸若か』

『いや、いや……』と主人は初めた。が、聲調は尋常でない。苦痛に堪へぬものゝやう、體と共に戰いてゐる。『千、千場流だ……』

『ほう、自家發明の舞と見えるな』

『然やう……』といひながら座に就くと、主人仁右衛門は一座の顏を行燈の火をかつてじいつと見廻はす。

集つたのは中村新八、三木陸右衛門、合津恒道、安島彌二郎、興津直三郎、中山本助、雜賀孫市以下十七名、みな黄門甍去の際まで枕頭にあつて忠勤に奉公をした者等ばかりだ。

『か、忝けない、よく各々には參講せられた……』仁右衛門はにつこりしながら、いかにも嬉しさうな調子でいつたが、いふと共に力なく頭をぐつたりと垂れた。

その顏色は眞蒼である。まだ年と二十七才、血氣盛んの若者なのだが、今踏るやうに座についた體一たいに何所となく不斷のやうに活氣が見えない。その上髮もそゝくれてゐる。

身を殺して仁をなす

『什うされた千場氏、今の御老體の話説によると、何か急病との事であつたが、まだ悪いのではないのかな』

『顏色なども甚だ好うない』

『然うだ凄いやうに蒼白めてゐる』と若侍等は、氣支ひながら主人に訊ねた。

『ふ……、腹痛が差し起り……』と千裂れ〳〵に、主人は苦しさうに語り續ける。その兩手では脇腹を揉むやうにして壓迫してゐる。『思はぬ御無禮をいたしたが、何、些との間かうして居ればぢき心よくならうと思ふ』

『無理をするなよ』と典膳は忠告をした。

『は、無理はいたしませんが、然し折角の東道ぶり……。其れに明日は御隱居様おん二七日の御忌日でもある。旁々ふつと思ひつゞけてな、この計講を催したのだが、是れには深い仔細があるので……』

『ほう、什ういふ?』

『然し恐ろしい腹痛らしい』

『お身の胸中は分つてゐるゆゑ、話說は期して行つては什うだな』

『否々……』と仁右衛門は頭を振つて、『實は御隱居樣お隱れの翌日あたり行らうと思つて、同狀までも認めたのだが、お隱れ早々……、其れは却つて好うないと存じて日延いたしたわけゆゑ、御迷惑でも今日は是非お耳を貸して頂きたいのだ』

『什うやら譯がありさうじや。まア飲みながら聞かうでないか』といひながら典膳は、手酌で注いでぐつと呷つた。何にしろ極月中旬、寒さは殊に激しい上に、風も凄まじく吹いてゐるので、室内でも坐つてゐると、膽は自ら顫へて來るのだ。

『今さら申すまでもなく……』低く聲で主人は續けた。『この講は御隱居樣、御繁昌の節、我々に奢りの沙汰に及ばぬやうにと御敎訓になるお思召にて一度お催しあそばした……あの眞似事をいたしたわけだが、然し各々には永劫未來せめて月に一回ぐらゐは續けて行つて頂きたいのだ』

『よし分つた』

『亡君の御遺志、其れをお繼ぎ申さうといふのがお身の考へなのだな』

『然やう!』と仁右衛門はしつかり頷き、『今夜御參講のお人の中には、あの雪の降る寒い夜に、宿直の勞をお慰め下さる思召して下された粥と未味噌とを頂いたお顏も見えて居るやうで、お話し申すにも張合がある。で、何も斯も包まずに、みな打ち明けてお聞きに入れるが、實はあの晩……、拙者の頂いたお汁の中には、小判が五枚入つてゐたのだ』

『ほう!』と客一同に覺えず眼を剝き、『では本當の山吹汁だな』

『然やう……』仁右衛門ははら／＼と落淚しつゝ語り續ける。『で、拙者も太く驚いたのだが、同席の衆の思惑もある。什ういふ思召であるかと思つて、眼色をもつて伺ふと、汝に遣はす——と矢はり御眼色での仰せであつた』

『其んな事があつたのか』

『拙者はとんと氣がつかなかつた』當夜仁右衛門と同席してゐた若侍は呟き交はした。

『は、恥を申さぬと分らぬが……』と主人は續けた。『實は拙者その晩は、食事を取らぬこと二日目の……もう什うしても人並には御殿の中を歩くことさへ出來なくなつた折柄で、今夜の御奉公の濟み次第、歸宅して切腹を……妻子も共に刺殺し……と覺悟をして居つた時だつた』

『…………』

意外の述懐に一座の者はたゞ啞然として面を見合つた。千場仁右衛門の貧乏は成程有名なものではあつたが、二日間も食事を執らぬ。然もその饑餓に耐へ得ず、自身は切腹、妻子は刺殺して窮乏の苦から遁れんとしたといふ、仲間小者ならいさ知らず、二百石も頂戴してゐる立派な武士の家庭において、そんな事が實際にあり得ようとは思はれないのだ。

『で、其の時の難有さ！　且つその汁の旨さつたら……』
『待て』と典膳は覺えず停めた。『お身の貧乏は評判で、我等初め御家中一統知らない者はないのだが、贅澤をするお身でない、心がけもまた人に優れて諸事に儉約をして居つた。其れに何で二日も食事を……、剩さへ妻子まで……といふやうな氣を起したのだな』



『この次の御扶持米、頂戴するまでの用意には無論何がしかの金子を殘して、妻に遣はして置いたのでしたが、其れを盜賊にしてやられ』
『何ッ？』
『油斷千萬』
『いや』仁右衛門は靜かに抑へて、『油斷といへば武士の住居へ夜中盜賊に踏込まれたのは油斷に相違御さいませんがな、拙者は直に引つ捉へ、窮命をしてやつたのでした』
『では何で金を取られた？』
『さア其所です』と仁右衛門は沈痛な、然し何か會心な事でもあるやうに蒼白めた面にちよつと微笑を湛へて、戰く聲で語り續ける。『で、引ツ捕へて責めて見ますと、實は年來の奢りのために、もう什うしても御奉公さへ……』
『賊は侍であつたのか』
『否！』仁右衛門は慌てゝ云ひ消し、『侍ではなかつたのだが……、兎も角も困窮の極、今はもう一家六人、餓死する外に道はない、親を殺し、妻子も殺して……と思つたことも度々あつたが、其れもまた餘りに非道――といつて什うにもならぬ。萬策盡きてのこの盜み！　さア成敗をしてく



れとさすがに武士の清しい云分、拙者も感じ入つたのだつた』

『矢ッぱり武士であつたのか』

『よも御家中の者ではあるまい。遠慮をせずに名前をいはれい』

腹帯には滴る血汐が

『今のは誤り……』仁右衛門は頭を振りつゝ、『でその罪を咎めずに、妻の財布から金子三兩――其れは有りッたけの身代だつたが、思ひきつて妻に出さして、その夜その者に與へてしまつた。その結果として拙者自身は、どうにもならぬ窮乏の底に陷つてしまつたわけだが、借錢をするわけにもまゐらず、爲ようと思つても貧乏で評判取つた拙者の事だ、出來ぬのは分つてゐるので、六人の者を助けた代りに、拙者一家三人が命を捨てる覺悟をしたのだ』

『身を殺して仁をなす。さすがに仁右だな』典膳は感嘆しながら、溢れさうになつた水涕を掌をもつて慌てゝ撫でた。

『其所へ案外な君の賜物！夢ではないかと欣んで翌朝家へ歸つたのだが、今日こそは刺し殺し……と思つた妻子が、拙者と同じ様に飢挽い腹を抱へて玄關へ出て來た時には、感極つて涙が溢れた！』

『然うだつたらう成程』

『御隠居様はお胸の中ではお身のした事を知つてゐたのか』
『否々』仁左衛門はまた頭を振りつゝ、『お知りになろう筈はない。たゞ淺間しい拙者の樣子で、評判の貧乏の仁右！　可哀想にこの頃は食事も執らず出仕するのか。然う思召しての御仁慈、唯々家來不愍とのお心から出た賜物に相違ないことは分つてゐるので、拙者はいつそ難有く、この御報恩にはたゞ一死――勿論武士は誰にしろ一死をもつて御奉公申し上げることは分つてゐるが拙者は殊に然うせねば……と思つて居ると今度の御薨去！　どう跪いてもこの世ではもう御奉公の出來ない所へ御動座になつてしまはれたのだ』
一座の者は暗然として覺えず深く頭を垂れた。感激に次ぐ感激に打たれて渠等一同はもう息さへもつけぬのである。
『で今生の思ひ出に……』戰く聲で主人は續けた。『今もちよつとお話說したやう、亡君御存生中に我々の奢侈を戒める思召にてお催しになつた汁講を、將來月に一回ぐらゐは是非一統にて催して頂くやうにいたしたく、その見本として今夜拙者が……唯一味だけ身を入れたこの味噌汁を差し上げたのでな、お口には合ふまいが、どうか存分にお行り下さい』
『忝けなう頂戴してゐる』
『だがお言葉の身は何もないがな』
『然うだ、先刻から交る〲に搔き廻はして見てゐるのだが、山吹汁で何の身もない』
『では溶けたものと相見える』仁右衛門はにんわり笑つた。

『溶けたにも溶けぬにも、どう探しても何もないのだ』
『其れとも氷でも入れたのか』
『氷なら何所にでもある』
『而て一文も錢は入らない。成ほど是れは思ひつきだな』
『…………』
『仁右！』と典膳はいきなり呼んだ。渠は先刻から主人の樣子を怪しむやうにじつと見てゐた。考へながら見守つてゐた。其れが今何事か氣がついたやうな面色すると、覺えず聲を揚げたのだつた。『躬にはお身が何を入れたか、凡そ見當がついてゐる。その胸を寛げて見られい、いやその帶を解いて見られい』
『…………』
『天晴れなことをお身は行つたな！』典膳は眼に涙を湛へて、『先刻からの樣子が可異い、息づかひといひ顏色といひ、唯の腹痛とは違ふと思つて俩は注意してゐたのだが、今やつと合點がいつた。御禁制の君への殉死！』
『むッ？』愕然として若侍等は面を上げて主人を眺めた。三十四個のどん栗眼は、みな一樣に見張られてゐる。
『生きながら腹の血を……、喃う然うであらう』といふかと思ふと、膝をもつて典膳は疊の面を刻み立てつゝ主人の側へぐいぐいと寄り、『この胸を寛げて見られい、いやこの帶を解いて見られい』
『ち、違ひます……』いひながら仁右衛門は齋典膳を靜かに押し退け、『御禁制の殉死など……然やうな事はいたさぬが。然し

し、拙者御恩に感じ、忠義を辨へた武士ならば、冥土黄泉のお供をば……と思つた事もないではなかつた』

『むゝ成程！』

『だが其れは御禁制、愜はぬ事と諦めて、たゞ汁講に一念を……、もし出來ることならば、切腹をして腹の中から五臓六腑を摑み出し、細かく切つて汁の身に……而うして其れを啜つて頂き、末代までも汁講の記念のために殘さうと考へたので御ざいましたが……は、は、は』と仁右衛門は特更に、笑はうとしたが笑へなかつた。事實は既に典膳の推測どほり行つてゐるので、しつかり締めた腹帯には滴るやうに鮮血がもうずつくりと廻つてゐるのだ。『人間といふは弱いものでな、この腹の皮一枚切ると、もう其れぎりで中の臓腑を摑み出す氣は亡つて……力もぐつと衰へて、お恥かしいが歩く元氣もないやうになつてしまひましたわ』

『恐れ入つた仁右殿！』典膳は疊の上へ兩手を支いて落涙しながら、『お身なればこそ命を贄にこの汁講を思ひ立ち、一藩の士の奢侈の風儀を……いやもう何も申すまい。たゞ今の世に聞きも及ばぬ忠誠無二の血汁の振舞！　躬は愼んで改めて――御家中一統に成り代り心にしめて頂戴をする。さア各ゝ』いひながらまた元の座へ戻つてしやんと坐り直すと、渠は恭ゝしく椀を執り、『仁右殿にあやかるやうに存分頂戴をしようでないか』

『は……』

『驚いたな切腹の生血が中に入つてゐるとよ』

『大變な物を先刻からちう／＼やつてゐたものだつたな』とお侍等は、心で舌を卷いたのだつたが、箸を措いた者は一個もなかつた。

主人仁右衛門は滿足さうに身動きもせず其れを見てゐた。行燈の火は丁字の加減か、先より少し暗くなり、唐辛子のやうな焔の先から、油煙を眞直に起てゝゐた。

（插畫――小山榮達）

海外通信

米國へ來て！何處に邦人を訪ねても講談社の雜誌を讀まぬものはない

私は櫻府、桑港、ロスアンゼルス、市俄古、紐育と各都市を歴訪したが、日本人の住めるところ貴社の雜誌を講讀せぬ家は一軒もない有樣に一驚を喫しました。殊にロス市のやうに邦人の三四萬も集合せる處には邦人の書店が六軒もあり、或る書店の如きは毎月一千冊のキング六百冊の講談倶樂部を賣り上げてゐます。紐育市のさる日本雜誌取扱ひ店ですらも、キング・講談・婦人倶樂部は二百册以上も賣り捌いて居り、全く他社の雜誌は問題にされず貴社のもの許りが大歡迎の有樣です。講談社の雜誌は澤山取り寄せさへすれば益ゝ賣行が增大することは判つてゐるが、米國からは殘品の返品がきかないので極く內輪に見込んで註文してゐますが毎號增える一方ですと、ロス市の書店では語つてゐた程、貴社の諸雜誌の人氣は大したものです。面白くて爲になり、隅から隅迄無駄のない編輯振りは在米邦人が異口同音に賞讚せるところです。（在米、岩崎英爾氏より）



物言はぬ花

南國太郎

ナポレオンの時代である。

シャルネーと云ふ紳士が、或る嫌疑から罪無くして囚はれ、不幸にも明かしを立てる事が出來ず、牢屋に打ち込まれてしまつた。

初めは此の世に神があると云ふ事は嘘ではないか、あらゆるものを呪へと云つた氣になつた。併し、根が善良な人だつたので、總てを運命と諦めて、一切から捨てられ去つた牢獄の生活に、親しむとも無く親しんで行つた。每日囚人は、一定の時間散歩を許される。と云つても、それは本當に狹い中庭を、敷石傳ひに歩かされるのに過ぎ無いので、何の事はない動物園の熊が、檻の中を右に行き左に行きすると同じだつた。

或る春の晴れ〴〵した朝、いつもの通り敷石の數を數へて居ると、石と石の間から土がほんの少し、高くなつて居るのを見つけた。

『何だらう？』



每日それを見るのが樂しみだつた。殊に讀みたくも書物も無く、話したくも對手の無い彼れには、そんな變化が非常な興味だつたのである。幾日かたつて、それは何か

の種子が風に運ばれて來て、芽を出したのであることが解つた。一日、一日、牢獄にもこればかりは齊しく射す春の陽を浴びて、芽は伸びる。彼れは可愛いくてならなかつた。其の爲には、いかにも恐しさうな看守にも、あの芽を踏まないやうにと頼んだ。看守は笑つた、そして喜んで彼れの頼みを聽いた。

彼れは此の芽生えたものゝ名を知らなかつた。で、勝手に『ピシオラ』とつけて、此の世の唯一の者のやうに可愛がつた。一と夏で五六寸にも伸びたピシオラにも、冬が來た、彼れは、毎日與へられる寒さ凌ぎの僅かばかりの薪を割いて、道具が無いので手を血で汚しながら、ピシオラの爲に寒さ避けを拵へて遣つた。一日だつて、ピシオラの側へ行つて、見てやらぬ日は無かつた。

二度目の春が來た。

ピシオラは、小ひさい葉を出し始めた。彼れは嬉しくてならない。限られて貰ふ飲水さへ割いて遣つた。やがて蕾を持ち、小ひさい花が咲いた。物言はぬ花である。彼れの喜びは、此の花を見て頂上に達した。

『ピシオラよ、何てお前は可愛い花をつけたのだらう』

物言はぬ花は、微風に、さも頷くやうにそよいだ。

處が、或る朝見ると、ピシオラは急に弱り出して居る。何うしたのだらう、彼れは心配で〳〵、居ても立つても居れなかつた。で、看守にもよく見て貰つたら『これは段々大きくなつたので、石の間に挾まつて居る事が、木を弱らせるやうになつたのだ』と云ふ事だつた。

——敷石をピシオラの爲に動かす！　これは何うも囚人の彼れには出來ることでは無かつた。

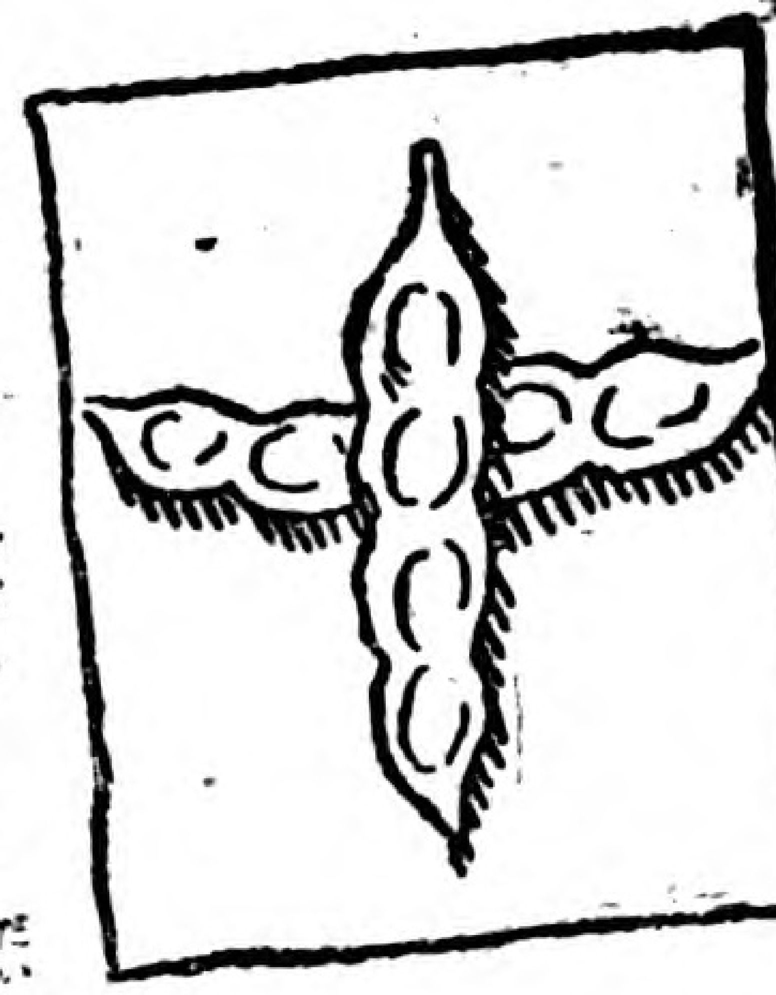
何うしたらよからう、ピシオラが枯れる、夜の目も寢ずに案じた揚句、思ひ切つてナポレオン皇帝に嘆願書を出した。『可憐なピシオラの爲に、牢獄の敷石を少しばかり動かさせて下さい』それが願ひの全部だつた。

佛蘭西に囚人は多いとは云ひ、まだ斯う云ふ嘆願書を出したものは無かつただけに、眼についた。やがて、其の話が皇后の耳に這入ると、

『一木一草をそんなに可愛がる人に、悪人は無い筈。無論願ひの筋は聞き屆けると同時に、特に出獄を許して遣れ！』

との沙汰が下つた。彼れは、ピシオラと別れて牢獄を出るのが悲しくてならぬ一方、出獄の喜びをピシオラの賜物とより思へなかつた。（挿畫——野崎貞雄）





義民の典型

加藤武雄

若狹の國の村々では、大豆をとりいれると、毎戸、まづお初穗としてそれを祠棚にあげる習慣が今に續いてゐる。祠棚に松木莊左衞門の靈が祭つてある。大豆のお初穗は、その莊左衞門の靈に捧げるのである。

若狹は米がとれないで大豆がとれる。それで、昔から年貢には米の代りに大豆を納めてもいゝ事になつてゐた。慶長五年、木下氏に代つて京極氏が領主になると、築城其の他の爲藩の財政困難の結果、年貢增徴といふことになり、今まで四斗俵であつたのを、四斗五升俵と改めた。他にも種々の名目でとり立てられてゐる上に、この增徴はやりきれない。もと通り四斗俵にして貰ふやうにと度々哀願したが、領主の方では一向受附けなかつた。そのうち、京極氏轉封となり酒井氏の治世になつたが、相變らず百姓共の訴へは聽かれなかつた。生活は益々苦しくなるばかり、彼等の忍從も既に限度を越えた。そこで國中各郡村の代表者たちが集まり、減租運動をはじめたが、その時、たつた十六歳で庄屋役になつてゐた松木莊左衞門はその村の代表者として集會の席に列なる事になつた。十六歳の庄屋そして村の代表――莊左衞門が凡物でなかつた事はこれでもわかるが、その國中大集會の席上でも、莊左衞門は衆望をあつめて天晴その指導者となつた。すなはち、莊左衞門の發議により、嘆願書を認めて總代を以て郡代役所に訴へ出るといふ事になり、莊左衞門はその總代の筆頭に選ばれたのであつた。

さて、莊左衞門を初めとして、松宮文太夫、玉井喜太夫、松宮小次郎太夫等以下二十餘人の總代は郡代役所に出かけて嘆願書をさし出したが、役人共は僭上至極の沙汰として嘆願書をそのまゝ突返してしまつた。莊左衞門等はその後、倦まず屈せず歎願書を出す事數十回、歳を閱する事九年に及んだが、その泣血の訴へもたゞ馬耳東風と聞き流されるばかりだつた。そこで、莊左衞門は總代等を引連れて郡代役所に至り、これを最後の陳情を試みて、これほどの願ひをおとりあげ無いとは、おそれながら天下の政道にも悖る儀と存じまするとまで面を冒して云ひ切つた。役人共は非常に立腹して、二度と訴へ出たら牢へ入れるぞと云つて追ひ返してしまつた。

そこで莊左衞門は、今はもう尋常の手段では駄目だと思ひ定

め、ひそかに劃策するところがあつたが、役人共はその氣配を知ると、あべこべに捕手をさしむけて各村の總代を召捕らせた。威嚇を以て未然に事を防がうとしたのである。捕吏が、莊左衞門の家を襲うた時、莊左衞門は、母をなぐさめるために謠曲の田村を歌つてゐたが、從容として捕吏に向ひ、お召捕とあれば止むを得ませぬ、いかにもお繩を頂戴致しませうが、この謠曲の一くさりを歌ひ終るまでお猶豫を願ひたいと云つた。捕吏も人の子である。いさゝかは物の哀れも知らないではない。いかにも許してやらう、早く歌つてしまへと云ふ。莊左衞門は、やをら聲を張りあげて歌ひ續ける。今、牢へ引かれたらいつまた母上と相見よう、これが一期のお別れかも知れぬと思へば、聲はともするとかなしみにわなゝく。わなゝく聲を押ししづめて莊左衞門は朗々としてその一曲を歌ひ終つた。



莊左衞門は孝子であつた。老母の膝下に奉養するは孝子の願ひである。しかも一人の母の爲の此の身であらうか？　孝子の情は殺しても、衆に殉ずるの義は捨てゝはならぬ。莊左衞門は淚を振つて母に別れ、捕吏の縛を受けて小濱城の獄にとおくられたのであつた。

役人共が彼等を獄に送つたのは、一つの威嚇政策に外ならなかつた。獄中の生活は、彼等の勇氣をにぶらせ、彼等をして所詮は屈從の己に利なるを喩しめるであらう？　この役人共のもくろみは着々と功を奏した。囚禁一年に及び二年に及ぶうち、彼等の多くは、前非後悔の旨を述べて出獄の許しを得た。しまひには、獄に殘る者、莊左衞門の外には、彼の最初の發頭人文太夫、喜太夫、小次郎太夫の三人のみとなつた。が、その三人さへ、最後までは堪へ切れなかつた。最後には莊左衞門唯一人、あくまでも願意をひるがへさず、頑として獄中にとゞまつた。

莊左衞門は獄中にある事實に五

年、あらゆる淩虐の間に、口の爛れるまで減租の願ひを繰返して止まない。その思ひ込んだ一念は、さすがに無慈悲な領主をも動かさずには措かなかつた。荘左衛門の願ひは遂に肯かれる事になつた。四斗五升俵をもと通り四斗俵にといふ事になつた。が、一方願ひを容るゝと共に、一方、我意につのつて、上を憚らぬ强訴の罪許し難しとあつて、荘左衛門に嚴刑を課する事となつた。

荘左衛門は白洲に引出された。磔刑が宣告された。荘左衛門は覺悟の前だからびくともしない。が、命に換へた此の願ひは一體どうなるのか？　願ひは容れられず、自分の死は遂に犬死に終るといふのか？——が、役人は、その宣告の後に荘左衛門に云つた。

その代りよろこぶがいゝ、お前の願ひはお取上げになつたのだ。

荘左衛門の、青ざめ骨立つた顔には曙光のやうなよろこびの色が輝いた。彼は、白洲の砂に額をおしあて、淚を流して云つた。ありがたうございます。私の十有餘年の望みはこれで遂しました。望みが遂しました上は、たとへはりつけだらうと火あぶりだらうと些とも厭ふところではありませぬ。荘左衛門はよろこんでお仕置になります。ありがたう御座います！



日笠磧といふところで、荘左衛門が磔の刑に行はれたのは、承應元年五月十六日の事であつたが、その日、若狭全國の老若男女はわれさきにと刑場目蒐けておしよせた。荘左衛門様はおれ達の爲に殺されるのだ！　せめてお別れを申上げいでは——と、竹矢來の外圍に怒濤のやうに寄せて來た群衆は皆泣いてゐた。

空は晴れてゐた。夏の日は激しく照つてゐた。もく〳〵と湧く雲の峯を背景に空高くおし立てられたはりつけ柱には、白裝束の荘左衛門が十文字に縛りつけられてゐる。長牢のやつれに眼窩は落ち頰は殺げてゐたが、その眉は明るく、その眼は冴々と輝いてゐた。

莊左衛門樣！
莊左衛門どん！
──群集は、かう口々に呼びながら、皆涙を流した。嗚咽の聲は籟を成した。

その時突如として磔柱の上から莊左衛門が叫んだ。

『皆の者泣くな！　歎くな！　莊左衛門はよろこんで死ぬのだ。よろこんで哭れ、おれの爲に、そして皆の者自身の爲によろこんで哭れ！』

呼びかけた群集は、涙の瞳をこらして磔柱の上を見上げる

『おれは死ぬるぞ。その代りは豆の俵は四斗でいゝぞ！　四斗五升納めるには及ばぬ事になつたのだぞ！　おれ達の願ひは許されたのだ。十幾年の望みが叶つたのだ。よろこべ！　よろこべ！』

群集は、今はじめてその吉報を聞いたのだ。おう！　おう！



と歡呼の聲が嵐のやうに起つた。

が、そのうちに、刑吏は槍をしごいて左右から突きかゝつた。それを見た群集の口からは再び嗚咽が迸りやがて號泣の聲となつた。歡呼の聲と號泣の聲とがいりまじる不思議などよめきを最後の耳にきゝながら、莊左衛門は唐紅となつてはりつけ柱の上に死んだ。

江戸に在府中の領主酒井忠勝からの、助命の急使が飛んで來たのは、それから間もなくであつた。もう少しその使が早かつたら、莊左衛門は殺されずに濟んだ。が、莊左衛門には生も死も問題ではなかつた。

多く讀んだ義民の傳の中でも、この松木莊左衛門こそ、最も典型的な一人だと思ふ。すなはちこゝに簡單にその義烈の生涯を紹介した。（插畫――幡恒春）

◇　◇　◇　◇

○小人は已あることを知つて、人ある事を知らず、已に利あれば人を傷ふ事をも顧みず、近きは身を亡し、遠きは家を亡す。（熊澤蕃山）



一寸鑿の榮次郎

工學博士 田中龍夫

野天の生活

頃は明治の中葉、越中高岡市の北郊、櫻の馬場の土手蔭に、筵を敷いて、名ばかりの天幕を張り、包を抱へて見すぼらしい生活をしてゐる親子三人の家族があつた。身の丈スラリと高く人品卑しからぬ男と、その妻子とであるが、こゝは學生達が好んでする富士山麓などの天幕生活とは事違ひ、人家も繁き高岡市のこと、往來の人達が不審の眉をひそめ、この見窄らしい一家を流眄に見て通るのも無理はなかつた。

何しろ、外敎に對する反感の猛烈を極めた時分のこととて、基督敎の傳道者として立つた彼は、到るところで攻擊迫害をうけ、遂にこの高岡へ入り込んで來たのである。初代の傳道者として、彼は身延に近き甲府に於て、或は加賀の金澤に於て、つぶさに辛酸を嘗めた彼は、今や高岡敎會を開拓すべく、この地へ遣はされたのであるが、こゝでも彼は又容易ならぬ試練を受けなければならなかつた。

彼の一家は、宿屋を本據として、傳道すること三月に及んだが、

『そんな國賊の耶蘇なんぞに宿をかしておくからには、火を放つて燒いてしまふぞ』

と、近所近邊の協議に、宿屋の主人もたまりかねて、遂に彼に立退きを迫つた。と云つて、高岡市中に彼耶蘇坊主に家を貸さうといふものなど一人もない。無論一夜の宿を供しようといふ篤志家のある筈もない。野天生活は彼の餘儀なき運命である。彼の一家はかくしてたうとう櫻の馬場の土手蔭へ野宿をすることになつたのである。

宿攻め食攻め

この流浪の一家を宿攻めにした高岡市民は、尙も進んで彼を食物攻めにしようとするのである。米屋も魚屋も八百屋も、彼の一家には一品でも賣つてはならぬ、もし惠むものがあつたら、如何なる私刑を加へるか知れぬといふ有樣である。これが親鸞門徒の熾んなる高岡市の人ごころかと非難してはならない。凡そ日本中到るところ、否世界に於ても、外敎に對する反

惑は、こんな生やさしい事ではなかつたのである。神の使徒たるまた難いかなである。

併しいかに新しき精神に燃えた傳道者であつても、食はずに傳道は出來ない。彼は二里半を離れた小杉といふ町まで行つて、やうやく米味噌などを買つて來て、纔に飢渴を凌いだこともあつた。

食物攻めにあつて、見すく\餓ゑ死ぬぐらゐならば、いつそ一思ひに彼等の刄の下に斃れた方がまだましだと考へた彼は、一日、魚市場へ出かけて行つて、そこの流し板の上に胡坐をかき、

『お前達はあくまで申合はせて、わしに食物を賣らないといふなら、賣らないでもいゝ。その出刄庖丁で一思ひに殺してくれ。さア一時も早く殺すがいゝ。』

と、怒鳴り立てたこともあつた。しかしそんな事ぐらゐで、不賣同盟が破られるわけもなく、櫻の馬場の乞食生活は、依然として其の日の煙をさへ立てかねたのである。いや、乞食には食を與へられるが、この天幕生活者には、それが與へられないのだから、たゞ餓死を待つばかりの見じめさであつた

義俠の一言

すると、天幕生活をはじめた九日目の夕方に、折からこゝへさし掛つた四十歳あまりの一人の男があつた。見れば、肥え太つた、腹の大きい職人風の男であるが、この見すぼらしい一家をじろり流眄に見て、行き過ぎたかと思ふと、何と思つたか、また引返して來て『お見掛けするところ、別にこのやうな活をなさる、卑しい御容子でもないやうだが、何か仔細があつて、こんな佗住居をなすつてござるのですかい』

と、問ひかけた、そこでこの傳道者は、これまでの一伍一什を打明けて語つた。

これをぢツと聽いてゐた件の男は、しみじみと彼等の樣子を視てゐたが、いかにも感にたへたやうに、

『お話でよく解りました。どうも實に感心な話だ。よろしいわしが引受けた。わしはこの市の淺野榮次郎といふ宮大工です。貴方達も雉子や山鳥ぢやあるまいし、いつまでも堤下に巣喰つてるわけにもまゐりますめえ。よろしい。市の者達が何と言はうと、このわしが引受けた。御心配なさいますな。すぐわしと一緒にお出でなせえ、及ばずながら、わしがお世話をして上げます』

と、義俠の一言。これを聽いて、さすが鐵石の如き信仰心に燃ゆる傳道者も、思はず見えや外聞を忘れて、男泣きに泣いた。大きな聲をあげて男泣きに泣いたといふのも、決して無理ではなかつた。妻ある人が手を合せて感激の涙にくれたは言ふまでもない。頑是もない男の子までが、うれし泣きに泣いた。

この榮次郎こそは、「二寸釘の榮次郎」と謳はれ、全身これ義俠心にもゆる男の中の男であつた。

高岡教會の起源

かれ榮次郎は、この異教の傳道者を己が舊旅屋門前町の住居に案內し、こゝに住まはせて、一切の世話をする事になつたが、榮次郎は早速宮大工なる己が仕事場の一部に手入れをして、こゝに即席の講義所をこしらへ、日曜日毎に己れは門口に立番をして無頼の徒を制しつゝ、人々を呼び集めては說教のためつくしたのである。

そのうちに、彼も一念發起して、こゝに新しき基督信者となり、一家改宗して、熱心に教のために奮鬪し、宮大工なる彼の家は、そのまゝに神聖なる會堂と化したのであつた。これこそは高岡市のメソヂスト教會の起源であつて、この試練に惱んだ傳道者は誰あらう、後日外國宣教師と緣を切つて、純日本式に矯風事業のために東奔西走日も亦足らざる山崎久吉翁その人である。



昔、エペソのデメテリヲといふ宮職工は、エペソの女神デイアナの銀龕を造り、少からず懷中を肥やして居つたが、圖らずも當時入り來つたキリストの使徒パウロの傳道が、彼等偶像の宮職業に不利を來すと見るや、卑劣にも職工共を煽動して、一大騷動を起して、パウロの傳道に妨害を試みた。こゝに同じ宮職人である我が高岡の二寸鑿の榮次郎君は、神佛の道具を造つて渡世としてゐながら、道に殉ずる傳道者の熱誠に奮起し、純なる義俠の一念より基督教の味方となつて、道のために盡すに至つた。己が家業の仇敵とも見えし異教を助けて、己が家業の衰へゆくをも意に介せなかつたばかりでなく、遂に己が一家をあげて、傳道所と變ぜしめたが如き、實に語り傳へて美談とするに足るではないか。

（挿畫——湾部審也）



大慈大悲涙小町

川上三太郎

母の胸の秘密──

涙小町──のお話をしませうか？

涙小町といふのは震災前下町の或る何だか文明開化といふやうな字を想はせる洋風建の劇場の賣店の一人娘で、名前をお靜といふ本當に溫和しい純下町風の娘でした。母子二人暮しでしたが、此の母親といふのが至つて慈善家で、近所に貧しい者や可哀さうな病人でもあると、必ず母子で尋ねて行つては親切に面倒を見たり、金を惠んだりして居ました。それ許りか每朝新聞で哀れな一家だとか、親孝行の夕刊賣だとかいふ、世の氣の毒な人たちの悲慘な記事を讀む度に、涙をこぼしては必ずその都度新聞社へ宛てゝ、惠み金を送るのでありました。但しそれは五十錢と額は定つて居りましたが、一回や二回ではなく殆ど十七八年續けて、天災地變、人の不幸のその度に、必ず寄金をするのでした。それで人々は賣店は菱の家といふのでしたが、その情け深く涙脆いところから、誰言ふとたく涙菱──と綽名をつけ、美しい娘のお靜をその儘に涙小町──と評判したのでありました。

ところが此の涙菱の母子に一つ合點の行かぬ妙な事があるのでした。それは芝居が夜の十時から十一時に終ると、大槪他の賣店の人たちは店もそこ〳〵に疊んで急いで我が家へ歸るのですが、此の母子はそれから何處で何をして來るのか、必ず家へ歸るのが十二時過ぎでした。時には一時近くになる事もあります。初めは近所の者も不審がりましたが、

『屹度何處かお詣りでもして來るのだらう』

といふ事に一決しました。然しこれは本當の事をいふと當の娘自身にも解らないのでありました。即ち母は店を仕舞ふと彼女を連れて濱町河岸を一廻りするのでした。たゞそれだけでした。但しそれは暢氣に散歩をするのではありません。母は一歩一歩を靜かに深く刻み足で踏みしめ、踏みしめ行くのでした。お靜は最初これは何か母が祈念を籠めて居るのだらうと思ひました。元より母に敬虔な彼女は母を疑ふ氣は更に起りません。

斯くて物心がついてから十年餘、彼女は母の後からつゝましく靜かに、只の一夜も忘らず從つて行くのでした。母の此の夜あるきの秘密は、一體何でせうかしら……。

雪の夜がたり——

さてその年も不景氣に加はる歳末の愈ゝ明日は大晦日と押し詰つたその前日、それは朝から空どんよりと灰色の、まことに陰慘な日でしたが、晝頃から霏々として降り出した雪は、見る見る牡丹の花片のやう。既や灯ともし頃には往來の人もぱつたり途斷え、その夜の更けるに從つて濱町河岸は犬の子一匹見えませんでした。



然し此の日も母子は芝居が終ると例に依つてその牡丹雪を踏み分け踏み分け、堀沿ひに淡島樣の方へ歩いて行つたのでありました。するとお靜はフト河岸場に蹲まつて居る一つの人影を見つけました。

『お母さん!』

と密と指さすと、母は夙に悟つて居たと見えて靜かに娘を制し、自分は足駄を脱いで足袋跣足となり、息を殺してその人影の方へ近づいて行きました。そしてお靜が思はず、

『あれ!』

と聲を上げて走り寄つた間一髪! 辛うじて母親の手は件の人影の帯際を捉へ、二三歩よろ〳〵とあとへよろめき、その儘ばつたり倒れました。それは一人の女が雪の大川へ身を棄てようとする危い瞬間の出來事でありました。

死なうとした此の女の物語は直接此の話に關係がありませんから略します。たゞ最後に彼女の母親の懷中から百圓といふ金が、此の女に惠まれた事をつけ加へて置くと同時に、永い間母親の胸に隱されて居た一切の秘密が、その翌日即ち大晦日の晩に、初めて娘に打ち明けられた事を申し添へて置きます。

その夜お靜は近所の髪結から水の垂れるやうな見事な島田に結ひ上げて我が家にいそ〳〵歸つて來ました。さうして火鉢の上へ彼女の白い手がかざされた時、じつとその手の上へ自分の手を重ねながら、靜かに母親は物語つたのでありました。

『――お靜や、お前今日までさぞ不思議だと思つたらうね。それでもよく默つてお母さんと一緒に努めて呉れました。私は始終お前が一緒なので何んなに心强かつた事か。お靜や、私が每晩每晩あゝやつて濱町河岸を歩いて居た理由は、あれは私の御兩親――つまりお前のお祖父さんお祖母さんの生前の遺志を繼いで、實は身投げを扶けるためだつたのだよ。さうして昨夜到頭その望みが叶つたのだよ……』



身投げを助ける爲めに――お靜は思はず母親の顏をじつと見詰めました。

一足ちがひで――

母親の話は續きました。

『明治御一新の時隨分苦勞したお祖父樣夫婦は、世の中が靜かになるにつけ自分たちも餘裕が出來て世帶も樂になり、月々幾何か殘るやうになつたのです。然し何と言つても殺伐な時勢をずつと潜つて來た故か、何うしても人の思ひやりとか同情といふ念に薄く、やゝともすれば自分たちの安全、自分たちさへといふ事より外は考へなかつた。ところが或る晩何か用達で遲くなつた揚句、兩國で一口飮んで一杯機嫌で矢の倉河岸まで來ると、矢庭に身を投げようとする男があつたのださうです。霧の深い人通りのない夜で、助けたのは番頭風の男。死ぬ理由を聞いて見ると何でも五十圓とかのお金がなければ――といふ切迫詰つた話。その當時の五十圓といへば大したお金で、それはお祖父さんだつて家へ歸れば有るには有るのだけれども、何だかそのお金が出し度くなかつた。つまり散々苦勞に苦勞をし拔いた血と汗のお金だから、お祖父さんは惜しくつて〳〵出し切れなかつたんだねえ。そこで懇々と意見をした揚句、懷中から銀貨を一つ、五十錢惠んだのさ、その男は只俯向いてお祖父さんの後姿を拜んで居たさうだつたよ。

此方はお祖父さん、さて家へ歸つてつく〴〵考へて見ると何うも氣懸りで仕樣がない。何だか佛作つて魂入れず、自分の助けかたが本當でない。年甲斐もなく行き屆いて居ないやうな氣がする。そこで五圓紙幣を十枚、膝の上へ並べて切りに思ひ惱んで居るお祖父さんの樣子が、何うも可怪しいのでお祖母さんがその理由を聞いて見ると、實は是々しかく〴〵――それぢやお祖父さん、お前さんが不可ない。それぢや何にもならないから早くその人を――といふ一言で、元より實はその氣になりかゝつて居たお祖父さん、早速その紙幣を摑むとその儘、取つて返した矢の倉河岸……。』

『まあ、お母さん！』

『……ところがそこにはもう誰も居なかつたんだよ。猫の子一匹居なかつたんだよ。お祖父さんは氣狂のやうになつてね、河岸中を這ひ廻つて彼方此方泥塗れになつて探したんです。一晩中探したんです。けれ共到頭その男は見つからず、その中夜が白んで來たものだからぼんやり家へ歸つて來たお祖父さん、その身も心も落膽した姿を見た時、これも一晩寢ずに待ちに待つて居たお祖母さんは、思はずその手を取つて二人で、おう〳〵と聲を上げて泣き出して仕舞つたのだよ……。』



その遺志通り――

『お靜や、これが遺言になつたんだよ。何故かと言へばその翌くる日その男の死骸が永代橋の下に浮いて居たんだつて。だからそれからと言ふものはお祖父さんもお祖母さんも、自分たちの榮耀贅澤は勿論の事、三度の食事も出來るだけ詰めに詰めては四方八方へ手の及ぶ限り施し物をした。さうして貧乏人を救ひ病人を慰め、不具者をいたはる。その合間には、たとへ雨が降らうが風が吹かうが、何うかしてもう一度身投げを助けよう

といふので、毎晩必ず兩國から大橋までの間を夫婦して歩いたのだよ。けれ共その時以來到頭身投げには出會さず、それなりお亡なりなすつて終つた。その臨終には二人とも、

「可哀さうな人の事を思ひやつてお呉れ。人情を失しては不可ないよ。私たちの一生の誤りはあの身投げを本當に助けて上げなかつた事だ。これ許りが心殘りで……」

と言ひ殘したのです。私は此の言葉がつく〴〵と身に沁みて私に出來るだけの事はして居るのだよ。けれども身投げに出會ふ機會なんてものはそんなにある譯のものぢやない。けれ共私はお祖父さん、お祖母さんのお氣の休まるやうに毎晩あゝやつて歩いて居たのだよ。さうして、

「お祖父さん、お祖母さん、濟みません。今夜も身投げの人に出會ひませんでした。けれ共その方が仕合はせなのですよ。さう思つて休んで下さい――」

と心の中で手を合せて居たのだよ。ところが何うだらう昨夜の始末、到頭身投げの人をお助けする事が出來ました。』

『お母さん！　お母さん！』

『さう〳〵。お前が見て居た通りだつたね。私のあの百圓はそりや本當に苦しいお金だよ。けれ共これでお祖父さんもお祖母さんも本當に御安心なさるだらうと思ふと、あのお金は一寸も惜しくはない。それに斯うやつて私もお前も無事で結構な年が越せるし、お餅もお飾の用意も濟んだ。お前にも帯が一本出來たんだもの。けれ共お節や、來年は一生懸命、又働き直さなければならないのだよ！』

『お母さん！　お母さん！』

斯くして百八つの鐘が鳴り響く中に母子は尚暫く語りつゞけるのでありました。

此の話を私にして呉れたのは名優K氏の美しい夫人でした。

夫人の名前？　それは今更申し上げるまでもないぢやありませんか?!

――（をはり）――

偉人曰く錄

◇　新島襄

學生にして其身體の装飾等に心を用ひ、財を費すに至らば、實に朽木の類、糞土の墻の概なきを得ざるなり、夫れ學生の間は衣服等は如何に粗末に如何に破れたる物を用ふるも可なり、食物等に至つても、質朴にても宜しきなり、然しそれとて殊更之を為すは不可なり、只學問に心を專らにし、敢て衣服其他を顧るに及ばざるに至らざるべからざるなり。

◇　伊達政宗

仁に過ぐれば弱くなる
義に過ぐれば頑くなる
禮に過ぐれば諂となる
智に過ぐれば嘘を吐く
信に過ぐれば欺かれる

君恩を慕ひて

安倍季雄



意外の台命

天保十一年十一月一日、德川十二代將軍家重の名により、出羽莊内の藩主酒井左衛門尉忠器を越後の長岡に移封し、そのあとを、そつくり其のまゝ武藏川越の藩主松平大和守に賜はるといふ台命が出ました。

こゝに莊内といふのは、今の山形縣のうち、東西田川及び飽海三郡の總稱で、古來有名なる米の産地として著聞され、表高は僅かに十四萬石に過ぎませんが、內實は優に四十萬石を突破し、江戸に於ける酒井家の藩邸は、神田大黑の異名を以て呼ばれ、その裕福ぶりは、常に財政難に苦しむ諸大名の羨望の的でありました。

それもその筈、酒井家は德川家の四天王といはれた酒井忠次の後裔で、德川家とは最も近い親戚の間柄、いはゆる親藩中の親藩でありまして、秋田の佐竹家のおさへとして、特に將軍家のめがねにより、飽海、田川の二郡を賜はつた名譽の家柄であります。それが突然、しかも、何のいはれもなく、半知以下の七萬石にへらされ、越後の長岡に移されたについては、そこに何か重大なる理由があらねばならぬ。

『台命とは申しながら、無法とも、亂暴とも、實に言はうやうない非違のお沙汰である。そも何人の中傷か、小細工かな？』

腕ぐみをしてじつと考へこんだ忠器の眼底に、此の時佯光のやうにひらめいたのは、時の老中筆頭水野越前守忠邦のしたり顏でありました。

忠邦は、かの有名なる天保改革の發頭人で、政治家としては有數の器量人でありましたが、非常な策略家で、あまりに權謀術數を用ゐ過ぎたために、後に將軍の忌諱に觸れ、間もなく老中を罷められ、一生を不遇に終つた人であります。

勤王藩への面當と榮達

當時、將軍家では、十一代の家齊が隱居し、その子家重の代でありましたが、實權は依然として將軍家齊の手に握られ、家

重はまるで床の間の置物も同様でありました。そこにつけこんだのが水野忠邦で、日頃眼ざはりなのは水戸の徳川家、その水戸家の股肱と目されて居るのは同じ勤王黨の酒井家であります。一にも勤王、二にも勤王と、何かにつけて小うるさく理窟をならべたがる水戸家への面あて、一つは諸大名への見せしめの意味も含めての大鐵槌、もう一つは松平大和守は前將軍家斉の庶子である關係上、大和守の歡心を得て置けば、自然、お將軍家の御機嫌もよいわけ、將來の榮達期してまつべしと、さてこそ仕組んだ今度の轉封沙汰、とわかつて、忠器は烈火の如く怒つたものの、表面はどこ〳〵までも將軍家の台命であります。台命に背けば逆臣であります。外様なら兎も角、權現様以來、切つても切れぬ親藩の間柄であつて見れば、いやといはれた義理ではありません。忠器は恨みをのんで其の命に服し、悲憤の涙にくれて居る藩士一同を諭して、長岡移封の準備に取りかゝつたのであります。

名君忠德の善政

いはゆる鶴の一聲で、藩内の不平は兎も角も收まりましたが、收まらないのは領内二十萬人の民百姓であります。歴史を按ずるに、元和八年、忠次の孫忠勝、はじめて此の地に封ぜられて以來、代々の藩主がいづれも人物ぞろひで、治績も相當にあがつて居りましたが、元祿以後打ちつゞく太平の餘波で、士民の風俗が著しく華美に流れ、享樂耽溺の氣分が全國を風靡するやうになると、自然それに感染して、生活様式が一變する。衣食住が向上すれば内外の用費もかさむ道理で、藩士も百姓も町人も、申合せたやうに火の車、殊に七代忠宗が、永年老中を勤めたために藩庫は空前の窮迫を告げ、借金また借金、參覲の費用はおろか、奥方の化粧料にさへ差支へるといふ有様でありました。その難局を引受けたのが名君忠德で、當時彼は僅に十三歳の少年でありましたが、栴檀は二葉より芳ばしのたとへにもれず、萬機を公論に決する王者の道に立脚して、君民一家の理想的國家を實現すべく、それには先づ財政、農政、文政の建直しが焦眉の急務だといふので、率先して大儉約を實行し、本間四郎三郎光丘を一町人から起用して、これに財政の整理と農政の改革を一任し、これまで代官の巡視に際し、一切の費用は百姓の負擔となつて居たのを、全部藩庫の支辨となし、百姓に低利資金を貸與へて高利の借金を返さしめ、封内八ケ所に備荒貯蓄を設けて萬一に備へ、更に藩庫の充實するをまつて、今迄百姓に貸しつけてあつた金穀全部を貸下されとなし、一方、封中一人の無學者なからしむべく、儒學者白井彌太夫に命じて、藩學知道館を起さしめ、極力、精神の作興と民力の涵養につめた結果、此年ならずして治績隆々として現はれ、敦厚質實の士風と共に、藩内の富力は倍に倍するの盛觀を呈したのであります。

文化三年、忠德隱居し、そのあとを繼いだのが忠器であります。任にある事三十六年、『うちの殿様は神様だ。此の有難い殿

様やお家の爲めならば、生命だつて惜しくはない』とまで百姓達が思ひこんで居るその殿様の上に、思ひもよらない非違の台命が落下したのであります。

『此の恩君に別れ奉るくらゐならば、荘内二十萬の民百姓は、口に五穀を斷つて餓死すべし』と叫んで、彼等は猛然起つて未曾有の轉封中止運動を起したのであります。

前後七回の哀訴

徳川幕府三百年、重なる百姓爭議だけでも四十餘件ありますが、どれもこれも領主の惡政、俗吏の暴戻に對する、民衆の血の出るやうな悲痛な對抗運動でないものはない。ひとり荘内の轉封事件に至りては、全然これと類を異にし、君德を慕ふのあまり、身命を賭して永城、居すわりを願はうとする、至誠至純の聖化運動であります。

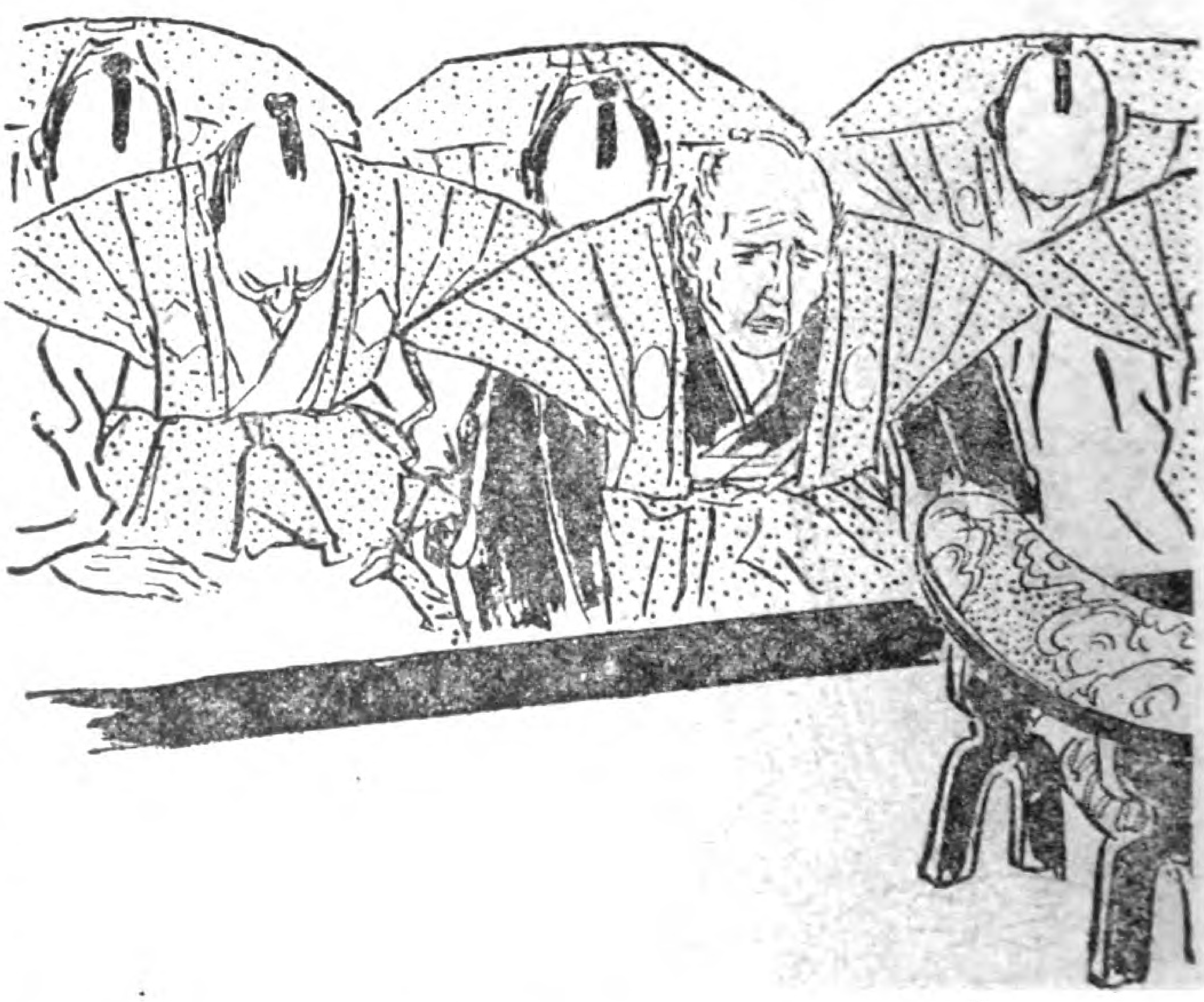


彼等は先づ神明の加護を仰ぐべく、村々町々の神社佛閣に祈願をこめました。更に進んで、幕府の當局に哀訴嘆願すべく、或者は田地を抵當に金を借り、或者は娘を奉公に出して其の金を路銀となし、續々江戸に出發いたしました。其の先登をなしたものは田川郡西郷村の有志十二人で、十一月廿二日、折柄の大風雪を冒して發程、十二月十六日やつと江戸に着きましたが、早くも事もれて江戸の荘内藩邸に引渡されました。ついで飽海郡遊佐、荒瀬、平田組の廿一人は、途中で藩吏の爲めに阻止されては大變と、北境三崎の險難を突破して秋田に出で、百八十餘里を迂回して江戸に到着、翌年一月二十日、大老井伊掃部頭、老中水野越前守、太田備後守、脇坂中務大輔に嘆願書を差出しました。前後七回、願書はいづれも領主累代の恩德を列記し、百姓廿一萬人の衷情を訴へたもので、言々句々ことごとく泣血の文字、讀む者一人として其の至情に泣ざるものなかつたと傳へられて居ります。

鬼神もまた哭かん

たとひ如何なる事情にもせよ、直

訴、愁訴は天下の法度でありますから、百姓共はその都度藩邸に引渡され、嚴重に不心得を言諭されて郷里に追ひかへされたのでありますが、その位の事で凹むやうな百姓達ではありません。國境の警備嚴重にして、容易に出國が叶はないと見るや、鍋趣向と稱して鍋一箇と米若干を背負ひ嚴冬、丈餘の積雪を蹴つて道なき道をふみわけ、八千尺、六千尺の鳥海、月山を山越えして江戸に上り、國に居殘つて居る者は、或ひは五丁野に、或ひは大濱に集合し、『百姓たりと雖も二君に事へず』「何卒居成大明神」など記したる大旗小旗を押立て、二萬人三萬人が一團となりて、涙を流して神佛に祈願をこらし、藩の役人が來て解散を命ずれば『私共儀、二百餘年の御高恩を蒙りました御領主樣に離れ奉る位ならば、一同長岡に同伴して、同所の土となりて相果てまする』といつて、何といつてもきゝ入れません。それに參列し得ない女子供は、寒中水垢離をとりて稻荷（居成に通ずるの意味で）に日參し、かくても猶ほ不安と見るや、天下の輿論を喚起すべく、更に手わけして秋田侯、仙臺侯、會津侯、水戸侯等、有力なる諸大名に愁訴し、忠器が參覲のため上京するときくや、通路に土下座して駕籠を通さない。忠器が出て親しくこれを諭せば、泣いて道を開くが、直ぐに其のあとを追うて江戸の藩邸にまかり出で、『莊内の百姓共がお迎へにまゐりました。どうぞお國へお歸り願ひます』といつて動かない。——明治天皇の御製にありますね、「鬼神も泣かするものは世の中の人の心のまことなりけり」あゝ、至誠至純の彼等の心情を思へば、何人かよく涙なきを得んやであります。

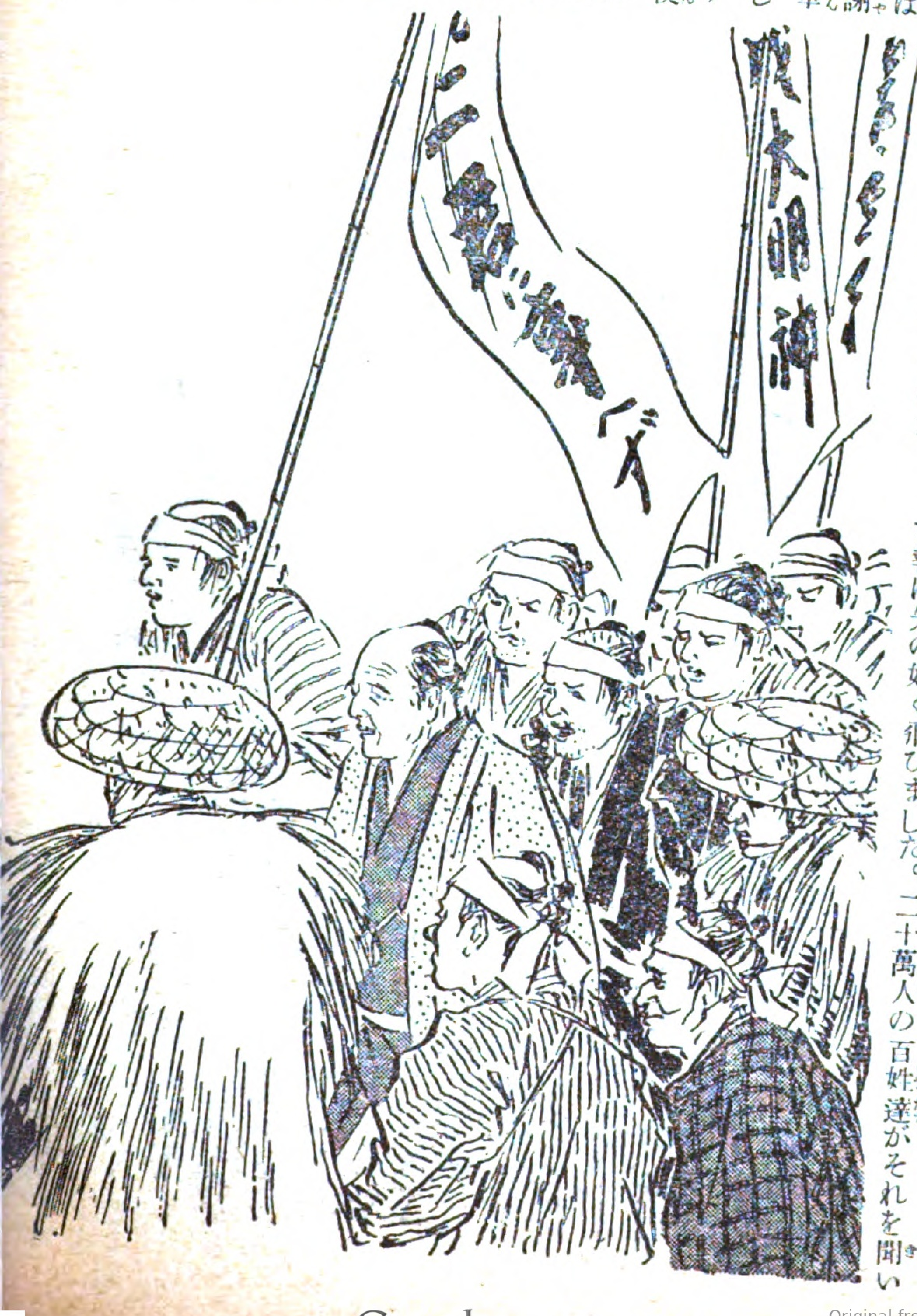


『それでも猶ほきかれなかつたらどうしようか?』廿萬人の民百姓は一齊に叫びました。

『お國境に場所を見立てゝ、そこで一同餓死しよう。もしその場に至りて不參の輩あらば、それは犬畜生同樣の人非人たるべき事』と。

至誠天に通ず

滿天下の同情は、期せずして莊内二十萬人の民百姓の上に集まりました。幕府當局に對する非難攻撃の聲は囂々として高まりました。『老中も人間、過失なきを保せず、過失と知つて横車を押し、累を將軍に及ぼさば何の辭を以てこれを天下に謝せん』論難の第一聲は副將軍水戸家によりて發せられました。『莊内百姓共の申分承り候へば、心底誠實、誠に不便の至り、聞及んで毎度落涙に及び候……左衛門尉（忠器）何等の不調法、無念有之候ての所替に候や』と、開き直つて正面から詰問の矢を放つたのは仙臺侯松平陸奥守であります。四面の楚歌に周章狼狽した水野が、江戸町奉行矢部駿河守に命じて、事件の黒幕と睨んだ佐藤藤佐（故伯爵林董、男爵松本順の祖父）を逮捕させたのが運のつき、



その口供が動機となりて、水野は三日間登城遠慮を申渡され、そのあとで堀田備中守に再詮議を命ぜられた結果忠器に對し、『所替に及ばず、そのまゝ莊内所領たるべし』といふ御沙汰が下つたのであります。實に天保十二年七月十二日の事であります。吉報は矢の如く飛びました。二十萬人の百姓達がそれを聞い

た時の喜びはどんなであつたでせう。『居すわり！居すわり！』口から耳へ、耳から口へ、南北二十餘里の山間僻地に至るまで、一日のうちに知れわたつたのに不思議はない。或者はあまりの嬉しさに、田の中に轉げ落ち、泥だらけになつて萬歳を叫んだと傳へられて居ります。歡天喜地を文字通りに、申合せたやうに鶴岡の城下をさして馳せ集つたる百姓は何萬人といふ數を知らず、藩士も町人も一緒になつて、相抱いて狂喜し、抃舞した當時の光景は曩年酒田の本間家から陛下に獻納した繪卷物に歷如として寫されてあります。あゝ此の君にして此の民あり、忠器がどんな心持で領民の至誠に對したかは一に諸君の想像に任かせて、最後に百姓の力で台命を覆したのは德川時代にこれが唯一回である事と、此の聖運動の中心人物として、馬町の本間辰之助、江地村の僧文隣、鶴岡の加茂屋文治、升川村の佐藤藤佐、酒田の向崎五右衛門、遊佐の石垣兵藏等の芳名を列記し、再び明治天皇の御製『器には隨ひながらいはがねも徹すは水の力なりけり』を拜誦して此の稿を終る事にいたします。

（挿畫――鰭崎英朋）





名家

鼻のをしへ

濱田廣介

かれの鼻は高すぎて、生れる時に支へなかつたかとさへ思はれる。全くその鼻だけを見てゐると、いくら西洋人とはいへ、人間の鼻としては滑稽である。しかし目を鼻から離して、かれの顔全面にむけて見ると、その鼻は厖大でもなく滑稽でもなく、むしろよくその顔に調和してゐる。人生にも亦、この鼻のやうな攝理がある。

四季の味ひ

岡田三郎

春は春、夏は夏、秋は秋、冬は冬、自然の景趣は面白い。春はのどか、夏は暑く、秋はさわやか、冬は寒く、さうして、四季ののどけさ、暑さ、さわやかさ、寒さ、これらが微妙に相交錯する自然の世界を深く味ふ人は、詩を作らずとも既に詩人である。

わが朝夕の願ひ

山中峯太郎

牛の如くならしめよ！ これこそ、我が日常の願である。鈍感なれど

百字文

も底力に充ち、遅けれども、遠くへ歩む。柔和に服從し、重きを忍ぶ。弱きに似て強く、虐げられながらも默す。惱み多き今の世に、牛の如く歩ましめよ！　利害を念はず、時代を超越して！

風車　小酒井不木

『風車は取り去られても、風はなほ吹く』といふ言葉がある。自分が死んでも世の中の風が平氣で吹いて居るかと思ふと情なくなる。何とかして、風車を取り去つたら、風も共に止んだといふやうな人間になることは出來ぬだらうか。

大きな虹　川路柳虹

紅海に入つてから船はしづかな湖上を走るやうだ。一方の岸は亞細亞大陸、一方の岸は亞弗利加大陸、雲煙の如く水平線上にひく碧の山々は遠いアラビヤの山である。モーゼが山上の十訓を垂れたシナイ山も明日は見えるといふ、暑熱の午後には必ず一度くるスコール。その晴れ間に大きな大きな虹が出る。兩大陸に架せられる美しい夢の橋である。

絶對の心

衆議院議員 永井柳太郎

（一）

シェークスピーヤは、『ヴェニスの商人』に於て偉大なる教訓を示した。――ユダヤ人シャイロックが、商人アントニオに金を貸した處、約束の期日が來ても返濟しないといふので大いに憤り、證文通りにアントニオの肉一斤を切り取らうと迫る。バッサニオの戀人ポーシャが變裝して巡回裁判官となり、シャイロックに告げて曰ふ。

『權利を權利として主張するは正義の命ずる所である。汝は宜しくアントニオの肉一斤を切り取るべし。併し、汝は衡を有するか？　汝は肉一斤の外、たとへ一滴たりとも汝の權利に屬せざる血を流すことは出來ない。これ亦正義の許さざる所である』

シャイロックは、血を流さずして肉を切り取ることが出來ないので煩悶する。

此にシェークスピーヤの偉大なる教訓がある。即ち人生の事、凡て相對ならざるはない。正義と雖も、決して絶對ではない。世に絶對なるものは唯、愛のみである。慈悲のみである。

（二）

天下に最も大いなるもの、それは愛だ。愛のみが人間更生の眞生命を與へるのだ。

釋迦は、晩年、その傳道の途中に病を得て、クシナ城外の林中に靜養しつゝ、尚且つ説教を續けられた。その時、聽衆の中に獅子吼といふ菩薩があつた。座より起つて釋迦に問うて曰く、

珍らしい話 面白い話

◎氣から病

或る日一人の血氣な青年が道を歩いてゐると醫者が出て來て、『貴男は大變顏色が惡いがどうかなさいましたか？』と云つた。が、青年は何を云ふかと氣にもせず、ズン／＼歩いて行くと、亦醫者が出て來て、『貴方は非常にお身體が惡いやうだ。なんなら私の病院でお休みになつては如何です』と云つた。

今迄一向平氣でゐた青年も、何んだか俄に身體が惰くなつて來た樣な氣がした。併し道をズンズン行くと、亦醫者が出て來て云つた。



『貴方は非常に大病人ですぞ、此の儘にして居れば大變だ。早く病院へお入りなさい』と。その時はもうその青年は精神的に病人となつてしまつて居た。で、言はれるまゝに病院に入つた。と、醫者達が寄つてたかつて『貴方の壽命は、後二時間。一時間、三十

『佛性とは何ぞや』
釋迦は答へて、
『大慈大悲を名づけて佛性といふ。諸々の衆生は皆慈悲の心あり、故に一切の衆生は悉く佛性である。この意味に於て、また一切の衆生は平等である』
と誨へてゐる。大慈大悲こそ――愛こそ佛の心であるといふのだ。人間の胸の裡に大慈大悲の心の生ずる時、人間は即ち佛である。即身成佛である。『身も南無阿彌陀佛、心も南無阿彌陀佛』とは是を云ふのであらう。
私は釋迦の生活の最も偉大なる所は、即ち此の絶對の心に生くるにあると思ふ。
親鸞が言つた――
『われ、善を願はず、如來の本願に勝る善なし。われ、惡を怖れず、如來の本願を妨ぐる惡なし』
此の善惡を超越した絶對の心が、とりもなほさず親鸞が釋迦の弟子として偉大なる者の一人たる所以であらう。
又嘗て釋迦が其の敎を說きつゝあつた時に、一人の醜業婦に出逢つた。弟子達は醜業婦が釋迦に近づかんとすることをさへ無禮であるとして之を咎めたところ、釋迦は弟子達を遮つて、
『その賤しき生活に淪落せる女の心にも、また貴き佛性はあるものぞ』
さう言つて、自ら弟子達に接すると同じ樣に眞實と深切とを以て其の女に接した。今までに眞實の籠つた言葉を人から聽いた事のなかつた彼女は、こゝに始めて、未だ知らざる大慈大悲の光を浴びて、心の底から搖り撼かさるゝ感激に戰いた――彼女は更生した、眞實の人間性に還つた。佛性を顯現した。
彼女は釋迦の前に一切の罪を懺悔して、直ちに熱心なる弟子となつた。

分、十分、五分』と云つた。すると青年の呼吸は、いよ〳〵苦しく、遂に醫者の云ふ通り假死の狀態に陷つたといふことである。
これは獨逸の醫者が、藥物を用ひずとも、氣一つで人間が殺せる――つまり、氣から病を引き起すことを實際的方法で硏究したものであつた。（千代子）

◎皇后ルイザ

普魯西が佛蘭西のナポレオンに破れ、マグデブルグ城を占領された。マルデブルグの城は普魯西にとつて最も大切で且つ有名な城であつた。軈て佛蘭西と普魯西が和議を結んだその席上、普魯西の美しき皇后ルイザも其の席に加はつて居た。つと、ナポレオンは立つて側にあつたバラの花をとつてルイザを慰めようとしたが、ルイザはそれを受取らなかつた。そして、『優しきそのバラの花はマグデブルグの城と共にならば有難く頂きます』と言つたものだ。流石の英雄ナポレオンも之れには尠からず參つたが、然し折角出した花を引き込



釋迦が、千載の下、なほ凜乎たる力を以て人類を指導する所以のものは、即ち此の絶對の心――大慈大悲の心に燃えてゐたからである。

(三)

釋迦の教は、又耶蘇の教であつた。弟子が耶蘇に向つて、
『吾等は幾度、我等の敵を許すべきか？　七度か？』と尋ねた時、耶蘇は答へた。
『七度を七十倍せよ。神は限なき愛を以て汝等の罪を赦す。汝等、また神の、汝等を許すが如く汝等の敵を許すにあらずんば神の子たること能はじ』と。神が人を愛する愛を以て、我等も亦人を愛するのでなくては、神の子たることは出來ないといふ大愛――絶對の心が、耶蘇の教訓の神髓であると私は信ずる。
ユダヤ人が姦淫した女を耶蘇の前に引きずつて來た。さうして耶蘇に聽いた。
『吾等、ユダヤの教に隨ひ此の女を石にて打つべきか？』と。耶蘇は答へた。
『汝等の中、心に罪なきもの、彼の女を石にて打つべし』と。ユダヤ人等自ら己を省みて、一人去り、二人去り、終に凡てが何方へか逃げ去つた。その時耶蘇は言うた。
『女よ。吾もまた汝を責めじ、往け。而して再び罪を犯すこと勿れ』
何と驚くべき言葉ではないか。同情である、理解である、而して眞實である。この言葉こそは、彼の女をして新生活に更生せしめずにはおかなかつた。――女は泣いてその罪を悔いた。
偉大なるは愛である。神の心である。

(四)

越後の良寛和尚が、彌彦山の麓に小さな庵を結んでゐたとき、その庵室の緣の下に筍の子が生えた。筍が延びるに隨つて緣の板が邪魔になつた。けれども良寛は筍を折るに忍びない、終に床板を一枚めくつた。

めるわけにはゆかなかつた。『よし！』とにかく、快然、娘を與へる事を約してそのバラの花をやつたといふ。ルイザは、普魯西王ウイリヤム三世の皇后で、頗る容姿で義氣に富み、聰明敏銳な女性の性格を備へた稀世の賢婦人であつた。（みすず）

◎誤植の罪

蓋世の英雄ナポレオンの論告に『朕はフランス軍隊の盜賊的行爲を許す』と、あつて問題となつたが、それは Voleur（盗賊）と Valeur（勇氣）との誤植であつた。



鐵血宰相ビスマルクが議會で爲した演說を印刷されたものに『余は總ての娘達と親密なる關係を維持してゐる事を喜ぶ』とあるので、當時の獨逸の人は卒倒する程に驚いた。ところが、之れは Mächten（列強）と Mädchen（娘達）との誤植の罪であつた。（登久生）

◎父の慈愛

發明王エデソン翁は、幼い時から機械の研

筍の子はやがて竹になつた。そしてズンズン延びて屋根につかへた。良寛は更に屋根を破つた。そして屋根の上に延びゆく竹を見て會心の愉悦を禁じ得なかつた。

そこに大教訓があると思ふ。佛教の經典に曰く、

『山河大地みな佛性顯なり。山河を見るは佛性を見るなり』

と。實に山川草木、皆是れ佛性である。總てのものが宇宙の大生命から出てゐる。一本の草木と雖も、其の萌えたつ芽を、その萌ゆるがまゝに成長せしめ、その伸びんとする莖を、伸ぶるが儘に伸ばしむる事が、即ち佛の心ではないか、耶蘇の心ではないか。

萬物を生かしめ、萬物と共に吾も亦生きんとする共存共榮の心が、釋迦の心であり、耶蘇の心である、而して又、此の心こそ、釋迦の足跡をふみ、耶蘇の如く生きんとする吾等の心であらねばならぬ。

（五）

禪學に三心といふ事がある。第一は喜心。天地間に生を受けたることを喜ぶ心である。第二は大心といふ。無偏無黨の心である。第三に老心。父母の心をいふ——即ち大慈大悲の心である。三心のうち最も大なるものは老心であると、私は思ふ。

聖書のコリント後書第十三章第十三節に

『信仰と望と愛とは人の心の最も尊きものだ、その中でも取分け尊きものは愛である』と說いて居るのも、また此の意味に外ならぬ。

私は、釋尊の一生を讀み、又耶蘇の教訓に接する毎に、常にその絕對の心の莊嚴なるに感激を禁じ得ない。

此の心——絕對の心を以て吾等の心となされんとする努力こそ、吾等に最大の人格を與へ、吾等に永遠の生命を齎すものでなくてはならぬ。（をはり）

究に熱中しては時間を忘れる風があつた。父のサミユエルは痛くこれを氣にして、一日エヂソンを諭し、勉強も一定の規律の下にしなければ遂に心身の健康を害ふ、爾後は必ず九時には寢るやうにせよと申し渡した。一日中、新聞



賣子として働いて、さて歸つてから深更迄の自由なる研究が唯一の樂みだつたエヂソンは困つてしまつた。而し父は毎夜九時にはやり掛りの仕事をやめてもエヂソンの室へ寢かせに行つた。お蔭で虚弱だつたエヂソンの心身は立派に伸びた。

今日八十二才にして尚矍鑠、而も幾十時間をも研究室にぶつ通すエヂソン老のあの精力には、世人は驚嘆するところであるが、その蔭には斯うした父の心遣ひがかくれてゐるのである。（TM生）

× × ×

○殺すほど佛意にかなふ腹の蟲。
○もまれねば鑿さへ癖が直りかね。
○鈍きる山は裸になる下地。

運は心にあり

東京早蕨幼稚園主 久留島武彦



久留島武彦氏

大分前の事であるが、私は東洋協會の囑託をうけて臺灣の現况を調べたことがある。すると又その翌年、今の貴族院議員の野村德七氏と同行して、再び臺灣視察の旅に上ることになつた。この時の相客の中には、今の農林大臣の山本悌二郎氏、京都大學の小西重直博士、それから其の頃神戸の商業會議所の會頭をしてゐた富豪田村新吉氏などが居られた。船内の徒然のあまり、この船には多分初めて臺灣へ行く連中も乘つてゐるだらうから、豫備知識を與へる意味で臺灣講演會を開かうといふので、山本氏と私とが講師に選ばれた。

そのあとで、船長が非常に喜んで、記念のために何か皆さんに御一筆願ひたいと云つて、一冊の書帖を出した。各自思ひ思ひの事を書いたが、それが田村新吉氏の番になつた時に、氏は暫らく考へてゐたが、『私は何所へ行つてもこれより外に書くものはありません』と、にこやかに筆を執つて書いたのは、『轉逆爲順』といふ四つの文字。別に能書といふではないが、いかにも精神が籠つて筆勢が躍動してゐると、私には思はれた。それよりも、『何だか此の文字の陰には、田村氏の全運命を築き上げたとでも云ふやうな體驗的なものが潜んでゐるに違ひない』

かういふ直感に打たれた私は、後に喫煙室で漫談に移つた際、それを田村氏に聞いてみた。すると田村氏はぢツと私の顏を視つめてゐたが、

『いや先生、恐入りました。實はこの轉逆爲順によつて、私はまづ今日在るを得たと申すことが出來ませう』

『それは面白い。お差支なかつたら、一つお聞かせ下さいませんか』

そこで田村氏が話してくれたのが、次の物語である。――

田村氏は學生々活を終ると、すぐ雄志を抱いて渡米した。今はつきり覺えぬが、シヤトルだかバンクーバーだかで、氏は苦學三年を過した後に、なにがしかの纒まつた金を握ることが出來た。謂ゆる粒々辛苦の汗の結晶である。そこで氏は、これを資本に何か商賣を始めたものか、それとも東部の方へでも行つてもつと學問でもしようかと、いろ〳〵考へたがまだ腹が决ら

ぬうちに、ある日ぶら〳〵郊外へ歩いてゐると、ふと目にとまつたものがある。

折柄、鮭の産卵期で、川を見ると、それが何萬尾といふか何十萬尾といふか、見る限りの川面には群をなした鮭が、競ひ合ひ押し合つて、果ては川岸へ押上げられたまゝ死んでゐるもの數を知らない有樣。一旦海へおちた鮭が、産卵期になると、かうして川を遡つて來るといふ話は聞いてゐたが、まさかこれ程とは思はなかつたので、氏も流石に驚いてこれを眺めてゐた。

一體に、外人は魚をあまり食べないが、殊にかういふ所を見せられては、食ふどころか見るのもいやになるのは無理もない。併し考へてみると、日本では此の鮭の鹽にしたものを、歳暮とか年玉として非常に重寶がつてゐる。年末年始にはどのくらゐ賣れるか知れない。あれは資本の掛つたものだが、こいつを利用して鹽引にすれば、鹽の代とそれを鹽漬にする手間賃とだけで濟むわけだ。

『これは面白いぞ。一つこいつを鹽引にして日本へ送れば一と儲け出來る』

そこで算盤をとつて見ると、この位なら賣ることが出來るといふ見込みがついたので、これを東京の友に照會してやると、



『それは素晴らしく安い。その値段を倍にしても市價の何分の一だ。うまいものに目を着けた。是非やつてみろ。賣捌きは引受ける』といふ調子のいゝ返事。いよ〳〵運が向いて來たと、田村氏は躍り上つて喜んだ。

そこで早速友達を寄せ集める。鹽を買込んで、無盡藏に横はつてゐる鮭の新しいのを選んで、これを鹽漬にする。其の時、考へたのは――頭と尾、これは食ふことの出來ぬものだ。これは附けておくには當らぬ……と、かう思つたので、片つ端から頭と尾とを切捨てゝ鹽漬にした。これを日本へ送り出した時の氏の得意といふものは大したもので、天晴の先見家をもつて任じ、黄金の波がやがて來るべき便船で押寄せるぐらゐに思つてゐた。

ところで、日本から來た手紙、幸福の報らせだと信じて、取る手おそしと披いてみると、いきなり、『貴樣は何といふ馬鹿だ』といふ書出しで、『これを歳暮などの贈物とするのは、頭と尾とがあればこそ、尾頭附きといつて目出度がるのだが、尾と頭とを切つてしまつては屑物に過ぎない。それでいろいろ方々へ交渉してみたが、場違ひのかうした屑物は、氣味惡がつて人が使はないといふ話。何といふ情ない事をしてくれた。二東三文だ』といふやうな事が書てあつた。

これで田村氏も初めて成程と氣がついて、よし、それならもう一度やらうと云ふので、勿論自分の金は使つてしまつたから、今度は七所借りをして、あつち此方からやつと金をこしらへ、これで第二回の發送をすませ、今度は大丈夫、前の損失を取返し、後の借金も償ふことが出來ると、日本からの手紙の來るのを千秋の思ひで待つてゐた。

やがて書面はとゞいたが、何といふ不運であらう。船が横濱へ着く一日前に、遭難をして、海の物は海へ還つてしまつたのである。保險につけてなかつた不注意で、一文にもならない。この時の田村氏の失望落膽は、言ふまでもあるまい。

『なまじつか俺が金儲けをしようなどと考へたのが間違ひだ。



あの血と汗の結晶である金を、もう少し眞面目に考へて、火にも焼けず水にも流れない學問をして身につけておけばよかつたものを……』と、氏は自責の念にせめられ、日夜懊惱、室にこもつたきり、頭をかゝへて呻つてゐた。

すると或日、友達が訪ねて來て、其後の事を質ねるので、何もしないでゐると云ふと、

『馬鹿だな。何故もう一度やらない。見込みはあるんだらう』

『見込はある。併し第一俺にはやりたくも金がない。二度目の時の金も借りた金だ。それすら返すことが出來ないんだ』

之を聞くと、

『馬鹿な奴だな。何故もう一度借りないんだ』

と、友人は無造作にいふ。

『貸してくれる奴がないよ』

『貴樣はよつぽど間誤ついてゐるな。借りる本人が、貸してくれる奴がないと思つてゐて、誰が貸してくれるものか。貴樣やりたいとは思はないのか』

『それはやりたいどころぢやない。今度こそはといふ確信はあるんだが、貸し人がない』

『それがいけない。たとひ貸してやらうと思ふ男でも、借りる本人が迚も貸してはくれないと云ふ情ない事をいつてゐて、誰が酔狂に貸してやらうと云ふ奴があるか。今度こそ大丈夫といふ大確信があるんなら、貸してくれない方が間違つてゐる位の氣で、自分を自分で信じてみろ。必ず金を出してくれる奴があると信じて、話をしてみるんだ。さうすると、人といふものは意外に貸してくれるものだよ』

との言葉が非常に胸を打つた。成程、さうだ。借りる本人が迚も貸してくれる人はあるまいと、意氣銷沈して蒼い顔をしながら頼んだところが、誰が貸してくれるものでない。此方が確信に燃えてをれば、先方も信頼する氣が起きるに違ひない。かう考へて、誰か貸してくれる人をと物色しながら、部屋を飛出して、郊外を歩いてゐると、不意に思付いたのは、久しく訪ねない一人の友人のことである。遠く離れてゐる友人だが、あれに相談してみようと、かう氣がついたので、すぐさまその男を訪ねた。

長く挨拶などしてゐると、切出し難いと思つたので、いきなり

『おい、俺は此の間これ〳〵の物を日本へ送つたのだが、失敗した。その失敗ですつかり見込みがついた。それで少し金を貸してくれんか』と、手輕く持出した。

『さうか。いや俺も其の事はうす〳〵聞いてゐたが、何故貴樣は俺の所へ相談に來ないかと、實は心待ちに待つてゐたんだ。幾ら要る』

この答が意外に無造作なので、田村氏も大いに元氣づき、この位あつたらと、内々は心配しながら言ふと、

『それぢやア足るまい。まアこれだけ持つて行つたらいゝだらう』と、早速チェックに書いて渡してくれた。其の時、田村氏は『有難い！』と、思はずチェックを押戴くと同時に、しつかりその男の手を握りしめたが、感極まつて二の句が繼げなかつたといふ。



田村新吉氏

かうして第三回目にまた餅を送つたが、それが成功の緒となつて、遂に今日在るに至つたのである。

『かういふ譯で、人から何か書いてくれと云はれると、烏滸がましいが、自分の唯一の體驗で、無二の信條としてゐるこの轉逆爲順、運は決して他にあるのではない、自分の心の働かせやう一つによつて、自己自ら逆を轉じて順と爲すことが出來るといふ心持を書いて差上げることにしてゐます』

かう云つて、田村氏は物語を結ばれた。私はこれを聞いて非常に感じ、行く先々で青年諸君に語り、また自分も常にこの言葉を味ひつゝ、今日もなほ逆境を轉じて、順境にすることに努力してゐる次第である。（をはり）

思想國難に際し

世を警むべき名士の寸言

早稻田大學教授 帆足理一郞

○

なせば成る、なさねば成らぬ何事も
成らぬといふは、なさざればこそ

維新の大業は、この意氣を以てなされた。精神一統何事かならざらん。大ナポレオンは「不能」の文字わが辭書になしといつた。これが果してうまく往くかなあと、躊躇して事に當るほど、愚なことはない。

○

なせばなるのだ。この事業、この計畫、それが世の中の爲めになる仕事であるならば、實行の難道何かあらん。正直と勤勉を兩輪として、坂に車を押せ！

法學博士 平沼淑郎

一

魚爛レテ、而シテ亡ブ。

偉人言行

三つの教訓

小田生

諫言を求めて

池田光政は或時經綸の爭臣の章を讀んで自ら省み、家臣一同を集めて、

「余に善からぬことあらば必ず諫めよ」

と云つた。すると番頭中川某が進み出て

「只今の仰せ、御英明のほど感服仕れど、わが君のお顏は威嚴あり且つ眼光炯々として近寄り難く、その上その一種の御態度にて、何かお憤りなさると、ふた目と見られぬ見苦しさ、恐ろしいとさへ申す者が居りまする。それでは誰れも諫言申上げられませぬから、まづ人の懐くやう柔和になされたく存じまする」

と直言した。家臣の一人がその無禮を責めようとすると、光政は、

「諫叔は國の爲め無禮を忘れたのであらう」

と笑つて濟ませ、その後常に憤りを抑へて諫言を聞くことに努めた。

散歩の德行

○一死辭せざれ。一生を献ぜよ。

伯爵 二荒芳德

○吾等の進むべき「向上發展の大道」には終點無し。淸く正しく强く生きんがため、力行して惑ふ勿れ!!

農學博士 東鄕實

○己れの欲せざる所、人に施すことなかれ。

樞密顧問官子爵 石黑忠悳

○天壤無窮の國運は國民剛健の精神に懸る。黄白に眩まず、威力に屈せず、祖宗の光榮を輝かし萬代の洪基を培はゞ、百難萬艱何かあらん。憂ふべきは信念の空虛、精進の缺乏のみ。起て神州の同胞、盡せ各自の本務を。

文學博士 椎尾辨匡

○

政治家 小久保喜七

哲學者のジョン・スチュアート・ミルは非常な健脚家で、二十歳前後の頃には十哩二十哩の遠距離まで散歩した。そしてその時、ミルはいつでもポケットに菫の種子を入れて出てそれを路傍に播いてゐた。軈てその菫の花が咲いた時、老幼男女のその美感にうたれ、それを摘んで喜ぶありさまを見たミルは、善事が齎すところの何んとも言へない幸福感を味つた。

握飯の訓戒

水戸の碩學藤田幽谷は或日、わが兒東湖に握飯二つを與へて遠方へ使ひに出したが、歸つてくるとすぐ、

『握飯はどうした?』

と訊いた。

『皆な食つて了ひました』

と東湖が答へると、幽谷は、

『そんな不用意なことでは駄目だ。人はいつ轉變轉化するか分らぬもの、それに備へるため用意のものを一度に用ひ果たしてはならぬ。いかに空腹だからとて一つは殘して置く心掛けが肝腎ぢや』

と諭へた。

(青年鑑に據る)

富貴不レ淫貧賤樂　男兒至レ此是豪雄

右は宋の程明道の詩中の語にして藤田東湖も之を好み余も亦これを好む。

〇　辯護士　塚崎　直義

一、罪の子は紊れた家庭から。
一、病氣は口から犯罪は心から。
一、誠の前には法律無用。
一、事實は千萬の辯論に優る。
一、信念はダイヤモンドをも溶かす。

〇　醫學博士　高野　六郎

人體は最も進步した有機體である。人體内では腦の細胞や蹠の皮の細胞などが完全な、調和の下に生活してゐる。表皮細胞が無ければ人體はなり立たないが、表皮細胞だけでも人體は出來ない。腦細胞だけが不調和に發展すれば精神病で、表皮細胞が不作法に育てば癌である。社會も同樣である。

ご存知でせうか

ラヂオ病

ゼエレ博士は『餘り強い音や近い音は聽神經を過勞させて害を來す』といつてゐます。ラヂオをレシーバーで長く聞いてゐると聽神經が萎縮して初は大してわからぬが漸次重聽症狀が現れ聽覺が衰弱して遂に聾にもなります。レシーバーを強く當ると耳の器官を壓迫し又微に響く音に聞耳立てるのは神經の疲勞が甚く耳の爲によくありません。健康者でも長くかけてゐると氣分が惡くなるが幼少年は殊に疲も早いから注意せねばなりません

靜かな音を出す竹針

蓄音器は竹針を使ふと靜かな音が出ますから小さな部屋で小人數が聞くには結構です。竹針は鋼鐵針のやうに只一回限のものでなく先を削りさへすれば十回位役立ちます。又柔くてレコードを傷めない。然しレコードの狹い溝を通る時に脫線し易いから新しいレコードの最初の一度は溝を深くする意味で鋼鐵針をつかひなさい。迅い賑かな曲やピアノ等には適しませぬが靜かな曲、木管樂器、尺八

○「教育立國」子供の良否は人類の運命を左右す。

府立第一高等女學校長　市川源三

○合理的な動機から穩健の行動を取りたいと思ひます。

愛國生命社長
川崎第百頭取　原邦造

○上下交利己主義を去れ。

陸軍大將　一戸兵衞

○祖國日本を正視せよ。

文學博士　加藤玄智

○朝起希望、夜臥感謝。

此一語ト存候　今日ノ人ハ希望ナキ爲其日暮シノ刹那主義ニ陷リ居候。宗教的思想ナキ爲感謝ノ心起リ不申候。

陸軍少將　伊豆凡夫

一生のレコードにはもつて來いです。

秋と食慾

秋は氣温が下り體温を外へ奪はれるから澤山食物を採つて之を補ふ爲に食慾が進みます。熱い夏の間怠けてゐた消化器が秋になり急に活動を始めるから氣分がよく〱全身の運動が活しくなつて益々食慾を進めます。此食慾は適當に滿足させねばならぬが、非常に未熟の果物等不消化物を餘計にとると胃腸を損ひます。日中は尙相當熱いのに夜急に冷えて寢冷し易く胃腸を弱めると食慾の盛な時だから色々の消化器病や思はぬ傳染病にかゝります。

チフスの診斷

別に何所が苦しいとも痛いともないに四五日寒けがし段々熱が上りはしませんか。風邪なら鼻水や汗で、頭や腰や手の痛みが強くなります。胃の故障や便秘や下痢の爲の發熱なら二三日で降ります。汗の出ない訳の分らぬ熱が續けばチフスの疑があります。口が渇き脈が少くなり一週間もたつて胸や腹に赤い米粒半分位の斑點が現はれ脾臓が肥大して左の肋骨の下が觸るやうな痛を覺えて來るとチフスと確定出來ます。



◇……驚嘆すべき大科學探偵小説

透明の人間

槇尾赤霧
椛島勝一畫

一　第六人目の男

ヘッドライトで窓硝子をあかあかと照しながら、大きく迂回して自動車が玄關先に止ると、玄關の大きな扉が開いて、待ち構へてゐたやうに取次の者が出て來た。自動車の中から出て來たのは五十を過ぎた紳士で、右手にステッキ、左手は屈強さうな從者の肩に掴つて行く。ステッキを前に突き出して從者に導れて行く格好は如何見ても普通の健康體の風ではない。

『皆樣先程からお待ち兼ねで御座います。』

取次の者は慇懃に腰を屈めた。

『皆樣もうお揃ひかな。』

紳士は應揚に訪ねた。

『はい、もうお揃ひで御座います。』

『はゝ、そりや遲刻をして濟まなかつた。直ぐ行から。』

取次は恭やしく後に廻つて外套を受取つた。そして紳士は再びステッキと從者に導れて奥に入つた。自動車は再び輕いエンヂンの音を立てゝ動き出して車寄せの方に行つた。そこには既に三臺の自動車が並んで居た。どの車にも誰も居ない。運轉手共は皆臺所の方にでも行つて女中相手に駄喋つてゐるのだらう。今着いた運轉手も車を止めると外套の襟を立て乍ら裏の方に廻つて行つた。

此處は××銀行頭取の清田源太郎の邸である。今夜は何か重

要な會議でもあると見えて、八時近くなると引續いて四臺の自動車が玄關に並んだ。來た客と云ふのは皆金融界で重要な地位を占めてゐる人達許りである。殊に最後に來たのは、有名などルブローカーの主人松木と云ふ男である。此の男の盲人であるが故に益々鋭くなつた直觀は、經濟界の燈明臺と云はれる程、重きを置かれてゐるのであつた。

奥まつた離座敷の一室には主客を合はせた四人が、舶來葡萄酒を飲みながら雑談をしてゐた。

扉が開いて女中が現はれた。

『松木樣のお出でゞ御座います。』

『やあ、さうか。直ぐにお通し申せ。』

主人は云ひ乍ら席を立つて扉まで迎へる爲に歩いて行つた。

『皆さん、遲刻致しまして、どうも。』

松木は從者の腕から離れて、皆に挨拶した。

『いや、何こそ不自由な身體を態々、御苦勞樣でした。』

主人は盲人の腕に手を置いて、親しさうに話掛けた。

『さあ、何卒、君の席まで僕が連れてつてやらう。』

從者と女中は扉を閉めて引き下つた。盲人は主人の腕に倚つて、自分の爲に變へられた席に着いた。各々一人々々の挨拶が終ると、主人は立ち上つた。

『さて、今夜、諸君にお出でを願つたのは、實に重要なる事柄に就いて御相談申上げ度いと思つたからであります。勿論絶對に秘密を要することでありますが、此の室ならば嚴重に警戒してありますから、諸君はその點御心配なく、いくら大聲で話しても差支へありません。で、御相談と申しますのは、實は莫大な金額の現金取引に關することであります。御承知でもありませうが、吾々此處に集まりました五人の者は、我國金融界に於きましては……』

『一寸待つて下さい。』

不意に松木盲人が話を遮つた。

『今此處に同席してゐる者は幾人ですか。』

松木は怪訝さうに問うた。

『君を入れて、五人ですよ。』

『眞實ですか。』

『嘘を云ふものか。君、安心し給へ。よく見える眼が四人も居るし、電燈はあか〳〵と點いてゐるんだよ。』

主人は疑ひ深さうに眉をひそめた盲人を見ながら微笑んだ。

『でも、時々、眼開きの眼の見えないのにぶつかることがあるからな。』

盲人はまだ信じられなさうに呟いた。

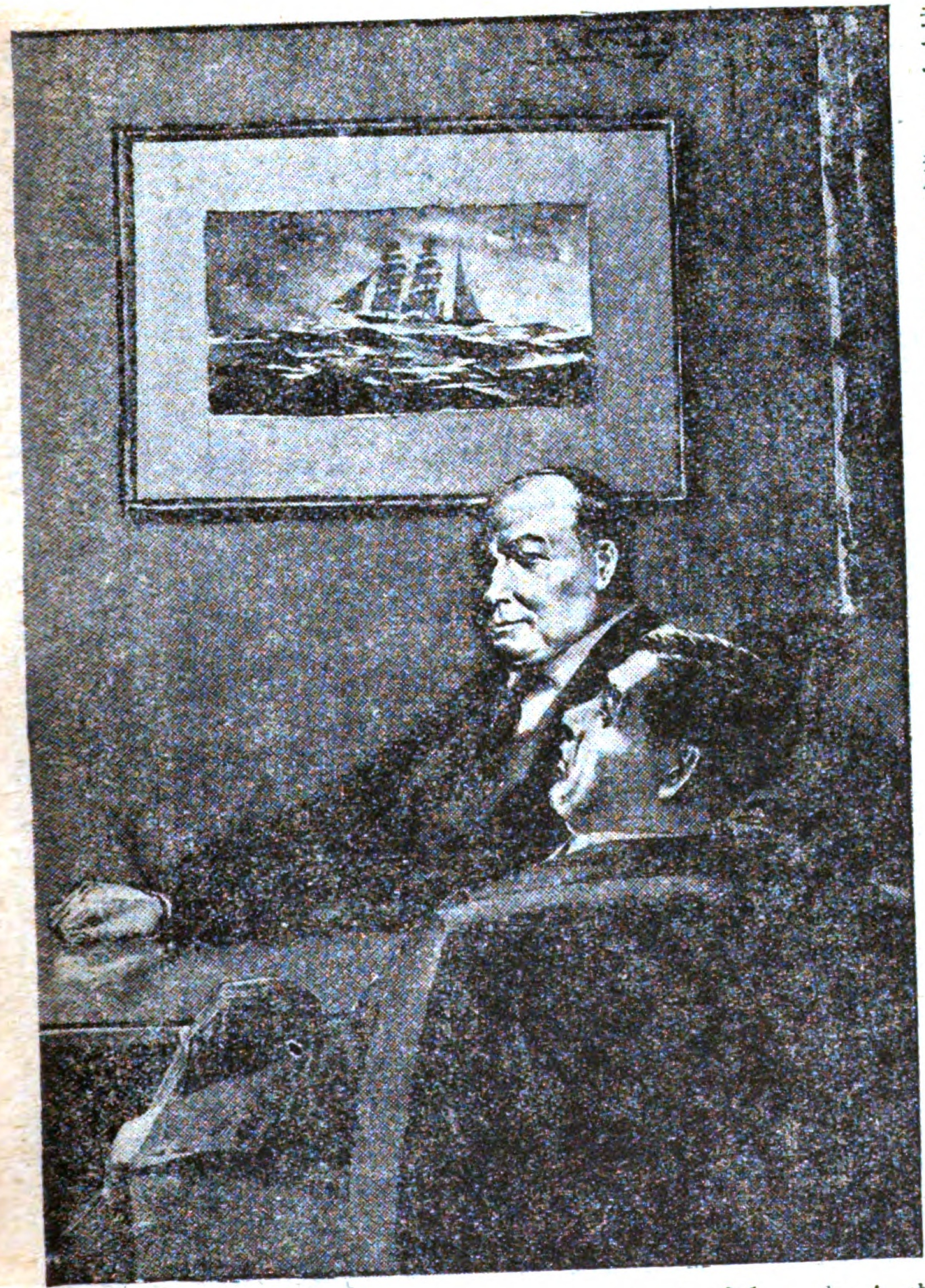
『いや、その點は安心し給へ。此の室は秘密會合用に作つたので隠れる處なんかないんだから。』

主人はさう云つて、又元の話に戻つた。

『で、此處に集まりました吾々五人の者は我國でも最も力ある……』

『待つて呉れ。五人ぢやない。六人居る。確かに六人だ。』

松木は少し興奮して、立ち上つた。人々も平常は松木の直觀を信用することもあるのだが、今夜のことは現に四人のものが四人共お互の姿を見る丈で、他に誰一人居ないし隱れる場所と云つても、装飾もなければ、家具もない部屋だから、松木の直觀を笑ふより仕方がなかつた。



『おいしつかりし給へ。今夜は君、どうかしてるぜ。今夜丈は君がどんなに云つたつて、君の間違ひだよ。あはは丶丶丶。』

然し盲人は默つたまゝ、卓子の上に見えない瞳を投げて居た。それは丁度無言の聲を聞く如く、又見えない姿を見出すものの如くにも思はれた。

『いや確かに居る。此の秘密會議を聞く爲に來た第六番目の男が、確かに此の部屋の中に居る。』

靜な水底から來る樣な凄味を持つた聲で盲人は云つた。

『私の右隣から順々に自分の名を云つて下さい。』

それは嚴とした命令だつた。人々は顔を見合はした。そして一人は口を開いた。

『君の右隣は僕だ。金澤だ。』

次いで順々に自分の名前を叫んだ。

『その次は中野だよ。』

『その次は此の家の主人、清

田だよ。』

『そして君の直ぐ左隣りには、この宮川が居るんだ。そして君と、それつきり誰も居ないぢやないか。』

一寸沈默が室を占めた。



突然、松木は顔を擧げたかと思ふと、ステッキを右手に持つて立上りざま、彼の左側の空間を突いた。

『ぢや此處に居るのは誰だ。』

彼の杖が空間を突くと同時に、一同は、

『アッ。』と云ふ殆んど聞きとれない位ではあつたが、確かに人の叫ぶ聲を聞いた。それは正しく杖で突かれた瞬間、人間が不意を喰つて叫んだ聲に違ひなかつた。

一同はすつくと立ち上つた。

然し何者も彼等には見えない。こんな不可思議なことがあるものか。呼鈴が鳴らされた。召使が現はれた。そして主人の命令によつて一家こぞつて、客の運轉手まで合はせて、家の内外を探索したが、人の忍込んだ模樣もなかつた。

一騷動の後、再び元の一室で會議を始めた時、もう松木宣人は何等の怪しさも感じなかつた。そして會議は無事終了さ

れた。

然し此の事は直ぐ世間に噂されるやうになつた。そして元來がこんな怪奇極まる話であつて、誰も事の眞相を掴むことが出來なかつたから、噂は忽ち尾に鰭をつけられて、幽靈屋敷のやうに云ふ者もあれば、講釋で聞いて來たその儘のやうな忍術使ひを喋々する者も、或はそんなことを全然信用しないで疑心暗鬼を生じたその五人の人人を笑ふ者も居た。

此の噂を聞込んだ當局は、世間に傳はる噂をそのまゝ信用する譯にも行かなかつたが又全然信用しない譯にも行かれなかつた。と云ふのは、今年に入つて、近々二ケ月の間に東京市内に於て頻々として起る盜難事件が、迚も人間業とも覺えぬ不思議な犯行だつたからである。一例を擧げると、某銀行では出納掛りが一寸油斷してゐる間に、千圓許りの紙幣が紛失したのであつた。



油斷したと云つても、僅か三十秒許りの間であつた。自分の机の上に置いて、一寸隣を向いて話してゐる間の出來事である。こんなことがどうして起つたのか、皆目見當がつかない。こんな解決のつけやうもない事件が、十件以上も起つてゐるのであ

る。して見れば、清田邸に於て起つたこの怪事件も、あり得ることではないか。

警視廳は躍起となつたが、何の端緒も得ることが出來なかつた。

二　不思議な客

信越線のK驛から一里餘りも離れたS村の方へと雪の中を歩いて行く人があつた。

三月も終りに近い或る日であつた。南の方ではもう暖い風が人々の心を浮き立たせ始めた頃だが、此の北に近い山國では未だ冬の最中であつた。冷い風が吹降し吹昇り、雪を捲いて吹いて來た。

旅人と云ふのは、厚い手袋をした手に小さい旅行鞄を携へ、全身を頭から足の先まですつぽりと包み、帽子をま深かに被つて、外部に現はれてゐるのは、彼の光澤のある大きな鼻の先ばかりの男である。



彼は村に入ると、直ぐとつつきにある旅館に入つた。夏ならば東京方面からの避暑客で何時も満員の此の村の旅館も、此の深い雪ではがら空きである。彼は土間の中に病人のやうに、よろけ入つて、旅行鞄を投り出すと、トンと足踏みをした。帽子や肩に積つてゐた雪がサラ〳〵と床に落ちた。

『火にあたらして呉れ。それから何か暖い物を。何しろ寒い。』

彼は、出て來た宿の主婦に怒鳴りつけるやうに云つた。彼女は客の風態を見て、夏は避暑に來る西洋人のためにわざわざ作つた此の村で只一つしかない洋室に案内した。

『早く、ストーヴと、それから温い物を持つて來て呉れ。』

客はさう云ひながら、テーブルの上に五圓札を投げ出した。その冬の間に此のS村に來る客なぞは、全くありはしない。で、主婦はほくほくして、部屋を出て行つた。

主婦はストーヴを焚き付けて、臺所に引返し、熱い茶を持つて、再び客室を訪れた。ストーヴは見事に燃え付いて、氣持よく暖かさうな焔がぱちぱちと流れ出してゐた。

然し主婦が驚いたことには、客は相變らず濡れた外套と帽子を脫いでゐないことだつた。背中を彼女に向けて、窓越しに降りしきる雪を眺めてゐる。手袋をはめた兩手を後に握り合はせて、何事か冥想に耽つてゐると云ふ模樣である。肩に殘つてゐた雪が溶け始めて、雫がポタ〳〵と床に落ちてゐた。

『あの、お外套とお帽子を彼方で乾かして參りませう。』

彼女は愛嬌よく云つた。

『いや、此のまゝで居よう。』

客は振向きもせずに答へた。然し雫は益々垂れて來るばかりであつた。

『でも……』

『いや、着て居た方が氣持がいゝんだ。』

主婦が再び云はうとするのを抑へ付ける樣に重い口調で客は振り返りながら云つた。彼は大きい青色の眼鏡を掛けてゐた。そしてその蔭からは深い空洞のやうな眼がのぞいてゐるやうに思はれた。主婦は氣味の惡い思ひで室を退いた。

雪の世界にも夕が訪れた。靜かな遠い山の邊りから段々と宵闇が迫つて來て、此のS村も白い清淨な黃昏時となつた。

主婦は夕食の用意をして、客間の扉を叩いた。そして又驚いたことには、客は未だに外套を脫がずに椅子に腰を降ろして窓越しに暮れて行く雪を眺めてゐるのであつた。

『お夕食を持つて參りました。』

彼女は料理を卓子の上に並べ乍ら云つた。

『有難う。』

客はさう答へはしたが、相變らず身動きもしなかつた。然し主婦が扉の外に姿を隱すや否や、彼は直ぐに卓子に向つて食事をとり始めた。

主婦が食後のお茶を持つて客間の扉を開いた時、客ははつとした模樣で、つと向ふを向いて、身體を屈めた。彼女はその時テーブルの陰に白い物を見たが、何か落したから拾つたのだらうと思つた。

彼女は恭しく茶碗にお茶を注いで客に勸めた。四つの眼がぴたりと合つた。客は如何にも狼狽を極めたと云ふ格好で彼女

を認識した。彼女も彼を見返した——と云ふよりは、驚きの餘り眼を瞠つたと云つた方がいゝかも知れない。

客はハンカチらしい白い布で顏を被うてゐた。口と顎とはその爲に全く隱れてゐた。彼の青い眼鏡から上は白い繃帶が捲いてあつた。そして耳にも。だから外部に現はれてゐる所と云つたら、その艶々した鼻だけであつた。——赤味がかつた、いやに光る鼻だつた。

手袋をはめた手でハンカチーフを握つて、口を押へたまゝ、彼は見徹すことの出來ない眼鏡の底からぢつと氣味惡い瞳で彼女を見詰めてゐる樣に見えた。彼女は釘付けにされた樣にぢつと立つてゐた。然しそれは事實は二人の視線の會つた瞬間のことで、彼女は直ぐにおづ／＼と、

『どうぞ、御ゆつくり。』

と云つたまゝ氣味惡さうに部屋を出て行つた。

客は彼女の去つて行く足音を聽耳立てゝ確かめた後、一寸窓の方を見やつて、口に當てたハンカチを取つて、再び食膳に向つた。が、何だか窓の方が氣になると見えて一口食べては窓を振返り、一口食べては窓を見た。それでも餘程窓が氣になると見えて、到頭立上り、ハンカチで又口を押へながら、窓に歩寄つて白い木綿の窓掛を引降ろした。部屋は急に暗くなつた。彼はやつと安心した模樣で落着いて食事を續けた。

主婦は臺所に歸つて未だドキ／＼する胸を押へ乍ら考へた。——きつと怪我か、それとも手術でもしたのに違ひない。そしてあんなに繃帶してるのお醜しいのに違ひない。それにしても彼の眼は如何も氣味が惡過ぎる。人間の眼ぢやない樣だ。それに何だか變な含み聲。あ、然しそれはきつと口の中に傷をしてるんだ。——彼女はまとまりもなく、それからそれへと、今しがた彼から受けた印象を思ひ返しては、色々と考へ込んでゐた。

然し此の客は口を手術したのでもなければ負傷したのでもない。その證據には主婦が臺所で考へ込んでゐる時には既に食事を終つて、彼はゆつたりと椅子に凭つて薫りの高い煙草を吹かしてゐたからであつた。だが、主婦が膳を片附けに部屋に這入るや否や、先刻の樣にハンカチで口を被うて煙草を啣へようともしなかつた。然し時々纏れ乍らたゞよふ紫の煙を眺めてる處を見ると、煙草のことを全然忘れてゐるとも思へなかつた。

彼は以前にも增して氣味の惡い、而も簡單な口調で話し出した。ストーヴの焰が時折彼の大きな眼鏡を凄く輝かした。

『K驛に荷物を預けてゐるんだが、取つて來て貰へないかね。』

『はい、承知致しました。』

『今日取つて來て貰へるかな。』

『さあ、今日と云ふ譯には參りませんが、明日の夕刻までには。』

『そいつは困つたな。馬車は出ないのかい。』

『さあ、何しろ此の雪で御存じの樣にあの坂道で御座いますから。』

それから彼女は此んな田舎の女がよくやる様に、長々とした話を始めた。客は始めはふん〳〵と聞いて居たが、段々その顔には堪へ切れぬじれつたさが現はれて來た。

『おい、マッチを貸して呉れないか。』

突然彼は叫んだ。彼女は仕方なく話を中途で止してマッチを取りに行くために部屋を出た。煙草に火をつけるにはストーヴで澤山だのにとは思つたが。

翌日はいゝ天氣で、雪道を彼の荷物は運ばれて午後には宿に着いた。

夥だしい荷物であつた。二つのトランクと書物を一ぱい詰込んだ二つの箱と、十以上もある箱――それは中味が壞れない様に藁で詰めてあつた。

客は帽子や外套や手袋で例によつて身を包んで、待ち切れないと云つた風に運送屋の降ろす荷物の傍に寄つて來た。處がその時であつた。今まで主人の足許でクン〳〵鼻を鳴らして居た運送屋の犬が客の姿を見ると不意に唸り始めて、彼が車に近づくや否やその手を目懸けて飛付いた。

『こら、こん畜生。』

運送屋は鞭を振り上げた。客は手を拂つて素速く犬を足で蹴つた。すると犬は身を躍らして客の足に噛みついた。ズボンの裂ける音がした。運送屋は鞭を擧げて犬を打つた。犬は殘念さうに荷車の蔭に隠れて、まだ歯を剝いて唸つて居た。

客は破れた手袋と裂けたズボンとを見て居たが、急に踵を返して家の中に飛込んだ。

『こん畜生、此處に出て見ろ。』

運送屋は鞭を振擧げて荷車の下を睨んだ。犬は主人の顔を窺き乍ら憐れみを乞ふ様に小さくなつて居た。

この騒ぎに驚いて一寸の間呆然と立つて居た主婦は、思ひ出した様に驚いて客の後を追つた。客間の扉は半開きになつて居た。彼女も狼狽へては居たし、別に氣に掛ける程のことでもないので、案内も乞はずに扉を開いて室に入つて行つた。

窓のカーテンが降されて室は薄暗かつた。そして彼女は驚きの餘り入口に突立つてしまつた。

腕頸のない様な手が彼女の方を向いて振られて居た。顔は大きな空洞の様な暗い陰になつてゐた。何と形容していゝか。唯兎も角不思議な顔附きである。まさか氣のせゐや室の薄暗さの僞ではない。彼女はキヤツと悲鳴を擧げて室を飛出した。

『おい、お前見たかい。』

玄關では運送屋と手傳人が荷物を降ろし乍ら話してゐた。

『何を。』

『今の男をさ。俺は如何も不思議でならねえんだ。彼奴は色の黒い奴だぜ。今俺は手袋とズボンの破れ目から見たんだが、人間とは思へねえ程の黒さだぜ。』

『だが鼻は馬鹿に赤くて光つてるぢやねえか。』

『だから可怪しいんだよ。奴はきつと混血兒だぜ。それも斑と來てらあ。』

『さうさ。犬も吠える訳さね。』
その時又車の下で犬が唸り出した。
『おい早く運んで呉れ。急いで。』
怒氣を充分に含んだ聲で叫び乍ら客が玄關に現はれた。以前と同じ服裝だつた。
『ズボンも手袋も換へて來てるぜ。』
運送屋は仕事をし乍ら相手の耳に囁いた。
先づ第一番に澤山の箱が運び入れられた。客は直ぐそれを開き始めた。傍に居る主婦なんか眼にも入らない風に詰め込んだ藥をそこら中一ぱいに散らかし乍ら、中味を取り出し始めた。夥多しい壜だつた。小さい廣口の粉末を入れたもの。色々に着色した液を入れたもの、毒藥とレッテルに書いた褐色のもの。劇藥と赤く書いた青色のもの、その他、フラスコだの、試驗管だのが、處狹きまでに部屋中に並べられた。異樣な臭氣が部屋に漂よひ始めた。戸棚から卓子の上から床の上まで、いゝ加減の藥屋には此れ程の藥は持合はせがあるまい。
やがて一通り荷物の整理が終ると、客は窓際に卓子を持つて行つて、實驗を始めた。そしてもう他のことは全然氣に懸けない模樣であつた。
主婦が夕飯を運んで行つた時も、彼は夢中であつた。彼女が部屋に入つたことも氣付かないらしく、藥壜の中か試驗管の中に液を垂らし込んで居た。ふと彼女が見ると、客は眼鏡を外して卓子の上に置いてゐた。そして主婦が聲を掛けるとハッとして振向いたが、彼女は彼の眼が酷く窪んでゐるのを見た。
客は眼鏡をかけてやをら身を振向けた。
『默つて部屋に入らない樣にして呉れ。』
明らかに憤りを含んだ言葉である。
『ノックは致しましたんですけど。』
『ノックはしたかも知れないが、——兎も角、僕の研究中は、非常に重要な實驗なんだから、それに一寸扉が開いても駄目になることがあるのだから、氣を附けて呉れ。』
『どうも濟みません。では、これから錠をお掛けになつて置いて下さいまし。』
『さうだ。さうしよう。』
主婦は膳を置いて出て行つた。
客はその夜中室に錠を降ろして閉ぢこもつてゐた。然し時々部屋を隅から隅まで歩き廻る音がして、又時に獨言を云ふのが聞えた。
『あゝ、もう駄目だ。駄目だ。俺は幸福にはなれないのだ。』
忽ち硝子の破れる音が聞えて來た。床に壜を投げ付けた模樣だつた。
『いや、忍耐だ。頑張るんだ。必ず成功して見せる。』
又さう云ふ聲も聞えて來た。そして靜かになつた。再び實驗を始めたのだらう。

× × × ×

此の不思議な逗留客がS村に來て三ヶ月の月日が割合に平穩に過ぎた。雪が溶け、花が咲き、青葉がすく／＼と萠え出した。

然し此の客が村中の好奇心を唆つたのは、事實であつた。不思議な容貌や奇怪な態度は、充分人々に疑念を生ぜしめた。彼は終日室に閉ぢこもつて實驗をしてゐたが、夕方薄暗くなると人の居ない場所を選んで散歩するのが常となつた。

村人の疑念は先づ或犯罪人が人相を隱す爲に彼樣に顏中繃帶して、此の田舍に潜伏してゐるのではないかと云ふ形式で現はれた。それから又少し物知りの男は、彼の男はきつと社會主義者で、爆發物の研究をやつてゐるのだと云ふ意見を出した。然し何事に依らず彼に對する噂は全然人々の想像によるものであるから、皆權威あるものとはならなかつた。唯だ彼が村での噂の中心となり、「怪物」とか「化物」とか云ふ綽名を餓鬼共に奉られたのであつた。そして人々は實際彼に怖れを抱き、又彼も村人に怖れを抱かせるに充分だつた。

村に細田と云ふ醫者が居た。例の內科、外科、小兒科、產婦人科等等等とペンキ塗りの看板を出してゐる男である。此の男は性來物好きな男であつた。その上「怪物」が繃帶をしてゐると云ふことが彼の職業的興味を唆り、又無數の藥品壜の存在は彼の藥學的研究心を興奮させて、是非折があれば彼の部屋を訪問して、村人の疑問を氷解させたいと思つてゐた。がその機會は中々惠まれなかつた。

醫者は少しせつかちで其の上圖々しい處を持つてゐた。で、機會の來るのを待つことが出來ずに、遂に或る日の午後、自分で好い加減の口實を作つて「怪物」の部屋を訪ねることに決心した。

彼は少々氣味惡くはあつたが、勇氣を振起して客間の扉を叩いた。そして部屋に入つて後の扉を確りと閉ぢた。

醫者の『御免なさい』と云ふ聲が聞えると、客の例のうるささうな返事が聞えた。そして其の後約十分許りは、何を話してゐるのか聞えなかつた。

突然、細田の頓狂な驚愕の叫聲と共に、烈しい足音、續いて椅子を投げる音、破れる樣な尖聲が聞え、さつと扉が開くと、眞蒼になつた細田が轉び出て、主婦に挨拶もせずに表に走り出した。部屋には乾いた空ろの樣な笑聲が未だ聞えてゐた。

細田は足を宙にして、彼の親友であり、此の村の知識階級である處の小學校の校長の宅をその足で訪れた。

『まあ話を聞いてくれ。尤も、始めから云つて置くが僕が今から云ふことはこれぱかしも噓は無いんだから、その積りで聞いて呉れ。』

細田は座敷に坐るや否や、急き込んで話し出した。

『何だい、そりや、落付いて話し給へ。』

校長は茶を汲んで勸めた。細田は勸められた茶を一息にぐつと飲んで大きく息を吐いた

『彼奴に會つて來たんだ。』

『彼奴つて誰だい。馬鹿に顔の色が悪いちやないか。え。』

『顔の色だつて變らうちやないか。例の宿屋に泊つてる「怪物」さ。彼奴に今會つて來たんだ。』

『ふうん。』

校長の顔にも明らかに好奇の色が現はれて早く話しを聞き度さうだつた。細田は未だ動悸の止まらぬ胸を押へ乍ら話し出した。

『實は彼奴の室に入つたんだ。いゝ加減の口實を作つてね。彼奴は兩手をポケットに突込んで、椅子に腰を降ろして何か考へてゐたよ。「貴方は科學的の研究をなさつてゐらつしやるさうですね」と僕が云つたのだ。すると彼奴は唯「えゝ」と答へた丈で鼻をフウ／＼鳴らしてるんだ。あれは感冒の徴候だよ。「自分の職業が醫者ですから、科學的の話が好きで、ついお近付きになり度いと思ひまして」とまあ斯んな風に話を進めて行き乍ら、絶えず彼奴や、そこいらに散らかつてゐる藥品や、試驗管等に注意をしてゐたんだ。「何の御研究ですか」と尋ねると「永い間の苦しい研究ですよ」と云つてね、如何にも時間が惜しいと云つた風に立つて實驗を始めるんだ。そして時々藥品の處方を書いてゐるんだ。非常に重要らしいものなんだ。で「何の處方ですか」と問いて見たら、とう／＼怒り出してね。「うるさい」と云ふんだ。癇癪持ちらしい。これから又何か書き出してね、五行許り書いた時一寸此方を振返つたのだ。其の時窓から風が入つたと見えて、其の紙切れが吹つ飛び、爐の中に落ちてペラ／＼燃え出した。彼奴は急いでそれを拾はうとして手を延ばした。其の時だ。君、僕は一體何を見たと思ふ。』

醫者は自分の話に効果を與へる爲の如く一寸言葉を切つた。

『腕を出したんだが、君、其處には手が無いのだ。指も無いんだ。ほんとうを云ふと腕だつてありやしないんだ。空つぽの袖がヒラ／＼と空に動いた丈なんだ。僕はオヤ腕無しか。と思つたね。義手を附けてゐて、丁度その時は外してゐたんだとね。然しふと考へて見ると、可怪しいぢやないか。腕のないのに如何して袖が空に動くんだ。如何して袖口が開いてるんだ。どんなに氣を附けて見たつて、無い物はない。僕は肘の邊の着物の破れ目から光線の洩れてゐるのまで見たんだよ。驚いたね。だから思はず「アツ」と叫んだんだ。すると彼奴はあの嫌な眼でギヨロリと僕を見て、それから自分の袖を見た。そして一言も云はず靜かに袖をポケットに收めたんだ。で僕もそのまゝ默つてればよかつたのだけれど、いやに彼奴が睨むものだから、つい「空の袖では駄目ですね」と云つて了つた。「空の袖」彼奴が聞き返すのだ。それから「君は空の袖を見たんですか」と云ひ乍ら彼奴は立上つた。僕も立上つた。彼奴は僕に近附いて來た。鼻をグツつかせてね。あの繃帶した頭、眼、鼻の色、それ丈で、もうぞつとするには澤山だ。それに彼奴は靜かに近寄つて來るんだ。「空つぽの袖だと云つたな」彼は念を押す樣に叫んで、もう一度ポケットから袖を出して僕の眼の前に出すんだ。僕は怖くなつたね。然し見る丈は見たよ。勿論何もない。

彼奴は靜かに腕を動かした。カフスが僕の顔から六寸位迄で近附いた。考へて吳れ。空の袖がかう云ふ風に近づいて來るんだからね。思ふ丈でもゾッとするよ。處がだよ。もつと不思議なことが起つたんだよ。いゝかい。僕の鼻柱をね、何だか指先見たいなものが摘むんだよ。』

校長は今まで興味にひかれて眞面目に聞いてゐたが、到頭クスクス笑ひ出した。此の聖代に而も相當の科學的な教養を受けてゐる細田が話すには餘り馬鹿氣てゐる。これで細田が眞面目なら細田の精神狀態を疑はなければならない。然し細田は精神錯亂でもないし、又大眞面目なのである。

『何も無いんだ。鼻柱をいやと云ふ程摘まれてはゐるのだが、其處には何も見えないのだ。不思議ぢやないか。君は笑つてゐるが、決して笑ひ事ぢやない。考へ出した丈でも身の毛がよだつね。そこで僕は苦しいものだから、彼奴のカフスをうんと強く突いた。そして摘まれた手が離されるや否や、轉ぶ樣にして逃げて來たんだ。』

細田はやつと話し終つて注ぎ足された茶を一息飮んでつけ加へた。

『そしてね。カフスをウンと突いた時に、僕は其處に如何も腕があるやうに感じたんだ。然し眼には見えない。影さへもないのだ。』

細田は怖ろしさうに今更の如く身慄した。

『これが現實の話たら、全く不思議な出來事だた。』

校長も細田の眞面目さに半信半疑で深く考へ込んだ。

三　家具の舞踏

それから數日を經た或朝の出來事であつた。宿の主婦は夜明け方の靜かな闇の中にふと眼を醒した。夢の中の樣に戰慄の戶が開いて又閉ぢられたのを聞いた樣に感じたからであつた。彼女は最初は眼を闇の中で開いたまゝぢつと聞耳を立てゝ居たが、確かに隣の室から廊下へと出て行く人の足音を聞いたので、直ぐ横に寢て居る夫を搖り起した。

起された夫は半信半疑でこれも暫くぢつと闇の中で耳を欹てて居たが、今度は確かに帳場の方で何か紙をカサ〳〵云はしたり、又不意に嚔をする聲を聞いたので、猶豫はならないと思つて、其處にあつた心張棒を摑みながら忍び足に出て行つた。

もう四時を過ぎた頃で、戶外は薄明が訪れて來る頃であつたが、戶の鎖された家の中は眞暗であつた。黎明の靜けさが四邊に漂つてゐた。唯だ帳場の方で忍び足に步く人の足音や、机の抽出しの開く音や、紙のカサ〳〵云ふ音が人の囁やきの樣に聞えて來る。と、忽ち人のブツ〳〵云ふ聲が聞えて來て、マッチが擦られ、帳場は黃色い光の中に照らし出された。主人は次の間まで來た。そして戶の隙間から彼の机や、開かれた抽出や、燃え出した蠟燭なぞを見ることが出來た。然し部屋の何處を見ても曲者を見出すことが出來ない。呆氣にとられて立つてゐる主人の肩越しから、主婦も覗き込んだ。

夫婦は忽ち貨幣のチリン／＼と云ふ音を聞いた。机の抽出の手提金庫の中には紙幣と貨幣と合はせて三十圓計り入れて置いた筈だつた。

斯うなれば只覗いてゐる譯にも行かない。主人は覺悟をきめて心張棒を握り締め、さつと戸を開いて室の中に飛び込んだ。

『此の野郎。誰だッ。』

力一ぱいの聲で叫んで、叩きのめす勢で身を構へたが、彼はその儘立竦んでしまつた。たつた今此の部屋に人の動く氣配を感じたのに、飛込んで見ると誰も居ない。狐にでもつまゝれた樣な話だ。夫婦は机の下とか、衝立の陰とか、その他、人間が隱れられ相にもない處まで探したのだが、誰も見當らなかつた。

『誰か確かに居たと思ふんだがな。』

主人は不審さうに呟いた。

『蠟燭が――蠟燭が點いてゐるぢやないの。』

主婦は頓狂な聲を擧げた。

さうだ蠟燭が……引出しも……あゝ、金が失くなつてゐる！

此の時夫婦の頭に殆んど同時に浮んだことがあつた。

『あの客が怪しい。』

彼は二月から永逗留の間、實際金離れがよく、宿との金錢上の關係も實に寛やかにして來たが、如何したものか一昨日十日分宿泊代を請求すると、何時もに似ず、今金がない、直ぐ郷里から送つて來るから待つて吳れと云つたのであつた。而もその客の容貌、態度、それに村でも噂される怪しい種々の話。彼等夫婦が今眼の前に奇怪な事件を見た時、直覺的に客間の男の事を思ひ出したのも決して無理ではないだらう。

彼等は思ひ合はした樣に客間の方を見た。

それから夫婦は忍び足に客間に行つて扉の前に立つた。靜かなものだ。物音一つ聞えない。輕く二つノックをして彼等は扉を開いた。室の中は彼等が豫期した樣に寢床も、椅子の上も、室の中には人影も見えない。たゞ不思議なことには、客の着物――客は此の洋服の他には持つて居ない筈だつた。――や、繃帶が、椅子から寢臺へとだらしなく掛けてある。彼の帽子は寢臺の棒に引掛つてゐるし、靴はキチンと揃つて並んでゐる。

彼等が其處いらを調べて居る時、扉が素早く開いて又閉ぢられた樣に思つた。二人は振返つて見たが、何も變つたことはない。主人が寢臺の下を覗いてゐる時、室の反對側で嚏する聲を聞いたが、多分妻がしたのだらうと氣にも掛けなかつた。然し妻の方ではさう云ふ譯には行かなかつた。衣類戸棚を開いて調べて居た主婦は、自分の直ぐ近くで人の嚏を聞いた樣に思つたので振返つて見ると、夫は寢臺の下に屈み込んでゐるではないか。彼女は襟元に水をかけられた樣に思つた。

『ねえ、お前さん。變だよ、少々。』

彼女は夫の處に歩み寄り乍ら云つた。

『少々ぢやねえや。大きに變だよ。』

彼は床の中に手を入れて見た。

『冷てえ。ずつと前に起きたんだな。』

その時であつた、餘りの恐怖に二人は抱き合つて立竦んだまま聲も擧げ得なかつたのは。誰だつて驚くに違ひない。其處にあつた衣服が自然に集つて、一つの山の樣な格好になると、それがヒラリと寢臺の欄に引掛つた。と、今度は帽子が宙に飛び出して、フワリ〳〵と空中を浮び、立つてゐる二人の眼の前で二三回宙返りを打つた。その次には卓子が足踏をし出す。椅子が奇妙な舞踏を始めたかと思ふと、客のズボンや袖の方に吸付いて行く。不意にどういふ譯でか分らないが、客に似た嗄れた笑ひ聲が起つたかと思ふと、寢臺の四足が堂々たる歩調で彼等の方へ寄つて來た。キヤツと悲鳴を擧げた彼等は、寢臺に押出される樣に室を出たが、彼等の後で扉はピシヤリと閉ぢられて、錠が掛けられた。暫くの間は椅子や寢臺の舞踏の音が聞えて居たが、不意にピタリと止んで、靜かになつて了つた。

主婦はその儘氣を失つて了つた。そして頻りに譫言を云ひ始めた。

『あれは靈魂なんだよ。彼奴がその靈魂を吹き込んだんだ。あの客をうちから追出して呉れ。……あの大きなギヨロ〳〵した眼や、繃帶した頭、それにあの數知れぬ藥壜、何を仕出かすか判りやしない……』

主人は失神してゐる妻も氣懸りだつたが、事件も大いに彼を興奮させたので、妻は女中に任せて置いて、彼は表に飛び出して行き、村人にこの前後未曾有の大珍事の詳細を報告した。村人は次第に聞傳へて、彼の家の前に集つた。

『兎も角もその客を盗人の嫌疑で捕縛したらどうだ。』

村で一番の智惠者の鍛冶屋の吉造が分別さうに云つた。

『さうだ。それがいゝ。』

と誰かが答へると、村の警官を呼びに出かけた。

村の主だつた者は皆帳場に坐つて、勝手な意見を吐いてゐた。もう大分時間が經つて、十時過ぎであつた。客間からは頻りに呼鈴が鳴つた。然し主人を始め誰も行つて見ようと云ふ者はない。呼鈴は益々烈しく鳴る。遂に堪へ切れなくなつたと見えて、客間の扉の開く音が聞えると、間もなく帳場に例の、帽子を冠り外套を着、手袋をはめた客の姿が、現はれた。

『おい君、今幾時だと思ふんだ。君んとこぢや客に朝食を食はせない積りかい。』

彼は怒りに堪へぬもの〻如く叫んだ。

主人は、斯う客が姿を眞面に表したので、少々氣味は惡いが、殊に大勢屈強な男の居る前だから、力強く感じた。

『朝食は差上げますがね。その前に御勘定を戴きませう。』

『今は金がないが、近い中に送つて來るからと、昨日も云つといたぢやないか。』

『私達も商賣ですからね。只でお泊めする譯にや參りませんや。それに今朝程は一體貴方は何處に行つて居たんですかい。そして又一體何時何處から部屋に入つたんです。私達の家にはね、ちやんと入口てえものがありますさあ。お出入りは其處から願ひませう。』

一同は心の中で『しつかりやれ。』と應援してゐた。客は一寸逡巡つたが、静かに云ひ出した。

『ぢや、金は拂はう。拂へば文句はあるまい。今取つて來るから待つてろ。』

客は立去り掛けた。主人は引止めた。

『一寸待つて頂きませう。昨日貴方は金は一文もないと仰有つたぢやありませんか。今拂はうと仰有る金は何處から持つて來たんです。伺ひませう。』

客は當惑さうな身振りをした。

『何處つて、あるのを忘れてゐたんだ。それを今思ひ出したんだ。』

『冗談云つちや困りますぜ。三日も四日も金のある場處を忘れてゐて、今不意に思ひ出すなんて。――ねえ、旦那、これや別の話ですがね。今朝程、私の家に盗人が入りましてね、金を持つて行つたんですよ。丁度旦那が居ない頃ね。』

『何だと。』

『なあにね。うちの金がなくなつて、旦那の所に金が出來たつて話でさ。』

主人は嘲いた。客は燃える様に怒つた。

『默れ！』

客の聲が餘り大きかつたので流石に主人もたじ〱となつた。

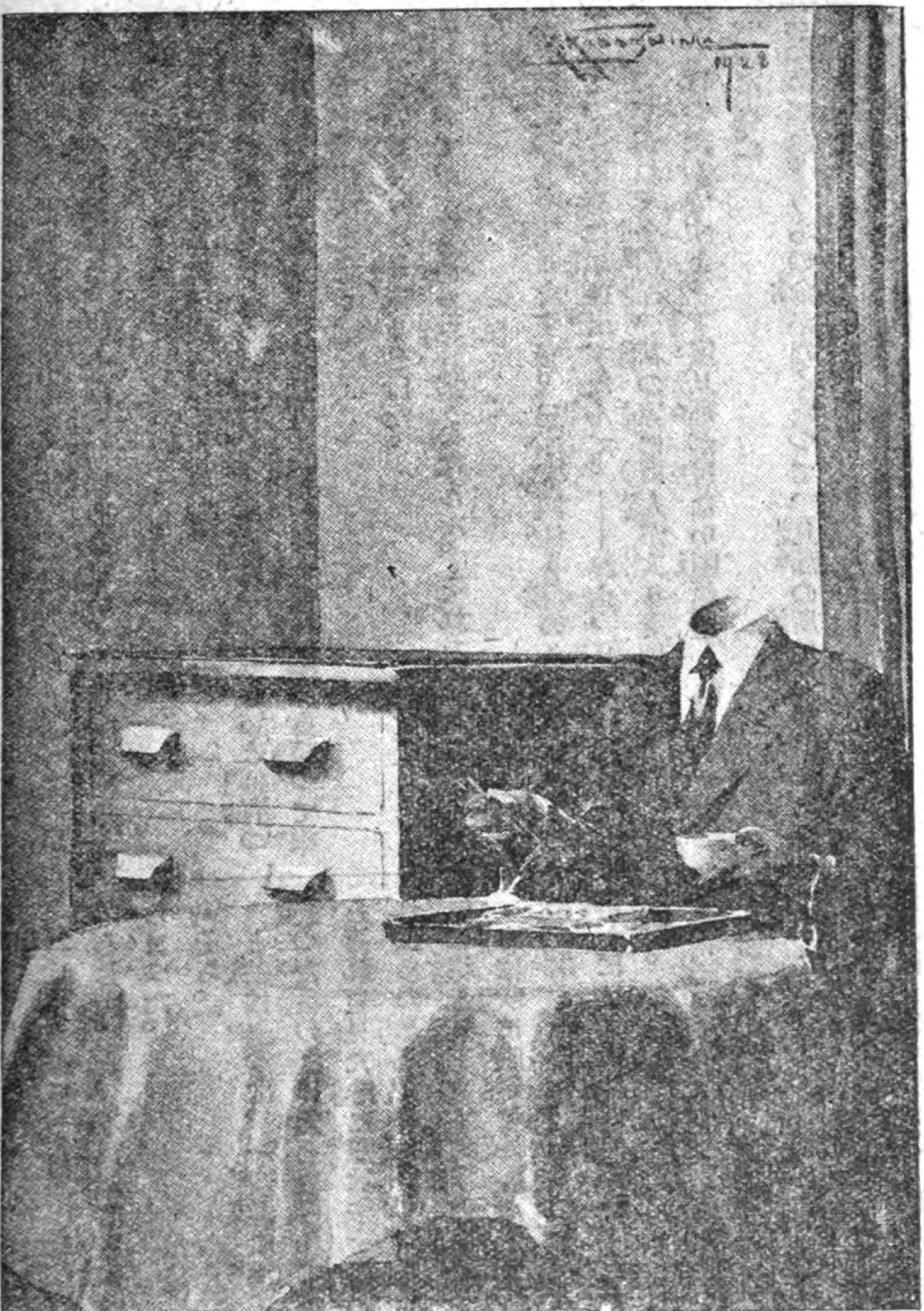
『貴様等は此の俺が判らないんだな。よし、お前達に見せてやる。よく眼を開いて見てろ、騒ぐな。』

彼はさう云ひ乍ら右手を顔に當てたかと思ふと、直ぐに手を降ろした。と、不思議にも彼の顔の眞中は眞黒な空洞になつてしまつた。

『そら。』

と彼は云つて、一歩前に出て亭主に何か渡した。亭主は急に變つた彼の顔に氣を取られて、無意識にそれを受取つたが、ふとそれを見た時に思はずそれを取落した。それは鼻だつた。それはあの鼻だ――赤くてか〱と光つてゐる――それはボール紙の様な音を立てて床の上に落ちた。

客は次に眼鏡を外した。それからゆるやかに帽子を取り、繃帯を解き始めた。居合はせた人々は何となく恐怖に滿された。静かに〱繃帯は除かれて行く。人々はぢつとそれを凝視してゐる。と不意に誰かゞ『アヽ！』と叫んで表の方に飛び出した。今まで大勢を恃んで空元氣を出してゐた人々も、此の一人の動搖によつて、それが崩されて一齊にてんでに恐怖の叫聲を擧げて、表の方へ逃げ出した。もう斯うなると、誰も他人のことなんか考へてゐる暇はない。我先きに逃げ出す人々は狹い入口で押し合ひへし合ひ、足は踏まれる、手は引掻かれる。そしてその騒動は益ゝ大きくなつて行つた。それもその筈である。――何もないのだ。空中に繃帯がヒラ〱してゐるのだ。客は人人の此の騒ぎを見て何か手振りをして説明しようとしてゐるが、その外套の襟から上は何もないのだ――



村の人々は此の騷ぎを見た。宿屋から群集が折重つて轉び出る。叫び聲や、泣き聲がこんがらかつて聞える。そして一通り騷ぎが靜まつた頃には、宿屋の前には村中の人々が全部集つたかと思はれる程の人だかりだつた。問ふ人、答へる人、誰も一時に口を出すから、蜂の巣をつゝいた樣な騷がしさだつた。

『なんだつて、そんなべらぼうなことがあつて堪るかい。』

『それが堪るから仕方がねえぢやねえか。俺達は此の眼で見たんだ。』

『だつて、首がなくつちや歩くのに見當がつかねえぢやねえか。』

『そして今彼奴は何してやがるんだ。』

『何でもぶる〲慄へる女中を引張つてつて飯を食つてるらしいよ。』

『馬鹿云ふねえ、首がなくて飯が食へるか。大笑ひさせやがら。』

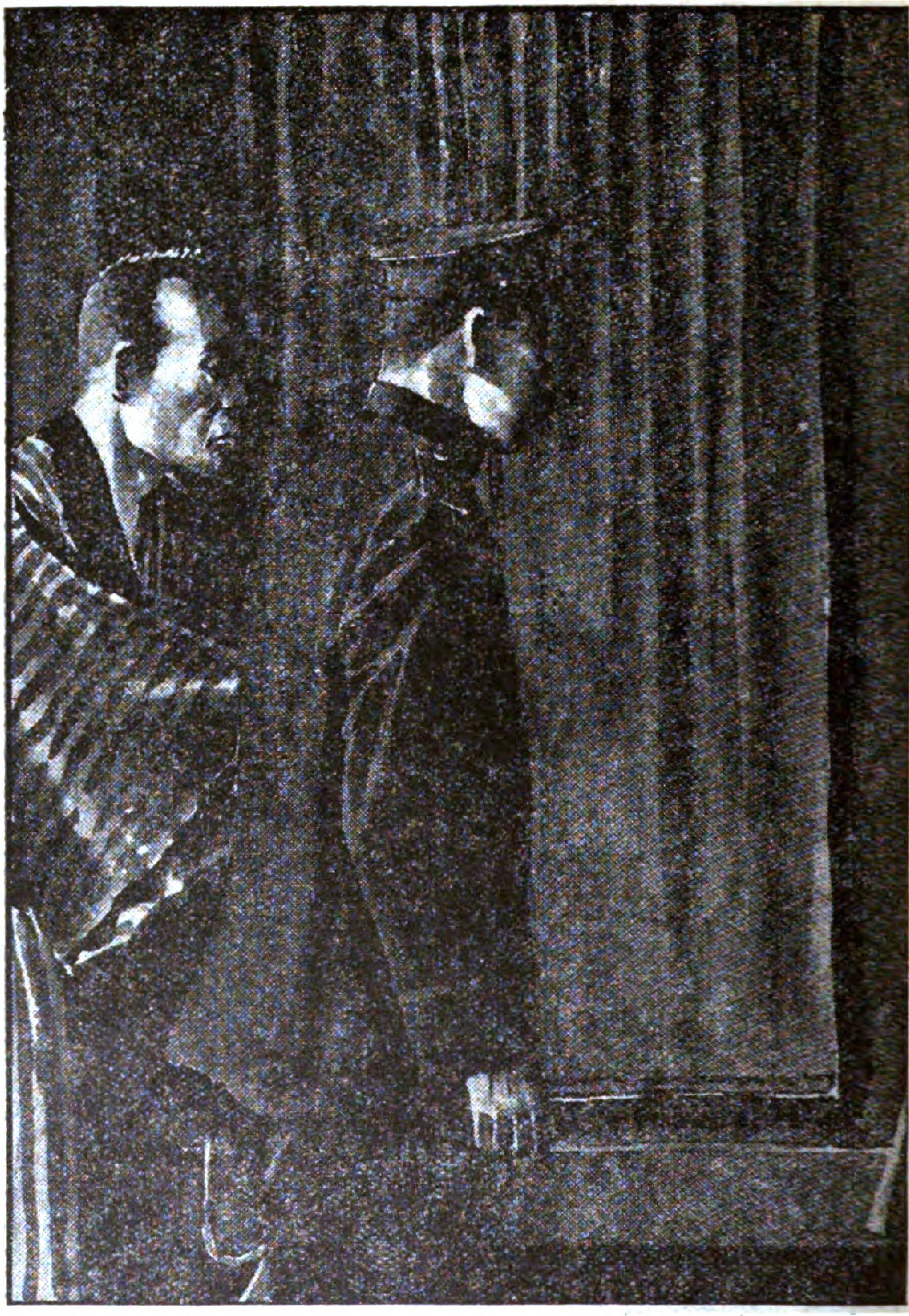
人々が勝手なことを喋舌つてゐる時に、表から生眞面目な顏をした一群が人々を押分けて這入つて來た。先頭に立つたのは、鍛冶屋の吉造で、次いで來たのは、村の駐在巡査であつた。

一同はぞろ〱と客間に行つた。客間の扉は開け放しであつ

た。室の中には卓子に向つて手袋をした片手に箸、片手に茶碗を持つた首なしの男が、椅子に腰を降ろしてゐた。

『彼奴ですよ。』主人が巡査に指して教へた。

『又來たのか。うるさい奴等だ。』怒氣を含んだ聲が襟の上の方から聞えた。



『一寸お訊ね致し度いことがありますから、警察に同行を願ひます。尤も貴方には頭がありませんが、命令書には身柄と書いてありますから、職務執行には一向差支へないと思ひます。』

警官は極丁寧に而もいいと嚴然と云ひ渡した。

『やかましい。出て行け。』

頭のない胴體は一歩退いて叫んだ。忽ち箸と茶碗は群集の中に投げられた。吉造はいざと云はゞと携へて來た仕事用の槌を握りめして身構へた。客の左手の手袋が飛んで來て警官の横面に當つた。警官は突嗟に走り寄つて、客に抱きつき頭のない首元を締めつけた。向ふ脛をいやと云ふ程蹴られた。二人は取組み合つたまゝ倒れた。そして轉がり乍ら爭つた。

『脚をつかまへて呉れ。』

警官は叫んだ。吉造は急いで云はれた樣に摑へようとして胸

板を蹴られて、ウンとふんぞり返つた。此の時如何した機會か棚の上の藥壜が二つ三つ轉げ落ちたと思ふと臭い刺戟性の臭氣が室に漂ひ始めた。

　死に者狂ひに武者振り付いて來る警官の手からやつと離れた客は喘ぎ作ら突立つた。首もなければ、兩の手もない。手袋は何處かにけし飛んで了つてゐる。入口には十重二十重に人々が折重つてゐる。客はそれを眺めてゐる風であつた。警官も立ち上つた。手には二つのカフスを摑んだまゝである。

『此奴はいけないぞ。』客は呟いた。空隙の處から人聲が聞えて來るのは、實に不氣味だつた。彼の空の袖が動き出した。そして不思議なことには手のない袖が洋服のボタンを外し始めた。それから脛の邊で鼻をぐづつかせる音が聞えたかと思ふと、編上げの靴の紐が解かれ始めた。

『おい見ろ、此りや人間ぢやねえぜ、空の着物だ。襟んとこから下まで突き抜けぢやねえか。俺の腕だつて突つ込めらあ。』

　入口の傍で小さくなつてゐる誰かゞ云つた。突然空の着物が物を云ひ始めた。

『事實、僕は此處に居るんだよ。頭だつて足だつて手だつて、皆此處にあるんだ。唯だそれが眼に見えなくなつた丈なんだ。君等にも、僕にも迷惑至極なことには相違ないが、事實さうなんだから仕方がないぢやないか。』

　彼はさう云ひ作らボタンを皆外して了つた。着物は臂を張つた體で支へられて立つてゐる。唯だ何にも見えない丈である。

『ウン、見えねえ。奇體だなあ。』鍛冶屋が呟いた。

『そりや、君等から見りや奇體かも知れない。然し見えないからと云つて罪にはなるまいぢやないか。何故警官は僕を捕縛しようとするんだ。』

　警官は決死の勢で前に出た。

『吾輩は警官だ。職務を持つと同時に、職權を持つてゐる。吾輩が君を拘引するのは君の身體の問題ぢやない。今朝或る人の訴へによつて、君を竊盜の嫌疑で……』

『何だと、馬鹿なことを云へ。』

『だが職務だ。仕方がない。云ひ度いことがあるなら、署で云ふがよからう。』

『さうか。ぢや、行から。だが待つて吳れ。此のまゝの服裝ぢや行けないぢやないか。』

　彼はさう云つて人々から離れた寢室の方に歩み寄るや否や、靴や、靴下や、ズボンなぞを寢臺の下に蹴込んで、人々が呆氣に取られてゐる間に外套と上衣をかなぐり捨てた。

『あ、いけないッ。』

と警官は突嗟に叫んで走り寄つて彼のチョッキを摑へた。然しそれは身體を滑べり拔けて警官の手に空しく殘つた。

『それ。捕へろ。度着物をぬいで了つたらそれ限りだぞ。』

　警官は叫んで白いシャツばかりの客を追掛けた。

『捕へろ。――こん畜生。――』

　人々はヒラ〳〵室中を動き廻るシャツを目掛けて押寄せた。

シャツの袖がいやと云ふ程、宿の亭主の鼻柱を毆つた。鼻血がさつと迸つた。一同があつと驚いて居る瞬間、シャツの二本の袖が延ばされて左右に動いた。

『いけねえ。』

鍛冶屋と警官は一緒にそのシャツを引張つたが、彼等は客がシャツを脱ぐのを手傳つた丈だつた。警官は突然空中から頭を擲られて、帽子はふつ飛んだ。彼は興奮して拔劍した。鍛冶屋も、前に居た二三人の者も、矢庭に頭や顏を毆り付けられた。

『氣を付けろ。何處から來るか判らねえぞ。』

『そら捕へろ。扉を閉めつちまへ。逃すな。——そら此方に來た。——痛えつ。』

人々は口々に罵り乍ら空中をてんでに引掻き廻した。大抵の者は擲られた。紙で鼻に栓をかつてゐる主人を始め、鍛冶屋は前齒を折られ、酒屋の小僧は向ふ脛を蹴られて跛を引くし、大混雜だつた。闇の中の喧嘩ならどちらも見えないから五分々々だが、これは此方だけが見えずに彼方は見えるのだから、始末におへない。途中から來る鐵拳の雨は、止まうともしない。

鍛冶屋の吉造は前齒を折られて顎を抱へて居たが、不圖自分と隣りに居た藥屋の主人との間に何者か居るのを感じた。彼は夢中で手を延ばして捕へた。筋肉の堅い腕を掴へた。と、急に彼は横なぎに倒れてバタ／＼藻搔き始めた。

『捕へた。捕へた。』

齒を喰しばつて青筋を立てゝ一人で取組をしてゐる姿は、實に不思議だつた。人々はその周圍を取圍んだ。だが、如何して吉造を助けていいか見當がつかなかつた。警官は拔刀して横で頑張つた。

二人は格鬪し乍ら扉の方に近附いた。が遂に室を出て、其處から玄關の土間に階段を三段轉げ落ちた。

『あつ、逃げる。』

吉造は轉げ落ちた瞬間手を緩めたので、客は逃げ出さうとしたらしかつた。吉造は兩手を延ばして、何物かに縋付いてゐる樣な工合でその儘二三尺引きずられて行つた。

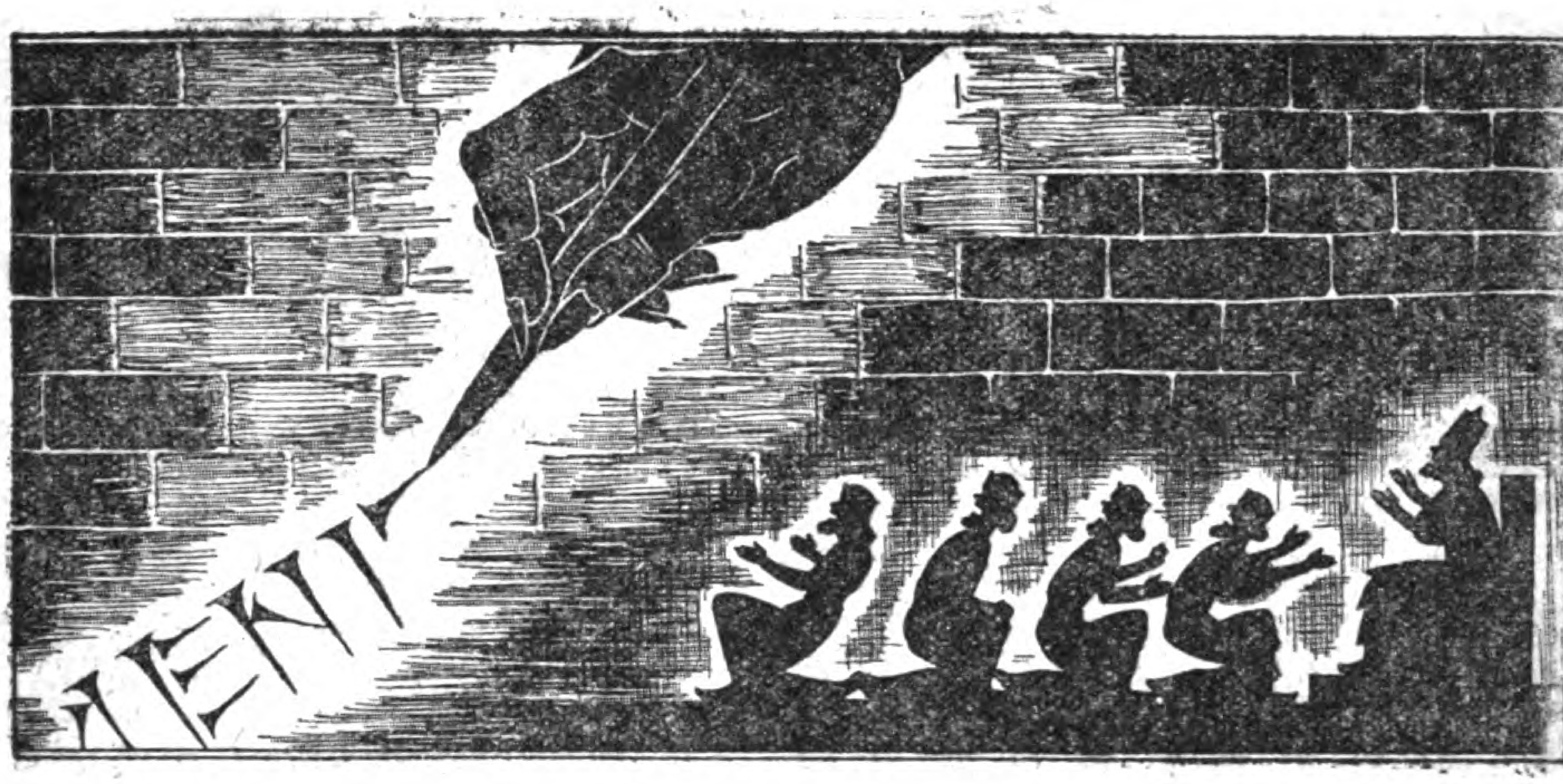
もう仕方がないと思つた警官は、此處ぞと思つた邊りに見當をつけて、氣合諸共、帶劍で切り降ろした。

『あつ、やつたな。』と云ふ聲が空中で聞えたと同時に吉造はウンと一聲呻いてぐつたりとなつて了つた。

『そら玄關を閉めろ。』

一番近くに居た者が素早く戸を降ろした。然しその時、表で中の樣子を覗いてゐた女共は、何物かと不意にすれ違つて悲鳴を擧げた。犬は何かに物怖ぢしてけたたましく吠え立てた。人人は驚愕の爲にボンヤリと立つてゐる。まるで魔物の通り過ぎた後の樣に……。（つゞく）

奇怪！　奇怪！　人々の憤怒と焦燥を尻目にかけ、忽焉と姿を消して疾風の如く逃去りし怪人の行動や如何？　本篇は架空の探偵小說に非ず。筆者は小壯有爲の科學者。果してこの驚異すべき科學的大問題に對し如何なる解決を下さんとするか。次號を待て！



大宰相と獅子（口繪參照）

野邊地天馬
早川桂太郎畫

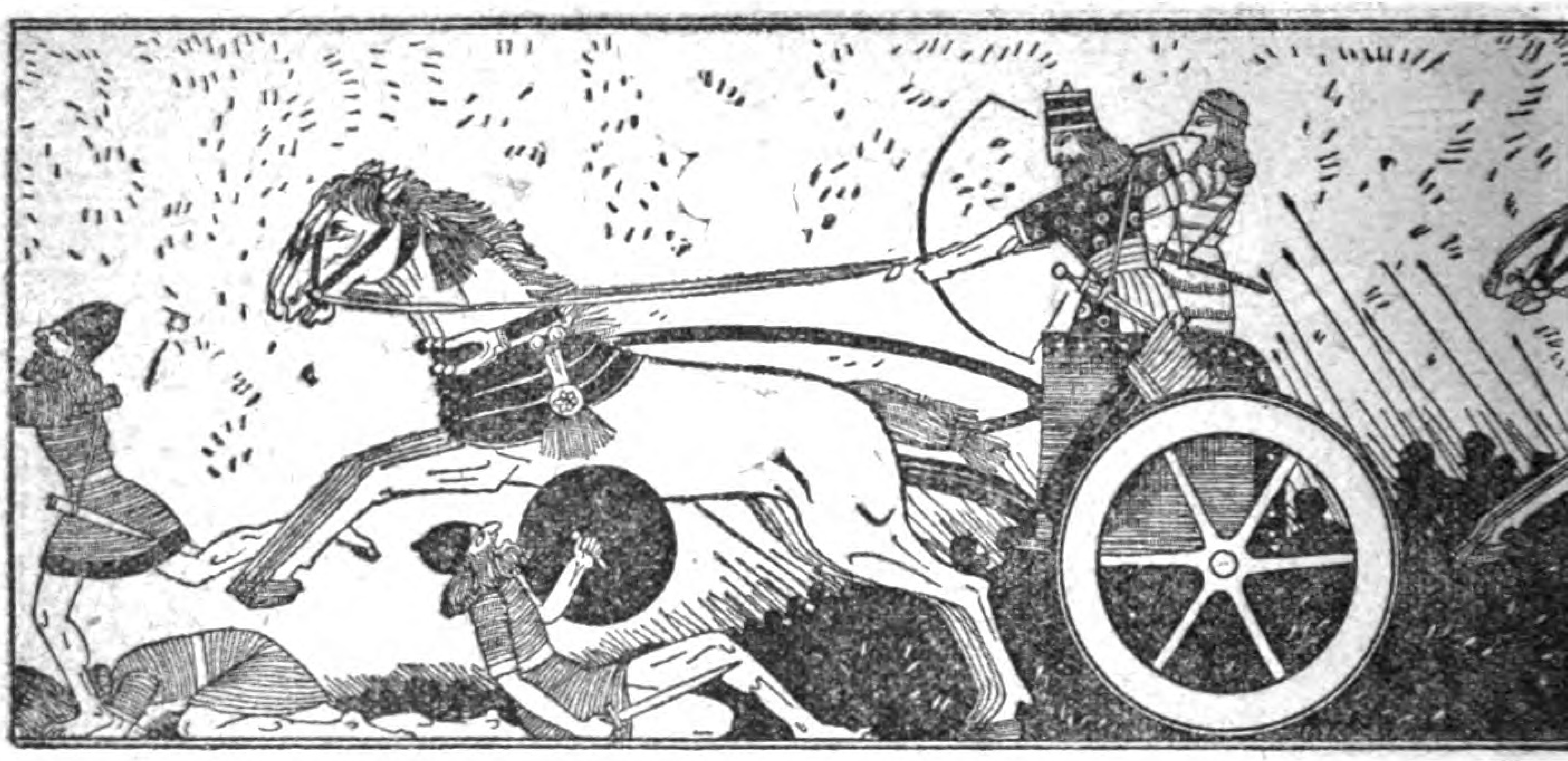
あはれバビロン

その昔、バビロン王國は世界の征服者として、この上もない榮華を極めたもので御座います。時の王ネブカデネザルは武勇のすぐれた方で、小鳥を追ふ鷲のやうな勢で、四方の國々を侵略いたしました。

しかるに、その後を嗣いだのは王子のベルシヤザル、これは父君に似ぬ亂暴な我儘な方で、人を人とも思はず、家來を牛馬のやうに心得てゐる、恰も羅馬のネロ帝みたいな王でした。

さて或る日のこと、王は重立つ臣下一千人を召して、盛んな宴會をお催しになりました。そして列なる大臣、大將、また富豪や學者をお眺めになり、これが自分の家來である、自分ほど偉い者は世界にあるまいと頗る得意。次第に酒がまはる夜が更ける、王をはじめ重臣ことごとく醉うて醜體亂舞する、その時でした、一陣の物凄い風がさつと吹いて來て、眞晝のやうに明るい燈火がすうツと消えたと思ふと、宮殿の壁に大きな手が見えて、不思議な文字を書きました。

それを見た一同は蒼くなる、誰一人讀める者はない、學者も智者も何の文字かわからない。その時、父君が嘗てイスラエルから、捕虜にして來たダニエルといふ者が召出される事になりました。この人は非常に賢い方で、ネブカデネザル王には重く用ひられましたが、ベルシヤザル王はとかく忠義な家來や賢い部下が氣に入らない、ダニエルも敬遠されて、そ



の夜の宴會にも招ばれませんでした。

夜半に呼び起されたダニエルは、王のお召しと聽いて取るものも取敢へず伺候いたしましたが、その不思議な文字を讀めとの仰せに、はら／＼と涙を流しました。それは讀めないのでなく、大變なことが書いてあるためで御座います。

『ダニエル、其方ならば讀めるだらう。』

『はい。』

『早く申せ、早く……。』

『では申上げます。恐れながら王さまも御運がお盡きになりました。この國はメデヤとペルシヤに分けられると書いて御座います。』

『な、なにと申す、この國が……？』

『はい、左樣で御座います。あの文字はメネメネ、テケル、ウパルシンと讀みまして、この國がメデヤとペルシヤに分けられると申すので御座います。』

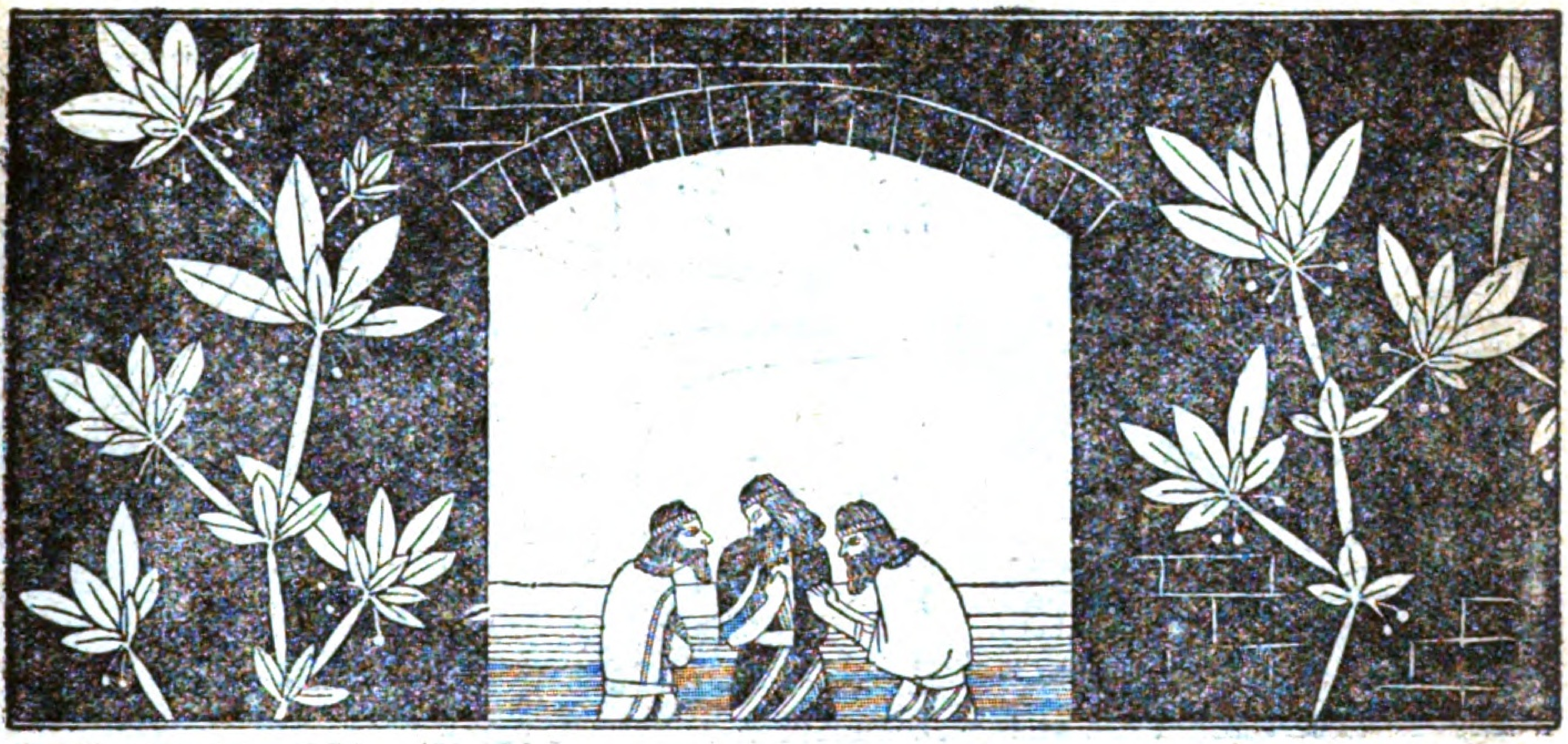
とダニエルは、震へあがつてゐる王に挨拶して御前をさがりましたが、間もなく聞ゆるラツパの音、つゞいて起る鬨の聲、すはやといふ間もなくバビロン城は敵に攻め込まれ、忽ち王宮へなだれ込みました。

こちらは何の用意もあらばこそ、大臣大將みな醉ひつぶれてゐますから、たゞ薙ぎたふされ、斬りまくられるばかり、一夜のうちに、さしも榮華を極めたバビロンが亡びてしまひました。

大宰相

バビロンを占領したのは、メデヤの王ダリヨスで、この人はダニエルの偉いことを聞いてゐますから、その者を大臣にしたなら、新しい領土を治めるに好都合と思召し、たつてその承諾をお求めになりました。

そこでダニエルは、大任をお受けしましたが、メデヤから來た大臣たちの威張るのに引替へて、非常に柔しく謙遜で、慈愛に富んだ政治をしますので、人民は誰も彼も心服してしまひました。そこでダニエルの評判は大したもの、ダリヨス王もその樣子に益々信頼し、間もなく總理大臣の椅子をお授けになりました。



いくら出世をしてもダニエルは、いよいよ慈愛を以て民に臨みましたので、氣遣はれたバビロンの統治はます／＼圓滿に、少しも面倒な事が起りませんでした。

けれども困つたことに、他の大臣たちは、

『あのダニエル奴、新參者でありながら、我々を淩ぐ出世、そしてあの評判のすばらしいこと、あれが居ては我々の出世が覺束ない、何とかして追出す工夫はないものか。』

と相談して、厭なこと面倒なことは、何でもダニエルに押しつけましたが、ダニエルはどんな事でも、さつさとやつてのけますから、する事なす事あざやかなもの、そこで彼等は恐ろしい事をたくらみました。

と言ふのは、ダニエルは天地の造主なる神を信じてゐます、どんなことがあつても禮拜してゐます。それを王に願つて止めさせて、巧いゆきがかりをつけて殺さうといふのです。

そこで大臣どもは、ダリヨス王の許へやつてつて、勿體なくも言葉巧に王を欺いて、

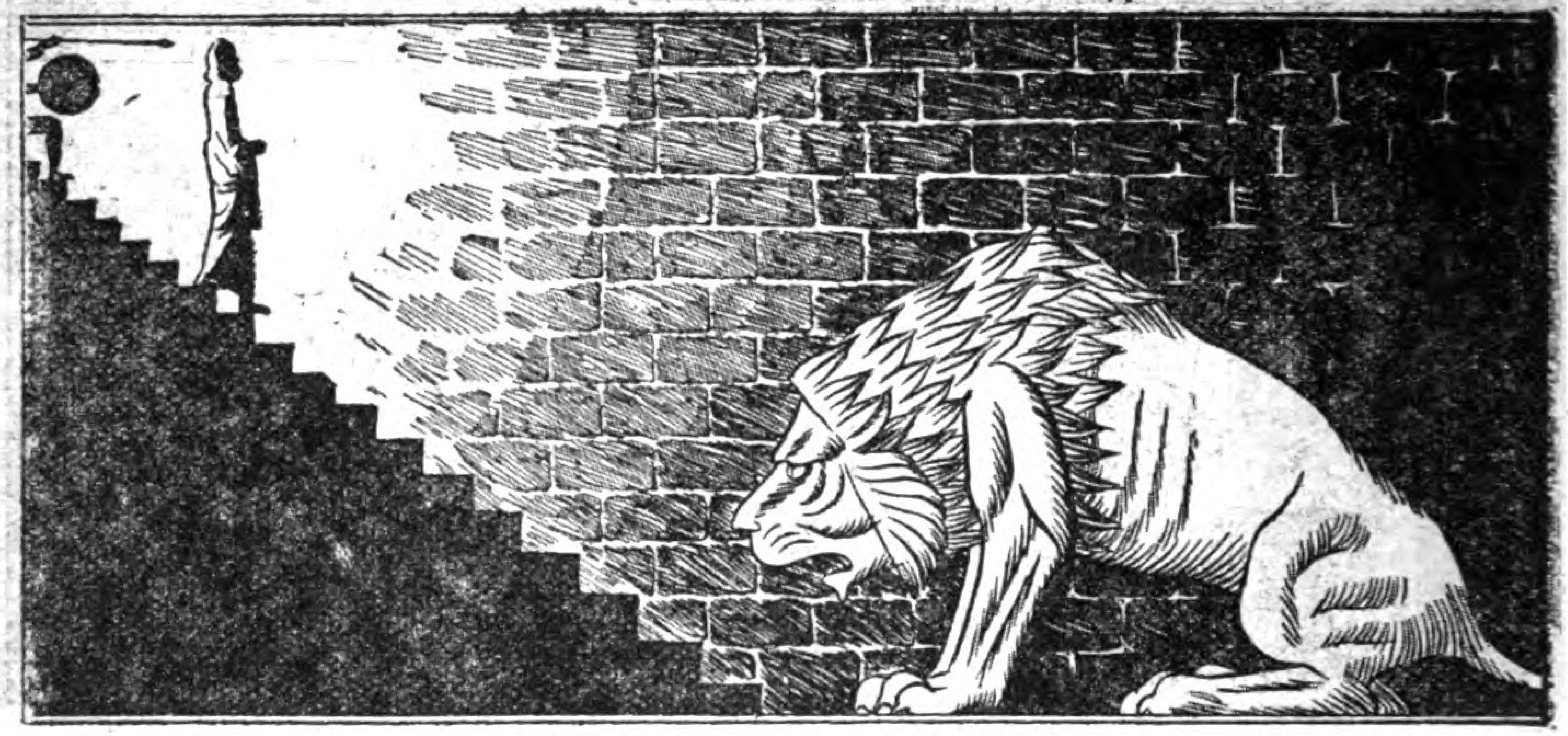
『今日以後三十日のあひだ、如何なる神神をも拜すべからず。若しこれに違反する者は、何人によらず、獅子の穴に投入れらるべきものなり。ダリヨス』といふ詔書を認めさせました。

獅子の穴

その珍らしい詔書が公布されますと、人民はいづれも驚き恐れて神々を拜しません、けれどもダニエルは、それが王の御心でなく奸臣どもの惡計だと看破しましたから、怖れも驚きもいたしません。そして是れまで通りイスラエルの方を望んで禮拜して居りました。

ところが奸臣ども、ダニエルがどうしてゐることかと、間者をよこして探らせますと、隱れもせずにやつてゐる、あの命知らず奴！　とよろこび躍つてダリヨス王のところへやつてゆき、

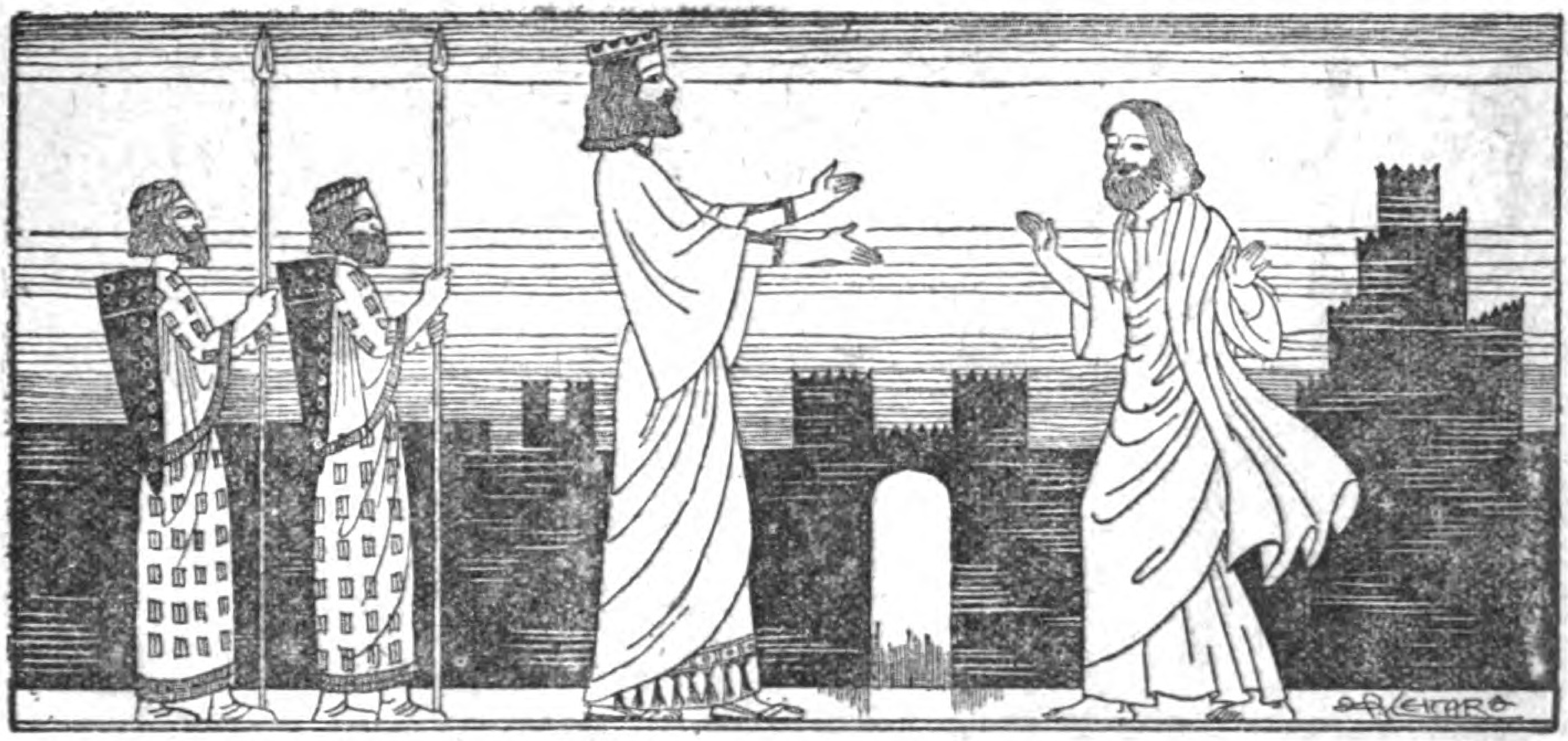
『王さま、御規則を破つた者が御座います。』



『さやうであるか、不埒な奴、召捕れッ。』
やがて犯人が、王の前に曳きすゑられますと、それが重臣であり寵臣であるダニエル宰相で御座いますから、ダリヨス王も困つてしまひ、何とかして赦さうとしましたが、奸臣どもは承知いたしません。
『御規則を曲げましては、御威光にかかはります。犯人は大臣であらうと乞食であらうと同じこと……。』
ダリヨス王も、今は仕方なく、
『ダニエル、お前は獅子の穴に往かねばならぬ。』
『はい、これまで厚い御恩を蒙りましたのに、斯のやうな不忠なことをいたしまして、何とも申譯のないこと……、どうぞお罰し下さいまし。』
『いいや、其方ほどの忠義な立派な家來は、この國廣しと雖も二人とない。あゝ困つたことになつた、惜しいことをした。』
やがてダニエルは奸臣どもに曳き立てられて、獅子の穴へとやつてゆき、恐ろしい唸り聲のする中へと釣りおろされました。唸り聲をきいてさへ身ぶるひがしますのに、その中に入れられたらどうでせう。けれども奸臣どもは、巧くいつたと歡んで、手を拍ちながら引揚げました。

不安の其夜

ダリヨス王は、その日の出來事に心を痛め、その夜は食事をとる元氣もなくお休みになりましたが、うつら〳〵したかと思ふと、氣味の悪い夢に目が醒める。
『あゝ、ダニエルは、もう生きちやゐないだらう……。』
あくる朝、王は早くお起きになつて、馬車の用意もそこ〳〵に、獅子の穴へと急がせて、せめてもの思ひやりに、上の穴から、
『ダニエル！ ダニエル！』
と、お呼びになりました。その聲に目を醒ました獅子の群は、『うふーッ、うふーッ』と唸り立てましたが、その聲に交じつて、
『はい、ダニエルは此處に居ります。』



といふのは、まさしくダニエルの聲、王はをどり上つて、

『おゝ、ダニエル？　お前は生きてゐる。それ曳きあげろ、縄があるか、綱があるか。』

と從者や御者に手傳つて、ダニエルを綱にからめて曳きあげますと、髪の毛一筋も損はれて居りません。王は嬉しさのあまりダニエルに抱きつきました、ダニエルも感極つて、王にすがりつく、そして、

『王さま、神のみめぐみと、陛下のみいづとによつて、餓ゑたる獅子も小猫のやうに柔しくして呉れました。』

と申上げました。そして王とダニエルは、美しい朝日の光をあびながら、歡びに溢れながら王宮に入りました。

それとは知らず奸臣どもは、今日からは自分たちの天下である、自分たちのうち一人が宰相になれば、この國は思ひのまゝになると、喜んで王宮に來てみれば、もうダニエルが出仕してゐる。奸臣どもの驚きは腰も拔けんばかり、口も利けません、足も動きません。ダリヨス王は、

『これ、其方ども、忠誠無二のダニエルを陥れようとした惡者ども、天はいづれが正か不義かを見そなはし、ダニエルを獅子の口からお護り下さつた。其方どもこそ獅子の穴に往かなければならぬ。』

と仰しやつて、彼等を獅子の穴に投げますと、獅子の群は一人殘らず噛みつくしてしまひました。

けれども忠臣ダニエルは、慈愛の大宰相とし、幾久しく榮えてゆきました。

（をはり）

滑稽一行知識

鈴木長松

△オートバイとは自轉車より音が高き故なり。

△サイドカーは妻と同乘出來るからなり。

△山中にて方角を失ひたる時は夕方迄待つ可し日入る方慥かに西なりと知る。

△泥棒除けには夜間だけ「貸家札」を斜めに張るべし。

リンカーンの涙（口絵参照）

澤田謙

個々に偉大な人は、一つの小さな花にも涙を濺ぐ。リンカーンは人道の悲哀に生きた人であつた。彼が大統領に選ばれたとき、

『いまはアメリカが苦悶の時である。この苦難を敢然と、背負ふことのできる人は、僕のほかにないだらう』

と言つて、大統領に就任した。彼は十字架を負ふ基督のやうな心で、大統領となつたのだ。

憐れな黒奴から奴隷の鐵鎖を放ち、アメリカ合衆國の統一を保つため、劍を抜いて起つたとき、白亜館のリンカーンは、日に日に痩せ衰へた。

『今日も百人、千人の殉國の血が、戦場に流されるのだ。僕は人道の大義のために、この苦難を背負はねばならぬ』

と、彼は毎日呟いてゐた。

終に堪へきれないで、彼は戦場に赴いた。總司令官グラント將軍の手を握つて、彼の聞いた最初の問ひは、

『今日も誰か銃殺される人があるんですか』

といふのであつた。

『はい、歩哨中に眠つた兵卒が一人』

リンカーンは直ちにその兵卒を訪ねた。

『君は歩哨中に眠つたのか』

『はい』

『實に重大な罪科だ。何うしたんだね』

『私は立つてゐて、何うしても眼が開いてゐられなかつたのです。二十三哩の強行軍をして、そして二人分の歩哨に立つたのです』

『二人分？　誰がそれを命令けたのかね』

『私が申出たのです』

『何故？』

『私の戦友が病氣だつたのです。私は病氣の友人を歩哨に立てさせたくなかつたのです』

リンカーンは、このスコットいふ二十歳の可憐な青年の顔をヂッと眺めた。

『君、兩親は？』

『國に母が一人ゐます。私は寫眞を持つてゐます』

『お母さんは君の銃殺のことを知つてゐるかね？』

健氣に立つてゐたスコットは、このとき始めて、ワッと泣きだした。

『お願ひです。どうかそれ丈けは言はないで下さい』

リンカーンは靜かに青年の背をなでて言つた。

『いゝよ、泣かなくてもいゝんだ。お前は銃殺されません。私は君を信用する。サア、許すから君の聯隊に歸りなさい』

青年は涙をもつて勇躍し、戦地に走つた。

その日は最後の激戦であつた。北軍の陣中は『敵將リー將軍降る』の報に欣喜してゐた。しかしリンカーンは、その大捷の報とともに、スコット青年の勇ましい戦死の報をも握つた。

『君、人生といふものは、悲哀しいものだね』

と、彼はグラント將軍の手を握つて言つた。彼にとつては、わが軍の大捷の歡喜よりも、罪なくして流された一つの血の痛傷か、もつと大きかつたのであらう。



諧謔小說

新家庭双六

佐々木邦

田中比左良畫

振出し

里見君の勤めてゐる會社では結婚披露式が近頃年中行事の一つになつてゐる。各課に必ず二つ三つある。課が六つあるから、總體からいふと、年に十組を下らない。レコードは去年の二十一組だ。此年も當り年と見えて、既にその半數に達してゐる。

『又かね。』

と專務の片岡さんが言つた。

『毎日曜は些つと重なり過ぎますな。』

と平重役の細井さんも同感だつた。

『しかし斯うなる勘定だよ。この三四年は安い〳〵で若手ばかり採つてゐるからね。』

『然うですな。それがソロ〳〵堵に安んじた證據でせう。』

『まあ〳〵、芽出度いことで結構だ。』

『生れる力も盛んなものですよ。』

『それは然うだらうさ、この調子ぢや。』

『販賣課あたりでは贈答規約から誕生丈け省いたさうですよ。迚もやり切れないと言つて、望月君、大笑ひをしてゐましたよ。』

『ハツハ、、、。』

『老輩は出してばかりゐます。若手は貰つてばかりゐます。最近、年に二度貰つた男がありました。』

『凄まじいね。』

『それで氣の毒がつて、若手の方から遠慮したんださうです。』

『成程。さうして置いて無制限に生まうといふんだね。』

『ハツハ、、、。結局然ういふことになりますな。』

『結構だ。國家でも會社でも人口が繁殖する間は發展の運氣が

ある。』

『誕生の方は關係がないから構ひませんが、披露會の出席は些つと制限しちや何うでせうか？』

『何ういふ具合に？』

『順番を定めて代表を出すんです。一人で結構でせう。』

『さあ。それも變なものだな。折角招待してくれるのに。』

『しかし斯う頻繁ぢや何とかしないと煩に堪へませんぜ。』

『まあ〳〵、社長は兎に角、お互丈けは顏を揃へてやらうよ。一生に一度の大禮だからね。』

『出てやれば喜ぶことは喜びます。』

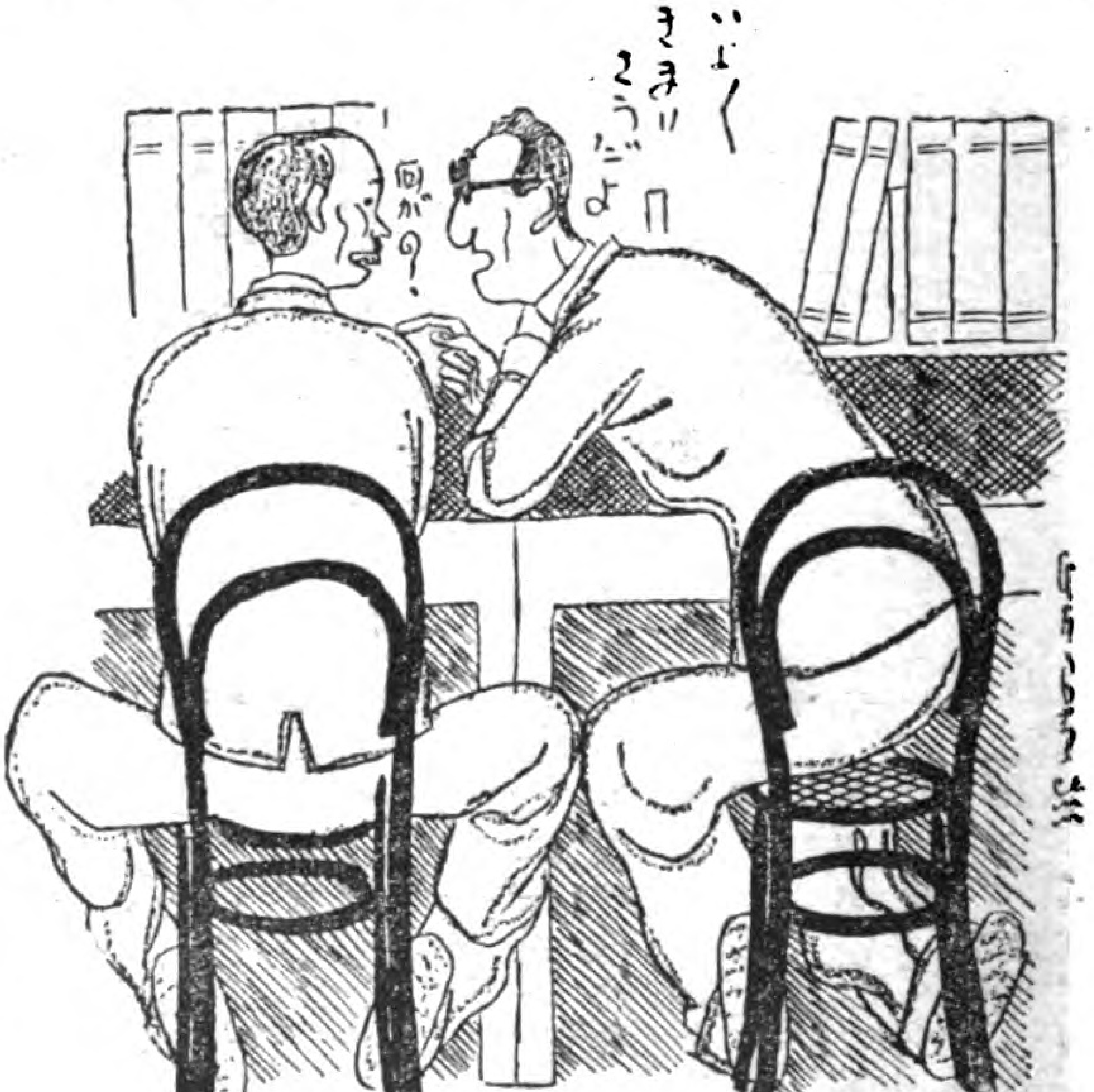
『この不景氣の續く間、昇給の代りだと思つて都合をつけるさ。』

『可哀さうに。ハツハ、、、。』

と、結婚の多いのが幹部の間の問題になつてゐる。

『今日は庶務課の連中が皆モーニングを着てゐるぜ。』

と販賣課の一人が言ひ出す。



『然ういへば然うだね。』

『誰だらう？』

『谷口君だよ。』

と知つてゐるものがある。

『はゝあ、あの人は獨身だつたのかい？』

といふやうな次第で、一課擧つての禮裝は結婚、會社全體の禮裝は葬式と相場が定つてゐる。

結婚したものは同課の人達と幹部を披露式に招待する。これがいつの頃からか習慣になつてしまつた。それに對して社長重役と同課のものから祝ひの品を贈る。社長重役のは必ず鶴と龜の置物だ。龜の顏が社長に能く似てゐる。しかし然ういふ意味でくれるのでない。專務の親戚に金物屋があるから、天割引で買へるのださうだ。同僚からは課によつて夫れ〳〵違ふ。尤もその都度考へるのは面倒だから、いつも前例に從ふ。それで販賣課は置時計とか會計課は銀の匙とか品物が定つてゐる。

『僕もソロ〳〵置時計を貰ふかな。』

と販賣課のものが言へば、直ぐにそれと意味が通じる。

『いつだい？君。』



と同僚は寄つて群る。

『冗談だよ。』

『いや、誤魔化しても駄目だ。』

『白狀し給へ。』

と皆妙に敏感だ。昇級の問題ぐらゐに興味を持つてゐる。

『僕は置時計を三つ貰つたぜ。』

『三つ？　一體何ういふ次第だい？』

『諸君から一つ。同級生の會から一つ。兄貴の妻の里から一つ。それだから僕の家は何の間へ行つても置時計がある。嘘だと思ふなら見せてやらうか？』

『それには及ばないよ。ハツハヽヽ。』

『僕のところではもつとひどくカチ合つたものがある。』

『何だい？』

『珈琲茶碗さ。六つ鉢合せをしたよ。』

と最近の經驗家がそれ〴〵嬉しさうに物語を始める。

里見君は斯ういふ大勢のところへ、今回重役細井さんの姪と緣談が成立したのだから特に注意を惹いた。誰しも斯ういふ問題は最初の中秘めてゐる。しかし嬉しいことも悲しいことも嵩じて來ると胸中に溢れる。洩らさずにゐられるものでない。里見君は略確定に近づいた時、先づ同じく販賣課に机を並べてゐる親友の相良君に向つて、覺えず相好を崩した。

『何だい？』

と相良君は解し兼ねた。

『イヨ〳〵定りさうだよ。』

『何が？』

『緣談さ。』

『え？』

『驚かす積りで默つてゐたのさ。』

『ひどいね。』

『それに相手が相手だから、萬一定らないと具合が惡いからね。』

と里見君は話が始まつてからこの日までの經過を詳しく打ち明けた。

『それぢやもう確實ぢやないか？』
『まあ然うさ。』
『大成功だよ。細井さんの姪を貰へば君の出世に保證がついたやうなものだ。』
『僕は然う思はれるのが辛い。』
『構ふものか。』
『いや、何も特典はないんだよ。細井さんは重役でも、兄さんといふのは内務省の判任官だ。子供が大勢で漸くらしい。それだから好いところから貰ふやうに思はれちや迷惑する。』
『しかしこの會社にゐる以上は細井さんが叔父さんなら損はない。』
『しかし縁談が始まつてから細井さんの姪つてことが分つたんだぜ。』
『まあ宜いよ、然う辯解しなくても。』
『然う知れた以上、斷つちや尚ほ變なことになるからね。』
『大丈夫だよ。君にそれほど深い巧みがあらうとは誰も思つちやゐない。』
『あるのかないのか？』
『さあ。君の良心の判斷に委せる。』
『厭なことを言ふね。』
『冗談だよ。』

『まあ〳〵、發表までは餘り話さないで置いてくれ給へ。』
『宜いとも。しかし吉田君には言ふぜ。』
『吉田君には僕から話す。』
『庄司君にも言ふぜ。』
『庄司君にも僕から話す。』
『川上君には？』
『僕から話す。』
『それぢや一般に發表するのも同じことぢやないか？』
『まあ然うさ。』
『何あんだい。』
と相良君は呆れ返つた。
この四名が
里見君の親友



だ。その中未だ獨身の庄司君は一部始終を聞いた時、

『ふうむ、然うかい。しかし里見君、僕は祝意を表する前に君の猛省を促さなければならない。』

と條件をつけた。この男は何でも一應反對して置いて後から贊成するのが癖だ。必ず一理窟こねる。

『何故？』

と里見君は稍鋭く訊いた。大成功の積りでゐる肚の中が一寸出たのである。

『君は一生損をするよ。君の眞價が現れないでしまふ。』

『何うして？』

『君は女婿になる。』

『それは君、結婚すれば誰だつて嫁の兩親の女婿になるさ。』

『いや、權門の女婿になる。』

『權門つてことはない。先方の父は内務省の判任官だぜ。』

『判任官の父よりも重役の叔父が光つてゐる。君の燭光が薄くなるばかりだよ。』

『何あに、平重役だ。』

『いつまで平重役ではゐない。』



と庄司君が鑑定した。實は里見君も昨今急にそこへ望を囑し始めたのである。しかし表面は、

『それぢや僕が妻のお蔭で出世するといふ意味かい？』

と憤激の口調を用ゐた。

『然うさ。』

『そんなことはないよ。』

『あるよ。さうしてあの男は妻の叔父が重役だから出世したと言はれる。』

『何あに、側との關係がある。破格なことは出來ないから大丈夫だ。』

『いや、若しいつまでも僕達と同じやうだつた日には尚ほ始末が悪い。あの男は重役の姪を貰つてゐるくせに一向出世しない。餘つ程無能なんだらうと言はれる。』

『おや〳〵。』

『何方にしても言はれる。女婿つて奴は損なものさ。』

『女婿ぢやないつてば。』

『準女婿さ。事實は動かし難い。』

『君と話してゐると厭な心持になるよ。』

『しかし何うせ言はれるくらゐなら出世する方が宜いだらう？』

『それは然うさ。』

『さうして出世することは目に見えてゐるんだから、僕はこの縁談に大賛成だ。』

『何あんだ。』

『満腔の祝意を表するよ。』

と庄司君は里見君の手を握つた。

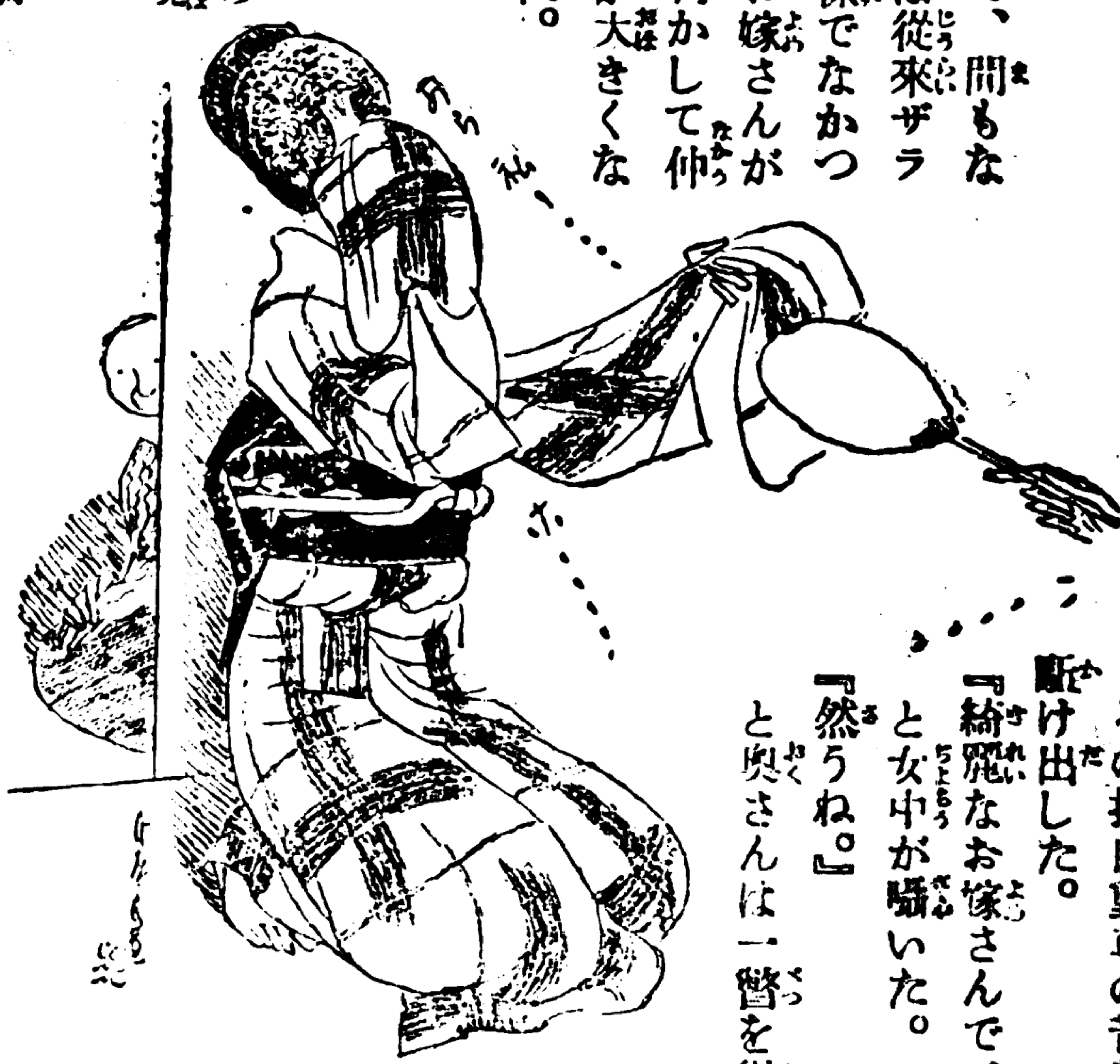
里見君の婚約は直ぐに知れ渡つて、間もなく金縁の案内状になつた。披露式は從來ザラにあつた奴と違つて、課丈けの關係でなかつた。里見君は販賣課の平社員でもお嫁さんが重役の姪だから、專務取締が氣を利かして仲人役を買つて出た。それ丈けに事が大きくなつて、各課の課長と次席が列席した。

『販賣課にそんな敏腕家がゐたのかね。』

『帝大出の秀才だそうだよ。』

と會社一般が里見君の存在を認めた。準女婿の威力は既に案内狀に現れた。

會社は社員一世一代の盛典に五日間の自由を許す。里見君は披露式を濟ますと直ぐに新婦と相携へて型の如くに箱根へ向つた。花嫁花婿は結婚式當日のことに過ぎない。家庭へ納まつてしまへばもう新夫婦だ。直ぐに世帶染みる。しかしこゝに花嫁花婿の華かな幻影を數日生き續かせる一法がある。それは新婚旅行だ。里見君はこれを探つた。序をもつて郷里へ寄つた。親類廻りを果して昨夜歸京したのである。



その折自動車の音を聞きつけて、隣家から奥さんと女中が馳け出した。

『綺麗なお嫁さんでございますわね。』

と女中が囁いた。

『然うね。』

と奥さんは一瞥を得たばかりだつた。女中ほど無遠慮に乘り出すことは嗜みが許さない。

『お嫁さんかい？』

と主人公まで馳けつけたが、もう家へ入つてしまつた後だつた。

『駄目よ。早くお出にならないんですもの。』

『でもお前達が穿いて來てしまつて、下駄が見えないんだもの。』

『あらまあ、跣足！』

と奥さんは吃驚した。

花嫁花婿として二人これが見られ仕舞ひだつた。今日からはもう新夫婦である。話はこれから始まる。

『好いお天氣だ。』

と里見君が言つた。

『今日もお暑さうでございますわ。』

と新婦が答へた。五日間の練習でもう羞澁むことは卒業してゐる。具合の悪い時は單に默つてゐることを覺えた。

『今日からイヨ〳〵稼ぎに出る。』

『オホヽ、御苦勞樣でございます。』

『結婚してから初めて出勤すると皆が冷かすぜ。』

『………』

『可なり厚かましい方だけれど、思ひになる。』

『………』

『しかし會社は面白いよ、仲の好い連中が揃つてゐるからね。』

『結構でございます。』

『時に徳子や。』

『はあ。』

『伯母さんのところから眞綿をお土産に貰つて來たね。』

『はあ。澤山戴いて參りましたわ。』

『あれを出して置いておくれ。』

と里見君が賴むだ時、婆やが現れて、

『お支度が出來ました。』

と知らせた。これは新家庭第一回の朝飯だつた。



新婚後の初出勤は誰にしても氣が映す。里見君は目下自分が同僚間の時事問題になつてゐることを能く承知してゐる。殊に新婦の出身が出身だ。何君が何と言つてゐるかまで察しがつく。そこへ持つて來て會社には妙な習慣がある。

『やあ、お目出度う。』

と同課の連中が初出勤の新郎を取卷いて祝ふのは當然のことだが、それから後が荒つぽい。

『有難う。』

とお辭儀をするのを合圖に皆で脊中を叩く。その折ひどく打ち踣されるほど新家庭に幸運が天降ることになつてゐる。先年肋膜が悪いと言つて同僚の好意を辭退した某君は、その後間もなく姙娠中の若い細君を殘して死んでしまつた。もう一人、それより少し前に、

『お祝ひに撲るのは失敬だよ。』

と本氣になつて憤り出した男があつた。

『冗談だよ。困つた男だ。』

と誰か笑つたのが好くなかつた。

『冗談にも程がある。撲つた人はこゝへ出給へ。撲り返す。』

といふ騷ぎで、結局兩三名のものがあやまつた。この男はそ

の後會社の得意先で喧嘩をして首になつてしまつた。何うも叩かれないものにはケチがつく。それで以來迷信的に叩く。里見君は數年間に十名から叩いてゐる。それも渾身の力を罩めて入念に祝つてゐる

『里見、覺えてゐろよ。』

と憤慨した新郎が何人もあつた。因果は繞る。今や自ら打ち踏される番が里見君の身の上へ廻つて來たのである。

『徳子や。』

と里見君は食事中徳子の稽古を續けて、

『あの眞綿を出しておくれよ。』

と賴むだ。

『何うなさるんでございますの？』と徳子さんは無論意味が分らない。

『支度をするのさ、出勤の。』

『もうワイシャツも更へてございますのよ。』

『ワイシャツの下へあの眞綿を着込むで行から。』

『まあ！　このお暑いのに。』

『いや、今日は撲られるんだ。』

『あらまあ！』

『新婚後初めて出勤すると、皆が寄つて群つて叩つてくれるのさ。』

『結構ぢやございませんか？』

『いや、それがナカ〳〵荒つぽいんだよ。叩くんだ、背中を、お祝ひに。』



『まあ！』

『お芽出度うと言つてね。仲の好い奴ほどひどく叩く。まるで大掃除の時の疊扱ひさ。それが二十人からあるんだから敵はない。』

『亂暴でございますのね。』

『痛いよ。と言つても未だ經驗はないんだけれど。』

『まあ。オホヽヽ。』

『ハツハヽヽヽ。しかし叩いた經驗はある。斯ういふ時だと思つて、いつも手の平の赤くなるほどやつてやる。それで今日は仇を取られるのさ。』

『厭でございますわね。』

『何あに。』

『少しお加減が悪いと仰有つて、お手軟かにお願ひなすつたら如何でございませう？』

『何あに。』
『まあ！　何故そんなに私の顔を御覧になりますの？』
『お前の爲だと思へば叩かれても不服はない。』
『あら、私……』
『ハッハヽヽヽ。』
『ホヽヽヽ。』
　と二人は高らかに笑つて、不圖氣がついたやうに臺所の方を見た。婆やが聞いてゐる。これは數年間里見君に仕へた忠婢である。しかし新家庭に年寄の召使は氣が置ける。同じことなら若い方が宜い。何なら水入らずで濟ましたいとあつて、一月後に追つ拂ふことに話が定つてゐる。但し婆や自らは未だ知らない。
　里見君は食後眞綿で武裝を始めた。他は何うでも構はないのだが、新婦の手前兎角誇張して見たい。氣が立つてゐる。德子さんもそれが嬉しくないことはない。良人の一大事のやうに甲斐甲斐しくお手傳ひに及んで、
『恰好がお悪いわ。』
　と苦心慘澹だ。效果の上からは成るべく厚く、體裁の上からは成るべく薄くと心がけるから、ナカ〳〵手間が取れる。
『肋膜の邊を三重にしておくれ。』
　と里見君は調子づいて大袈裟な註文をする。

『この邊でございますか？』
『そこ〳〵。』
『お暑うございませう？』
『さあ。未だ分らないが、これなら幾ら叩かれても大丈夫だらう。』
『冬だと宜うございましたわね。』
『冬はいけないよ。相良君は寒の中に結婚して大失策さ。』
『何うなさいましたの？』
『式の前の日に風邪をひいて、三々九度の最中に嚏をしてしまつた。』
『まあ〳〵。』
『それを今でも細君がお冠を曲げた時言ひ出すんだよ。「あなた見たいにダラシのない方つてありませんわ。何です？　三々九度の最中に嚏なんかなすつて」とね。』



『でもお風邪なら仕方ありませんわ。』
『丁度悪いところへ持ち込むだものさ。披露式でも仲人が紹介を始めて「新郎は……」と言つた時、大きな嚔をしたぜ。皆笑つてしまつたよ。』
『まあ！』
『それが新婚旅行先で肺炎になつたんだから念が入つてゐる。案外輕かつたもの丶、花嫁さん、忽ち看護婦に早替りさ。惚るのも無理はないよ。』
『よく〱でございますわね。』
『相良君は一月近くも休むでから青い顔をして出勤したよ。それだから叩かれずじまひさ。それにしては運が好い。二人とも無病息災に暮してゐる。』



『相良さんは一番の御親友と見えて能くお話が出ますのね。』
『一緒に入つて机を並べてゐるものだから一番親しい。お前との縁談のことなぞも悉皆知つてゐる。頼みになる男だよ。早速やつて來るぜ。細君も好い人だ。』
『早くお目にかゝりたうございますわ。』
『皆押しかけて來るよ。お祝ひといふのは眞の託けで實は好奇心だからね。』
『何故でございませう？』
『皆お前を見に來るのさ。』
『まあ、厭ですこと。』
『何あに。』
『何あになことございませんわ。』
『何あに、何のことがあるものか。』
と里見君は決して厭でない。今までは毎朝の出勤を婆やがノツソリと見送つた。婆やは婆や丈けのことしかない。時稀、
『お歸りはいつも通りでございますか？』
なぞと思ひついたやうに訊くこともある。しかしそれは主人公の身の上を案じるのでなくて、晩の支度の自分都合に外ならない。然るに今日からは徳子さんが玄關で帽子を渡してくれる。

『行つていらつしやいまし。』と耳隠しが傾いた時、里見君は頓に境遇の變化を意識させられた。

『それぢや行つて來るよ。』

と合釋に滿足を洩らして格子戸に手をかけた途端

『あなた。』

と德子さんが呼んだ。これが第一回の「あなた」だつた。

『何だい？』

と里見君は待ち設けてゐたやうに振り返つた。

『腋の下のところに何か白いものが……
……』

と德子さんは土間へ下りて、

『あらまあ、眞綿の屑でございますわ。』

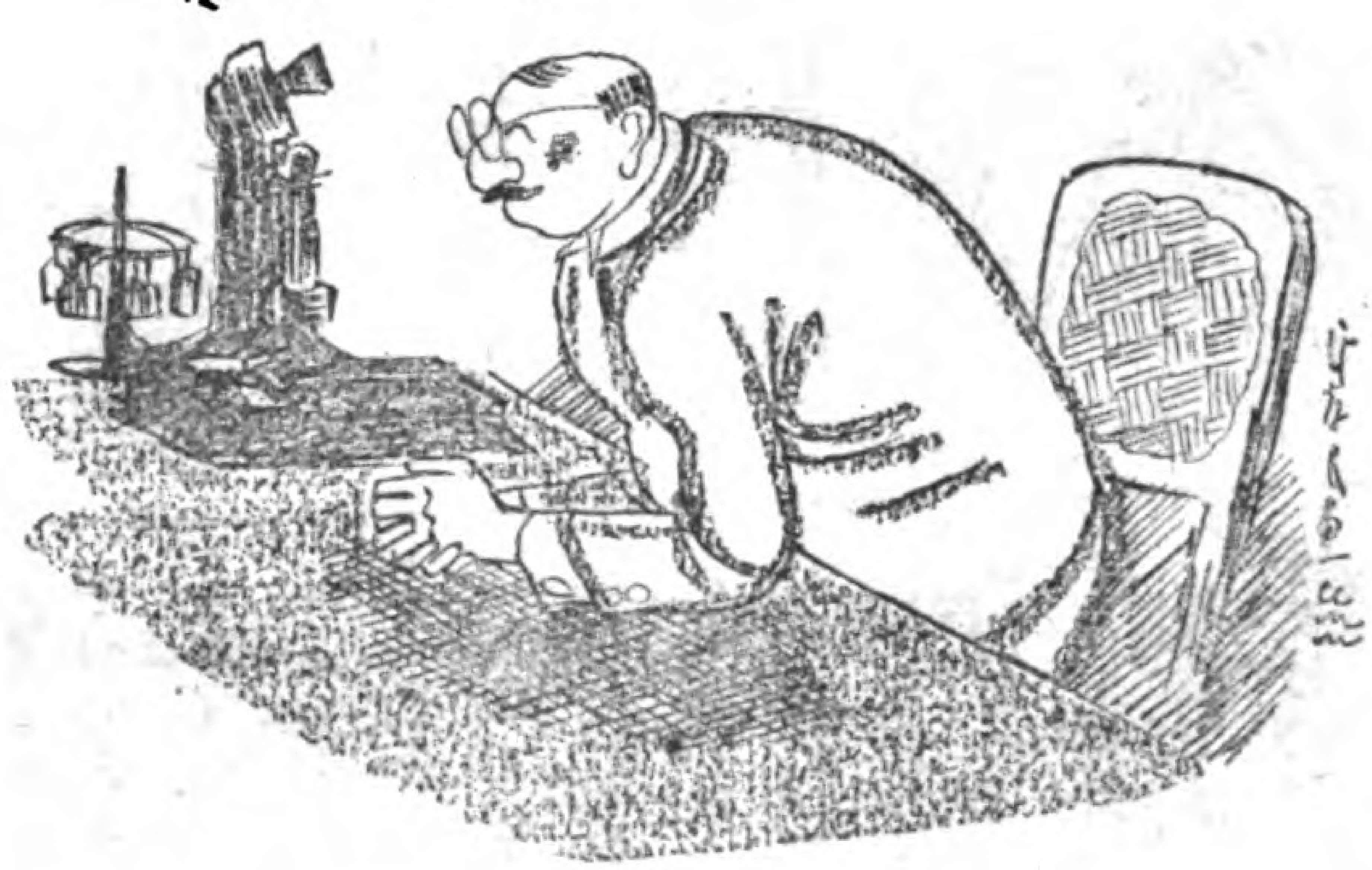
『ハツハヽヽ。これで大丈夫だ。』

と里見君は着てゐる眞綿を思ひ出して自ら背中を叩いた。

會社には同僚がもう大抵詰めかけてゐた。時間勵行だから、定刻までは机につかない。時計の針を見守りながら彼方此方に塊つて善意の交換をしてゐる。

『時に里見君は今日からだね。』

『然う〳〵。新婚旅行も斯う暑いと御苦勞だ。』



なんですか 里見君

『僕は借があるよ。』

『僕もある。今日は大に祝ひ返してやる。』

『それは然うと晩いね、些つと。』

『郷里へ廻つたさうだから、一日二日後れるんぢやたいかい？』

『然うかも知れない。』

『今が一番好いところだからね。』

『仕事は何うにでも都合がつくんだから、遠慮しないで十日も休むことだよ。僕は後悔してゐる。』

『何とか言つて婉曲に惚氣やがる。』

なぞと若い連中の話題は里見君だつた。

そこへ當の本人が、

『やあ。』

とニコ〳〵しながら顏を出したのだから溜まらない。

『お芽出度う。』

と皆直ぐにおつ取り卷いた。さうして里見君が、

『先日は何うも……』

と披露式列席のお禮を述べて頭を下げるのを合圖に、相良君が先づ、

『お芽出度う！ お芽出度う！ お芽出度う！』

と觀兼の見本を三つ示した。續いて課員一同代り〴〵に、
『お芽出度う！　お芽出度う！　お芽出度う！』
とポカ〳〵やつた。大抵お禮返しだから利息がついてゐる。一人の喜びは大勢の心持を明るくする。一課全體が尚ほガヤガヤ言つて打ち興じてゐた。その中に九時が鳴つた。
『どれ。』
と夫れ〴〵部署についた。
『あゝ〳〵、矢つ張り景氣が好いなあ。』
と誰かの歎息が室中へ筒拔けたので皆笑ひ出した。間もなく里見君は、
『何うです？　諸君、もう宜いんですか？』
『おい、好い氣になつて、もつと叩かれたいのかい？』
と隣席の相良君が大きな聲で冷かした。
『何あに、これで宜いんなら、もう締切りにするのさ。』
『待ち給へ。僕が未だある。』
と課長がニコ〳〵しながら進み寄つて、
『里見君、お芽出度う。』
と輕く一つ叩いた。
『有難うございます。やれ〳〵、これで漸く晴天白日か。』
と里見君は上着を脫いで、ワイシヤツの下から眞綿を摑み出した。
『何だい？　それは。』
と相良君が側から不思議がつた。

『へゝ。御覽の通りさ。』
『眞綿だね？』
『然うさ。僕も以前と違つて身體が大切になつたからね。』
と答へながら、里見君はそれからそれと引つ張り出す。
『彩か着こむで來やがつたなあ。』
『智惠のある人は違ふだらう。』
『何うも手答へがないと思つたよ。』
『何だつて？』
と他の連中も寄つて來て、
『狡いぞ〳〵。』
『これは怪しからん。』
と又騷ぎ立てた。
『何ですか？　里見君。』
と課長は席から伸び上つて、
『はゝあ、眞綿ですか？　用意周到なものですね。流石に細井さんの姪御さんだけのことがあります。』
と功を德子さんに歸した。里見君は別に異存を申立てなかつた。（つゞく）

以上は本篇の『振出し』に過ぎません。いよ〳〵この新夫婦を中心として起る種々の事件や場面は、お馴染の佐々木邦氏の快筆によつて、人情味たつぷりの中に、頗る滑稽諧謔皮肉輕妙の限りを盡し、トテモ堪らぬ面白さ可笑しさに、天下ヤンヤの大喝采を博することゝ信じます。大いに御期待、ます〳〵御愛讀の程を御願ひいたします。

讀書

○ 千葉龜雄

科學や、哲學や廣い意味での自然科學、人文科學に屬する讀書は、早朝がよい。宇宙に堆積された、限りない人類の知識から、われ等の胸は、曙の色のやうに、ほのぼのと明るく開かれて行く。文學や小說戯曲の讀書は、ものの靜かな深夜がよい。人生のどうともし得ない破局や、運命は、やがての深い眠りの、われ等の神祕な夢の中に、美しくほのかに融かされて行く。

○ 鶯亭金升

○全集を買は買たが暇が無い。
○ひやかして讀を苦學の數に入れ。
○圖書館に人さま〴〵の慾が寄り。

○ 石榑千亦

○冷えし茶に咽喉うるほしぬ夜のふけを軍物がたり終となりたり。
○讀めど讀めどよみとき難き行にあひ書をふせおきて灯を太めけり。

○ 塚崎直義

讀書は尙『登山の如し』とは古い言葉だが新しい意味を持つ。天地の大、豆粒の小を一卷に壓縮した書籍は、人生行路の一里塚であり、指標であり、燈臺である。書籍の虜になつてはいけない、書籍によつて自己の地位を知り一大躍進をなすべきだ。圓本の洪水は知識を普及せしめたと共に慢性讀書病患者を無數に作つた。豐富有益な材料斬新な編輯のキングは由來私の好む處、避暑に避寒に必ず一本を手にする、綠陰の朝、暖爐の夕、これは得難い好伴侶である。

○ 高木角戀坊

○懷かしき亡父の詰に異議を添へ。
○鷄の聲もう夜が明けた本を伏せ。
○破りたい所も出て來る古日記。

○ 山室軍平

『書物なき生活は眠である、キリストなき生活は死である』と、ハロルド、べグビー、は言うて居る。

キリストによつて新しき生命を得ることに次いで、私に大切なるは、書物を讀んで目さめた生活を營むことである。



○ 矢野錦浪

○交換手先月號を讀み耽り。
○つれぐ〜の電車隣の本を讀み。
○讀みさしへ眼鏡をはさむ母のお茶。

○ 高島米峰

孔子曰く『古の學者は己のため（自己の修養）にし、今の學者は人のため（他人に見せびらかす）にす。』と。僕曰く、『古の學者は己のため（自分の生活）にす。』と。同じ『己のため』『人のため』といふにも、孔子の時代と僕の時代とには、これだけの相違がある。書を讀むといふも亦難いかな。

○ 宇都野研

膝の上に漫畫本を開けて見る人あり
隣りの眼ものぞいてゐる。
漫畫本をふせて起ちさうなり
その座席を狙ふ。
（省線電車の中にて）

○ 星野麥人

○燈下可親奥の細道をなん。
○ぬきよみに其書此書や虫拂。
○虫なくや心書中に引かれゆく。

○ 尺秀三郎

讀書に由て利益を得るのは、恰も食物に因て、滋養を得るやうなもので、くだらぬ書物を無暗に讀み噛ると、爲めに消化器を損じて、滋養のある善い讀み物を消化することが出來なくなる。食物の消化は胃腸でするが、讀書の消化は腦髓でする。くだらぬ讀物の爲めに、此腦髓の細胞を浪費すると、肝心な滋養のある讀物の時、其細胞が缺乏してはならぬ、これ書籍を讀むに、其選擇を重んずる所以である。

○ 稻毛詛風

『讀書の樂み』といふものが近頃益ゝ私に薄らいで來る。次第に難解なものの專門的なもののみを讀むやうになるからだ。それに一番悲しいことは『愛讀書』といふものが次第に減じて行くことだ。

しかし二三ケ月もかかつてやつと讀み上げたがそれでも尚はつきりしないといふやうな本を讀んだ時には何となくうれしさを感ずる。それは『苦しい讀書の樂しみ』である。この『苦しい樂しみ』が、これから益ゝ私には昂じて行くことでせう。



劍道の精神

劍道範士 高野佐三郎

劍道は日本武士道精神の表徴として、長い、尊い傳統を有つて來たが、不敏成すなき私が、此道を繼承して今日に至つた事は心から光榮とし、感激する處である。

一、幼時の修行

私は夙く父を亡ひましたが、祖父は實に深い慈愛と懇切な注意とを以て私を敎へ導いて呉ました。私の今日あるは全く祖父の御蔭であります。小野派一刀流の正統淺利又七郎先生の長子登一郎と申す方が、私の郷里秩父に來られ、祖父の道場で稽古をされたが、實に立派なものであつたさうだ。祖父は姙娠中の私の母に命じて自身稽古を受ける積りで其の稽古を見せ、又善い先生の來られる毎に何時も其の樣にした。これは私の爲によい胎敎であつた。私の生れた後は東西も分らぬ嬰兒の中から、勇ましい懸聲だけでも聞かす樣にと道場へ抱いて出させた。四歳の頃から劍道の眞似事を敎へられた。

私の幼時には何か功がないとお菓子一つも與へられない。功と申しても幼兒の事であるから朝起きて顏を洗ひ禮儀正しく『お早う』と挨拶するのも一つの功である。一尺八寸の木刀で形を使ふ眞似をして『祖父樣形を使ひました』といふと床の間に用意してある四文錢を一枚與へられた。斯樣にして幼兒から敎へ込ま

名人奇話

鶯を鳴かした三味

三絃の名人として日本無双の評判であつた熊本市の永谷勾當が大正初年に東京へ來た時の實話によると『非常に嚴しい師匠で、一ツ唄の千遍彈きをさせられたり、釣瓶繩で縛つて井戸の中に吊されたり、寒中冷水の鉢で感覺を無くした手で彈かされ、爪から血が出たりする樣な苦行して大に腕を研いた。



五十歳の時、某家で『青葉』を彈いた時の聲は我乍ら一世一代と思ふ程の出來榮で、折しも十月頃、某家の鶯が俄に中音に鳴き出して私の三味線としつくり合つた。聞く人々もアッと感嘆したが私の嬉しさは言葉に出ぬ程であつた……』（岡田眞弓）

れ、六歳の時には松平下總守の上覽に預り、祖父と共に五十六本の形を使ひ、御褒美を頂いた。十歳の頃には十五六歳の年頃の年長者と仕合しても負けず、秩父は喧嘩の流行つた所であるが、喧嘩などを仕掛ける者も無く、子供ながら夜道をしても恐ろしいとも思はず、勇氣も出で、落着きも出來、注意周到であつた樣に思ふ。すべて藝術は何事によらず幼少の時から其の道に入る事が必要であると思ひます。

其の後劍道の修行に於ても、社會生活に於ても、今日まで隨分苦心もし困難を重ねて、六十餘年を劍道に終始してまゐりました。從つて劍道以外の事を彼是申す資格はありませんが、修養上處世上劍道から敎へらるゝ所のものが少くないと思ひます。その二三を申上げませう。


高野佐三郎氏

二、正義の精神

昔の講談などに劍道の勝負にも色々妙計奇策を用ひて勝を得た事が面白く述べてありますが、それは決して劍道の本旨ではない。劍道では常時秩序正しく、攻むべきを攻め守るべきを守り、飽くまでも正々堂々理詰めに戰はなければならぬ。

固より突嗟の間に神速なる奇智を働かして敵の隙を誘發して其擧措を亂し、又は敵の虛に乘じ突入するといふ樣な働らきは無論必要であるが、唯勝つ爲に敵を

江戸ッ子と江戸ッ子

大正八年に死んだ獨樂使ひの名人、彼の十六代目松井源水は、年中アルコール瓶の中に身體を漬けて置くと云はれる程の酒好であつた。彼れは、宴會の餘興に招かれて得た報酬は、其儘そつくり、淺草藏前北元町の石崎と云ふ酒商の主人に預けて終ふ。酒屋の主人も源水の氣性に惚れ込んで、絶えず店の若い衆を見廻りにやつて、酒のなくならぬ内に屆けて置くやうにして、氣をつけて居た。そうして月末になると源水は自分の拂込



高と酒代との差引通知を受けるだけで、幾何殘らうが足りなからうが、お互に無關心で、どうといふ事はなかつた。丁度酒屋へ貯金口座を作つた樣なもので、其の口座が零になつた時でも手形が利いた譯である。それが一年や二年でなく、數十年の長い間を續けて來たのであるから、實にどつちも偉い。彼が死んで淸算した時に金拾壹圓參拾錢の殘高があつた。(長岡定敏)

欺き陥るゝ如きは匹夫の業で劍道の最も唾棄する所である。此の様な邪道に入る時は眞の上達は望めない。俯仰天地に恥ぢざる正義の大精神で貫かなければ、劍道の根本たる不動の大精神は得られない。不動の大精神が確立しなければ、其劍に正氣が宿らず、腕も冴えて神明に通ずる底の力が湧いて來ない。たゞ形ばかり、姿ばかりの人形遣ひの様なものに墮して了ふのである。社會の如何なる方面に於ても正義の精神に基かされば、力ある活動、自信ある働きは出來ないであらうと信じます。

三、至誠一貫專心努力

何事も皆斯りではあるが、殊に劍道の修行に於ては、餘事に心を奪はれず、一心專念心を盡し身を碎きて努力しなければならぬ。仕合をする時にも驚懼疑惑せず勝たうと思はず、負けまいとも思はず、何物にも心を止めず、何事にも心を奪はれず、仕合そのものになり切つて、無念無想全力を盡して戰はなければならぬ。たゞ至誠一貫專念努力といふ事が最も肝要である。

この修行が出來れば、何物もない心の中から無限の妙智が湧き、何事にも捉はれない心身は千變萬化神速自在の妙技を現はす、この事は劍道ばかりではなく、世の中の事すべて同様であらう。宗教道徳の教へも究極はこれと同じ道理であらうと信じます。

四、油斷無き心

油斷大敵と申しますが、劍道では稽古や仕合をする時だけでなく、坐臥行住寸時も油斷があつてはならないと教

寓話

桶屋の繁昌

むかし怠け者の桶屋がありました。仕事をせずに金を儲ける工夫はないものかと、いろいろ考へぬいた擧句、ふとよい思案が浮びました。

『大風が吹けば、大金儲けができる。大風吹け吹け。』と毎日獨語を云つてゐました。

『何故、大風が吹くと金儲けができるか。』と問ふ人があると、桶屋は鼻高々と『されば……大風が吹くと砂石が散亂して、往來の人の目にはいつて盲人が多くできる。盲人が多くできると、琴三味線屋が繁昌する。



琴三味線が繁昌すると、猫を多くとつて皮を張る。猫を多くとれば猫がすくなくなる。猫がすくなくなると、鼠があばれる、鼠があばれると桶をかじる。桶をかじると穴があい

へて居ります。戸口を踏み出す時にも、襖を開ける時にも敵が居りはしないかと心を配り、道行く時、人と擦れ違ふ時にも左に見て右に除けるやうにし、人と對談する時にも室の入口、器物の配置等に注意してイザといふ場合には火箸一本、茶碗一個でも味方として利用する。此の練習を積む時は平生何等の努力をせず、全く無念無想で居る時にも心は全身に遍滿して、所謂轡の音に目を覺まし、寒夜に霜を聽き、太刀風三寸にして身をかはす事が出來る油斷なき人となれる。

劍道では殘心といふことを敎へる。これは敵を打ち突きした後も安心して心を弛めず、敵に對して油斷なき心を殘すをいふ。人は何事にも十分注意警戒して從事する時には過ちは起らないが、安神油斷すると兎角過ちを生ずる。この殘心の敎なども味はつて見るとまことに深い味がある。

五、劍道も世道も同一軌

右の外劍道が敵の機先を制する事に重きを置くこと、懸待一致攻防不二の敎、身を棄てゝこそ浮む瀨もあれと敎ふる道理の妙趣、肉を切らせて骨を切れといふ敎など一々擧げれば限りない程あるが、劍道の敎へは悉く處世の敎になる樣に思はれます。劍道も人と人との戰ひ、社會の生活も畢竟人と人との戰ひであつて見れば、劍道の深刻痛切なる生命を賭けての敎訓が、修養上及處世上直ちに立派な敎訓となる事は當然でありませう。劍道を學ぶ人は單に技術のみを學ばず、右申述べた樣な劍道の精神を十分に味はつて頂き度いと思ひます。

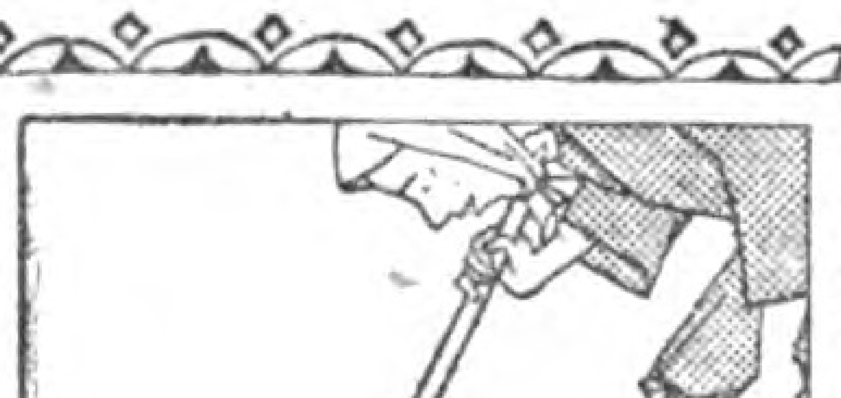
○劍太刀いよゝ磨ぐべし古ゆ　さやけく負ひて來にしその名ぞ　（大伴家持）

○うつ太刀のかねのひゞきは久方の天つ空にぞ聞えあぐべき　（三原紹心）

て、楠屋の繁昌疑ひなし。されば大風吹け吹けでムいます。』と云ひましたとさ。（S・T生）

小石と金剛石

或人のなくした金剛石が暫く道に轉がつてゐたが到頭一人の商人に拾はれた。商人はそれを王様に賣つた。王様はそれを王冠の飾の一つにした。之を聞いて小石が大騷ぎを始めた。小石は金剛石の運の好いのが羨しくて耐らなかつたのである。で或日、小石は傍を通つた百姓を呼止めて、『どうか都に連れて行つて下さい。噂に聞くと、金剛石の奴は都に出世してゐるさうですが、彼奴ももとは私の傍に長年轉つてゐたんです。彼奴も私も同じ石ですよ。私だつて都に出れば出世するにきまつてゐます。』と言つた。百姓は小石を荷に入れて都に持つて行つた。望み通りに都に出ることは出たが、王冠の飾にはならないで、道路の穴を埋めるのに使はれた。



（小山三市）



白衣の天使隊

―あゝ人道の母ナイティンゲール孃―

法學博士　蜷川新

◇何によつて然るか

ペリシエ將軍、ラグラン司令官の名を知らぬ人はあつても、前代未聞の慘禍を史上に留めたクリミヤ戰爭を知らない人はない、たとひクリミヤ戰爭を知らぬ人があつても、ナイティンゲールの名を知らぬものはない。

ナイテインゲール、それは、かよわき一女性に過ぎない。僅かに三十七人の看護婦を率ゐて、クリミヤの戰地に傷病兵を介抱した一看護婦長に外ならぬ。しかもその名は元帥大將を凌ぎ、その譽は全世界的であり、その事業は永遠に不滅である。そもそも何によつて然るか。

◇先づ犬の看護から

『まあ、かはいさうに、怪我をしたの』と云つては、人形に繃帶を巻き、小さいベツドの上に寢かせて看護することが、幼い頃の彼女の仕事だつた。彼女は非常に人形が好きだつた。否、人形ばかりではない、家畜も好き、小鳥も好き、花も好きだつた。それを勞り、それを育て、それを愛することが好きだつた。いはゆる「その仁、天性に出づる」ものである。

一日、彼女は、一人の牧師さんと共に、パムプシャの野で、馬に乘つて遊んでゐた。折柄、一人の老いたる羊飼が、四方八方に散つてゐる羊の群を集めてゐたが、容易に集まつて來ない。毎時は犬がゐてそれを手傳ふのだが、今日に限つて犬がゐないので、羊飼は非常に骨が折れる樣子であつた。

『犬はどうしたな』と、牧師が尋ねた。

『旦那樣、犬は可哀さうに、村の子供が石を打ツつけたので、脛をしたゝか折られちやいましてね、もう駄目でせう、ひどく苦しんでゐますで、いつそ一と思ひに殺して、樂にしてやらうかとも思つてをりますよ』

羊飼は怨しさうに、さう答へた。

『まあ！』たゞ一語、驚愕と悲痛とに滿ちたその一語を思はず口走つた時、彼女の馬はもう犬小舍へ馳けつけてゐた。牧師も引きずられるやうに、これにつゞいた。

犬は氣息奄々として喘ぎ苦しんでゐた。牧師は飛んで降りて仔細に犬の體を檢べた後、元氣よく云つた。

『ウム、こりやまだ脛は折れてゐないやうだ』

『え〻まだ助りますか』と、彼女は心許なげに尋ねた。



ナイティンゲール孃晩年の肖像（赤十字社所藏）

『え〻、助かりますよ、看病してやれば』

彼女は躍り立つばかりに喜んだ。そこで早速羊飼の子供を手傳はせて、湯を沸かして、それでその附近を清潔に洗つた後、そこに乾してあつた羊飼の上衣を取ると、惜氣もなくビリ〳〵と引裂いた。驚いてゐる子供に構はず、その布片を湯に浸して、犬の傷口に應急の手當を施した。一廉の看護婦も及ばぬ機敏さである。

數時間の久しきを、彼女は熱心に犬の看護に盡した。犬は次第に痛みを去つて、夕方羊飼の老人が歸つた頃には、もうすつかり元氣づいてゐた。羊飼は涙を流して、彼女の深切に感謝したといふ。ナイティンゲール孃が、將來世界的赤十字の母たる素地は、この少女時代に於て既に十分に萌芽を發してゐた。

彼女の父ウイリアム・ショーアは、英國ダービーシア州リーの名門であり、又大地主であつた。併し世の常の大地主と違つて、小作人を愛してその利益を圖り、多額の費用を出して地方教育の開發に盡すなど、仁愛の德に惠まれた寬厚の長者であつた。

『もし、あの人が無かつたら、リーの貧乏人は、今日大抵讀み書きも出來なかつたらう』

と後々までも土地の小作人から有難がられたものである。

彼女の母も亦名門スミス家に入つて、その美しい

容姿と情深い人徳とを、民衆から慕はれた人だつた。
ナイティンゲール嬢はかうした人を父とし母として、一八二〇年、その父母が伊太利の旅行中に生まれた。その人を知らんとする者は其の父母を見よ。嬢の偉大なる人格は決して偶然に出來たものではない。

◇淸く雄々しき一大決心

やゝ長ずるに及んで、ナイティンゲール嬢は、又よく村人達のために盡した。病人があれば、飛んで行つて看病につとめた。又その看護の親切さ、手當の適切さ、とてもへぼな醫者や、なまじひの肉親などの及ぶ所ではなかつた。村の人達はただその博大なる仁愛に包まれて、生きたる神のやうに敬慕したといふ。

かうした大仁愛の心は、彼女が人となるに從つて、人形から家畜へ、家畜から隣人へ、さうして遂には隣人から社會へと、大きく目覺めて行つた。



妙齡の頃より、彼女は社交界の人となり、ロンドンに於ても、社交界の花と謳はれたが、しかし彼女の本領は別にあつた。彼女は當時囚人情態の改善のために身心と財産とを傾けつくしたるエリザベス・フライ夫人を知るに及んで、深く其の事業に心を惹かれた。又彼女は、獨逸人でフライ夫人の友人なるフリードナーといふ牧師が、女囚出獄者の保護の爲に奮起し、延いて看護婦養成にその一生を捧げてゐる事を聞いて、深く之に感動し、遂に自分も亦その一生をかゝる尊い事業のために捧げたいと、密かに決心するに至つた。身を飾り戀を歌ふに日も足らざる靑春時代に於て、既にこの聖僧の如き一大覺悟をなす、以て女史の非凡なる人格を想見すべきである。

『私は看護婦になりたいと思ひます、どうぞお許し下さい』

彼女が二十五歳の時である、自己の賦性に目覺め、看護婦の天職を理解し、我が一生の行くべき道はただこの一路と、深く信じ、固く思ひ定めた結果である。もとより一朝一夕の事ではない。

これを聞いた父と母との沈默は、やゝ暫らくつゞいた。

『折角だが、それは止めたがよからう』

『お前、看護婦といふものゝ實狀をお知りかえ？』

父も母も思ふところは同じであつた。當時英國は

一般に泰平に狃れて、上流子女は社交界にのみ憂身をやつし、人道事業に身を寄せる人などは全然跡を絶ち、看護婦養成といふことなどは全く顧みられなかつた結果、看護事業は下賤の婦人にのみ委ねられ、ために英國の看護婦は、ウヰスキーを呷つて亂舞放歌すると云ふ風で、實に墮落の極にあつた。從つて父母がその愛娘をこの渦中に入れる事を喜ばなかつたのは當然である。

彼女としては、看護婦界が斯くあればこそ、奮然として之が革新を志し、自ら起つて其の事業に當らんとしたのであるがしかし父母が之を許さぬ以上、その命に抗するやうな不德なる彼女ではなかつた。

一八五一年、その三十一歳の時、彼女は遂に一大決心の下に獨逸に渡つた。而してかのフリードナーの經營する舊敎の尼僧病院に生徒となつた。彼女は新敎徒であつたが、この聖なる事業の遂行の爲には、宗敎上の褊狹なる執着などは彼女の念頭になき所であつた。とはいへ、これは尋常婦人の、殊に宗派の觀念のやかましい習慣の中に於て、斷じて爲し易きことではなかつた。



次いで又一八五三年、彼女は、佛國に渡つて、サン・バンサン・ド・ポール寺院に身を寄せ、尼僧と共に生活しつゝ、佛國婦人の看護方法を研究した、佛國の尼僧は、多くは身分の高い人の子女で、それが一生を神に捧げ、病者の看護に献身することに於て、今日に至るまで有名である。

かくて、彼女は看護事業の研究のために、廣く外國を旅して、これを英國のそれと比較し、英國の看護事業が非常に劣つてゐるのを見て、どうあつても、自らこの事業のために一生を捧げなければならぬと、ますます決心を固めて行つたのである。

◇戰地に向ふ天使隊

一八五四年、クリミヤ戰爭は遂に爆發した。英佛の二國が、土耳古を援けて、大露國と戰つたのである。英國としてはウオタールー以後の大戰爭であつた。

ところが此の時の英軍の後方勤務が、甚だしく不整備で、傷病者に對する設備の如き全くなつてゐなかつた。殊にアルマ及びインケルマンの戰鬪後は、傷病者は實に夥しい數に上つたが、軍醫の不足のため、それを始末することが出來ない。看護婦も居ないために、たゞ空しく生死の運命にまかせるより外な

かつた。否、甚だしきは繃帯すらもないのであつた。

當時ロンドンタイムスの從軍記者ラツセルは、この慘狀を報じて曰く、

『傷病者は、親切なる戰友の背によつて運ばれたまゝ、靜かに地上に横はるのみである。彼等は全然手當を受けることが出來ない。そしてたゞ運命のまゝに死んでゆく。そこには臭氣芬々として、げに酸鼻を極めてゐる』

と、更に筆を轉じて英國婦人に警告して曰く、



『わが英國の婦人中、誰れ一人起つて、國家の爲に奮鬪する忠勇なる將士の病苦を看護せんとするものは無きか。この國家非常の時に際し、自ら進んで戰地に至り、最高最貴なる博愛事業に一身を委ねんとする義人はなきか。佛國婦人は既に戰場に於て、その尊き女性の靈能を發揮し、傷病者の看護に日も足らざるにあらずや』

この痛烈にして悲壯なる警告は、さすがに英國婦人に一大衝動を與へずには措かなかつた。各階級の婦人は、從軍志願書を携へて、われもわれと先を爭うて當局に殺到した。その中に我がナイテインゲール孃があつたことは言ふまでもない。

これより先、當局は、戰地に看護婦を送るの必要を痛感したが、何分これを統制し監督すべき人格と手腕を兼ね備へた婦人を得ることが出來ないので、殆ど困惑し切つてゐた。時に聰明なる陸軍大臣ハーバート氏の烱眼に映じたる一婦人があつた。——ナイテインゲール孃である。陸相は固く信じた、今日の場合、孃を措いて他にその人はないと。乃ち一書を彼女に呈して、從事の意なきかを尋ねた。而してもし從軍してくれるならば、看護上の全權を擧げて孃に委ねるといふことを申込んだ。

偉人は偉人を知る。國家より全權を委ねられた事が、どれほ

ど彼女の事業に好都合であつたか知れない。

『なアに女が戰地などへ行つたつて、何の役に立つものか』

英國の軍人中には、さう云つて婦人從軍を嘲笑するものが多かつた。又英國の宗教家の中には、ナイチンゲール孃の宗教に對する態度を僻つて、

『彼女は英國の新教を亂るものだ』

と嘲るものもあり、又新舊兩教の婦人を送らねばならぬと、やかましく說き立てる者などもあつて、この事業の容易ならぬ事を想はせた。

併し彼女は、見事にこの難問題を解決し、兩教者の上に立つて、好く之を統率してゆくことが出來た。彼女の人格と手腕の凡ならざるを見るべきである。

かくて彼女は陸軍大臣の言を容れて、直ちに準備に着手し、一週間で出發した。時にナイチンゲールの名は、既に全國に高まつて、『天使隊』といふ美しくも尊き名が、英國民によつて彼女の一行に加へられた。さうして彼女の行を壯にせんとする國民の希望は、停車場に潮の如き群集を豫想せしめた。しかし彼女はすべての送別を避け、僅かに數人の親近に見送られ、黑い服を身に着けたまゝ、家鄕近くの停車場からこつそりと出發してしまつた。花々しい見送り人の歡呼に送られる如き虛飾なる心は、彼女の最も忌むところであつた。

彼女は佛國のブーローギュに着いた。すると意外にも、多數の佛人から歡呼して迎へられたのには、彼女も驚いた。それは彼女が、直ちに巴里の尼僧院に姿をかくしたといふに見ても、いかに彼女の壯擧が隣國にまで感激を喚起してゐたかが知れると共に、彼女の愼ましい心が奥床しくも偲ばれるではないか。

◇淡きランプの影

ナイチンゲールが地中海から君府を經て、スクタリの病院に着いたのは、その歲の十一月であつた。

病院は土耳古政府の提供した一大バラックで、人員も少ければ、物資藥品の缺乏は言ふまでもなく、院内は不潔を極めて、病院の中に腐れ爛れた犬の屍が幾つも橫はつてゐるといふ有樣だから、鼠は群をなして患者の傍に出沒し、毒虫は患者を襲うて、患者の衣服は血にまみれたまゝ固くなつてゐるといふ、目もあてられない惨狀であつた。殊に鼠を恐れること、われ〳〵の想像以上である西洋人のことだから、軍醫等は本國から婦人が來ると聞いて、これを冷笑し、

『女なんかがやつて來たつて、この鼠を見ただけでも、膽を潰して逃げ出すにきまつてら』

そんな惡口をいつてゐた。併し、ナイチンゲールは、人道の勇士である。そんな事にびくともするものではなかつた。鼠がうるさく出沒するのを見た彼女は、いきなり釘をもつて、その鼠を一擊の下に斃した。軍醫等もさすがに一驚を吃したといふことである。

彼女は、病院に於ては實に好個の事務家たる能力を發揮し

た。國家から全權を受けてゐる彼女は、必要と適當と思ふことには、先例と手續とに拘泥することなく、自由に機敏にテキパキと處理することが出來た。かくして、不潔と放任と混亂と無責任の限りが盡された病院内を、一歩々々と整理して行つた。患者に對する物品の供給などでも思ふ存分に行つた。又自費でもつて賄場を新設して患者に榮養を取らせることに努め、洗濯所を新設して、患者の衣服を清潔にするなど、實に細心周到なる注意の限りを盡した。

彼女は自ら繃帶その他の看護の事にも從ひ、時としては一日に二十時間も立づめに働いた。そして瀕死の人のためには、說敎を試みて其の心を慰め、又その遺言を手記しては、之をその遺族に送る事を怠らなかつた。

彼女は夜なく／＼小さいランプを手にして、延長四哩に亙る病院の廊下を隅から隅まで見舞つて歩いた。淡きランプの灯影は天使の愛の表徴であつた。「ランプを手にせる婦人」として、米國の詩人ロング・フェローの歌つたのは、實に彼女のやさしい心を讃美したのである。彼女のランプの光が見えると、起き得る患者は床上に起き直つて、灯影に向つて衷心の敬意を表した。起き得ないものは、首をあげて病床に映る彼女の影に接吻し、以て彼女の仁慈を深く敬慕したと傳へられてゐる。いかにも涙ぐましい情景ではないか。



◇死線を超えて

ナイテインゲールはスクタリから黑海を經て、ハラクラバの病院にも奉仕した。この時戰線の最前線までも進んで、兵士の勞をねぎらつた。哨兵がその危險を告げて止めようとした。

『なアに、死ぬるぐらゐ何でもありません』

と云つて、敵彈雨飛の中を物とせず進んだといはれる。

彼女の率ゐてゐた看護者の中で、三人までも疫病のために斃れた。彼女はこの尊い犧牲者の靈を弔ふと共に、他の同僚達を勵まして、一層その使命のために奮鬪した。斯くて數千人の患者が、彼女の愛の翼の中に護られてゐたさうである。

併しながら、彼女と雖も鐵石の身

ではない。遂に熱病の感染するところとなつて、彼女は病床に臥せねばならなかつた。その高熱に呻吟する折よく、一束の花を彼女に贈つた人があつた。

『お丶花！　美しい花よ』

さう言つて、彼女はその花に異常の感激を覺えたが、不思議にもそれから彼女の元氣は大いに回復し、さしも致命的病苦をさへ忘れるに至つたといふ。彼女は少女の頃から常に病人のために花を贈つて、之を慰める事に努めて來てゐたが、その心が今又彼女の病苦をも慰め救うたのである。



かくて病むこと十二日、生死を超越してゐる彼女は、遂にかほどの大熱をも驅逐してしまつた。病後の保養のために、醫師は彼女の本國歸還を勸めた。

『私の責務はまだ終つてをりません』

頑として應じなかつた。

一八五五年九月、英佛軍は一年に亙るセバストポールの包圍に成功し、城遂に陷り、次で休戰となつたが、まだ軍隊は撤退しなかつた。戰地に於けるナイテインゲールの功勞は、夙に本國に喧傳されたが、休戰と共に、彼女の功績を賞讃する會合がロンドンで催され、彼女の名聲は雷の如く一世に響いた。さうして四十萬圓といふ感謝金が、彼女のために廣く國民の間から集められた。女皇も亦ダイヤモンド入の高貴なる贈物を彼女のために下賜された。彼女は人氣の絕頂にあつた。

◇價値ある生命

彼女はます〳〵國家人道のために奮進大いに努めた。休戰のために動もすれば弛緩せんとする兵士の士氣を緊張するために、圖書館を戰地に建て丶、本國より書物の寄贈を圖つた。內地送金の法を講じて、兵士の給料を內地に送らせて、酒食に浪費する弊を救うた。

一八五六年七月、英佛軍はクリミヤ半島を撤退した。併し、彼女は一人戰地に留まつてその後始末をした。斯くて一切の事務を完了した後、彼女は更に自費を以て、高さ二十呎の大理石の十字塔をバラクラバ附近の丘上に建立し、これに英文とラテン文とで、

『神よ、我等の上に慈悲を垂れ給へ』

と訓し、以て永遠の記念とした

彼女は、こゝに始めて本國に歸つた。その歸國に際しても、國家は軍艦を提供しようとしたが、彼女は固辭して受けなかつた。そして一商艦に乘つて竊かにマルセイユに到着したが、更にロンドンでの歡迎を避けて、一路郷里へ歸つてしまつた。而も人々の注意からのがれるべく、面を黑のヴエールで掩うて。

さなきだに虛榮は人間の通有である、殊に婦人に於て然りとされる。ひとり彼女は一切の虛榮を超越して純眞そのものである。あゝ、尊貴なる彼女の精神よ、我等は神の大愛を彼女に見る心地がする。

英國皇室に於ても、深く彼女の功勞を思召され、特に彼女を優遇せられた。それに刺激されて、英國上流夫人は、初めて人道に覺醒するに至つた。

又陸軍大臣ハーバート氏は彼女の意見によりて、英國陸軍の衞生勤務に一大改革を斷行した。かくて彼女は實に英國の看護と衞生事業に、一大時期を劃し、人道の母と仰がれるに至つたのである。彼女は九十一歲の高齡をもつて其の尊き一生を封じた。この時、英國の軍隊では、彼女を、偉人の墓地として有名なウエストミンスター寺院に國葬せられんことを希うた。けれども彼女の遺言は、

「葬式を質素にせよ」

と命じた。その言葉のまゝに、彼女の葬式は、郷里に於て極めて簡素に行はれた。彼女の墓碑には、たゞ、

フロレンス・ナイティンゲール

一八二〇年五月十二日生、一九一〇年八月十三日死

と記されただけであつた。さうして其の柩には皇后の贈られた花を供へ、皇后御親らの筆で左の如く記してあつた、

フロレンス・ナイティンゲールへ

一八五三年獻身と勇氣とを以て陸軍看護婦勤務の基礎を築きたる人類の大慈善家に感謝の印として

一九一〇年八月二十日　アレキサンドラより

ナイティンゲールの一生は、實に人類のために最も價値ある生命であつた。(をはり)



名士の家庭と愛兒の課外讀物



文學博士　佐佐木信綱

子供は皆大きくなりました。折々孫たちが遊びに來ますが、幼年倶樂部を讀ませてゐます。皆喜んで讀みます。



文學博士　中村孝也

幼年倶樂部
少年倶樂部
少女倶樂部
｝幼年少年少女雜誌の覇王です

何れも課外讀物として安心して子供に與へてゐます。



文藝家　佐々木邦

目下小學校へ通つてゐるのは、末男（四年生）だけです。家庭に於ては、幼年倶樂部、少年倶樂部を、課外讀物として與へてゐます。

（記者）　幼年倶樂部は數ある雜誌中、最も卓越せるものとして定評があります。現に多數の小學校に、副讀本として採用せられて居ます。又幼年倶樂部を與へたために『勉強ぎらひの子が勉強好になつた』とか『讀書力が進みお話が上手になつて學藝會にはいつも選ばれる』とか、『內氣の子供が活潑になり、冗費の癖が直つた』など教師や父兄方から感謝の聲が高い。

十月號には、强力太郎、安壽姫と厨子王丸、突飛勇士前原伊助、ドングリ太郎、メリーの大手柄等、何れも子供に興味深き讀物が掲載せられ、附錄として『大パノラマ陸海軍大戰爭』がついてゐます。お子樣方の讀物としては絶好のものと信じます。どうか子供の雜誌なら是非幼年倶樂部をお選びになる樣お勸め致します。

自分を生かす道

軍事參議官
海軍大將男爵　安保清種

黒田如水が、或時、豐臣太閤に對つて、

『殿下が、今日天下に號令せらるゝやうな顯榮の地位に達せらるゝまでには、常に何か心の中に一つの信條をお持ちになつて居たに相違あるまいとお察し致しまするが、是非其邊の義に就いて御洩らしを頂きたうございまする。私の子孫の爲めに家の敎訓として遺し置きたいと存じまするから……』

と申出たところ、秀吉は徐に口を開いて、

『いや、予が今日を得たのには、別に口傳もなければ秘訣もない。唯、過去を追はず、未來を冀へず、今日唯今の仕事に對して、最善を盡したまでの事ぢや』

と答へたと云ふのは、誰しも知らぬ者のない程有名な話だが、此秀吉の謂ふ所は、全く其通りで、實に千古不磨の大敎訓であると私は信じて居る。

成程、理想も必要だ、向上發展も考へねばならない。然しながら現在の職務を離れて其處に向上も發展もない筈でゐる。

所が、近頃の若い人の中には動もすれば、

『自分にはこんな下らぬ仕事は出來ない』

と云つて、自己の現在の職務を輕蔑し、不平滿々たる人を見受ける、此人の考へは非常の誤りであると思ふ。如何なる仕事に對しても、『此事は自分でなければならない』と思ひ込んで、最善を盡し現在を樂しんで行く心こそ、やがて其人の成功に根柢、基礎を與へるものであらうと思ふ。

斯う決心して仕事に就くと、自然に仕事の能率も上つて來る。能率が上つて來れば仕事も愉快になつて來る、始終進んで仕事をすればやがて長上に認められ、成功の緒を握ることが出來る。

秀吉は、草履取となれば、人の賤しむその草履取りの仕事に最善をつくし、毫も怠る事がなかつた。だから彼はやがて、主君信長に認められる樣になつたのだ。侍大將の地位に上れば、侍大將中の一番立派なものにならうと決

心した。それは信長配下の隨一と稱へられた柴田、丹羽兩將の姓を取つて、羽柴と名乘つたのでも其意氣込がわかる。彼が歩一歩と、一代の大業を建てゝ、遂に位人臣を極めるに至つたのも、全く此精神があつたからである。

◇

またかの小村外務大臣は、虛弱な身體を以て、日露大戰當時、多事多難な外交の衝に、我を忘れて働いた。或人は其健康を氣遣つて、靜養を勸說したが、又一方、『否、小村樣は外相の激職に在ればこそ身體が續いて居るのだ。大臣をやめたら倒れてしまふよ』と、之を駁する人もあつた。それかあらぬか、小村樣は職を去つて葉山に靜養すると間もなく逝去された。小村樣の、病人とも思はれぬ偉大な精力の根源は、やはりこの仕事に對する熱心、國を思ふ忠誠の一念に横つて居たのである。

實際吾々にしても、自分の仕事に沒頭し一生懸命に樂しんでやつて居る時には、精神も肉體も生々として活動するものだ。例へば、仕事に熱中して忙しい間に讀む書物の要點はよく頭の中に刻み込まれるが、今日は閑だからと落ちついてよむ時は、どうも精神の緊張せぬためか、思ふ樣に頭に入らない。

或人が、『自分の好んでやる仕事には忙しいといふ事はない筈だ』と云はれたが實際其通り忙しい、忙しい等と思つてやつてゐる中はまだ仕事に本當の樂が出て居らぬ證據だ。

斯うした尊い心持になるのは、矢張り現實の職務に忠實にやつて行くより外はない。これこそ自分を活かし社會に貢獻する唯一の途だと考へる。

◇

『柳は綠、花は紅』各自が其個性特長を發揮してゆく所に個人の發展があり、社會の向上が懸つて居る。併し綠の柳は紅の花を得て一層の風情を添ふる如く、自他彼此互に其立場を尊重し協調してゆく所に人情の美花は咲くものである。

夫は妻の境地に理解と同情をもち、妻はまた夫の仕事に同情し之が活動に便ずる。かくて其處に家庭の平和は生まれて來る。

自分の受持の仕事に精進すると同時に、同僚が其仕事に全能力を發揮し得る樣仕向けてゆく。こゝに會社の能率は求めずして擧つて行く。

かくて全力を盡し眞實を傾けて、仕事の裡に自分を沒入し、自己の使命に邁進すると共に、又他人の立場に同情してこそ、眞に人榮え、國興り、社會平和に樂しむの基礎は求められるのではあるまいか。



苦學生の大恩人望月軍四郎

株屋の小僧から三千萬圓の長者に

安藝三郎

取引所は大學

『軍四郎は、まだ起きてゐるんだな？』兜町の村上株式取引店の主人、太三郎は、小僧達の寢てゐる二階の一間に、何時までも灯が點いてゐるので不審に思つた。

場所柄だけに晝間は極度に昂奮し、雜沓を續けた取引所附近も、いて付くやうな寒い冬の眞夜中になると、流石に人通りも絶えて森と更けて行くのに、小僧の軍四郎は破れ机に向つて、讀書をしてゐた。だが、根が寬仁な太三郎、その儘咎めもしなかつた。

『一體軍四郎は何を讀んでゐるんだらう？』

每夜の事なので、太三郎はある日、軍四郎の荷物を檢べて見て、ぎつくりした。

『何だ、財政と金融、貨幣論……プッ！　あの小僧こんな本を讀んでゐるのか。』



望月軍四郎氏

太三郎自身にも解しかねる六ケ敷い本を、十五や十六の小僧が讀んでゐるといふのだから不思議。

『おい軍公、お前、この本を讀んで判るのかい』

露骨な質問に、軍四郎はちよつと顏を赧らめたが、

『——はい、何うにか字だけは讀めるやうになりました。』

『はつは……、字だけ讀めたんぢや爲方がない。意味が判るのかい。』

『意味なんぞ、六ケ敷くて少しも判りません。』

『それぢや何にもなるまい。』

『けれど、讀書百遍意自ら通ず——とかいひますから、その中にぽつ／＼判る



やうにならうと、それを樂しみに讀續けて居ります。』

『さうか、なかく偉い事をいふ。けれど、こんな本は大學で敎へる本で、お前のやうに十三の歳から小僧に出た無學な者には判りつこはない、それよりも相場の高低表でも睨みつけて實地を覺えろ、無學なものはそれが肝心だ。』

『でも、私は立派な先生と學校とを持つてゐますから、大丈夫だと思つて居ります。』

『何、學校と先生とを持つてゐる？』

『はい、取引所は私の大學で、旦那は私の先生です。帝國大學ばかりが學校ではないです。』

『ふむ……』

流石の太三郎も、小僧の抱負と識見とに驚いて、（こ奴、末恐ろしい奴だわい！）眼をまるくした。

克苦二十年

『無學とは無能の事だ。文字に乏しくとも、社會に活躍する者は、決して無學ではない。』

軍四郎は、主人にいはれるまでもない、自分の無學を知つてゐたから、一方ではせつせと勉學し、一方では無學を怖れないだけの修業をつんだ。

今でこそ、株式界といへば、經濟界のバロメーターで、これに干與る實業家も、學問人格見識を備へた人も少いが、當時は大概所謂相場師で、一攫千金の夢を見て、兎角節度のない者が多かつた。殊に株屋の小僧などは多く、自墮落な生活をしてゐた。

『おい、軍ちやん、俺あ東株の新へちよいと手を出したら、千圓程儲かつたんだ。新富町で奢るから交際はねえか？』

まだ二十歳にもならぬ小僧達が、皆んなさういふ風であつた。

『止しなよ、折角儲けた金ぢやないか、貯金でもして、今度損した時の準備をしといた方がいゝ。』

軍四郎は、いつもさう答へて、誘惑に乘らなかつた。

『チエツ、止せやい、緣喜でもねえ、俺は損なぞしないんだ。』

早熟た小僧は、ぷんく〳〵して行つてしまつた。

『軍公ぐらゐ莫迦な奴はねえ、相場師に



なるのは、うんと儲けて、浮世を面白をかしく暮したいからぢやねえか。』
放埒な同輩間で、毎も軍四郎は悪口されてゐた。が、彼は平然としてゐた。
『株式市場は、そんなやくざものではない。經濟界で、重要な役目をする嚴肅な機關である。それに與る者も、また嚴肅な人物でなくてはならない。』
彼はさうした信念をもつて、孜々として働いてゐた。克苦二十年、彼はあの社會にゐて殆んど茶屋酒の味さへ知らずに過ごして來た。
『あの男になら、店を一任しても善い。』
逐に主人の太三郎さへ、軍四郎の人物手腕に信頼して、店を全部委せてしまつた。時に彼はまだ二十九歳であつたが、その精密な頭腦と健實な營業方針とは、同業者の範となり、村上商店は旭日昇天の勢で隆盛に向つて行つた。

株式から金融へ

『もう善からう、俺は二十何年一つ學校へ通つた譯だから、これからその鍛へた腕を振はねばならない。』
充分な蘊蓄と、磨きあげた手腕とに自信の出來た彼は、明治四十二年、愈よ主家を辭して、獨立の商店を經營する事になつた。
その間、彼は鳴かず蜚ばず、凡ゆる山氣や誘惑に打克つて、克苦勉勵、人から見たら恐らく彼の牛歩の遲々たるのを嗤はずにはゐられなかつた位。
然し、彼の方針は誤らなかつた。
『望月なら大丈夫だ！』
さういふ信頼の聲が雲の如く湧いて、彼の店は素晴らしい繁昌をした。正に蛟龍雲を得て天に昇るの氣を示し、見る見る巨萬の富と人望とを一身に集めた。
『株式界の望月！』
その名は妖星の如く、取引所を壓倒した。
然し、機を見るに敏なる彼は、財界の風雲に早くも不安を感じてゐた。
『これは今の中に、金融界へ轉じた方が善いぞ。』
そして、大正十一年突如、彼は株式界を引退すると宣言して金融界の人となつた。
その第一歩が田口銀行の買收である。
『君が銀行界へ入つて來たのは幸である。同じく銀行界で活動するなら、儂のところで充分腕を振つては貰へまいか？』
銀行界の大黒柱安川家から、さういふ

懇望を受けた。

『といはれると、安田銀行へ來いといふのですか？』

『いや、同じ系統の帝國商業銀行（後の第三銀行）の方だ。あの銀行は御承知の通り、株式取引所を中心とする金融機關であるから、普通の銀行家ではなかなか經營が六かしい、君なら、その點では申分のない適任者と思ふから、是非事務取締役の椅子に坐つて貰ひたい。』

靜岡縣大宮町から、笈を背負つて上京した十三歳の小僧軍四郎は、今や、株式界金融界の重鎭として大銀行の事務の椅子に坐る身分になつた。

『何のために相場師になるんだ！』

さんざん罵詈されても、これからの放縱な雛ツ子相場師に組せず、己れの道に精進した彼は、遂に相場師にはならなかつた。天晴れ一流實業家として遜色なき人格識見の所有者として、財界の一方に輝いてゐる。

寧ろ徳育界に

然し、彼の偉いところは單に財界に成功したといふばかりではなく、寧ろ、彼のなした社會徳育界への貢献に、彼の眞骨頭がある。



大正七年彼は、經濟市場視察のために渡米し、日米問題について秘かに感ずるところがあつた。

『日米の問題は、寧ろ日支間の問題である。日支の融合がぴたりと行けば、日米の關係も常に圓滑に行く筈だ。』

そこへ着目して、歸朝後彼は直ちに成城學校財團を訪ねた。

『將來支那の中堅となる青年學生を、出來るだけ多く日本に收容せられるやう努められたい。そして彼等に、我が大日本帝國の眞價を充分知らせるやう努められたい。それが日支親善の急務であらうと私は信じます。』

『如何にも仰せの通りです。』

理事はさういふ外はなかつた。

『就いては、その一助にもされたい。』

彼は、懐から一枚の小切手を出した。理事が受取つて見てあつ！と驚いた。その紙面には金五十萬圓と書いてあつた。

また、それから間もなく彼は、慶應大學、早稻田大學をも訪れた。

『日支親善のために、是非支那講座を設置せられたい。』

と說き、そこでも各々百萬の金を寄附して來た。

また國民の健康狀態を憂へて、代々木

に於ける一萬餘坪の土地を、體育研究所へ惜氣もなく寄附してしまつた。

　その他公共團體、教育事業等へ寄附貢献した事は、殆んど枚擧に遑ない程で、その事が畏くも天聽に達し、大正十三年には勳三等に叙せられた。

苦學生のために

　大正七年に、彼を會長とする誠徳會といふものが生れた。

『有爲な才能を持ちながら、學資のないために、空しく材幹を朽ちさせる者が多からう。儂は自分の苦學に鑑みてそれ等の人に同情する。就ては、何か儂の力でその援助の出來る方法が講じたい。』

　彼は執事にさう相談した。

　それが誠徳會の起源である。執事の計ひで、數名の學生が彼の膝下に集つた。

『私は、兩親のないために今まで苦學をしましたが、今度××へ入學しましたに就いて、是非御援助に與りたい。』

　學生の一人がいつた。

『それは氣の毒だ。では、幾ら位援助したら、君は充分學問する事が出來ますか？』



『三十五圓もあれば、どうにかやれます。』

『よろしい、では四十圓宛補助しよう。然し君も一介の男子であれば、不見不知の僕から故なく補助を受けて學校を出る事潔しとせぬであらう。で、この金は君に毎月二十五日に貸與する、勿論無利息無期限、無證文であるが、將來君が一人前の紳士になつた時には返濟して呉れたまへ。さうすれば、また一人多くの學生に補助が出來る譯である。』

　彼は懇切に説明した。

　この方法は、實に學生の心情に同情をした最も優れた貸費法である。

　些か人の世話をして、恩に被せがましくする金持根性は毛頭ない、學生の恩人、學生の唯一の同情者である。

　爾來、十星霜の今日既に百數十名の學生が彼の庇護援助の下に高等教育を受けて社會に活動してゐる。

　そして年々その數を増して行く。

『予の半生の事業である。』

と彼はいつてゐる。

　それ程の彼であるが、家に自動車一つ置かず、愼ましい生活に甘んじ、和氣靄靄たる平和な家庭の善良な主父として、他人の羨望を買ふ程人間味のある生活を

してゐる。一代にして三千萬圓の富を得た彼であるから、虎大盡、狼大盡の豪奢を極めても何でもないであらうが、そんな毛ぶらひさへ見せぬのみか、暇を作つては、夫人と共に机を並べ谷晩翠氏を聘して漢學の稽古に餘念がない。

『諸君は、知識の學問の外に、徳の學問に志さねばいけない。徳の學問は、人間一生の仕事である。』さう云つて後進を勵ましてゐるが、此うして、今も尚、村上株式取引店の二階で、こつそりと勉強した時代の態度を失はずに居る。

私の見たる雜誌『雄辯』

代議士 鶴見祐輔



○雜誌『雄辯』は、十有九年間日本雄辯界のために、孤壘を守つて奮闘して來た名譽ある歷史を持つてゐる。普選の到來と共に、言論盛行の時代と成りつゝある現在の日本は『雄辯』に負ふ所少くあるまい。

ことに同誌が常に眞摯の態度を把持し左右兩極の思想に偏せず、穩健にして建設的なる中道を歩み來りたることは、青年薫化の上に於て貢献大なりしことを思ふ。青年雄辯に志すものゝ悉く熟讀すべき良誌である。

侯爵 小村欣一



○社會生活人にとりて、凡ゆる機關の中、辯論、自由意思發表の機關ほど重要なる、意義の深甚なるものは無い。而も『雄辯』は机上の空論に終らず、最も適切なる事例を示し、常に一派の潤を以て、世人に說いてゐる所は、吾人の感歎する所である。

私が推奬する婦人雜誌

—婦人倶樂部に敬服する—

三輪田高女校長 三輪田元道



文化のメートルとなるべき雜誌は眞善美をよく鑑賞し、又調和しませんと、永續の生命は持てぬと信じます。

婦人倶樂部の内容を探り、編輯ぶりを察するに、眞善美を具備しこれを并進せしめるやう努力されると見えて、四時の自然美を說き、東西の人情美を傳へるかと思へば新しい手藝裁縫の作り方もあり、婦人のたしなみとしての化粧法もあるかと思へば、家庭の礎となるべき儲金の奬勵もあり、毎日なくてならぬ料理法があるかと思へば、面白い小說もあり、其他衞生の心得、結婚上の注意もあるといふ風に、總て目より心に映ずる精神生活の糧となるべき一切の知識と、教訓と趣味とが都合よく排列されてゐる。

故に少しも批難される事なきは勿論、安心して數多の女性より愛讀されてゐるのは、苦心の存する處と思はれる。全く敬服の外はない。

智勇連翹禪

本田美禪
山口將吉郎画

矢はり人の子

各務も姫の後から續いた。而うしてじつと今いつた姫の我儘三昧の言葉について考へて見た。『今日までの幸殿と姫との關係を種にして十萬石の大身に取立て丶貰ふやう内願することは駄目かも知れぬが、舊領地遠州相良へ國替の儀を願ふぐらゐの役には立たぬものとも限らぬ。躬の胸中には戸田の渡しへ公方家お成當日に一切の事の片をつけ、六十四年の生涯の幕を花々しく引かすやう筋書が立て丶あるのだが、其れは唯考へで、首尾よく行くか什うかは疑問だ。其れよりは其の前に、姫のおやんちやを奇貨として、大奥にゐる姫の御生母、お美代の方をひそかに抱き込み、その手によつて公方家の心を動かして置く方が萬全の策であるかも分らぬ。將を射んと欲すればまづその馬を射よといふ譬へのとほり御生母に姫の御希望を通じて置けば、十のもの九つまでは成就するに相違ない。もしまた更に一歩を進めて、久しぶりで御生母に姫の恙なきお顏を見せて……といふやうな事に運び得たなら、其れこそどんな事でも愜はう。負うた子に淺瀬を教はる、いや、姫君のお驕衿も、聞きやうにより、解りやうにより偶には役に立つから妙だな、はゝ』と北叟笑みつ丶、倘ほ考へを續けてゐる間に、先に立つた恭姫は、欣哉と幸之助と兩手を取らしたその花やかな華者な體を、自分の居間のすぐ前の廊下に近く運んでゐた。

『姫君』と大彌太は呼びかけた。

『何じや』

『憚りながら貴女樣は、お生母樣のおん事を偶にはお思ひ出し

になりませんか』

『母上の事？』

『は……』

『思ひ出すぐらゐではない。父將軍家のおん事を思ふたんびに、母上の事も想ひ出す。子として親を思はぬ者は禽獸にもないであらう』

『御尤も樣で御さいます』

『じやが……』若姫は眼の中に淚の色を見せながら、『自からは籠の鳥、檻の獸にも劣つた境遇、この屋敷から出ようといつても汝等は出してくれんでないか』

『………』

『父上、母上へのお目もじどころか、同胞の顏見ることさへも慨はぬやうにして置きながら、什う思つて今日に限つて然やうなことを汝は聞くのじや』

『恐れ入りまして御さいます……』と大彌太は眼頭を拭く。亂倫にして恥を辭さず、荒淫度なき姫の胸にも、猶且人の子としての情味が宿されてあるかと思ふと、さすがの渠も漫に哀れで、心の中でほろりとしたのだ。『では何か機會があつて、お生母樣に御對面あそばすことの出來ます場合は、當お屋敷からお乘物お出し下さるで御さいませうか』

『出す段でない』と姫は漫ろに、『出してたも、出してたも、今すぐにでも出してたも』

『いや』と大彌太は靜かに抑へて、『然て申し上げてありますとほり、お出ましの儀は一大事、公儀お許しを得ませんことにはちよつと實行は出來ませんので、其のうち折を窺つて、御親子御對面の叶ふやう取計らふで御さいませう』

『然やうか』姫はやゝ失望したやう、『兎も角も賴み入る』

『は……』

『その時には幸殿を、三家同樣の格式のある大々名にお取り立て下さるやうに願ふによつての――母上でも大事ない、自からの申すことなら何でも必とお聞き下さる。さア幸殿』姫はまた幸之助を見て、見ると共に白い手を渠の手の中に置きながら、『聞きやつたとほりじや。また居間へ行つて酒を吩咐け、前祝ひに俐倒して婚禮事の眞似でもいたさう、お來や』

『は……』

『各務も來んかや』

『拙者は少し外に用事が』

『では和尙どのを遣してくりやいの。婚禮の席に和尙は禁物、些と異なものゝやうではあるが、あの入道は面白い、すぐまゐるやうに申してくりやいの』

『畏まりました』

『さ、欣哉もお來や』と姫はいつたが、もう白い手は取らせなかつた。然もその態度には、渠の存在を見とめぬやうないと冷やかなものがあり、幸之助だけに與へたその手で、引ッ張るやうにして幸之助と共にわが居間へ入つていつた。

義人多情英雄多涙

わが詰所へと戻つて來ると、大彌太は眼を瞑ぢて、机の前へ沈着けた體をじつと其のまゝに、また瞑想に耽つてゐたが、暫くすると女中を呼んで、お清の間（佛壇のある部屋をいふ）に置いてある金襴表裝の過去帳を持つて來るやうに吩咐けた。

女中は唯々として取りに行く。

と、入違ひに寂善が其所へのつそりと入つて來た。布袋と鍾馗とを搗き交ぜて、法衣を着せたやうな大和尚。暑いので胸を寛けて、鬣狀に生えてゐる胸毛を風に騷つかしてゐる。

『什うだ、幸丸殿のことは巧くいつたか』

『うん』大彌太は前へ坐つて團扇使ひを爲初めた和尚の顏に瞳を据ゑつゝ

『案外の上首尾だつたが上首尾過ぎてまた一つ困つたことが出來て來たのだ』

『また何かお驕衿か』

『然うだ』と大彌太は大きく頷き、『大名の子と分つたら是非婚禮をしなけりやならぬ。その代りには幸殿を御三家同様の格式のある大々名にするやうに父將軍家に願つてやると斯う仰しやつてゐらつしやるのだ』

『巧い〳〵！』と寂善は覺えず手を拍ち、『然う來なくつてはならないところだ、其れで什うした』

『無論躬も唯の力なら、然う願ひたいところなのだが、あの姫君では然うはゆかない』

『其れも然うだな』

『で、ふつと思ひついてな、兎も角其んな考へでゐらつしやるのを幸ひに、父將軍家からお生母様かにお會はせ申すやうにしたらば什うかといふ考へを立てたのだが、將軍家には迚も駄目、お生母様ならば上野あたりへ御代參の節、途中に待ち受け……といふことも出來るので、今然うしよう



と決したところだ』

『成程、其れは面白い』

『叱ッ……』と大彌太は挑蹶をした。

過去帳を取りにやつた女中の歸つて來た氣配がしたのだ。

『是れで御ざいますか』

女中は取つて來たものを謹んで大彌太の前へさし出した。

『うん其れ〱、御苦勞だつた』

『外に御用は……？』

『もうない、彼方へ引き取つて休んでよろしい』

女中は辭儀をして立つて行く。

大彌太は受取つた金襴表装の過去帳を靜に繰つて見てゐたが、半白の眉に波を打たすと滿足さうに破顏しながら、『はゝあるわ。明後日は大猷院殿御臺所の命日だ』

『御臺所の御命日には、大奥重いお女中が御代參に立つといふことは俺も話說には聞いとるが……、で、其れで什うする積りだ』

『姫君のお生母樣、お美代の方樣を引ッ張り出すのだ』



『其んな事が足下に出來るか』

『譯はない、是れから直に手段を廻らす』

『だが姫君に外出をさせては、足下が豆州公（松平伊豆守の事）に誓つたといふ言葉に負くことにはならんか』

『其所だ』と大彌太は切なげに、『この小名木川の別邸外へは一生お出し申し上げない。其れは屹と受合ふと約束はしてあるのだが、さて考へると姫君の御身の上も餘りに御不愍！荒淫にして自戒の念なく、不義亂倫の御所行を平氣でやつてのけられる、其れもつまり生來の御性癖から來るもので、罪と人と別々に見る古人の言を藉りて申すと、たゞ一概に姫君の罪ばかりとはいはれないのだ。躬は今外出云々の儀をちよつと姫君に申し上げたら、出さぬのは汝等の計らひ、自からは出たいのだ。況て父上や母上のお顏を見たいのは山々だ。子として親を慕はぬものは鳥獸にもないであらう、よきに計らへと仰しやつて躬を漫にもお泣かせなすつた。憚りながら那ア見えてお在なすつてもお胸の中には矢ッぱり人の子らしい心をお持ちになつてゐらつしやるのだ。

『成程なア……』と寂善も同情しながら、『下様の娘と違つて大奥にては我儘三昧、爲たい三昧にして育つたお方だ。その天稟の御體質、その生來の御氣性が醜く出來てゐらつしやる、其れがあの方の御不幸なんだな』

『然うだとも！』

『だが大奥からお生母様を引ッ張り出すことは出來ぬにしても、この別邸から姫君をお出し申すことは危險であらう』

『池田家の者が恐いといふのか』

『うん』と寂善は大きく頷く。

『其れならばもう心配はない、先刻もちよつと話したとほりに、今日豆州公の名をもつて、二ケ條の嗷訴中、躬を討つことは勝手たるべし、だが容易ならぬ儀でもある、討ち取る場所と時日とは追つて沙汰をするといふ旨をお傳へになる筈であるから、今日一日の辛抱だ。明日からは姫は勿論、躬も公然と大手を振つて市中を歩くことが出來るのだ』

『で、姫君を明後日、お生母様にお會はせ申した結果はつまり什うする氣なのだ』

『什うする氣とは』

『姫君を幸丸殿の奥方にする積りでゐるのか』

『其れは出來ない』

『では姫君とお生母様とお會はせ申す目的の所在がとんと分らぬやうだが』

『分つてゐるわの』大彌太は淋しく笑つて、『幸丸殿の事を其れとなく、公方家御前好いやうに取りなしといて貰ふやう、姫のお口から頼んでむらへば其れで目的は達してゐるのだ』

『では傀儡に使ふわけだな』

『然うだ』

『可哀想に！』

『いや』大彌太は眞顔で抑へて、『可哀想に相違はないが、元々あんな御性癖、小禄とはいへ諸侯の一人、大名として多くの家來を養ふ者の奥向の束ねの出來る御女性ではない。閨門の亂れ！　然やうな事のないやうに躬は豫め計つて置かねば故主殿（主殿頭の事）意次に濟まんのだ』

『成程、其所もあつたな』

『其れに躬は梅といふ……那女が可愛くて耐らないのだ』大彌太は眼に涙を湛へて、『知つてのとほり躬は無妻、六十年の生涯を一個でやつて來たのだが、子供が一個あつたらば……と思ふ心は、田沼の客臣として働くやうになつた頃からそろ〳〵胸に芽を吹き初めた。其所へあの梅を見たのだ。その頃はまだ頑是なく……』這ひ廻つてゐる愛らしい、お茶坊主の幼子が眼に見えるやうな面色しながら、『抓めるほどの赤子であつたが、什ういふものか躬に懐き――大人が見ても恐がるくらゐの躬のこの顔を眺めてはにこ〳〵笑ふ愛らしさ！　躬は其れがために用もないあの濱町の別莊へ屢々足を運んだのだが……いや止めよう』ふと氣がついて苦笑しながら、『兎も角も然ういふわけでな、躬は什うしてもあの梅を幸丸殿の奥方に据ゑねばおかぬ積

りでゐるのだ。其れも無理な結婚ではない、互に思ひ想はれてゐる間であることは知つてのとほりだ。恭姫君はおろかな事、今公方家のお膝元にて養はれてゐる姫君の中、尤も御寵愛のお一個を下さるといふ上意があつても、躬の眼の玉の黒い間は斷じてお受けしない積りだ』

『もう好い分つた！』

『笑つてくれるな』と大彌太はやゝ恥かしさうに、『何もみな因縁だ。一言の義を貫くために無用の努力奮闘をする、一目の愛を滿足さすため、高貴の方を犠牲に供する。いはゞ物の成行なのだ、其の代りには大彌太の年貢は必と美しく時期さへくれば拂つて見せる』

『………』

『や、無駄話說で忘れて居たが』大彌太はふつと氣づいて、氣を變へながら和尚にいつた。『またお身に來てくれといふ、姫君からの仰せであつたぞ』

『心得た』と寂善は起ちながら、『息づまるやうな足下の話說を、眞摯になつて聞いてゐるより、また行つて鰭踊でも御覽に入れた方が優かも知れぬ』

『違ひない』

『では足下は是れから直にまた奔走に出かけるつもりか』

『うん、後を宜しく賴む』といひながら大彌太は、大きな圖體を運んで出て行く和尚の後姿を見てゐた。

英雄涙多し！　秋霜烈日、鬼神のやうな猛烈な性格者たる大彌太のその半面には溫情と涙がいつも沸つてゐるのだ。

御代參の女乘物

まだ今日は老中筆頭松平伊豆守の名をもつて致される筈の公儀の慰諭書が、池田家の重役に屆いてゐようとは思はれないので、各務は矢はり編笠を眼深に戴いて隱れ家を出た。

足一步隱れ家を踏み出したが最後、四面みな敵！　殊に今は兩國橋上、三百にあまる池田家の若侍を斬つて捨て、三十二萬石の大藩に家門の存亡を賭してまで嗷訴するの餘儀なきに至らしめてある矢先であるから、一寸の地も敵國の地を踏む考へで行かねばならない。で、編笠に面を包んで、羽織も人の眼を惹く紋章、連翹襷のついたのは着ず、借り着でやつて來たのだが、百萬人の大敵も眼中にない劍豪たる渠、臆してなどは決してゐない。大手を振つて濶歩して行く。

行く先は何所？

いふまでもない城中の平河口へかゝつて行くのだ。平河口！　其れは大奧へ出入る者の刺を通ずべき許なのだ。

×　　×　　×　　×　　×

朱塗金蒔繪に金鋲打つた女乘物がやつて行く。お成街道を眞直に、上野の方へ棒鼻を向け、軋きながらやつて行く。當將軍家第一のお氣に入りたるお美代の方が、御臺所の代參として、



東叡山のお靈屋へ參詣のために出かけて來たのだ。

その眞先には徒士が行く。二列になつて十二人、突袖をして反つてゐる。二番目には挾箱、紫色の組紐で盛り上るやうに飾られて、丸に葵の金紋が朝日を受けて晃々してゐる。次には武士が四十人（お侍衆といふ、御家人である）警護の任に當つてゐるので、正面を切つて威張つて進む。その次なのが前記の乘物、お美代の方が乘つてゐるのだ。腰廻りは鉛色網代、格式のある乘物で、石板を着た六尺が四人で肩を入れてゐる。その右側には鶴がゐる（鶴の總縫のある衣裳をつけたお末をいふのだ。是れは四季を通じて着るので、今六月の暑い最中、御苦勞千萬なことである）、左側には龜がゐる（同上）。その後からは三人のお使番（勿論女中だ）が附いて來る。添番（肩衣を着る、是れは男だ）、お末と並んで、さてその次の乘物には表使が乘つてゐる。次には前と同じやう侍衆が四十人、警護の任に當りつゝ二列になつてやつて來る。その後には二人の奴がお合羽籠を擔いで從ふ。此奴は縦に並ぶが例だ。その後からお下男が二列になつてやつて來る。是れが最後で、人數はすべて百八十人、堂々として來るのであるから、見る者はみな敬意を表する。

『御代參だな』

『然うだ、今日は六月三日、大猷院樣の御臺所の御冥日だから其れに違はぬ』

『だが女でも大したもんだな、斯う見たところ大名の行列よりは餘つぽど立派だ』

『その筈よ、御代參に立つお女中は、お上﨟とかお年寄とか、格式だけは老中と伯仲の人なんだ。時によるとお部屋樣――公方樣のお思ひ者が代つてやつて來ることもある』

『今日のはどんな人なんだらうな』

『さア、お部屋樣だけでも二十何人、今の大奥には住まつてゐるのだ。何にしろ開闢以來、禁裏にだつてなかつたほどの多くのお目かけをお持ちなすつて、五十何人といふ子寶をお造りになつた公方樣。よう上樣！ 今日は私をやつて頂戴、明日は私をやつて頂戴、いや明後日は私が行くのだ、否え私ですといつた工合に、お鬮にぐり〱を極め



込んで、爭先がつて女中衆が出て來たがるのが御代參。籠の鳥も同樣な一生奉公の氣晴らしをこの御代參でやらうといふのだ。事によると公方樣第一等のお氣に入り、お美代方樣があの籠に乘つてゐるのかも分らない』などといつて往來人等は批評をしつゝ見迎へ見送る。

と、見ると後からまた一臺の女乘物、朱塗金蒔繪に金鋲打つた眩いものがやつて來る。其れは前へ行く代參の其れとはいたく見劣りのする、供廻りもまた淋しい者だが、紋章だけは常人の用ゐることの出來ない物が、乘物の屋根に輝いてゐる。丸に三つ葉の金紋！　其れに供廻りも淋しいながらも三十人ほどは附いてゐる。その眞先には黑の法衣に、網代の天蓋を戴いた大入道が立つてゐる。足には草鞋、手には錫杖、其れを悠々と突きながら、歩を大股に蹈んで來るのだ。駕の兩脇に立つたのも、前と押後とに立つたのもみな一樣に編笠をつけ、面を人に見られぬやうにやゝ俯いて歩みを運ぶ。その一行の殿するやう、六尺ゆたかの一個だけ編笠を被ず、大手を振つて濶歩してゐる。疑ひもない各務大彌太、恭姫君の供をして、小名木川の隱れ家を、出て來た途中偶然にお美代の方の行列の後に續くことになつたのであ

る。いふまでもなく大猷院殿、別當所において恭姫に親子の對面を遂げさす氣なのだ。

悲憤に泣く人々

昨日今日の大彌太の人氣は實に素晴らしい。俠氣に勇む江戸の市民は殆ど渠のために熱狂してゐる。狩野坂の大格鬪、阿彌陀ヶ原の大殺傷！　其れは地方での出來事だつたが、喧嘩好きの渠等市民は、空想中にその時の各務大彌太の奮鬪ぶりを描いて見ては喝采してゐる。痛快がつて感嘆してゐた。其れが今度御府内の兩國橋上で三百餘名の若侍を向ふに廻はしてその大半を討つて取り、擦傷少し負うたばかりで悠々として引上げた前代未聞の有樣を、手に取るやうに見たやうな噂をする者の口から耳へと、傳唱されてゐる矢前、その本人の大彌太を今見たのだから耐らない。お美代の方の乘物を見て、喋つて居つた連中はその唇を一齊に各務大彌太の上へと移した。

『九段中坂の先生だ』『評判の今荒木！』あの年をして摩利支天其所退けといふ男氣があるんだ。何と驚いたものじやアねえか』『全くだ。三十二萬石の池田家を腕一本で打ッ挫く英雄なんていふ者は、いつの世にだつて兩個た出ねえ』『其れにしても池田家には侍らしい骨のある家來は一匹もねえんと見えるな』『あの先へ行く乘物があれが評判の恭姫樣だぜ』『だが其れならば柳ヶ岡で行ッつけられた筈じやアねえか』『さア噂では然うなつてるけど、あの先生が付いてゐるんだ。腰拔け共に本當に行ッつけさせる筈がねえ』『其れも然うだな』『殊に評判では先生は公方樣から姫君の御守護の役を吩咐かり、諸肌脫いでゐるんださうだ。骨が舍利になつたつて池田家の腰拔け共に姫君の首を斬らせさうな筈がねえ』『其れも然うだな』などといつて噂をしながら、物好きなのは大彌太の後からぞろ〳〵と尾いて行く。

大評判！　大人氣！　任俠好きの江戸の市民は、自分の親類か師匠でもあるかのやうに贔屓して、渇仰の聲を揚げながら行く。

と、その中の一個は叫んだ。喋つてゐる禿頭を、編笠を着た侍にいきなりうんと毆られたのだ。

『呀、痛ッ！　何をするんです亂暴な』

『汝は今何と申した』といつた侍の聲は戰きを帶びてゐた。

『何も申しやアしません』

『いはん事はない』

『止められい大山氏』その連れらしい一個は止めた。

『でも餘りな雜言ですから』

『下郎は口の善惡ない者だ、はゝ、さア參らう』尙ほ鐵拳を揮はうとする一個を無理に促して、お成街道を西へ切れ、天神下の方へと連れ立つ。

止めたのは柴藏人。

渠は再三の失敗に、自ら罪に服すべく閉門謹愼してゐたのだ

が、昨日自家の重役宅にて、内閣の公文が閣老豆州から來た結果、其れには及ばぬとの難有い主命によつて閉門を解き、今日は一大事の用件で、麹町の御分家邸まで行つて來たその歸り途。大山とは途中から連れ立つて來たものなのである。

『だが御用人』と大山は小聲で嗜めた。『今の町人の申してゐたやう、江戸中の者は申してゐるので、其れを考へると慚しくて拙者は自から涙が落ちます！』

『其れは拙者とて同じ事だが……』往來人に注意しながら、岸もまた小聲で嗜めた。『既に二ヶ條の嘆訴中、その一ヶ條を御詮議の上、聽き屆けたとの内意に接して、お請書までも出した以上は、もう大人しく再度の御沙汰を待つより外に仕方はあるまい』

『でも殿の前で町人風情に――。而て江戸中の者の口から、矢はりあのやうな雜言を……と考へますとな、拙者は實に耐らないので……』と大山は聲を細らせ、『御覽のごとく編笠を今日被いて外出したのも、世間の人に面體を見られることが愁いからです。那れを見よ池田家の腰拔侍が通るから、――よく白晝に面も被らず往來することが出來たもの……恥知らずの面を見てやれ、腰拔侍の面を見てやれ……といはれる事が厭だからです』

『…………』

岸はもう答へなかつた。事實大山のいふとほり、白晝面も被らずに外出することは愁いのである。其れは渠等には限らない。三十二萬石の家中を舉げてみな然う思つてゐるだが、什うする事も出來ぬのである。唯一人の各務大彌太、よも鬼神ではあるまいと肚では絶叫してゐるのだが、事實は矢はり三面六臂の鬼神よりも恐ろしく、什うすることも出來ぬのである。百方策盡きて一藩の士が浪人をする覺悟でやつた嘆訴は兎も角も通つたのだが、内意は面白いものではなかつた。『各務大彌太、討ち取ることは勝手たるべし。だが討ち取るべき場所と時日は、追つて改めて沙汰をする』云々――といふのであるから、血氣にはやる藩主は勿論、切齒扼腕して鐵砲組まで驅り集めてゐた若侍等は、また血の涙を絞つて泣いた。が、矢はり什うにもならない。公儀の許可を受けないで縱し一發でも火蓋をきれば、家名は忽ち斷絶と來る。と、いつて鐵砲以外に各務を討ち果す術はない。然う思ふと阿容々々と、再度の沙汰を待つより外にはどう考へても道はないのだ。

『實に恐ろしい人間だ。恭姫君を生きながら葬るやうに老中に膝詰談判を試みて、見事に主家の顏を立て、今大石だ智囊だと謳はれたこの藏人も、渠奴に出會つては手も足も出ぬ。勇は千斤の鼎を舉げた項羽樊噲にも優つてをる上、智もまた張良孔明に三舍を避けさせるものがある。今會つた乘物の樣子で見るとまた何か御代參に來た大奥の重いお女中を掴まへて目論む考へに違はぬが、はて何をする氣か……？』さすがの岸も大彌太の器量に深く感服をする、その一面では突き上げて來る悲憤の涙を呑みながら、歩をそろ〳〵と進んでゐたが、本郷の通りへ出る

と、ふと氣がついて大山に別れを告げて渠一個、北へ駒込の方へと向つた。小野忠孝を訊ねる氣なのだ。

獨り苦惱に泣く人

『先生、八代洲河岸の岸殿がお見えなさいまして御ざいます』

『然やうか』忠孝は冴えない聲で、低く答へながら面を上げたが、すぐ通せとは命じなかつた。



『什う挨拶いたしませうか』と笹島は重ねて尋ねた。

『知つてのとほり所勞缺勤、引籠つてゐる折柄だ。其れに…』いひかけて忠孝はほつと苦しさうに溜息をした。所勞缺勤は表向き、さうして家に引き籠り、所勞以上の心の懊みの捕虜となつてゐるのであるから、面の色は極めてよくない。

『什う申し上げて置きませう』返事がないので、笹島はまた訊ねたが、渠は明かに今の主人の意中を知つてゐるのであるから推して訊ねるのは苦痛であつた。

『ま、兎も角も通すが好からう』

『は……』と笹島は起つて行く。

暫くすると藏人が一刀を提げて入つて來たが、渠もまた忠孝に――といふよりは總ての人に、合はせる顏はないのであるから、氣勢は毫も上らない。

『不意にお邪魔して恐縮だつたな』

『否々』と忠孝は元氣を粧ひ、『甚三郎の忌服中、其れに少し工合が惡くて、引籠つてゐる折でもあるので、表向の來客はみな斷つてゐたのだが……』

『然ういふことを嫂上に今彼方にて承はつたが、何所がお惡い』

『何所も妥も體中みな惡いので弱つてゐるのだ』



『其れは可んな』
『然う生眞面目に聞かれちや困るが……岸氏！』と忠孝は言葉を改め、『拙者の今の境涯は血を吐くよりも辛いのだ』
『勝美どのゝ事をいふのか』
『いや』と忠孝は否定しながら、『那女はまだ寢ては居るがの、醫者の介抱の好いせゐか、案外早く傷口もこの分ならば癒るやうだし、擦り傷でも各務に負はして、小腕に過ぎた名譽を揚げとる』

『其れについてお見舞旁々、また伺つて見たのだが』
『ま、聞かれい』と忠孝は手で遮る氣似をして、『で、もう那女の事については、拙者は心配はないのだが、氣丈ひなのは家名の將來、拙者の今の境遇なのだ』
『兄上の境遇と申して別に變つた事は』
『大いにあるのだ』
『と、いふとつまり什ういふ？』
『恥をいはねば分らぬが……』いひかけて忠孝は額の汗を掌で拭き、『事によると勝美から聞きになつてゐるかも知れぬが……』
『否や何にも』
『ではお妙（藏人の妻――忠孝の妹）から又聞きに』
『其れもまた一向拙者は』と藏人は頭を振つた。事實渠は妻からも何にも聞いてゐないのである。里の兄の大不名譽、大恥辱たる話說であるから、お妙は過日勝美から聞いてもわざと秘してゐたのだ。
『では思ひきつてお話し申すが……』と忠孝は切なげに、杜ぎれ杜ぎれに言葉を續けた。『實は拙者各務の帶する瓶割一文字が欲しいばかりに……』
『あの御當家の三種の神器な』

『然やう』

『で？』と藏人は膝を進めた。爰にも矢はり各務のために――然もわが身寄の中に、舍弟忠刻を討たれた以前に尙ほ何か憤りを持つ……？』と思ふと渠の各務に對する、憎惡と怨みとに充ちた心は覺えず強く緊張したのだ。

『で、門弟の一個を誘ひ、勝美を好餌に瓶割を手に入れようとしたのであつたが、其れが一代の不覺であつた』

『瓶割はまだお手に入らぬ？』

『いや、入つたので苦しんどるのだ』

『其れはまた什うい譯でな』

『各務のために拔差ならぬ……』と曇つた聲で忠孝は、笹島の事、勝美の事、殊に先夜笹島が死を覺悟して大彌太を九段中坂の道場に訪ひ、須彌より高き大彌太の義心に深く感激し、泣いて歸らうとした時に、眞の瓶割を大彌太から讓られて來た一部始終を、慚愧の汗をたら〳〵と滴らしながら熱心に、極めて詳細に說明をした。

『ふむー、其んな事があつたかな』聞き終つた藏人は歎息をして頭を垂れた。敵ながら天晴な義氣、嘆稱するに餘りある所爲、然う思ふと各務に對する憎惡の念も自然と遊らぎ、同時に義兄弟忠孝の苦しさにも同情したのだ。

『で、今の拙者の心は』と忠孝は言葉を續けた。『搾木にかけられるより遙かに苦しく、昨夜などは思ひ餘つて、いつそ潔よく家名のために……と決心をしたほどだつた』

『成程！』

『だが、今朝内密のお使が……』

『何所からのう』

『御老中筆頭、松平伊豆守殿から來たので』

『何ッ』と藏人は覺えず叫んで、『而てお使はどんな事をな？』

『其れが實に案外なのでな、當月中旬、上樣水馬御覽のために戸田の渡しへ成らせらる。今評判の天下の大豪、各務大彌太に汝の娘が刄傷をした一件は什うして上聞に達したものか、上樣御存じでゐらつしやる。さすがに小野の娘ほどある。お成當日各務大彌太戸田の渡しへお招きになり、渠の劍法を御覽の筈で、御内上意が下されてある。よつて汝の娘にも汝附添ひで出場するやう、内意を豫め申達して置く。其れまでには手傷も癒らう、今から用意して置くやうにといふ御内命であつたのだ』

『名譽な事だな』と岸はいつたが、肚では何か他の事を考へてゐる樣子であつた。

初て知る敵の策謀

『其れは無論名譽だが……』と忠孝は苦しげに、『汝附添ひが困るのだ。拙者がついて行く以上、いかに上樣の上意とはいへ、娘に立合はして拙者自身は傍觀してはゐられない。第一各務大彌太に合はせる顏が拙者にはない』

『尤も至極だ』

『其れにいかに踠いても勝美に勝てる道理はないから、詰るところ拙者自身に各務と立合はねばならぬのだが、残念ながら勝味はないのだ』

『………………』

『既に弟は各務のために両國橋で殺されてゐる、本來いふと弟の仇、其れを阿容々々と生かして置くさへ、武士の本懐ではないのだに、當日更に晴れの場所にて、娘の恥を雪ぎ得ず、又候各務のために不覺を取るやうな事でもあると、拙者は構はぬが家の恥辱だ。柳生小野と並稱せられて、臺徳公（徳川二代將軍秀忠）以來公方様お手直しの役を仰せつけられ、連綿として拙者で六代、莫大の祿を頂戴して來た家名を汚すこととも相成る。其所へ今申した一條、もう什うしても忠孝は決斷のほかはないのだが、然し御内命のない前なら兎も角、既にお成當日に云々せよといふ仰せ蒙つた以上その前に所決をしては大彌太に立會ふことが出來ぬので……といふ嘲りを受けねばならぬ。其れが愁い、其れが苦しい、どの途御前試合においての醜い敗を取ることは知れきつてゐる話説なのだが、兎も角立ち會つて、不覺を取つた曉に所決をすれば名分は立つ。だが什うしても大彌太に……各務に合はす面がないのだ。斯くても矢はり忠孝の魂は尚ほ武士である！』と語尾を悲痛に、戰かせながら叫ぶとひとしく、頭を垂れて落涙する。

『其れで分つた！』その悲愴なる義兄の話説を、殆ど上の空で聞いてゐた岸藏人は呟くやうに『各務大彌太、討ち取る事は勝手たるべし、だがその場所と期日とは追つて改めて沙汰をする――云々といふ内諭のあつたは、ふむ――！』と今度は唸つて義兄の顏をじいつと眺めた。

『池田家へも何か各務の件にて？』

『然れば』と藏人は大きく頷き『兄上も拙者等の嗷訴の件はお聞きであらう』

『聞いて居る』

『其れについて公儀から昨日御内諭があつたのだが、恭姫君のおん儀は構はぬ。各務大彌太は討つもよろしい、だが討つ場所と期日とは追つて改めて沙汰する云々……。什ういふ意味の御内沙汰かと思つて今は家中一統、怪しんでゐた所だが、今のお話説の模様で見ると、是れもまたお成當日、戸田の渡しへ我我を引ツ張り出して公方家が上覽になるためかも分らぬ』

『必と然うだぞ』

『失策つた！』と藏人は唇を嚙み、苦しさうな溜息を鼻から長くふつと漏らした『また大彌太めに一ぱい行られた。失敗失敗又失敗！　この春以來再三再四醜い失敗を續けて來てゐる。で、世間では池田家の家中の者は腰抜け侍、木偶同様なものとしてもう振向いても見ようとしない。見れば必と嘲り笑ふ。その失敗者を又候衆人環視の中に引き出し、然も將軍家の御前において最後の恥を與へる氣なのだ。だが將軍家の御前においては卑怯な眞似は斷じて出來ない、飛道具などは指を出されぬ。

とすると是れは什うすれば好い、吁、什うすれば好いのであらう。義兄にしても勝美にしても勝負は多分が一個と一個だ、負けたとて恥にはならぬが、三十二萬石の家中を擧つて、最後の晴れの決斷に敗れるやうな事でもあつたら、もう其れぎりで主家の名譽は――いや、主人を初め家中一統、腹十文字に切らねばならぬ。是りや大事になつて來た！』然う思ふと心は戰く。渾身の肌は冷却し去つて、ぞうッとするやうな惡寒さへ背筋の邊を走るを覺える。三十二萬石の大藩の大器量人と謳はれる岸藏人も爰に至ると、一分一厘の智慧も動かぬ、唯茫然と自失してゐるより外に仕方はなかつた。

次の間の紙門の外には、民也がじつと息を殺して、先きから竊み聽いてゐた。

勝美も共に聽いてゐた。かの女の傷はまだ辛と起きられるほどになつたばかりで、蒲團の上を離れるほどにはまだ癒くなつてゐないのだが、昨日今日の父の樣子は甚だ氣遣はしく思はれてゐた。其所へまた氣がかりは叔父がやつて來て長座の密談、什ういふことを話してゐるかと思ふと寢てはゐられないので泳ぐやうにして疊の上をひそかに這つて來るのであつた。

この日から丁度十日目、六月十四日の事だつた。小名木川の隠れ家に潜伏中の恭姫が、いよ／＼今度田沼家の相續者として公儀から家督相續を許された田沼幸丸と諸共に、濱町にある田沼の控へ屋敷へ移つた報知を藏人が聞いて切齒したのは。もうその時には勝美の手傷は拭つたやうに全癒してゐた。

魔鬼か妖女か

大彌太は驚いた。白半の眉をぴくりと動かし、烱々として光る眼を大きく見開いて驚いた。『もし、もし……』といふ聲がしたので、貪つてゐた夢から覺めて、有明の灯のほの暗い寢所の中を蚊帳越しに寢たまゝそつと見廻はしたのだが、見廻はすと共にぎよつとしたのだ。『もし……、もし……』と微に呼びかけ、渠を熟睡から起した聲が女のやうであつたとほりに、女が一個枕頭に悄然として坐つてゐたのだ。然も其れは妙齡の美女！ 髮を高島田に結び上げて、裲襠の振袖を着た武家の息女らしい艶色なのだ。百萬人の大敵に寢込みを襲はれても微惧ともしない大豪傑大彌太も、この意外なる女性の出現、妖魔のごとく枕頭に今現はれた女性には、覺えず『むッ！』と心で叫んで、驚きの眼を剝いたのだつた。

『妖女か、魔鬼か、狐狸の變化か……？』と大彌太は推測しながら、じつと蚊帳越しに送つた瞳を其のまゝ身動きもせずにゐる。續いて何かいひかけるその物ごしと聲の樣子で、かの女の正體を脫と見屆け、臨機應變の處置を執る積りで待つてゐるのだが、什うしたものか枕頭に坐つた人は二の句を吐かない、其所に人形を据ゑたやう何時まででも身動きもせぬ。玉を延べたやうな白い項を深く垂れたまゝでじいつとしてゐる。

『はて何だらう』蚊帳越しの眼で大彌太はかの女の身邊をぢろ〳〵



ぢろ見ながら、心の中で怪み續ける。『姫君の腰元中には斯うした者はなかつた筈だ。見覺えのない顏容、而て恐ろしい艶色だ。生來武骨一邊で女のことは考へて見たこともない躬の眼にも、斯うした者が絕世の美人といふのではあるまいかと思はれるやうに見えてゐる。名君が爰へ拔け出して來たかのやうに見えてゐる。當邸內で見たことのない女性とすると他から來たのだ。この眞夜中に他から來たのだ。然も躬のごとき武骨者、天下無双の大彌太の寢所と知つて忍んで來たのだ。勿論唯の女性ではない。妖女か魔鬼か、狐狸の變化か、その何れかに相違ないのだ。好し、生捕つて姫君の御覽に入れるのも一興である。また明日は登城して、幸丸殿相續の儀を公方家御前にて改めて仰せわたされる日でもある。その際のお土產に變化獻上も洒落てゐる。孰にしても逃がさぬやうに、巧く生捕つてくれねばならぬ』

いざといはゞ跳ね起きて、さつと頭から蚊帳を被せて手捕にすべく考へながら、渠は尙ほ寢たまゝで身動きもせずかの女を見てゐる。

と、かの女はほつと溜息をした。而うして細い白い手で靜かに眼頭のあたりを拭いた。その白い手には燃え立つやうな襦袢の袖口が搦んで見えた。

『泣いとるやうだな』と大彌太は猶

ほ怪み續けた。『すぐ蒐かつて來ぬところを思ふと、害意は持つてゐぬらしい。害意を持つて居らぬとすると何か我に頼む事でも……？　然うだ、仇討の助太刀でもして貰はうといふ考へで――事によると一族殘らず仇のために亡され、たゞこの女一個殘つて、いや、其れもまた仇に討たれて、無念を呑んで死に果てたゝめ、幽鬼となつて我の許へ頼みに來たに相違ない。其れでなくて斯かる夜陰に、我の枕頭へ小娘の現はれさうな筈がない――むツ！』心の中で彼は叫んだ。幽鬼と極めた想像を忽ち捨てながら覺えず叫んだ。蒼味をもつた綺麗な面を疑ひながら見守つてゐた彼の星のやうに輝く瞳は、かの女の側に意外な物の置かれてあることを發見したのだ。

其れは刀だ。

拵へといひ、寸法といひ、彼には確と見覺えのある瓶割一文字助宗なのだ。先夜彼が健島民也に、勝美に贈るべく持たして歸したあの一文字助宗なのだ。

其れを今發見したのだ。

『さては是れが小野の娘か』驚きながら大彌太が初めて其れを悟つた途端に、かの女はちよつと體を動かし、うな垂れてゐた顏を上げた。

かの女は勝美だ！

『先生、お目覺めで御さいますか』

『うん、醒めて居る』大彌太は矢はり寢たまゝ、『小野の娘、何しにまゐつた』

『もうお歸しで御さいましたか』

『うん、勝美の外に瓶割を返しにまゐる者はない。その胸中も推察して居る』

『ではもう他事は申しませんが、先生！』といひながらぢりぢりと枕に近く膝をすり寄せ、『勝美は今夜折入つてお願ひがあつて伺つたのです。先生！　お聽きあそばして下さいますか』

『申して見やれ』

『宗家小野家の養子にお成り下さることは出來ますまいか』

『何ツ？』と呼びかけたが、氣がついて再び靜かに、『小野家にはお身といふ立派な跡取があるではないか』

『私は女子です』

『女子でも好いではないか、お身ほどの者は男子の中にも、今の日本には兩個とあるまい』

『では私の養子には』

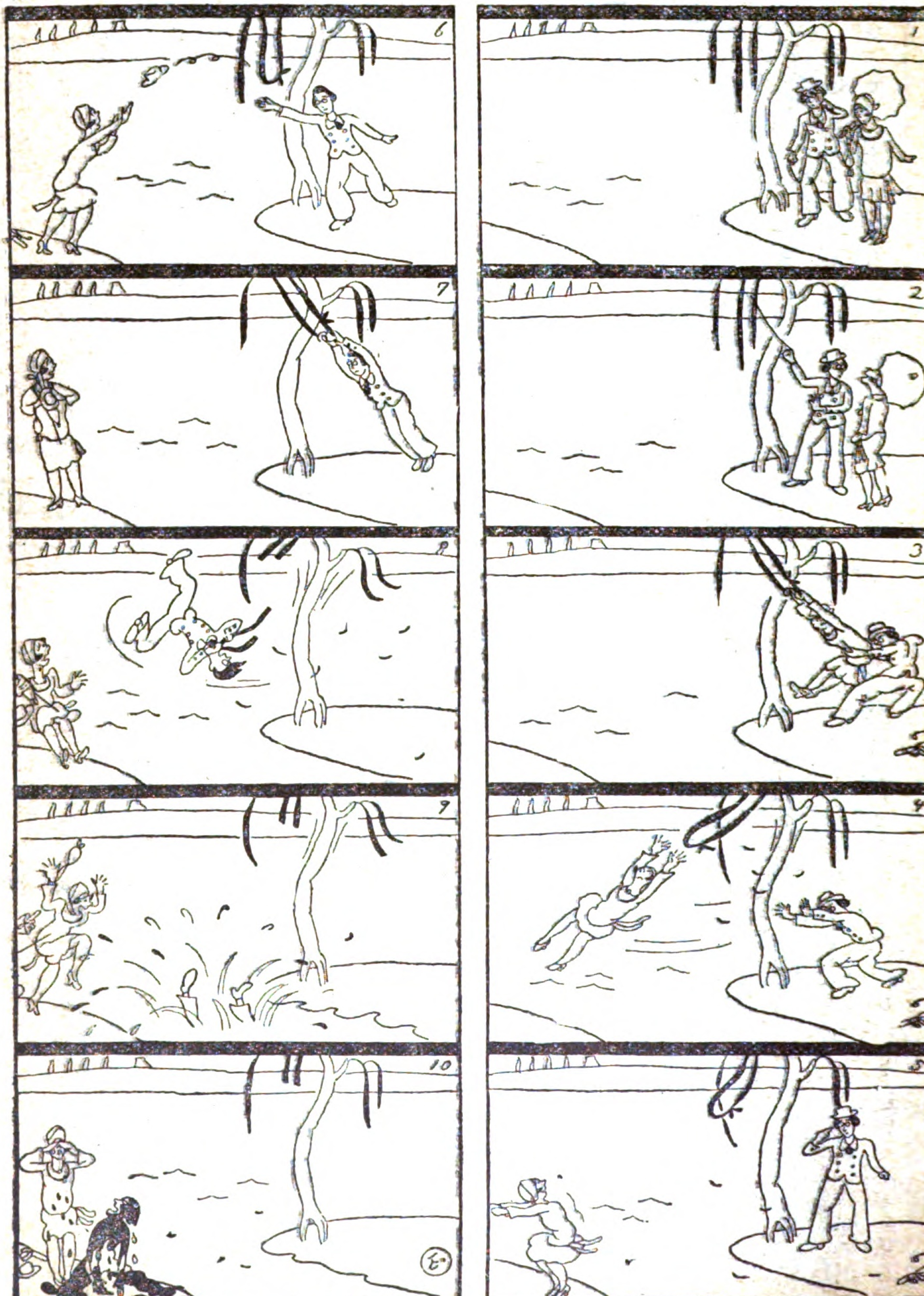
『お身の養子に……？』

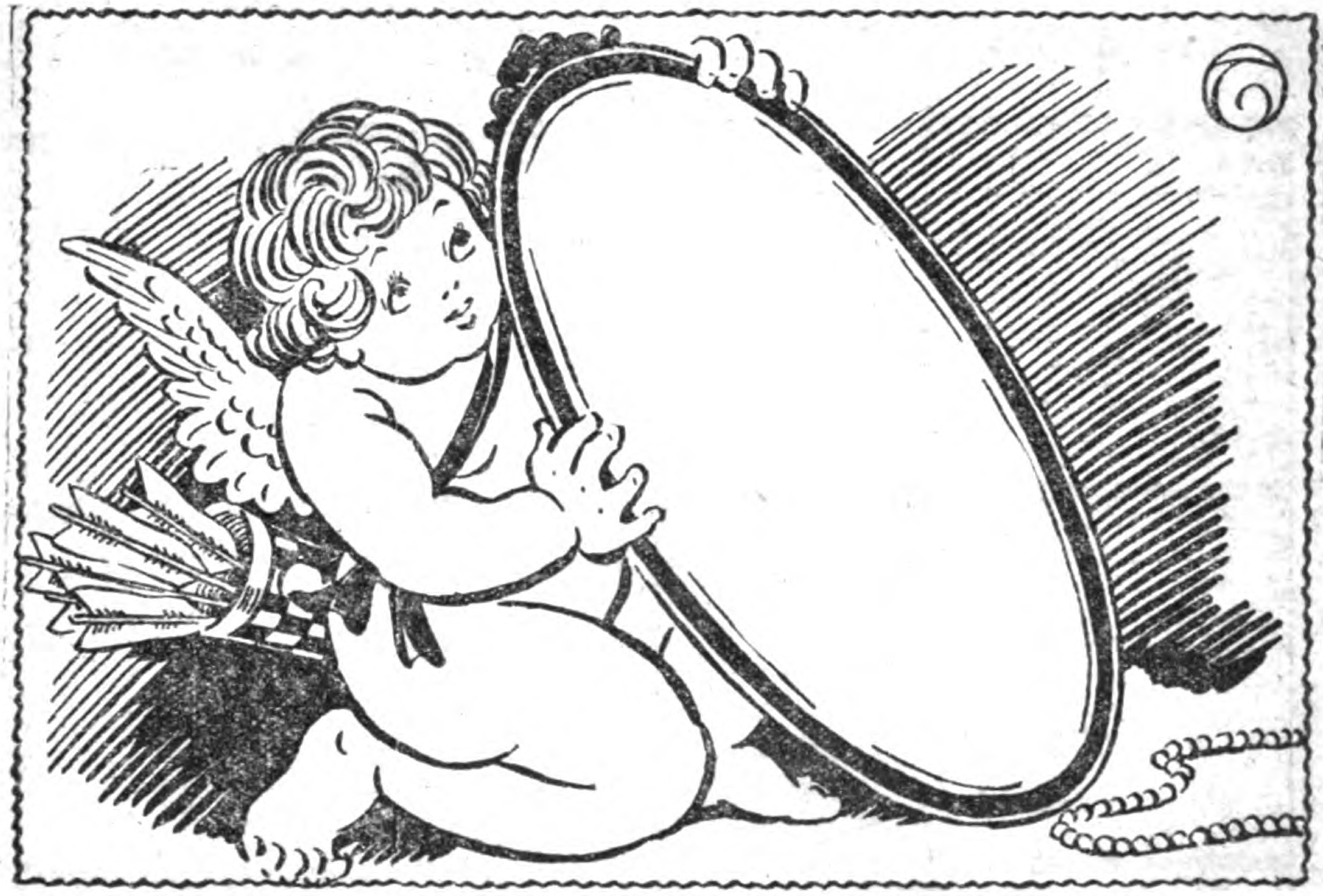
『はい、不躾なお願ひで、申しにくいので御さいますが、先生！　どうか私の聟として……』

『待て！』と各務は鋭く、叱りつけるやうにいふとひとしく、初めてぬいと體を起して蒲團の上へ四角に坐つた。（つゞく）

事件はいよ／＼佳境！　稀代の女丈夫と蓋世の劍豪の出會は、壓も如何なる波瀾を起し、如何なる驚異的結末を見るであらうか……

無字幕漫畫　モダン河渡り　池内正造作





東京行進曲

菊池寛
寺内萬治郎畫

妹の戀

なつ子が、そつと、その可愛い小さい頭を靠せたことで、山野は可なり驚いた。

山野には、なつ子の心持が直ぐ分つた。然し分ると共に、彼は甚しく當惑した。もし、なつ子が早百合の妹でなかつたら、彼はうら若い處女の戀心を、いかに扱ふか位はよく知つてゐた。いな、それこそ彼のピアノに於けると同じ位、得意とする藝能であつた。

しかし、今早百合の愛を自分のものにしようとしてゐるとき、なつ子に慕はれることは、何よりの妨げでなければならなかつた。なつ子の愛を容れゝば、早百合は到底自分のものにすることは、出來なかつた。それかと云つて、なつ子を斥けたならば、早百合に接近することは、到底不可能だつた。

なつ子は、山野の胸にもたせかけた頭を容易に離さうとはしなかつ

た。そして、眞白な臉を、いつまでも月の光に晒してゐた。月の光を受けた眸は、涙にでもぬれたやうに、しつとり光つてゐた。唇は、夜目にも、ハツキリと分るやうに、眞赤だつた。臙脂が、月光の下の白い葡萄の房のやうに、新鮮で水々しかつた。

『ねえ。わたしいつまでも、かうしてゐたいわ。ねえ、山野さんかまはないでせう。』

なつ子は、さう云つて、黒い眸をすませて、じつと山野をみつめた。

『かまひませんとも。でも、またダンスがはじまるのでないでせうか。』

先刻から、またジヤズ・バンドが演奏を始めてゐるのだつた。

『いゝわ。いゝわ。妾は、もう疲れちやつたの、ダンスが、始まつても、行くのは、よしませうねえ。』

となつ子は云つた。

『でも、みんな僕達を探しはしませんか。』

山野は、云つた。彼は、なつ子と二人でゐることが、この上の危機を作りはしないかと思つたからだつた。

『さうね。探しに來るかも知れないわ。ぢや、もつと向ふへ行きませう。わたし、お庭の中で誰にも見つけられないところ、知つてゐるの。』

さう云ふと、なつ子は山野の手を取つて、ぐい〱引張りだした。山野は、自分が用心のために云つたことが、すつかり反對の結果になつて、なつ子のために庭の一隅にある四阿の中まで、連れて來られてしまつた。

『こゝにお坐りなさい！』

さう云ひながら、なつ子はハンカチで縁の埃を拂つてくれた。

山野は、仕方なしに、そこへ腰をおろした。

月の光が、楡の梢をもれて、まばらに二人を照してゐた。

なつ子の息が、だん〱はずんで來るのが、山野には感ぜられた。

『ねえ。山野さん、いゝ晩ですわねえ。わたし、何だかうれしくて仕方がないの。あなたは、さうお思ひにならない。』

『何がです。』

山野は、さう云つて反問する外なかつた。

『貴君と、御一所にゐると、わたし夢を見てゐるやうな氣持になりますの。先刻から、わたし貴君のことしか考へてゐませんの。わたし、ほんとに可笑しくなつてしまふわ。おほゝゝ……』

無邪氣ななつ子は、山野に對する戀心を、かくし切ることが出來ないのだつた。

『さうですか。僕もいゝ氣持です。今日は、ほんとうに面白い一日でした。』

山野は、あたりさはりのないやうに云つた。

『あら、あんなことをおつしやつて。わたしの申してゐることが、お分りになりませんの。わたし、あなたのことしか考へて

ゐませんのよ。』

なつ子は、さう云つてじつと山野の顏を見上げるのだつた。

それは、まぎれもなく愛のさゝやきだつた。

山野は、少女の烈しい情熱に心を動かされないわけには行かなかつた。しかし、なつ子の愛を受け容れることは、彼として到底不可能なことだつた。もし、なつ子の愛を受け容れたら、彼は島津に對して屈服する外なかつたのである。それは、彼の男性としての誇がゆるさなかつた。その上、十七八にしかならない少女の戀を受け容れることは、彼として何となく氣がとがめることだつた。

純白な小鳩は、どんな獵人でも狙ひ離いやうに、まだ年若い處女は、女性獵人たる山野にとつては、あまりに勿體ない氣がした。

彼は、どうにかしてなつ子を恥しがらせない程度で、彼女の戀を謝絶しようと思つてゐた。

『ねえ。山野さん、わたしお願ひがありますの。』

なつ子は、改まつて云つた。

『何ですか。』

『わたし、おほゝゝ恥しいわ。でも、すつかり云つてしまふわ。あの、あなたはわたし以外の女性を愛さないと誓つて下さらない？』

なつ子の言葉は、大膽で卒直だつた。しかしさうハッキリ云つてくれゝば、山野も返事の仕樣があつた。

『ぢや、つまり貴女だけを愛しろとおつしやるわけですね。』

『えゝ。さう。』

さう云つて、なつ子はさすがに、はにかんでしまつた。

『さうですか。ぢや、僕も思つてゐることを卒直に申しませうか。僕は、今までにいく度も戀をした男なのです。貴女は、何も御存じないでせうが……』

さう云つて、なつ子の顏を見た。なつ子は、うつむいたまゝだまつてゐた。

『ですから、僕はあなたのやうな清淨な身から愛される資格がないんです。僕が、純眞な青年だつたら、どんなに欣んであなたの愛をお受けするでせう。しかし、僕は汚れてゐるのです、いろ／＼な女性との愛で、僕は汚れてゐるのです。ねえ、なつ子さん、僕はあなたから、さう云はれると、うれしいんです。しかし、僕があなたの愛を受けることは、つまりあなたをだますことなんです……』

『まあ……』

なつ子は、低いためいきを洩した。彼女は、山野については今まで、何にも知らないらしかつた。

『ほんとうに、お友達でゐて下さい。僕もあなたが、大好きなのです。しかし、あなたが好きなればこそ、あなたの愛をお受けすることが出來ないのです。』

と山野は云つた。彼は、半ば眞劍だつた。

『でも、あなたは今は誰も愛していらつしやらないんでせう。』

なり手は、まだ思ひ切らないやうだつた

『いや、今愛してゐるゐないは問題ではないのです。僕の相手の女の力は、僕のやうにやはり、戀愛の古强者がいゝんです。あなたのやうな、純粹な力を想像するだけでも恐しくなります。』

『まあ。……でも、わたしはちつともかまひまんことよ。』

『いや、あたたの問題ではないです。僕自身の問題です。僕は、貴女のやうた處女の力は、後光がさしてゐるやうで、恐しくて近寄れないのです。』

『まあ。そんなこと、おつしやつてほんとうは、わたしをお嫌ひなのぢやなくつて？』

『まあ。そんな邪推をなさつては、困ります。僕が、過去にもなんにもない人間だつたら、欣んであなたの愛をお受けします。結婚でも何でもします。』

と山野は云つた。

『さう。ほんとう？』

『ほんとうですとも。』

『さう。ぢや、わたしあきらめるわ。』

『さうして下さい。その代り、僕はいつまでも、あなたのよいお友達になります。』

『さう。うれしいわ。』

『さうですか。それは、ありがたう。ぢや、お友達の握手をしませう。』

さう云つて、山野は[illegible]の手をさしのべた。[illegible]たの手は、それを強く〳〵握りしめた。

『でも、もしかあなたが、外の處女の力と戀愛なすつたら、わたしお恨みすることよ。よくつて。』

山野は、それでハタと當惑した。しかし、そんな障害はまたどうにか切りぬけることが出來るだらうと考へた。

澄江

道代は、藝者になつてくれと、いつか伯父夫婦が云ひ出すだらうと、心待ちに待つてゐたが、伯父は一月經つても二月經つても云ひ出さうとはしなかつた。伯父は道代に對する義理と愛情とで、そんなことを云ひ出さないのだと思ふと、道代は伯父の情を、一しほうれしく思はずにはゐられなかつた。しかし、道代としても、藝者にならないで濟めば、こんなうれしい事はないのだつた。

でも、伯父の家の生活が、樂ではないのは、道代にはよく分つてゐた。伯父は、どんなに貧乏しても、晩酌の一合だけは、たゞ一つの樂みとして、缺かしたことがないのだつた。それさへ近頃は、お膳に附いてゐないことがよく在つた。

『がまんなさい。先々月の酒屋の勘定が、まだ少し殘つてゐるんだから。』

伯母は、さう云つて、伯父に因果をふくめてゐるのだつた。一月に五六圓の酒屋の拂ひが拂へないのだと思ふと、道代は悲し

かつた。

その中に、道代のお友達の澄江は工場をよして、カフェへ出てしまつた。澄江が、工場を出てから半月ばかり經つた頃だつた。

第三日曜日で、道代が朝から家にゐると、ひよつくり澄江が入つて來た。澄江は、今までに二三度は、道代の家を訪ねて來たことがあつた。しかし、今日の澄江は見違へるやうな澄江だつた。白明石に、博多の夏帶をしめてゐた。

すつかり、どこかのお孃さまになりすましてゐるのだつた。

『まあ。』

道代は、驚いてさう叫んだ。

澄江は言葉使ひまで、ヘイカラになつたやうな氣がした。

『まあ。立派な着物ね、とてもよく似合つてゐるわ。』

道代は、あくまで素直だつたから、澄江の美裝を羨むやうな氣持はちつともなかつた。

『さう。わたし到頭、カフェへ出てしまつたの。銀座のカフェ・イーグルよ。』

そこは、銀座で一流のカフェだつた。

『さうよかつたわねえ。そんななりをすると澄江さんは、ほんとうに綺麗に見えるわ。』

『うゝむ。わたしなんか、ちつとも綺麗ではないわ。でも、綺麗な人も四五人はゐるわよ。綺麗だと云つたつて、道代さんには比べ物にならないけれど。』

『あら。いやだわ。わたしなんか。』

しかし、澄江は、メリンスの洗ひざらしを着てゐる道代の顔立の美しさを、今更のやうに、ほれぼれと見つめるのだつた。

『あなたなんか、もしカフェでも出れば、それこそたいへんだわ。イーグルでは、美しい人なら、幾人でも入るんですつて。』

『さう、でも……』

道代は、カフェは何だか怖しい氣がして澄江のやうに、女給にならうと云ふ氣持はなかつた。

『收入は、思つたよりもいゝのよ。妾は、初めてですけれども一日五六圓位はあるのよ。』

『まあ、日に五六圓、たいしたものね。』

『腕のいゝ人だと、月給百圓も取る人があるんですつて。でも、そんな人に限つて、お客にさんざ思はせ振をして置いて、間際になつてから、すつぽかすんですつて。』

『何を?』

道代には、意味が分らないで訊いた。

『あら、わたしだつて知らないわ。』

さう云つて二人は笑ひ合つた。

澄江は、道代の伯母に道代もその日一しよに、遊びに行つてもいゝかと訊いた。伯母は、むろん承諾した。でも道代は、晴着が何にもなかつた。白明石を着てゐる澄江とつれ立つて歩くことは、普段着を着てゐる道代としては悲しいことに違ひなかつた。でも、道代はちつとも悄びれないで、一しよに出かけ



た。鶴見の花月園へ行つて、夕方まで遊んだ。歸り道に、澄江は道代に云つた。

『わたし達は、どんな境遇になつてもお友達で居ませうね？』

『えゝいゝわ。』と、道代も云つた。

『わたし、カフエへ行つたからと云つて、決して墮落なんかしないわ。わたし、立派にやつてゆくつもりよ。道代さん、それを信じてくれる。』

『えゝ信ずるわ。』

『さう。妾もあなたを信ずるわ。あなたはいつか云つてゐたやうに、藝妓になつても、きつと處女でゐる方だと思ふわ。』

『えゝ。』

道代は、低いがしかし力強い返事をした。

伯父の失職

七月の終りのある日だつた。道代は、いつもより一時間ばかり遲く歸つて來た。すると、いつも道代より早く歸つてゐる筈の伯父の姿が見えなかつた。

道代は、伯母がこしらへてくれた夕飯の御膳に向ひながら、伯母に訊いた。

『ねえ。伯母さん、伯父さんは、まだ歸らないの。』

『あゝ。少し遲いやうだね。何處か廻つて來てゐるんぢやないかしら。』

伯母は、少しも氣に止めないやうだつた。

しかし、八時が來ても九時が來ても、伯父は歸つて來なかつた。

伯母は、少し不安になつたらしく、從弟の健三を電車通まで見せにやつたりした。然し三十分ばかりして健三は空しく歸つて來た。

十一時が鳴つてから一家の不安はます〱大きくなつて行つた。律義な伯父は、夜おそくなることなどは滅多になかつたのである。

一家の人達は路地内に入つて來る足音に、一々神經をとがらしてゐた。しかし、その足音はどれもこれも伯父の足音ではなかつた。

もう十二時に、十分と云ふときだつた。

『えー―う――ん。』

と、低くうめくやうな聲が、路地の中でして、よろめくやうな足音が、近づいて來たかと思ふと、道代の家の格子戸に、烈しい音をして倒れかゝつた。

新太が驚いて格子戸を開けた。

すると、泥のやうに醉つた伯父が、格子戸をすべり落ちて地上に、仰むけに倒れてゐるのだつた。

『まあ、あなた、そんなに醉つぱらつて、どうしたの。』

伯母は泣き聲に近い聲を出して叫んだ。律義な伯父は、酒は好きでも、醉つぱらつたことなどは未だ一度もなかつたのである。

伯母は、伯父の醉態の烈しいのを見ると、おろ〳〵してゐた。
『どうしたの。こんなに、よつぱらつて、何うしたの。』
伯父は、グデン〳〵に醉つてゐても、しかし正氣を失つてはゐないらしかつた。
『お近、これが正氣で歸れるか、俺は首になつたんだぞ。しかも、たつた一ケ月分の手當でだよ。これが正氣で歸れるか、えい、お近！』
伯父は伯母の名を呼びながら、さめざめと泣きつゞけるのだつた。むろん、それは伯父の泣上戸も手傳つてゐたが、職を失つた伯父の心は、酒に醉はないでも、泣くほど辛かつたに違なかつた。
その晩、酒から醒めた伯父と伯母とが、夜明まで、生活のことを、くど〳〵と話してゐた。いくら、話してもどう、きまりがつく話ではなかつた。それが、きまりがついたのは、道代が伯父一家の窮乏を救ふために、藝妓になると云ひ出したためである。

伯父の心

それから、二三日してだつた。道代が伯父に連れられて、稻の家へ行つたのは。
『さう云ふわけで、この子が自分で藝者になつてくれると云ふものですから、死んだ妹にはすみませんが、この子に一時救つて貰ふつもりになつたのです。』
さう云つて、伯父は一度言葉を切つた。
『なるほど、それは感心な道ちやんだね。わたしも、こんな器量を、工場通ひで臺なしにするなんて、あつたら物だと思つてゐたんだよ。』
と、稻の家の女將は、白くぶよ〳〵に肥つてゐる身體を、持ち扱ふやうに、いく度もゐずまひを直してゐた。
『その代り、これは私の折入つてのおねがひですが、まあ藝者をする以上、旦那を取ると云ふことは、それはもう仕方のない事ですがね。たゞ、この子が、氣持よくうんと云ふまで、待つてやつて下さい。無理往生に、いやな旦那を取らせるだけは、後生だからさせないで下さい。』
『それは、よく分つてゐるよ。この子のお母さんの綾香さんだつて、いやなお客と來たら、鼻もひつかけない人だつたからね。この子にも、そんな意地だけは、あつぱれ通させてやりますよ。然し、當人が好きになればそれは、いゝんだらうね。』
さう云つて、お女將は、道代の顏をのぞき込んだ。道代はいやらしさと恥しさのために、顏が眞赤になつてしまつた。
『あはゝゝ、それは素人にして置いても好きでやる分には、こりや親子だつて、なか〳〵止められないことですからねはゝゝはゝ。』
と、伯父も笑つた。
『それに、この器量なら、お座敷だけで、けつこう賣れると思ひますよ。それに、待合のおかみさんや藝者衆で綾香さんのこ

とを、知つてゐる人だつて、可なり多いんだから、きつと引き立てゝくれますよ。二代目綾香で、うんと流行兒になつて貰ふつもりですよ。ほんとうに、この鼻筋のよさと云つたら、女だつて全く、ほれぼれしてしまふね。』

女將は、さう云つて、道代の顏をまたじろじろ見るんだつた。

『じや、今日からお預けして行つてもいゝでせうか。』

『貴君の方でかまはなかつたらさうしておくれ。ぢや貴君だけ、一寸二階へ上つて貰ひませうか。』

さう云つて、伯父と女將とは二階へ上つて行つた。

恐らく、二階で伯父は、道代の前借金を受けとつてゐるのに違ひなかつた。道代は、充分覺悟をして來たことだつたが、自分の自由が、金錢に換へられることを考へると、悲しい氣がしないでゐられなかつた。

伯父は、三十分ばかり二階にゐた。そして、伯父一人二階から降りて來ると、道代を片隅に呼んだ。

『ねえ。道ちやん、ほんとうにすまないねえ。』

『いゝえ。』

『此の伯父が、意氣地がないから、お前をかう云ふことにしてしまつたのだ。かんにんしておくれ。』

『いゝえ。伯父さん。』

『その代り、わしはこの金を資本にして、一生懸命かせいで見るつもりだ。その中に、新太もどうにか一人前になるから、お前をかうして置きやしないよ。』

『伯父さん。そんなに氣にしないで下さい。伯父さんのために、働けることは、うれしいと思ふのです。』

伯父は、少し涙ぐんでゐた。

『いや、すまない。すまない。それから、年期は五年で、參千圓だけ、借りたから、それも承知して置いてくれないか。』

『いゝわ。』

『これで、綾香さんの子だと云ふので、年期は特別に短くしたと、お女將さんは云つてゐたよ。』

『さう。』

『それからね。』

さう云つて、伯父は、懷中から百圓札を三枚出した。

『お前に作つて貰つた金を、俺達だけで使ふなんて、あんまり冥利が怖しいので、三百圓だけ、お前に取つて貰ひたいんだ。着物から、お小遣まで、みんな女將さんが、引き受けてくれると云ふけれども、誰にも云へない內證のお金が入るときの用意に、お前にあげて置かう。』

『伯父さん、いゝわ。わたし、そんな內證のお金なんか入りつこないわ。』

道代は、伯父の氣持がうれしかつたが、お金はちつともほしくなかつた。

『いや、これだけでもお前が取つてくれ、でないと伯父さんは、どうしても氣がすまないんだよ。』

『ぢや、伯父さんに預けて置くわ。』

『いや、わしが預つて置けば、使ひ込むかも知れないんだ。』

『いゝわ、伯父さん、使ひ込んでもいゝのよ。』

『そんなにまで云ふのなら、わしが預つて置かう。ぢや、道ちやん、伯父さんは歸るからね。身體に氣をつけておくれ。』

さう云つて伯父は歸つて行つた。

折枝

道代が、お座敷に出たのは、それから二月とは經たなかつた。道代は、幼い時母と一年間、同居してゐたとき、踊りと三味線の手ほどきを受けてゐたので、今度それらの稽古を始めて見ると、師匠達が驚くほど、筋がよかつた。それに、三味線や踊りが、それほど必要な時勢でもないので、稲の家では出來るだけ早く道代をお座敷に出したのだつた。母の名前を付けてはと云ふのを、道代は堅く斷つた。道代は、母子つゞけて、藝妓をすることを、ちつとも名譽と思つてゐなかつたし、それに死んだ母が、自分の子に名前を繼がれることを欣びはしないだらうと、道代は考へたのである。だから、道代は先代の綾香の子であることを、出來るだけ隠してしまつたし、名前も稲の家の女將の藝妓時代の名前である折枝と云ふ名前を貰ふとにした。

道代のお披露目は、九月の初旬だつた。

道代の白襟紋附の姿は、神々しいばかりに美しかつた。その夜は、稲の家と縁故のある藝妓や待合の義理で、いくつものお座敷を次ぎから次ぎへと廻つた。そして、七八回目に來たのが、花野と云ふ大きい待合だつた。

『今晩は、どうも。』と敷居の所で手をついて挨拶してから道代は、お座敷には入つて行つた。

實業家らしいお客が三人と藝妓が五六人居並んでゐた。

藝妓は二人の年増の外、みんな若い一流の流行兒ばかりだつた。かうした社會の風習として、半玉から一本になつた妓でないと、何となく幅がきかなかつた。殊に、道代のやうに、中途半端の年で、直ぐ一本になつた子は、何となく他人扱ひされるのだつた。

しかし、道代が默禮して、そつと席末に坐つたところを見ると、お客も藝妓も目をみはらずにはゐられなかつた。

『あなたが折枝さん？』

二十七八位の細面の中年增の藝妓が、聲をかけた。

『えゝ。わたし折枝でございます。』

さう云つて道代は頭を下げた。

『さう、わたし雪葉なの。』

それは道代をこのお座敷に呼んでくれた人だつた。道代は、名前だけ女將から、きかされてゐた。

『あら。今晩は、どうもありがたうございます。』

『そんなに改めて、お禮を云はなくつてもいゝことよ。でも、ほんとうに綺麗ね。稲の家の女將さんが、自慢するだけあるわね。』

と雪葉姐さんは座中を見廻して云つた。

『ほんとうだ。千代丸よりいゝね。』

お客の一人がさう云つた。千代丸と云ふのは、京都からつい近頃新橋へ來た藝者で、嬌名一時に高い美妓だつた。

『あんな、のつぺりした顏よりはいくら美しいか分らないね。君は江戸つ子かい？』

でつぷり太つた六十近いお客は、道代にさう訊いた。

『はい。東京で生れましたのです。』

『はゝゝ馬鹿に丁寧な口をきくね。』

『まだ初心なんだね。』

床柱の前に坐つてゐた一番立派な風采をしたお客が云つた。その人の髮は半分白かつたが、色が白くつやゝかで、元氣が潑溂としてゐた。

『ぢや、まだ旦那はないんだらうね。』肥つたお客が云つた。

『むろん、さうですとも。これから、大いにいゝのを探さうと云ふんでせう。』

雪葉姐さんが、さう云つた。

道代は、凡てが汚はしくいとはしく聞かれたが、これが勤めだと思つたので、ぢつとこらへて微笑した。

『ふーさん。あなた一つ旦那になつて下さつたら、どうです。』

藝妓の中で一番の年の行つた老妓が、さう云つた。

『馬鹿を云つちや困る。俺は若いのは嫌ひだ。』

ふーさんと云はれた髮の半分白いお客が云つた。

『あんまり、さうでもないんでせう。おたたたんかもう、若いのがいゝお年頃なんでせう、おほゝゝゝ。』

と老妓は、からかひつゞけた。

道代は、恥しく氣持がわるくなつて、顏を上げてゐることが出來ないほどだつた。

『ほんとうに、綺麗だわ。』

若い、二十前後の雛妓達も、さゝやきかはしてゐた。

『まあ、島田がよく似合つてゐるは、まるで花嫁さまのやうね。』

と雪葉は、又ほれぼれと道代を見つめてゐるのだつた。

丁度、そのとき道代は迎ひの車が來たので、

『どうもありがたうございました。』と云つて、席を立つた。

最初の試練

お披露目の日から、三日目だつた。道代は、花野から、九時頃にお座敷がかかつて來た。その晩は宵から、お座敷がかゝりつゞけだつた。道代もやはり、お座敷が、たくさんかゝつて來ることは、うれしいことだつた。

花野のお座敷は、誰だらうと空想しながら來て見ると、道代は二階の一番奥のお座敷へ通された。

そこは、六疊の小さい座敷だつた。入口に屏風が立てまはされてゐて、人氣がないやうに、しづかだつた。

道代は、



『今晩は。』と云つて挨拶してから顔を上げて見ると、お披露目の晩に會つたふーさんと云ふ老人のお客が、たつた一人でお酒を飲んでゐた。
『あら、先日はありがたう。』
『うん。どうだ、お座敷は忙しいか。』
『はいおかげさまで。今晩は、わたくし一人なの？』
道代は、外に誰も藝妓がゐないので、不安になつて、さう訊いた。
『うん。おひ／＼やつて來るだらう。しかしお前一人でも澤山だ。』
ふーさんは先夜とは別人のやうに、にや／＼笑つてゐた。
『あら、あんなことおつしやつて、御冗談ですわ。』
道代も、一日は、一日だけお座敷に馴れてゐた。
『いや、お世辞ぢやない。ほんとうなんだよ。』
『まあ！』
『うれしいか。あはゝゝゝ。』
『まあ！』

道代は、さう云つて顔を眞赤にした。彼女は、ちつともうれしくはなかつた、恥しかつたのである。

『どうだ。何かほしいものが、あれば買つてやらうか。』

ふーさんは、いかにも自然らしくさう云つた。

『ありがたうございます。』

道代は、さう云ふ風に返事しろと、稲の家の女将にさう教へられてゐたのである。

『何がいゝ、指輪でも買つてやらうか。』

それが、座興でなく、いかにも本當らしくなりかけたので、道代はだまつてしまつた。藝者をしてゐても、わけもなく人から、物を貰ふものでないと、思つてゐたからである。

『どうした。指輪ぢやいやか。ダイヤの指輪なら、ほしくないことはないだらう。』

『でも何でもない方から、そんなものいたゞいてはいけませんわ。』

『あはゝ、堅くるしいことを云ふね。ぢや、何でもあるやうに。しようぢやないか。その方は、どうだ。』

『知りませんわ。』道代は、さう云つてまたうつむいてしまつた。少しイヤな氣がした。そのとき、五十位の女中がお銚子を以ては入つた。そして、道代の方へ向いて、

『折枝さん。電話ですつて。』

『あゝ、さう。どうもありがたう。』

さう云つて、道代は、座敷を出て、階下の帳場へ來た。そして、そこにゐたもう一人の女中に、

『わたくしに電話ですつて。』と訊いた。

『いや、さうぢやないんでせう。おかみさんが御用なんでせう。』と云つた。

道代の姿を見た女將さんは、ニコ〳〵笑ひながら云つた。

『ねえ。一寸此方へ來ない？』

『はい。』

さう云つて、道代は長火鉢の前に坐つてゐる花野の女將さんの前へ行つて坐つた。

『ねえ、あなたあのお客さんを、何う思ふ。』

『何うつて、わたくし別に。』

『さうだらうね。あなた位の年ぢや、好きも嫌ひもないだらうが。嫌と云ふわけぢやないだらうね。』

『えゝ、別に嫌ではありません。』

『さうだらうね。實はね、あの方がお前を取り持つてくれと、おつしやるんだが。お前どう？　お前が、うんと云へばお前には二千圓位のダイヤを買つて下さると云ふんがえ。』

『……………』

道代は、こんなことは、きつと云はれるだらうとは覺悟してゐたが、こんなに早く藝妓に出て三日目に云はれるだらうとは夢にも思つてゐなかつた。

『あの方は、お名前を云へばお前も知つてゐる位、有名な實業家だよ。新橋ぢや大した勢力のある方だから、お前がこゝで、

いゝ藝妓にならうと思へば、あの方に出て置くことだよ。あの方に、楯ついちや、一寸やつて行かれやしないと思ふんだがね。』女將は、物質と權勢とで、道代を壓伏しようとした。
『稻の家へも話したのだがね。あの家では、その方のことは常人に委してあるから、常人がうんと云へば、こちらでは異存はない、と云ふんだがねえ。しかし、お前がうんと云へば、あの家は大助かりだよ。どう？』
然し、道代の心は動かなかつた。彼女は、形こそ藝妓なれ、その心はどんな清淨な處女と比べても劣らないほどきよらかで美しかつた。
『おかみさん、わたくし折角ですけれども、お斷りいたします。』
女將は、あつけに取られたやうに目をみはつた。
『お前、盲蛇に怖ぢずと云ふが、あの方をお前が斷るのは、ほんとうに、盲蛇に怖ぢずだよ、あのお客を失敗れば、お前は新橋で、一流の待合を五六軒も、失敗らなければならないよ。お前も、新橋で末長く藝妓をするつもりなら、よく考へた方が、お前の身のためだと思ふんだがね。』
『…………』
『ねえ。今時、あんないゝお客樣は滅多にありはしないよ。お前さんだつて、藝妓になつてゐる以上、旦那なしにはやつて行かれない位、知つておいでだらうね。お前さん、よく考へて見なさい。こんないゝ口つたら、さうちよいちよいあるもんぢやないよ。』
『…………』
『どう決心が、つかない？』
『あの、ほんとうに、すみませんけれども、お斷りしていたゞけないでせうか。』
『まあ、剛情な子だね。だがね、ふーさんに、かうと睨まれたら、どんな妓だつて、結局降參してしまふんだよ。お前なんか、出たてのぺいぺいでそんな剛情を張るものでないよ。』
『…………』
『うんと云ひなさいよ。』
『でも……』
『まあ、驚いた。あきれた子だね。わたし、お前さんのやうなひよつ子藝妓の取持を賴まれて、折角ですが出來ませんと云ふのぢや、お客さまに合はせる顏がないから、お前もう一度ふーさんのお座敷へ行つて、自分でハッキリと斷つておくれ。』
女將は、それきり横をむいて口をきかなかつた。道代は、仕方なく、そこを立つて、二階の梯子段を上つて行つた。彼女は、胸が張りつめるほど、口惜しく情なかつた。しかし、彼女は自分の身を守る最後の勇氣だけは、失つてゐなかつた。
『何だ！　強情ばりだね。そのくせ、ふーさんにかゝつちや結局うんと云はされてしまふくせに。』
花野の女將は、聞えよがしにさうつぶやいた。(つゞく)

本篇は旬の進むにつれて天下の人氣彌々沸騰『これこそ現文壇の誇るべき大收獲！』この評判で、到る處噂の種となりつゝあります。



萬花地獄

吉川英治
伊藤彦造畫

月に居眠る客

こゝでふたゝび筆を澁の麓へかへして、横湯川の水煙りに葬られたまゝとなつた吹矢の莊八が、あの晩、どうなつてゐたらうか、それを說いておかなければならない。

草津峠の高原に思ふさま水田鄉の馳驅をこゝろみた角太郎が、大學の奸策にのせられて、たうとう無緣小屋の呪縛にかゝり、かれが生涯における最大危難に立たせられた日の――ちやうどその前の夜のことになる。

『お孃樣、さだめしお疲れでございませうな、馴れない旅で』

『いゝえ、私もお陣屋にゐたころとはちがつて、ずゐぶんいろ〳〵な艱苦にもまれて來ましたから、この位なことは、今では何でもありませぬ』

『おいたはしうございます』

『そんなことを言つて、涙を誘つておくれでない、私には、角太郎に會へる望みがある。角太郎にさへ行き會へば、お父上のことも、駒木家の行く末のことも、何とか思案があるにちがひない』

『その小枝樣のゐる澁迄は、もう僅かの御辛抱です……。お、此邊は田中村だな』

と、路傍の道しるべに立ち寄つて、暫く足休めをしてゐた男女がある。

――すでに數日前に、養光寺にゐる密偵から司馬大學の手元へ飛脚があつたとほり、この男女は、鳳凰杢をさがして嵯峨山の深くへ迷ひこんだ飛車兵衛と、その山小屋からのがれて來た駒木家の息女の光江であつた。

飛車兵衛が小斧を腰にさして探しあるいた榧の鳳凰杢はいまだに手にはいらないが、そのかはり花又三日之助の巣窟から光江を救ひだし、今また角太郎の居どころを尋ねあてゝ來たのであるから、彼としては、千年榧の杢を求め得たよりも以上な滿足で、少し時刻はおそいが今夜のうちにも澁の湯町まで行き着きたいと考へてゐた。

横湯川の河原は白く月が冴えてゐる。

その遠い山ふところに抱かれてチラ〱とのぞまれる幾つかの灯が角太郎のゐる湯町ではなからうか。

二人はさう思ひながら足を運んでゐた。

すると――

ちやうど河原へ下る岐れ路に、土着の者らしい人々が七八人、何かひとつに群れ合つて、

『いゝあんばいに、ちつとも水を飲んでゐない』

『流されて來るうちに、どこかの岩へ脾腹を打つて、氣を失つたゞけのものだらう』

『だが、體が冷えてゐるから、ワラ火を焚いて温めてやらなくつちやなるまい』

『なに、氣がついたら、大湯へ連れて行つて、浴びせてやるがいゝ』

『だれか、この小僧に着せかへてやるやうなお古着の持合せはあるまいか』

『ぢや、うちの子供のでも』

『ついでに何か氣付け藥もな。大急ぎで持つて來いよ』

その騒ぎにふと足を止めた飛車兵衛は、人群をのぞき込んで、

『怪我人でございますか』

と、そばの百姓ていの男に訊いた。

『いや、水に溺れたんでがすよ。この横湯川の上から流されて來たらしいんで』

『持合せでございますが、この印籠のなかに赤い丹藥がありますから、七八粒ほど口に含ませてやつてごらんなさいまし』

『有難うございます。――オイ皆の衆、今こちらの旅のお方が氣付け藥を下すつたからお禮を言つてくれ』

草むらの上へ寢かされてゐたのは、ヅブ濡れになつた少年の體であつた。

『こりやいかねえ、齒を食ひしばつてゐて、何うしても藥がのどへ落ちやしない』

飛車兵衛は見かねたやうにそれへ出て、

『かうなさいまし』

と、手を伸して、小童の體をうしろから抱いた。

柔術の活をいれると、彼はすぐ氣がついてキョロ〱とあた

りを見廻した。慌てた人々が、その顏を抑へるやうにして、水と丹藥を口へ割り込まうとすると、小童はその手を無意識に振り拂つて、

『ベッ』

と、水も藥も吐きだしてしまつた。

『まだ夢中なんだ』

呆ッ氣にとられてみて居ると、彼はよろ〱と立ち上つて、

『お母さん――ッ』

四五間ほど歩き出して、また草叢のなかへ仆れかゝつた。

『やつ？』

何か、ぎよッとしたやうに追ひかけた飛脚兵衞は、いきなり彼の體をうしろから抱きさゝへて、捻ぢ曲げるやうにその顏を月明りにのぞき込んだ。

『オヽ、おめえは幸安先生の家にゐた莊八ぢやねえか。――莊八、オイ莊八』

あまり突然な驚きに、彼はなんとも、適當なことばが見出せない。で、たゞ相手の胸をつよく抱きしめたまゝ、莊八の夢中な意識を搖すぶッて居るのみだつた。

あたりの者も妙な顏をして、二人の方へ視線をあつめながら、

(なんぢや、あの小僧は、今藥をくれた旅の衆と知り合ひであつたのか……)

少し氣拔けがしたやうに、立ち淀んでゐる。

すると、彼方から、涼やかな鈴の音が近づいて來るなと思ふと、菰を引つかけた馬方が、

『はい、はい』

と、轡の調子をとつて來た。

『馬だよ』

お互に注意をし合つて道ばたへ避ける。

馬子は村の者たちへ、獨り合點なことを高聲で話しかけて通つたが、たれも返辭をしなかつた。

その一群の人影のなかを通り越してから、馬の背に居眠りをしてゐた客は、ふと、眼がさめたやうに扇子をひらいて、その扇面に半分顏を隱しながらチラとうしろを振向いた。

『おう、いつのまにか、湯川中をすぎてをるな』

『先に見える灯が、安代の湯でございます』

『馬子』

と、馬上の侍は手にしてゐた北斗扇をサラリと疊んで、

『――よい月だなあ』

『へい、いゝ月でがす、そろ〱河原の河鹿がいゝ喉をころがしませうぜ』

『ウム、すこし歩いてみたいから、この先で降ろしてくれい』

そこで、馬子は酒代をもらつて、途中から戻つてゆく。

侍は端麗な美少年だつた。

馬子とわかれると、彼はたゞひとりで、河原と反對な岸へのぼつて行つた。そして、今すれちがッて來たばかりの彼方の人々

影を眺め詰してゐる……。
遂に、こゝまで逃つて來た光江と飛車兵衞は、彼の鋭い目にその姿を見つけられてしまつた。
その美少年こそは、虚空藏山の山屋敷から逃げだしたふたりの足跡を追つて來た、前髪の大盜花又三日之助にちがひなかつた。

遲れ走せの三人

莊八は案外元氣だつた。
一瞬の間ぐらゐ溪流に流されても、意識づけばすぐ輕快な常の莊八に返るやうに、彼の感覺が先天的に、艱苦にたへ得るものに出來てゐるのかもしれない。
欣しさもあらうが、彼は、その晩、宿で二人にたづねられるまゝ、よく喋舌つた。
喋舌りうるほどの元氣に光江も飛車兵衞も安心したが、大事をとつて無理に一日やすませ、その翌朝はどうかと案じて、
『莊八、今朝の工合はどんなだな？』
起ぬけにかう訊くと、
『をぢさん、何ともない』
と、もう莊八はケロリとした顏だつた。
『ぢや今日は、六合屋に泊つてゐる大學の方の樣子をみたり、また幸安先生をたづねたりした上、角太郎樣のお住居もさがしたいと思ふが、お前も一緒にあるけるかな？』
『あるけるとも。大丈夫だよ、をぢさん』
その證據を示すやうに、朝飯も茶碗へ四五杯たツぷり食べこんでみせた。
光江は草履に紅緒をむすび、飛車兵衞は昨日のとほりの脚絆わらぢの輕裝――、莊八は、をとゝひ救はれた時に、誰かゞ寄進してくれた田舍縞のつんつるてんを着込んでゐた。
三人づれで宿を出た。
『をぢさん、こゝが司馬大學の泊つてゐた六合屋だよ』
『ウーム、この家か』
飛車兵衞は通りながら、光江をうしろに庇つてゐたが、ちやうど手代らしい男が軒先を掃いてゐたので、それとなく訊いてみると、奥の山雨莊の客は、今朝夜の明けないうちに馬や山駕で草津越えに向つてしまつたといふ話――
それに驚いて、莊八に案内させながら内柵の幸安の宿所へ來てみると、その幸安も、きのふ假に宿を引拂つて、どこかへお立ちになりましたと言ふ。
『莊八、こりや何うしたツていふもんだらうな』
前後の消息をつぎ合せてみる豫感が、しきりと飛車兵衞に胸さわぎをおぼえさせた。
『妙だな？……』
莊八にも、一昨日からの變化は、考へつくはずがない。
『變だな、お妻さんも歸らないし、お吟さんも見えないつて言ふ……。おまけに先生までが』

そんなことを呟いて、小首をかしげてゐるばかり。

『ぢや爲方がねえ、もう一度宿へ歸つて、なんとかいゝ智惠をめぐらさうよ』

『をぢさん、ちよつと待つておくれ』

幸安の泊まつてゐた部屋へ通してもらつて、やがて出て來た。

一昨日殘しておいた吹矢を取つて來て、例の如く、腰に差し込んだものである。

二人が谷野の里からすご〳〵戻つてくると、坂の途中の喬木の根方に、腰をかけてゐる男があつた。

『おや、この間の胡麻の蠅がゐる』

莊八の顏を見ると、向ふにゐた文吉もニツコリ笑つて、

『やあ』

と、馴々しく近づいて來た。そして、

『どうなさいました、昨日から、あつしは何れ位おまへさんを探してゐたか知れませんぜ』

と言つた。

莊八は變な顏をして、胡麻文の顏を見ながら、



『どして？』

と素ツ氣なく訊いた

『幸安先生に頼まれてさ』

『ぢやおまへは、先生がどこへ立つたのか、その行先を知らないか』
『存じてをります、温泉寺にゐる小枝角太郎様のところへお移りなすツたので、そこに、お吟さんも助けられてをりますからね』
『えツ、ぢや角太郎様は、温泉寺とやらいふ僧房にお泊りになつてゐるのか』
と、飛車兵衛が氣色ばんで、今にも急ぎさうな様子をすると、
『おッと、今から行つてもムダですぜ』
胡麻文は手をもつて制しながら、
『その角太郎様も幸安さんも、今朝がた、夜が明けかゝる前に、草津峠へ急いでおいでになりましたから』
『おうツ、では、六合屋を出立した、司馬大學たちと同じ時刻に』
『さうです！』
と、文吉はことばに力を入れて、
『今ごろは、波坂を越えたか沓打の茶屋あたり……、ことによると、どこかで兩方が、ぶつかツて居る頃かもしれません』



『ウーム、ぢや大學の出立した機を狙つて、角太郎様はこの時だと、一人で御決心をなすツたものとみえる……』
『深い事情は知りませんが、なんでも兩方でいろ〳〵な魂膽をさぐり合つて、六合屋から出立した方も、十一人ばかりが槍ま

で押つ立てゝ行つた程ですから、どうでも、無事には納まらなかつたでせう』

『なんだつて、ちや大學の方には、十一人もの侍が付いて行つたんで？』

『可哀さうなのは、お妻さんといふお女中でさ、その惡侍にかこまれて、山駕のなかにぶち込まれたまゝ、あの嶮しい坂を揺られて行つたが、あゝ、どうしたらうなあ……他人ごとにや思はれねえ』

『詳しい話も聞きたいが、もう、一刻もかうしちや居られねえ……と言つて、光江様を殘してゆくのも氣にかゝるし、えゝ、どうしたらいゝんだ』

飛車兵衛は足摺りをして悶えながら、

『いくら角太郎様でも、支度のある十一人に一人で立ち向つちやたまらない。それに妹のお妻も……』と、それを知ることの遅かつたことを殘念がりながら、彼方の山影を仰いで唇を噛みしめた。

『ちや、かうなすつては如何です』

胡麻の蠅の文吉は、また持前の親切氣を出して、

『あつしがこの下へ素ッ飛んで行つて、山駕か馬を雇んで來ます』

『オウ、そいつあ有難え』

『ですが、お女中は足手まといですから、こちらに居る光江様とやらいふお方は、あつしがお預かりしようぢやございませんか』

そばで聞いてゐた莊八は、急に不安な顔をした。

飛車兵衛には、それは尤も好都合に思はれたが、何しろ相手が胡麻の蠅と聞いては、大事な光江の身を半日でも託す氣にはなれないで、

『いや、べつに山駕をもう一挺』

と押し被せた。

『合點です』

文吉は氣軽だつた。

間もなく、足の早さうな馬と駕がをどつて來た。

『莊八、おまへはおれの前へ乘れ』

そして光江は、山駕の方に身を乘せた。

『旦那、急ぎますと、波坂はすこし辛いかも知れませんぜ』

『おれの體なんざ、どうなつたつてかまはねえんだ。たゞ一寸でも早く草津の宿へやつてくれ』

胡麻文は馬と駕の間に立つて——

『ぢや、皆さん、氣をつけておいでなさいまし』

『いろ／＼親切に聞かしてくれて有難かつた。命があつたら、また逢はうぜ』

莊八は飛車兵衛の鞍の前つぼに股がつて、

『雲に乘つたやうだ——』

とキョロ／＼してゐた。

『莊八、おめえが馬から落ちたつて、いち／＼拾つてゐる間な

んぞはねえんだから、そのつもりで、しつかり鞍の前輪につかまつてゐるんだぞ』

『大丈夫』

『お嬢様、少々の間、どうか御辛抱下さいまし、これもみな駒木家の……』と言ひかけて口をつぐみ、

『オイ、やつてくれ』

と、行く手の山を仰いで言つた。

× × ×

沓野から直つすぐに遠去かる駕と馬とを見送つて、胡麻の蠅の文吉は、やつとすべての役目をすましたやうに、

『どれ、一服……』

と煙草入の筒を抜いた

すると、うしろの木立を分けて、静かに進んで來た藺笠の美少年があつた。

花又三日之助である。

笠をぬいで、文吉のそばへ、輕く捨てる……。そして、文吉と同じやうに、もう豆粒ほど小さくなつて行つた今の者たちを見送つてゐた。

のどかに紫煙をくゆらしてゐた胡麻文は、膝のわきに落ちた藺笠にうしろを振向いて、

『あ——親分でございましたか』

と立ち上つた。

その枝に手を乘せて、三日之助は、

『文吉、今みてえないゝ機會に、なぜ光江を預ると言つて、態よく此方へ引き取つてしまはなかつたんだ』

『あつしもそこへ氣がついたので、際どい所で當つてみたんですが、前からの惚れこみが胡麻の蠅とあつちや、向ふで氣をゆるさねえのもムリぢやございません』

『併し、てめえの胡麻の蠅は大出來だつたな』

『幸安がやつて來るのを見越して、中野番所の前でワザと馬に蹴られた狂言なんさ、われながら苦しい藝當でございましたぜ』

『そのかはりにや、あれが緣つなぎとなつて、てめえのする役目もこれで首尾よく仕済ましたわけだ』

『何しろ、角太郎の方にも大學の方にも、親分の心を讀まれないやうに働けといふ初めからの註文なんで、幸安に同じ働きぶりを見せるにも、何だか邪魔な氣がしてなりませんでしたぜ』

『さうだらう』

と、三日之助は何の意味か笑つて、

『併し、これであとはどうなるか、雲行を見てゐるよりほかに手段はない』

『さうですね、さだめし今日の草津峠にや、赤い露が降りるでせう』

『文吉、骨折に一杯飮ませるから、静かな家を見つけてくれ。そこらに落着いてゐるうちには、どう片づくか、峠の上の樣子

もやがて風の便りに分つて來るだらう」

親分の簡笠を持つて、文吉はあとに尾いた。

彼が、幸安に向つて胡麻の蠅だと名乘つたのは、まつたく當座のいつはりで、かの菖蒲屋平治などと共に、三日之助の手下に組してゐる盜賊旅獵の文吉といふ者だつた。

けれど、文吉がどういふ素性であつたにしても、また幸安に近づく手段に際どい狂言をかいたにしても、それはさしたる問題でないが、いつもながら、解し難いのは、三日之助自身の不思議な行動である。

文吉の口吻から察すれば、かれは疾くから、大學や角太郎の居所まで探つてゐて、乾兒の文吉をこの邊りに徘徊させてゐたらしい。

そして、こゝまで光江を追つて來ながら、格別な手段も講ぜずに、悠々とそれを見送つてゐる彼の氣もちもわからない。

一體かれは、大學の味方か角太郎の味方か。それとも單に、蕊花多寶塔の秘庫を狙ふだけにとゞまる大盜そのものであらうか？

それにしては、ほかの行動の神變をきはめる自由さに比して、光江に迫るにも、角太郎や幸安や大學の間を陰に陽に歩行する態度や策にしても、大盜三日之助が望みをかけた仕事として、少し手ぬるくはないだらうか。

義心と愛涙

莊八はすばらしく愉快になつた。

飛車兵衛の前にまたがつて、鞍の前輪にしがみつきながら、森や流れやいくつもの峰をぐん／＼とうしろに見てゆく馬上の氣持はなんともいへない。

『旦那ッ』

と、駒を急がせて來た馬子は息をきつて、

『こゝまでは一息に飛ばして來ましたが、澁坂の裾へかゝつて來ましたから、もう今までのやうに早くは行けませんぜ』

『おゝ、ぢや險しい所だけ歩くとしようか。その方がいッそ早えだらう』

『さうして貰へりや馬も助かります』

『だが、駕の方だけは、無理でもやつてくれなくつちや困る』

『ようがす、ぢや先を拔いて、沓打の茶屋でお待ち申してをります』

光江をのせた山駕は、肩代りの男が二人ついて、飛車兵衛より一足先に、稻妻形の坂を見るまにタッタとのぼり出してゆく。

『莊八、こつちもあれに遲れるな』

『をぢさん、足ぢやだれにも負けないぜ』

『落ちるなよ、谷底へ』

『オウ、急な坂だな、江戸ではこんな坂を見たことがない』

『默つて歩かなくつちやいかねえ。喋舌りながらゆくと早く息がきれて來てしやうがねえぞ』

『やあ、空荷のくせにして、駁の方があんなに遲れてゐやがら』

　莊八は手を叩いた。どうして、喋舌りつゞけてゐる方がなかなか元氣で、却つて飛車兵衛の方が先に息が拔れさうだ。

　茶屋へついて一息休む。

　莊八は筧へ口をよせて、がぶ〳〵と水をのんでゐた。

『御亭主』

　と休む間もなく飛車兵衛は、

『――今朝澁から立つて來た侍で、十一人ばかり一組の者が、この沓打を通りはしまいか』と訊ねた。

『その侍衆ならば、今し方、こゝで足拵へを直して、草津峠へ立つたばかりでございます』

『えつ、ちやまだ左程遠くへは行つてねえな』

『道程にして、廿丁ほども先へおいでになつた時分でございませう』

『有難え。そこで、もう一つ訊ねるが、同じ時刻に、醫者風の老人と若い女――それに若いお武家の方――身裝はちよつとはつきり言へないが、三人連れの者がこゝを通らなかつたらうか』

『その方達は、私共の家の裏に忍んでゐて、十一人の侍衆をやりすごし、間道からあとを追つておいでになりました』

『それだ！　角太郎様は』

　山駕のなかに妖しく醒めた目をしてゐる光江と顏を見合せた。そして飛車兵衛は、あとから登つて來る空駕をもどかしさうに待ち焦れつゝ、なほ、茶店の亭主から何かのことを聞きとつてゐる。

　――それから先、裏草津の白根山脈が起伏するあたりにかゝつては、とても、駕や馬では難儀な嶮岨もあるが、沓打から數里の間は、前の一行が踏んで行つたとほり、繚亂たる植物の萬花が波をうつ高原で、息杖に調子をそへ、駒に鞭を加へれば追ひつくことも至難ではない。

　もし、間道をえらんで、一歩路に迷ひでもしたら取り返しのつかないこと。むしろ平路の遠きをとつても一息急ぐに如くはない。

　駒と山駕はふたゝび沓打の茶屋から高原の渺茫とした草の波を縫つてゆく。

　かくて、十町――廿町――そしてやゝ一里餘り。

　霧のなかに微かな人聲を聞きつけて、飛車兵衛は、さてはと胸をとどろかせた。

　と――莊八は突然、

『あつ、をぢさん、あそこに人が斬られてゐるぜ』

　と指さした。

『えつ、人が？……』

　早くも不吉な胸さわぎである。

『どれ』

　と、ヒラリと跳び降りると、莊八は不意にうしろの手を離さ

れて、鞍の前輪から馬の足元へころげ落ちた。
『や、こりや獵の仲間のものだ』
馬子と駕のものは死骸を見つけて叫び合つた。
見事な斬口、袈裟がけにされてゐる。
『や、向ふにも』
『これは槍傷だ』
顔色を失つた駕かきが、とかうしてうろたへてゐるまに、光江と莊八は薄のなかを走り出してゐる。飛車兵衛も一緒になつて、同じところへ駈けだした。
と言つても遠くは隔てゝゐない——足数にして三四十歩。
ばたばたといふ跫音に、向ふの者も驚いたらしく、ぎよつとして立ち上るなりうしろを見た。
『やつ?』
『おゝ、こゝに……』
『ひ、飛車兵衛さんぢやないか、オ、、莊八も一緒に』
そこにゐたのは、幸安とお吟であつた。——二人の足元にもうひとり、髪を亂した女の倒れてゐるのが、すぐ飛車兵衛の目にはいつた。
お妻!
はつと思つたが、飛車兵衛は見ぬふりをして、
『おう、お吟さんは、いゝあんばいに無事でございましたね。して、角太郎様は、角太郎様は』
『ぢや飛車兵衛さん、お前さんは今日の次第を、あらまし知つて來たすつたのか』
『宿でチラと様子を聞くなり、息もつかずに追ひかけて參りました。併し、かういふまにも角太郎様の身が氣がかり、して、小枝様はどうなさいましたか』
『女やわしのやうな老人は足手まといぢや、乾度手出しをしてくれるなと言ひながら、今こゝで、司馬大學の十一人のなかへたツた一人で斬りこみました。そして、オ、向ふにも死骸、あれにも見えるとほり……あまたの者に傷を負はせて、なほこの上へ追ひかけて參つた様子ぢや』
聞くなり飛車兵衛は疾風のやうに駈け出した。
幸安の足元に、青白い顏をした妹のお妻が仆れてゐるのを、彼は血走つた目に見てゐたのである。が、それにすら、やさしい言葉をかけてやるゆとりもなかつた。いや、角太郎の危難を目焦にしてゐる今、妹の難を先に顧るのは、彼の心がゆるさなかつた。
『見ろツ、大學』
憤怒は敵の上に、そして、彼の胸は、義心と愛涙の二つのものにみだれて居たであらう。

受難の角太郎

——さて、無線小屋の方では。
何うしたらうか? あの、退つぴきさせない　そして、胸苦しい切迫の空氣が。

その怨氣は、劍をもつて斷つことも、舌をもつて破ることもできない。

併し、大學の方では、かねて最後の手段と計企しておいたとほり、思ふつぼの所まで、相手を誘ひこんでしまつたのであるから、もう角太郎の生殺與奪を握つてしまつたも同樣であると、無緣小屋の前の岩頭に悠々と腰をすゑ込んでゐる。

苦しい――そんな文字では言ひ足りない、憤怒と無念の火に焦かれながら、みすみすその敵を前にして、じつと身動きもならない呪縛にかゝつてしまつたのは小枝角太郎だ。

まつたく、彼は今こそ、すゝむことも退くこともできない惡人の陷穽に足をのせてしまつた。

無緣小屋から引き出した、見るかげもない駒木大內記を膝の下にふみ敷いて、さんざん頭の上から罵詈を投げてゐた司馬大學は、最後にもういちど、

『さ、この大內記をおれが刺し殺して見せようか、それとも、貴樣の忠義だてが僞物でないならば、そこで自分の立ち腹を切つてみせるか、どつちでも、望む方の返答をしろ』

と呶鳴つた。

そして、角太郎の顏色のうごきやうひとつで、大內記を一突きにする身構へをとつて見せた。

身うごきはおろか、うかつに眸もうごかせない。

無論、惡人がその暴逆を遂行すれば、自分も夜叉となつて、最後の息のたえるまで斬りまくるだけの覺悟はすゑてゐるが、あゝ、それは最後の暗黑だ。永久に主家の破滅をなす暴風を呼ぶものだ。

大內記樣の一命にもしものことがあつたら光江樣も必ずや生きてはをられまい。

いくつもの生命の灯がそれからそれへと消えてゆく。おそろしいことだ。

また、君臣の道から言つても、かりにも、主君の大內記が暴惡の刃に伏さうとするのを見て過ごしてよいものではない。

では……？

では、自分がこゝで自刄してそのお方の助けを乞ふか。

それもできない。

角太郎には斷じてそれもできないことだつた。

自分の生命を惜むのではない。彼には微塵もさういふ卑劣な心を持合せてはゐない。では、なぜと言ふならば、自分の死は、すなはち惡人に凱歌を奏させることになるからである。

自負に慢じるのではないが、今、自分がこゝで死んだら、誰が駒木家のために劍をみがき、誰がこの不運きはまる癈人の大殿を救ひ、誰があのあはれな光江の境遇に力づけ、誰が御代崎一萬石の所領をふたゝび公儀の手から取りもどす者があらうか。

光江は世に馴れぬし、お妻お吟は女で賴むにはたらず、幸安や莊八はあのとほり、たゞいくらか力にならうと思はれる飛車兵衛もその後は杳として消息を知らない。

自分は決して死ぬことはできない！

決論はそれ。今、生涯の大受難に立つてこそゐるが、角太郎が突嗟に持つた思慮に迷ひはなかつた。

併し。——大學はまた追つてきた。

『おい、何つ方にするのだ！』

嘲笑つてまた罵つた。

『早く思案をつけろ。大內記を殺さうか、それとも汝が自滅するか』



『…………』

角太郎は石のやうに突つ立つたままだつた

『意氣地なしツ——常の廣言にも似合ぬやつ！　何をいつまで思案を決めかねてゐるのだ。あは丶丶丶。逃げようとして隙を窺つてゐるのか？　見苦しい最期はよせ、武士は終りが大事だぞ。いかに汝が去水流の達人かは知らぬが、うしろの槍や刀は汝の身うごきを待ちかまへて居る！　一寸でも身動きをしたが最後、この片輪者の命はないぞ』

大學は、膝下に踏みつけた癈人の胸元をつかみ直して、惡魔のやうに彼の處決を急き立てた。

兄の龍爪を討たれた三浦傳八郎は、角太郎のうしろに居て槍をつけて居るし、段之進は鋭い片目を光ら



して、五六人の浪人と共に栗林の一方と坂の道をふさいでゐた。

それらの者まで口ぎたなく、

『往生ぎはの悪い野郎だ、どつちにするのか、早く大學樣に御返辭を申し上げろ』

と、牛頭馬頭のやうに喚き立てる。

『えい、面倒だ』

大學は奮然と立ち上つた。

無明啞盲の癈人駒木大内記は、鬼のごときかれの腕に締めつけられて、しかも聲も出せず手を振りうごかしてゐる。

『あツ――待て大學』

角太郎は自分自身が羅刹の責めにあふよりも苦しげに地だんだを踏んで、手をあげて彼に叫んだ――

『汝、大内記樣をなんとするのだ』

『知れたことだ！　いつまで返答がない以上、言ひ渡したとほりこの片輪を貴樣の目の前で一突きに殺してやる』

『おのれ、かりそめにも舊主のお命をとるなどと』

『やかましいツ。そんな說法を貴樣の口から聞かうといふのではない。やがて、萬花多寶塔の秘寶さへ手にはいれば、すなはち御代崎一萬石の領主はこの司馬大學だ。世にあつて益のない片輪者を今日までかうして生かしたのは、むしろ大學の慈悲と

いふもの』

『忘れるな、今にその口が爛れよう、今にその腕が曲がりをらう』

『オヽ、天罰でも地罰でもあたツてみろ。人盛にして天に勝つ、この大學に逆らふものは、みんなかういふ見みじめな終りを告げるのだ。さア、もう兎やかうと押問答はいらぬこと、見殺しにされる大内記の斷末をそこで氣を落着けて見物してをれ』

『やあ、その手を暫く猶豫せい』

『えゝ、いつまで同じことを』

『もう一言』

『では、自分の腹を切る故、大内記のいのちだけは助けて欲しいと申すのか』

『ウーム……』

彼は昏倒するかと思つた。

あぶらのやうな冷めたいものが毛の根から頬を流れた。そして、あやふく眩々となりさうな足元を踏みしめた時――彼は何を見たか、

『あツ、飛車兵衛、逸まつては成らんぞ！』

と叫んだ。

飛車兵衛？

その聲に愕然とした時は、段之進や傳八郎の構へがサツと坂の一端に分れた。

『オヽ、角太郎様』

そこへ、息を喘いで來た飛車兵衛は、道中差を右手に、白樺の巨木を楯にしながら聲をかけた。

角太郎の窮地はいよ苦しくなつた。

もし飛車兵衛が自分に助太刀をする氣で、無法な剛刀をふり廻せば、大學は忽ち捨て鉢となつて、大内記を刺すにちがひない。

『――逸まつてはならん、大事な場合ぢや』

『大事な？……』

飛車兵衛もハツと思つた。

上を見ると司馬大學が、脇差の切ツ尖を向けて大内記の胸元につきつけてゐる。

彼は憤怒にふるへあがつて、

『あ、うぬ』

と、そこへ驅け上らうとした。

『これツ』

と角太郎は強く叱咤して、

『滅多な腕だてをいたしてはならぬ、腕づくですむ場合なら、そちの助太刀を待つまでもなく、この角太郎がかうしては居ない……』

『卑怯なやつだツ、ぢや、あれにゐる大内記様を殺さうか、それとも、角太郎様に自滅しろといふんですか。ウーム、いめいめしいやつ』

こゝまで駈けつけて來ながら、彼もまた角太郎同樣、手も足も出ず、同じ陷穽に足摺りをして無念がるばかりだ。

が、角太郎は靜な態度に返つた。

『飛車兵衛、こゝでそちに會つたのは、暗夜に一つの灯を見たやうだ。あとを……あとの事すべてを賴む』

『やつ、もしッ……』

思はず白樺の根へ腰をくだいた飛車兵衛は、その刹那に、顏の血の氣をなくしてしまつた。

『ぜひがない、みな自分の不覺だ』

かうつぶやいて瞑目すると、角太郎の右手に持たれてゐた水田鄕の刄は、その一部を袖に卷かれて、彼自身のわきばらへ靜に廻されようとするのであつた。

還る犧牲

今が小枝角太郎の自滅だ。

さすがの惡人たちも、かう思つて、生唾をのみながら、彼がどういふ死にざまをするか、その態度を目ばたきもせず見つめ合つた。

――が、大學だけは、その最期を見屆けるまで、大内記の襟がみの手を少しもゆるめずに居る。一分の油斷もない眼色だ。

すると――

その怖しい沈默と凝視のなかへ、艷麗な鳥でも舞つて降りたかのやうに、うしろの樹陰から馳け出したものがある。

その女性は、今にも――と見えた角太郎の手にすがつて、何か叫ばうとするらしかつたが、聲が出ない、口がきけない。

角太郎は靜にその人をながめて、

『お〻、あなたは光江樣……』と、意外らしい感にうたれたが、すぐ默念と目を伏せた。

――飛車兵衛について來て、樹かげに身をひそめてゐた光江である。光江は彼の腕にすがつて、やつと、懸命な聲をかすかにしぼつた。

『角太郎、おまへは死んではなりませぬ。……わ、わたしが、決してゆるしませぬ』

さう言つて、かぶりを振つた。

彼女の顏は凄いやうに冴えてゐた。何者の言動もゆるさない威嚴があつた。七年の間、陣屋の山のうす暗い本丸に不具の父をみてゐたあの冷智がひとみの底に澄んでゐた。

『大學――』

美しい双眸が、恐れげもなくかう呼び捨てにした。

それは、彼女が駒木家の姫として御代峠の陣屋にゐたころ、陣代である彼を呼ぶのと、すこしも變りのない聲音だつた。

犯しがたいものがある。目に痛いやうな美しい威嚴さがある。さすがの司馬大學も、この不意な女性の君臨には毒氣をぬかれて、いたづらな罵りも口から出ない樣子だ。

『大學――』

涼しい聲はもういちど責めるやうに彼を呼びながら、そばへ

近づいて行つた。そして、
『お父樣の手をお離し……』
と、やはらかに、その腕くびをつかむ。
大學は白眼をヂロリと上げて、
『光江だな、おまへは』
『光江です、一時、紅門寮から姿をかくしましたけれど、今日よりはまたお前のところへ戻つて上げます。――だから、お父上をゆるして下さい。そして角太郎とも今日のところは事なく別れてあげておくれでないか』
『ならぬ！』
大學は突ツぱねた。
光江はそれに怯む色も見せないで、
『ではお前は、萬花多寶塔の秘庫を開ける鍵――あの解開の鏡もおのぞみではないのですか』
『ウーム』
『あの解開の鏡のありどこを知つてゐる者は、この光江を措いてほかにはないのですぞ。――おまへにその望みがなければ爲方がないこと、お父上や角太郎の身にはかへられませぬから、それが手に入れたいと思ふなら、こゝを無事に去るがよい』
『では……』と大學の心は少しうごいて來た。
『必ず多寶塔の鍵を身共に渡すな』
『渡してあげませう』
『そして、そちの身も元の通り、この大學の手許へ戻つて、自由にはさせぬぞよ』
『それも覺悟をきめました』
『萬一、僞りのあつた時には？』
――光江は、ふとうる目を反らして、
『お父上のお命でも』
と少し聲をふるはせた。
司馬大學は不意に大内記の襟がみを突つ放して、光江の白い腕くびを持ちかへた。
『よし、望みにまかせてやらう』
段之進と傳八郎は、すぐ大内記の體をふたゝび洞窟の無紋小屋に抛りこんで、その口元に頑張つた。
たとへ何ういふ隙にでも、決して角太郎や飛車兵衞が、突然な行動に出ることをゆるさない順序だつた。
『光江が不愍な頼みにめんじて、命だけは助けてやる、足元の明るいうちに、先にこの峠を下りてゆけ』
命じるやうに、大學はかう言つた。
それも要意周密な彼の懸引で、飛車兵衞や角太郎をこゝから去らした後に、大内記の置き場所をまたどこかほかの分らぬ地に移さうといふ考へ。
今日ばかりは、小枝角太郎にもどうする術がなかつた。光江の救ひは、神のあらはれのやうに思へた。
自分の受難を光江が代つて背負つてくれたのであると沈痛な感にうたれた。今からは、自分の命は自分の命ではない、――

光江に與へられた命である。さう思つた。

が――そこを去ることは、うしろ髮を引かれるやうだ。

飛車兵衛も悲涙をにじませて　何としても、光江を彼の魔手に渡して去るにはしのびない風だつたが、すべての成行きは是非のない歸着となつた。

二人は、光江に向つて目に萬感をこめながら、悄然と無緣小屋の前を去つた。あゝ悄然と――。

そして元の所へ戻つて來ると、飛車兵衛は妹のお妻を背なかに負つた。彼とお吟、幸安、莊八、角太郎の都合六人は、それからふたゝび高原の霧にさびしい影をさまよはせて、一時谷打の茶屋まで恨みをのんで引つ返したのである。

霧に打たれ、草の露によごれて、かういふ結果のもとに草津峠をうしろにして、高原一里餘の道を互に口もきかずに戻つて來た時の情ない氣持といふものは、角太郎をはじめ、すべての者が、それから後生のあるかぎりは忘れることがなかつたらう。

物騒な聲色屋

さわやかな秋風が立ちそめた。

新渡の唐棧や藍の香のぷんとくる仕立おろしの素袷が、町に目につく江戸の秋だ。

今年の秋も、土橋際にある髮床の家の物干園藝は、なか〳〵小まめに丹精ができてゐる。

葭簀細工の朝顔の圍ひ、金毘羅樣の緣日で買ひこんで來た鬼灯や白粉草も、秋らしい點景を長屋の裏に示してゐた。

店では相變らず變屈屋の床岩親方の聲が、

『かう、番附を貼つて行くなあいゝが、そんな所へベタ〳〵と不性をやらねえで、もつと糊を小ぎれいに、ていさいよく貼つてくんな、こツちだつて客商賣だ』

『へい、親方、こりやあ今度の狂言の撒き札でございますから』

中村座の絆纏を着こんだ番附貼りの男が、新狂言の番附を壁に貼つた禮として、お約束の木戸錢なしの通り札をそこへ出した。

客の髷を結ひながら、床岩は横目に見て、

『よしてくれ、おら生まれてから、無料芝居なんさ見たことはねえんだ。見にゆく時にや大威張で木戸を拂つて通るから持つて歸つてくれ』

客は笑つて、

『岩さん、相變らずなあ』

『あたりめえさ。ふだんはかうやつて、南瓜や唐瓜みてえな客のあたまをハラ〳〵しながら結つてゐるんだから、芝居へでも行つた時ぐらゐは、客らしく、大手を振つて見物しなくつちや、背骨が曲がつたなりになる』

『はゝゝ、ぢやわしも、その南瓜か唐瓜のどつちかだね』

『何しろ一俗廿七文だからね』

『髪結の通り相場だから爲方がない』
『さア、出來たよ。そこの手桶の水をくんで顔を洗つておくんなさい。……おつと、一本悪いおくれ毛がある』
鬢搔のもとにちよつと油をつけて、立つたまゝ撫でつけてゐると、笑ひながら出て行つた番附賣とすれちがひに、
『床岩は在宅か』
と、例の大髷の描いてある腰障子の間からそこへはいつて來た侍があつた。
『大風な野郎ぢやねえか』
と、床岩は機嫌のわるさうな言葉つきで、
『うちぢやお侍の髪は結げませんぜ』とお斷りを食はせた。
『いや、髪ではない――』
侍は笠を脱つて、ニツコリ笑ひながら、
『いつも達者で結構だなあ』
『おやー』
『どうぢや悴くぶりであらう』
『三日之助樣でござんしたか。驚きましたねえ、何時この江戸へ?……まあ、まあ此方へ』
と、何もかも捨てゝ奥へ這ひ上る。
呆つ氣にとられたのは、店の腰掛に、次の番を待ちぬいてゐた男で、
『おい、親方々々。おれはどうしてくれるんだい』
『今日は都合がわるくなつたから明日來てくんな』
『じようだんぢやねえぜ親方、さつきから欠伸をこらへて、二人も濟むのを待つてゐたのに、またあした出直せるもんか』
『ぢや、幾日でも先にしておくれよ』
『困るなあ、やつて下さいな』
『何しろ珍客だからそちらはお生憎樣だよ。何ならもう半刻もすると、出結に行つた下剃の伊之が歸つて來るから』
客は中ッ腹で歸つてしまつた。
床岩は肩と膝を眞ッ四角に坐つて、
『どうなつたえ、若樣』
『つい無沙汰をいたした』
『無沙汰はいゝがおめえさんは、あとで町方で噂をきくと、飛んでもねえお泥棒だといふ噂ぢやございませんか。いよ〳〵あつしの所へ舞ひ戻つて來たところを見ると、高飛がしきれなくなつて、またこの江戸へ追ひ詰められて來なすつたね』
『たはけたことを申せ。決して、そんな迷惑をかつぎ込んで參つたのではない。また、如何にも花又三日之助は、盜賊呼ばはりをされてをるには相違ないが、決して、世人を泣かすやうな鼠賊のまねはいたしてをらぬつもりぢや。まあ床岩、長い目でわしのする仕事を見てゐてくれ』
『終りは裸馬から獄門臺と相場はきまつてをりやすからね。だが、まあようがす、盜賊と懇意になつたのも何かの因縁でございませう、あつしも今更、お前さんをあかの他人だとは言ひませんから時節が來たら、立派に自首しておくんなさい』

と、むきになつて意見をするのを、三日之助は、輕く聞いて、
『時に、文吉といふ者と、平治といふ男が、こゝへ拙者をたづねて來なかつたか？』と、話題を變へた。
『また、あつしの家を巣にしようと思つて』
『江戸にをるうちは、時々二階を借りうけたい。但し、三日之助一身に賭けても、そちに迷惑はかけぬ所存ぢや』
『ようがす、勝手に使つておくんなさい。だが、あつしにも條件がある』
『何か？』
『人泣かせのケチな惡事はよしておくんなさい』
『安心いたせ、三日之助の大盗ぶりが、今にわかる時節が來る。ぢや、平治と文吉が來るまで、ちよつと二階で枕を借りてゐるぞ』
　勝手を知つた二階へ、とん〳〵〳〵と上つて行つた。——床岩はその足を下から見上げて、ふと、投げ首をして腕を拱んだ。
　その晩、裏口からそツと訪れて來たのは、三日之助の乾兒、菖蒲屋平治と旅姿の文吉で、二人ともに、粋な藍染の素袷に、豆絞りの半手拭を月代にのせ、文吉は銅鑼、平治は拍子木らしいものを持つてゐた。
　そツと、裏口の戸をあけて、素早く内へ身をかくすと、外の闇を見廻して、ガツキリと心張棒をかツてしまつた。
　そこで、うたゝ寢をしてゐた床岩が、その音に目をさまして、
『おや、聲色屋ぢやねえか。てめえたちは何を戸まどひして人の家へ飛びこんで來たんだ』
と呶鳴りつけると、あわてゝ、
『シッ……』と、その口を押へるやうに手で制して、
『——居ますか？』
と聞えないやうな低聲でたづねた。
『あ……ぢや平治に文吉といふんかい』
『左樣です。……夜分どうも』
『二階だよ』
『それでは』と戸に耳をつけて——『御免なすツて』
と言ふや否、草履をふところに押し込むと、足音をしのばせて、する〳〵と二階へ上つてしまつた。
『あゝ、いけねえ、張本がこゝに腰をすゑ込んだものだから、ぽつ〳〵と物騒なてあひが出這入りしはじめたぜ』
床岩は困つたやうな眉をよせて、天井裏を見上げてゐた。
（つゞく）

運動界花形

安部民雄君（テニス）

スポーツマンの典型

現に社會民衆黨の首領で、あの謹嚴そのものゝやうな安部磯雄氏を父とする同君が、本年度のデビスカップ庭球戰に、日本代表選手として出場することになつて、出帆後間もなく、父君が代議士當選の快報をうけ、幸福と希望とに燃えながら、一路アメリカへ向つたのはよかつたが、大切な試合を前に、父君危篤の急電に接して以來、めつきりあたりが思はしくなくなつたのは、親思ひの君として、誠に同情にたへないものがあつた。併し試合の勝利そのものは第二である。若、清水善造氏は禮儀の正しい點で歐米人の賞讃を博したが、我が安部選手の、あの父君の俤を宿した寡默謹嚴にして率直な正正たる態度こそは、スポーツマンの典型として、大いに期待するに足るものがあるのである。



安部民雄君のバツク振り

織田幹雄君（陸上）

日本のバッタが洋行

日本のバッタが洋行したといつて、何も驚くことはない。バッタは織田選手の綽名に過ぎないのだから。脚よりも胴の長いのが目に立つ日本人を代表して、君が特にバッタに似てゐるといふので、この異名があるのである。

あまり大きな聲も出さず、いつもニコニコと俯向き加減に話をする謙遜家の君が、陸上競技の世界的大選手とは一寸承けとりにくいが、ホ・ス・ジャンプ、走高跳等、殆ど世界記錄に肉迫してゐるのは素晴しい。

かういふ大選手には珍らしいといふか、當然といふか、酒と煙草が大の嫌ひ、おまけに魚といふ魚

選手總まくり

行田重治

が嫌ひで、瓜や南瓜はさておき、果物には目がないと云ふのは、バツタ君の本性らしくて面白い。

今年のオリンピック大會には、非常に期するところあるもの丶如くであつたが、果せるかな、三段跳びに於て、遂に第一等を占め、初めて日章旗を空高く揚げしめ、同胞をして思はず相抱いて感泣させた涙ぐましい情景を演出するに至つたのは何といつても我が殊勲者中の殊勲者と謂ふべきである。



織田幹雄君の三段跳

黑井悌子さん(テニス)

テニス結婚の好一對



黑井悌子さん

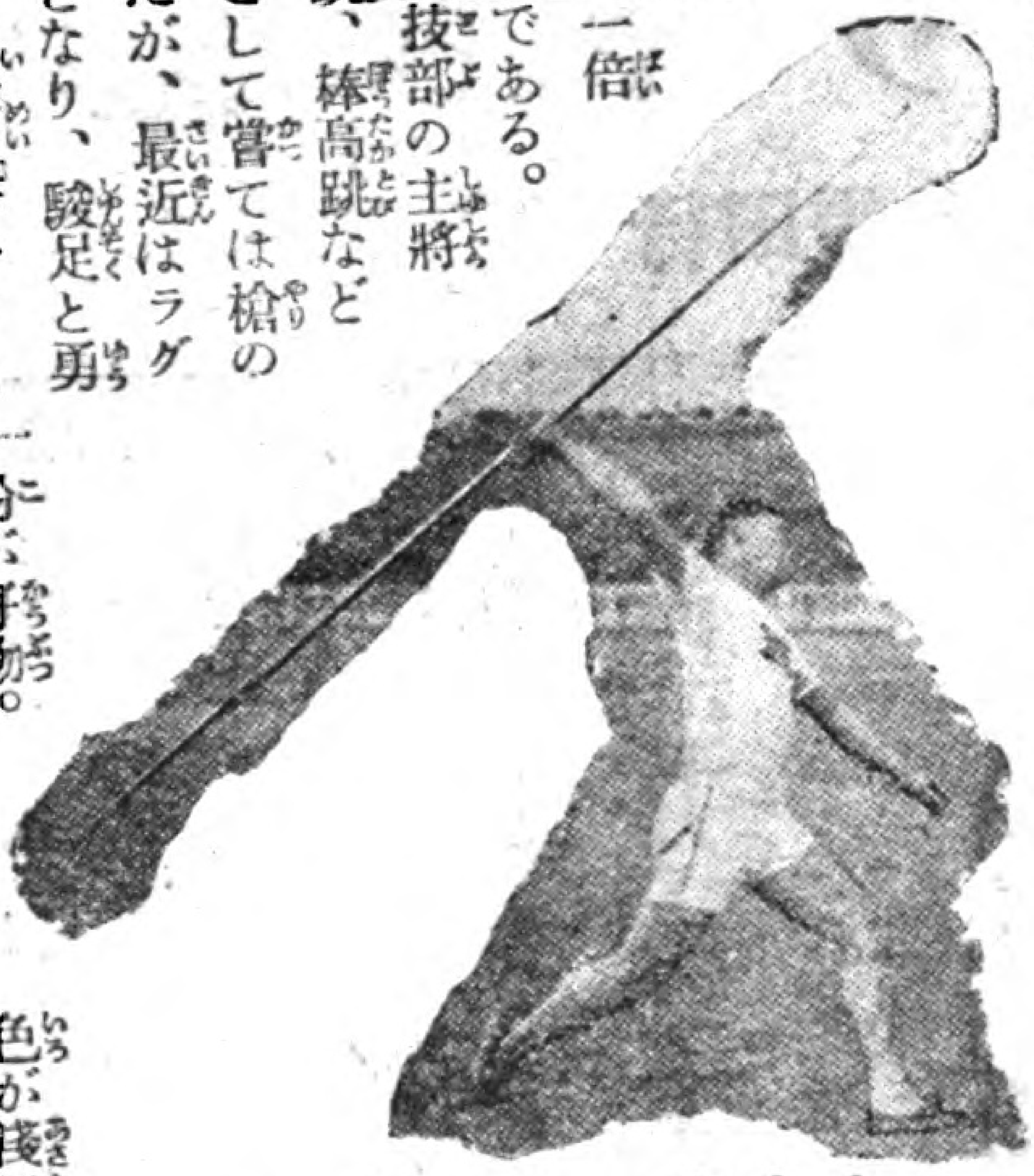
わが女子庭球界に於て、關西に戸田、藤本、羽山、安宅なんどの猛者が輩出し、關東にその人なきを嘆ぜしめた時、學習院の姫御前から出でて、試合毎に先輩強敵を打ちひしぎ、過去數年間立派に第一人者の地位を保ち、全國的の人氣を背負つて立つた悌子さん、海軍大將黑井悌次郎氏の令孃で、一時は陽にやけてお顏があまり黑いので、お父さんを通して潮風の洗禮をうけたのだらうかなどと氣にされたものだが、過ぐる日、慶大選手の石井小一郎君と華燭の典をあげ、今や琴瑟相和してゐるとは、福田君の田村孃に於けると好一對のテニス結婚として、目出度し目出度し。ところが、この悌子さん家に在つては編物、お裁縫が大好き、その上暇さへあれば讀書を樂しむといふ珍らしい淑女振りは、兎角跳ねッ返りになりたがる女子運動家として大いに感心々々。

小山濠一君（陸上）

スパルタ健兒の面影

君の綽名の『鐵板』のやうなあの身體はたとひ槍で突いても、槍の方で折れるだらうなどといふ噂もあるが、小山君だとて刺せば赤い血も出るし、人一倍やさしい涙の持主である。

小山君は慶大競技部の主將で、槍投、走高跳、棒高跳など十種競技の花形として嘗ては槍の第一人者であつたが、最近はラグビーの本チヤンとなり、駿足と勇氣とで、君の第二の異名『ジヤ〱馬』の樣に荒れまはつてゐる。かうした選手には珍らしく君は江戸ッ子で誠に齒切れがいゝ。酒と煙草の代りにチヤン料理とお汁粉が好物。色が淺黑くて引締つた感じは、スパルタ健兒を想はせるものがある。



小山濠一君の槍投

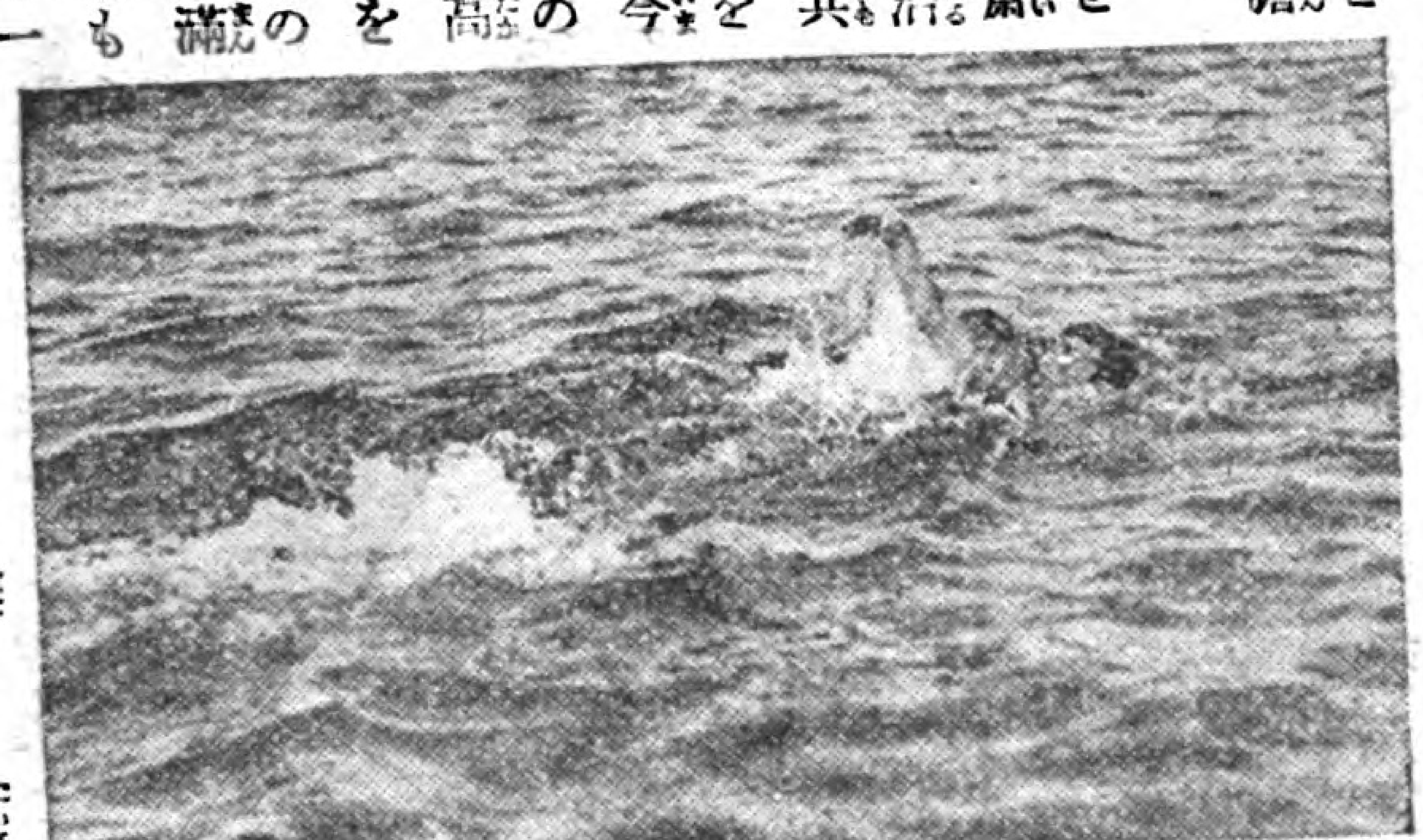
木村象雷君（水泳）

『オイ』『ゾー』『ナンダ』

君は人も知るバックの花形で、先年世界の第一人者布哇のケロハ選手と一騎打をして、彼の心膽を寒からしめ、一躍名聲を馳せた人である。齋藤巍洋、上田治の兩大選手と共に同志社中學を巣立つたが、今は早大プールの人氣者。一寸高石君のタイプを彷彿させるものがある。闘志滿滿たるところも高石君と好一對。『ゾウ』の異名があり『オイ、ゾウ』とよべば、忽ちに『ナンダ』と應ずるぐらゐで、本名より解りがいゝらしい。

『島原美少年錄』を書いた木村毅氏が君の叔父にあたるだけに、君も小説を好んで讀む。好物は燒鳥にワンタンも異色がある。

今度のオリンピックでは惜敗したが、まだ前途は長いから失望する事はない。來るべき大會を大いに期して待つべきであらう。

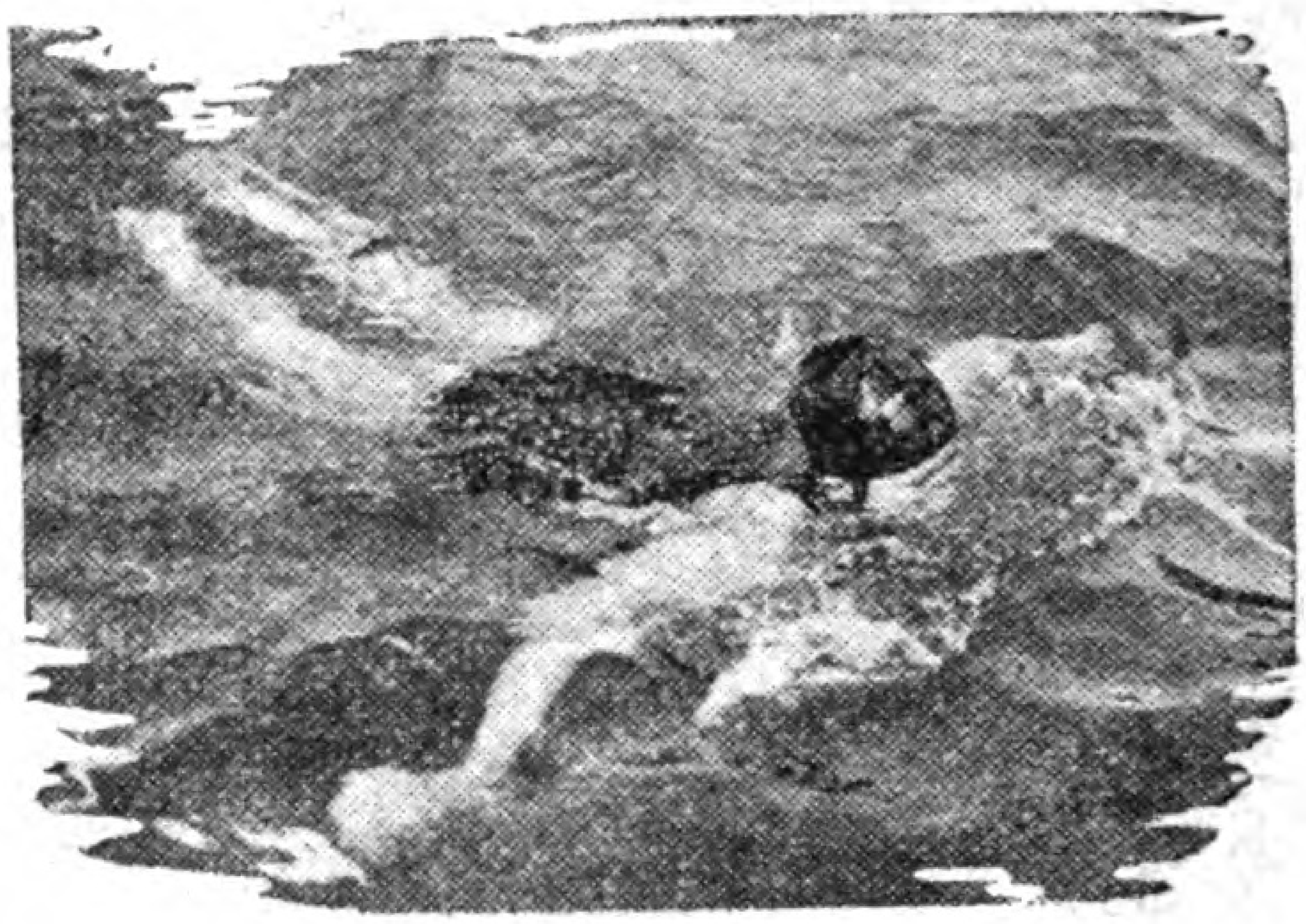


木村象雷君の背泳

飯村昌子さん（水泳）

不言實行をモットーに

蘭洲の飯村姉妹といへば、運動ファンなら知らぬ者もあるまい。本年十六歳の若さで、二百メートルの平泳では三分二十三秒といふ記錄を有し、ゲラチイ孃のもつ萬國大會記錄三分二十七秒六を見事に破つて、ムルレー孃の世界記錄三分二十秒に肉迫してゐるのはえらい。而もこれが僅々二年の練習によるといふから前途大いに有望。



飯村昌子さんの平泳

昌子さんの一家は、十餘年住みなれた蘭洲から浦和に轉住し、孃も巣鴨の文華女學校へ轉校されたが、脊もかなり高く、引締つた肉體、ほつそりした足と手、赤銅色の皮膚、見るからに水泳家らしい。不言實行をモットーとして大いに精進するといふから、ファンたるもの、刮目して待つべしである。

人見絹枝さん（陸上）

今に引替へる昔の苦難

人見さんは今日堂々たる世界的選手であるが、かくなる迄には涙ぐましい苦心がある。岡山高女では二年頃からテニスの選手になつたが、三年四年となるにつれ、お友達は嫁入の仕度をはじめてゐるのに、自分は一人女氣をはなれ、眞黑になつて練習に熱心してゐるのを母君が次第に氣にされるやうになり、長じて五尺四寸の大女となつた頃には、母君の心配は遂に怒りと變じ『テニスを止めてしまひなさい』と止められたが、どうしても好きなテニスが止められず、母の手前、歸つて來ても家にはいれず、一時間位勝手口でうろうろしてゐたこともあるといふ。故郷を出て二階堂塾へ入る時も、祖母はもとより母君も二人きりの姉妹を手離せず、頻りに反對をされたのだが、人見さんの熱心は、遂に之に打ちかつて、今日の大成を見るに至り、新聞に雜誌に寫眞を掲げられて賞讃の的となるのを見る家族の人達も、始め運動嫌ひであつたのが、今では何より好きとなつて、お父さんなど遙る遙る岡山から大阪まで見物に出掛ける熱心さだとは面白い。今度は見事走界新記錄を作つて、大いにわが日本國人の爲めに氣を吐いたは、此人なればこその感が深い。



人見孃の韋駄天振り

縄田尚門君（陸上）

犬は眞ッ平御免ねえ



縄田尚門君

今年早大を出て報知新聞に入つた縄田君は、中長距離では一時天下を風靡したものである。ところが近年は何を感じたか、とんと競技界へ顔を出さず、無言無道の裡に終つてしまつた。一度は早大競技部の主將もやり、趣味として撞球は百五十位突いた。

この人犬が大嫌ひで、有名な猛練習ぶりの最中でも、犬に出遇ふと、スピードがゆるんだり、又へビーを出して駈抜けるといふ程、犬は鬼門とあるから妙だ。その昔、早大へ入る前滿洲で百哩に優勝し、賞品を山と積んで車でエンヤラ運搬中、犬に追ひかけられて逃出したといふ噓の様な事實談もある。風貌成吉干に似るの故を以て一名をヂンギスカン。又の名をショーモンとよぶ。

腰本壽一君（野球）

お父つさんの嫌ひなもの



腰本壽一君

野球の神様で通つてゐる慶大野球部の監督腰本さんも、合宿所ではお父つさんでないと通りがわるい。頭もよければ技倆もいゝ上に、何をやつても現役選手よりは勝れてゐるといはれる。シーズンになると、雨の降る日も風の吹く日も、寡言で謹嚴そのものの様な顔をして、選手の練習を睨んでゐる。若い連中が合宿でワイワイ騒いでゐる時、氏が現れると、『それ、お父つさんが來た』とばかり、鬼の様な連中が水を打つたやうとは、利けたものである。

勝氣な押しの利く人で、かうと思つたら頭として押し通す力の人、撞球もやれば歌留多も上手、ランニングでも、水泳でも、人一倍達者、あゝ見えても小唄は玄人はだしだとは見かけによらない。大嫌ひなものは、モボにモガ、それにお世辭。

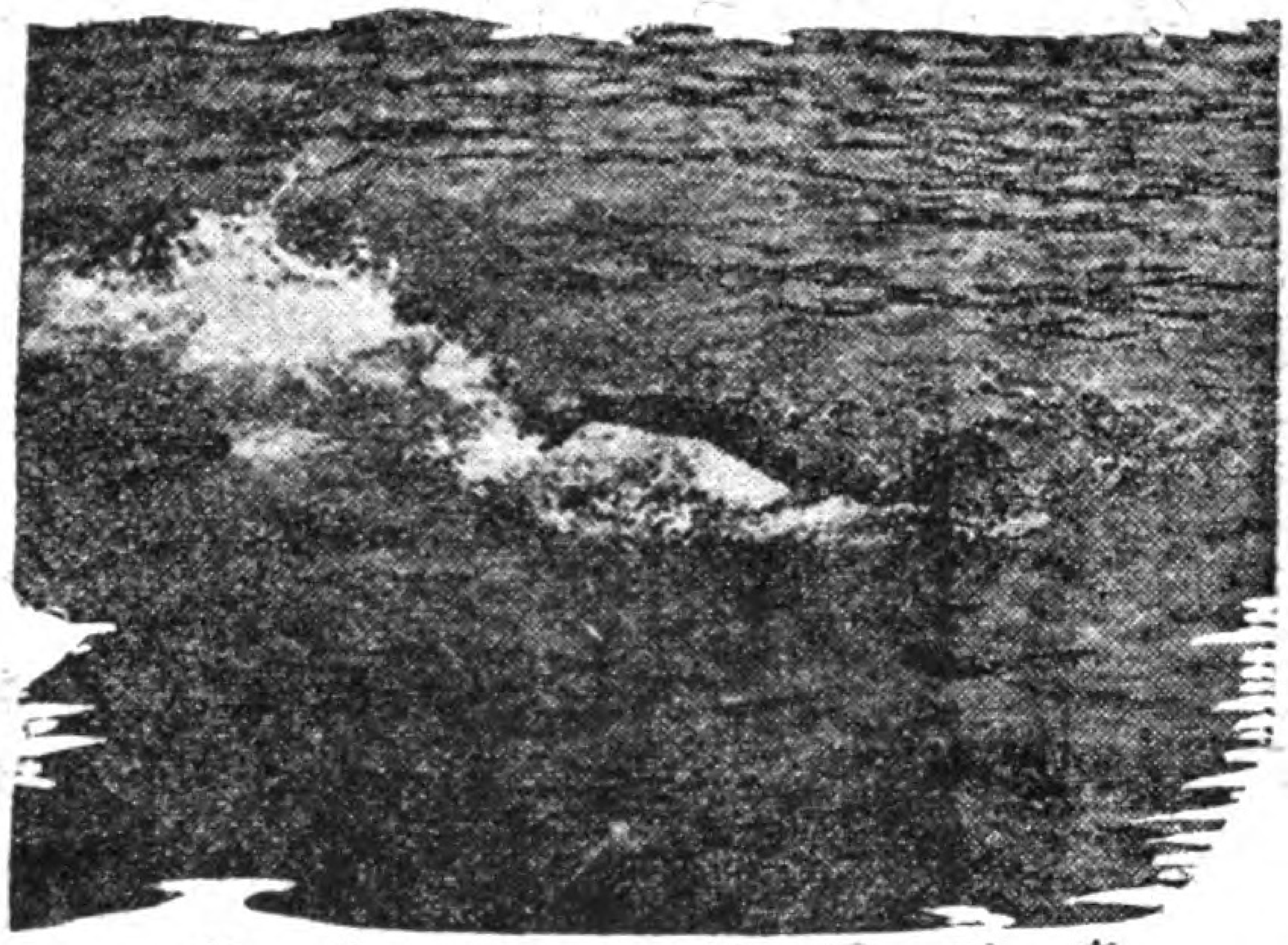
高石勝男君（水泳）

ポケット猿のにせもの

『そら伜がまた勝つた。寫眞が新聞に出た』に、その度近隣の人から祝辭をうけ、目出度い〳〵とばかりに、樽をぬいては祝酒を出すので、これが伜を學校へ遊學させる學資よりもかかると、いつぞや父君が苦笑されたといふ。

まだあと二年早大に籍があるから前途は安心して可なり。今年も世界の三羽烏ワイズミユラー（米）アルネボルグ（瑞）チヤールトン（濠）などと、技を爭うて世界人に汗を握らせてゐるは大したもの。

大選手の一人として、君も酒は一滴ものまぬ。一名をポケット猿とよばれ、白人選手間ではタツヤーで通つてゐる。最近自ら高石選手と名乘る僞者が横行してゐるといふが、いつぞや君が某所で食事をしてゐると、突然『貴君は高石選手によく似てゐますね』と、眞物を捉へてよく似てゐるには本人も驚いたといふ。寫眞の賣高が中學生や女學生の間に驚くばかりだといふのも、人氣の程が窺はれる。



高石勝男君の美技

喜多山君（テニス）

負けると三日位寢込む

慶大庭球部の花形で、見たところ温和しいにこ〳〵顔をして、勝つても負けてもたゞ試合を樂しむといつた、敵愾心など何處かへ置き忘れたやうに見える君も、實は非常の口惜しがりで、晴れの試合に負けでもしようものなら、ユニホームを着たまゝ隱れるやうに歸つて、三日位は寢込むといふ變り方。

君の今日ある、もとよりこの勝氣のたまものであらうが、級友達は試合毎にそれが心配で、一生懸命君の勝を祈つてゐるさうだ。



喜多山君

希くは、更に一層奮勵、我が庭球界の爲めに氣を吐いてほしい。

井口新次郎君（野球）

菊池寛氏の證明つき

『俺は野球が好きで、早稻田が昔から贔屓だ。俺の家のすぐ隣りに

井口君と源川君が下宿してゐて、うちの子供達とも仲よしだが、家の女中とも大の仲好しで、少々水でもさしたいくらゐだよ」と、いつか菊池寛氏が筆者に笑ひながら語られたことがある。あの和製ベーブルースを彷彿させる早大の主將花形大選手が、お隣りの女中さんとさへ仲好くするところ、何とそこにユーモアな温味があることよ。

十三四の頃から球を握り、和歌山中學をへて今日までの生涯、殆ど野球で日を明し暮して來たと、述懐する君も、來年の卒業を控へ、本年かぎりの活躍だが、春のシーズンには宿敵慶大の渡米で、聊か物足りぬと悲観してゐたのは尤も。



井口新次郎君の猛球振り

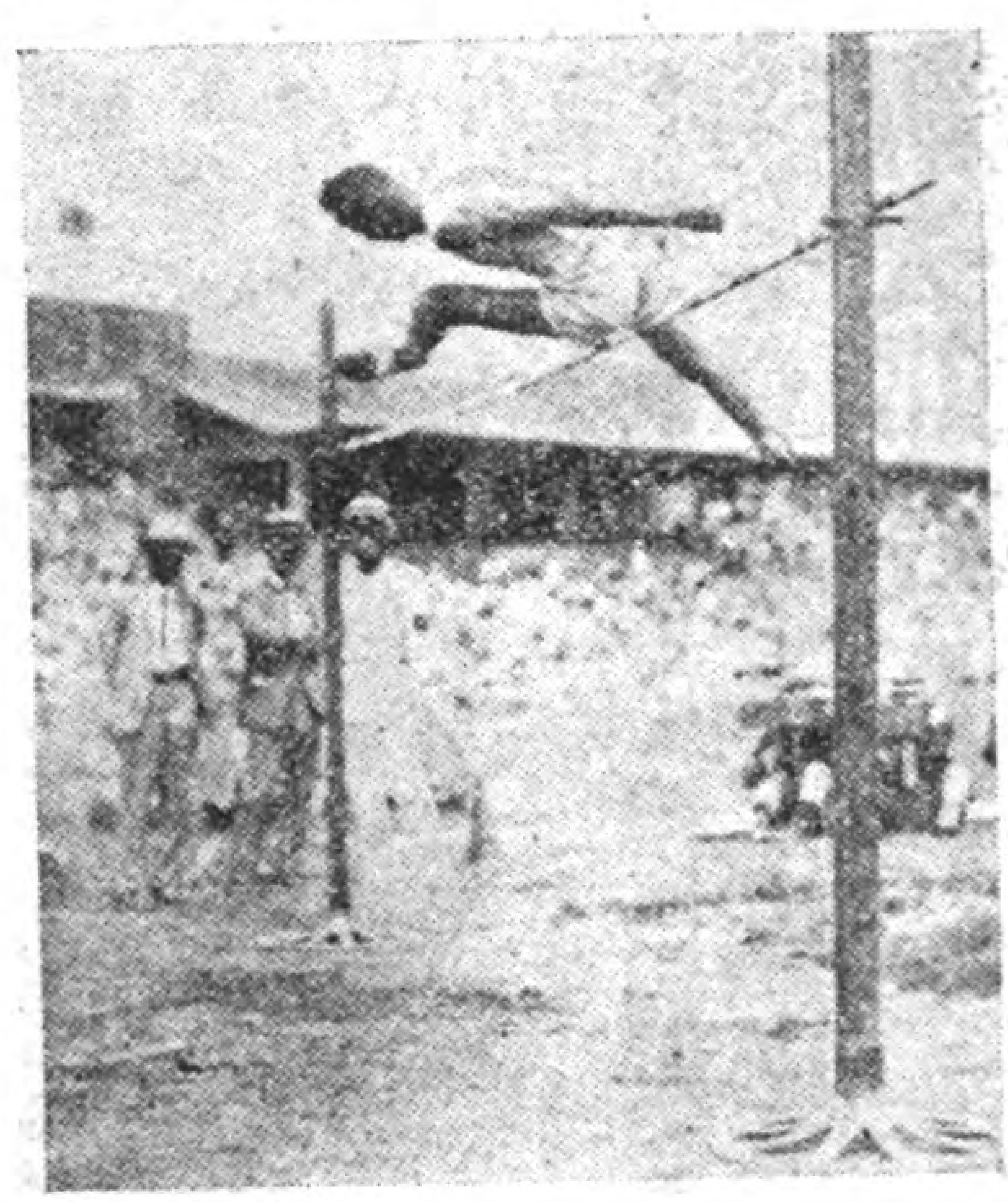
平岡進君（陸上）

大豪を封じた唯一人

織田選手が旭日昇天の勢で日本の競技界へ現れて以來、何人も織田君の前には太陽の前の星の如くであつたが、獨り平岡君あり、一九二四年の十月から昨年の五月迄、完全に織田君の走高跳を封じたものである。

大正十五年頃は、走高跳以外に百メートル、ローハードルに日本記錄をつくり、織田君に對する一方の雄として共に天下を二分し、早慶に別れて聳え立つたのも偉觀であつた。なかなかの好男子で、和服でゾロツとしようものなら、田舍役者そちのけ、强勇の選手だとは思へぬ若旦那ぶりである。この春、學校を出て、さつぱり顏を見せぬは淋しい。

ちとトラックへ顏を出して、後進のために指導の勞をとつてもらひたいものである。



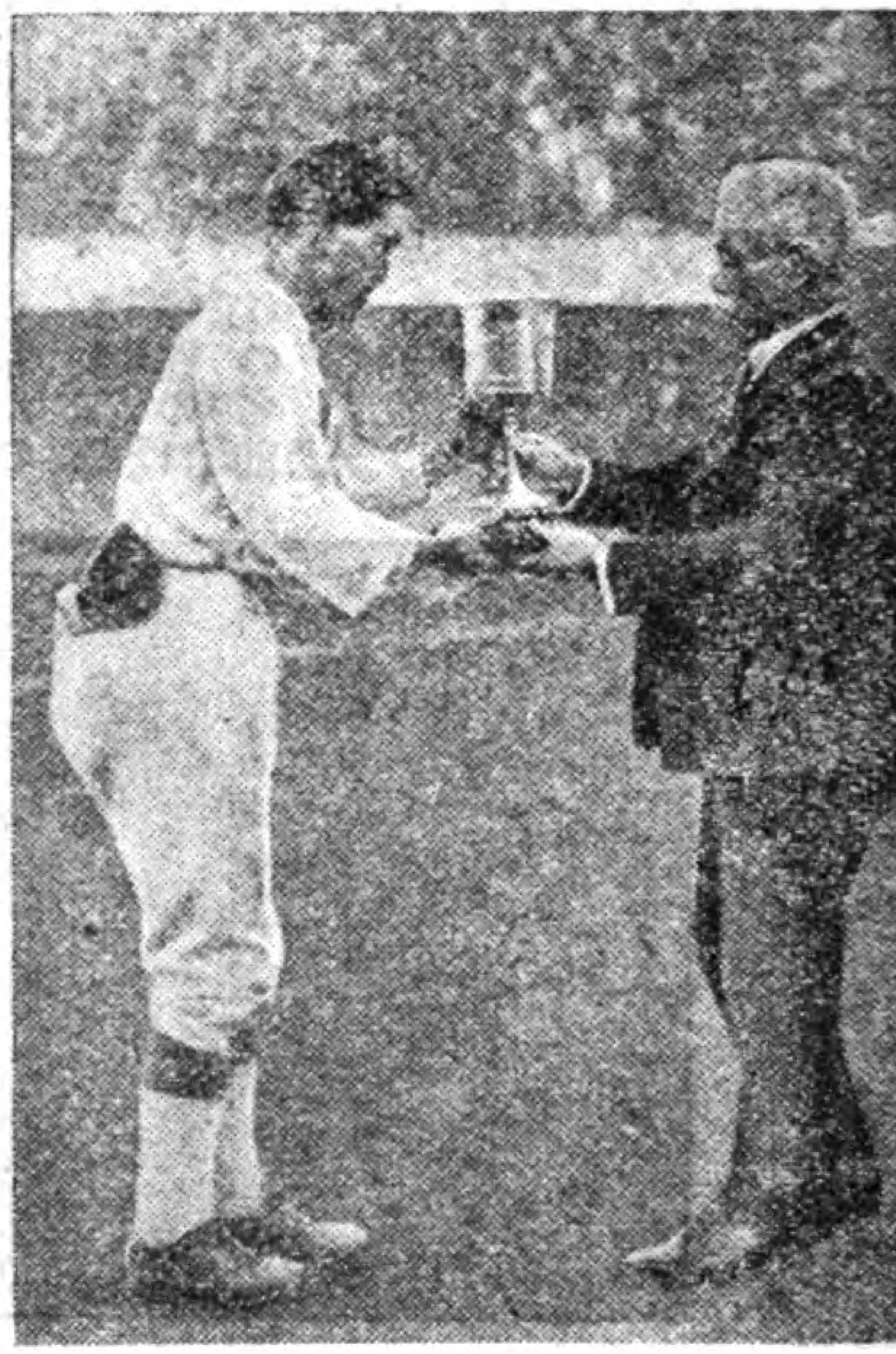
平岡進君の走高飛

林好雄君（野球）

ラヂオファンに氣を揉ます

昨年の慶明野球戰の折、街頭へ向けられたラヂオから、「只今までの所、明大押され氣味ですが、次のバッター林君、君の打擊がどういふ結果になりますか。全體の勝敗、君の双肩にかゝつてをりま

す』に、ラヂオファン、見えないばかりに耳を鋭らせ待つほどに



優勝杯を受くる林君

『デツトボール！　林君、頭部にデツトボールを受けました』と聞いて、アツ、林君死んでしまひはしないか……といふ心配顔を眺めた茶人『なアに完全に生きてゐるさ。一壘迄は大丈夫だ』で、笑の渦になつたといふ話がある。

林君は名遊撃手として、昨秋のリーグ戰には攝政賜杯を獲得した明大の主將、本年校門を辭したは、功なり名遂げたといふもの。

福田雅之助君（テニス）

またとない善良なパパさん

わが軟球時代に、不世出の名選手として、デ杯戰にまで出場し、今では東京日々新聞社に勤務し健筆を揮つてゐる。

既に福田君の時代は過ぎたといふ出過ぎ者もあつたが、昨年の全日本庭球選手權大會には素晴しい腕を見せて、依然福田君の強味を見せてゐる。

昨年、第二世が誕生、愛妻と共に手中の玉と慈しみ、善良なパパさん、との評判が高い。今から愛兒の教育貯金を積立ててゐるなどと云はれるが、このパパさん、女給のゐるカフエーへは斷じて出入をしないと云ふから、もし君が女給の前でビールでも飲んでゐるところを見つけた人があつたら、懸賞金を差上げますから、申出て下さい。



福田雅之助君のテニス

寺尾選手姉妹（陸上）

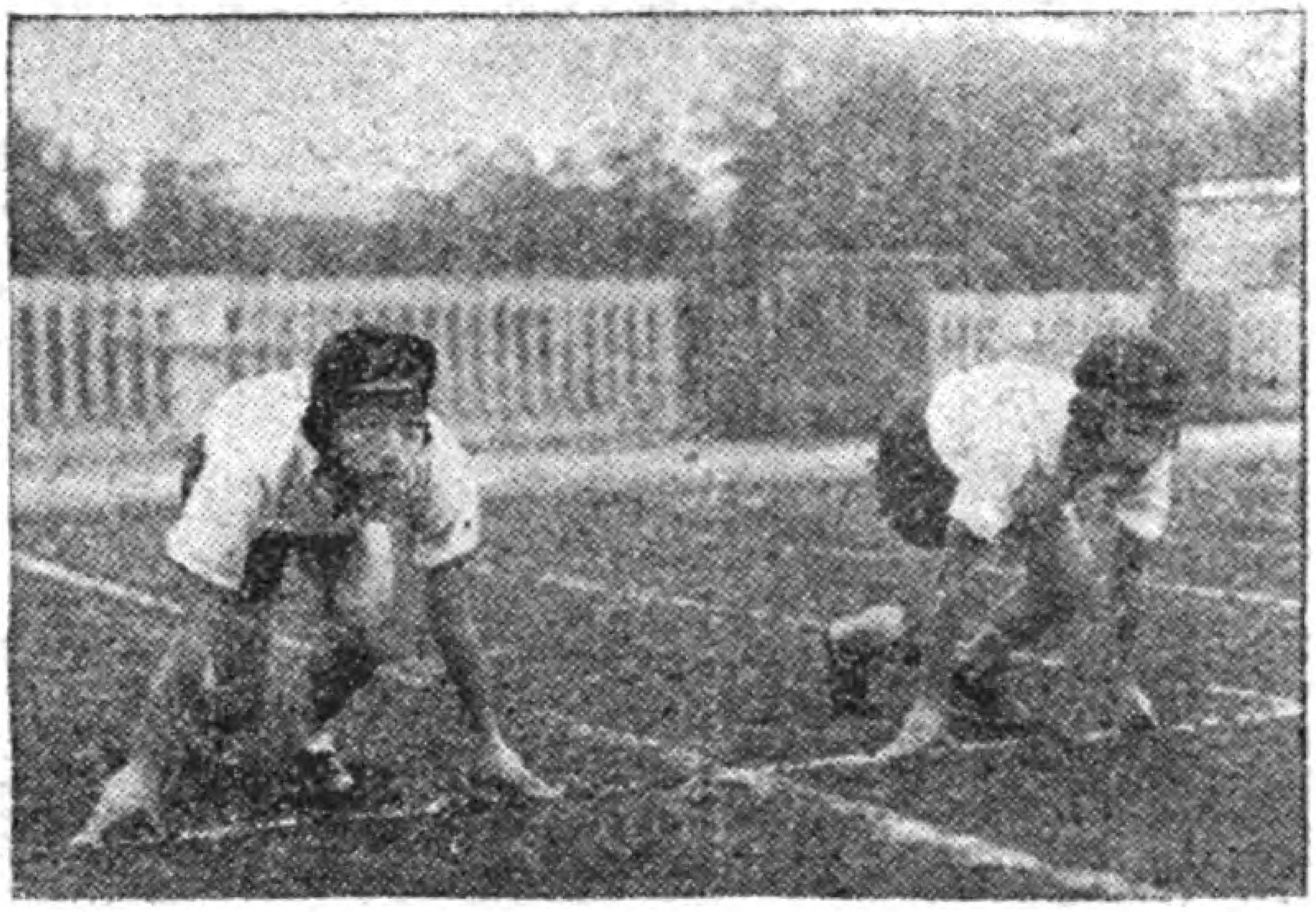
三つの大きな苦惱

競技界へ現れた當時から、今日迄、どちらが姉やら妹やら見馴れたファンにすら、見別けがつかない位瓜二つで双子とはいへよくも似たもの。

妹の文子さんが一昨年の神宮大會の百メートルで十三秒七だかを出し、當時の世界記錄を破つて以來、頓みにその名が喧傳され、人見さんの向ふを張つて、こゝ二三年、雜誌といふ雜誌の口繪などに寺尾姉妹の名前を見ない事のないほど人氣が出たものである。

それで競技會へ出るのに、三つの苦惱があつたといふが、その一つは競走に勝たねばならぬといふこと、次はトラックへ出ると寫眞班に襲はれるといふこと、それに勝つて歸ると自宅へ雜誌記者が押寄せるといふ事だとは、さもあらう。

これ程の人氣のある姉妹が、勝つたからとてこれ見よがしに何時までもフヰールドに止まつてゐないで、レースがすむと、逃げるやうに駈込んで、少しも誇る風がなかつたとは、人の氣づかない大きな美點であらう。



寺尾姉妹のスタート

沖田芳夫君（陸上）

腹とレコードが比例する

『肥つたね』『フフフ、、』『元氣かね』『フフフ、、』『何貫位あるね』『二十貫位あるだらう』ところが實際は二十四貫といふ肥滿ぶり。何を聞いても『フフフ、、』と腹の底で笑つてゐる所に彼の自信が潜んでゐる。腹が出ッ張るにつれてレコードが昇る。腹が凹めばレコードが降るといふ君の腹は、正にレコードのバロメーターである。見かけによらぬ優しい人で、酒煙草はもとより冷たいものといへば、西瓜さへ口にしないといふ攝生家である。

この秋こそ更にハンマーに圓盤に、多年の宿望を達する時であらう。現在早大の競技部主將で、なかなかの雄辯家。同郷の織田君とは大の仲好し。同じトラックで同じ様に練習を勵み、夜は同じ下宿で同じ様なトラックの夢を見てゐる。現在大學二年で、あと一年はある筈。



沖田芳夫君の圓盤投げ

浪花節と謠ひが名人、一名を狸腹、又牛ともよぶ。チャン料理が好物。

槇有恒君（山岳）

わが日本の誇る随一

日本山岳界のリーダーとして、世界的に活躍してゐる登山王槇氏は、大正十年、アルプスの未踏峯アイガーを踏破して以來、一躍世界に雷名を轟かせたが、畏くも秩父宮殿下には幾度かお伴をして、東道の役をつとめ、スポーツマンとしての殿下を世界に御紹介申上げた同氏の最近の思出としては、大正十四年、遠く米國に遠征して『恐怖の山アルバータ』の嶮峻を征服し、歐米山岳家に先鞭をつけたなどは溜飲が下がる。

あの五尺一二寸の小軀で、日本が世界に誇る登山家とは思へぬ位。世界の最高峰ヒマラヤは登山界の謎とされてゐるが、果して何人が征服するか。前途多望な我が山岳界も氏に期待するところ頗る大きいものがある。



スキーの姿　槇有恒君

染谷貞子さん（陸上）

大人も及ばぬ小學選手

寺尾姉妹引退の聲を耳にする時、東京中野の桃園小學校に立派な後繼者の現れた事は頼もしい。昨年の春、奈良縣の美吉野グラウンドまで遠征し、日本女子オリンピック大會で、五十メートルに七秒といふ女子一流選手でさへ難しとする學童レコードをつくつて、大いに名聲を博した貞子さんは、今、川村女學院だかに在學してゐる。

ある日、染谷さんの實力を知らないで、高が子供と侮り、最初はハンデイキャップで出たが、最後には同じスタートを切り、それでも勝てず、あとでそれと聞いて目をまはした大學選手があるといふ痛快な話が傳へられてゐるが、人見孃の後繼者として大いに他日を期待させる。

希くば善き指導者を得て、わが女子競技界のためにその活躍を望んで已まない。―了―



向つて左端染谷貞子さん
昭和二年五月大會當時の記念寫眞です

學界異聞

三崎の熊さん

理學博士　大島正満

○日本のロビアンコ

伊太利ナポリの臨海實驗所にはロビアンコと云ふ老人が諸國の學者達を煙にまいてゐると云ふが、油壺の東大臨海實驗所には、開所以來四十年、來る學生どもに『海の生き字引』とあがめられてゐる今年六十五歳の三崎の熊さんこと青木熊吉が、今猶矍鑠として忠勤をぬきんでてゐる。

いつのことであつたか、魚くさい三崎の町に熊さんの宅を訪ねて、門前の軒燈に動物商と書いてあるのを見た。動物商とは海産動物標本商と云ふ意味である。日本の海産動物を手にしたい外國の學者達から、註文の手紙が何通となく來るほど、動物商青木熊吉の名は斯界の天下に鳴り響いてゐる。その熊さんが時折横文字の手紙を持つて來る。そして、『返事をやるべえと思ふから、用向を見てくらつせえ』と頼みに來るが、ラテン語の動物學名をスラ〱と吐き出す奇態な能力を持ちながら、片假名以外はまるで知らない明き盲である。はだ身離さぬ帳面の表紙には「オボ丁」と書いてある。これは覺え帖の意味であるとのことである。

○熊さんの生ひ立ち

今から約四十年前、三崎町のかたほとりに臨海實驗所の前身が建つた。それを興味深い眼をかゞやかし乍ら、のぞきに來る利口さうな青年漁夫があつた。率直な性質と、無學ながらも研究心に燃えてゐる態度とが、我國動物學界の大元老達に認められた。そして大學專任の採集夫を拜命したが、何しろ世界の大學者箕作、飯島兩博士に指導されたのであるから、物識りになるのが當然である。且つ又實物につき最初から學名で仕込まれたので、神戸あたりの車夫の英語と同樣、書いたり讀んだりすることは出來ないが、頭の中にはすべてが織り込まれてある。かうして名物熊さんが出來上つた。

現今世に行はれて居る海産動物の和名で、熊さんの命名したものがどれ程澤山あるか、こゝに一寸擧げきれぬ。海底からあんぱんのやうな形の海膽を拾ひあげて、『章魚が枕にして寢るものだんべえよ』と云つたのが動機で、其動物には『たこのまくら』と云ふ名が與へられた。棘皮動物中の『すかしかしばん』『ゆめなまこ』の類凡て熊さんの第一印象が其名となつて現はれて居るのであるが、相模灘の動物で熊さんの頭に疊み込まれて居ないものは殆ど無いといつてよい。

○機智に富む

或る夏のことであつた。水族館に入れようと思つて、「ブダヒ」と云ふ魚を漁船

から運びあげて居る最中、彌次で有名な一人の學生が波止場へやつて來た。

『オイ熊さん、ブダヒとはどう云ふわけだらう』

『さうよなア。ブとは一體悪いと云ふことだよ。不行儀、不作法、ぶざまと云ふやうに、まあ良いことではねえな。お前なんか人間の中でも「ぶをとこ」だんべえ。これは鯛の不恰好な奴だからブダヒだアね』眼をしばだたきながら、熊さんの放つた巨砲に、さすがの學生も美事打ちとめられた。

新米の學生が、滿潮時にボートをしつかとしばりつけて置くのを見た熊さん、

『夜なかにボートが首をつるぞ!』

と、どなつて居るのを度々聞くが、潮のひいた朝早く埠頭に來て見ると、なるほど水に從うて移動することの出來ないボートが、杜を抱いて直立して居るのを見る。


(上圖 三崎の熊さん 下圖 臨海實驗所の朝)

『綱を延ばして舟をつなぐことを知らねえ奴は素人だ』

と、熊さんは述懐するが、新しい學生は一二回必ずボートの首つりをやつて熊さんの教を受ける。

○鶴と龜

日本に來て見ると、どこへ行つても鶴と龜とが置いてあるので、或るアメリカの學者が、この二つの動物は夫婦だらうと鑑定をつけた。そこで鶴と龜とを土産に買つて歸つたが、アメリカへ行つてみると、どうも夫婦仲がよくない。そこで鶴が氣をくさらし、

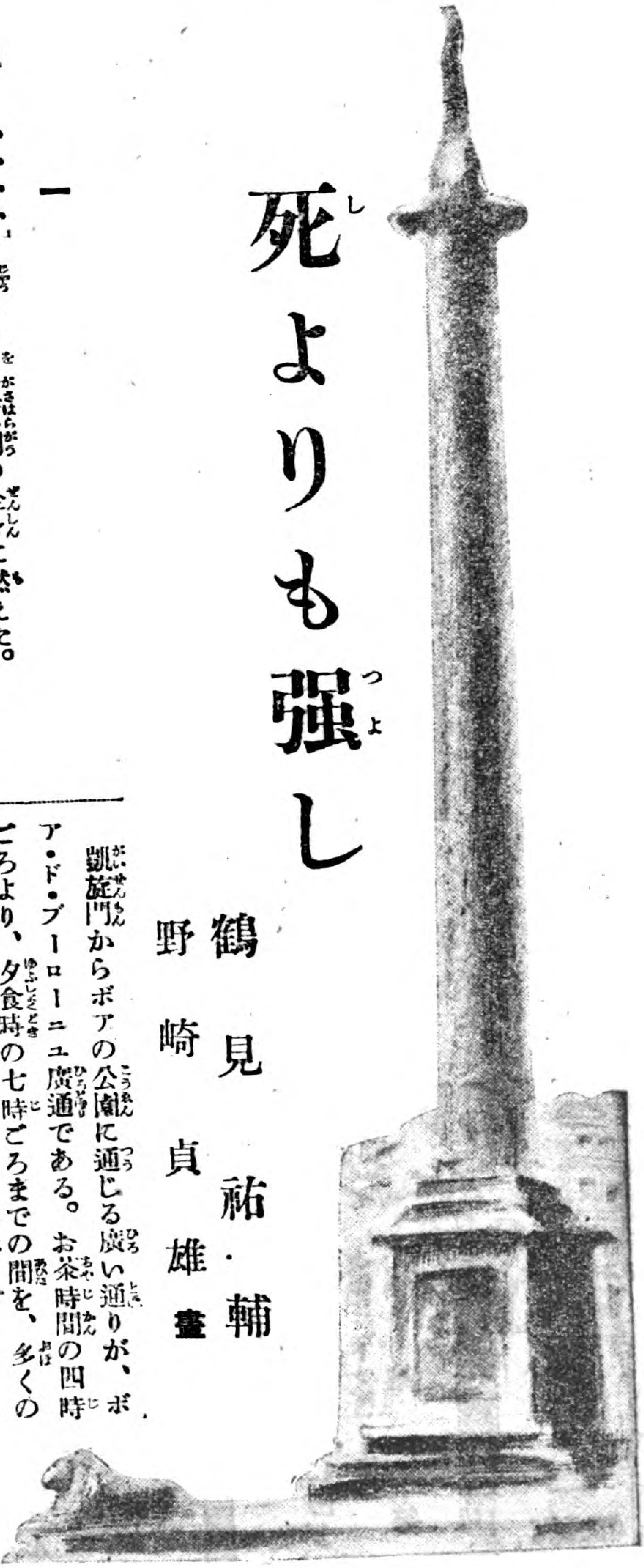
『龜さん龜さん、わしの脚や頸の長いのがいやか』と尋ねたら、

『いゝや、何もいやではござんせん。然し昔から譬にいふじやアねえか。鶴は千年龜は萬年と。わたしやアメリカで九千年の後家を通すのがいやでござんす』

と、龜が云つたとよ——と、熊さんは自作の落し噺にまじめな聽者を煙にまく。酒は飮まず、煙草は吸はず、飄々乎としたところにこの男の味がある。

死よりも強し

鶴見祐輔
野崎貞雄畫



一

激しいあくがれの情が、小笠原剛の全身に燃えた。今まで知らなかつたやうな官能の世界が、彼の心内に眼覺めたのである。夜は香煙のうちに泳ぐやうな心地よさ、晝は夢みるごとき陶醉の感覺、朝早く眼ざめて一浴すればホト〱と扉を叩いて訪ふ給仕人の運ぶ土耳古珈琲の芳香。晝は薄明りの電燈のともる地下室の食堂に、歩み入るときの期待。彼は時折、中江先生の眼を掠めて、四時のお茶に、シロリツツに出驅けた。さうして、片隅の卓に倚つて、夢見るごとく周圍の光景を眺めつゝ、淡桃色の紅茶を啜つた。

さうして彼はボア・ド・ブーローニュの公園に馬車を驅つた。

凱旋門からボアの公園に通じる廣い通りが、ボア・ド・ブーローニュ廣通である。お茶時間の四時ごろより、夕食時の七時ごろまでの間を、多くの婦人たちが、輕羅に身を裹んで馬車を驅り、または悠々と散歩してゐた。その廣通の兩側には、芝生と花園とを前庭として、多くの由緒ゆかしき家々が立ち並んでゐる。その少しく廣通りより入りたる閑寂な一角に、一代の文豪アナトル・フランスが住んでゐたのだ。さうして、人道と人家との間の芝生の上には、大きい樫の樹や、栗の樹が立つてゐた。みんな大奈破崙の榮華を見たことのある樹々である。

この廣通りをすぎて、ボアの公園に入る。自然のまゝの亭々たる森林のうちに、細徑、小徑、而して大

路。池あり、溪流あり、旗亭あり、芝生あり、屋外劇場の芝生舞臺あり、馬車を驅れば、光景倏忽として移る。池上に白鳥あり、悠々として遊ぶ。池中の小丘に旗亭あり、瑞西山莊の野趣を湛へて客を招く。客は細徑を下り、渡船により白鳥の間を縫つて島にゆく。どこまでも巴里の味である。

森林つくるところ眼界頓に開けて廣濶なる芝生を見る。ロンシャンの競馬場である。初夏新綠の交、競馬の開かるゝ折は、歐洲の貴紳淑女が、衣裳に贅を凝らしての見物。世界婦人の流行、このところに淵源すと謳はれる。

さらに歩をかへして林間に入れば、鬱蒼とした古樹のうちに、白堊の家、丈餘の一枚硝子の窓に圍まるゝがプレ・カトランの料理店である。春より夏にかけて、巴里の粹人このところに集る。夜は林間に彩燈をかけつらね、芝生に椅子を出し、三鞭酒の盃を揚げて屋外劇を觀る。

小笠原剛は、半ば夢のごとく、ボアの公園を歩いた。

併、巴里の公園のうちにもとりわけ美しきは、いとさゝやかなるモンソー公園である。庭はその昔、佛蘭西革命史中の人物オルレアン公の私邸、今は庶民に開かるゝ公園である。ゆるやかに起伏する芝生の園の上に、亭々たる大樹點在し、處々に埃及の方尖碑と古代希臘の圓柱を立て、ゆるやかなる細流をあしらひ、遠く生垣をもつて限る。小鳥あまた來りて芝生に食を求め、時に行人の肩に踞して恐るゝの色なし。

剛は陶然として、その光景に見とれた。

彼はベンチの上に腰を下して、何時間も、何時間もこの情調に陶醉してゐた。

彼はバルザックの立像のある小路を横ぎりながら、ユーゴーの小說ミゼラーブルに憶えある街々の名を懷かしんだ。ヴェルレーンが詩を書いた珈琲店はどこだらう。さう思ひながら彼は、モンマルトルを逍遙ひ歩いた。

彼はオペラの前の廣通が氣に入つた。

彼は町角の珈琲店の街路椅子の一つに腰を下して、一法の珈琲代を拂つたまゝ、一時間も二時間も、往さ來るさの人通りを眺めてゐた。料理店の前の舖装人道の上に二列三列の椅子を並べて、白い人造石の簡素な小卓を配し、上に赤と白の段だらの天幕を張つて日を遮り客を待つのが、巴里名物の街路椅子だ。

さうして、その前を全世界が通るのだ。

ぴつたり身についた背廣姿の英吉利人、身なりかまはぬ佛蘭西の美術家、薄化粧帽子眞深かの女、印度人、土耳古人、米國人、而してブラジルの大地主。五大洲の人が走馬燈のやうに、街路椅子に憩ふ遊子の面前を通りすぎてゆく。

剛はうつとりとして、その光景を見てゐた。

さうして、二十二才の彼の胸のうちに、ある淡い悅びが一杯であつた。

それは、いつ何時、戀が自分の眼の前を通るかも知れないといふ漠然とした期待である。

結婚前の若い彼は、ロマンチシズムの眼鏡を掛けて、大きい世界を眺めてゐた。それは日本の窮屈な社會に於て眠つてゐたのが、巴里といふ官能の都に於て、俄然として彼の意識の世界に甦へつてきたのだ。

その町角のどこかゝら、突然として彼の求めてゐる彼女が現はれて來るのではあるまいか。

彼は、はつとして、周圍を見廻した。

二

『かういふ電報が、只今參りました』

さう言つて、若い外交官補の蒲生健が、一通の電報を中江眞人に手渡しゝた。

『はあ、日本から來たんですね』

と、眞人は電報の紙を見ながら言つた。

日本といふ聲をきくと、今まで小聲に話してゐた小早川輝男と小笠原剛が、はたりと話をやめて、聞き耳を立てた。

それは、ある日の午後、中江眞人の應接間で、午後のお茶を飲みながら、三人が閑談してゐた折である。

『どうぞ、お掛けなさい』

さう言つて中江先生は、蒲生に腰を掛けさせてから、すらりと封を切つて、電報を讀み出した。

『ふーむ、ふーむ』

と言つて、讀終つた眞人の面上には、抑へ難き愁色が溢れた。

輝男と剛とは、薄氣味惡い豫感を抱きながら、先生の言葉を待つてゐた。

『道子さんからだよ。兄にも告げよ、とあるから、小早川君これを讀んで見給へ』

さう言つて眞人は、靜かに電報を小早川に渡した。

さりげなく手に取つて電報を讀むと、小早川の顏がさつと變つた。

『綾子さんが、肺炎で危篤なんですね』

彼はたゞ一言さう言つた。

彼は眞蒼になつてゐた。

彼の手から電報を受け取つて、今度は剛が讀み出した。

『綾子肺炎に罹り、容體惡し。本人の希望により、お知らせす。兄にも傳へて。道子』

と書いてあつた。發信所は東京である。

『困つたね』

先生はたゞ一口さう言つた。

三人はそれから、默つてゐた。

と、蒲生が、

『それでは、私はこれで御免を蒙ります』

と言つて、座を外した。

蒲生を戸口まで送り出して歸つてきた小早川は、元の椅子に腰を下さうともしないで、默つて窓際に往つて立つた。彼は見るともなく、遙か彼方を流れてゐるセーヌ河をぼんやり眺めて

ゐた。

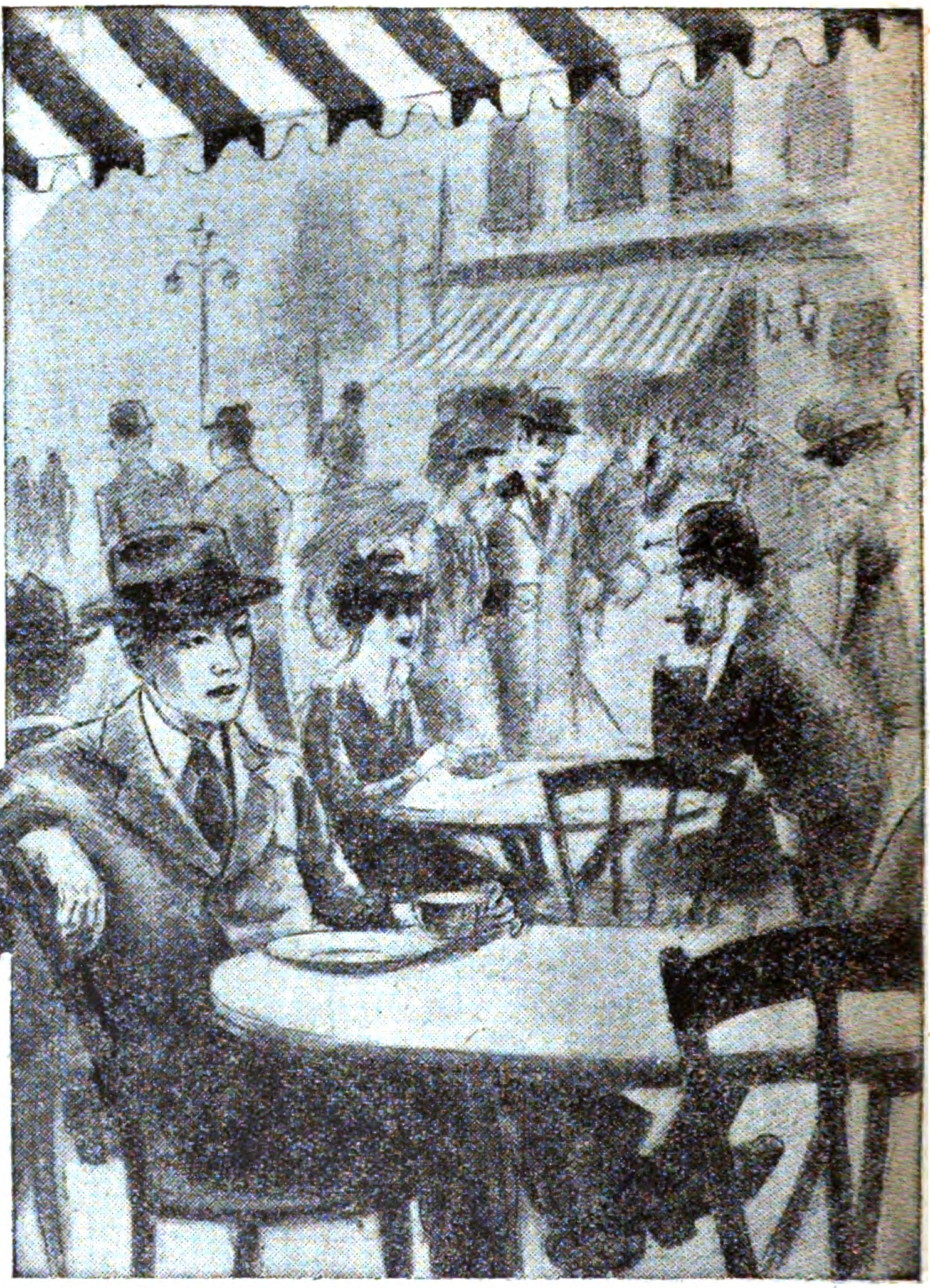
二人は黙つて、別々のことを考へてゐたのだ

『先生、私は一寸、失敬します』

さう言つて剛は、あわてゝ部屋を出ていつた。

彼は米國にゐる吉川のことを考へたのだ。彼女の訃音を受けるときの吉川の胸中を考へたのだ。一本氣の吉川が、思ひ切らう、思ひ切らうと踠きつゝ、北米の客舎でどんなに惱んでゐるかを知つてゐた剛は、一度彼女の訃音に接するときの彼の胸中を推し測つて、思はず不覺の涙が眼に迫つてくることを感じたのだ。それを、人に見られまいとして彼はあわてゝ自分の部屋に歸つたのだ。

部屋に入ると彼は、寢臺の上に倒れて、友人吉川を思うて泣いた。



部屋に殘された二人は、暫く黙つてゐた。

『先生、お見舞の電報を、お打ちになりますか』

流石に永く外交官の生活をしてゐた小早川は、抑へるやうな聲で靜かにさう言つた。

『ふむ。出さう。出しませう。……待つてゐるのだ。きつと待つてゐるのだよ、君』

さう言つたかと思ふと、眞人の双眼から、はら〳〵と、涙が落ちた。

『綾子はきつと、僕たちの返事を待つてゐるのだ』
『えつ？』
と、小早川がびつくりして訊きかへした。
『さうだ、二人で返電を打つてやりませう』
眞人は、誰にいふ



ともなし言つて、またすぐ、
『惜しい。實に惜しい。今死なせるのは惜しい』
さう言つて彼は、がばと机に突つ伏した。彼は男泣きに泣いてゐるのだ、丁度、自分の愛兒の臨終を見る父親のやうに。
泣くことも出來

ないやうな悲壯な感じが、小早川輝男の胸の中に、大きい石のやうに腰を下ろした。

　彼は全身が冷たくなることを感じた。あの聰明な美しい存在が、いま地上から奪はれてゆくのだ、といふ感じが、彼の頭の中に荒れ狂つた。戀人といふ個人的對象たるには、あまりに氣高い高尚な存在として、彼は綾子を眺めてゐたのだ。その淸醇なる存在が――古代希臘の大理石像のやうな姿が――いま地上を去らうとしてゐるのだ。

　さうして彼は、激しく胸の痛むことを感じた。

『もう二度と會へないのだ』

　さういふ聲が耳に聞えたときに彼は、急に兩方の足のひだるくなることを感じた。彼は立つてゐられないやうな氣がした。彼は、ばたりと椅子に倒れるやうに腰を下すと、そのまゝぢつと坐つてゐた。

　暫らくして、中江先生は、机から顏をあげて

『しかし、仕方がない。さぞ返事を待つてゐるだらうから、すぐ君、電報を打つてやつてくれ給へ』

と言つた。さうして、先生は口授した。

『精神力をもつて病を克服せよ。我々兩人は、巴里の空にて、おん身の全快を、神に祈つて居る。中江眞人、小早川輝男』

『さうして、宛名は直接綾子にするんだよ』

『だつて先生、僕の名も入れるんですか？』

『勿論さ。あの道子さんの電報を見給へ。兄に傳へて、とあるぢやないか。あれは綾子が言つてゐるんだ。道子が言つてゐるんぢやない。綾子は、僕と君と二人にこの世のお暇乞ひをしてゐるんだ』

『…………』

輝男は眞蒼になつた。

三

綾子大病の電報が、一行の心を暗くした。

三人は別々の心持ちから、次の電報を恐れた。

それで眞人の用事がすむと、すぐ倫敦にむけて立つことに決めた。それから二日して、眞人は佛蘭西の名外相デルカッセとの會見を片附けて、翌くる日、巴里を發つた。

巴里からカレーにゆく鐵路は、沿道の風色掬すべきものがある。四五哩彼方に起伏する丘陵の上に、心持ち斜にかしいで並び立つてゐる樹々の姿は、佛蘭西でなければ見られない情調だ。初夏麥圃の畔をゆく田舍娘の風情などは、成る程ミレーの出た國だと合點かせる。

　しかし、さういふ風趣すら、三人の眼には入らなかつた。彼等は綾子の危篤で胸が一杯であつた。萬里客遊して故山の人の

急病の報を得る位、遊子にとつて傷心なものはない。況んやそれはたゞの他人ではない。運命の色絲が、別々の形で此等三人の男を此の病める乙女に結び附けてゐたのだ。

　カレーから小さい蒸汽船に乘つて、彼等は英佛海峽を渡つた。僅か二十二哩の海の彼方は、佛蘭西岸からでも晴れたる日には見渡される。曾て大奈破崙が、ブーローニュに、二十萬の大兵を屯さして、渡海の機を窺つた當時の英國人の心中が想像される。よくこの狹い海峽一つで千年の間も歐洲大陸の敵を防ぎ止めてゐたものだ。

　この海峽名物の荒波に搖らるゝこと三十分にして、對岸英國の白い崖が見える。錫の島として古代の船人に知られた名殘の白い崖だ。一時間四十五分程して、船はドーヴアーの埠頭に停まる。

『そーら、英吉利だよ！』

と、流石に中江眞人は懷しさうに、剛に呼びかけた。

『シーザーの轉んだ英吉利の岸ですね』

と、剛がうれし相に言つた。

『君もころんで見るかね』

と、先生が笑はれた。

『シーザーのやうに偉くなれるのなら、轉んでもいゝですね、アハヽヽヽハ』

と、剛が大きい聲を出して笑つたので、近所の人が一齊にこつちを見た。

『小笠原君、英吉利人は氣むづかし屋が多いから、あんまり高笑ひすると、近處の人がしかめつ顏をするよ』

と、輝男が笑ひながら注意した。

『ほい、シーザー以上の失策だ』

と、剛が小聲で言つたので、今度は中江先生が、

『ハヽヽヽヽハ』

と笑つて、氣が付いて、

『鄕に入つては、鄕に從へか。それでは暫らく、英國紳士のおつき合ひをするかね』

と、附け加へた。

埠頭に船と相對してゐる汽車のなかへ、三人はどや〳〵と入つた。

　間もなく列車は、漠々とこの停車場を走り出して、平坦な野原を進んでいつた。

　冬も芝生の青い英吉利である。初冬の日の下に、青草が一杯生ひ茂つてゐる。さうして、英吉利へ入つて一番早く眼につくものは、ゆつたりと幸福さうに草を喰むでゐる牛と羊と馬との群である。

　ある獨逸の文明批評家が、『英國人は、動物として一番完全な人間であり、從つて動物を取扱ふに妙を得てゐる』と言つたやうに、英國に初めて旅する者は、動物の樂しげな生活に眼を奪かれる。

　さうして、青い野原の上に、きつと英國名物の楡の木が立つ

てゐる。一樹よく森を爲すやうな威容を備へた樫の木が、どつしりと青草の原の眞中に立つてゐる。

『先生、英吉利と佛蘭西とは、木も違ふやうですね』

と、剛がだしぬけに言つた。

『さうだよ。僕も英佛海峽を渡る度にさう思ふんだよ。英吉利の木は、數が少くてどつしりしてゐる。佛蘭西の木は潤澤で輕快だ。それがすぐ國民性の上にも現はれてゐるやうな氣がする。矢張り、居は氣を移すで、住んでゐる風光が人心に影響するのかも知れないね』

と、先生が言つた。

『それで、先生はどつちが、お好きですか』

と、小早川輝男が、横から聞いた。

『さうね、一概にも言へないけれど、日本人はその性格から言つて、英吉利人が好きなんだらうね。よく、世間では佛蘭西人と日本人を似てゐるやうに云ふが、僕はさう思はないね。日本人は英吉利人に似てゐる。



例へば、英吉利人は、重厚で、沈着で、理智的で無表情だらう。そこは日本人そつくりだね。佛蘭西人は俊敏で、直觀的で、天才的だらう。日本人

にはさういふ處は少ないね。英國人は打算的で、佛蘭西人は直情徑行の名人肌だ。日本人は名人肌のところが少ないね。それから英國人は人種といふ觀念が非常に強いね。こゝらが、日本人と大そう似てゐる。佛蘭西人には個性が縱横無盡に伸びてゐる。とても、日本人にはこの一點は解らない。日本人は個性を矯めて暮してきた國民だからね』

『しかし、日本人は藝術的でせう？』

と、剛が抗議した。

『さうね。日本人は藝術を鑑賞し味はふ力はあるね。しかし、外の一切のものを捨てゝ藝術に沒頭し邁進する氣持があるだらうか。我々はいつも、世間といふものを顧慮して、功利的た打算をしてはゐないだらうか。あるところで、立ち止つてはゐないだらうか。つまり低徊趣味といつたやうなディレッタントな氣持が、國民性のうちに行き渡つてはゐないだらうか』

『しかし先生、それは藝術に限らないではないでせうか』

と、今度は輝男が言つた。

『うん、それはさうだ。我々は餘程氣を付けないと、國民として、不徹底なところがあるね。國民全體がディレッタントになつては困るからね』

『紳士方は、お茶は要りませんか？』

さういふ聲が、頭の上でした。

三人が見上げると、丈の高い給仕人が、白い制服をきて廊下の戸口に立つてゐる。

『お茶にしようか』

と、先生が二人に聞いて、

『三人分のお茶を』

と、注文した。

『それではこちらへ』

そこで三人は、案内されて、食堂車に往つた。

『英吉利に來たね』

さう言つて先生は輝男を顧みて笑つた。

『どうしてゞすか？』

と、剛が訊いた。

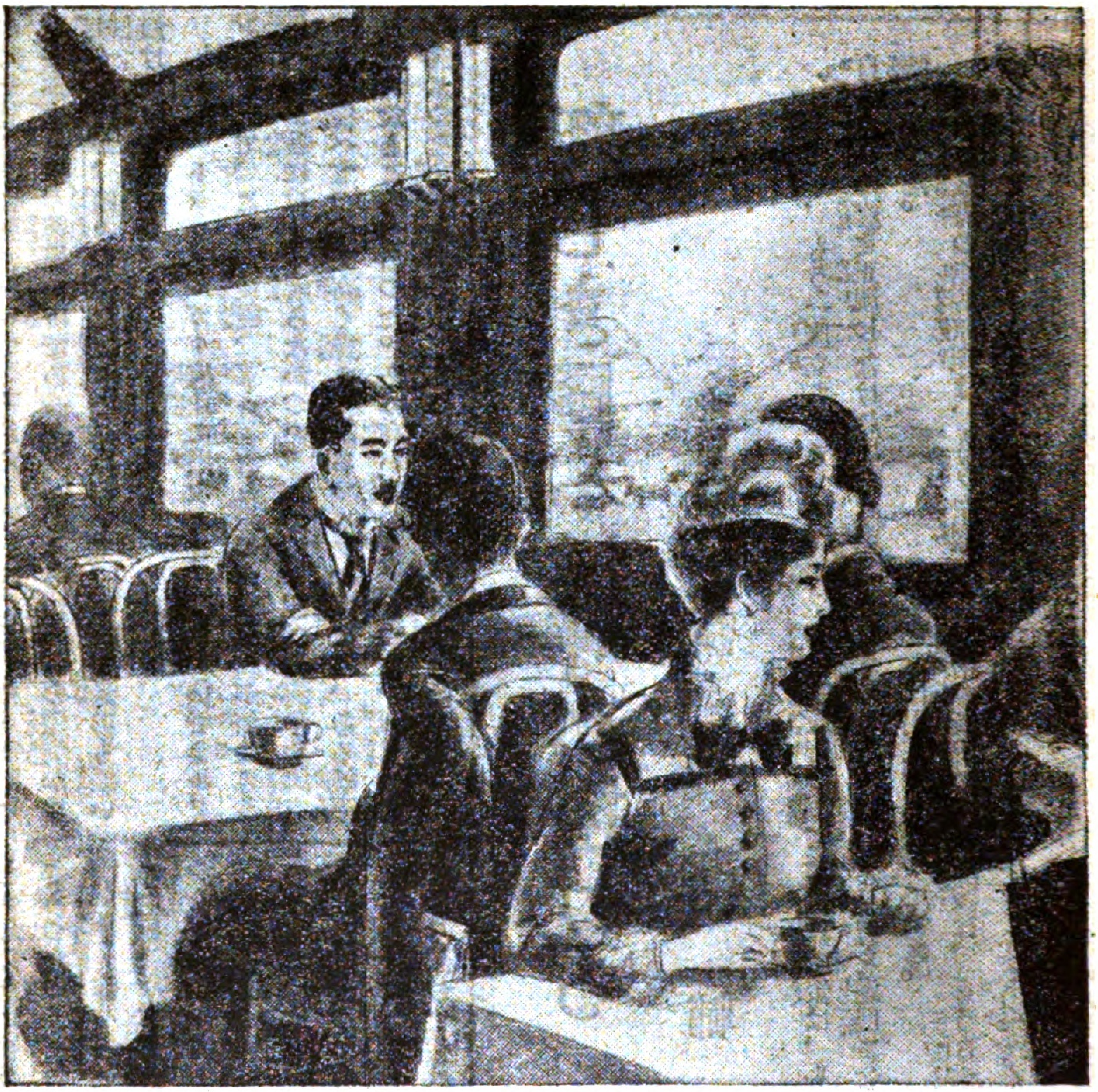
『だつて、お茶さ』

といつて、

『英吉利人は五時のお茶は、何を置いても飮まないと承知しないんだからね。

可笑しなことがあつたよ。この前倫敦に居たとき、馬車を傭つておいたんだね。ところが、日本流に忙しく不規則に使ひたてたところが、ある日馭者がね、きのふは五時のお茶を喰べなかつた、とえらい不平なんだね。成程と感心したね。我我はお茶なんか眼中にないんだが、馭者でも、五時にはちやんとお茶を一杯飮まないと、人間の氣がしないんだね。實にをかしなところのある國民だね』

先生は、それからそれへと話しをした



さうして、薄暮倫敦につくまで、先生の話は滾々として盡きなかつた。それは先生が、默つてゐると綾子の病氣が氣になるので、自分自身をまぎらす爲の努力であつたのだと、後になつて剛は氣がついた。

四

大きい都に入るのは、灯ともしごろに限る。眞晝はあまりに光強くして興味落莫、深夜はあまりに寂しい。白光既に落ちつくして、やうやく夜の燈火のちらほら輝き出づるころほひは、一日の勞役に疲れたる人は、夕餉の樂しみに心和み、家々は主人の歸りを待ちて粧ひを凝らしてゐる。芝居も、ホテルも、料理店も、一樣に赤々と闇のうちに浮み上つてゐる。さうして暗い町の上に、高い寺院の塔が、ぼんやりと聳えてゐる。

チヤーリング・クロスの停車場で車を捨てた三人は、荷物札のない自分達の手荷物を搜し出して、馬車に積んで、公使館から出迎の人々と共にさてと旅宿に向つた。

剛は馬車の窓から、眼を見張つて、倫敦

の町を見た。巴里と較べて、それは薄暗い町であつた。薄暗いといふよりは、薄黒い町であつた。霧のうちに幾萬の煙突から吐く黒煙が、家々の壁を黒々と染めぬいて、電燈の光にも黒い煤けた町であつた。

しかし、トラファルガー廣辻に出たとき、彼は仰いでネルソン像を見て、これが成程、英吉利だと思つた。それが何故さう思へたか彼にはよく解らなかつた。しかし、四頭の獅子を脚臺の下に從へて、半天高く聳えてゐるネルソン像には、ある雄渾な壯快なところがあつた。あの高い臺の上に立つて、斷雲の掠め飛ぶのをきつと、見上げてゐるネルソンの風貌には、人を人とも思はないやうな英吉利人氣質が象徴されてゐるやうで愉快であつた。

牛津街を走りぬけて、彼は廣いハイド・パークに沿うて走り、やがて公園を背にして立つ、ハイド・パーク・ホテルに旅裝を解いた。

部屋に入つて窓を押すと、四方の街の照明をうけて、薄明りのうちに、廣いハイド・パークの公園の森と廣場とが、脚下に悠然と横はつてゐた。

『とう〱、倫敦についたのだな』

さう思つて彼は、たまらなくうれしかつた。（つゞく）

新しき日本に呼び掛ける

衆議院議員　鶴見祐輔

日本は今、もう一度立ち止まつて、自分自身の姿を正視しなければならぬ時になつた。

明治新政府の指導原理は、もう昭和の日本人を感動さすことが出來なくなつてゐる。

明治新政府の樹てた世界政策は、もう日本の世界に於ける位置を進展させることは出來なくなつてゐる。

明治新政府の經濟政策は、もう日本民族の生活を安定さすことは出來なくなつてゐる。

昭和の日本民族は、もう一度新しい探索を初めなければならなくなつてゐるのだ。さうでなくしては、今日御互の苦しい生活難は直らない。さうでなくしては、今日御互の精神的飢渇は醫せられない。さうでなくしては、今日の世界に於けるお互の民族的確信は定まらない。

その光を我々はどこに求めるのだ。

私はかゝる光を求めて過去十八年間、大きい世界の隅々を遍歴した。亞細亞の大陸に、南洋の孤島に、南北中

米の山と町とに、歐羅巴の川と都とに、私は眞理を尋ねて行脚した。人あれば訪れ、書あれば購ひ、寺あれば入り、會あれば参し、名山大川の間、平野滄溟の上、私は倦むところなく五大洲を彷徨ひ歩いた。

さうして、豁然として、ある朗らかなる晨私は開眼した。日本を救ふの光は、廣い五大洲のうちにあるのではない。狹い六十餘州のうちにあるのだ。名だたる世界の巨人の頭の中にあるのではなく、名もなき日本の男と女との胸の中にあるのだ。

さうだ。王政維新を作り出したるちからが、孔子孟子朱子のうちにあつたのでなくして、貧しき松陰と南洲と山陽と龍馬との中にあり、否、かゝる史上の人物ともならずして死んだ無名の青年達の胸の中にあつたやうに、昭和の時代を作り出すべきちからは、いまは水田に稲を植ゑ、工場に槌を揮ひ、商店に荷作りをしてゐる壯青年男女、少年少女の胸の中に燃えてゐるのだ。

その清淨なる靈を喚び醒ますことが、それが新しき日本を作り出すことなのだ。其中から、第二の松陰と、第二の南洲と、第二の龍馬とが出てくるのだ。


鶴見祐輔氏

日本は艱難の日に於て常に義人を欠かなかつた國だ。弘安の日に時宗と日蓮とを惠まれ、維新の日に南洲と海舟とを惠まれた日本だ。昭和の御代には、きつとどこかの山村の田の畔から、雄叫びして躍り出てくる大丈夫があるに違ひない。

私はいま、斯のごとき未見の大丈夫にむかつて呼び掛けんがため、苦心長日月、渾身の熱誠を罩めて『英雄待望論』を著し、之を世に送る。わが敬愛する滿天下の愛讀者各位、冀くは『英雄待望論』の一卷是非御一讀を賜り、新日本の運命打開の爲、八千萬同胞の福祉の爲、御協力賜はらんことを。

――記者曰く

鶴見祐輔先生著『英雄待望論』は熱誠、熱意、全卷これ先生の血であり肉である、之を讀んで奮起しない者があらうか！ 何といふ名著であらう、此際老若男女を問はず日本國民全部に是非讀んで頂きたいこの考へから、四六判三百五十二頁の大冊特に定價五十錢にてお頒ちすることにしました。九月下旬發賣、今から書店へお申込置下さい。

洋上の月

服部純雄

丁度、わたしが、はじめて渡米したのは、世界戰爭の最中であつた。獨逸のエムデンとかいふ軍艦が、太平洋まで荒れまはるとの噂が、かまびすしかつた。それで、布哇に近づく頃になると、天洋丸の船窓といふ船窓は、悉く、黒幕で掩はれ、甲板の電燈は、悉く消されてまつくらだつた。そして、いざ、といふ時の救命袋やボートへ乗り込む練習が、船員と船客との間に幾遍となく繰り返へされたのであつた。

始のほどは、鼻先で馬鹿にしきつた連中も、だんだん、瓢簞から駒を出し、神經質の女達は、よるとさはると、エムデンばなしで賑つてきた。

ある日の夕ぐれ、もう、太陽は赤々と水平線に躍り込み、赫とした赤い珊瑚色の夕燒も失せ、蒼茫たる微光が空と海とを包んだとき、船内俄かにざわめきたち、物々しい光景が、わたしの前に展けてきた。

左舷の甲板にも、右舷の甲板にも、船員達が緊張しきつて、各自の受持配置へと靴音高く走りまはつた。

『なんですかね――』と、私がたづねると、眉の太い老水夫のひとりが

『不思議なところに、不思議な航海燈が、現れたのですよ。敵艦エムデンに相違ありませんぞ』

と、怒鳴るやうにいふのだつた。

『どこらですか』と、いへば、

『そら、あすこですよ』

と、指さして、そのまゝそそくさと向ふへとんでいつた。

見ると、涯しなき蒼穹と、渺漫たる大海原との接する、水天一髪ともいふべきところに、成程、航海燈らしきものがうすびかりに光つてゐるではないか。



珍問

『何でも僕に聞き給へ。答へてやるから……。』

『何でも答へる!? 君も向ふ見ずなことをいふ男だね。では聞くが、向ふ見ずといふ水は何處にあつて何をする時使ふ水だね?』

『それはお先眞暗といふ倉の邊に湧いてゐる水で、無鐵砲といふ鐵砲を洗ふ水さ、エヘン!』

『では、デタラメといふ目は、何を見る目だい?』

『デタラメ!? 君も皮肉なことをいふ奴だな。その目は多分當てずつ方の方角を見定める目だらう。』

『さア、今度こそまごついて降るなよ。今言つたマゴツキといふ月は、いつ頃なんだい?』

『フヽン、何をまごつくものか、マゴツキは、ウソツキの次の月でさア。』

『君の法螺の貝は隨分大きいな。一體直徑の長さはいくら位ある

船橋はと見てあれば、そこには、ビール樽のやうな古參船長以下新進の運轉士まで、最高幹部級が悉く參集して、いづれも雙眼鏡片手に、キット前方をみつめてゐるではないか。船客中には、早くも救命袋を慾張つて三つも背負ひこみ、ヨチヨチ、甲板を這ひまはるもの、遺書を書くのだ、ペンはないかと立ち喚くもの、かなつきり聲で仲間を呼ぶもの、オデコとオデコをはち合せて、地團太をふむもの、イヤハヤ、船内はえらい騒ぎとなつてきた。

そこへ、エムデンが出た、エムデンが出た、と、大聲でふれ出した者があるため、三等船客や、支那人達が、なだれを打つて上甲板へと突喊してきた。

折も折、船橋のあたりで、かんら、かんら、と、噴飯した船長の、呑氣な高聲が響いてきた。

みると、エムデンの航海燈が、だんだん、水面をはなれ、まはりのうす雲がぼかされると、これはしたり、それは、まんまるなお月樣とばけてしまつた。あとで聞けば、これは、ときたま、濕氣深い大洋上にのみ起る水蒸氣の、不思議な惡戯であるさうな。ともあれ、この童話めいた一大事實は、滿船の人達に無限の情味をわき立たせ、陽氣な笑聲が、あちらこちらで爆發した。

白服の老船長は、プロムナード甲板の籐椅子連に近づき、無邪氣な洒落まじりで、濃き葡萄酒の盃を擧げつゝ、海路の太平を壽ぐのだつた。

われらは、甲板の冷たいしめりと、流れくる海風とに、萬斛の涼を樂しみながら、冷えきつた紅い西瓜を立ち剪り、バナ、アイスクリームを舌にのぼせて、月に浮かれ、思はぬ明月の夜を樂しむのであつた。甲板のそゞろ歩きの誰やらが、戰爭もこんなことからはじまるのだらう、と、高聲に話し乍らすぎていつた。

エムデンの航海燈は、既にメインマストの頂上に近く、悠々然として、かゞやく鏡面を研ぎすまし、廣重の繪にみる濃藍色の大海原は微茫として遠くうち煙り、これもお伽噺の世界に棲む、飄輕者の飛魚が、金銀の波をくぐりて、箭の如く船側をかすめては、姿をかくすのであつた。（了）



んだい？』

『ウソ八百里あるンさ、エッヘン！』

○

奇答

甲夫人『あなたの所ではお金の貯金が出來たでせう？』

乙夫人『だめよ、私の所は病弱で弱いんですもの。』

甲夫人『まア、私の所も風邪の感冒で困つてるの。』

乙夫人『それで、賣藥の藥を浴びる程服むの。』

甲夫人『けど、賣藥の藥は無效で效かないわ。』

乙夫人『いや、良藥の良い藥もあるわよ。』

甲夫人『まア、何處のいづこに？』

乙夫人『ほら、藥店の藥屋よ。』



金融界を操る人々

野田兵一

一、預金の行衛

銀行は經濟界の大動脈であつて、こゝからあらゆる事業に必要な資金を送り込む。お互の身體が血管から清靜な血液の供給を受けて活躍するやうに、經濟界も銀行から豐富な資金を融通されて活況を呈する。銀行と連絡のない事業會社は衰へるし、銀行からどし／＼資金の融通を受けることの出來る事業は益々榮える。

といつて銀行は、自身でさう澤山の資金を持つてゐるものでない。一方で事業界の金融機關として働くためには、他方から澤山の預金を吸集せねばならぬ。預金はお互が、汗にまみれて稼いだお金の中から、他日の用意に預け入れた大切な虎の子である。つまり銀行はお互から集めた預金で事業界をまかなつてゆくのが仕事である。もし銀行がお互から預つたお金をたゞ金庫の中にしまひ込んで置いたのでは、そのお金に利子がつくはずもないし、銀行だつて立行けるものではない。だから澤山預金を集めて、これを上手に働かしてまうけるのが銀行の役目である。銀行が事業界に投資する方法には、御承知の通り手形の割引があり、證書や手形で貸出すこともあり、公債や社債に應募することもある。

お互預金者から見れば、銀行が出鱈目の投資をして、もしそのお金が貸倒れにでもなれば大變である。殷鑑遠からず、私たちは昨年の銀行騷ぎで大小三十有餘の銀行が枕を並べて破綻した生々しい不祥事を知つてゐる。だから銀行經營者が、事業界に投資をするには、愼重にも愼重な態度をとらねばならぬ。銀行が良くなるも惡くなるも、銀行を經營する人にある。銀行創立の歴史が舊いことや、建物の大きいことや、資本の多いことなどは、あまりあてにはならぬ。賴むべきはその銀行の重役諸君の技倆と人格とである。だから私はこの銀行の重役諸君を讀者の眼前に立たして、少し立入つた批評をしたいと思ふ。

銀行と申しても全國を見渡せば澤山あ

る。小さい銀行でも堅實なのがあるし


土方久徵氏

大きい銀行でも看板ほどでないのもある。しかし昨年の財界暴風で、ほとんど駄目なものは一掃され、內容の惡い銀行は洗ひざらひ整理されてゐるから、大體においてどの銀行も內容が充實してゐる。もう昨年のやうな不始末は起るまい。

一、打出の槌を振る人

銀行の總本山は日本銀行である。こゝからは皆樣がおなじみの紙幣を發行される。こゝの金庫には手の切れるやうな出來立ての百圓札、十圓札、五圓札、等が束にして山と積まれて、必要とあらば何時でも振出すやうになつてゐる。今日では紙幣の流通高は十二億圓そこ〳〵であるが、昨年の銀行取付當時には二十六億圓にも上つた。この紙幣と引換へられる準備として、日本銀行の地下室には十億圓の金貨、金地金が保存してある。

この本山に鎭座して、打出の小槌を振上げて、何百萬圓でも何千萬圓でもお望み通りの紙幣を振出すのが、總裁土方久徵さんである。土方さんは當年五十九才。色が白くて、脊が高く、上品な顏、老人仲間でも稀に見る好男子である。もつとも土方さんの貴公子然たる風丰は、凝り性の身だしなみにもよるが、氏や育ちのよいことも原因してゐよう。人事興信錄を披くと、家は舊旗本にして、家兄は伊勢菰野の城主……とある。明治二十八年に東京帝大法科を卒へ、同窓生の多くが官界に競ふ時、月給三十五圓で日本銀行の書記となつた。若い時はツンとした氣取屋の秀才肌であつたが、今頃は圓滿な好々爺になつてゐる。

明治三十一年に、日銀第二回留學生として土方さんと井上準之助さんとの二人が選ばれ、海外に留學したが、土方さんが井上さんよりも一年先輩だけに、月給が五圓多かつた。歸朝後は海外の新知識として、優遇され、とん〳〵拍子に出世して大正元年には理事になつた。そして大正七年まで日銀にゐたが、その年の春、志立鐵次郎さんの後を追うて日本興業銀行總裁に轉じた。それから大正十二年まで工業金融に貢獻したが、後釜を小野英二郎さん（今は故人）に讓つて浪人になつた。その間日本郵船の重役に擧げられたり、日本經濟聯盟會の專務理事になつたりしてゐたが、元來銀行家なので、やはり髀肉の嘆に堪へなかつた。そこで一昨年には市來乙彥總裁の下に副總裁として復び日銀に入り、つい先月前總裁井上準之助さんに代つて、日銀總裁の椅子を占めた。


池田成彬氏

土方さんの趣味は廣い。將棋は初段格、圍碁は初段に二目、玉突も銀行家仲間ではうまい方。しかしそれよりも二十年來つゞけてゐるのは品川沖に漕ぎ出で

終日釣りを樂しむことである。だから月曜日にでも會つてごらん、土方さんの顏は、昨日（日曜日）の釣りで陽にやきつけられ、てか〳〵に光つてゐるから。

土方總裁の下に副總裁として女房役を勤めてゐるのが深井英五さんである。長脇差で名高い上州の産、小柄だけれども、ピリリとする人だ。少年時代に同郷の先輩新島襄先生を慕ひ、京に上つて同志社に學んだゞけに、驚くほど語學が達者である。當年五十八才になるが論理的な頭腦で、物事を克明に論議するところ、若々しき青年に接するやうだ。實務家といふよりは理論家、學者肌の人だけれども、營業局長を經て理事に上つてからでも八年間日銀の業務を執つてゐた人だから、たゞの理窟屋でないことは申すまでもない。讀書が唯一の趣味で、お手の物の經濟書はもちろん文學小說類から講談類まで讀み耽けるとある。



串田萬藏氏

三、三井と三菱

日本銀行と三越との間に三井銀行の本店がある。三井三菱といへば、神棚の花筒みたいに並べられ、日本財閥の兩横綱である。三井財閥を背景に立つたのが三井銀行で、この主宰者が常務の池田成彬さんである。池田さんは三井銀行の釆配を振つてゐるばかりでなく、東京手形交換所理事長として東京――といふよりも日本の金融界を牛耳つてゐる。六十二才だから頭髮には胡麻鹽を交へてゐるけれども、血色といひ肉付といひ壯者を凌ぐ有樣。麻布永坂町の私邸は廣大な洋館で、內でも外でも洋式一點張で二重生活を打破してゐる。それでゐて晝食には奧樣お手製の辨當をたべる。午後四時過銀行が退ける頃三井を訪へば、辨當箱を縞の布呂敷にくるんだのをブラさげて出て來る池田さんを見ることがある。もつともこれは簡便を尙ぶためではなく、池田さんは無類の潔癖家だから、手製の食物でなくては、安心して食へぬからだといふ。

慶應義塾を卒へてから、米國ハーバート大學に經濟學を學び、明治二十八年秋歸朝して、その年の暮に三井銀行書記となり、鰻上りに出世して今日の地位を築いた。奧樣は故中上川彥次郎の愛孃だ。池田さんが營業部長當時その才覺手腕を見込まれて、時の三井銀行主宰者たりし中上川氏の愛婿になつたのである。

謹嚴で眞面目で模範的銀行家タイプの人であるが、この性格を植ゑつけたのは、父君の池田成章翁である。成章翁は米澤藩の國家老で、後年沖繩縣知事にもなつたことがあり、朱子學の學者であつた。池田さんが少年時代の思出として語つた一節に『七才の頃父から繪本を貰つたが、誤つてそれに墨をつけた。父がそれを見つけて、そんなに本を粗末にして



結城豐太郎氏

はいけないと小言をいつた。で、それに言譯するため、私がしたのではなく、友達がいたづらしたのだと、つい嘘を吐いた。ところが父は烈火のやうに憤り苟も武士の家に生れたものが、嘘をつくとは何事だ、もう一時も家に置くことは罷りならぬとばかり、雪の夜に閉め出しを食はされた。寒氣に身を刺されながら一夜戸外に泣いたが、それ以來嘘を吐けぬやうになつた』とある。だから今日も言へぬことは言へぬと斷り、決して嘘を吐かぬのが信條ださうだ。


石井健吾氏

池田さんの女房役して、同じ常務に菊本直次郎さんと、今井利喜三郎さんとがある。慶應義塾の古い卒業生で、二人とも小づくりの體だが、眼から鼻に抜けるほどシャープである。所謂三井銀行タイプは、この人達が模範を示したのであらう。

三井銀行がヘデな米國式なら、三菱銀行は地味で堅實な英國式である。三菱銀行なら安心して賴まれるといふのがこゝのモットーである。三菱財閥諸事業の中で、一番の好成績を擧げてゐるのも三菱銀行である。會長は福德圓滿な串田萬藏さんだ。大黒樣そつくりの態度で、いつ會つても腹の底から人のよさそうにこにこしてござる。容易に自說を主張せず、言葉數も至つて少いのだが、それでゐて銀行の經營には異常の才を備へてゐる。年齡は三井の池田さんと同年の慶應三年生れ。池田さんが手形交換所理事長で串田さんは東京銀行集會所理事長である。

串田さんは大學豫備門を中途で止めて、米國ペンシルバニヤ大學に學び、同大學の學位を貰つてからも、久しく米國で銀行實務を執つてゐただけあつて、英語は西洋人そつくりの達者。かつ米國にゐる時からボートのチヤンで鳴らし、今でも隅田川にオールをとつて青年たちをアツといはせるだけの技倆を持つてゐる。

串田さんの下に、瀨下淸、加藤武男、山室宗文の三常務が控へてゐる。瀨下さんは主として營業を司り、加藤さんは總務部の人事を見、山室さんは大阪支店長を兼ねてゐる。昨年春の金融パニック當時、東京中野銀行の立場に同情して、三菱銀行が應援した時の話である。中野銀行は資産內容は確りしてゐたけれども屋臺が小さいので取付けを食ひ、朝から數百人の預金者が、營業の窓口に殺倒したものである。この時、三菱銀行から紙幣の束を山のやうに積んだ自動車を中野銀行に差向け、その札束を踏臺に、突立ち上つた瀨下さんが、中野銀行の預金者に『諸君もう安心したまへ』と叫んだら、血眼になつてゐた預金者たちの顏が、忽ち微笑に崩れ、そのまゝ四散したといふエピソードがある。


星野章氏

四、安田、第一、川崎、第百

次は、預金總額の多いこと、支店數の多いことで日本第一の安田銀行である。この頭取は安田善次郎さんであるが、實權を副頭取の結城豐太郎さんが握つてゐる。銀行は大きくても威張らず氣取らず、行員も前垂掛の心持で行かうといふのが、その方針である。だから安田の各支店は洋館建ながらノレンを下げてある。ワラヂばきの小商人でも、すつとはいりよいやうに心を用ひたのである。



生田定之氏

結城さんは一流銀行の主宰者仲間では最年少で、常年五十二歳である。二高時代には高山樗牛の再來と稱されたほどの秀才で、大學を卒へてからは銀行家を志して日銀に入り、理事まで昇つた。大正十年安田王國の總理大臣として迎へられ、故善次郎翁歿後の安田財閥を双肩に擔つて今日になつてゐる。青年時代から登山家として有名だつたから、今でも體は小さいががつちりしてゐて病氣を知らぬといふ。お子様が孃樣ばかりで家庭では唯一の男性のためかどうも涙もろくて……と本人の述懐である。

結城さんは先月から歐米視察の旅に上り、筆者が本稿を草する頃ロンドンに着いたとの報がある。けだし讀者の前にこの文が披かれる頃はドイツかフランスかに渡つてゐよう。或ひはアメリカに渡らうとして大西洋上の汽船の中にキング誌上の噂を氣にしてゐるかもしれぬ。

結城さんの留守中は、常務の兵須久さんが一切を切りまはしてゐる。兵須さんは一見百姓爺みたいで、頑固さうな老人だが、子僧の頃から銀行の飯を食つてゐたのだから、仕事の老練さにかけては、誰かが評した樣に『團十郎格』である。

以上に述べた三井、三菱、安田の三銀行は、夫々財閥を背景とした銀行であるが、これから說明する第一銀行と川崎第百銀行とは純然たる株式組織の銀行である。もつとも第一には澁澤榮一子爵が永い間頭取をしてゐて、澁澤の第一とさへいはれた位だから澁澤の息は今なほ吹きかゝつてゐるが、それでも澁澤財閥の銀行ではなく、やはり多數株主の銀行である。



八代則彦氏

川崎第百も、川崎八郎右衛門さんの個人經營であつた川崎銀行と、原六郎翁からその養子原邦造さんまで原家の力で支へてゐた第百銀行との合併であるから、背後に兩富豪は控へてゐるけれども、やはり財閥銀行といふのではなく、株主の銀行といふべきである。

第一銀行の頭取佐々木勇之助さんは、安政元年生れで、第一國立銀行當時から勤め上げ、今なほ健在ではあるが、何せ老境だといふので、萬事副頭取の石井健吾さんが引受けてゐる。石井さんは古い

高商出身で、民政黨の床次竹二郎さんを銀行屋にしたやうなタイプである。日曜日は未明から神奈川沖に太公望をきめこむのが何よりの樂しみとある。

川崎第百頭取は星野章さんである。日本銀行大阪支店長から理事に昇進し、三日間ばかり經て、此處の頭取に轉じた。現大藏次官の黑川英雄さんとは高等學校時代からの同級生で、大學生の頃から頭が光り初め、今日では御兩人とも禿頭燦然としてゐる。それでも青年時代から頭腦は冴えてゐたので、田尻稻次郎子爵の鑑識にかなひ、愛婿となつてゐる。


佐々木駒之助氏

次は新設された昭和銀行も頭取生田定之さんである。御承知の通り昭和銀行は、村井、中井、八十四、中澤、近江、廣部、久喜などの休業銀行と、豐國、尾張屋、泰昌等を合併して打つて一丸とし、昨年の金融パニック後に出現した新銀行である。生田頭取は、日銀の國庫局長から豐國銀行頭取となり、生田あつての豐國と稱されてゐたが、同行が昭和と合併したので、迎へられて新銀行の頭取になつた。土佐人で銀行家には珍しい豪快な好漢である。碁でも將棋でも、玉突でも、銀行家仲間では一番強い。角力見物も大好きで春夏兩場所とも缺さぬが、また野球ファンとしても有名なもので、早慶戰の時など、應援團の先頭に立つて野次つてゐる。當年五十九歲とは思へない元氣である。

東京はこの位にして大阪に移らう。

五、大阪の住友と山口

大阪には住友銀行がある。歷史が古いのとやりくちが堅實なのとで、關西の金融界を牛耳つてゐる。この主宰者は專務の八代則彥さんでやる。民政黨總裁の濱口雄幸さんと同期で東京帝大を卒へ、初めは郵船會社に入つた。そして二十七歲の若さを以つて同社ロンドン支店長に拔擢され大いに前途を囑望されてゐたが、『感ずるところあり』とて、住友銀行に轉じた。そして營業部支配人から累進して今日の地位に昇り、今では大阪手形交換所理事長として時めいてゐる。萬事に理智的で莊重で、きび〱してゐる。


兒玉謙次氏

劇務の餘暇をさいては、經濟理論の本を讀み、常に新知識の吸收に努めてゐる。ゴルフにはかなり御自慢だけれども、腕前は感心するほどでない。

住友と相對する有力なのに山口銀行がある。山口財閥を背景に持つてゐるのだが、今日ある第一の功勞者は町田忠治さんである。町田さんは今でこそ民政黨總務で、前農林大臣でございとおさまつてゐるけれども、かつては山口銀行常務として、同行のために粉骨碎身の努力をしたものである。現常務の佐々木駒之助さんは町田さんから引立てられて、今日の

地位を築いた。といつて佐々木さんは、ヒキだけで出世したわけではなく、三十餘年間山口銀行のために捧げた働きは大したもので、その今日の榮冠を得たのは當然なのである。頭髮は眞白で、いかにも老人みたいだが、あれで數理に明るく、實務に堪能なこと驚くばかりである。

六、正金、勸銀、興銀


馬場鍈一氏

復び東京に引返へす。そして外國爲替銀行として世界屈指の大銀行たる正金銀行を見る。こゝには頭取として兒玉謙次さんがゐる。鶴のようにスラリとした上品な人だ。永い間支那や印度の支店長を勤めてゐたので銀爲替については世界的權威である。無口で、自己宣傳をしない人だけれども、一度支那問題等について口を開けば、眞面目な生一本の正論を滔滔とまくし立てるほどの勇氣はある。

次ぎには我農業金融機關の總元締で、かつ勸業債券では皆さんおなじみの勸業銀行を覗かう。こゝの總裁は法學博士で財政學者たる馬場鍈一さんである。かつては法制局長官であり、今日でも貴族院研究會の領袖として誰知らぬものはないのだから、銀行家といふよりは、むしろ政治家である。それでも本人は農業金融上に、必らず新生面を拓いてみせると力んでゐる。

農業金融と相對して工業金融を主として取扱ふのが興業銀行である。現興銀總裁は人のいゝ鈴木島吉さんである。かつて梶原仲治さんが正金頭取時代には、その下に副頭取をしてゐたことがあり、正金を辭してから暫く浪人してゐたが、やがて朝鮮銀行總裁となり、紊亂せる同行をうまく整理して男を上げた。そして本年春、興銀總裁に轉じたのである。事務を見ることには切れるようにすごい腕を持ちながら、相接する人にはにこくした好々爺だから食へぬといへば食へぬが、かくいふ筆者などは大好きの一人である。

七、安心して預金

金融界を操る主なる人々を略列擧し終つたこれだけの人に親しみを持つてをれば、銀行家の會合などが新聞紙上に報つても、そのことに興味が持てると思ふ。例へば預金利子を引下げるとか上げるとかで、銀行家が相談する場合にも必らず右の人々が、主要な登場人物であるし、手形交換所の理事會があつて、金融上の大きな決議をする場合にも、右の人たちの意見によつて定るのである。


鈴木島吉氏

前にも述べたやうに金融は經財界の動脈であるから、事業を初めようとすれば、まづ資金の路を得るやうに銀行家の諒解を得なければならぬ。だから新しい事業が起つたり、財界の事變に際會すると

りする時には銀行家との交渉が初まる。だから東京電燈會社のやうにあんな大きい會社でも三井銀行の援けがなくては社業が立ちゆかぬし、郵船會社のやうな大紹會社でも三菱銀行との取引あるが故にうまくやつてゆける。

皆さんは皆さんの預金がどんな方面に使はれるかを手取早く知るためには、その銀行がどんな事業と取引してゐるかを見出せばよい。それにはその銀行の重役たちが、事業家の誰々と常に交渉してゐるのかを知らねばならぬ。自分の預金してゐる銀行の頭取が何人であるかを知らぬといふが如きは、經濟生活を營むの資格ない者である。最後に一言お斷りしておきたいのは、右に擧げた銀行名はその看板の大きい所を示したゞけで、たとひこゝに漏れてゐても、内容の堅實な銀行はいくらもある。殊に昨年の金融パニツク後には、もう大部分の銀行が整理を終つてゐるので、たとひ看板は小さくても安心して預金されていゝと思ふ。念のため注意しておきたい。

家庭科學

これだけ知つても一家の經濟

◇茹で方いろ〳〵

一、野菜類を下茹でするには、必ず湯が沸騰してから入れ十五分乃至二十分間位茹でます。

一、青菜類を茹でるには砂糖を一塊入れ鍋蓋をとつて茹でると、色も青々として味もよく茹だります。

一、里芋を切つて茹でると、粘り氣が出て困るから、丸のまま茹で、後で切ります

一、蓮根を白く茹でるには、米の白水を入れて茹でます。

一、午蒡を軟かく茹でるには、糠屑を少し入れて茹でます。

一、干瓢や蒟蒻は鹽でよくもみ、水洗ひしてから茹でます。

一、章魚はまづ鹽でよく洗ひ、大根を切つて入れるか、又は白水を加へるかして茹でます。

◇垢じみた革具類の手入法

汚れた革具類は、水で洗へば後で硬ばつて困りますが、糠袋をつけてよく揉み乍磨き、糠のついたまま日光に干して揉めば、汚れがとれ、艶が出て新しいもののやうになります。折鞄、手提其他のものに應用して重寶です。

◇病後頭髪の手入法

病後、脱毛の烈しい場合には、米の浙水を沸まして上水を捨て、これにメリケン粉一握りを加へ、どろ〳〵になるまで煮て冷ました頃、なるべく頭の地にすりつけるやうにして髪を洗ひ清水でよく濯いでおきます。之を度々繰り返すと、三四ケ月の間に驚く程早く發毛します。

◇簡易練歯磨の製法

ポマードの空罐に食鹽を少し入れ、湯を半分程注します。それに粉末の歯磨を入れるのですが、粉末は輕くて湯に浮び中々水に交らぬ故、蓋をして容器を強く振れば、粉末は水に交つてドロ〳〵になります。更に粉末を加へて適宜の硬さになるまで交ぜれば立派な練歯磨が出來上ります。容器は金屬製のものは食鹽のために酸化しますから、陶製のものが結構です。粉末のものゝやうに散亂する缺點がなく、食鹽が入つてゐるから、使用後清爽の感を與へます。



兩國に於ける本社の大花火

本社九大雜誌の御大典紀念大計畫

曠古の御盛儀御大典を奉祝し且つ之を紀念するため、本誌は特に御大典紀念の臨時增刊號を發行、其他の八大雜誌も何れも御大典紀念特大號とするなど、何れも破天荒の大計畫を立て、各編輯局は目下晝夜兼行で之が準備に忙殺されて居ります。發表の曉には必ずや滿天下の御稱讚を得ること疑ありません。どうぞ

お樂しみにお待ち下さい。

御大典記念 大日本史の刊行

今回本社では維新回天の偉業の原動力をなした有名な大日本史を刊行することになりました。大日本史は水戸義公畢生の大著で、賴山陽の日本外史、田口鼎軒の大日本人名辭書等皆之に準據したものであります。

今夏行はれた水戸義公生誕三百年記念祭に際して、同記念祭會長茨城縣知事森岡二朗氏は、之を廣く天下に普及せしめんが爲め、之が出版を本社にはかつてこられました。本社も思想國難、昭和維新の國家重大なる現下の國狀に鑑み、茲に多大の犠牲を忍んで、同書の刊行を賛同計畫し、頗る低廉の値を以て江湖に頒つことになりました。希くは讀者各位にも本社の微衷を諒とされ子孫の爲め一本を左右に備へられんことを希望致します。尙、詳細は別項折込を御參照下さい。

鶴見祐輔氏著「英雄待望論」の大出版

破格の特價 一部三十錢

別項の通り、九月下旬、代議士鶴見祐輔氏最近の快著『英雄待望論』の大出版を敢行します。今や日本は重大な時に際會して居ります。此の行きづまつた現代日本の打開策と、其の行くべき大道を國

民に明示せる全篇盡く鶴見氏の憂國慨世の至誠より迸り出でた言々句々皆熱と力の結晶にして、近來の快文字、本社も同書が現下の國民に一日も早く一人でも多く必讀すべきものなりと信じ、多大の犧牲をも顧みず僅か定價三十錢で、普及的大出版を行ふことになつたのであります。切に讀者各位の御一讀を御奬め致します。

兩國川開きに於ける 本社の大花火

大江戸の名殘り、東京名物として有名な兩國の川開きは吉例によつて去る七月廿九日盛大に開催され、近來にない賑はひを呈しましたが、本社も之に參加、當日の大呼物として隅田川の上下流に『宵の靈峰富士』『蛟龍昇天』『大緣門』の三種の大花火を打揚げ、何れも未曾有の大仕掛とて滿都の大評判となりました。（寫眞は「宵の靈峰富士」

本社雜誌印刷研究會 ―共同印刷主催―

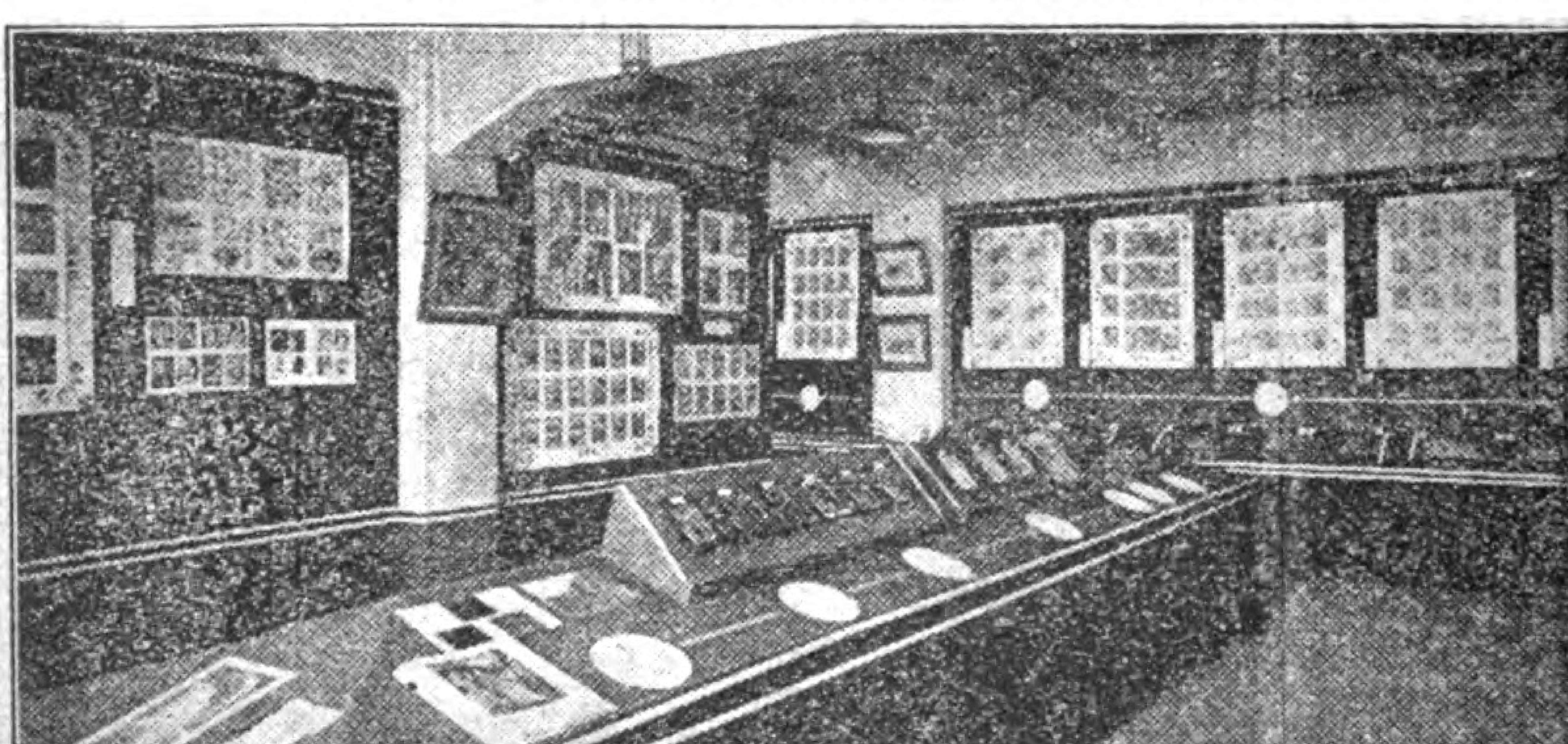
本社の特約印刷所の一たる共同印刷株式會社では、その精巧壯麗且つ迅速な技術で定評がありますが、今回一層その印刷製版の改良進歩を圖るため、過般本社編輯當局者及び寄稿各畫家を同社に招待して、本社各雜誌印刷製版研究會を開催、近來の有意義な催しとて、終始盛況を極めました。同會に前後御世話下さつた共同印刷各位に對し、玆に謹んで御禮申上げます。

日比谷圖書館で選定した 本社發行圖書

東京市立日比谷圖書館では、先般『夏の讀物（三日に一册）』と題するパンフレットを刊行、廿種の單行本を選定推奬しましたが、其中本社發行書籍が左の三種入つて居ります。

「思ふまゝ」 高島米峰先生著
「維新風雲回顧錄」 田中光顯伯著
「ムツソリニ傳」 澤田謙先生著

尙、同パンフレットは切手二錢封入の上同圖書館に申込ば無料で頒けて下さる筈です。



共同印刷の本社印刷研究會

武勇講談

塚原小太郎

寶井馬琴
井川洗厓 畫



變名仁科與四郎

羽黒山の山奥深く登つて參りました塚原小太郎勝義、もう絶頂も程近いと思はれるあたり、溪川に土橋が架つてゐて、それを渡つて來ると、ポンポン〳〵……谺に響く木劍の音。『ハ、アさては比那丸入道の道場はこの近傍と見える』と、その太刀音を聞き乍ら、溪川縁を傳はつて二丁程來ると、玄關構への立派な住居、傍の柱を見ると、檜の一枚板に比那丸入道圓海道場と筆太に書いて、ピタリと出てゐる。小太郎勝義これを見て、『ウーム、修驗者の分際を以て、道場とはかたはら痛き奴。己れ圓海、唯一打にして師の恥辱を雪ぎまゐらせん』と、ヅカ〳〵と玄關へかゝつて、

小『頼ーむ』

『ドーレ……』出て來たのは比那丸入道圓海の門人四天王の一人辨天堂龍山。

龍『何れからお出でだ』

小『手前は旅の修行者でござるが、比那丸先生の御高名雷の如く承知いたしてわざ〳〵登山いたして參りました。どうか一手御教導に預かりたく、よろしくお取次を願ひたうござる』

龍『ハ、ア、旅の御修行者か。まだ年がお若いやうだが、それは止したらよからう』

小『どういふ譯でござるか』

龍『どういふ譯といつて、當山へ登山する時に、人の噂でも聞いたらう。この比那丸先生の道場へまゐつて下手をすれば命が

ない、うまく行つて大怪我、まづ不具になつて歸るぐらゐが儲けものだ。これまで隨分當道場へ訪ねて來たものがあるが、皆ひどい目に遭つて歸る。貴公のやうな青二才が立合つても、先生はおろか、吾々の打込む棒に中つて落命することは分つてゐる。大事に使へば一生ある命だ。諦めて歸りなさい』

小『ハヽア大變な鼻息。大分逆上てゐるな』

龍『なにッ……』

小『いやなに……お言葉忝けなうござるが、手前も武藝執心の者、いろ／＼の艱難をいたさねば上達はいたしませぬ。萬一先生方のために落命をいたし、又は怪我をいたせばとて、それは自分の未熟と心得、決して先生をお怨み申すやうなことはござらぬ。どうか一本御教導下さるやう、お取次を願ふ』

龍『あゝさうか。御自分が承知で死にたい、不具になりたいといふならよろしい。先生に取次いで進ぜるが、何といふ名前だ』

小『拙者は……』といつたが――上泉伊勢守の門人塚原小太郎勝義と名乘つたら、閻海も油斷をしまい。又卑怯な奴だから、どんな事をしないとも限らない。卑怯なやうだが一時僞名をしよう……と、かう考へたから、

小『拙者は常陸の住人仁科與四郎と申する者でござる』

龍『なに、常陸の住人仁科與四郎……聞いたことのない名前だ……では、こつちへ通らつしやい』

小『御免……』ヅカ／＼ッと草鞋のまゝ玄關式臺へ上つた。

龍『これ／＼ッ、草鞋のまゝで上がる奴があるか』

小『あゝ左樣でござるか。こちらへ通れと仰しやるから、草鞋のまゝで宜しいと心得て……』

龍『人を馬鹿にした奴だ。足を洗つて上がらつしやい』

小『それでは、どうか洗足の水をいたゞきたい。誠にお安い御用で……』

龍『何だ、お安い御用とは……これこれ洗足の水を持つて來てやれ』ポン／＼と手を叩いたから、弟子の修驗者が出て來て、盥へ洗足の水を入れて持つて來る。小太郎悠々と足を洗つて道場へ通つて見ると、流石は立派な道場、波平行安の大刀を取つて、道場の羽目際に立掛け、背負つて來た木劍を取りおろしましたが、これは前回申上げた通り、枇杷の木を以て削り上げた木刀、それを傍に置いて控へてゐる。辨天堂龍山は比那丸入道閻海の前へ來て、

龍『先生に申上げます』

閻『龍山、何ぢや』

龍『只今、常陸の住人仁科與四郎と申す者がまゐり、先生の御教導を願ひたいと申してをります』

閻『なに仁科與四郎……聞いたこともない名の奴だ。大方少しばかり劍術を習つて、うまいとか上手だとかいはれ、天狗慢心をして來たのだらう。狂人の類だな、其奴は……』

龍『へえ、先生と似たやうなもので……』

閻『何だ、似たやうなものとは……そんな名もなき奴を相手には出來ぬ。ちよいと摘んで、吹き飛ばして歸してしまへ』

龍『へえ、吹き飛ばしますかな』
圓『第一、そんな者を一々取次ぐことがあるか』
龍『いえ、私も一應は斷つたのでございますが、先生と立合ふことが出來たら、たとひ死んでも又不具になつてもよいと申します。餘程武藝熱心の者とみえます』
圓『それが身の程を知らぬと申すのだ。併し折角この圓海の高名、雷の如きを承知して來たとあれば、むざ／＼追歸すのも不憫だ。よし／＼。毎日同じやうな稽古ばかりしてゐて退屈だ。一つ其奴に三番でも踊らせてやらう』大言を拂つて比那丸入道、鼠の衣服に鼠綸子の被布を着て、身の丈は七尺近い大入道、道場へ出て來たが厚い褥の上へどつかと坐つて、ぢろり小太郎を見おろし、
圓『常陸の住人仁科與四郎といふのは貴公か。拙僧が比那丸入道圓海ぢや。見知つておきなさい』あくまで傲慢無禮の態度、小太郎はあゝ圓海といふ馬鹿坊主は此奴かと思つたが、どこまでも慇懃に兩手をつかへ、
小『これは／＼初めてお目にかゝります。手前常陸の住人仁科與四郎と申す未熟者、何分よろしく……』
圓『あゝ未熟者は言はずとも分つてをる。拙僧の教へを受けたい、一本立合をしたいといふことだが、初めから拙僧が出るわけにはいかぬ。門人共から先に立合をしなさい。門人も他の道場のやうに五人や六人ではない。門人の數は總體で二萬五千人、龍虎、四天王、八天狗、十六坊、三十六童子と分れてゐる。どうだ、驚いたらう』



なアに驚くものか、二萬五千人とは吹きも吹いたり、三十六童子などと、不動樣の末社のやうだと、心中に冷笑つた小太郎勝義、
小『恐れ入りました。御繁昌のことでございます』

圓『ウム、それでまづ門人共から立合を命ずるが、併し貴公は年も若いし、腕も未熟だらうから、まア下ッ端の力とやつて見なさい……これ〱月山坊、貴公立合ひなさい』

月『ハ、ッ、心得ましてござる』

圓『併しわさ〱當山へ訪ねて來たのだ。あまり手荒な事をせず、やさしく扱つて遣はせ』

月『心得ました……さア修行者、拙僧が相手をいたす、支度をしなさい』

小『忝けなうござる』立上つた小太郎、襷を取出して十字に綾どり、白布を以て汗止めの鉢卷、袴の股立ちを高く取上げ、枇杷の木で造つた木劍を持つて、道場の眞ツ中央へ進んだ。

木劍の冴え

『ヤッ』『ヤッ』小太郎の仁科與四郎は、片手正眼にピタリとつける。月山坊は六尺の棒、例の太陽霞の構といふのに構へる。此奴何程のことやあらんと、『エイッ、と叫んで、月山坊が打込んで來るのを、受けて切り返せば平凡な腕だが、小太郎ヒラリと體をかはしたから、打ち損じて月山坊、トン〱と前へのびて行くところを、頭をコツーン。

月『參つた』

小『誠に失禮いたしました。どうかお次のお方……』湯殿坊それへ飛んで出て、

湯『拙者が相手だ。さア參れ』

小『何分お手柔かに……』

ヤッ、ヤッ、双方身構へたかと思ふと、『エイッ』と叫んで打込んで來た湯殿坊の棒、ヒラリかはしておいて、ピシーリ。湯『參つたッ』その早いこと、目に留まらぬ有樣。

小『まことに失禮、どうぞ御休息を願ひます……えゝお次のお



方……』あくまで落着いた小太郎の態度、これを見ると、控へてゐた二十人ばかりの弟子坊主、バラ〳〵ッとそれへ出て、

『拙僧は越前坊でござる。拙僧が御相手いたす』

『いや栃木坊でござる、拙僧が御相手いたす』

『いや拙僧は陸奥坊でござる』『拙僧は木偶の坊』『あめん坊』『池の坊』いろ〳〵の坊主があつたもの。これが先を爭つて出ようとするから、小太郎が、

小『あゝいや各々方、一人々々お出になるのも面倒でござるから、左の方へ固まつて居ていたゞきたい。拙者片ツ端から、右の方へ彈き出すことにいたすから……』弟子坊主が怒つた。

『人をきしやごと間違へてゐる。その儀なら、いで目に物見せん』と、先を爭つて打ち向つたが、一人として目に物見せた奴はない。皆目に物見せられる奴ばかり。忽ち二十人ばかり、ピシーリピシーリと打込まれてしまつた。續いて大黒堂の金山、毘沙門堂の滿海、辨天堂の龍山、代り〴〵に出たが、皆一打と打合はせないうちに、小太郎のために打込まれてしまつた。これを見てゐた比那丸入道圓海、ズイと立上つて、

圓『一同控へろ。其方共大勢ゐながら、このやうな若年者に打込まれるとは何事だ。この上はこの圓海が相手。腕前の程を見知りをらう』と、着てゐた被布を脱いでかなぐり捨て、襷鉢卷の用意を十分になし、長押に掛けたる一丈餘りの八角の金剛杖、取るより早くリウ〳〵ッと扱きをかけてをりましたが、

圓『これやいッ若造、念のために一言申しておくが、拙僧のこの棒は餘人の鐵の棒にも類するものだ。頭に中れば貴樣の腦骨が微塵になる。身體に中れば輕くて不具、重ければ命がない。決して拙僧を怨むな』といひながら、ピタリと構へたのは、右を引いて左を突出した圓海得意の太陽霞の構へ。小太郎この樣子を見て、『いよ〳〵圓海が出をつたな。よくも師伊勢守殿をはじめ朋輩に恥辱を與へたな。今日こそは思ひ知らせてくれる』と、持つたる木劍、ビューッ、ビューッと二三度打ち振つて、ヅカヅカッと前へ進んだが、

小『これやいッ坊主ッ』と大喝一聲、今までのやさしい樣子とは打つて變つた態度。その聲は道場にビリ、ッと響く。

圓『なにッ、坊主とは何事だ』

小『今、其方と立合ひいたすに於て、改めて言つて聞かせる。耳をほじつてよつく聽け。我こそは常陸の住人仁科與四郎とは方便の僞名、まことは常陸塚原の城主塚原土佐守の一子塚原小太郎勝義とは我が事なり』

圓『ヤアッ』

小『過日は其方上州箕輪へ乘り込み、卑怯にも恩師伊勢守殿の病床を襲うてよくも恥辱を與へたな。今日こそは小太郎勝義、師匠並に朋輩の恥辱を雪ぎくれる。この木劍こそ眞劍に類するもの、頭に中れば貴樣の腦骨は微塵となつて飛びらせる。身體に中れば輕くて不具、重ければ命がない。妻子あらば泣くなり喚くなり、別れを告げて水盃をしてをれ。引導は拙者が渡してやる』と、四邊に響く大音聲。これを聞くと、比那丸入道圓

海ブル〳〵ッと戰へた。さうでせう、東國の麒麟といはれて、日本中の武藝者が恐れる塚原小太郎、初めから小太郎といふことを知つてゐれば立合ひはしない。この間上州箕輪の上泉の道場を荒したのも、その實この小太郎と磯畑伴藏、龍虎といはれる二人がゐないといふことを聞き、伊勢守が大病だと知つて乘込んで行つたのだが、今大勢の門人を相手に目にも留まらぬ早業、油斷のならぬ奴と思つてゐたが、さては此奴が塚原小太郎であつたるかと思ふと、流石の比那丸入道圓海、顏の色も眞蒼になつて、持つたる金剛杖も震へる樣子。周圍を取卷いてゐた大勢の山伏共も、塚原と聞いて、顏の色を變へ、たゞ呆然として見てゐる。

小『さア來いッ、打つて參れ、慄へるな坊主』

圓『ウーム、汝れッ……』打込まうとするが、小太郎の持つてゐる木劍は、恰も自分の目の前に傘を擴げたやうに見え、一寸の打込む隙もないから、たゞ金剛杖を持つて構へてゐるだけのこと。何のことはない、熊坂長範の山車人形のやうたもの。

小『打つて參らぬか。打てぬか坊主。小太郎勝義が恐ろしいか』これを聞いて怒心頭に燃えた圓海入道、強情我慢の奴でごさいますから、僅かの隙を見出して、『ヤッ』と一聲、塚原の眞向望んで腦骨微塵と打込んで來た金剛杖、ブーンうなりを生じ、風を切つて來る樣子。これをまともに受けたら誰でも一打で打込まれてしまふ。小太郎この時に考へた――上泉の道場で朋輩の柳生や疋田、丸女などが、この坊主と打合つた樣子は見ないけれども、苟くも上泉の四天王と呼ばれる人々が、決して負ける筈がない。それが負けたのは、この風を切つて打下ろして來る棒を、まともに受けたに違ひない。まともに受けたら大力の圓海、その力のために此方の小手が下がつて打込まれる。この大力で振り下ろして來る金剛杖を、まともに受けたらたまらない……と、早くもこゝに氣がついたのは流石塚原小太郎。總じて名人といふものは、機に應じて術の變化を覺るのが名人の名人たるところ。小太郎そこに氣がついたから、ブーン風を切つて打込んで來る圓海の棒、受けると見せてヒラリ體をかはした電光石火の早業。勢ひ込んだ棒は、自分の力に餘つて、空を突いて前へトン〳〵とのめる。

小『圓海、何をしてゐる。其方へ行けば羽目を打つ』

圓『いや汝れッ』ます〳〵怒に激した圓海入道、棒を取直すと、『ヤッ』只一打と打込んで來るところを、フワリと身を躱したから、これ亦空を打つて、トン〳〵トンと前へのめつて行く。

小『ドッコイ、出過ぎた。今度は此方だ』

『汝れッ』と打込んで來ると、小太郎早くもヒラリと横へ出る。その早いこと、打つとヒラリ、打つとヒラリ、五六度やつてゐるうちに、力を入れて打込むだけ圓海疲れて來た。セイセイ息をきつて來る。十分疲れたところで、時分はよしと、圓海が棒を取直さうとする所を、飛鳥のやうに飛込んだ小太郎、『ヤッ』と一聲、鋭い聲がかゝつたと見えたが、圓海坊主、金剛杖を持つたなり、腦骨微塵となつてドターリ倒れた。見ると、腦

上よりは、ドツク、ドツクと血汐が瀧のやうに流れてゐる。門人共これを見て、『ヤア師の坊がやられた』『師の坊が殺された』『師匠の敵、塚原小太郎を逃がすな』ワーワツと一度に騒ぎ立ち、得物々々を持つて打込んで來る。小太郎手早く木劍をあなたに投げすて、羽目際に立てかけて置いた波平行安の大刀、取るより早くギラリ引拔き、

小『ヤア騷ぐな汝等、師の恥辱を雪がんため、岡流の命を取りに參つた塚原小太郎勝義、師の敵とあらば打つて來い。片ツ端からこの世の引導渡してくれん』と、ハツタと睨んだその勇ましさ。山伏共一時はその勇氣に壓されて立怯るんだが、『塚原小太郎、鬼神でもあるまい、一時にかゝれば何程の事やあらん』と、一齊に打込み來る山伏共。を、バツタバタ〳〵右と左に斬つて落す有樣。刀は名に負ふ波平行安、斬り手は名人塚原小太郎、見る〳〵間に死骸は積んで山をなし、血は流れて泉の如く、見るも恐ろしき修羅の巷。



羽黑の山法、逆さ吊り

折しも一人の山伏、取上げたる法螺貝、プーツ、プーツ、プーツと音太に吹き立てれば、これを聞いたる東西南北の學寮にをりました山伏共、『それ山上に椿事があるぞ。一大事出來、それ行け〳〵』と、手に〳〵得物々々を提げて乘り込んで來る。これが事の樣子を聞くより、『師の坊の敵』『恩師の仇』と四方より斬つてかゝる。小太郎は前後左右に心を配り、當るを幸ひ斬りまくるその物凄さ、阿修羅王の暴れ狂ふにも似て、山伏共は歯も立ちませぬ。中に[illegible]四

天王の一人毘沙門堂の滿海、此奴寶山流の振杖の達人。寶山流の振杖といふのは、木劍の中に洞が出來てゐて、其の中に分銅のついた鎖が仕込んである。ちよつと見ては木劍としか見えないが、いざ敵と立合つて打込む時に、木劍の先からこの分銅つきの鎖が飛出して行つて、相手の得物へガラガラツと搦みついてしまふ。誠に卑怯な得物。毘沙門堂の滿海、この振杖で打込んで來たが、そんなものにかゝるやうな小太郎ではない。三方に敵を受けながら、體を縮めて向ふへ脱けたから、滿海の振り出した分銅は、ブーンと風を切つて、今しも打込まうとする月山坊の捧にガラガラツと搦みついた。『南無三、間違つたか』と慌てる所を飛込んで來た小太郎『エイツ』と一聲、脳天から只一太刀。『アツ』と、滿海血煙立つて打ち倒れる。『それツ又やられた』と群がりかゝつて斬り込み來るを、事ともせずに小太郎



斬りまくつたが、その斬合ふこと二時餘りといふのですから今日の四時間、朝の十時から午後二時まで一息もせず、代り代りに出る新手を相手に斬りまくつたのですから、その働きといふものは實に前代未聞。流石大勢の山伏共も、何れへ逃げたか、算を亂して逃げ去りました。

ホツと息をついた小太郎勝義、何しろ長い間の働きですから、汗は流れて瀧の如く、咽喉は渇いて燒きつくやう。四邊を見ると、傍らの岩の下を流れる谿川の流れ、清い美しい水が、音を立てゝ流れてゐる。これ幸ひと血刀をさげた小太郎、岩を踏んでその谿川の縁へおり立ち、左の手に水を掬つてゴツクリやると、その水のうまいこと。『あゝ甘露々々』と尚も水を掬つては飲んでゐる。

すると傍らの岩陰から現れ出でたる一人の山伏、これぞ圓海四天王の一人辨天堂龍山、此奴大越流の鎖鎌の名人、そツと足音をぬすんで小太郎の背後へ忍び寄つたのを、流石の名人塚原も、身體の疲れてゐるところへ水を飲んで覺えずうつとりとな

つてゐて、身體に油斷が出たか、龍山の背後へ近づいたのに心づきませぬ。仕合せよしと、右の手に鎖を持つたる辨天堂龍山『ヤツ』といふ聲諸共に、投げつけた八尺の鎖、分銅はブーンと風を切つて飛んで行く。ハッと氣がついた小太郎、身をかはさうとしたが遲かつた。鎖は首へグル〳〵ッと卷付いた。

『〆めた』

と龍山グイグイッと引いたから、鎖は小太郎の首をギュッと絞めつけてしまつた。

『これは仕損じたり』と拂はうとしたが、かうなつてはどうすることも出來ない。喜んだ龍山、



『ヤア〳〵各よ、塚原小太郎は、辨天堂龍山が打ち取つたり。出合へ出あへ』と呼ばはつた。これを聞くと、岩陰木陰に隱れてをりました山伏共二十人餘り、忽ち集つて來て、終に小太郎を高手小手に縛り上げてしまつた。

『師の敵、只一太刀に……』といふのを龍山が、

『待てッ。憎くき小太郎、只一太刀に斬るのは譯はないが、それでは面



がない。それより今夜一晩八ケ峰の絶頂より、谷間へ逆さに吊しておいて、山法に行ひ、明日になつて各々一刀づつ切つて〳〵斬り殺しにいたさう』

『なる程、それは何より。然らば……』と、大勢の山伏共小太郎勝義を担いで、ワイ〳〵ワイ〳〵八ケ峰といふ所へ連れて来た。絶頂に一本松といふ太い松が谷間の方へヌーッと出てゐる。その松へ逆さに吊して、

龍『これッ塚原、師の坊を殺した天罰だ。夜が明けて明日になれば、一寸試し五分試し、大勢して斬り殺しにしてくれる。それまでは今夜一晩さうしてをれ。アハ、、、、いゝ態だ』と、一同高らかに笑つて引上げて行く。

羽黒山の山法といふのは、山伏が不都合な事をすると身體を縛つて、両方の足首をくゝりつけ、この八ケ峰といふ頂上から谷間へ逆さに吊しておく。かうして一日一晩吊しておいて、翌日下ろして命があれば、これで無罪にしてやる。大抵十人が十人、頭へ血が上つてしまつて助かる者がない。塚原小太郎この山法に掛けられた上に、夜が明ければ斬り殺しにしようといふのですから、何方にしても命は助かりませぬ。實に塚原小太郎の命は風前の燈火。時は弘治元年二月七日の夜、春とはいへどまだ餘寒が烈しうございます』。森々たる羽黒の谷間、梢を鳴らす夜嵐の音物凄

く、頭の下を瀬枕立つてゴーゴーッと矢を射るやうな谿川の急流。普通なら足の下を流れるのですが、逆さに吊されてゐるのですから、この時は頭の下を流れてゐる。夜は次第に更けわたり、諸獸、怪鳥の鳴く聲、吼える聲は、谷間、木の間に谺して、その物凄きこと言はん方ない有様。

折しも何所から集つて來たか、數十匹の猿、かの松の大樹の根元へ來ると、一疋の大猿、『キヤツ〱キヤツ〱』と、何か他の猿に言ひつける樣子。それが猿のことで、何を言つてるのか解りませぬが、

『さア〱みんな、乃公が命を助けられた大恩人を助けるのだ。手を貸してくれ』

『あい〱とも親分、さアみんないいか。しつかりやれよ』

『合點だ』人間ならば、かう言ふところでございませうか。キヤツキヤツキヤツ〱とかの大猿が先立ちになつて、スル〱スルと松の木へ登つて行きます。木登りと來たら猿の得意。小太郎の吊されてゐる所へ來ると、どうして引上げたか、多數の力といふものは恐ろしいもの、小太郎を木の上へ引上げてしまつた。さうして縛つてある繩を、齒でバリ〱バリ〱喰ひ切ると、大勢の猿が周圍を取圍んで、遂に小太郎を下へおろしてしまつた。



『やアみんな御苦勞々々。さア先生を家へ連れて行け』

『合點だ』とばかり、擔ぐやうにして塚原を山奥深く連れて來て、木の葉が山のやうに落ちて柔かくなつてゐる其所へ小太郎を寢かせましたが、もう小太郎は身體の疲れと、逆さに吊されてゐたのとで人事不省。殊に大勢を相手に斬結んだから身體數十ケ所の傷。

猿は大勢その

周圍を取卷いて、その傷口をベロ〳〵ベロベロ舐めてゐる。獸は大抵な傷は舐めて癒してしまひます。中には谿川から水を手に掬つて來て呑ませるものもあります。丁度只今の午後十時頃になつて、小太郎やうやう我に返り、見るとこの有様、小太郎涙を流して喜び、

小『さては登山の折に、命を助け遣はした恩義を守り、今夜身共の命を助けてくれたか。忝けない。禮を申すぞ』と、大猿の頭を撫でてやると、猿は嬉しさうにペコ〳〵頭をさげてゐる。山には木の皮、草の根などに藥になるものが澤山ある。獸はさういふ物をよく知つてゐるから、猿どもそれを澤山持つて來たり、さうかと思ふと、木の實を澤山取つて來て、ボリボリ皮を剝いて食べさせてくれる。小太郎喜んでそれを食し、藥草を嚙んでをりまするうちに、心身爽快を覺えて參りましたから、

小『猿よ、いろ〳〵と忝けない。この恩は忘れぬぞ。何時までもをりたいが、又山伏共の目に入つて、再び今のやうなことになつては、折角の其方共の骨折りも何にもならぬ。山伏共の目に入らぬうち、この山を下りることにいたす』と立上がれば、猿共はピヨコ〳〵頭をさげながら、

『へえ、それではお出でになりますか。道が惡うございますから、氣をつけていらつしやいまし』



『隨分お身體をお大事になすつて下さいまし』とでも云ふやうに、キヤツ〳〵と云ひながら、涙を流して別れを惜しむ様子。

小『おゝ其方共も名殘を惜しむか。可愛い奴、別れて後も、獵師共に捕はれて、命を落さぬやういたしくれよ。おとなしうして天壽を保つやういたせ。小太郎も其方共の無事をつね〴〵祈つて遣はすぞ。猿よ、さらば』と、こゝで猿に別れた小太郎勝義、よろめく足を踏み〆めながら立出でる。振返つて見れば、數十疋の猿は去りもやらず、小太郎を見送つてをりまする。

暗にも美くし花嫁姿

眞暗な道を、足許も危く、辿り辿つて參りまするると、一つの小さい社がある。立寄つて見ると、木立明神といふ額がある。

小『おゝ社と見える、何神が在ますかは知らねども、常陸の住人塚原小太郎勝義、羽黒山中に於て山伏共のため大難に出會つてござる。今夜一夜、御社を拜借いたす』と、昔の人は義理堅い、誰もゐない社でも、神様に斷つてはいる。小太郎木連格子をあけて中へはいつて見ると、眞暗ではつきりは見えないが、正面に白い幣が立つてゐて、右の方を見ると、誰が納めたものか、四尺ばかりの額に二本の木劍が挾んで掲げてある。

小『おゝ武藝熱心の者が、納めたものと見える』と思ひながら、どつかとそれへ坐つて、ホツと息をつき、羽目に寄りかゝつて疲れを休めてをります

すると、バタ〳〵バタ〳〵と足音がする、うと〳〵としてゐた小太郎、目を開いて様子を窺つてゐると、

○『やい〳〵、此處で一休みしろ』

△『へえ……おい一休みだ、ドツコイシヨ』と、何か擔いで來たものを下ろした様子。

△『小頭、女はどうしませう』

○『さうよ。女はこの社の中へ入れておけ、誰もゐねえから』

△『ようがす』といひながら、一人が木連格子をギーイツと開けた。見られてはならぬと小太郎、賽錢箱の陰へ身を忍ばせて、小さくなつて見てゐると、擔いで來たのは駕籠が一挺、その外鏡臺、針箱、簞笥、長持に、ゆたんの掛つたのが三組、雪折笹の定紋のついた提灯が二張、『ハヽア、嫁入道具のやうだが、さては盜賊が、嫁入道具を盜んで來たものと見える』と思つてゐるうちに、駕籠の引戸を開けて、中から引出したのは、夜目とて定かには分りませぬが綿帽子をかぶり、美々しく扮裝つた娘。

○『さア女、衣服をぬげ。裲襠をぬげといふんだ』

女はたゞ首を振つてゐるばかり。

○『アハヽヽヽ、猿轡ははめられてゐるから、口が利けねえか。さアこゝで手前をどうしようといふんぢやアねえ。その手前の着てゐる衣服と裲襠が、此方に少し入用があるんだ。それを脱げといふんだ』と、慄へる娘の手を取つて、着てゐる衣服をぬがせ、裲襠を取ると、小頭といふ奴が、それをそつくり着

てしまつたから妙です。

○『さア／＼お前はこの中へはいつてゐろ』

女は身を揉んで逃げようとする。

○『エ、ジタバタするな。仕事の濟むまでは、手前を逃がすことは出來ねえんだ。おとなしくこの中へはいつてゐろ。騒ぐと命がねえぞ』厭がる娘の手を取ると、社の中へ押し込むやうにして、木連格子を元の通り閉め、

○『さア／＼手前達も早く支度をして、乃公を擔いで行け』といひながら、娘の衣類を着け、綿帽子をかぶつた小頭といはれた男は、駕籠の中へはいると、隨いて來た十五六人の賊は、これも盗んで來たものか、何れも上下を着け、袴をはいて、

△『小頭、女は大丈夫ですかい』

○『大丈夫だ。誰がこんな所へ來て、この夜中にこの社なんぞへはいる奴があるものか』

△『さうですかい。危ねえから、私が一人殘つて番をしてをりませうか』

○『馬鹿をいへ。そんな事をいつて、手前一人でいゝやうな事をしようといふんだらう。さうう まくはいかねえ。默つてついて來い』

△『へエ／＼』娘をそのまゝに大勢の者は、ザワ／＼ザワ／＼行つてしまふ。

あとに塚原小太郎勝義、暗の中に娘の樣子を見ると、年頃十八九でございませう、化粧を濃くしてゐるせゐか、暗にもくつきり見える色の白さ、見るも美しい娘でございます。さては山賊のために誘拐されて來たものかと思ふうちにも、娘は縛られた手足を頻りにもがいて、逃れようとする樣子。

小『これ／＼娘、身共が助けてつかはすぞ』立上つた塚原小太郎、つい娘の側へ歩みよつた。（さアどうなるでせうか、來月號が面白くなります）

讀書美談

玉川玉涙

◎冷水を浴びて、　眠氣をさます新井白石

◎豆腐殻を喰つて、　芝増上寺で勉強した荻生徂徠

◎貨脂を目につけて、　睡眠をさました安積艮齋（幕末儒者）

◎廁に書架を設けて、　乃木將軍の讀書（明治の時英書と國漢書の漢譯書籍の書架にあり）

◎屋根の峰にあがつて、　家中の騒擾を避けた蒲生君平

◎頭をガン／＼叩いて、　眠りを去る維新の奇傑雲井龍雄

落語 竈泥棒

古今亭今輔 演

清水對岳坊 畫

お馴のないお笑ひの多い所を一席伺ひます。吾々同樣といふ幾らか風變りの者が現はれませぬとお慰みが薄いやうでございます。何でもお話は當り障りのないものが宜しいやうで。世の中に當り障りのないものが三つございます。吾々の方でこれを三ぼうと申します。たゞ三ぼうではお分り難うございますから、これに解説を加へますと……解説といふほどではございませぬが……ケチン棒に聾に泥棒、この三つのぼうは幾ら惡ういうても差支ございませぬさうで……といふのは、聾は耳が聞えないから寄席へお出でがございませぬ。けれどもさうばかりも申されませぬ。もしお客樣方の御親類の中に聾のお方がございましたら、お詫を申上げておきます。その次がケチン棒、ケチン棒の人は木戸錢を拂つて寄席へ來るよりは、木戸錢を貯めてそれに利子が付いて何萬圓……さうはなりませぬけれども、吝嗇な方は寄席へお出でになりませぬ。けれどもさうばかりも申されませぬ。御親類方の中にケチン棒の方がございましたら、お詫を申上げます。それから次が泥棒、泥棒のことは幾ら惡くいつても『やい今輔何だつて乃公の惡口をいひやアがつた。泥棒や……』と云うて出る者はございませぬ。けれどもさうばかり申されませぬ。お客樣の御親類の方の中に……これはある氣遣ひございませぬ。ですから、この三ぼうは吾々社會の方では、當り障りのないものとしてございます。



○『おーい』△『えゝ』○『氣のない返事をするな。この間ッから用事があつて探してゐたのや』△『何や。何か呉れるのか』○『何言うてゐるのや。人の顏を見れば、物を貰ふ氣になつてゐる。外やないが、友達の和助な』△『ウム』○『えらいもんや』△『何が』○『何がつて、今度引越しをしたから目出度い』△『ハア、引越しすると目出度いか』○『一概にさうもいへぬ。けれども友達も大勢あるが、裏から表へ引越したものは唯の一人もない。そこへ行くと、和助はなか〳〵えらい奴や。長い間裏に住んでゐて、今度金が出來て表へ出た。家も大きうて、二間半間

口の一寸した家や。まア目出度いやないか』△『何か、人間ちふものは、裏に住んでゐて、表へ出れば目出度いか』○『さうや』△『私は裏に住んでゐて、表へ出るからえらからう』○『何をいふ。それは用があつて出るのや。表へ出て住はんければ何にもならぬ。外の友達はそれぞれ何か祝ひ物を持つて行つたが。どうぢや、義理といふものは缺かれんもんや。私とお前と二人で、大したことはせんでも、何か祝ひをしてやらうかと思ふが……』△『あゝしてやらう〳〵、何でもしてやらう』○『えらさうにいふな。そこで相談ぢやが、遣ひ物がむづかしい。何か斯う爲めになる物で、立派な物で、値の安い物はないか』△『えらいむづかしい物やな。すると何かえ、先方の家へやつて、爲めになるもので、立派なもので、値の安いものがえゝのかい』○『さうや』△『それなら焚付や』○『なにツ』△『焚付……』○『馬鹿ツ、引越しの祝ひに焚付がやれるかい』△『けれども、爲めになつて立派で値が安い……』○『阿呆なことをいふな。もう少し體裁のえゝ、もつと輕いものがえゝな』△『ハ



ア、それでは罅裂の入つた瓢簞……』○『馬鹿にするな。罅裂の入つた瓢簞が何になる』△『でも輕うて體裁がえゝわ』○『阿呆なことをいふな。お前に相談しても、そないな詰らぬことといふやらうと思つた。實はこの間和助の家へ行つて見たら、内儀さんが七輪でお飯を炊いてゐた。お内儀さん何で七輪で飯を炊くのや、お前先の家に竈があつたやないか、そないな吝なことせんがえゝといふとな。吝やない、今年内のお方が年廻りが惡い、年廻りの惡い時、竈さんをいぢめると、三方の荒神さんが祟るによつて、據ころなくかうやつて七輪で炊いてゐるのや、けれども他所から貰うた竈なら差支おまへんといふたが、これは竈祝うてくれといふ謎や。まア詰らぬ物をやるより、二人で竈を祝うてやつたらどうや』△『感心〳〵。流石は清さん、苦勞人だけにえゝところへ氣がついた。併し竈は幾らばかりするのや』○『さうやな。先づちよつと見られる竈なら五圓やな』△『ホウ五圓ちうと、割前にすると二圓五十錢づつか』○『さうや』△『五十錢銀貨五つで』○『ウム』△『十錢の白銅なら二十五枚』○『さうや』△『五錢の孔のあいたなら五十個』○『さうや』△『一錢銅貨なら二百五十個……』○『ウム、えらう勘

定が詳しいが、お前何を持つてゐる』△『何もない』○『馬鹿ッ。無い物なら勘定せんでもえゝわい』△『清さん、お前あるかア』○『あるかア……あるかなどといふ言葉は、人を疑ぐる言葉や。憚りながら男ッちうものは、閾を跨げば七人の敵がある。表へ出るのに十圓や二十圓の金を絶したことはありやへん』△『ハ、アえらいな。そこに持つてゐるか』○『今日はない』△『ない……ないならそんなに言はんでもえゝわ』○『ないといふと、餘計に腹が立つ』△『變な氣性やな』○『時に金公、相談ちやがな』△『ウム』○『今、お前と私とこゝで腹を合はせてな』△『ハア、ベツタリと合はせるか』○『何言うてる。二人が一つ心になつて、他へ行つて盗をたゞ持つて來る趣向があるのや』△『ヘエー、連印で借りて來るか』○『さうやない。お前も知つてゐるやらう。南久太郎町の溝の池の東側に道具屋がある』△『ウム、ある。立派な道具屋で、昔からある家や』○『彼所の店にこの間からえゝ加減の盗が出てゐる。賣物ちやが、あんな重い物を誰も持つて行かんので、出しッ放しにしてある。今夜私とお前と天秤棒一本持つて、ソッと行つて持つて來るといふのはどうや』△『成程』○『そこで少し趣向があるのや。道具屋の一丁ほど手前から、



その天秤棒を二人で重さうに擔いでゐるやうな心持で、ヨーショ、ヨーショッと掛聲をしながら行くのや』△『ウム』○『道具屋の表へ行つたら、金公この邊で一服休まうかと、かういふのや』△『成程』○『で、休んでゐる間に、その盗さんの荷造りをする』△『ハ、ア』○『荷造りが濟んだら、さアソロソロ行かうかといつて、天秤棒を肩にあてゝ、今度は本當に重いから、ヨイショッ、ヨイショッと持つて行くのや』△『ハ、ア、して見るとつまり泥棒やな』○『さうや〳〵。早くいへばな』△『遲くいつても泥棒や。ゆつくりいつても沈着いても……』○『何をいうてる』△『泥棒は私嫌ひや』○『誰かて好きなものはありやへん』△『お前のやうに、トン〳〵とうまく行けばえゝけれども、もし間違つたらどないなことになる』○『間違うたら百年目や。二人とも別莊へ行くのや』△『洒落てるな。海岸か』○『何言ふのや。避暑にでも行く氣になつてる。煉瓦造りの高い塀のある立派な構への別莊

や』△『ヘエー、家賃よつぽど出るやうな』○『家賃の出るやうな家ぢやない』△『ヘエー、それでは會社か』○『さうやない、そこへ行つて赤い衣服と着更へるのや』△『派手なことやな。鰌掬ひでも踊るか』○『分らぬ男やな。腰に鎖をつけるのや』△『ヘヘア、迷子にならんやうに』○『何いうてゐる。編笠被つて土を運ぶのや』△『懲役人みたいやな』○『みたいぢやない。懲役ぢや』△『ホウ、私は懲役は嫌ひや』○『誰も嫌ひや、まアそんな事はありやへん』△『ないたら、私も金がないから、やらかすか』○『ぢやア、私は家に待つてゐるから、けふ日が暮れたら、家へ來てくれんか』△『よし〳〵』○『その時に天秤棒と繩を持つて來てくれ。忘れんやうにな』△『よし心得た。左樣なら……』と、そのまゝ二人は、惡いことをたくらんで別れてゆきます。

日の暮れ方になると、金公、汚ない手拭で頬冠りをして、天秤棒へ繩引を引ッからげ、それを擔いでヒョツコリ〳〵出掛けました。トン〳〵トン〳〵。△『今晩は』トン〳〵トン〳〵。△『淸さん、家か』○『これ、大きな聲を出すな。馬鹿ッ、あまりドン〳〵叩くな。



今、開ける』トン〳〵トン〳〵。△『行かうか、道具屋へ』○『馬鹿ッ。ペラ〳〵喋らんかて分つてる。默つて〳〵』トントン〳〵。△『竊盜みに行かうか』○『シーッ、馬鹿ッ。聞えたらどうする。

そんな大きな聲を出しやがつて……』△『大丈夫や。道具屋まで聞えやへん』○『道具屋まで聞えんからというて、野中の一軒家ぢやありやへんぜ。近所の者に聞えたらあかんがな』△『あゝさうか。近所に人の住んでることを忘れた』○『馬鹿ッ、忘れる奴があるかい。ベラ〳〵喋るな』△『そんなら、ちよつと向ふの家へ行つて聞いて來ようか』○『何といつて聞いて來るのや』△『今大きな聲で、竊盜みに行く……』といつたのが、聞えましたかつて……』○『阿呆いふな。第一、時間が早過ぎるがな。日の暮早々來やがつて、そないに早うから仕事が出來るもんかいな。解らん男や』△『そんなら出直さうか』○『まア來たものは仕方がない。待て〳〵』これから二人が時刻をはかつて表へ出る。△『淸さん、何をして行くのや』○『表の締りをして行くから待て。開けておくと用心が惡い。泥棒がはいるとあかん』△『へ、ツ、泥棒はこつちが本家

や』〇『馬鹿ツ、詰らんことばかり喋る男や。まア一緒に來い〱……天秤棒をかつ擔いで、えゝか。ヨイトサツ』△『サノサ』〇『ヨイトサツ』△『サノサ』〇『ヨイトサツ』△『サノサ……』〇『變な歩きやうをしてゐるな。びつこのやうや。どうしたのや』△『慌てゝ足駄と草履を片ッ方づつはいて來た』〇『阿呆やな。足駄と草履をはいて來る奴があるかい。歩き難いのは當然や。片ッ方ぬげ』△『さアぬいだ』〇『おい、尚變になつた。足駄をぬいだのかい』△『いや草履の方をぬいだ』〇『何をしてゐる。馬鹿やな。兩方ぬげ』△『ハ、ア、兩方ぬいだ』〇『當然や』〇『けれどもな淸さん、私は最前からつく〲考へて惟みるに……』〇『をかしな言葉を使ふな。氣味の惡い奴や。どう考へた』△『お前はよつぽど賢いな』〇『何で』△『私は焚付を祝はう、罅裂の入つた瓢簞を祝はうといふたが、お前の話は、溝池の道具屋へ盗盗みに……』〇『馬鹿ツ』△『えゝ』〇『表を歩きながら、大きな聲でそないなこというて、人が聞いたらどうする。黙つて歩け』



△『黙つて歩くと口の中へ虫のわく性分や』〇『惡い性分やな。そんなら仕方がない。唄でもうたつて歩け。唄をうたつて歩いてゐれば、世間の人が聞いても、酒に醉つて唄をうたつてゐるものだと思つて、景氣がえゝわ』△『天秤棒かついで、醉つぱらつて歩く奴はありやへん』〇『何言うてゐる』△『ぢやア一つうたひながら行かうか……大黑さんといふ人は、一に俵を踏んまへて……』〇『何をいひやアがる。情ない唄をうたふな。子供みたやうぢやないか。都々逸とか端唄とかいふ樣な洒落ものをやつてくれ』△『都々逸などは私は唄うた事はないけれども、文句なら作れる』〇『言ふことは大きい。お前のこしらへた都々逸があるかい』△『あるとも』〇『ぢやア聞かせんかい』△『聞かせてもえゝが、お前私から聞いて、他所へ行つてうたふやらう』〇『唄うてもええやないか。聞いた者が、えらい粋な文句やなと賞めたら、これは乃公の友達の金公といふ人が作つたものだといへば、お前の働きが分るやないか』△『それもさうやな。それでは一つ二つ聞かせようか』〇『大きなことはいはんと、やつてみい』△『火鉢引寄せ灰掻

きならし……』○『それは古い文句やないか。主の名を書き目に涙といふやらう』△『違ふ〳〵。それは昔の都々逸や。そんな古いのやない。もつと文化的や』○『生意氣なことをいふな。何といふのや』△『火鉢引寄せ灰掻きならし、燒けた白銅でも出ればよい』○『成程、お前のてさへたものらしいわ。燒けた白銅が出たらどうする』△『近眼のうどん屋にやつて、剩餘錢を取る』○『そんな慾張つたのはいかんな』△『まだある。行燈引寄せ火を掻き立てゝ……』○『成程、どうやら都々逸らしいわ。主の手紙を繰返しか』△『さうやない。にくや襦袢の虱取る』○『汚ないことをいふな。もつと變つたものはないか』△『あるな。硯引寄せ……』○『お前のは何でも引寄せるのばかりやな』△『そんなら引寄せないものをやらうか。胸に手をあて思案をすれば、犬が西向きや尾は東、といふのはどうや』○『當然や。すべて唄といふものは、一寸聞くと解らんで、よく考へると面白味のあるのがえゝな』△『成程、一寸聞いて解らぬのがえゝか』○『さうや』△『やつて見る』○『やれるか』△『やれるとも。沖の暗いのに天鵞絨脚半、賽の河原で錢拾ろた』○『何ぢやか、さつぱり解らんな。どういふ譯や』△『無茶苦茶や』○『無茶苦茶ではあかんがな。もつと變つたのはないかい』△『毀れた枕を飯糊で付けて、といふのを聞いたかい』○『聞かない』△『きかなきや釘でも打つがよい』○『阿呆いふな。一生懸命に聞いてるのに』△『怒つちやあかん。もう一つやらうか……毀れた枕を飯糊で付けて、といふのを聞いたか』○『今、聞いたばかりだ』△『きいたら釘には及びません……』○『何いうてゐる。もうさう喋つて歩いてはあかん』△『どうして』○『この先が道具屋ぢや。そろそろ支度をせんならん』△『支度といつてどないにする』○『何でもえゝから、初めから重い〳〵物を擔いでゐるやうに力を入れて、ヨーイシヨツ、ヨーイシヨツと掛聲をうまくやらんとあかんぜ』△『なんにも擔がんで、そんな掛聲は出んがな』○『仕事をするのに、そのくらゐのことが出來ぬことはない。二三遍稽古しよう。ソラヨーツと』△『シーツ』○『氣のない聲を出すな。重い物を擔い



でゐるのに、口の先でシューッといふ奴はありやへん。うんと下ッ腹へ力を入れて、大きな聲でやつて見い。ソラ、ヨーッ』△『シューッ』○『ショッとやれ。ソラヨーッ』△『ショーッ』○『うまいッ。ヨイトショッ』△『ドッコイショ』○『ヨイトショッ』△『コリヤ〳〵』○『金公一遍休まうか』△『さやう〳〵猫さんの前や』○『餘計なこといふな。仕方のない奴や。其方へまはれ。其方へまはれ（小聲でいふ）』△『エ、』○『其方へまはれ』△『何方へまはる』○『まはらんかい』△『三遍まはるのか』○『馬鹿蹴飛ばすぜ』△『そないな大きな聲を出して、誰か來たらどうする』○『人の眞似をするな。そら持ち上げてゐるぞ。この縄を其方へ、掛けた』△『何の縄を……』○『氣の利かん男やな。猫の下へ縄を敷くのや』△『さうか』○『何をしてゐるのや。早くせんかい』△『早くせいというて、縄がまだ手に届かん』○『あゝ重い〳〵。一遍おろすぜ』△『おろしてはあかん。おろしたら身を潰されてしまふ』○『あかんというたかて持ちきれんわ。おろすぞ』△『アイタ、、、あゝ痛い』○『大きな聲を出すな』△『大きな聲は地聲や』○『馬鹿ッ、間抜けッ、鈍痴ッ』△『何ぢやい。やいッ何をぬかしやアがる。……そないに馬鹿々々いふない』○『馬鹿やから馬鹿といふのや』△『どうせ私は馬鹿や。お前は賢い。乃公は馬鹿にきまつてる。馬鹿やから焚付を祝ふの、罅裂の入つた瓢簞を祝ふのというたら、お前は賢いから、溝池の道具屋へ行つて猫を盗まうと……』○『シーッ、シーッ、あやまる〳〵勘辨してくれ』△『あやまれとはいはん。けれどもあんまりボン〳〵いふものやないぜ。乃公は無理はいはんつもりや。お前が無理か乃公が無理か、道具屋の親父に聞いて貰はうか』

（牛込演藝場にて）

家庭笑話

○

醉つ拂ひが夜更けに質屋の戸を割れる樣に叩いて、

『おい〳〵今は何時だ、ちよつと見て吳れ』

そこで質屋の主人が大いに立腹して、

『誰だ、この夜更けに人の家を起して時間など聞きに來る奴は……。時間が知りたきあ家へ歸つて時計を見ろ！』

すると醉つ拂ひ、

『何だと、家に歸つたつて時計なぞあるものかい、俺の時計はゲーブ…。お前さんの家へ質入けてあるんぢやねえか』



○

大工（鋸を使ひ乍ら）『どうしたんだらう？これやちつとも切れねえな』

大工の子『變だなあ、先刻、あたいが煉瓦を切つた時には、よく切れたんだがなア』



○

或る幼稚園で、教師が動物の眞似して遊びませうと言ふと、生徒が大喜こびで、各自に、馬、羊、牛、豚などを演じたが、ジョンニー一人は隅の方へ凝としやがんでゐた。教師は病氣かと思ひ、

『ジョンニーさん、どうして遊ばないの？』と言ふと、

『叱ツ、叱ツ、先生、鷄が卵を產んでゐるの』



○

父『どうだつた。歷史の試驗は、上手に行つたかい？』

子『……』

父（怒つて）『又駄目かッ』

子『だつて僕が生れてゐない時の事ばかり出るんだもの……』



娯樂室解答

（本文三一〇頁）

詰將棋——答

△一二飛成▲一四玉△二三龍▲一五玉△二四龍▲同玉△二五金▲二三玉△三二角打▲一二玉△二一角成▲二三玉△三二角成迄

拾參手詰

詰碁解答

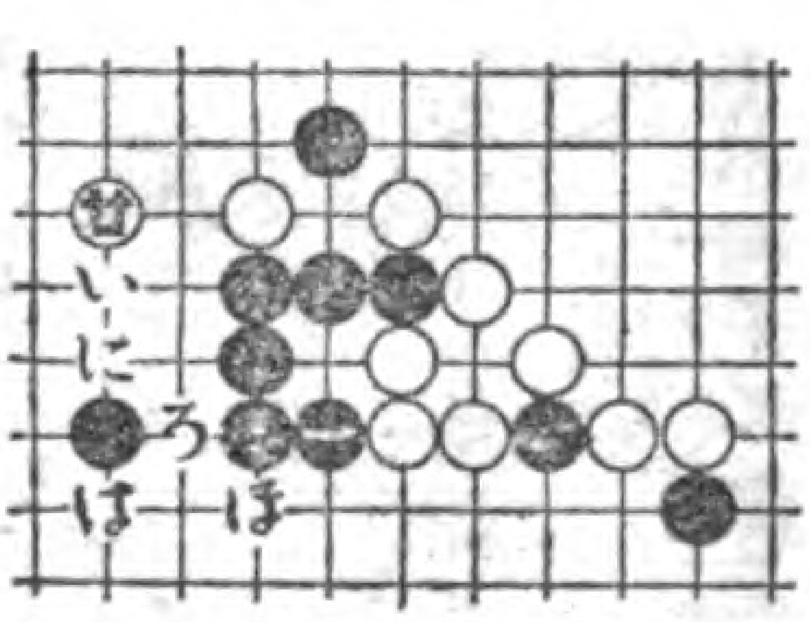
黑先劫　五、七妙

變化（白四ノ手ヨリ）

白四「い」黑五「ろ」白六「五ノ處」黑七「は」白八「八ノ處」黑九「四ノ處」



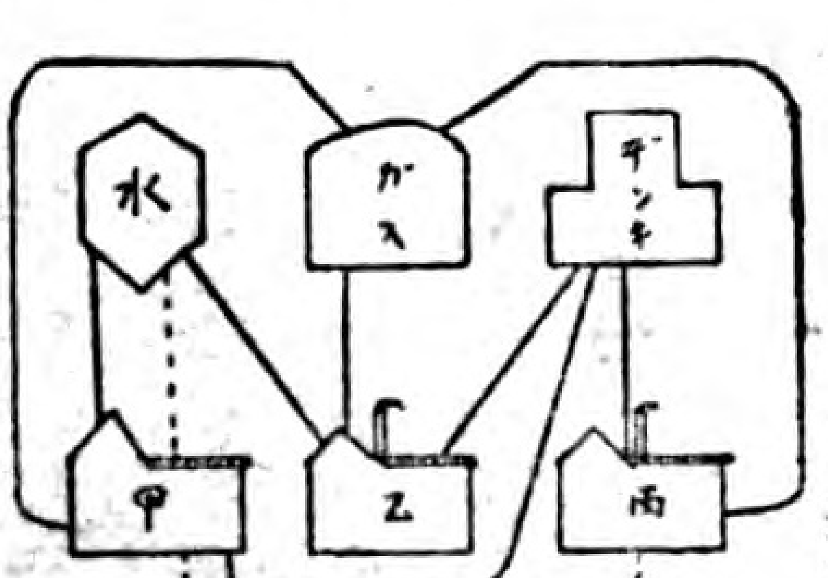
聯珠解答

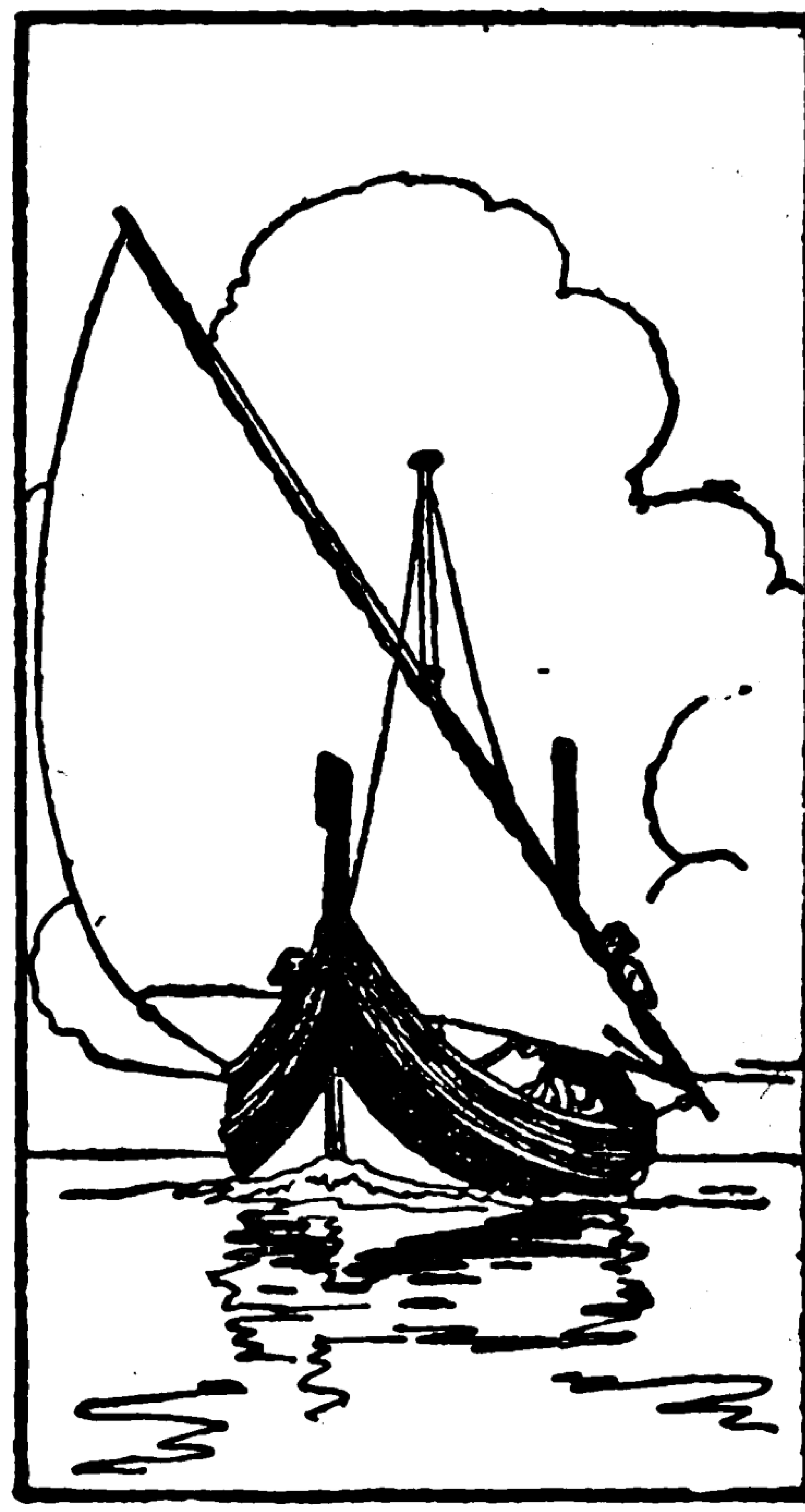


題記に云ふ所の方三勝（甲、乙、丙）三ケ所には全く無關係のケ所で勝です。

△黑（廿一）から『いろはにほ』の四追勝

智慧くらべ答





童話

薪よ、馬になれ

小島政二郎
東風人畫

三

ゼルビンは、薪の馬に乘つて街を通つて以來、すつかり大評判になつてゐました。ですから、警視總監の方から云はせると、探すのに大變樂でした。そんな譯で、ゼルビンが明日の用意に、斧の刃を研いでゐるところを、二三人の巡査で造作なく摑まへることが出來ました。

御殿まで引き立てられて來ると、御門のところに、金モールの飾りの附いた制服を着た侍從達が、百人ばかりズラリと並んでゐました。巡査から、この侍從の群に渡されたゼルビンは、『この人達がみんな揃つて踊つたら、さぞ面白からう。』と思ひました。

すると、忽ち百人が百人とも、お廊下を手振り足踏み面白く踊り始めました。

お部屋には、さつきから王さまが椅子に深深と埋まつたまま、威嚴を見せようと云ふのでせう。姿勢を正し、御自分の鼻の尖をぢつと睨んで待ち構へて入らつしやいました。

そこへ、ドアがさつと明いたと思ふと、侍從の行列が、踊りながら長々とはいつて來ました。餘りのことに、王さまが呆氣に取られて入らつしやる暇に、ゼルビンは悠然とお部屋の中へはひつて、王さまの前に立つと、帽子を取つて恭しく三度禮をし、それからまた帽子をかぶつて、傍の椅子へ腰を卸しました。

『お父さま。』とアレリ王女が、王さまの腕の中へ身を投げ入

れながら云ひました。『この方ですわ。お逢ひになつたら、お父さまも好きにおなりになつたらうと思ひます。』

　しかし、王さまは、それには御返事もなさらずに、『總理大臣。この男を調べてごらん。姫の命に拘はりのあることだから、氣を附けて……。』と小さな聲で御命令になりました。『陛下。どうか御心配なく。』と云つてから、總理大臣はゼルビンに向つて、

『惡者、立て。お前は魔法使だらう？』

『いいや。』

　ゼルビンは、ゆつたり椅子に掛けたまま、落ち着き拂つて答へました。

『お前のやうな惡者がゐては、人民が迷惑する。第一、國のためにならん。わしは總理大臣の名を以つて、お前を死刑に處す。』

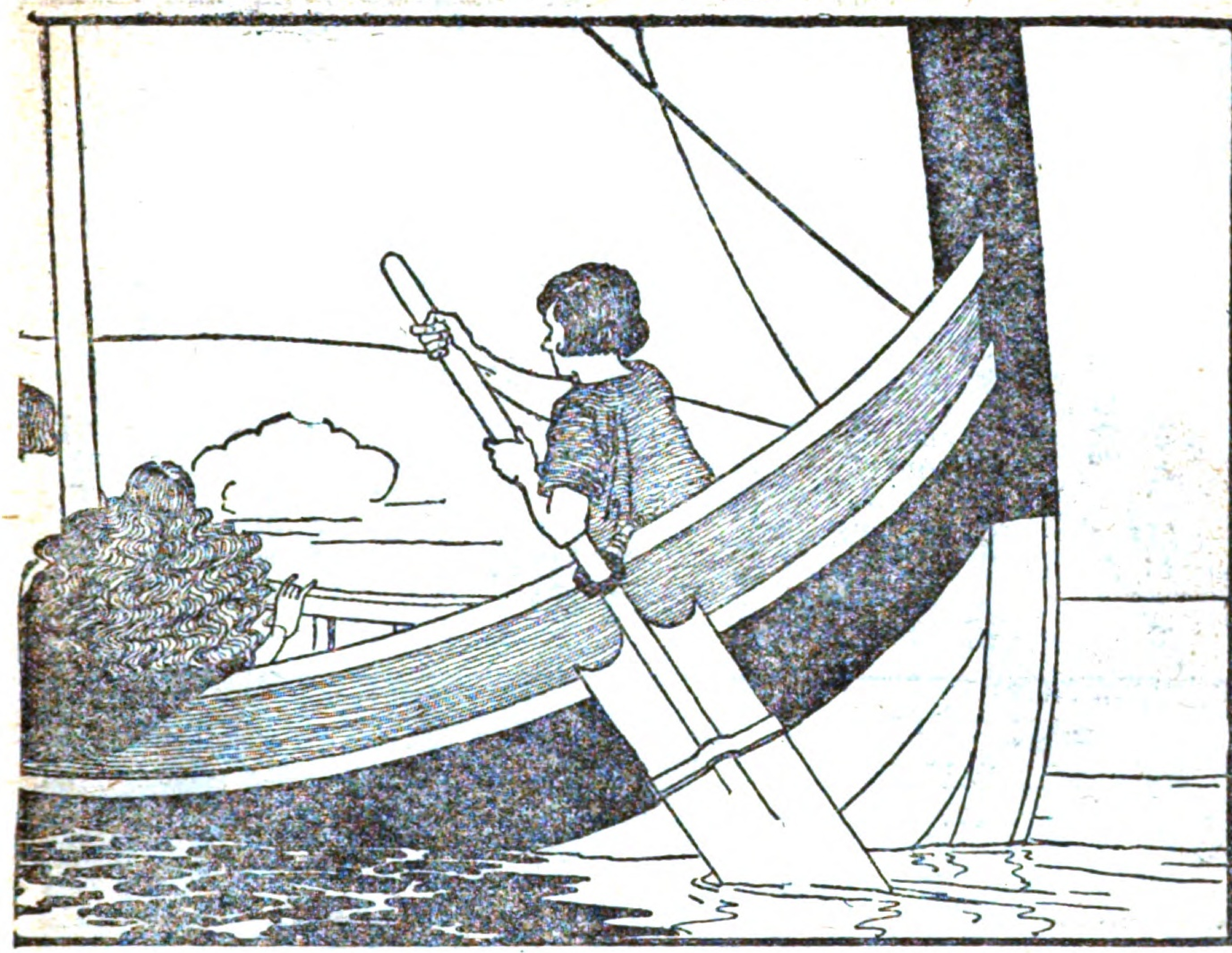
『面白い。』

　ゼルビンは一向平氣でした。

　しかし王女さまの身になると、氣が氣ではありません。

『お父さま、どうかこの方を許して上げて





下さい。この方こそ、この國の立派な後繼になる方です。』

王さまは困つておしまひになつて、暫く考へて入らつしやいましたが、

『よろしい、皆の者、あの二人を結婚させてやつておくれ。しかし、魔法使を國に置く譯には行かん。二人を大型のボートに乘せて、海へ流してしまつておくれ。後はどうならうとも、波に任せよう。』

これを聞いた總理大臣は、『ああ、慈悲深い陛下。裁判の正しい陛下。』と跪いて感心しました。

王さまは、

『それはさうと、わしが傍にゐなかつたら、姫の身はどうなることやら。――さうぢや、侍從長。侍從達に命じて、總理大臣も一緒にボートに乘せておくれ。この賢い大臣が姫の傍にゐてくれれば、それが、わしにはせめてもの慰めぢや。』

驚いたのは總理大臣です。

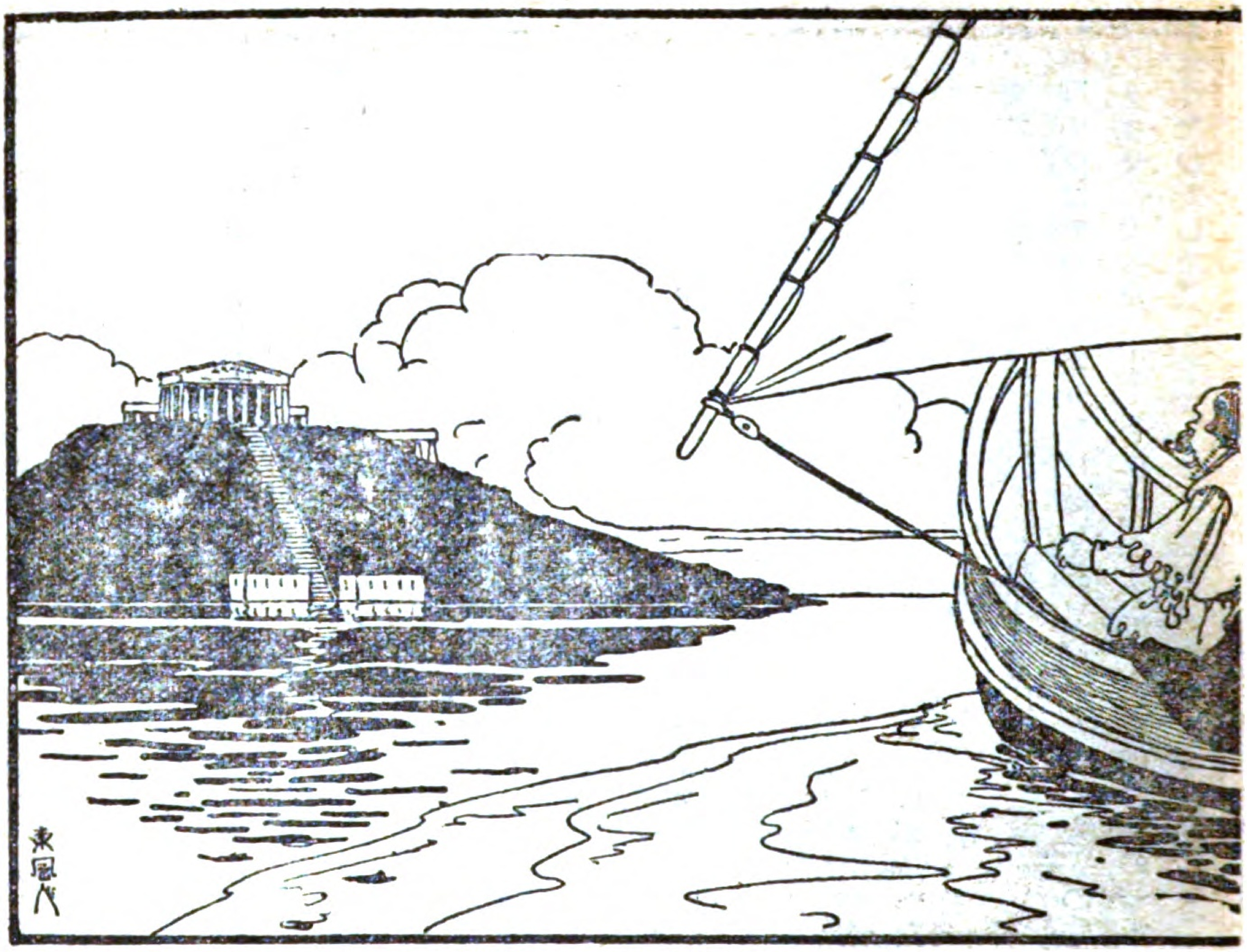
『陛下。どうぞそればかりはお許し下さい。』と願ひ出ようとする暇もありません。忽ち大勢の侍從に擔ぎ上げられて、ボートの中へ運ばれてしまひました。

ゼルビンと、王女と、總理大臣と、三人は間もなく、自分達の乘つたボートが、大海の眞只中に來てゐるのを知りました。

ゼルビンは舵を取りながら、船乘りのうたふ勇しい歌を唄つてゐました。すると、突然、

『まあ、あなた、御覽遊ばせ。あんな綺麗な御殿が。』

女王の聲に、ゼルビンが目を上げると、いつか船は綺麗な島



の近くへ來てゐて、丘の上に大理石の宮殿が、朝日を照り返してゐるのが見えました。御殿からは瑪瑙の階が波打際まで長く伸びてゐて、静かな波に洗はれてゐます。

やがて船をそこへ着けると、三人は階を昇つて行きました。

『頼まう、頼まう。』

一人先きに門の前まで辿り着いた總理大臣は、大きな聲で案内を乞ひました。すると、門が、

『あなたは見知らない方だが、何御用ですね？』と聞き返しました。

『御主人にお目にかかりたいのです。』

『御主人ですつて？　御主人は、ゼルビン大王ですよ。ゼルビン大王がお出でにならなければ、この御門は明きませんよ。』

遅れて、ゼルビンがアレリ王女の手を取つて門の前に立つと、門はひとりでに音もなくスル〳〵と明きました。はひると、そこが前庭で、大きな月桂樹が幾株も枝を擴げてゐる下に立つと、晴れた海と空とが、廣々と見渡せました。

『まあ、なんてい〻景色でせう。こんな處で休んだら、どんなにい〻心持でせう。』と王女が息をはずませながら云ひました。

『全くね。ここへ腰を卸さうぢやありませんか。』

それを聞いて總理大臣が、『生憎椅子が一つもございませんが……。』と殘念がつた時でした。ふいに、

『ここにございます、ここにございます。』と優しい聲が聞えて、スル〳〵と安樂椅子が走つて來ました。

腰を掛けると今度は、
『かうして海を見ながらお食事をしたら、どんなにお美しいでせうね。』
『至く。どこかにテーブルがないかしら。』
すると、『ここにございます、ここにございます。』と云ひながら、丸いテーブルが駈けて來て、三人の前にチヨコナンと留まりました。
『まあ、立派なテーブルですこと。ついでに、お皿があるといいんですけど。』
かう云ふ王女の言葉が終はつたか終はらないうちに、
『ハイ〳〵、ここにございます、ここにございます。』と鈴のやうな聲が聞えて、大皿小皿取りまぜて三十枚、コロ〳〵轉つて來て、テーブルの上に行儀よく並びました。
續いて從兄のナイフとフォーク、叔母さんのソースなども駈けつけて來ました。肉が來る、果物が來る、テーブルの飾りに薔薇の花や鈴蘭の花までが、加勢にやつて來る始末でした。
『ゼルビン王陛下。』この時、何と思つたのか、總理大臣が立ち上つて、『どうか召上つて下さい。これは皆わたくしが拵へたお料理でございます。』
と、突然、『噓吐くな。』と云ふ聲が聞えました。
總理大臣は驚いてあたりを見廻しましたが、どこにも人の姿は見えませんでした。――それは、すぐ近くの御殿の柱の一本が云つたのでした。
『陛下。』懲りずに、また總理大臣が云ひました。『私は決して噓は申しません。私は正直で忠義な陛下の家來でございます。』
『噓吐くな。』
『どうもこの御殿はよろしくない。――陛下、こんな、柱が物を云ふ氣味の惡い御殿は引き拂つて、もつと賑かな御殿へ參らうではございませんか。』
『君はどこへでも行きたいところへ行き給へ。』
『ゼルビンさま、私達はここにをりませうね。ここは本當に幸福の島だと私思ひますわ。』
すると、總理大臣は、『陛下。私も陛下のお傍にをりますれば、いつも幸福に感じてをります。』
『噓吐くな。』
『陛下。どうぞあの聲に、お耳をお貸しになりませんやうに。どうか私をお信じ下さい。私は陛下を敬ひます。』
『噓吐くな。』
『柱め。お前のやうな噓吐きは、月の國へ行つてしまへ。噓の國へ行つてしまへ。』
『噓吐き。お前こそ行つてしまへ。』
その聲が聞えたと思ふと、突然總理大臣の體は橫なぐりに空中へ持つて行かれて、あツと云ふ間に、雲間に見えなくなつてしまひました。恐らく噓の國へさらつて行かれたのでせう。
さて、ゼルビンとアレリ王女の二人は、その後もずつとこの島に住み續けて、仕合せよく暮しました。(をはり)



情熱時代

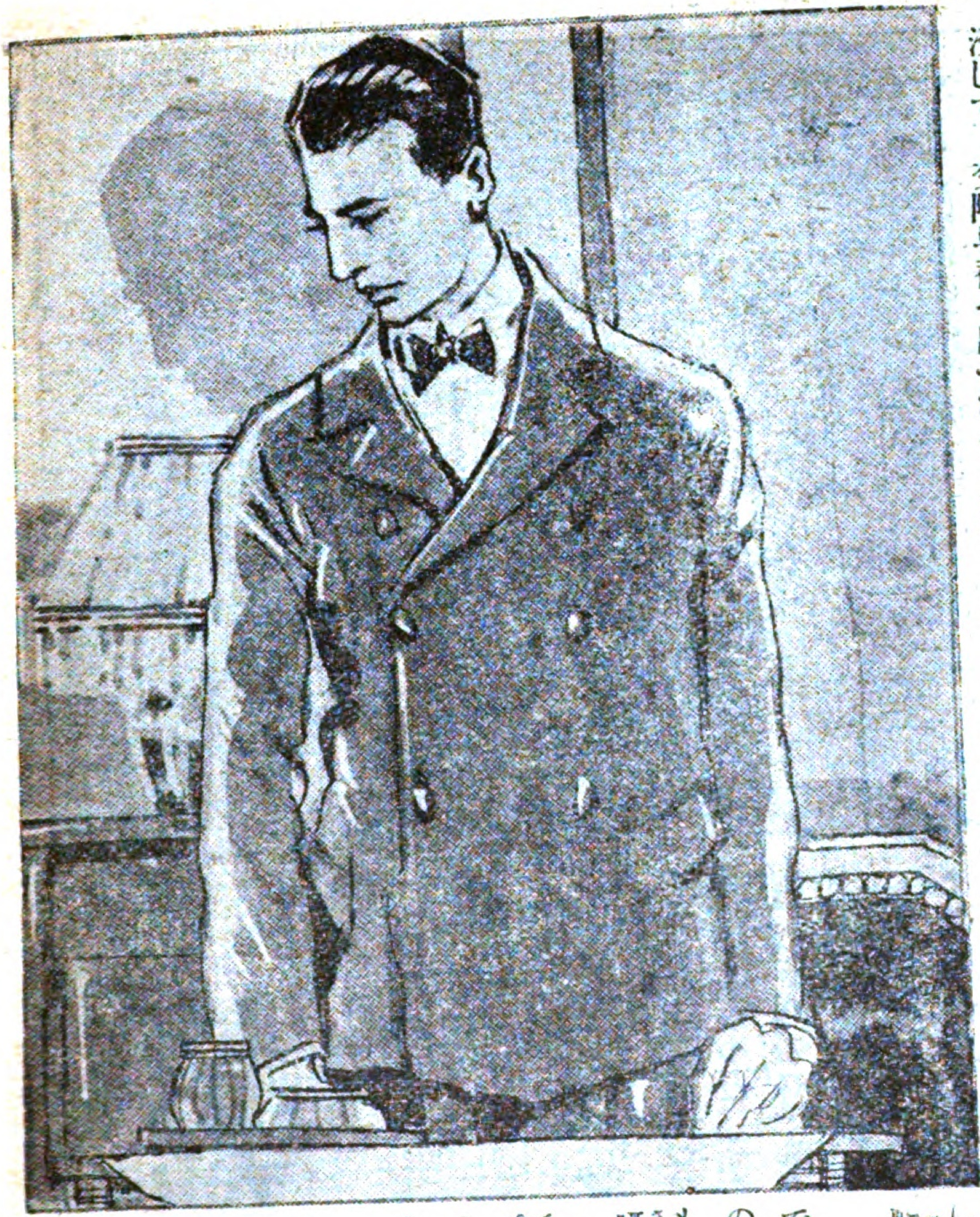
三上於菟吉
岩田専太郎畫

動搖

——昌一郎に取つては、人生は文字通りの春だつた。戀は惠まれた。望みはかなつた。そこで、好事魔多しといふと不吉なやうでもあるが、善はいそげの諺もある。彼は千世子との結婚式を、この美くしい陽春がすつかり歇きてしまはないうちに擧行しようと決心した。

彼はかうしたことにかけて、特別に相談すべき——若しくは指揮を仰ぐべき、いかなる親戚も年長の先輩も持つてゐなかつた。いい事か惡いことかは知らず、完全な自由を保有してゐる青年だつた。周圍には事業の上では斷えず彼に忠言を試みたり、勵ましたりしてくれるものもある。が、その人達は、感情方面にまで立ち入ることを好まぬ連中だつた。

須藤千世子が、昌一郎と約婚したといふ噂が、廣い社交界にパッと立つと、心あるものはいくらか眉をひそめないでもなかつた。一たい、須藤千世子とはどんな家柄の娘だ、父親の名が、今は世に沒いとしても紳



士録に見出せるか？　誰れが彼女の過去を詳しく知つてゐるのだ？　その女の身についた財寶はどれほどあるのか？　なぞといふ疑問が、あらはに口へこそ上されね、用心深い人達の胸に上つたのは事實である。

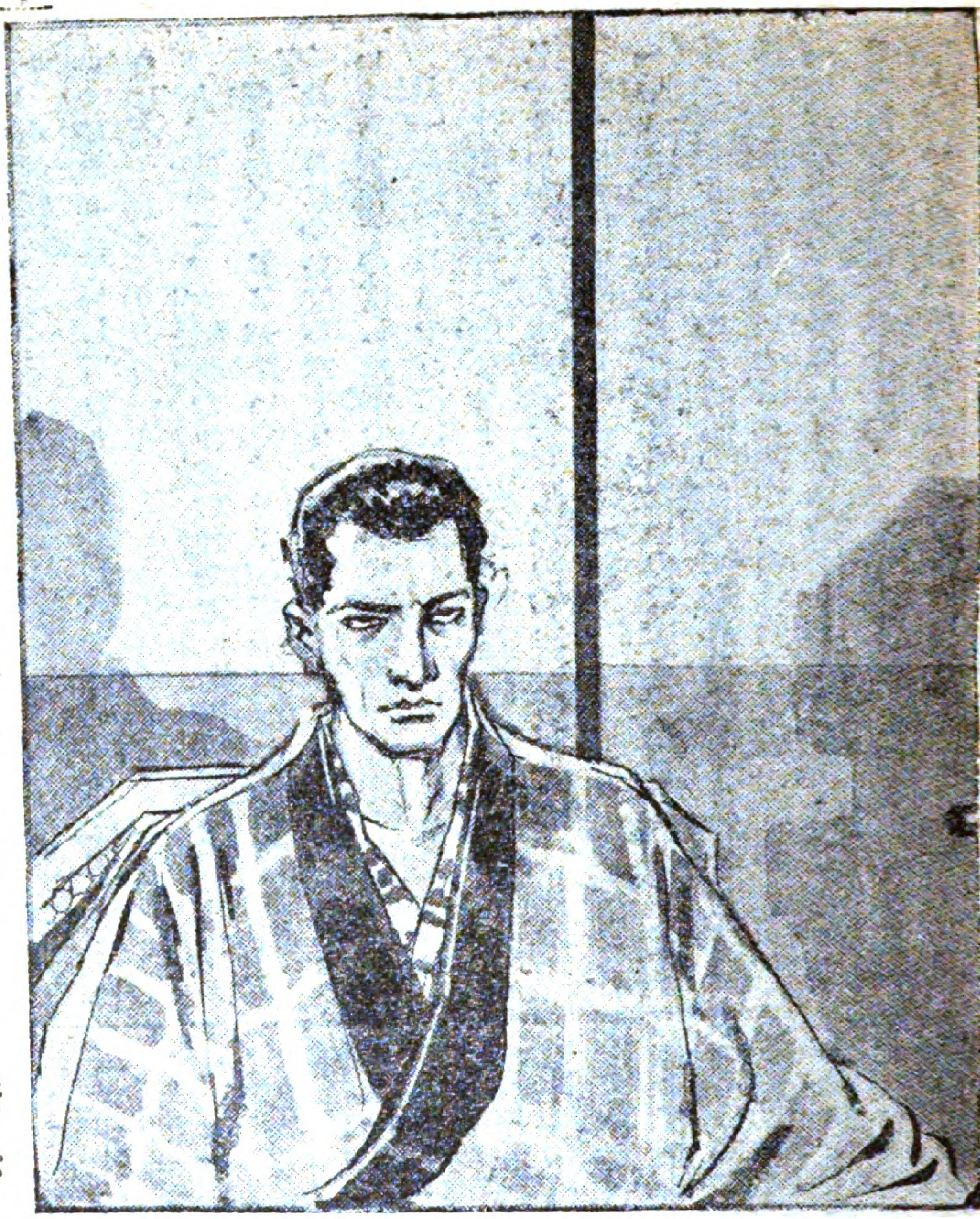
しかし、さうした人達にしても、昌一郎が何も花柳の巷に溺沒して、交際場裡へ出せぬやうなたぐひの女性を引き入れるといふでもなし、文明的な交際の後に、正常な約婚をしたのであるから、さまで彼のために相手の素性を心配もしなかつた。みんなは思つた――これまで世間に名も知れなかつた女だから、格別高い家格の生ひ立ちではあるまい、しかし昌一郎ほどの悧巧な青年が自分で妻と定める以上、屹度すばらしく賢こい、美くしい女性であるには相違ないのだ。あの青年ももう婚期に達してゐる――ふさはしい嫁なら、われ〳〵にしろ祝盃を擧げるに吝さかではないサ！

たゞ、一部のうら若い女人の間では――これまで仲には内々自分自身が、あの著明な青年實業家の胸を黄金の鏃で貫ぬきたいものと願つてゐたかも知れない娘たちの間では、とやから芳しからぬ囁やきもまじつてゐた。

『――千世子さんて、去年の秋ごろからよく音樂會へ出て來る方でせう――アメリカから歸朝したとかで――何だか、どこか妖女じみてゐる笑ひ顏を見せるじやないこと？』

『ええ、何となく品がないやうなところがあるわねえ――美くしいには美くしいけれど――

『あの方に目をつけて射とめたところを見ると、なみ大ていの腕じや無いわ。一たい、これまで會なんかで逢ふたびに、昌一郎さんのあとばかり追ひかけてゐた人達は、まんまと異邦人にサラはれ



たといふ形じやないこと？』

『ホ、ホ、あなた御自身のことを言つてゐるやうにきこえるわね。』

しかし、いよ〳〵結婚式が迫つて來た時、媒酌人には公卿華族の紺小路子爵夫妻が立つといふので、世間でも、定めし千世子の家も以前は相當な紳士であつたのだらうと承認した。紺小路老子爵は、家産は豐かではなかつたが、京都の華冑界では、清廉のきこえが高かつた。

世間の人達は、紺小路の子息が商科大學を出たばかりで、昌一郎の秘書部につとめてゐることを知つてゐるものは殆んどなかつた。だから、紺小路子爵ほどの人格者も、わが子かはいさに、昌一郎のねんごろの頼みを謝絶することが出來なかつたのだといふ裏面の消息は洩れることもなかつた。

すでに、結婚披露會への案内狀も發送されてしまつた、あるのびやかな夕ぐれだつた。昌一郎は、この二日ほど以前から風邪の氣味だと言つて會社を缺勤してゐる山田近一を訪問した。

山田近一は、今は立派な高級會社員となりすましたので、いつまで昌一郎の食客として暮してゐる要もなく、本郷の高臺町に一家を作つた。書生が一人、婆やに小間使といふ小人數で、サツパリと住んでゐるのだつた。

昌一郎は小間使に帽子を渡しながら訊ねた。

『御主人の御病氣はどうですね？』

小間使は相手には氣づかれなかつたが、ちよいと返事に困じたやうな顏をして、しかし悧發な娘らしく言葉を濁して答へた。

『はい、格別のこともないやうにお見えでございます。』

どんなわけで、主人が病氣でもないのに病氣と言つて、會社を休んでゐるのか、彼女には深い意味はわからなかつた。だが、彼女は主人の命令で二三日以前多少熱を出してゐるので缺勤する旨を會社へ電話で知らせたのを憶ひ出したのだつた。

『どの部屋にお休みだね？』

と、昌一郎は懇意づくに、寢室へはいつて行かうとするのを、小間使は、

『大變取り散らしてをりますから、こちらでお待ち下さいまし。』

と、言つて、玄關脇の洋風に飾つた一間に導いた。

間もなく、ドアが開いて、どてらすがたの、なるほどたつた今まで床についてゐたやうな近一が、思ひなしか少し窶れて、いくらか髯をのばした顏ではいつて來た。

昌一郎は責めるやうに言つた。

『――君も他人行儀だな！　病氣の時は寢てゐなければいかんじやないか？　僕は枕元で話したかつたのですよ。』

近一は青白い顏に笑みをうかべた。

『いゝえ、それほど不快くもないのですよ。たゞ、醫者が、肺尖に異狀を感じるから少しの間寢てをれなんて――僕としてはもう出勤してもいいとさへ思つてゐるのです。』

『いけないよ、大事にしてくれねば――それに君のからだは、さう言つては何だが――』

と、いく分昌一郎はためらふやうにして、

『あの時分無理をしてあるだらうからねえ。』

『さうですとも。放浪時代の僕のからだは一日だつて健やかだつたことはなかつたのです。あなたにあの時出逢はなければ、今ごろはもう此の世の人ではなかつたかも知れない――』

『全くあの頃の君と、今の君では見違へるやうに健康になりましたよ。顏も目も生々して來た――お互にまだ若いのだからね。これからが働らきざかりだ。』

『さう言へば、昨日は御披露の御案内を有難う。』

と近一が言つた。

『あの方も、いよ〱今月の十二日にやることになつたが、君に何から何までお世話になりたいと思つてゐたのに、病氣では困るね。』

――チラリと、近一の男らしい眉根の間に暗いものが走つた――が、すぐにそれは消えた。

『僕も出來るだけお手傳をしたいと思つて、是非とも早く癒してしまはねばとあせつてゐるのです。格別大したこともないのですから、御出度い祝宴に缺席するやうなことはないつもりでゐますが――』

『必らずさうありたいと思ひますよ――若し、僕の一世一代のよろこびの式に、君がつらなつてくれなければ、大きな空だからね――たつた一人の親友と言つてもいい君だもの。』

近一は顏をしかめた。明らかに唇を曲げた――よほど激しい苦痛を怺へるやうな表情だつた。

昌一郎もさすがにそれを認めた。
『どうしたね？ どこか苦しいのですか？』
『ええ、胸が時々――どこか胸の奥の方の筋が痛むのです。』
近一は昌一郎を見ずに答へた。
『大事にしたまへ、第一、僕なんぞが來たからと言つて、起き出すなんか間違ひですよ。僕は君とは內輪以上の內輪と思つてゐるのだから――何だか、見舞に來て、却つて君を苦しめるやうなことにたつてしまつた。』
『いゝえ、そんなことはありませんよ、さして大病でもないのに、一も安靜、二も安靜で寢てばかりゐるのもたまりません。』
――しかし、その時には、昌一郎はもう椅子を離れてゐた。けれどもすぐには別れを告げようとはせずに、彼は微笑した。
『千世子さんは逢ふたびに君によろしくと言つてゐますよ。あの人は君にたつた一度逢つたばかりだが、大變君の人柄を讃めてゐた――あの人は僕の分身のやうな位置にゆく／＼なつて貰はねばならぬ人だから――と、僕が說明すると、ほんたうに男らしい、才氣にあふれた素晴らしい方だと言つて、君のやうな片腕を得てゐる僕を祝福してくれたよ――僕はひどくうれしかつた。』
近一は寧ろ寂しげな口つきで、昌一郎を見返して、
『あの人がそんなことを言つてゐましたかネ。』
と、呟やいただけだつた。
昌一郎は微笑みつゞけてゐた。
『僕も兩親を失つてから隨分淋しい生活をして來ましたよ、しかし、今後は考へても樂しい。運命がひどく急に、君のやうな友達や千世子さんのやうな戀人を授けてくれた――もう今後はちつとも淋しいことはないだらう。』
と、しみじみ言つて、
『オヤ、それにしても、折角靜養中の君を引擦り起して、とんだ妨害をしてしまつた。僕はもうおいとましよう。』
彼は手を差し伸べた。近一はその手を握りしめた。近一の掌に温かい、柔しい觸感が傳つた。
『じやあ、失禮。』
『左樣なら。』
近一は若い社長を玄關まで送り出して二階の書齋へ戻つた。そしてデスクの前の大きな肱椅子にもたれかかつた。
彼はじッと前方をみつめる――何を見るでもなく前方をみつめる。眉根に深い皺が刻まれ、唇は引きしまる。歎息とも呻きともつかぬものが、咽喉の奥から洩れた。
――あの男は不思議な奴だ！
彼は思はずそれを口に出して言つた。そして心の中でつけ足した。
――どうしてああ人を疑はずにゐられるのだらう！ すべてのものに温かい心で對せるのだらう！ あの男と握手されると、その刹那だけは、妙に甘ッたるいものが掌に殘るから變だ。

彼は昌一郎を嘲けつてしまはうとして、それが出來ないらしかつた。

――近一は昌一郎が自分を窮境から救ひ出して、安樂と休養とをあたへ、今や相當な位置につけて、明るい、健やかな前途を十分に切り開けるやうにしてくれたことを、これまで一度だつて心から感謝したことはないのだつた。彼はそれを物事に少しも不自由せぬ、ありあまる幸福に生きる男の、ほんの出來ごころの出鱈目なお慈悲のやうに、いはゆる博愛婦人の見榮一方の慈悲のやうに考へて、惠まれながら嘲り、愛されながら嗤つてゐたのだつた。そこへ持つて來て、千世子の事件がはじまつた。昌一郎が溺愛して結婚までしようと決心した女性が、昔つて自分を欺いた美くしい千代子の變身であるといふことを知つた。彼のこゝろは憤りに燃えて、彼女に對する呪咀を、昌一郎の方へも移さずにはゐられなかつたのである。

――つまり、あの女を僕から奪つたのはきやつ等なんだ。十分に黄金を專有するブルジョワどもなんだ――最後に昌一郎だ――きやつこそブルジョワの代表、泥棒の頭だ。

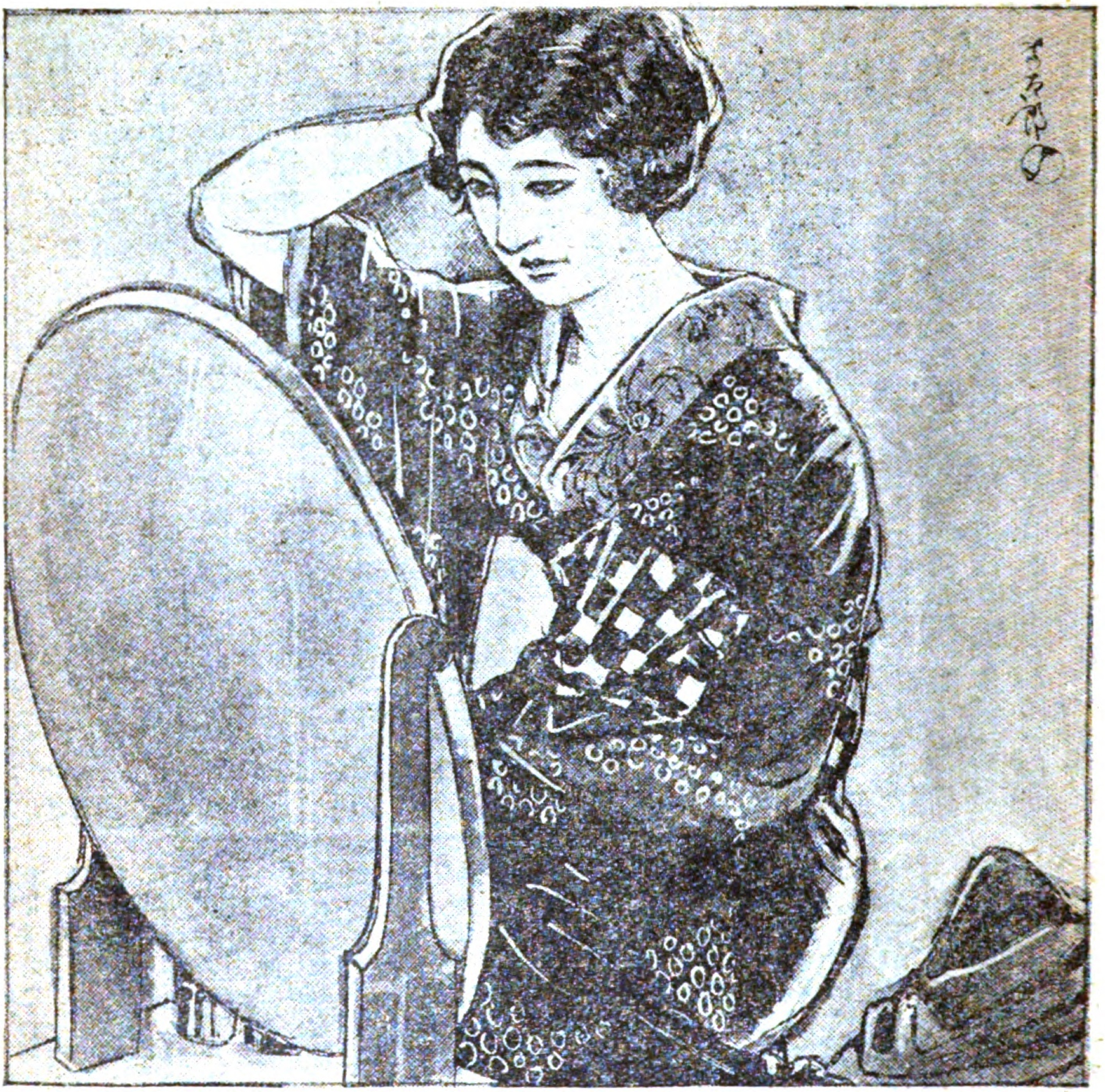
と、そんな風に考へて、どうしても呪ひを解くことが出來なかつたのである。

で、彼は決心してゐた。あの妖婦と、妖婦の新らしい戀人――自分を出たら目の恩惠で穢した男とに、最後に途方もなく怖ろしい復讐を加へてやらうと！彼等の幸福を出來るだけ絶頂まで持つて行つて置いて、俄かに地獄の深みまで引きずり落してやらうと！

彼はだから結婚式には列席しまいと思つた。結婚式では恐らく、彼女としばしば目を見合せねばならぬであらう――彼女の叔母とも、時と場合に依つて呼んで來た老女とも逢はねばならぬであらう――その場合、新らしい榮華に得々たる彼等を見て、自分の心が果して靜かで冷たくあり得るかどうかがあやぶまれた。彼はさうしたところでボロを出したくない。結婚式を滅茶滅茶にする位のことでは氣がすまない。一度はみんなをもつと有頂天にさせて置いて、その後すばらしい打擊をあたへてやらうと考へるのだつた。

――さてこそ、もうぢきに結婚式が擧げられようとする今、わざと假病を使つて出社しないのは、その當日の缺席を自然ならしめるためであつた。

――そこまで惡どいことを企んだ近一であつたが、そして出來るだけこの決心を緩めまいと、殆んど地下の惡鬼にさへ誓ひを立てた近一であつたが、あの昌一郎の、何の隱匿もない、まるで少年時代の親友同志のやうな、平明で、深切で、秘しごとの一切ない友情に接すると、ともすればわれにもなく人間同志信じ合ひ愛し合ふことの樂しみとでもいふやうな氣持に胸を押し浸されて來るのをどうすることも出來なかつた。最初のうちはさうした感情を押し潰すにさして困難も覺えなかつたが、新位置を据ゑられて、毎日會社で社長としての昌一郎と顏を合せてゐるうちに、あの美しい心を持つた友達の愛が、だん／＼



に叩くなな胸に食入つて來るのであつた。

——近一は、社長の訪問を受けたあとで、惱みが頭を一ぱいに塞めてしまつたやつた氣がした。

——僕はどうすればいいのだらう！　さりとて、今更女女しくあの連中にどうして降參出來るものか！

彼は自分の憤りをわれと煽るために、あの過去の欺かれた激しい戀の綺すがたを思ひうかべて見た。甘い、華やかな思ひでは、今はそれだけ若く、暗かつた。彼は彼女があの南支那の海港で、うまうまと彼の口車に乘せて、金持の老外國人といづくともなく去つてしまつた日のことを思ひ出した。あの時——あの手短かな置手紙を假寓の机の上に見出した時、彼は髮の毛を掻きむしつた。唇を嚙み破つた。あまりに怒りが強かつたので、自分で死ぬにも死ねなかつたが、それからついこなひだまでのあの絶望的な流浪生活は、むしろ死そのものよりも平らく酷たらしくはなかつたか？そして、あの時、殺してもあき足りなく思つた女が、自分の舊友で、今は社長と賴

む昌一郎の妻とならうとしてゐるのだ。

――さうだ、僕には、斷じてこの事實を默殺することは出來ない――飽まで復讐せずにはゐられぬ。

彼は下唇を嚙みしめた。けれども、最初のやうな物すさまじい怒りの炎は魂を燃え焦さないのだつた。

千世子と近一

山田近一の心がこのやうに動搖してゐるとは、千世子の方では知る由もなかつた。

彼女はもはや昌一郎をすつかりやはらかに腕の中に抱きしめてしまつたものと信じることは出來たが、たつたひとつ胸の底に痞へてゐるのは、山田近一の存在だつた。

彼女ほど、どんなに自分を彼が愛したかを知るものはない――あの頃の彼女は餓か貧乏で、一日一日の生活があやぶまれ、その上、以前は兎に角お孃さま育ちで暮したこともある身であれば、虛榮心は炎のやうに燃えないわけには行かなかつた。自分が小さなカフエの給仕娘に落ちた時に、昔の級友の華々しい洋行の噂や結婚の評判は新聞の婦人欄をにぎはしてゐた。彼女はどうしても、いまはしく乏しい生活から刎ね起きたかつた。それに必要なものは黄金だつた。そして、彼女の、向ふ見ずな、方法も手段もえらばず榮華を追はうとする氣持を、惡いことには父母なきあとを、自分から引き受けてくれた叔母がそゝつた。獨身もので、勝氣で、賴りない彼女は、千世子を利用することに依つてわが身の慾望を遂げようと、寧ろ千世子その人よりも焦躁した。

そこで、當然、彼女等の大きな慾求への踏石として、幾人かの男性が出來ねばならなかつた。

山田近一は、その人身御供に上つた一人だつた。

彼女は、彼女が操縦した幾人かの男性を心にかぞへて見て、別にそれ等を捨ててしまつたからと言つて氣がとがめもしなかつた。彼等のほとんどすべては、たゞうら若い自分の貞操を弄び、肉體と心とをほんの一時のなぐさみものにしようと試みただけではなかつたか？　さうした人達を、一足さきにこちらでお拂ひばこにしたとて何であらう――

しかし、彼、山田近一だけは――

彼女は彼が自分の甘心を得るために、恩人の財寶を掠帶したことまで知つてゐる――どうして、あの貧賤な、孤獨な青年が、あの場合あゝいふ大金を蓄へてゐるはずがあるであらう――近一はあくまで自分のものだと誓言したが、さうした明るい性質のものでないのは賢こい彼女にはよくわかつてゐた。しかしその上、彼は彼女のために、許婚の仲の恩人の娘まで捨て來てかへりみなかつた。

あれほどの秀才を、あんた墮落の淵に投げ入れたのは、みんな彼女のなせるわざであつた。

とは言へ、彼女はまだ安心してゐた。近一を自分の目で見るまでは安心してゐた――あの亂雜な南支那の港町に置きざりに

ひてしまつた以上、あんなに戀に燃えてゐた近一は、十中八九はあの港で身を持ちくづして、二度と明るい世界へは出られなくなつてしまふであらう——自分が出て行く華々しい世界と、あの不幸な青年のそれとは全く對蹠的な位置を取るであらう——
——して見れば、もう二度とこの世でめぐり逢ふはずもない——
——まして自分は名まで變へてしまつてゐるではないか——

それなのに、ああ、全く世間は狹いものだ。小さな／＼箱の中のやうなものだ。アメリカ三界まで歩きまはつた末、東京へ久しぶりで戻つて來て、思はぬ幸運であのやうに望み多い青年實業家と婚約まですることになつた時、その新らしい戀人の側近に、曾つてあんなにむごい目を見せて捨て去つた山田近一を見出さうとは！

千世子は坦々たる大路を全速力でドライヴして來た樂しい自動車のつい鼻先に、大きな巖石が落下してゐるのを見出したもののやうに驚愕してしまつた。

——もう、私は駄目かしら！

彼女はあの時さう自分に呻いて、そして喪心したやうになつたのだつた。

だが、たやすくは陣を退けない——こんなにこんなに苦しんで、やつと手に入れようとする絶頂の天花、深谷の寶玉ではないか——彼女はもう一度死力をつくさねばならぬ。それで、あの場合、あのやうに誘惑の媚びに全力を傾けたのだつた。案外近一は靜かだつた、荒立ちもしなかつた。事を破つて快哉を叫けび、恥ぢをあたへて喝采しようとするやうな容子も見えなかつた。

彼女はホッとした。この分では大したこともなくすむかも知れぬ——この人はまだ／＼いのちがけで一度愛した自分に十分の未練を持つてゐるのかも知れぬ。それならば方法がある——

昌一郎の玄關で近一に出逢つて、僅かの時間言葉をかはした時、千世子の胸に浮んだ考へはこれであつた。そして相手に未練があると見きはめた以上、千世子のやうな生活をくぐつて來た女性に取つては、男一人はもはや木偶のやうな氣がするのだつた。

けれども、その後二度ばかり、私かに電話をかけて會見を申し込むたびに、いつも手輕なことわりばかり受けるのが不思議でもあれば不安でもあつた。若し、近一が昔のままの戀を——多少濁されてはゐるにしても——あの愛着の名殘りを抱いてゐるとすれば、身を賭けての誘惑にいつまでも持ちこたへるはずがない——ことに依ると、近一は、何かひどく惡辣なことを考へてゐるかも知れぬ。

彼女も馬鹿ではなかつたから安心ばかりしてはゐられなかつた。もう一度、華々しい擧式の前に近一に逢つて、心の中が探れないまでも、偵察戰だけはこゝろみねばならぬ。

——昌一郎が近一の病氣を見舞つた、恰度その日のたそがれだつた。千世子はゆつくり午睡を貪ぼつたあとの、健やかなからだを入浴して、あざやかに化粧ひ立てて、華美によそほつて



外出の車を命じた。しかし、彼女はそのあでやかなすがたを人目にたゝぬやうに黒い繻地のマントにくるんで、そして近一の栖居のベルを自ら押すのだつた。

小さな名刺を書生に渡すと、ことに依ると玄關ばらひを食ふかと豫期してゐたのが、こころよく客間に引かれた。

千世子は主人が出て來る前、さげ袋の中から黄金色の小鏡を取り出してのぞき込んだ。何といふ、自分ながら若々しさ！ 美くしさ！ 彼女は水々しさに於ては近一とはじめて逢つたそのかみにはいくらか劣るにしても、今や新らたな艶冶と媚惑とが添はつたのは自分にもわかると思つた。

――あの方がどんな考へをもくろんでゐるにしても、屹度私の力で私に便利なやうにして見せるわ。私も千世子よ！ 東京から南支那、シスコからニューヨーク、どこでも一度も男性との決闘に、ひけを取つたことはない千世子よ！ なんの、近一さんなんぞに！

千世子が鏡をしまつたところ、ドアが開いて山田近一がはいつて來た。近一は今日昌一郎と逢つたままのどてらすがただつた。

『まア、御病氣！ お顔のいろもいけないし、お窶れになつたやうですわ。』

千世子は、さもびつくりしたやうに、早口に人情をこめて叫んだ。

『ええ、少し工合がわるくつて會社も休んでゐるのですが――』

千世子は不思議なことに思つた。今夜の近一の目には、こなひだ逢つた時のやうな、激しい怖ろしいきらめきもなかつた。妄執の炎も燃えてゐなかつた。彼は疲れ切つたやうな目で、あでやかな千世子の化粧やみなりに見入つただけだつた。

『まア少しも知りませんでしたわ、早くお見舞に上らなければなりませんでしたのに――』



『いゝえ、社長をのぞくと、誰れも僕の病氣は知らないのです。』と、近一は言つて、
『しかし、實は、明日にもあなたにお目にかゝりに伺はうかと思つてゐたところなのです。』
——さてこそ、この人は惱んでゐる——この人の病氣はおそらく私の結婚問題に起因してゐるのだわ。
彼女は一種の勝利を感じた。
『私の方こそ始終お目にかゝりたかつたのよ。お目にかゝつてとつくりとお詫びもしたいし、それからの御相談もしたいと思つて、何度もお電話したのでしたけれども——』
近一はじつと千世子を見たあとで、目を落した。
『お目にかゝらねばならぬと、たつた今も思つてゐたのです。』と、近一は、相手の言葉を耳にしなかつたやうに呟いた。
『近一さん。』と、ある間を持たせて、ねんばりと、彼女は呼びかけた。
『あなたは何だつてそんなに他人行儀にばかりなさるの——あなたが、私を出來るだけヨソ〲しくなさらうとする氣持はよくわかるわ。でも、あんまりですことよ——私が今晩どんなつもりで、かうして伺つたかを思つて下すつたら！　なぜ昔の通りに、せめて二人ツ切りのところでは呼んでは下さらないの——ね、近一さん。』
山田近一はしづかに目を上げた。
『僕はいろ〱なことを言ひたかつたし、またしたかつたのです。千代子さん——昔の名で呼ばせて下さい——僕も捨てられた男らしく、いくらか考へてゐたこともあつたのです——しかし、僕にはあの友達の善良さがあんまり恐ろしくなりました。あの人は、薄絹に刃物を包んで、安心してこれを摑めと友達が言つたら、平氣でそれを信じて摑む人なのです。僕には、ああいふ人物を相手に闘ふことは出來ない——僕一個としては、もう長く東京にはゐないつもりになりました。あの人の側から遠

くはなれてしまふ決心をする外はなくなりました――』
近一が言葉を途切らせた時、千世子はいくらか蔑すむやうに相手をながめた。
『――まあ、では、すつかり失望して、氣が弱くなつて、私の幸福をじつと見てゐることも出來なくなつて、逃げ出すのね！　ホ、ホ、でも、それが私に何の關係があるでせう。
『さうですわ、私にもあなたの氣持はよくわかりますが、あの人は、いろ〳〵缺點もありませうけれど、ほんたうに善良な、神さまのやうな人ですから――』
近一は少しも嫉みをまぜずにうなづいた。
『さうです、あゝいふ人は神とは云へないまでも、人格者として尊敬されねばならぬのです――その側に、僕のやうな人間がついてゐるのは惡い――それは恐ろしいことです。だから、僕は去らねばならない――』
――ほんたうに願つてもないことよ！　あなたがどこかへ行つてしまつて下されば！
彼女はさうした胸の中をばすこしも見せずに、さもかなしみにたへぬやうに言ふのであつた。
『――でも、何もそんなに御自分をお責めにならずともいゝではありませんの――あなたは、何もあの方に惡いことをなすつたわけではなし――古いお友達のために、力をお貸しして上げるのですもの、あなたの方こそ感謝をうけていいわけではありませんの。』
『いゝえ。』と、近一は沈んだ目で千世子を睨めた。
『僕は狂犬の族をうけてゐるやうな人間です――今は惡熱がをさまつてゐるが、ある刺戟をうけて狂ほしい血が燃え出すと、どんな害を人にあたへるかもわかりません。ですから、その前に身を退くのが、狂人の義務だと考へるのです。』
『全く、今夜はあなたは不思議なことばかりおつしやるのね！』と、千世子は微笑した。その微笑には、底の方にある嘲笑がふくまれてゐたかも知れぬ。しかし、近一は笑みかへさなかつた、また嘲けりをいかりもしなかつた。
『どの道僕が、あの人の側から離れてしまふことは必要なことなのです。誰れが何と引き止めてくれても――心からの友情で僕を引き止めてくれるのは、恐らく昌一郎君一人だけかも知れませんが、しかし僕はどうしても行かねばならぬのです――僕が遠く去るといふ決心はもうきまつてゐます。ですが――』
と、近一はしづかな目で、しづかな調子でつゞけるのだつた。
『僕ひとりが、彼の側をたつても仕方がないのです。僕は僕以外の人にも、あの人から遠ざかつて貰ひたいと要求しようと考へてゐるのですよ。』
――刺すやうな、鋭どい、激しい、しかし冷たい注視を、千世子は感じた。
――おゝ、この人は何を考へてゐるのだらう？
何やら不氣味なものが、千世子には感じられた。彼女はいぶかしさと不安さとをかくすことが出來ずに、相手の心をよみ取らうとして、近一を見返した。
近一は前と同じやうな調子で繰り返した。
『僕以外の人にも、あの人から遠ざかつて貰ひたいと要求しようと思つてゐるのですよ。』
（つゞく）

絕對無害 色を眞白くす 脫色素法

ニキビそばかすを除くは極めて容易なり

本文の執筆者は斷言したい。曰く……誇大な廣告文なるものは百中の八九十までは虛飾誇大の羅列だと……從つて、一般の讀者が廣告文を見る眼は、その內容を多大に割引して判斷せねばならぬ――ところが――茲に掲載される『レオン洗顏クリーム』の紹介文は絕對に信用されて宜しからうと思ふ。次の文章は些少の割引もなく讀まれたい。

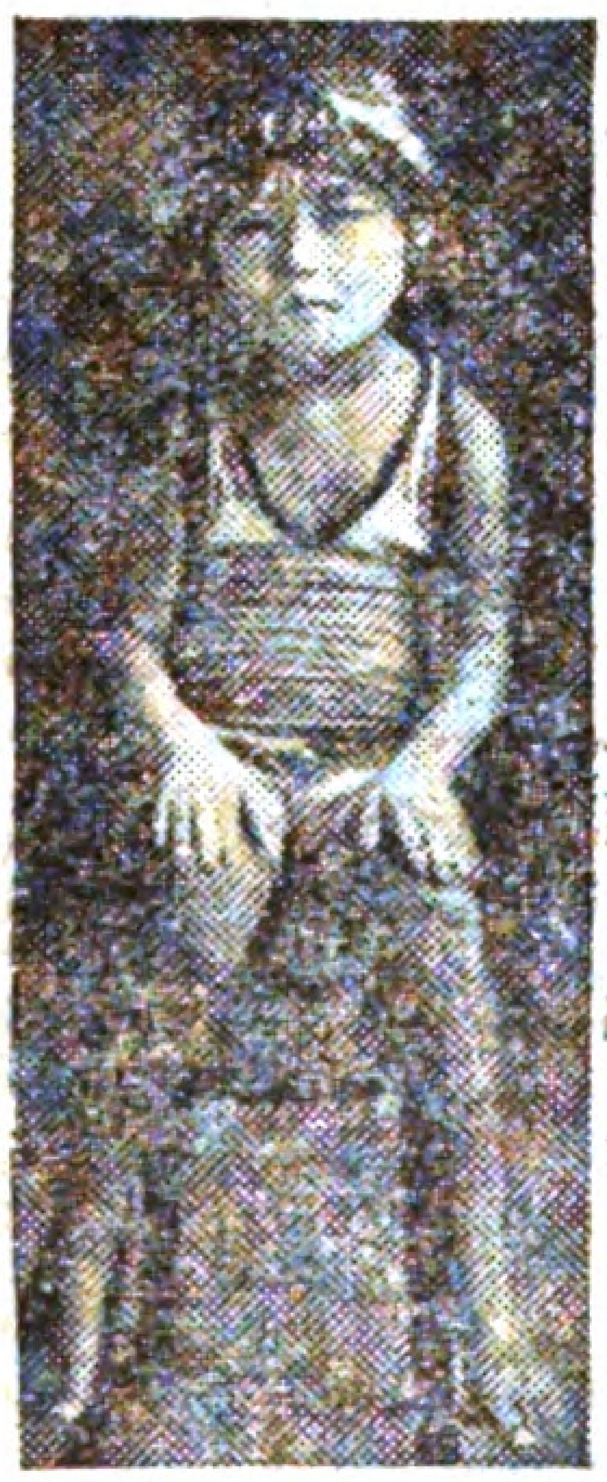
何故ならば、この一頁の廣告文中には、所謂宣傳的の色々の巧妙な言葉を悉く除きて商工省特許局の特許條文の一部を拔萃して報告するに止める。レオン洗顏クリームなる品は、今日までの化粧品中には、曾つて類例を聽かぬ日英米三ヶ國の專賣特許品である。どんな色の黑い人でも、レオン洗顏クリームを二月も連續的に使用すれば、色黑の原因たる色素が漂白されて西洋人の皮膚の如くに綺麗な純白に變化するのは當然であつて、その點が至便である。これだけの權威ある發明品も、大々的な宣傳をせぬので知らぬ人も多いやうである。幸ひにして此文章を見付けた人は早く實驗あれ。默つて使用すれば顏や手の皮膚が別人の如く白く美しくなるので友人などは吃驚するであらうが、**ニキビ**そばかすに惱んでゐる人々には藥品などより何層倍も迅速な奏効だから御知らせを乞ふ。

(附記)廣告本位の他の色々な類似品に失望せる人は特に本品を用ひ初めて滿足すべし

特許條文の拔萃

英國專賣特許。第一一七〇六〇號。
米國專賣特許。第一二七八五一八號。
日本專賣特許。第三二一九〇八號。第四一六〇四號。第三八一一九號。

(前略)……右ヲ溫湯ニ於テ使用スル時ハ極微細ノ狀態ニ混和セル硫黃ハ石鹼泡沫中ニ薄ク散布シ『コロイド』硫黃ニ近似セル働キヲナスト共ニ、石鹼ノ加水分解ニ伴ヒテ苛性曹達ト結ンデ硫化曹達ヲ生ジ、普通ノ硫黃泉ニ於ケルト同樣ノ効能ヲ發揮スルニ至ル。此ニ成生セル硫化曹達ハ一部分分解ニ依テ生ズル有機酸又ハ酸性鹽ニ觸レテ、硫化水素ヲ發生スル事アリト雖モ、石鹼乳中ニ散布セル『ワゼリン』膜ニヨリ水分ヲ遮斷セル過硫酸曹達ガ此際石鹼ノ溶解ニ從ヒテ水分ニ觸レ過酸化水素ヲ放チ、此分解ニヨリテ生ゼル強力ノ酸素ト樹脂石鹼ノ『レジネートドライヤー』ニ類スル一種ノ接觸作用ノタメ、新鮮ノ傾向ヲ帶ビタル附近ノ酸素ニ依リ概ネ直チニ酸化サレテ新鮮硫黃ニ復シ、一層強力ニ作用スルニ至ルヲ以テ(中略)多量ノ極微硫黃ヲ遊離シテ美白ノ効果ヲ一層有力ナラシム。(下略)



顏と手だけ白くなりし少女の寫眞

△注文の方法▽

レオン洗顏クリームは、その特殊効果を認めて、各種雜誌社の代理部でも取扱つてゐるが御希望者は、發賣元たる東京市牛込區西五軒町通三番地レオン商會(振替東京一四一二二)へ御送金あれば直ぐ輕量小包で發送する。(代金引換はハガキで申込めばよし)但し發賣元への書面には【キング】で見た事を必ず御記入あれ(振替用紙は裏面に書く)――價格は眞面目な美顏料として極めて安價である。德用大瓶金三圓四十錢(送料十八錢海外五十五錢)なれば賣藥等より遙かに多量で凡そ二ヶ月以上の使用となり他の化粧料や石鹼まで節約し得るので頗る經濟である。また御都合で小瓶金一圓四十錢(送料內地十二錢海外四十五錢)を申込みてもよい。本品は効果に疑問の餘地なき確實の發明品なれば何人も躊躇なく直接注文を寄せられたい。注文者の御便宜にて東京市本鄉區駒込坂下町四八講談社代理部(振替東京六六二九番)に申込まれてもよい。

(注意) あまり早く色白くなりたる故に何等かの害なきかと照會書面に接するも却つて皮膚を艶々となす安心あれ。

(日燒) ヒヤケの如きは一二回にて漂白される夏季の必需品なり。

清秋讀書の好季節

名著評判記

世界の大人物

世界のありとあらゆる方面に活躍する有名人物が今日の地位を得るに至つた經路。

◇更にそれらの人達が將來どんな事をしようと考へて居るかを知ることは極めて興味ある問題です。

◇鶴見先生の著『壇上紙上街上の人』は先生が自ら世界の各方面に旅行せられて、



◇各國の政界、事業界、文壇、映畫界等の有名な人物に親しく面會されてその上で出來た書です。

◇讀んで行くと、實際に自分が世界の大人物と膝をつき合せて話を聞いて居るやうで、

◇興味津々たる中に大きな感激に打たれる實に良い本だと讃辭を受け、賣れること〱發賣後早や四十二版といふ賣行。

水を泳ぐ浮島

葦の茂つた島が浮び上つて泳ぎ廻り、海軍の大演習のやうなことをやる沼があります。うそだと思はれるかも知れないが實際に山形縣にあるから不思議です。

日本全國にはこんな珍聞や奇習が隨分あります。

それを片端から尋ねて、面白く説明したのが理學博士日下部四郎太先生の著『二人行脚』です。

彌次喜太の道中記を見るやうに面白く、その上科學の知識が知らず〱の中に頭に入る素晴らしい本だと大評判です。



世界の神秘境

『二人行脚』で日本全國の珍しい場所や不思議な習慣を探ね終はれた日下部先生が今度は世界をめぐつて珍蹟を探ね、

◇或は支那に行つて絶世の美人、楊貴妃と奇怪の通信を爲す隱者を見破り、

◇或は龍宮の出現かと疑ふ美しい南洋の情況を描き出し、或はめらめらと燃上る篝火を圍んで踊り狂ふ北歐人の生活を叙す等、

◇其他幾多の世界の神秘境を手に取つて分るやうに描かれて『異國行脚』といふ書名で本社から出して居られます。とても面白いと大評判になつて居ります。

太平洋の彼方

太平洋を中心に世界の活躍が始まつた今日、國民の最も注目すべきは合衆國の國情です。

◇鶴見先生の著『北米遊説記』は先生自ら排日の最中に彼地に渡り祖國の誤解を釋かうとて



米國一流の人々の家庭に入り込み、寢食を共にして、思ふ存分心の底を打あけ、又幾十萬の米國人を相手に講演された血涙の記錄。

◇

加ふるに先生の麗筆で描かれた米國の人情風俗は我々の豫想以外で、米國が生き〳〵して居る原因がよく分り、

◇

而も今迄氣附かなかつた海外から見た日本の姿が知れ、其の他、國際知識が養はれる書に良い本だと大歡迎を受け發賣以來七十餘版といふ盛況です。

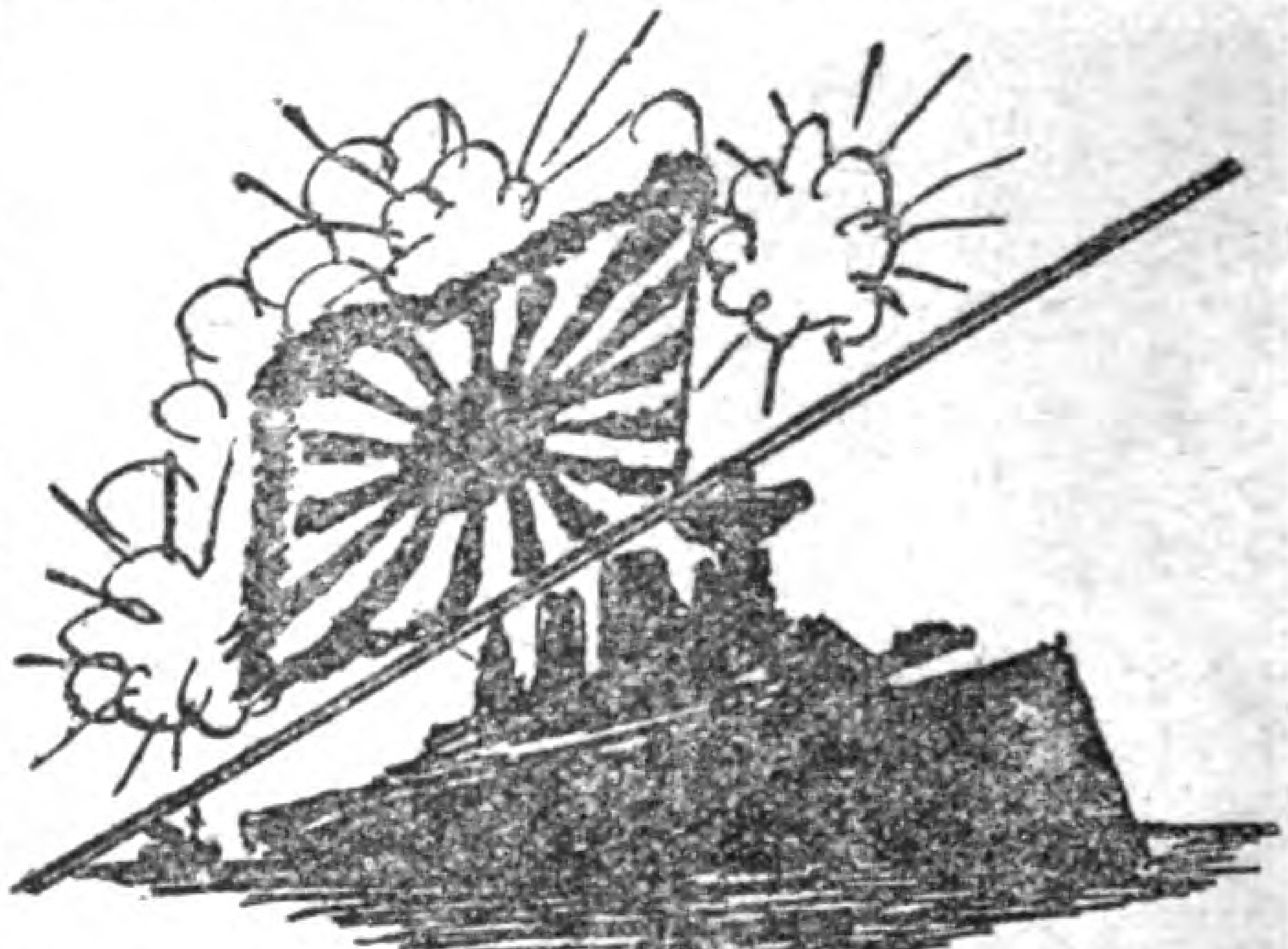
世に知られてない

陸海軍の秘話を多數に織り込んで、我國の陸海軍の始まりから、三大戰役を經て今日に至るまでの光輝ある歷史を始めとし、

◇

その外萬般に亙つて、興味深く說いた本が『陸海軍腕くらべ』といふ書名で本社から出て居ります。

著者は軍事通で有名な陸軍少佐成田篤先生です。子爵、小笠原長生閣下、長岡外史將軍、陸軍少將兼松習吉閣下、



其他の名士から賞讃を受けた書。一般人は勿論、特に靑年訓練に從事する人々には見逃すべからざる良參考書と思ひます。書店でその豐富なる內容を御覽下さい。

致富の苦心

明治のあの波瀾の多かつた時代を乘り切つて今日の三井、三菱の基を築いた財界の巨人、岩崎彌太郎、三野村利左衛門、中上川彥次郎氏等はいかに苦心をしたか？

◇

その骨をけづる如き有樣を描いた『三井王國』及び『三菱王國』の二著が本社から出て居ります。

◇

著者は實業講談で名高い大灘鞍馬先生、その麗筆で描き出された明治の財界の有樣は目に見えるやうで、面白いことこの上なし、その上事業をなすには、どんな辛苦が要るかがあり〳〵と分ります。

◇



今日の世に於ても、その苦心の跡を偲び、その天にも冲せんとする覇氣に接するときは、何ものか有益な暗示を得ることが出來ると思ひます。兩者とも素晴らしい評判になつて居ります。實業に志す人は云ふまでもなく一般人士の御愛讀をお奬め致します、

書目	定價	送料
壇上紙上街上の人	二圓七十錢	十四錢
二人行脚	三圓五十錢	十四錢
異國行脚	二圓八十錢	十四錢
北米遊說記	二圓五十錢	十四錢
陸海軍腕くらべ	一圓八十錢	十錢
三井王國	二圓	十錢
三菱王國	一圓七十錢	八錢

以上何れも大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇〇）發行、全國各地の書店にあり。

樂しきか戀！　悲しきか戀!!

其の時專一の顏は、急に痙攣するやうに引歪められた。意識下の苦惱が、激しく其の眠りを苦しめるのであらう。そして、

『靜代！　靜代！』

と、二言ばかり叫んだ。

『譫言を仰有つてゐるのでございますよ。』

看護婦が云つた。

房子は默つてうなづいた。彼女の、その口許には冷笑が浮んでゐたが、その眼には深い悲みがあらはれてゐた。

『可厭ねえ。女の名なんか呼んで――』

吐き出すやうに云つた。

看護婦は出て行つた。

――病室には、專一と房子と二人きりだつた。

專一は昏々として眠つてゐた。



房子は、病人の寢顏を、いつまでも、いつまでも、じつと打戍り、打戍つてゐた。

激しい愛と、激しい憎みとが彼女の心に躍つた。――命を賭けて愛する男、憎んでも憎んでも憎みたらぬ男。

愛憎元一念、一念の極まるところ唯涙があるばかりだつた。

――彼女の眼には再び一ぱいに涙が溜まつて來た。

彼女は、手巾を袂に探つて、そつと顏におしあてた。ダイヤの輝く細い白い指が、その薄い紫色の手巾に摑まれながらわなくふるへた。

――その姿のしをらしきかな！　どこに、あの女王の誇りがある？　どこにあの妖婦がある？　彼女も亦弱き涙の女性ではなかつたか？

×　×　×　×

以上は文壇近來の大傑作といは

れる、加藤武雄先生著『華鬘』中の一節です。

あまりにもあやしき美貌の故に、命を賭けて愛する戀人專一の親友八代英吉を、憤死せしめた佐竹房子が、憎みを以て愛に酬いられ、呪ひを以て戀に報いられ、遂に、その戀人の兇刃に命をおとすまでの、あまりに美しく、あまりに悲しき半生の哀史！

明眸罪あり、戀は悲し！誠の愛の如



何に解せられにくきか、この一篇こそ實に深刻な性格悲劇で、從來の戀愛小說とは一寸類を異にした處の、謂はゞ戀愛小說以上の戀愛小說である。これ實に作者の近作中最も自信あるもので、字々に血湧き句々炎に馳る一卷、敢て青春多恨の青年士女の愛讀を冀ふ。

（定價一圓三十錢　送料十四錢、小村雪岱畫伯裝幀、大日本雄辯會講談社發行——振替東京三九三〇番）

道徳逆轉！

他人の前に足を投げだしても叱られた日本の婦人が、今や公衆の前で股を開いて運動をやつてゐる。今に女房が靴の先で亭主の頭をけるときがくる。とは佐藤紅綠先生がその名著『東西婦人觀』の中で豫言された言葉。同書は其他現代の婦人を縱横に、痛烈に、皮肉のメスをふるつて解剖してゐる。（定價一圓送料十二錢本社發行）

突飛な求婚！

『實はお娘御を頂きに來たのですが、私に下さいませんか。』すると、娘はびつくりしたやうに座を立つて、パタ〱廊下をかけて逃げて行つた。

これは岡本一平先生の、情熱灼くが如き自敍傳的漫畫小說『どぜう地獄』中の一節です。是非御覽下さい。（定價二圓送料八錢本社發行）

主權？　妻權？

アメリカの或生理學者は人間の髮の毛は五年乃至六年の壽命があると發表した後へ、但し獨身者の髮であるとわざ〱斷つてゐる。女房持ちは時折髮をむしりとられる虞があるのだ。女人崇拜のアメリカは兎に角、日本の家庭はどうだらう？　佐々木邦先生の大傑作『主權妻權』をお讀み下さい。（定價二圓廿錢送料十二錢本社發行）

日米兩雄の大試合！

己れッ！　とばかりジョークの右の猿臂、のびるが早いか山下の首にからみつかうとした一刹那、えゝッ！　空中をブン廻すやうにドドーンと云ふすさまじい地響きと共に、ジョークの巨體は、床にメリこむ程叩きつけられた。

（鳴弦樓主人著『名人達人決死の大試合』中より定價一圓五十錢送料十錢　本社發行）

終生忘れ得ぬ思出話

尊い一分一秒

東京高等師範學校教授 保科孝一

わたしがベルリンへ着いた翌々日のことであつた。名刺を刷つてもらはうと思つて、ある活版所へ入つた。すると六十をよほど越したと思はれるおばあさんが出て來たから、

名刺を百枚刷つてもらひたいが、いつまでに出來ますか。

さうですねエ、明日の午前十時までに刷つておきませう。

もうすこし早く出來ませんか。

お急ぎになるんですか。

えゝ。

『さうですか』といつておばあさんがじつと考へはじめた。自分は別に急ぐのではないが、たゞドイツ語の練習の積でさう言つて見ただけであるのに、からまじめに考へこまれてはすこし氣の毒になつて來た。やがて四五分もたつてから、

お急ぎなら明日午前九時四十五分までにこしらへておきます。



これを聞いて自分は驚いた。急ぎの品物ときいて沈思默考の

末やうやく十五分早めてくれたのだが、あれだけ考へてたつた十五分、人を馬鹿にしてゐると思つた。そしてあんな几帳面なことをいつても、どうせ約束の時間には出來て居るまい、出來て居なかつたら、あのおばあさんをいぢめてやれと淺はかな日本人の考へからほくそ笑んだ、で、その翌日午前九時四十分に活版所の前に行つて時計を見ながら時刻の來るのを待つた。時計の針が九時四十五分を指すと同時にそこに飛び込んでいくと、昨日のおばあさんがニコ／＼しながら『お早う』といつて名刺を渡してくれた。その時自分はなんともいひ知れぬある感じに打たれて脊に汗のにじむのを覺えた。約束の時間を一分一秒も違へぬドイツ人として十五分を早めることが非常な苦痛であつたらう。それを犧牲にして厚意を表してくれたその尊さ！『紺屋のあさつて』を當然のことゝ考へて居る日本人にはこの尊さがほとんどない。自分は非常な感激にうたれつゝ、おばあさんにあつく感謝の意を表してそこを立ち出でた。

まづ力を出せ！

新國劇　澤田正二郎

『正二郎、お前は支那服を着せられて、三井寺の石段の下へ捨てられてゐたのだよ。惡戯をすると、三井寺へ捨てに行きますぜ』

母や祖母は、私が幼い頃から、私を叱る時には癖のやうにかう云つてゐた。それが子供心に深く滲み込んで、俺は支那人なのだな――と、思ひこむやうになり、やがては私の心を卑屈にして行つた。



小學校へ通ふやうになつても、俺は支那人だといふ意識が先に立つて、妙にいぢけた弱蟲になり、他の子供達からも馬鹿にされがちであつた。

『おれは支那人の子だから、こんなに皆から虐められるんだな』

さう思ふと、人知れず泣くこともあつた。

ところが、四年級になつた時、學校での餓鬼大將が何かの事でひどく私を虐めた。さすがの私もたまりかねて、

『なァに、支那人だつて負けるものか！』

眠れる獅子とでも云ふか、今までじつと隠忍してゐた私の反抗心が、この時勃然として眼をさまし、矢庭に餓鬼大將の前に仁王立ちとなると、思ひきつて一撃をくらはした。

その勢に驚いた子供達は、蜘蛛の子を散らしたやうに、一齊に逃げてしまつた。

『おれは今まで凹んでゐたんだ。俺だつて一生懸命になれば、誰にも負けやしないんだ』

私はこの時はじめて伸び〳〵した氣になつて、かう心に叫んだ。翌日からは、今までの弱虫が一變して、餓鬼大將になつてしまつた。

世の中には、自分の持つてゐる力を知らずに、たゞ徒らに不運不幸を嘆いてゐる人がある。卿等よ、泣き事を言ふ前に、まづ力を出したまへ、その時には、きつと君が思ひも及ばぬ大きな力が、君の身體から飛び出すに違ひない！

刀劍鍛錬の實況

文學博士　井上哲次郎

嘗て刀工として有名なる帝室技藝員宮本包則氏が屢々自分の家へ訪問されたことがある。自分も刀一振を鍛つて貰つたこともある。これは眞に見事な名作である。

自分は刀劍に就いて特別の知識を有してをる者ではないけれども、宮本氏が來訪される度に種々相互に刀劍のことに就いて話をしたのである。處が、或時宮本氏が何うか一度自分の刀劍を鍛つ處を觀に來てくれと、斯ういふ話であつた。處が自分は平素學業に忙しく何うも觀に行く氣にはならなかつた、然し餘り度々懇請されるから、それでは一度觀て見ようといつて駒込林町の宮本氏の宅に行つた。さうした處が宮本氏はりゝしく裝束をして、そして神壇に向つて禮拜をし、それから愈々刀劍の作成に掛つた。それを觀ると、粗金の鐵を火に燒いて、鞴で十分に鎔かして、そして其の鐵を鐵鋏で引出して、鐵床の上に上げて二人の若者に左右から柄の長い鐵槌で代る代る鍛たせるのである。鍛つ度に火花が宮本氏の手の上にピカ〳〵と散つて來るが、そこは平氣なもので、其の鐵を絶えず動かして十分に鍛たせる、そしてそれを又水に漬け、それから砂に突つ込み、そして又鞴に掛けて十分に燒き、それから又鐵床の上に上げて前の如く陰陽の調子を以てカチンカチンと鍛たせる。そのやうにして繰返すこと幾十回であつたか、約四時間ばかりかゝつて

漸くアラ方刀のやうな形に造り上げた。それから又それを研ぎ立てて立派な刀に成す迄には餘程の時間を要したことであらうと思ふ。

自分は其の刀の形のアラ方出來た處で歸つたのであるが、其後宮本氏が自分の宅に來られた時に種々又話し合つたのである。處が宮本氏が言はるゝには、他國の刀劍は皆鑄物を硏くのである。日本のはあのやうに粗金から鍛へ上げて、さうして多くの時間を費して始めて刀劍が出來上るので、日本程此の刀劍を念入りに鍛へ上げる處は無い。それで迚も南蠻鐵どころの話ではない。依國一博士に聞いてみると矢張りさういふことであるさうである。尤も他國でも可なり鍛へることはあるけれども、日本程念入りに鍛へる國は無いといふことである。

又、自分の家に嘗て根本通明博士が置土產として呉れてをつた越前住國廣作の鐵扇があつたから、嘗てこ宮本氏に之れを見せた處が、是れは良く出來てをると、斯う言つた。それから更にそれは鍛へてあるだらうかと斯う言つた處が、矢張り鍛つてある、鍛つてないと鐵扇





も刀で切れば切れると言つた。さうしてみると、昔の人が『鋭利鍪を斷つ可し』と言つたのは本當のことで、克く鍛つた刀で切れば鍪も切れる。我が日本は乃木大將が『地靈人傑古神州』と歌つたやうに、昔からなかなか長く模範とすべき人傑が出てをる。是れ等は皆我が國の名刀と同じやうに克く鍛へ上げた人物であつたと思ふ。

宮本氏の刀劍作成の實況を觀て單り刀劍のみでない、人も亦餘程克く鍛へ上げなければ決して萬衆に勝れた眞の逸物ともいふやうな者には成れない。何等自分を鍛へ上げることをしないで、只だ傑物に成らうとした處で、到底成功は六ケ敷い。百錬の後に始めて名刀の出來上るのを觀て、深く感ずる處があつた。あゝいふ刀劍作成の實況を觀たことは決して無駄でなかつたことを今に至つて沁々と感ずる次第である。

牛乳配達をして私を助けた人

救世軍少將　山室軍平



私が十八歳の時、新島襄先生の徳を慕うて京都にゆき、同志社豫備學校に入校した際のことであつた。恰度明日から學校が始まるといふ前日、私は所持した金を費ひ果して一文なしになつた。束脩も月謝も拂へないのは言ふ迄もなく、飯くふ事も出來なくなつたから、斷食して頻りに神の助を祈り求めて居ると、學校の最上級生で吉田清太郎といふ人が、圖らずも私のさうした窮境に墮ちて居ることを知つたのである。此の吉田君は當時二十四歳の一青年にて頗る熱烈なるクリスチャンであつたが、殊に其の頃、彼は半年間毎日、新約聖書、コリント前書第十三章、所謂『愛の章』を通讀し、自分がどうか、そこに書いてある愛を其の儘實行する人物たらんことを、神に願うて居つたのである。

　そこへ彼は私が一文無しになつて苦しんで居る狀を見たものであるから、考へた。『此うした貧書生を助ける爲に苦勞をするのは、それこそコリント前書第十三章を、事實に行ふ所以ではあるまいか』と。そこで彼は或る外國宣教師にたのみ、其の畜うて居る乳牛の乳を、毎日他の一宣教師の宅迄配達し、それから得たる勞銀を以て、私の校費を拂ひ、私をして無事に教場に出でしむるやうな計らひをしてくれたのである。

　彼は又別に私を賄方の雇人として、食事時に同窓諸君の爲に給仕をしたり、又食後に茶碗や皿を洗うたりすることにより、殘肴冷飯にありつけるやう、斡旋してくれた。

　吉田君は斯くして毎日一宣教師の家から、他の宣教師の家まで、牛乳を配達することによつて、十ケ月間私の爲に月謝を拂うてくれたのであるが、彼はそれだけで満足せず、或時私以外

に今一人、同鄕の苦學生を世話し始めたものであるから、牛乳を配つた丈では金が足りないで、或る一月は自分の食料から私の月謝を拂ひ、其のため君は餘儀なくも、十數日間斷食したのであつた。

斷食しながらも、尙課業の餘暇に牛乳を配達し、或日全く疲れ果てゝ一本の大きな木の下まで來ると、忽ち數十羽の鳥が飛んで來て其の枝を搖がし、生つて居る果實を地上に落した。吉田君はこれを見て、地に跪いて神に謝し、それらの果實を拾うて食ひ、聊か餓ゑたる腹を宥めたのである。

又或時は水の瀨に引つかゝつた猫の死骸を見つけ、それを拾うて來て、煮て食うて一時を凌がれたこともあつたさうである。

君は寡言の人であるから、此等の物語もたつた一度、君が學校を卒業する時、私の後日を戒むる爲に洩された以外に、君は多年一度も他人に語つたことがなかつたのであるが、私は此等の始末を聞いた時、何とも言へない感激に充ち溢れた。爾來今日迄、かれこれ四十年を經たけれ共、私はそれを思ひ出しては、今更のやうに自分の愛の足りないことを恥ぢ、犧牲獻身の念の乏しいことを悔いつゝ、いつも自らを激勵して居るのである。

人種を超えて

前早大野球部主將　久保田禎

米國遠征の旅にあつた私達が、ハツフエルといふ美しい市に立寄つた時のことである。そこではホテルに泊らず、各自は市中の米人の家庭に厄介になることになつて、私は主人夫妻と息子に娘の四人ぐらしの一家に世話になつた。

日本のスポーツマンが泊まつてくれる……と、云つて、一家の人達は大喜び。決して贅澤といふのではないが、心からなる溫い待遇は、私を此上なくくつろがせてくれた。その家では、私の名を英語流に、テリー、テリーといつて、親しみを示した。

『テリー、さア溫いパンがある。どのパンがいゝか。ロースト・ビーフもある。さア澤山食べておくれ』

夕餉の時が來て、一家が食卓を圍んだ時、家族の人はさう云つて、私に侑めた。私は妙に打解けた氣分になつて、遠慮なく食べた。家族達にはそれが嬉しかつたとみえて、更に新しい料理などを出して來たりした。

その夜は團欒に打興じ、翌朝はバプテスト敎會に行つて祈禱

をさゝげ、それから私達は公園に行つたりして、一日を樂しく送つた。

さて翌日、私は集合地の停車場へ向つたが、家族の人達はそこまで私を送ると云つて共に家を出で て電車に乘つた。

『貴方はこれから長い旅をする身體だ。さア掛けなさるがえゝ』

老夫婦は立つて、私に席を讓つてくれたりした。私はこの家族の溫い情を思ふと、涙ぐましい氣にさへなつてゐた。停車場に着いた時、私は同行のベニオス先生にこの事を話して、感謝の意を示すと、先生はにつこりと會心の笑をたゝへ、

『久保田君、君はいゝ家へ泊つた。あの家族は、この町でも有名な善良な人達で、教會でも一番淸い信者なのだ。二晩の宿泊で、君が無言の裡にあの家族の美しき溫かさを知つたのは、それこそ言葉は違ひ人種は異るが、愛の溫かさ、人情の美しさには變りがない證據だ！』

と云つて、眼に涙を浮べられた。

げに愛の溫かさ、人情の美しさは、人種を超え、國境を越えた大きな力であることを、私はしみ〴〵と知つたのである。



一生忘れ得ぬ涙！

帝劇女優　森　律　子

『河原乞食！　虛榮心の權化！』

私がはじめて劇界に身を投じて女優になつた時、私の身の周圍には、さうした罵りの聲や嘲りの笑が一齊に浴せかけられた。

母校の跡見女學校では、校友會から私を除名した。親しい友からは、絕交狀が叩きつけられた。世間の眼は、悉く私を冷たく睨んだ。

四面楚歌の聲――全く私はたつた一人、暗い社會へ突き落されたやうな氣がした。しかし、女でこそあれ、一旦決心した以上、きつとやり通してみせる！　今に世間では解つて來る。さ

う思つた私は、人知れず涙を拭ひながら、冷酷な世間と闘ひつづけた。

だが、何といつても、母校の校友會から除名されたことは、私にとつては何よりも淋しく悲しいことだつた。幼い頃から學び育つた懐しい母校、そこには母と慕ひ、父とあがめた恩師の方方がゐられる。もうその恩師とさへ親しむ折が與へられない。さう思ふと、私は泣けて泣けてしやうがなかつた。

ほんたうに私は永い間を闘ひつゞけた。よくもまア辛抱が出來た——と、私は過去を振返る毎に、さう思はずにはゐられない。

爾來十數年、舞臺の上で働くもの丶眞價を世間で認める時が來た。さうしてやうやく私も認められて來た。

ある日、測らずも私を除籍した母校から、記念會の餘興に私に出てくれといふ申込みがやつて來た。餘興といふものには、一切出演をしない私も、この時ばかりは喜んでそれに應じた。

久しぶりで潜る懐しの母校の門、思出多き校舍、それはみな私の涙の種でないものはなかつた。餘興もすんで樂屋へ歸つて來た時、私はそこに誰を見出したであらう。

お丶跡見花蹊先生！　お年よられた、なつかしの先生。先生はわざ〳〵私を樂屋に訪ねて下すつて、私の出演を喜んで下すつたのである。

『まア先生！』

私はさう言つたまゝ、ほろ〳〵と涙をこぼした。その涙こそは、私の一生忘れられない涙である。

現代名士雅號番附

東

番付	肩書	氏名	雅號
横綱	前首相	高橋是清	洪庵
大關	前首相	若槻禮次郎	克堂
關脇	子爵	後藤新平	棲霞
小結	貴族院議長	徳川家達	靜岳
前頭	前法相	尾崎行雄	咢堂
同	男爵	田健治郎	讓山
同	前遞相	安達謙藏	漢城
同	貴族院議員	武富時敏	雁堂
同	文相	勝田主計	宰州
同	前法相	江木翼	洋々

番付	肩書	氏名	雅號
前頭	前遞相	前田利定	鏡川
同	藏相	三土忠造	三嶺
同	前衆議院議長	粕谷義三	竹堂
同	侯爵	蜂須賀正韶	南山
同	貴族院議員	徳富猪一郎	蘇峰
同	樞密顧問官	石黒忠悳	況翁
同	大阪商業會議所會頭	稻畑勝太郎	龍峰
同	前代議士	小久保喜七	城南
同	司法次官	濱田國松	孤松
同	名古屋商業會議所會頭	上遠野富之助	鐵城

番付	肩書	氏名	雅號
前頭	代議士	小泉策太郎	三申
同	貿易商	堀越善重郎	江南
同	政友會總務	秦豐助	嘯月
同	代議士	高橋光威	雄峰
同	生絲貿易商	原富太郎	三溪
同	古河電氣社長	中島久萬吉	華水
同	大日本紡績社長	菊池恭三	登山
同	前勸銀總裁	志村源太郎	百泉
同	横濱取引理事長	井阪孝	反阜

行司・年寄

	肩書	氏名	雅號
行司	男爵	山本達雄	竹溪
同	公爵	西園寺公望	陶庵
同	前遞相	犬養毅	木堂
同	衆議院議長	元田肇	國東
年寄	子爵	澁澤榮一	青淵

西

番付	肩書	氏名	雅號
横綱	前首相	清浦奎吾	奎堂
大關	伯爵	伊東巳代治	晨亭
關脇	民政黨總裁	濱口雄幸	空谷
小結	樞密顧問官	齋藤實	皐水
前頭	樞密顧問官	金子堅太郎	溪水
同	前文相	水野錬太郎	香堂
同	商相	中橋徳五郎	狸庵
同	鐵相	小川平吉	射山
同	前文相	岡田良平	恭堂
同	前文相	鎌田榮吉	竹堂

番付	肩書	氏名	雅號
前頭	前農相	岡崎邦輔	秋圃
同	前藏相	片岡直温	桃偲
同	貴族院議員	永田秀次郎	青嵐
同	男爵	阪谷芳郎	芳水
同	前遞相	箕浦勝人	青州
同	貴族院議員	杉田定一	鶉山
同	前勸銀總裁	梶原仲治	吹浦
同	代議士	松田源治	獨青
同	貴族院議員	内藤久寛	栗城
同	貴族院議員	關直彦	相村

番付	肩書	氏名	雅號
前頭	中央證券社長	南波禮吉	南山
同	代議士	頼母木桂吉	春陽
同	東武鐵道社長	根津嘉一郎	青山
同	代議士	小泉又次郎	牛島
同	代議士	三木武吉	芳庵
同	南海鐵道取締	永田仁助	盤舟
同	代議士	樋口秀雄	龍峡
同	大日本製糖社長	藤山雷太	雨田
同	東京地下鐵道社長	野村龍太郎	囊州

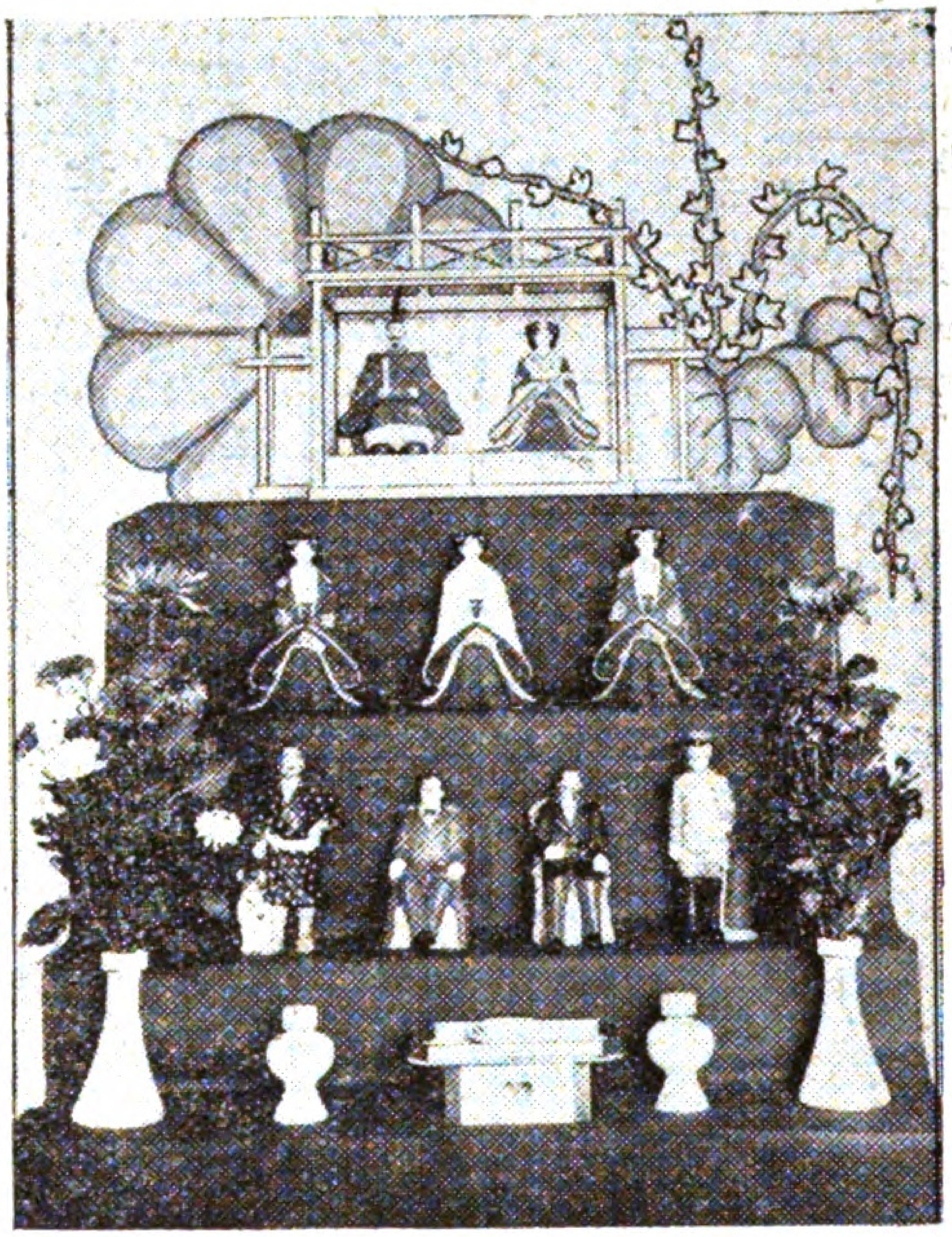
明治節の御飾り 第二回頒布

み國のため　お家のため　日本中の御家庭皆御備へ下さい

昨年大好評即時賣切・本年は直ぐ御申込下さい

御願

之は他品と異り一時に多量を製作し得る性質のものでありませんから、品切になりますと遺憾ながら本年の間に合はない事になります。右御含みの上どうぞ御申込みは一時も御早くお願ひ申上げます。



◇發賣の趣旨◇

◇明治大帝の御聖德御偉業を千古に記念し奉る爲め明治節が制定せられ十一月三日その第二回の佳節を迎へる事になりました。

◇本社では此明治節を最も有意義に迎ふる樣にしたい各家庭の年中行事にしたいといふ考へから樣々に苦心研究の結果茲に雛の節句や端午の節句になぞらへて明治節の御飾りを謹製いたしました。

◇御尊像及その他一切斯界の第一人者白水荒雄氏の謹作で總て古式に則り典麗高雅如何にも神々しい而も親しみもあり意義も深いもので何處の御家庭にも必ず備へたい念願から茲にその一式を全くの實費で一般に御頒ちする事に致しました。

御申込次第　カタログを進呈します

一組の内容

御尊像（向ッテ左…高五寸　右…高七寸二分）……二、
御殿……一箇（總檜白木造り精巧典雅なもの紫金紗縮緬幕及房付間口一尺七寸奥行六寸高さ一尺）
女官（高さ各々五寸七分）……三、
功臣（乃木……六寸〇大久保……五寸　木戸……五寸〇西郷……六寸）……四、
御花瓶……一對
御瓶子……一對
御三寶一箇御酒……一組
○外特製御衝立……一脚
○人形は何れも總桐箱入り御殿その他は別に紙函に收む。

一組……特價……金參拾圓也

但し御殿の代りに特製御衝立を用ふる時は（高七寸巾一尺三寸縁は神代杉上等の紙張り）

一組……特價……金廿四圓也

荷造費壹圓也運賃は貴着拂御注文の節は最寄の驛名御知らせ下さい但し小包便の場合は荷造送費共貳圓

申込所　東京本郷駒込坂下　大日本雄辯會講談社代理部　振替東京六六二九番

美談の華・逸話の泉

答禮を百回

パリーの街を歩いてゐた田舍出の新兵『おい、待てツ!』と呼び止められて、ハツと氣がついて見ると若い少尉が立つてゐる。田舍出の新兵は他に氣を取られてゐて、うつかり敬禮をせずに少尉の前を通り過ぎようとしたのであつた。

『貴樣は何故上官に對して敬禮を怠つたか。その罰に百回の敬禮を命ず。初めろ!』

少尉にどなりつけられて、新兵は怖る怖る敬禮をやり出した。物見高いパリーの街である。少尉は口髭を捻つて威張つてゐる。

と、ちやうどそこへ通りかゝつたのが有名なマク・マホン將軍であつた。

『おいおい一、體どうしたといふのだね?』



將軍にさう訊ねられて、

『ハツ、此の兵卒が敬禮を怠りましたので、罰として百回の敬禮を命じたのであります。』

と、若い少尉は昂然として答へた。すると將軍は温顏に笑をたゝへて、

『さうか。だが君、君は上官として、兵卒の百回の敬禮に對する答禮を一ぺん一ぺん忘れんやうにやらんけりやいかんぞ。』

今まで威張りかへつてゐた少尉は、將軍の言葉を聞いて、にはかに赤面してその傲慢な態度を改めた。

意表に出る

信長、ある時京都に行つて、一子城之助信忠のことを、この部下に訊ねた。すると内藤某と云ふ者進み出で、

『信忠公は一段と御器用との評判に御座ります。』

『して、器用と申すと?』



『たとへば御來客などのある時、その客への下されものは、大抵我々の想像通り、との人には馬を下さるだらうと思ふ時は馬を、御小袖だらうと思ふ時はお小袖を――まことに

よく、相手の心を察しられます。我々臣下のものに對しても同樣で厶ります。』

信長は忽ち氣色を變じた。

『左樣の事が何んで器用か！　不器用極まるではないか。總じて人に對しては、戰ひの敵に對すると同じく、相手の豫想もしないところに出でなければ駄目だ。たとへば今云ふ、馬をくれるだらうと思つてゐる者に對しては小袖をくれ、小袖をくれるだらうと思つてゐる者へ馬を與へる、また、この人には大した褒美も出ないだらうと、他人も思ひ、その人自身も思つてゐるやうな者に對して、却つて澤山の褒美を取らせるのだ。それでこそ、褒美の甲斐もあると云ふもの――家來の思ふ通りにばかり、物を與へてゐるやうでは、家來の爲に大將の心を見破られ、推しはかられる。そんなことでは人に將たることは出來ぬ。』

――成程、信長らしい、そしてたしかに一面の眞をうがつた卓見である。

默仙和尚の說法

日置默仙和尚が丹波に居た頃、土地の富豪山本新助が或る日和尚に向つて、

『妻が吝嗇で困りますから、どうぞ一つ說得して頂き度うございます。』と言つたので、和尚は承諾し、一日新助の宅へ出かけた。菩提寺の和尚樣が御出でになつたといふので、妻君をはじめ慇懃にもてなした。すると突然、和尚は妻君の前へ拳を握つて突き出し、



日置默仙師

『若し年がら年中、この拳が、このまゝでゐたら如何で御座らう。』へんな質問に妻君も吃驚したが、

『それはまあ、不具でござりませう。』

和尚今度はパッと五本の指を開いて、

『若しこの通り開つ放しでゐたら如何で御座るかな。』

妻君ますます怪訝な顏色をし乍ら、

『それも矢張り不具でございませう。』と答へた。

『如何にもさうぢやのう、ぢやから世の中のことは始終握りつめるも惡し、さればと言つて開つ放しもよろしくない。』和尚のこの說法が本論にはいらうとするのを、新助は橫合から引取つて、

『それごらうじろ、和尚樣も、あゝ言はつしやるのだから、これからはこの位にしてなあ。』

と拳固を半開きにして見せたので、妻君をはじめ一同大笑ひに笑ひこけた。妻君の吝嗇が立所になほつたのはいふまでもない。

田舍流儀

アメリカの都會から、マサチューセッツの田舍に住んでゐた法學者のダニエル・ウエブスターを訪問に來た一官吏があつた。途中、小川があつて橋が掛つてなかつた。そこへ、頑丈な體格をした百姓姿の老人が通りかゝつたので、

『君すまないが僕を向うへ渡してくれないか』と賴むと、老農夫は手輕く、

『よろしい、私に負ぶさりなさい。』と言つて、官吏を背負つてその小川をチャブチャブ渡つて行つた。



さて、その官吏がウエブスター家に着いて初めてウエブスターに面會した時、彼の驚きは如何ばかりだつたらう。先刻百姓の爺だと思つて負つてもらつた老人が、ダニエル・ウエブスターその人だつたのである。官吏がすつかり恐縮して、口もろくに利けずにゐる樣子を見て、ウエブスターは氣輕く笑ひながら言つた。

『君、そんなに何にも遠慮をする必要はないよ。田舍へ來たからにはすべて田舍流儀にするに限るさ。』

明石の浦の貝殼

或る人が、細川忠興に向つて、

『偉い人物を　ものに譬へれば何ういふことになりませうか。』と訊ねたところが、忠興が答へて、

『明石の浦の貝殼のやうなものぢや。』と言つた。

だが、訊ねた人はよく解らないらしい顏をしてゐるので、忠興は語をついでその理を說いて聞かせた。

『明石の浦は浪風の劇しいところ故、そこにある貝殼は、荒浪にもまれ、砂にみがかれて、世にも美しい光澤を持つてゐる。人とても同じことで、千辛萬苦して精神を鍛練しなければ、なかなか偉い人物にはなれぬものぢや。』

園丁の息子

アーギル侯爵は或る日園庭を散歩中叢の中からラテン語のニュートンの幾何學書を見つけた。

『ほう、誰が持ち出したのだらう。』

侯爵はそれを圖書室に持ちかへつた。すると園丁の一人息子でストーンといふのが——彼はその時十八歲であつた——後から追ひかけて來て、『お殿樣それはわたくしの本でございます。どうぞお返し下さいませ。』

『な、なに！』侯爵の驚きは非常のものであつた。園丁の子がラテン語のしかも幾何學の本を讀む、まさに有り得可からざることだ。



『お前には幾何學がわかるのか。』

『はい。』

『ラテン語も……』

『はい、よく解ります。』

『一體お前はいつ、誰に就いて勉强したのだ。』侯爵は驚きながら尋ねた。

『はい。今から十年ほど前お屋敷に一人の左官が居りました。或る日私がその仕事を眺めて居ると、彼は定規とコンパス

とを使用し乍ら勘定をはじめました。私は不思議で仕方がなかつたので尋ねたのです。一體何をしてゐるのか、そしてその道具は何か。その時私は左官からこの世に算數の術があることを教へられました。そこで私は一冊の算術書を求めて之を讀みました。算術書を讀み終ると幾何學の本があることを知りました。更にこの二つの學科を說明したラテンの良書があることを知りました。私は辭書を求めてラテン語を研究しました。そして又フランスの本にこの二つの學科を解釋した立派な本のあることを知り、フランス語の辭書に依つてフランス語の研究をはじめました。お殿樣、私の勉强といふのはこれでございます。ABC二十六字を知つてさへ居れば、何でもわからぬといふ物はございませぬ。』

少年ストーンはアーギル侯爵の扶助によつてロンドンに出た。千七百二十三年彼は最初の著書を公にし二十五年學士會員に擧げられた。——彼は數學に於ては世界的の大學者であつた。

伊東提督と丁汝昌

日清の役、黄海の一戰に、敵、淸國北洋艦隊は大敗し、後は威海衞の奧深く蟄伏して手も足も出ぬ。しかも勇猛果敢の我が水雷艇は、連夜港内深く潜入して、猛威を逞しうして、彼の堅艦は踵を亞いで擊沈された。

流石、武勇の譽高き敵提督、丁汝昌も力全く盡きて、明治二十八年二月十二日の早朝、降伏の軍使廣丙艦長程璧光を我が旗艦松島に送つて、軍艦兵器砲臺を擧げて我軍に引渡す、其の代り部下の命は助けて貰ひたい、この條件をお容れ下さるなれば、英國東洋艦隊司令長官を其の證人に立てるでござらう——。と、申し込んで來た。

聯合艦隊司令長官伊東祐亨(時に中將)は、程璧光を親しく引見した。

『勝つも負くるも時の運、勝敗は兵家の常ぢや。今迄の勇敢な防戰、失禮ながら感服の至りに存ずる。如何にも仰せ越しの趣き承知いたした。但し、予は貴下の提督丁汝昌を武人と信ずる、證人は絕對に不必要ぢや。』

相手を武士と信ずる——なんといふ潔よい言葉であらう、程璧光の瞼は熱く濕うた。伊東提督は更に語をついだ。

『なほ丁提督に告げて下さい、返簡にも書いて置いたが、貴國の事情としては、今後の丁提督の身に、心懸りのことが無いでもない。宜しく我國に來遊して、暫く貴國人心の靜まる時を待たれたら宜からうと思ふ。予は此事を切に勸告する。』



重ね〲懇ろな言葉。歸つて此の事を丁汝昌に通ずると、さしも沈靜の丁汝昌も、欣然として喜んだ。『我事成れり。』其夜、丁汝昌は寢室に於て、毒を仰いで、淸朝の爲に殉じた。翌日彼の死を知つた伊東提督は天を仰いで歎息した。



珍名御披露

（讀み方で變な音になる）

○關　近子（咳コンコ）
○立田英次（立てた意地）
○花岡美奈（鼻をかみな）
○荒井巖（あら、いいわ）
○高津　孝（たかツた蚊）

室内遊戯 獵人あそび

ヂャン拳で負けた者が目隠しをされます。その周圍を、手をつないで唱歌をうたひながら廻ります。獵人が頃合を計つて、『ズドーン』と言つて鐵砲を打つ恰好をするとみんな歌ふのを止めて坐ります。獵人は直ちに、『狐!』と言つて、まだ鐵砲を打つた時の姿勢を續けてゐます。鐵砲の筒先に面した人は、卽座に『コン〱』と狐の啼き聲をしなければなりません。『雉子!』と言はれたら、『ケンケン』といへばよいのです。其の啼き聲が卽座に出ないと、獵人にされます。獵人になつた人は、あまり難しい動物の名はいはぬ方がよろしい。



笑話

○落ちた〱

若い者二人言合せ、今夜は暇だから隣りの柿の木をはたき落さうか、おれが木へ登るからお前は拾ひ役だと、竿棒を持ち叩くと、柿がごろ〱落るに、下の男あわてゝ拾ふ拍子に、どぶへ落ちてあがられぬ故、『オイオイ落ちた』『落ちた筈だよ默つて拾へサ』『落ちた落ちた』『うるせえ男だな』『イヤいゝサどぶへ落ちたよ』『どぶへ落ちたのは捨てゝおけ』



○遠慮深い下女

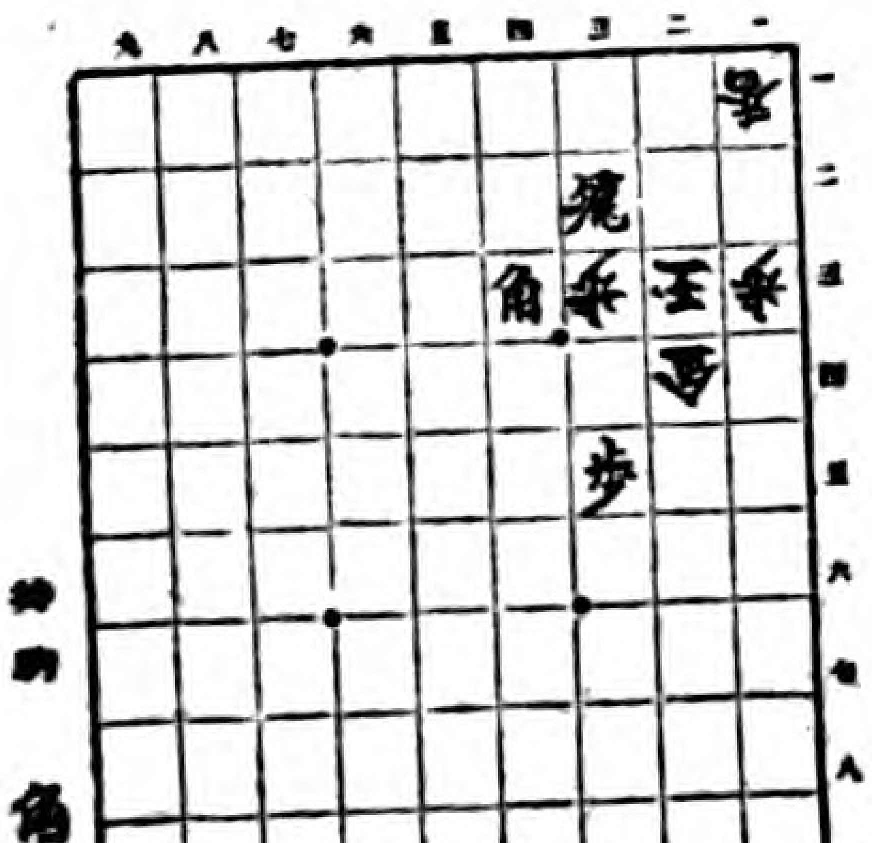
下女が病氣になつたので、主人は早速醫者を呼んで來てやつた。處で、醫者が藥を服めといふと、『勿體ない、妾風情がお藥を頂いてよいものですか』といふ。そこで脈をといふと、『滅相もない、妾風情に脈がありますものか』

沙漠の不思議

數十人のアラビア人が、駱駝を追うてエジプトの沙漠を旅行してゐる時であつた。俄かに天地が暗くなつたかと思ふと、王樣御寵愛の大切な駱駝の姿が見えなくなつてしまつた。これは大變と一同評議の結果選ばれた三人の勇士は、沙漠を縱横に馳せ廻つたが却々見つからない。併し下の圖の數字を辿り、次にABCと順々にPまで線をひくと、駱駝の所在も見えなくなつた理由も分るとの事です。みなさん一つやつて下さい。

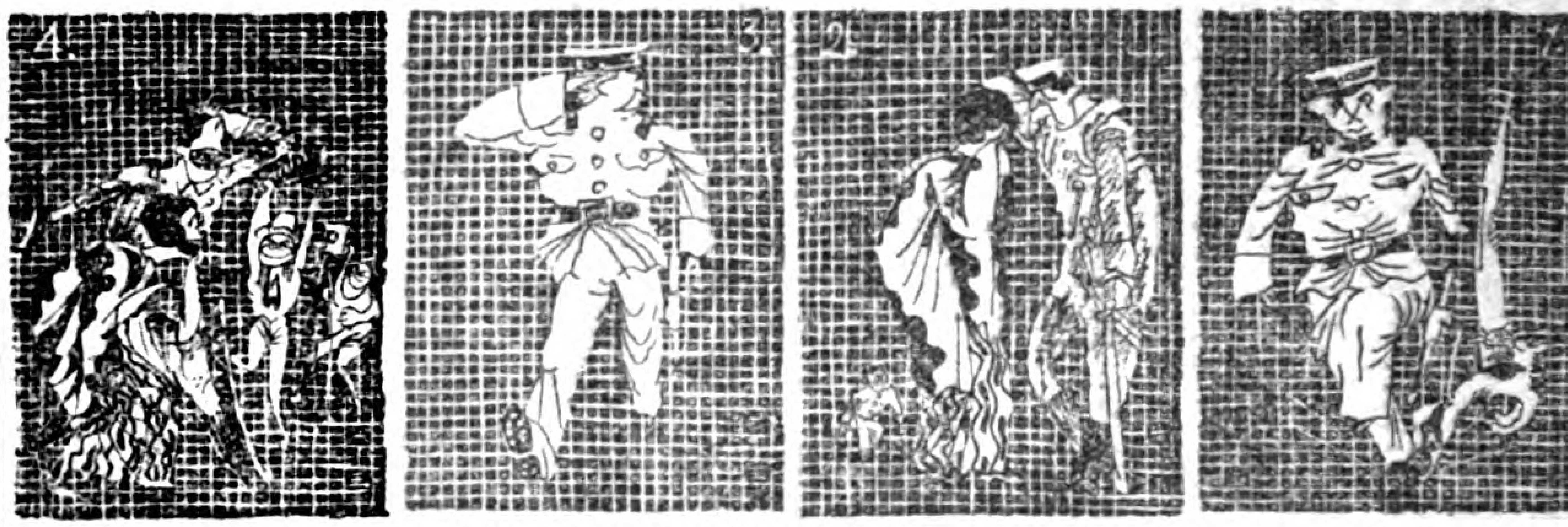


◎詰將棋新題



八段　大崎熊雄　出題

入選漫畫 忠實なる新兵



北村一五

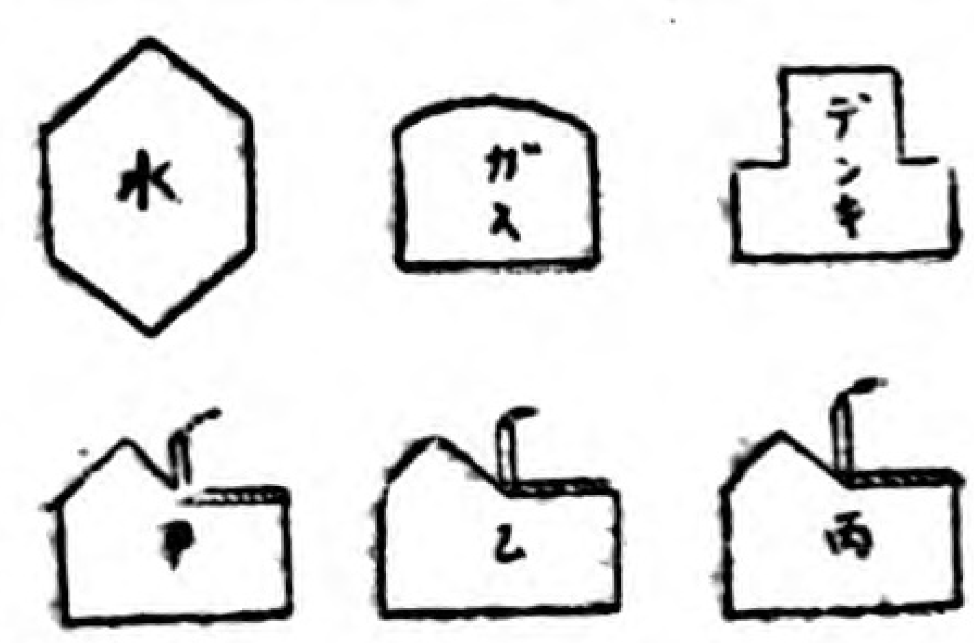
一、大道でも歩調をとつて歩く程忠實な彼が

二、或時、或町の或場所へさしかかると、一人の士官が一人の若い女性とお互ひに泣いてゐる。

三、彼は、敬禮をなすべきか否か考へあぐねたが、如何にお氣の毒でも軍規は嚴正、ハーッと氣合もろ共擧手の敬禮。

四、と、どつと起る笑聲の爆發。『ウハヽ』『オホホ』それもその筈キネマ俳優のロケーションだつたのだ。

智恵くらべ



こゝにある甲、乙、丙三軒の家は、幸な事に電氣會社、ガス會社、水道會社が近い。今これらをそれ〴〵自由に使ひたいのですが、どうすればよいでせうか。但し、工事は、これらの導線なり導管なりが決して交叉しないやうにやつて貰ひたいのです。

奇問奇答

（問）借金の山の高さは何里か

（答）やり（八里）くり（九里）に困つて十七里

（問）貧乏神と死神とを祠れる神社の所在地

（答）みな身（南）のつまりだから南極

（問）ウヰスキーは雪の上を辷るか

（答）土の上をよろけるい、い、い

（問）區劃整理で涙金が取れるか

（答）角が取れる

娘づくし（洒落）

○ペンキ屋の娘で塗り立てる。
○炭屋の娘で色が黒い。
○お菓子屋の娘で甘つたれる。
○金物屋の娘で重みがある。
○秤屋の娘で折目たゞしい。
○履物屋の娘でゲタゲタ笑ふ。
○魚屋の娘で生き〳〵してる。
○小鳥屋の娘でよく囀る。
○人形屋の娘で無口者。

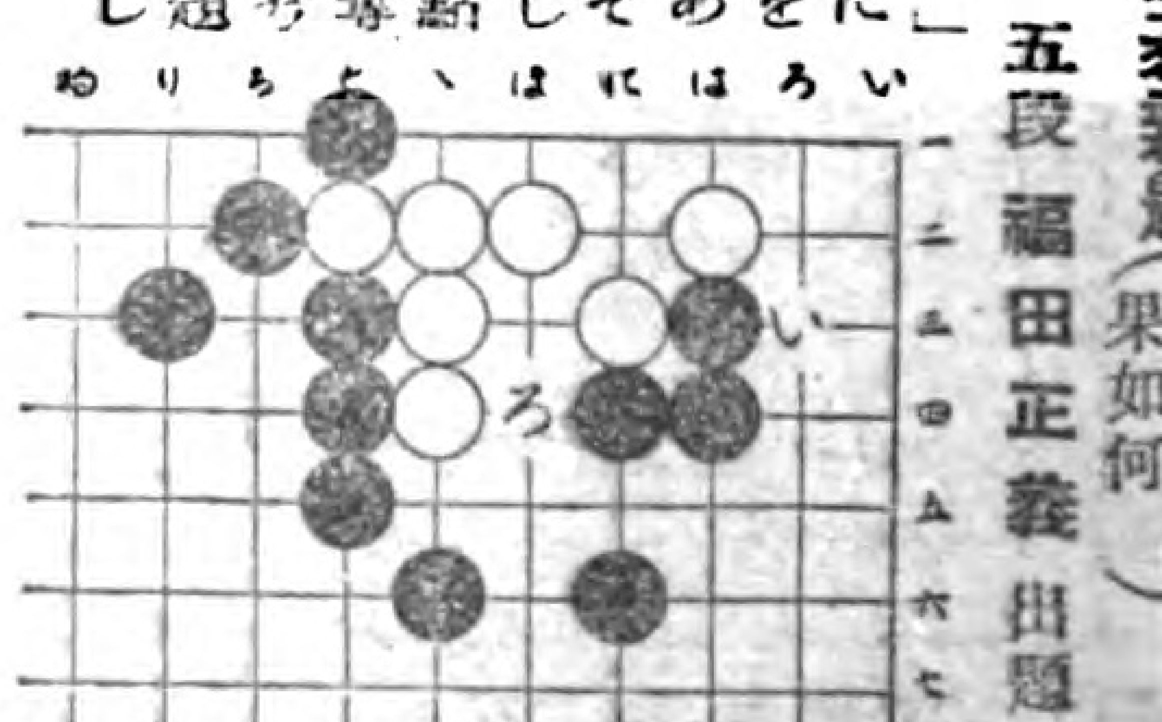
迴文和歌（上から讀んでも下から讀んでも）

○村鳥は離れ立ちもす枝に葉に絶えずもちたれ縄はりとらむ

○くさ〳〵の名は知らぬらし花守も名は知らぬらし花の咲く咲く

◎詰碁新題（黒先、結果如何）

五段 福田正義 出題



白には「い」或は「ろ」に打つて眼を作る手があります、そこで黒としては此二點、の眼形を奪ふ手順を考へれば問題は解決します。

◎聯珠新題

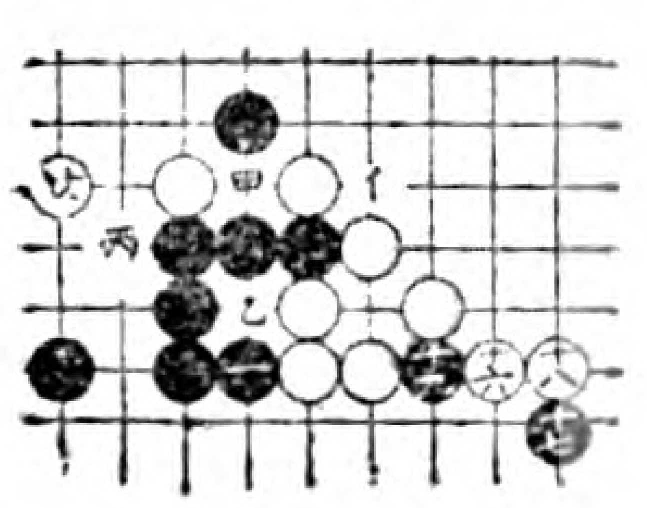
六段 清水香石 出題

（第一圖）



○黒は（十五）と打つて次は『甲』と『乙』と『丙』の三方勝であると……眼して其選りの勝でせうか……否白には第二圖の樣な防策がある。

（第二圖）



○第二圖……白は（十六、十八）と四伸びをして（甲）の所を四三々禁に封じて黒が（乙）に四三を打てば（甲）に乗つて（イ）で勝つと禁制しながら（丙）の黒『四四』を（廿）で止めた之でも一圖に云ふ所の三方勝は恐く止まつた……其それでも黒に最：：容易な勝が疑つて居る……それは？

（本欄解答は二七三頁）

趣味の科学

驚嘆すべき新兵器

砲兵大佐　植村東彦

◇電波による飛行機操縱

現在の所では、飛行機は操縱士、自動車は運轉手、潛航艇は乘組員といふやうに、各々其能力を發揮するのに是非人間の力を必要としてゐるが、近い將來に於ては、電波の力により直接人間の力は藉りずとも立派に操縱し、運轉することの出來る時代がやつて來る。

例へば、國と國とが戰端を開いたと假定する。攻擊軍艦は最新式の飛行機を載せて敵國に向ふ。さうして敵の砲彈の屆かぬ遠距離に碇泊し、飛行機を以て敵の根據地を襲はしめる。其場合飛行機上には一人の操縱士も居らない。唯、電波による裝置あるばかりで而もそれによつて敵の根據地を襲ひ爆彈降下も立派にやつてのけ、あわてふためく敵軍を尻目にかけて、悠々母艦に還つて來る――と云ふやうなことは、易々たる時代がもう直ぐにやつて來る。

◇地雷の無線爆發

現に之に類した事は、既に歐洲大戰にも屢々行はれてゐた。

激戰又激戰、遂に敵軍の本營を奪取した某國が、戰勝を誇りつゝ意氣揚々と乘込んで其場所に高等司令部を置いたことがある。勿論、其場合に、凡てにつき、十分細心の點檢を行ひ、異狀なしと認めたからである事は云ふまでもない。やがて高等司令部内に於ては、更らに軍の主腦者相集つて今後の作戰計畫について謀議が開かれた。謀議半ば、何方よりか飛行機の爆音が聞えて來る。仰ぎ見れば、正しく敵の飛行機。

『敵襲!』

の聲諸共、各自は之に備ふべく部署についた。高射砲は用意される。

爆音は次第に近づいて、敵機は高等司令部上空へやつて來た。さうして恰かも大鵬の翼を擴げたるが如く、悠々旋回してゐる。

高射砲は正に敵機目がけて放たれんとした。

間一髪!! 俄然、占領後仔細に點檢して異狀を認めなかつた高等司令部の此處彼處から轟然たる爆發の音が聞えた。かと思ふ間もなく、司令部は灰一燼、何物をも殘さず粉砕されてしまつた。勿論其處には司令官をはじめ軍の主腦者の姿もなければ、威力を誇る高射砲の影もない。一瞬の間に慘澹たる光景に變つてしまつた。

此の有樣を眼下に眺めた敵の飛行機は、『しすましたり』と云はぬばかり、さも心地好げに勝誇りつゝ、己が陣地に還つて行つたのである。

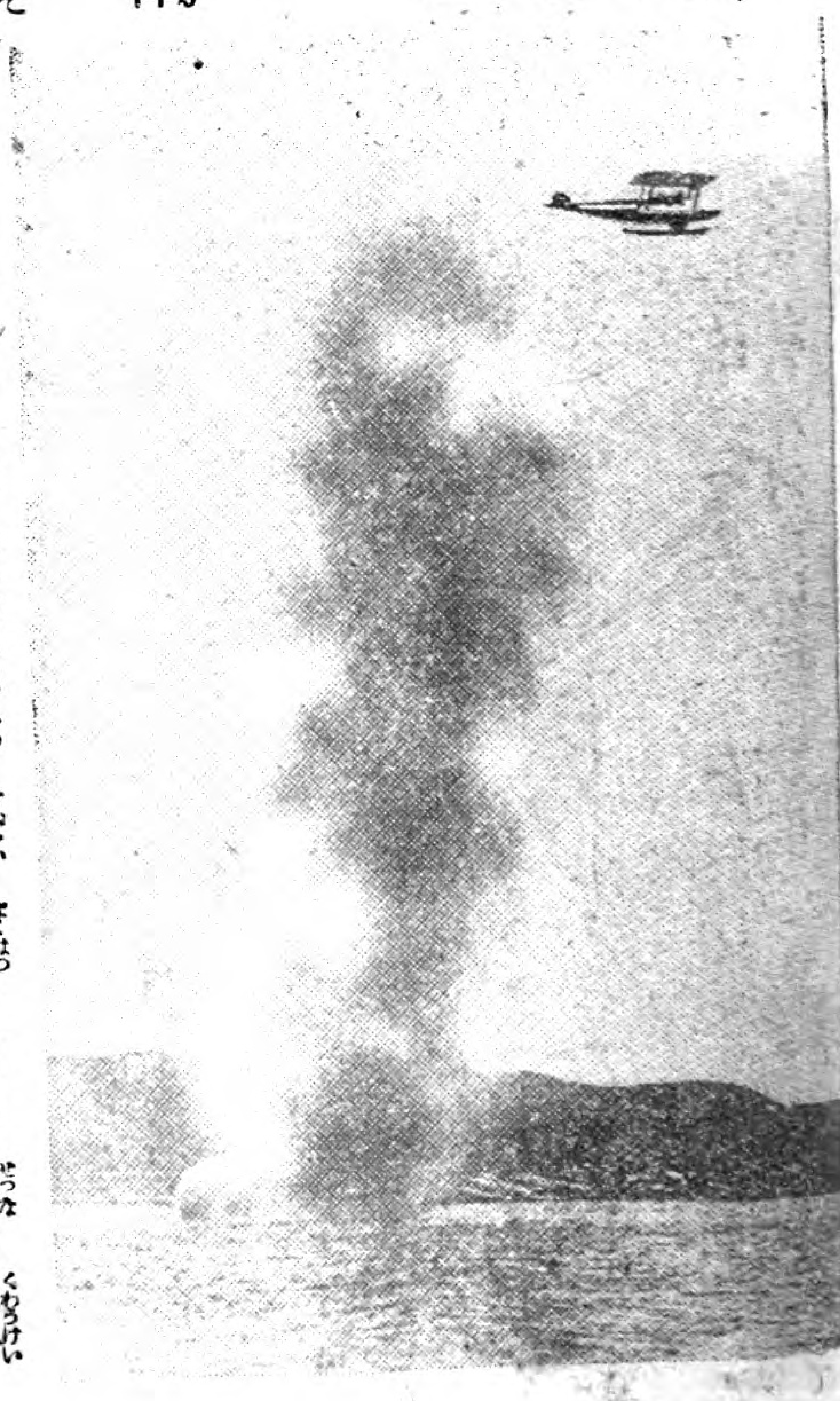
不思議！實に不思議、飛行機襲來、我軍は直ちにそれに備へた。高射砲も用意した。敵機は我司令部上を靜かに舞つてゐた。

唯それだけだ、其處には爆彈投下の形跡など少しもなかつた。けれども司令部は粉砕され、見るも哀れな全滅を遂げてしまつた。不思議と云へば、こんな不思議はないではないか。

當時、各國はこの問題を解決すべく隨分研究した。而して今日の軍事科學の發達は、この問題を容易に解決してくれた。

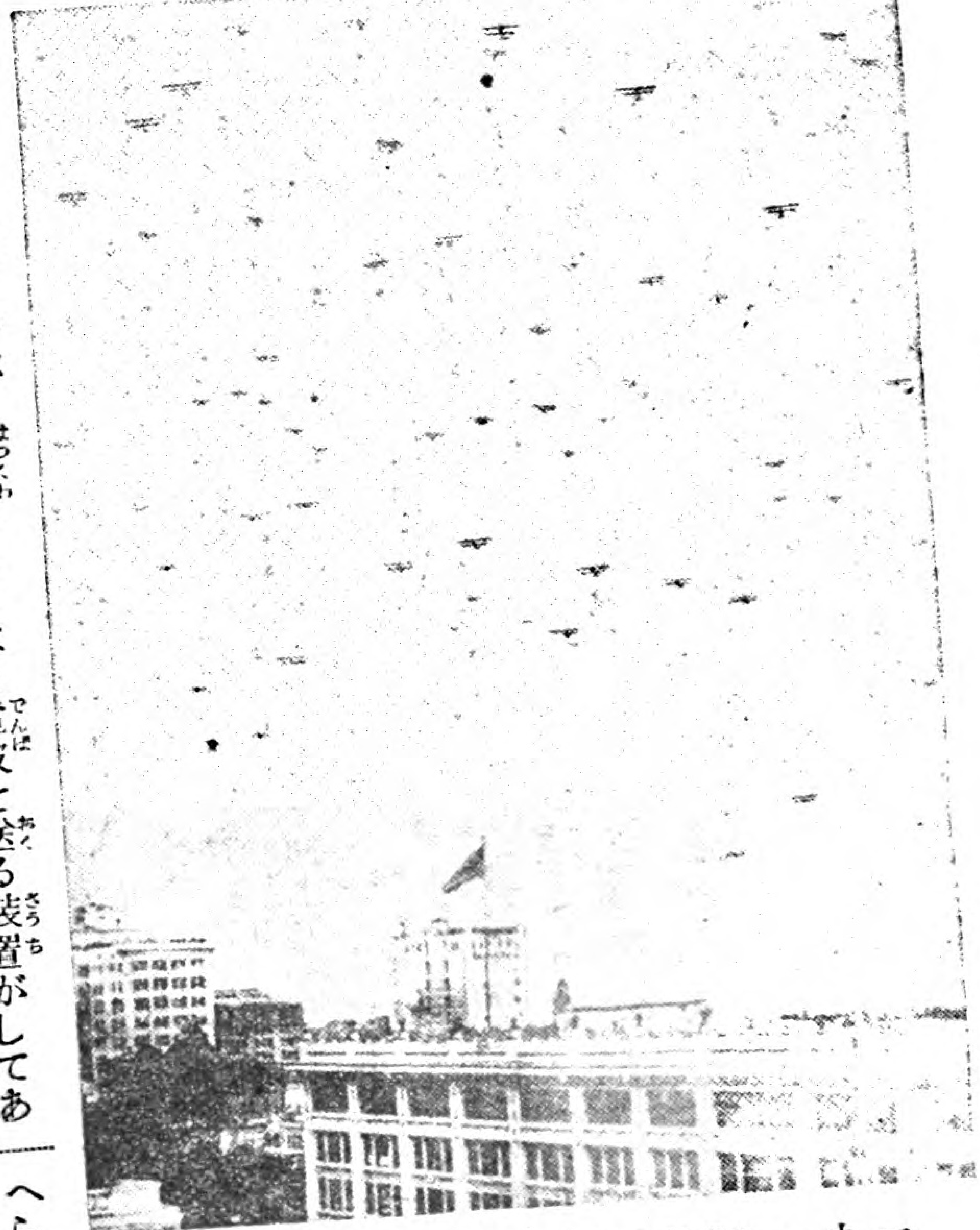
解つて見れば、不思議でも何でもない。敵の襲撃に敵しかねた一方の軍は、遺憾ながら陣地を捨てる決心をした。併し、無下に貴重なる陣地を敵に渡すことは心外に堪へない。そこで一策を案じた。即ち此陣地には必ず敵が司令部を置くに違ひないと云ふ事を豫測し、敵に悟られぬやうな場所へ地雷を敷設して退却した。而もその地雷は電波によつて無線發火する最新式のものであつた。

一方占領した某軍でも萬一を慮り、注意深く點檢をして司令部を置いたのであるが、從來の軍事科學知識の判斷より普通地雷は電流を線によつて送らねば發火しないものであるとの觀念から或は地雷は敷設されてあるかも知れぬが、而し何處を探しても線らしいものは發見されない。大丈夫と安心したことが、全滅の因となつたのだ。やがて飛行機は襲つて來た。其飛



飛行機より無線電波を送り敵國港灣敷設の水雷を爆發せしめたる刹那の光景

行機には前述の地雷を發火せしむべき電波を送る裝置がしてある。敵の騒ぎ廻る間に平然として、『今に見ろ』とばかり、地上に向つて盛んに電波を送つた。……豫め用意された地雷は、時こそ來れと感電して、爆發又爆發、遂に敵の重要なる司令部を粉碎し凱歌を奏して還つて行つたのだ。



一九一八年米國に於て行はれたる平和記念分列飛行（參加總數二五八機）

◇聯合軍を惱ました毒液

聯合軍と獨逸軍とはイープルに於て相對した。何れも頑強に攻守努めたため、可なり永い間對陣して、其間塹壕戰が續けられた。

獨軍の後方にある砲兵陣地からは時折大砲を飛ばして聯合軍側をおびやかしてゐた。

其内に聯合軍側の兵隊がエタイの知れぬ病氣にかゝり、バタリバタリと斃れてしまふ——といふ不思議な出來事が起つた。激しい時には、一晩で死者數百人といふ數に上る。其症狀は皮膚の薄い所。——例へば腋の下とか股とか、陰部等に水泡が出來る。それが見る間に身體全體に擴がり、やがてそれが潰れると、全身が丁度火傷でもしたやうに糜爛れて遂には死んでしまふ。一體、病原は何か。軍醫の人達をはじめ、學者連が一生懸命研究して見たが、其當時は解らなかつた。病原不明の而も一旦罹つたら治療法のない惡病として考へられ、これがために被つた聯合軍側の損失は決して少くなかつた。所が戰後に至つて、漸く其原因が判明する事が出來た。

その病原といふのは、バイキンでもなければ何でもない。即ち獨逸軍が糜爛性の強い液體「イペリット」（イープル戰に用ひたから名づけた）を砲彈の中に入れて聯合軍の陣地に向つて發射したのだ。

砲彈が破裂すると同時に毒液は四散し、草の葉に宿る露のやうに、敵の陣地の此處彼處に附着した。

そんな事があるとは知らない聯合軍側の兵隊は、夜分になる

、と塹壕上を歩いたり、石に腰かけたり、或は又敵の目に入らぬから安心と許りで勇敢に放尿したりする。さうした機會に、自然毒液が皮膚の部分に附着する。すると、見てゐる間に水泡が出來、糜爛れ始めるといふやうなわけで、これが聯合軍を苦しめ拔いたのであつた。

◇驚嘆すべき軍事科學

以上の歐洲戰爭中の實例でも解る通り、現在及び將來の戰爭といふものは、科學を應用しての戰爭、いはゞ頭腦の戰爭である。如何に勇往邁進、敵を恐れぬ勇士でも、學問の前には降伏せねばならぬ事になる。古來から不退轉の大和魂の持主たる我大和民族は、一方に於ては身體を練り、勇氣を養ふと同時に、他面學問の進歩に遲れぬやう、或は家庭に於て或は學校、社會に於て、所謂科學的知識の訓練を怠らぬやう教育もし、施設もするやう努力して行きたいものである。

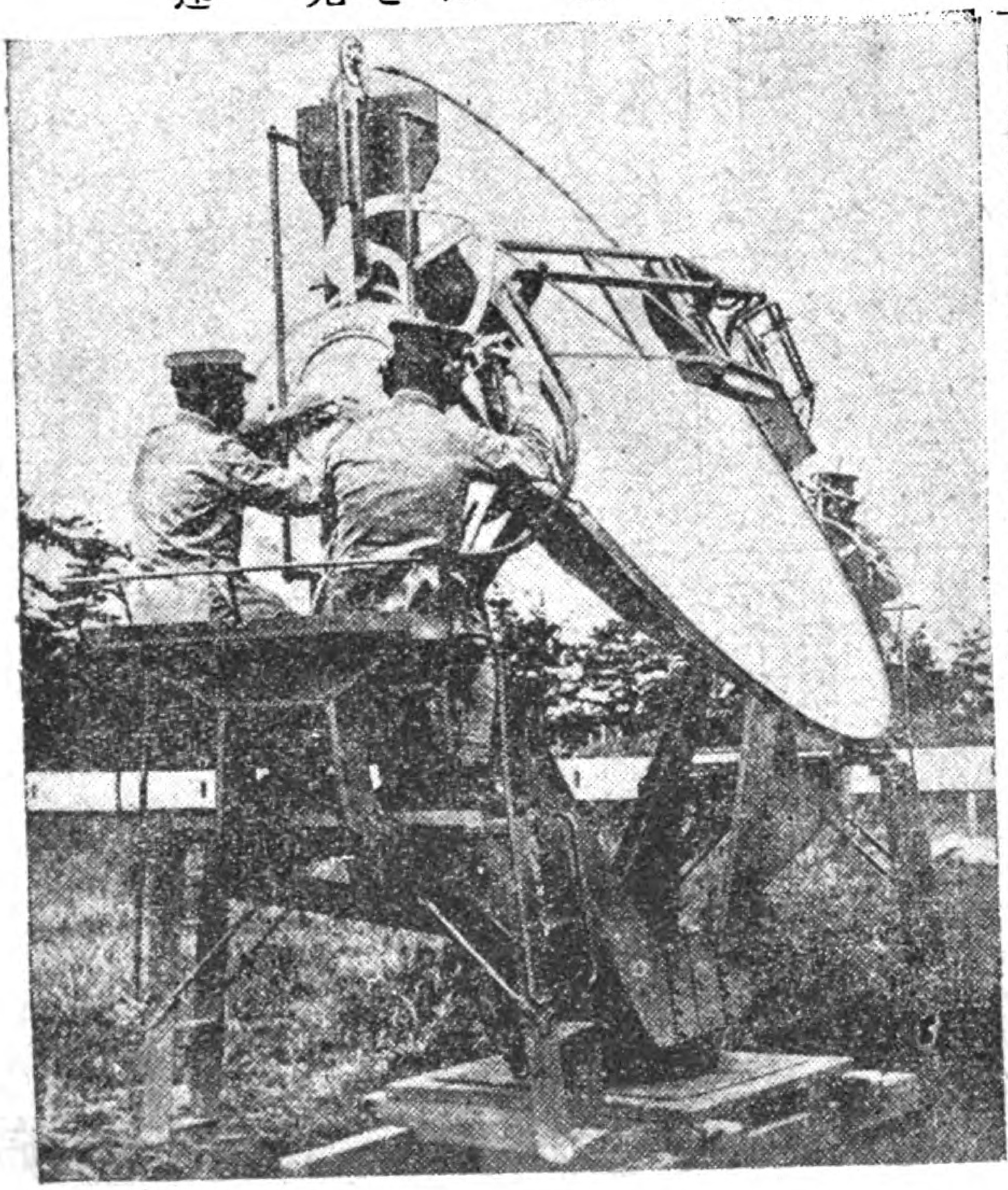
十數年前の歐洲戰爭に於て、既に前述の通りである。今日に於ける軍事科學の發達、兵器の進歩に至つては眞に驚嘆すべきものがある。讀者諸君は本誌の口繪に於て兵器を目のあたり見る事が出來る。

私は、以下二三の例によつて最新軍事科學の進歩について述べて見よう。

◇軍事科學の最新事例

不可視光線とは、讀んで字の如く、目に見えぬ光線である。これを通信に用ひる事などは、今日の進歩を語る最も適切な實例であらう。

一體、普通の光線を通信に用ひるには、陸海軍とも可なり前から、主として夜分などに行はれ、これを日光通信といつてゐる。



敵國飛行機の襲來を逸早く豫知する反射鏡型空中聽音器

その方法は、極めて簡單で、光線を丁度電信の符號のやうに、或は長く或は短く、斷續的に送るのである。その送られる光線の長さ短さによる符號を味方同志、豫め打合せておけば、自由に通信が出來る。

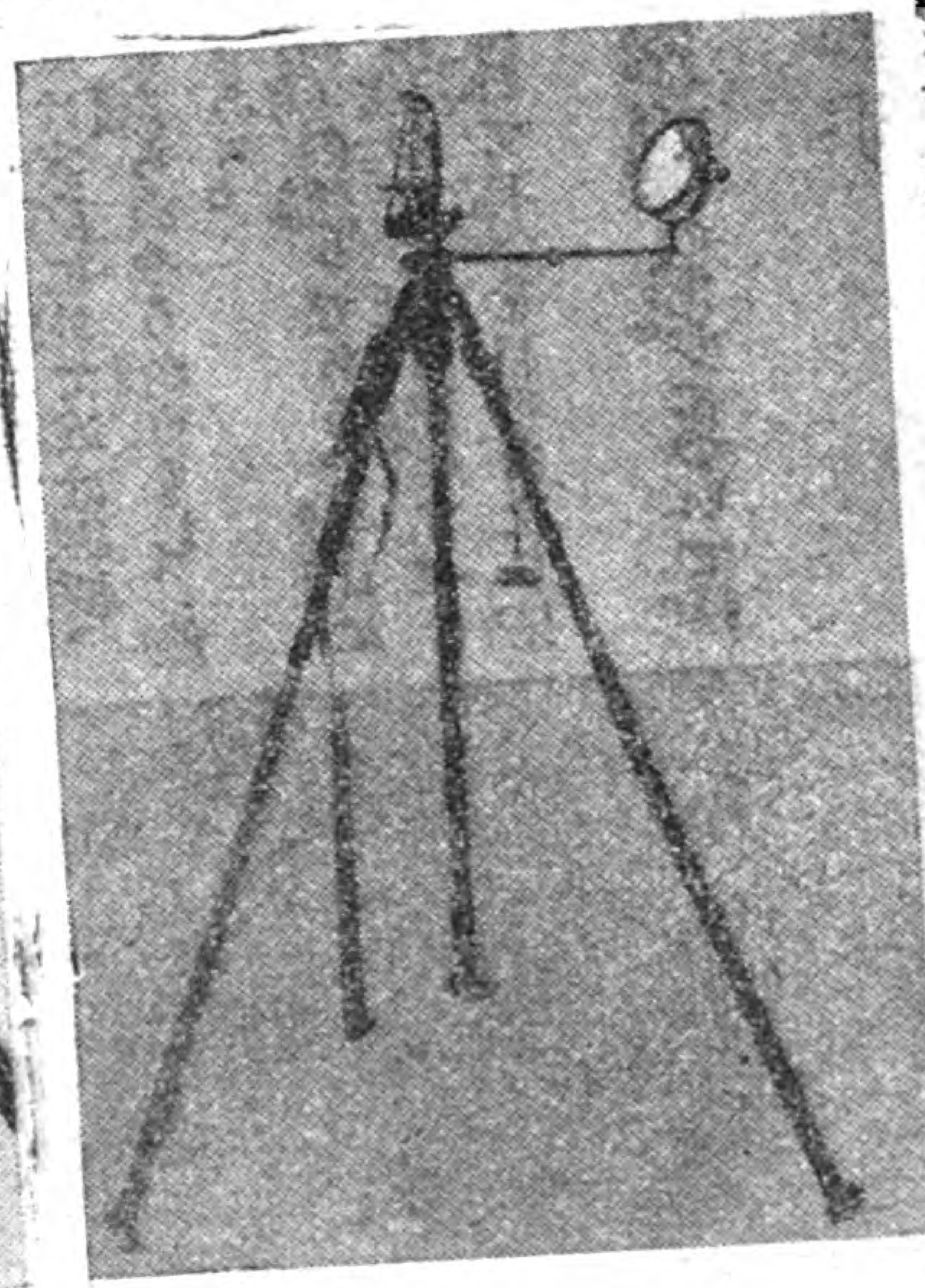
併しこの方法は、味方にも分るが、同時に敵にも見えるので、もし、敵が其符號を知つたならば、何等の効果がないばかりか、却つて味方にとり非常の不利を來たす虞がある。

そこで何とかして、この缺點をなくしたいといふ欲求から考へ出したのが、不可視光線の應用である。不可視光線といふのは、虹に見る樣な太陽の七色の光線でなく、目に見えぬ光線で、今日醫學の方などでも喧しくいはれる紫外線とか赤外線のことである。

光線又は不可視線によつて通信する機械



十種紫外線通信機



十種回光通信機

これを應用して、通信に用ひれば、敵にも分らない代り味方にも見えない。これを特別の裝置によつて、今日通信の用に供することになつた。

またこの赤外線は寫眞撮影にも盛んに應用される。從來、寫眞は夜明けだとか夕方、また霞や霧などのある場合には、よく撮影することが出來なかつた。殊に飛行機が敵の狀況を偵察するのは、多くの場合、霞や霧に遮ぎらるるのであるから、寫眞の撮影は困難であつたのであるが、これに赤外線に特に能く感ずる乾板を利用して、撮影することが出來るやうになつたのである。

それから歐洲大戰中、佛蘭西が敵の潜航艇の位置を知るために試みて成功し、現在では其原理を應用して壓力の微細な變化又は水深を測定するため等に用ひられてゐる。之れを壓電氣（ピエゾエレキ）といふ。

ここに航海中の一軍艦があつたとする。然るに敵國が盛ん



植村東彦大佐

に潜航艇を活躍させて危險極まりない。

そこで豫め敵の潜航艇の位置を知つて、大いに警戒しなければならぬ。

かういふ場合に、その軍艦は壓電氣應用の微音器を以て水中音波の送受を爲し、我が軍艦と潜航艇との距離を容易に計算して出すことが出來るのである。

以上はほんの一二の例に過ぎないが、讀者諸君は本誌の口繪をも參照せられて、いかに現在新威力を發揮しつゝあるかといふ事に留意せられん事を希望して、この稿を終る次第である。

男を男に女を女に

高島米峰

『そこ退けツ』と、まかりつンでる、俠骨稜々たる、男の中の男の少い現代、義理と人情の板挾み、あちら立てればこちらが立たず、せッぱつまつて身を投げ出さうといふ、女らしい女の少い現代。金になるなら操も賣らう、金になるなら主義をも捨てよう、萬事は『金だ金だ』の現代は、げに地獄の沙汰もそれ次第とある。

金を惡いといふのぢやない。金で買へない、金で賣れない、尊い寶を持つところに人間の値打ちがある。さうだ、持つた寶を、金では賣らぬといふ魂あつてこそ男だ、女だ。それが無ければ、たゞ兩足にして立つ動物だ。

學校教育の缺陷を補ふものは社會教育だ、芝居もあり、活動寫眞もあり、ラヂオもあり、蓄音器もある。要は、吾等の魂に、日本精神を躍動させることだ。そして、最も有力なる社會教育機關の一つとして講談がある。

高僧、賢哲、義士、俠客、烈女、孝子、名工、奇人、その悲風慘雨の生涯、その日輝月照の境地、語り出して、直ちに吾等の魂を搖り動かして、感奮興起せしめるものは講談だ。即ち講談は、能く男を男にし、女を女にする。

男が男になり、女が女になれば、文句はない。それは、正に現代に失はれたものが戻るのだ。それだけでも、講談の威力は大したものぢやないか。

家庭セクシヨン

お臺所ノート

△大根を茹でる際に、米を五六粒入れると苦味が取れて味もよくなります。

△酢を煮るには瀬戸引鍋に限ります。鐵鍋は酸化をおこして味を損じます。

△ワサビは尻から卸さず頭の方から卸さねば利き目が薄いものです。

△カツレツの肉の厚さは一分五厘位が適當で全體の厚さが平均してゐないと凸凹になつて形よく揚りません。

△生きてゐる魚を煮た時には、直ぐ鍋からお皿に移さないと死んだ肉の味になります。

△青菜を茹でる湯の中に、鹽を少し入れると青々として色が鮮かになります。

果實の効能

△梨子は消化をたすけ、熱をさげ、口の渇きを治します。

△桃は消化のよい果實です。便秘常習者に特効があります。

△柿は酒毒を解きます。惡醉した時食べれば奏効顯著です。

△葡萄は逆上性や神經衰弱者、痔疾、肺結核の人等が食べて特によろしい。



食鹽の効能

鹽は歯磨用として古くから使はれ、また、硝子器や便器の汚れを落します。

疊に附いた油煙や、灰、塵などを拭ふに鹽を撒いて掃きますと、疊の目の中の汚點までも綺麗に取り去られます。それと同じやうに、藤表下駄の薄黒くなつたのを鹽水で洗ひますと、見違へる様に新らしくなります。

木綿の色地物の洗濯の場合に、食鹽を入れると、色が剝げません。

○毒物を呑み込んだ場合に、鹽水を多量に飲ませますと、嘔吐を催さしめる効があります。

○保溫の効がありますから、腹痛の時に燒鹽を布袋に入れて腹部をあたゝめます。

○また、火鉢の炭がハネる時、一摘みの鹽を投じますと、その水分から出る、水蒸氣のために、止ります。

夏物を縫返さないで新しく着る法

夏着用した上布や、明石などは、大切に藏つてあつても、來年着る頃には、縫目がくづれたり、汚點が出たりして着心地が惡う御

滑稽易斷 一笑の運勢

雲迷豫言者　宇相津貫

△**一白水星**　貴下は長命ぢや、が九十九迄しか生きられん。何故と言へば百が一と白とに切斷されて居る星の生れぢやからのう。

△**二黒土星**　此の星の人は黒土の性ぢやから園藝家が適業である、但し土龍に寄せられぬ用心が肝要ぢや。

△**三碧木星**　貴下は腹が減ると物を食ひたがる癖がある。又人に賞められると喜ぶ癖と、金儲けを好む癖とがある、そこで三ぺき(癖)のもく星と云ふのぢや。がこの癖を適度に助長すれば、長壽を保ち成功する。

△**四緑木星**　此の星の人は、シロク二十四歳までは青年であるが、ロク〱三十六歳頃迄には家庭を持つ事が出來る。晩年にはヨロク(餘祿)を得て安樂に暮せる。

座います。そこで袖口、袖底、立棲、裾ぐけ、等解き易い部分だけを解いてのばして置きます。汚點が無い樣でも、汗や塵埃がついて居りますから、硼砂を水に溶いて、それを白布につけて丁寧に拭き、周圍に霧を吹いて、アイロンをかけます。

疊んだ時、衿、衽などの重り合ふ部分から後幅などへ急に低く落ちる所へ眞綿を少々入れて急に段のつかないやうにして藏ひます。

來年着ます時に、解いた部分だけを纒合せますと、仕立下しと同じ樣に、心地よくお召しになることが出來ます。

此方法は、子供服に應用しても、重寶です。

草花を切つた後には

草花をはさみで切りますが、あれは草花のせんゐを縮めますので、長持いたしません。それで一旦はさみで切りましたら、その後を又小刀で切り、はさみで押しつけられた切口でないやうにする事が大切です。



泣き聲でわかる赤ン坊

○つゞけざまに泣くのは、空腹かまたは咽喉が渴いた時、または蟲にさされて痒ゆいのを訴へる時です。

○激しい叫び泣きは、多くは耳の痒ゆい時、下肢を腹に向けて呼吸の止る樣に泣くのは腹が痛むからです。

○哀し相に泣き、又は安眠せずに起きては泣き泣いては眠るのは、身體に何處か故障があるか、病氣になる前ぶれです。

○咽喉に故障がある時は、嗄れ聲で泣きます。

○日光を避ける樣にして、まばたきをしながら頭を強く左右にふり、又は頭を母の胸にこすりながら泣くのは、頭痛のする時、これをはげしくやる樣な兒は、用心しないと腦膜炎になります。

ある處に大きな蘇鐵が植てあると、通りかかつた男が連れの人に向ひ、

『まア大きな山葵だなア』

といふので連れがくつ〱と笑ひ、『あれ山葵ぢやア無いよ、トテツといふものだ』といつて聞かせる。それを聞いてゐる他の男が腹をかゝへて笑ひ出すと、

『何が可笑い』

『をかしくなくてどうする。トテツとは血を吐く事だ』

フロックコート一代記

フロックコートの一代記を申述べます。先づ最初は『フロックコート』、二三年致しますと『古ツクコート』、五六年後には『襤褸ツコート』、愈々着られなくなりますと屑屋に賣られて『迂路ツクコート』となります。エヘン。

△**五黄土星**　二度三度五度までは黄金を掴むことが出來る。但し使へば無くなる。此の星の人はゴー情だから注意せねばならぬ。

△**六白金星**　白金の時計を六個も提げようと云ふ素晴らしい運勢ぢやが、圖に乘り過ぎると六なことはないから注意肝要ぢや。

△**七赤金星**　貴下は七人の赤子を持つ。但し『七人の子を生すとも女に氣を許すな』と云ふ諺があるから、つまらぬ事をして赤面せぬやう注意なさい。

△**八白土星**　貴下は蠶の性ぢやから製糸業者か絹物商になると成功する。その理由はハッパクウ（葉端食ふ）の星であるから。

△**九紫火星**　此の星の人は何んなに窮し（九紫）ても加勢（火星）する人が出るから心配せず進むがよい。

委しくは宇相津貫大先生の許に御笑會あれ。

キング講座

知らずにやつて居る
恐ろしい不衛生くらべ

醫學士　岡田道一

今日に於ては衛生といふことに大分目醒めて來た樣であるが、まだ／＼重要視されて居ない。例へば腸チブスにしても、豫防の出來ぬものなら是非もないが、各自が衛生思想さへ行つて居れば罹らずにすむ病氣である。それなのによく罹る。今年の如きも今から激增して居る始末で、秋口にもなつたら嘸流行を見るであらう。實に恐るべきものは傳染病ではなくて不衛生である。

それでは不衛生とはどんな事か？

迚もきたない手

早い話が皆樣が外出先からお歸りになつたとする。大抵の場合そのまゝ坐る、お茶を飲む――といふ順序。これが抑ゝ不知不識になさる不衛生の第一歩である。

皆樣は多分外出中電車や汽車にお乘りになつた事と思ふ。其の時何等不潔の物に手を觸れなかつたと思つても、電車の釣革とか其の他の部分とか、必らず何かに手が觸れたに違ひない。時には共同便所で用をたす場合もあらう。かういふ譯で手は必ず不潔になつて居る。電車の釣革は公衆衛生を重んじて常に消毒が行屆いて居るかしら？　よし屆いて居るとしても、頻繁に手が換はるのであるから、さう消毒に信を置く事は出來ない。時にはまた、種々な病人もこれに觸れる事であらう。

それを知らずに後から掴む。運惡くそれに黴菌が附着してゐれば、それを家へ持つて歸る。それが口へ入る、目へ入る、そして恐ろしい傳染病に罹るといふ事になるのである。併しさう心配ばかりして居ては限りはないが、また多くの場合此方さへ健康體で抵抗力が强ければ、かゝる傳染病には罹らぬものであるが、若しそれが惡性の黴菌で、その上此方が虛弱であると、隨分傳染しないものでもない。よく系統不明の病氣などといふのが、かうした順序を經て來たのではあるまいか。

かういふ譯だから、外出先から歸つたら必ず手指を石鹼でよく洗ふ習慣にしたい。石鹼でよく洗ひさへすれば、大抵恐ろしい黴菌は死んで了ふから安心である。

又家に入る際入口で足袋は脱いで上るべきである。さんぐく往來した足袋は、塵芥は勿論、裏などには何が固着して居るか分つたものではない。その足袋で疊の上を步かれては隨分不潔なものである。要するに外出の足袋と家の中の足袋とは別でなければならない。

それから手を洗つたら、同時に含嗽をするのも必要な事である。殊に傳染病流行の際には尚更である。



これは少し話が違ふが、世の中には顏や頭には隨分憂身をやつして居るお方で、その手を見ると忽にうんざりして了ふものがある。甚だしいのになると、長くのびた爪の間に黑い垢が一ぱい埋まつて居る。其の上小指の爪を態と長くして、耳の垢や鼻糞をほじくり出す器具に應用して居る。これは實に不衛生も甚だしいもので、御親切にも恐ろしい黴菌の巣を拵へて置いてやる樣なものである。

さてこれで手の清潔は濟んだとしても、これを拭取る手拭やタオールが汚れて居ては何にもならない。であるから、手拭タオールは常に清潔にして置きたいものである。

胸を押潰す美容法

次に婦人の着附だが、一般に日本婦人は紐や帶で固く締めつけ過ぎる。本來帶としては腹部に卷くべきものを、大抵の者は胸の肋骨の第何本目かの上へいやといふ程堅く卷きつける。袴をつけても矢張同樣である。



これが非常に不衛生なのである。つまりこの爲に胸に段階が出來ることになる。即ち帶で溝が出來る。その明らかなものは帶溝とさへ名づけて居る位である。それに胸廓を強く壓することから、著しくその發達を妨げ、幅も深さも狹淺になり、從つて胸腔内の廣さを減じて平たい胸――即ち扁平胸といふものになつて了ふ。そして又胸が扁たくなると同時に鳩尾がぐつと凹んで、裸體になつた恰好などは頗る珍妙なものである。

この仕來りを何と見ようか、一方には堅く締めなければ氣持が惡いといふ事もあらう。が、主として容姿を整へる上から來たものであらう。成程整容といふ事は女子にとつて大切な事に違ひないが、何も身體を痛めてまでやらなくともよからう。此の點から考へても日本服を着る際には、今までの樣に堅く締めつける事を止め、なるべく姿勢に注意し、胸を張り出す心掛が欲しいものである。

命懸けの禮儀作法

それから日本には昔から端坐といふ習慣があり、日本の禮儀作法として極めて大切なものとされて居る。併しこれが又衛生上から見ると頗る困りものである。何しろ折り重ねた足の上に十貫目もある上體の重みが載るのだから、足の負擔は非常なもので、しかも行儀のよい方になると、一時間でも二時間でも我慢するのだから後が恐ろしいのである。

先づ上體の重みの爲に腰から足の先までの血液循環の惡くなるのは勿論、筋は疲勞し炭酸瓦斯がどん〳〵増えて來るので、炭酸中毒を起し、遂には神經も筋も痲痺する。初めのうちこそ痺れるといふ事が分るが、痲痺して了へば棒の樣になつて、自分の足やら何やら分らず、つねつても更に感じがない。これでは足を殺す樣なものである。

此の藝術は外國人などには到底出來るものではないので、日本人の坐るのを見て其の器用さに驚いて居る。これは器用で出來るものではない。幼少の時代からエンコ〳〵で教へるから自由に坐る習慣が出來るのである。今まで坐るといふ事を知らない大人に坐れといつたところが、どうして坐れるものではない。屹度引繰返つてしまふ。

併しその害毒に至つてはこんな冗談では濟されないのである。

血液循環が妨げられる爲に心臓を惡くする。婦人で醫者からよく心臓が惡いといはれるのは、坐る事の長い者に多いのである。女子には男子に比して心臓の弱いものや、心臓病に罹つて居るものが頗る多い。そればかりではない。坐る爲に足の發達が止つて脊が低くなり、足は不恰好になる。殊に碌々運動もしないで坐つてばかり居る婦人などは、足の發達が極めて惡く、兎角短小で、其の恰好は見られたものではない。



更にそれ以上困るのは、坐る事から直接生命が短縮される事である。これは心臓が冒されると、その運動が鈍つて、發達する事が出來ずに小さなものに納まつて了ひ、若い内から疲勞して來るのである。

此の害から免れるには、どうしたらいゝか？　椅子にして了へば一番いゝのであるが、これを一般に實施するのは先づ不可能である。併し幸にして今日では到る處に椅子や腰掛を見る樣になつたから、幾分此の害から救はれる譯で、一般家庭としては矢張坐る事が多いのであるが、常に注意してなるべく端坐の時間を短かくし、一方努めて運動に親しむこと、卽ち姿勢を正しく歩行を盛にする事が最も肝要である。

非衛生極まる日本流洗濯

椅子に腰を下すと云ふことから思ひ出したが、日常生活から見て洗濯である。大抵の家庭では盥の前にしやがんで洗濯する。これが女子には非常に悪い影響を與へるのである。しやがんで洗濯すると、臀部に血液が集まつて、壓迫されるから、坐つてゐるのと同樣に血液が其の部にばかり止まつて、臀部が疲勞すると同時に又肩から胸にかけて緊張するやうな痛みを覺える。そして又下腹部に於ける器官は下垂する。これが寒冷の時季であると、冷え込みと云ふことになるから、何かしら下腹部に病氣を起すやうなことになるのは、當然のことである。



これには改善の必要がある。差當り椅子に腰を下して、盥を相當の高さまで臺の上に載せれば、それで樂に洗濯することが出來ようと思ふ。兎に角腰を固定するものがなくつて、腰を垂らしておくのが、いけないのであるから、これに注意して下されればよいわけで、あながち椅子に限つたものではなからう。何んでも間に合ふものなら充分である。そして冷え性の御方だつたら、腰に布團でも宛がつたら結構である。

黴菌を交換する献杯

世人が打忘れてゐることで、飲酒に附隨して非常に悪い仕來りがある。それは盃の交換である。例へ親と子、又は夫婦の間でも、食事の時は箸と茶碗は別にすることは知つてをりながら、それと同じことで、而も口へ直接に當てるものである盃を別にしておかぬ人が多いのは危險至極である。献杯の害は接吻の害と同じく恐ろしく不衛生なものであつて、傳染病などはこれから傳染することがある。



それには梅毒性の下疳が唇に出來ることがあり、喉頭に結核菌が止まつて喉頭結核になつた例もある。それを一向平氣で、酒はアルコール也、アルコールは卽ち消毒藥也、などと安心してゐる人もあるが、結核菌の如きは酒の中に五時間も生息し得ることを實驗から證明してゐる。然るに短時間に飲んで渡す盃にどうして殺菌が出來よう。一杯の盃を一度にぐつと飲み干してさへ、一萬餘の黴菌が盃に附着してゐるといふ。況してチビリ〳〵と飲む盃に何萬の黴菌がゐるか分るものでない。又中には盃洗の水で洗つて飲めば、安心と思つてゐる人もあるが、酒席などで一二度位盃洗の水で洗つたところが、少しも効力が無いのみか、遂には却つて黴菌を洗ひ落した水の中へ盃を入れることにもなる

のである。

これも近頃衛生思想の目醒から、相互に盃の交換を廢してゐるものもあるが、全般には知られてゐない。これはどうしても相互に了解して廢止すべきものである。

帽子を被る害の數々

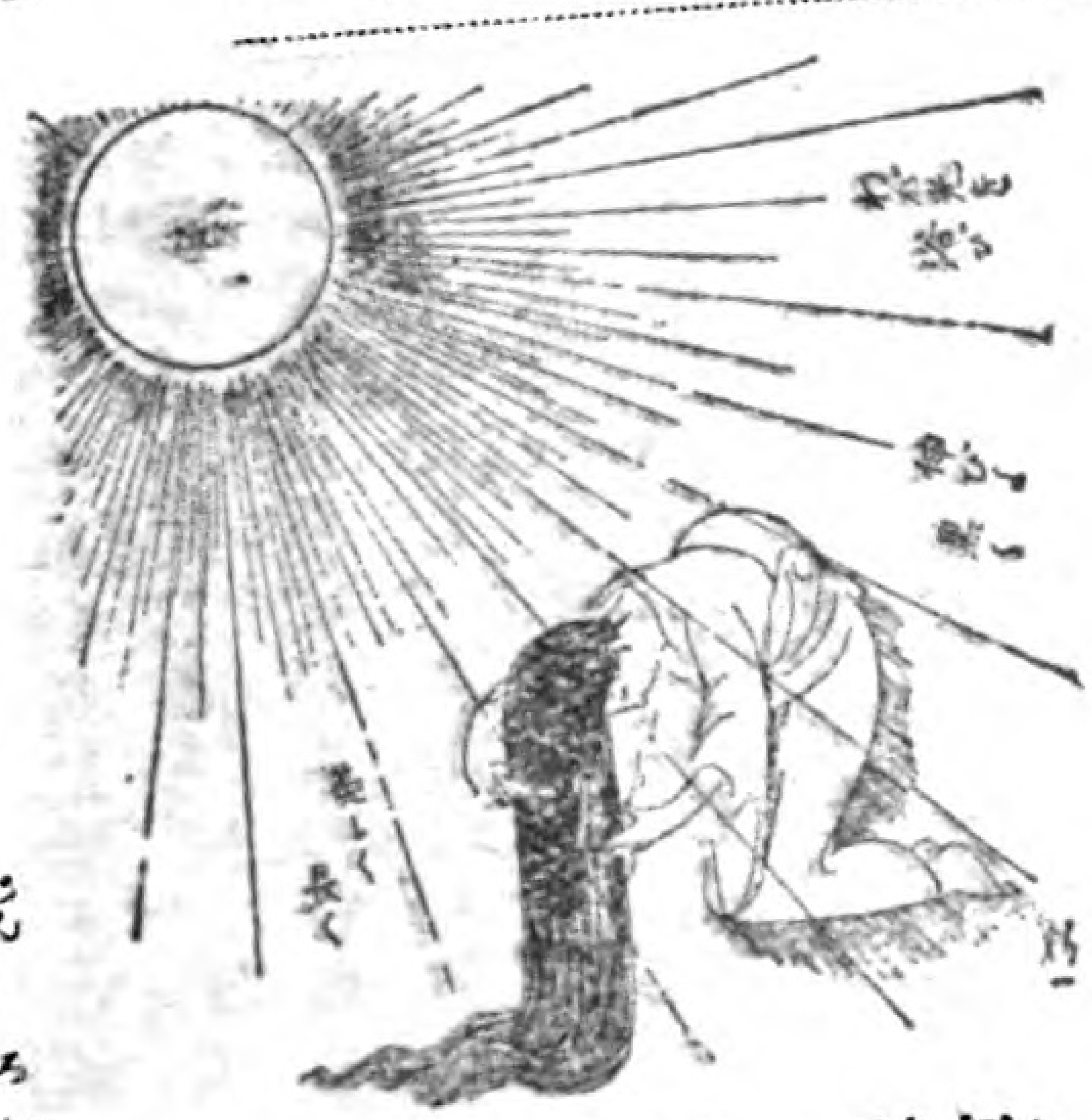
今度は帽子に就て少しくお話したい。さて帽子と云ふものは、衛生上から見て良いものであるか、或は惡いものであるか、これが問題なのである。かうなると帽子は寒さを防ぎ、日光を遮つて頭部を保護する。又整容上缺くべからざるものであると云ふ人が多いであらうと思ふ。ところが、人間の頭部には毛髪が生えてをり、その毛髪でそれらのことは十分出來得るものである。只整容の上からぐらゐに必要とでも言へようか？　それ故實際上考へてみると、餘計のもので害こそあれ、衛生的の目的には適してゐないのである。



聖體長養より整髮重要……？

然らば帽子の害は何んであるかと言へば、頭が熱することである。これが一番不衛生の基である。頭腦と云ふものは常に冷靜でなければいけない。頭が熱してゐては、よい頭の持主になることは出來ない。頭寒足熱は衛生上の原理とも言はれてゐる。されば常に帽子を冠る人は、頭腦の蒸熱の爲に先づ苦痛を感じてゐるわけである。そして帽子を始終冠つてゐるものには、髪にふけが出來る。そのふけがひどくなると、毛根を冒して毛が拔けるのである。即ち頭を蒸すと云ふことは、毛の拔ける最大原因である。その證據としては軍人を御覽なさい。大抵上級の將校になると、薄毛になつてゐるか、禿てゐる。又帽子と同じ樣に鬘を冠る役者も若いうちから隨分禿てゐるものが多い。これらは總て頭を壓迫して毛髪の發生を妨げるに基くものである。

日光は髪の毛の妙藥



それ故に毛髪は常に日光と空氣に曝すのに限るので、日光に毛髪を曝すと、毛髪の黴菌を殺し、光線の爲に發育を良くして光澤を添へるのである。夏の強い日光に頭を曝すのは危險だと云ふ人もあらうが、これも慣らしやう一つである。熱帶地方に行くと、帽子を冠つてゐることは苦しくなる。ネグロ人は露出した頭を、赤道の太陽に照して、平氣で活動してゐる。殊に我國の如き太陽の光線では、無

帽に煩へられぬことはない。ドクトル、マイホル氏は毛髪の病氣に就て、種々研究の結果、毛髪脱落はその十中の八九は帽子に因るものだと證明してゐるくらゐである。この點から故人になられた男爵高木兼寛博士は、無帽主義を主張され又實行された。

毛は婦人に於ては黒髪となり、從つて大切にされるものである。日本の婦人の髪の長くて美しいのも、西洋人のやうに帽子を冠らずにゐる爲である。又それと同時に適當な刺戟を與へるといふことも必要である。婦人が毎朝髪を梳くといふのも、この刺戟を與へるといふ上に良いことである。又時々洗髪にするのも良いことである。ところが最近に於ては女兒のうちから帽子を冠せるやうになつて來たから、昔のやうに婦人の美しい長々とした髪を見ることが少なくなるであらうと思ふ。

人は兎角病氣になつてから大騒ぎをするのが常である。病氣を豫防することを考へてゐない。高木男爵の如く無帽主義を、若いうちから守つてゐれば、その人は老年に入つて頭の禿げることを心配することが少いであらうと思ふ。

それでもし帽子を冠る必要ありとすれば第一の要件は輕いと云ふこと、第二には空氣の流通のよいことに重きをおかねばならぬ。

まだ／＼不衛生になる問題は山程あらうが、あまり長くなつたので、之で擱筆することにする。

『終』



智能と食物との關係

農學博士　澤村　眞

筋肉勞働と精神勞働

智能的職業者の多い現代に於て、智能と食物との關係を知ることは、可なり興味のある問題であります。

一體、汽車や自動車を動かすには、石炭やガソリンを燃さなくてはならぬと同じ樣に、人間の身體を働かせるにも、體内で食物を分解せなくてはなりません。それで非常に速く歩行する場合には、睡眠中に比べて、養分の分解は殆と七倍の多きに達します。故に手足を働かせれば、それだけ養分の需要を增し、自ら食慾も進み食量が多くなります。もし勞働時に食量が增さないとすれば、體中の筋肉や脂肪が分解して、身體は瘦せ甚だしきに至れば病氣にもなります。

それならば、精神的の勤勞の場合はどうかと云ふと、智能の働きは腦の營む所でありますから、勞働によつて筋肉の成分が分解すると同じ樣に、智能を働かせれば腦の成分が分解することは當然であります。併しその分解する量に於ては、大なる相違があつて、精神的動作は筋肉的動作に比べて體内の分解は言ふに足らぬ程少いのであります。よし又腦髓が筋肉と同じ樣に分解するとしても、腦髓は身體の百分の二位に過ぎませぬから、いかに多く智能を働かせても、筋肉勞働の百分の二位にしか當らないのであります。尤もこれは推論で、實際には確實でありません。米國のベネヂクトやカーペンターといふ學者が大學生に就て試驗した結果も確實ではなく、腦髓を使へば體内の分解は少し增しはしますが、その增すのは頗る僅少で、研究者は智能的動作が身體の新陳代謝を增すと結論するに躊躇したのであります。

榮養の歌

一

覺めて朝日を仰ぐ時　鬼をも拉ぐ力あり
夢安らかに眠りては　疲れを醫す血潮あり
寒さ暑さに打勝ちて　直ぐなる心生ひ育ち
病襲はむ隙もなし　これ皆榮養の賜ぞ

二

善き子良き孫生ひ立ちて　外國人をしのぐなる
剛健偉大の人となり　食めども盡きぬ糧ありて
汲む水清く澄みわたり　いとも芽出度き神祭り
人を生かしめ世を救ふ　これ皆榮養の勳ぞ

少食の面白い例

以上の如く、智能的動作のために體内の分解を增すことは殆と無いといつてよいほど僅少であるから、智能の働きを增す爲めに食物をそれだけ多く攝る必要はありません。否、むしろ大食は却つて智能の働きを鈍らせる虞があります。大食をすれば、之を消化するだけにも大變な力が消費されるので、從つて智能の方がお留守になるわけで、試驗前に大食をして安眠を妨げられ、翌日頭腦が明晰でなくて失敗する例は澤山あります。

有名な雲照律師は、朝三時に起き牛乳一合とカルルス煎餅三枚とを食し、午前十一

時まで坐禪し、晝には小さい茶碗で飯三杯と豆腐で夜十時迄讀書し、それから牛乳一合と水飴少許りとを攝て寢に就いたといふ。又駿河臺の高樓を建てたニコライ師は八ヶ國の語に通じたと謂はれる篤學者であつたが、非常に少食で、歐洲人にも拘らず夜食には肉を却けて用ゐなかつた。精神的勤勞者には現に自分の知つてゐる範圍だけでも二食の人が少くて、自分も其一人であるが、二木博士などは近頃二食を卒業して一食に進まれたさうであります。智能的動作に食物を多く要せないことはこの實例を見ても分りませう。

頭腦によい食物

かく申せばとて、精神的勤勞者が食物に無關心であつてよいとはいへない。即ち食物の選擇は細心の注意が必要なのであります。

ブフナーは、『燐がなければ思想がない』と云うてをります。腦の特殊の成分で腦の働きを起す素だと認められるものにプロタゴンと云ふものがあつて、これには燐が多く含まれてをるので、燐がなければプロタゴンは成立たないことになる。そこで、智能の働きには最も燐が必要であるといふ事になります。

燐に富んだ食物は、卵の黄身、牛乳などが第一で、肉類や豆類にも相當含まれてゐます。最も燐の豐富なのは骨で、從つて小魚など丸ごと食べる事は最もよい。骨のソツプも惡くありません。

次に沃度も亦智能の働きに大切なものであります。人體には甲狀腺といふものがあつて、これが智能の作用に大變關係をもつてをりますが、この甲狀腺の主成分はシロキシンといふ物で、シロキシンの特異成分は沃度であります。それで甲狀腺の活動を旺んならしめるには沃度を攝らなくてはなりません。沃度に富んだ食物は、昆布、わかめ、淺草のり等の海草類です。



この外蛋白質も相當に必要であります。青年男子ならば、一日に二十匁位は攝らねばなりません。質のよい蛋白質を攝る目的で獸鳥魚の肉を適宜に食することもよろしい。併し試驗前だといつて、牛肉の三四人前平げるなどは禁物、大食の害は肉類の過食の場合に特に恐ろしいのであります。

よくない食物

智能の働きに害のある物は、まづアルコールです。奇拔な思想はアルコールによつて喚起されることもあり李白が一斗詩百篇などいふ事もあるが、決してよいものではありません。この外刺激性の食物即ち辛子、山葵、蕃椒、薑などの嗜好料も衞生などは避けたがよい、嗜好料のことを西洋人は腦の食物と云ひますが、これは嗜好料が腦を刺激することを云うたので、腦の營養となる意味ではありません。禪僧が葷酒山門に入るを許さずといつたのも、アルコール其の他特異成分が腦に及ぼす結果を慮つたによると思はれます。要するに智能者は食物の選擇に注意が必要であると思ふのであります。



人見さんとクラーク孃
（二百二十碼槍投カップ）（走高跳ハードルカップ）

全英女子競技大會に於ける
人見絹枝孃の大奮闘

在倫敦　思洋生

一

はるかにシベリヤの野をこえて來た早稻田大學陸上選手が、英國の最強チーム、アキレス・クラブ（牛津、劍橋兩大學聯合軍）と、惜敗こそしたれ、三十三點半對三十一點半の大接戰に日本健兒の意氣を示してから恰度四日目の七月十五日、所も同じロンドン、スタンフォード運動場に、『われらが誇』人見絹枝孃の活躍は行はれた。第六回英國女子選手權大會、全大英國から幾度かの豫選に選り抜かれた五百餘名の精鋭に交つて、大和撫子の花一輪、祖國の名の下に、けなげにも雄々しき奮闘の姿は、どんなにか在留邦人の血を湧かしたであらう。

歐米に旅するものゝ最も遺憾に堪へないことは、わが國の眞相が殆んど正しく理解されてゐないことである。ロシヤを敗かした國、地震の多い國といふ位で、なぜ日本が強くなつたか、日本にはどんなに尊とく久しい歷史があるかなどは、全く關知しないものが多い。最も關係の深い英國でも、ロンドンを離れて少し田舍に行けば、日本人と支那人の區別さへ知らない。

そこへゆくと、さすがに現代はスポーツの時代である。どんなアメリカ人でも熊谷の名を知らぬものはない。全盛すでに十年の昔となつた今日でもイギリス人に清水の名を問へば『おゝあのウインブルトンの小英雄か』とすぐに想ひ起すであらう。六月二十三日、ミドルセックス女子大會に走幅飛の世界記録をつくつて英國人を驚かしたわが人見孃が、けふ晴れの舞臺に、百碼、二百二十碼、走幅飛、槍投の四競技に萬能選手の勇を振はうといふのだ、故國を遠く離れてひたすら日本を念ふ在留同胞が、期待と歡喜に高鳴る胸をおさへて、われも我もと、スタンフォードさして押掛けたのも無理はなからう。

二

定刻午後三時、赫々として照る烈日の

下に、百碼第一豫選のピストルが鳴つた。斷髪に短いパンツ、輕快燕のやうな一團がさつと風を切つて眼の前をよぎる。アナウンサーの聲が朗らかに場内にひゞきわたる。

『第一着、ミス・レウィス、タイム、十一秒五分四』

豫選B組、白の運動服に紺のパンツ、胸には7の番號をつけて、さすがに緊張した顔色の人見さんがスタートに着く。この前の世界オリンピックに勇名を轟かした英國の名スプリンター、ガン孃と肩を幷べて。

息のつまるやうな瞬間——わづかスタートに出おくれた人見さんは必死となつて先頭のガン孃を追うたが、もう一歩のところで遂に及ばず、紙一枚の差で二着になつた。決勝には一着丈けしか出られないので殘念ながら最初の競技に敗れたわけだ。しかも決勝の結果はガン孃が美事に優勝したのだから、組方の都合では必ず決勝戰に出られたのみならず、或は二等か三等に入つてゐたかも知れない。しかし、これからだ。人見さんの唇が固い決心にキッと結ばれるのを同胞は淚ぐましく見つめるのであつた。



二二〇ヤードの決勝點（右人見孃）

三

鐵彈投にはウエストン孃が英國記錄を破つて六十一呎一吋で優勝した。圓盤投には前年の勝者バーチエナフ孃が九十一呎七吋半の成績で再び勝利を繰返す。いくつかの豫選や番外があつて、第九回四百四十碼、第一豫選、そのC組に人見さんは美事な一着を占めた。同胞はいふまでもない、單身遠征の日本ムスメに同情して滿場ドッと拍手が起つた。

一哩歩行レースにロンドンのハウエス孃が自己の持つ英國記錄をはるかに破つて八分二十七秒五分二で再び榮冠を擔つた後で、來るべきアムステルダムの世界大會に、大英女性の名譽を表示すべきユニオン・ジャックの章旗がロンヅダール伯爵夫人から、オリンピック協會々長スザーランド侯爵の手に渡された軍樂隊の吹奏する英國々歌を聞きながら、數日の後たつた一人の日本女性として和蘭の大會に臨まねばならぬ人見さんの心を思うて、何ともいはれぬ感慨に充たされざるをえなかつた。

四

されど、ためらうてはならぬ。見よ、次いで行はれた二百二十碼第二豫選に、『われらの誇』はラストダッシュあざやかに美事他の三人を引離して、世界の最



英のガン嬢

高記錄二十五秒五分四と同一記錄を出したではないか。アナウンサーの報告に滿場のファンは總立になつて喝采した。

『おゝ、ジヤパニーズ』と私の隣の白人がいきなり私の手を握つたとき、私は何だか眼がしらが熱くなるのをおぼえた。この記錄は曲線コースでつくられたので、若し直線であつたら恐らく世界記錄を優に突破してゐたであらう。

疲れを休める暇もなく第十六回槍が開始される。助走美事に、高く肩上に槍をかざした人見さんの姿は、朗らかな大空の下に、美と健康との如何にもうるはしい諧調だ。風を切つて槍は飛ぶ。斷じて他の十一人の選手たちの追隨を許さず、一投、二投次第に遠く飛ぶ毎に、人種も國境も超越した美しい歡呼の聲がスタンドに湧く。測定の結果は百十八呎一吋、世界記錄たる獨逸ヘルガス孃の百二十三呎には及ばないが英國記錄九十四呎九吋を遙かに拔いた好記錄を以てミス・ヒトミの勝利が報告せられた。

槍投の第二投と第三投との間に、息つぐひまもなく人見さんは二百二十の決勝に出ねばならなかつた。二回の豫選にすぐり拔かれた四名のスプリンタアが、瞳をかゞやかしてスタート・ラインに並ぶ。

『ゲツト　セツト　ドン』

疾風の如くさつとかけゆく四つの白い影、ただそれ丈けを私は見た。

『勝者、ミス・ヒトミ、タイム二十六秒五分一』



百ヤードB組豫選のスタート（向つて右端）

その刹那の同胞の歡呼――『われらの誇』は遂に二まで尊い榮冠をかち得たではないか。翌日の新聞紙上に『英國女子競技界の革命』と報ぜられたほど、この日は多くの新記錄が續出した。百碼低障碍には南アフリカのクラーク孃が火の出るやうな接戰の後十三秒五分四で世界記錄をつくつた。前年度の優勝者ガン孃はわづかな差で三着に落ちた。六百六十碼リレーにロンドン・オリンピアド組は一分十七秒五分一でこれ亦大晴れ世界記錄をうち建てた。

白熱のうちに回數は進んで愈々最後の走幅飛に入つた。ガン孃と人見孃との決戰、ガン孃にとつては先月二十三日の復讐戰だ。しかもこの日最

高の成績を舉げたひとの名譽を飾るべきホーク卿のチャレンヂ・カップは、今までの成績から見て、測らずもこの一戰に依て二者何れかの手に歸することになるのだ。ガン孃が先づ飛んだ。十八呎にとゞかない。人見さんが次いだ。十八呎に一吋ばかり足りない。わづか三時間のうちに豫選を合せて六回の出場、いくら元氣にふんばつてゐても、さすがに疲れが出てゐはしないか。――はりつめた邦人の胸に言ひあはしたやうな不安が掠める。それは杞憂ではなかつた。第二回目に十八呎をこえたガン孃は第三回の一跳に美事十八呎七吋四分三を飛んだが、疲れの見え出した人見さんは第二跳に調子がつかなくてファウルをしてしまつた。ガン孃のこの大記錄を前にして、人見さんは殘された最後の一跳、滿場唯寂として聲を呑んだ。

飛んだ！　と思つた刹那に審判の手がさつと上つた。

『ノウ、チャンプ』

可惜、たつた五分ばかり爪先が踏切の前に出てゐたゝめに渾身の努力も遂にファウルになつてしまつたのだ。敗れても榮ある東海の美しき星のために、人々は同情と賞讃の言葉を惜しまなかつた。莞爾としてガン孃と握手してゐる人見さんのけなげな姿を、私は到底久しく見るに堪へなかつた。



槍投げに優勝せんとする刹那

五

すべては終つた。勝てる者にも敗れる者にも、等しくその奮鬪をたゝへて、しづかなる樂の音は起つた。

賞品授與式――

『ミス・ヒトミ　オブ　ジャパン』と高くよび上げらるゝ聲を聞くとき同じ國同じ血につながる同胞の心はどんなにか強くはためいたであらう。石竹色に縁どつたクリーム色の瀟洒たる洋装、いまは全くやさしい日本女性の人見さんは、しづかに段を上つて、二百二十碼と槍投の優勝に對して、各カップと金牌、走幅飛の二等銀牌とを受けた外に、英國のガン、南アフリカのクラーク兩孃と三人、その世界記錄に對して名譽ある特別賞牌を贈られた。そして、この日最高の殊勳者が受くべきホーク盃はガン孃の手に依て辛うじてその母國に留まることが出來たのである。

再び起る奏樂の音――思へ、かよわき女性の身の、遠く祖國の名を負ひ來つて、いま爲すべきをなしつくした涙ぐましき刹那の思ひを！　私たちは『われらが誇』のまはりに集うて、心からなる『萬歳』を繰返したのであつた。(終)

古今異話切拔帖

○杉山檢校の妙技



杉山檢校といへば、江島辨天に參籠して、杉山流を創始した古今獨步の、鍼術の名人である。

或時、貴人の家に招かれ、暫らく待たせられてゐる間、戯れに、鍼術を茶碗に試みてゐた。やがて女中いで來て、更に、一杯の茶をつぐと、忽ち茶が漏れ出るに、こは不思議と立ち騒いだといふ。毛の如き針を以て茶碗をも突き通すほどの妙技、世に知られ、遂に綱吉將軍に召出されたのである。

○血附の石塔

有名なる首斬り淺右衞門の墓、見上るばかりの大石、一名、血附の石塔と稱へてゐる。淺右衞門は、幕府の刑死者の首斬り役人である。されば許多、斬られた者の怨念、自づと此に殘り、石面に血痕あらはると言ひ傳へ、ところどころに、赤き斑點がある。石の左右、また後には、斬られた人數百人の戒名を刻みつけてある。

○義猫墓

回向院に義猫の墓がある。上に猫の形を刻み、植善畜男と書いてある。男猫の墓である。

東兩國米澤町の魚屋利兵衞は、猫好きで、非常にりこうな男猫を飼つてゐた。或年の暮、利兵衞、途方にくれて、ひとり言に、愚痴を並べてゐると、猫、その心を察し、同町の富人某方に行き、幾枚かの小判を順々に啣へて來たが、つひに露はれ、その身は殺され、小判は利兵衞の手に渡り、年末の難儀を救うたといふ、小判で忠義をした不思議な義猫である。

○赤坊の衣物

長崎で、廿一才の兄、十九才の弟との二孝子の仇討があつた。



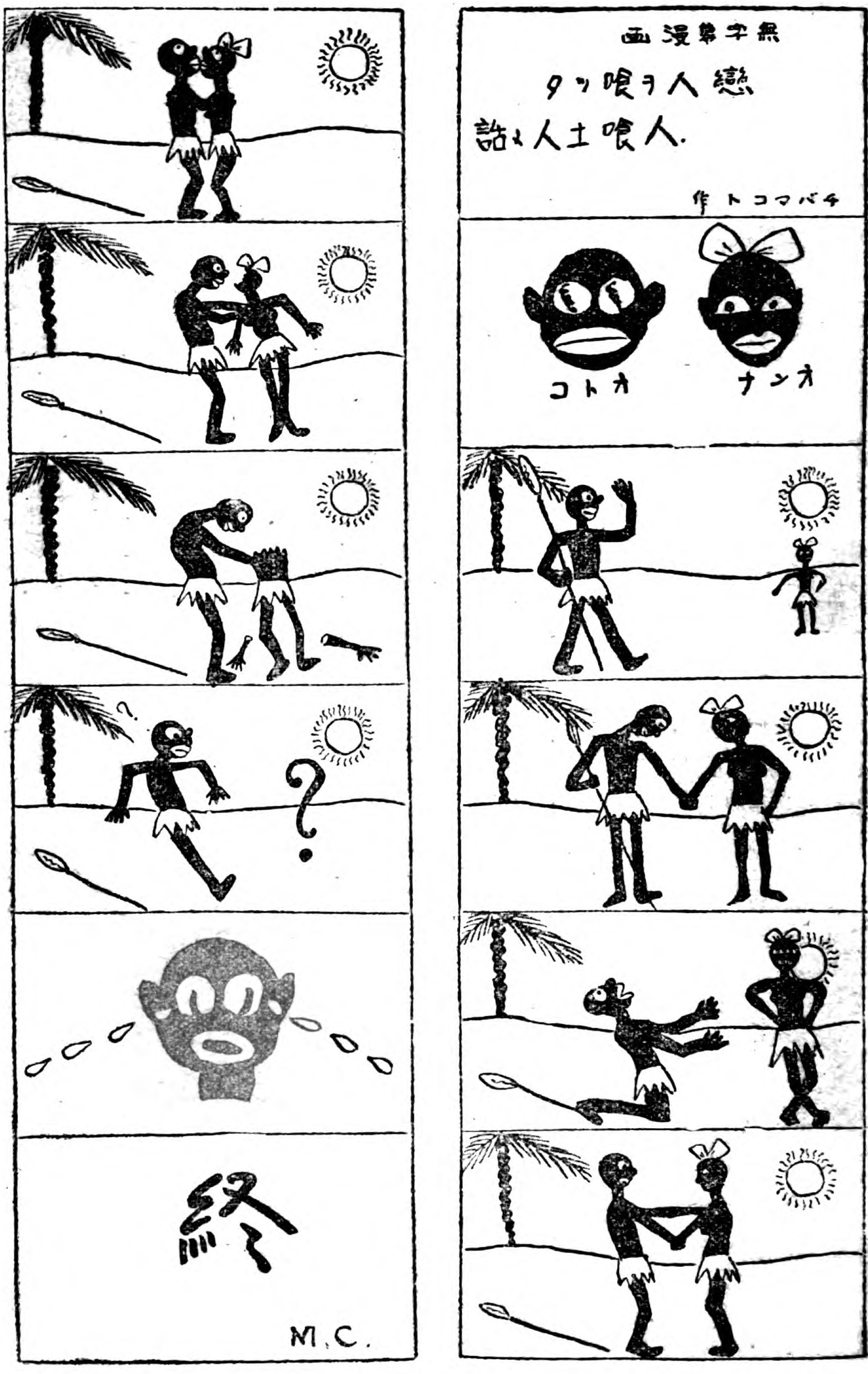
討たれたのは、拔群に魁偉な力士であつた。仇討のことを、聞きつけて、大勢の見物があつたが、二孝子が、ともに、赤ん坊の衣ものを着て、全身、露はになつてゐるのに驚いた。父母を殺されたとき、兄が四才、弟が二才であつた。仇を見つけるまで、年數が經つに隨つて、その志の碎けんことを恐れて、その初願を忘れぬやうにと、いつも、肌に、赤ん坊のときの衣物を離さなかつたのだそうだ。

○佐藤　佐が七人

佐藤　佐といふ同姓名の人が、日本に七人ゐて、互に交通もし、會合もしてゐた。

九州、直方、堀鑛業會社	佐藤	佐
神戶、茂木商店	佐藤	佐
大阪、天王寺中學教諭	佐藤	佐
東京、本郷春木町、漁業家	佐藤	佐
江田島、海軍兵學校、學生	佐藤	佐
東京、順天堂病院、醫學博士	佐藤	佐（逝去）
水戶、擊劍敎師	佐藤	佐（逝去）

此の七人會が成立した動機は、直方の佐藤氏から順天堂の佐藤氏に音信を通じたのが始めで、それからそれと、隨分、骨が折れたらしいといふ事だ。


無字漫画
戀人ヲ喰ッタ
人喰土人ノ話
チバマコト作
オトコ
オンナ
終
M.C.



蜂須賀小六

村上浪六
小山榮達畫

豐太閤の幼少時代を調べて見ると、十一の時は生れた中村の農家に傭はれて草刈と馬引と田螺取に追ひ使はれ、家を去りて十二の冬は美濃の長松で陶工の徒弟、つまり瀬戸物屋の小僧となり、十三の時は尾張に舞ひ戻りて蛇穴村（現在は美濃地）の豪農で神保といふ家の奴僕となり、そこを飛出してから針賣となりて諸方を彷徨ひ、十五の時に蜂須賀村の小六に養はれたが、この時は天文十九年で、父の信秀を喪うた織田信長は十七歳、孤兒の徳川家康は駿河の今川義元に人質となりて九歳、豪俠無類の名を以て海東郡に蟠居せる小六正勝は二十五歳で、いはゆる戰國時代の風雲は物凄い空模様を孕みながら猶いまだ武運の神は誰にも天下の使命を與へて居ない、

こゝに最も面白いのは、秀吉が關白殿下となりし時、ありし昔の懷かしさに自分の漂流時代を思ひ出して、これに酬ゆるため、それ〴〵世話になりし土地の者に當時の有様を書き出さして居るが、十三の時に轉げ込だ蛇穴村の神保家より差上げた文面には（（天下様、勿體なくも御戯れに我々共方へ御腰懸けの砌））としてある、まさか何處の馬の骨か牛の骨か分らない小せがれを救ひましたとも書けまいが、勿體なくも御戯れに御腰懸けの砌は滑稽の極で、實は御戯れどころかペコ〳〵の空腹を抱へて生命がけにヒヨロ〳〵と這ひ込み、置てさへ貰へば一年でも二年でも居たいのを僅か一月半で叩き出されたのが即ち御腰掛けといふ意味、然し腰掛けとしては頗る横着の長尻で、づうづうしく居据ッたに相違ない、

それとは違ひ、十五の針賣となりて小六の許へ轉げ込だのは、養うたものと養はれたものとの間に蓮華寺の慈証坊といふ一種の因緣が含まれて居て、加之も此奴、たゞの小せがれでないと見込まれ、こゝの主人、年は若いが尋常の家主でないと見込み、双方とも互ひに何となく捨てもせず捨てられもせぬ暇

か味を其まゝ持合うたので、いたるところ直ぐに追ひ出されたり追ン出たりした豐公の昔時、ゆツくりと食ふ心配もなく二年越に落着いて居たところは蜂須賀村だけである、

この蜂須賀村は腰掛けでなく、諺にいふ居候と置候の間柄で、居た方も置た方も前ならぬ身の他日の事は知らず、ただ眼前に面白い奴を拾うたとし面白い人に拾はれたとして、日の經つに從ひ、事の起るに從ひ、段々その間に離れ難い情味の湧て來たものらしい、

無體に迫られた男色に應ぜぬため、家を嗣で居た兄は殺され其身は監禁の中より朋輩の情誼に城を逃げ出して來たといふ淸洲の坂田小平次と、居心地のよいために動かず其まゝ居候を極め込だ針賣と、母屋を離れた同じ裏屋の一室に起臥して居るが、名畫から浮び出したやうな十七の美少年と、貧乏神の氏子から這ひ出したやうな十五の醜い小倅と、枕を並べて寢た時の顔は、絹張の御所團扇と破れた反古張の澁團扇を並べた如くで、あまりに美醜の相違が甚だしい、

然し主人の小六は絹張の方よりも反古張の方に團扇を舉げて居る事は、船出の船頭が天氣を見るよりも目早く心得たばかりか、第一また自己の小さい身體と見苦しい面に遠慮するやうな生優しい小倅でない、急病と稱して倒れ込だ時は人よりも親切に世話もし介抱もしたが、この頃は摑み合の喧嘩になるぐらゐは承知の上で、をり〳〵相手に冗談半分の嫌がらせを逆りかけたり、ちよい〳〵馬鹿にするやうな文句を浴せかけたりする、

『過日、主人殿の前で申された男色といふ事、ふしぎでならぬ、じたい男が男に何をするのか、それを委しう聞かして下されぬか』

戰國時代の風習として、さのみ珍らしい事でもないが、眞正面から無遠慮に問はれた當の本人、いかにも迷惑らしく急に返答も出ない、流石に薄く顔を赤めながら、

『そのやうな事、わざ〳〵委しう知られいでも、たゞ男色と覺えて置けば濟む事』

『いや、その事の本人に出會うたを幸ひ、後日のため委しう聞て置きたい、もし、この身へ男色の難が來た時の用心に』

づう〳〵しいにも程度がある、どう狼狽た相手でも茶人でも、小兒の泥細工を乾し固めたやうな面相に男色の難が來るとは、おもはず其顔を見て、ぷツと吹き出した小平次、

『心配には及ばぬ、はゝゝゝ』

『いや、安心が出來ぬ、ことし十五ぢや、これからが恐ろしい』

何が恐ろしい、先方で恐れて逃げ出す面を、さも心配らしく差伸して、小膝を進めながら、

『合戰には合戰の逃げやうもあり矢玉の避けやうもあるが、うかとして居るところを覗はれては堪らぬ、二三年の後には必ず女子に追はれるものと思うて居たに、男にも追はれるとは、こりや油斷のならぬ世の中が來たぞ』

ます／＼人を馬鹿にするやうな調子で、二三年後に女難だけの覺悟を極めて居る工合、呆れて物もいへないが、同じ一室に絶えず顔を見合しながら啞の如く無言の睨み合も出來ず、たまたま用のある時に一言でも出せば、すぐに言葉尻を捉へて際限もなく饒舌立て、また厠に行く外は出るにも入るにも影の形に添ふ如く、坂田小平次の一擧一動に蒼蠅く附纏うて離れぬ樣子を見て、わざと知らぬ顔の小六は笑ひながら、

『やれ、蟎が宿替した、なるほど我よりも皮肉が柔かで血も美味さうぢや、はゝゝゝ』

今まで主人の小六に附纏うて離れないのと、この坂田小平次に附纏うて離れないのと、同じ離れないにせよ、その附纏ふ心の底に黑白の相違がある

主人の小六より呼ばれた小平次、こゝへ來たまゝの衣類ではあるが、襟を搔き合せ裾を整へて、指先に鬢を撫であげる風情、どうしても戰國武士の子に生れた男とは思へない優しさで、擧動りを靜かに行かうとする背後より例の蟎が例の如く離れずに隨て來る、

振返りし小平次、

『我、一人を召しますぞ』

『いや、こなたの家來でないもの、こなたに隨て行く筈がない、どこへでも身勝手に行く』

『身勝手も時に依る、外ではない、主人の殿より小平次を呼べと仰せられる』

黑く瘦せた小さい顔を振上げて、ぐるりと額越に底光りの目を剝き出した、

『年は下でも、當家では日數の多いものに指圖がましい、主人殿、そこ退けといはるゝまで、こなたの言葉は受けぬ』

うるさい蟎に取付かれた小平次、抓み出さうとすれば喧嘩になる、下手に爭へば武者振付て喚き立てる勢ひ、大事の前の小事とでも思うたらしい顔で、聊か目顔を寄せながら、

『兎も角も勝手に』

『始めから知れた事、他勝手でない身勝手ぢや』

はや秋草は庭に枯果てゝ大木の幹ばかり軒端の庇越に見る奥の一室、霜月の末に開けた爐を前に母屋を支へる太い丸柱に背を持たせ、ゆッたりと落着いた大胡坐の小六、都の風に吹かれた當世流の華奢な風俗はないが、何處となく垢ぬけた自然の武者顔に出來て居て、加之も見た目の重味は今年二十五の男と思へない、

そこへ小腰を屈めて入來り、坐して三膝ばかり膝を辷り出た小平次、いかにも優美で作法を心得て居る、

『召しまして』

小六は首肯きながら、

『あらためて、呼ぶほどの事でもないが、幸ひ徒然の折柄、ちと念入りに聞きたい事がある』

慇懃に頭を下げた小平次の傍へ、ちよろ／＼と鼠のやうに這

ち一來て、横の方へ坐り込だ顏を見るや否、小六は無言に追ひ拂はうとした片手を、振らしもせず兩手で押戻す眞似をして動かない、

『おぬしに用のない事ぢや、聞くに及ばぬ』

すると兩手で兩の耳を塞ぎ、ぱちくり目ばかり動かして身體を動かさない、

剛情な奴ともいはず、その呵しさに笑ひ出した小六、

『はツはツはツ、居たくば其處に居れ』

『さほど居たくも思ひませぬが、居ても差支な いかと心得まして』

『差支、あるないは偖置、話しの中央で口を出すな』

よく〳〵お饒舌と思はれて居る事を殘念さうに、今度は自分の手で自分の口の端を強く捻り上げながら、承知いたしましたといふ面體、横着なところもあるが憎くないところもある、

小六は二度目の呵しさを奥齒に噛殺して、今更ながら小平次の顏を見直した眼光、今日は平常よりも光りを勝して居る、

『いかにしても、淸洲には歸らぬか』

『八幡、歸りませぬ』

『もはや城主殿、再び無體の難題を仕掛けず となれば、何とする』

『梵天、歸りませぬ、家を嗣だ家の兄、それがために殺されて、おめ〳〵この身は非道の主に二度目の奉公は致しかねまする』

―さもあらう、あらうが偖、兄を殺された怨恨、その主に報はうとするか』

『かく弱々しきもの、たとひ報い得ずとも、せめて、この身だけは主と思ひませぬ』

『武力で叶はず、主と思はぬだけならば、主從の縁切れ、これまでの事、わざ〳〵この我を賴みとして來ても何の甲斐あるまい、過日の事は合戰でも取合でもないぞ、狼狽て押出した淸洲勢に逃げ歸るべき方角を敎へたのみの業ぢや、はゝゝゝ蜂須賀村の小六あの織田彦五郎殿を敵とは見ない、本氣の沙汰では物足らぬ、まして生命がけの相手には不足ぢや、はツはツ、たとひ互角の戰ひにもせよ、外の意趣遺恨と違ひ、男色の事で走り出したものまで引入れて味方の人數に加へる用はない』

頭を下げて聲を沈めた小平次、

『どこに遁るゝ道もない、この窮鳥で御座りまする』

『いや、窮鳥の懐中に入るといふ諺もあるが、小六の懐中には、その窮鳥を入れぬ』

『いかに、どのやうに、おすがり申しても』

『世の中は廣い、懐中を開けて待つ人もあらうが、この小六は我門前の急病人を見捨てずに介抱したのみの事、もし其まゝ重く病み臥せば半年でも一年でも、但し本復した以上、室町風の餘波に色めいた若衆姿、その長袖に卷かれて動く事は不得手、あまりに不似合の男ぢや、はゝゝゝ』

蓋出口を封じられしため、小平次の横に小田の蛙の啼き損ねたやうな顏で、ちよこりと坐せる姿を指しながら、

『この我に分相應の窮鳥は、そこに居る、うまれ故郷にも食へぬ空腹を抱へて旅の空に彷徨ひ、わづかの針を賣り盡せば身の終りぢや、あはれ行倒れた野山の草の根を肥すより外に詮方のないもの、むづかしい仔細もなく第一また意趣遺恨の面倒もない、只その日の餌さへ無事に與へて濟む事、ちと嘴は出過ぎるが、これも小鳥の囀りと聞けば濟む、はゝゝ』

雀のやうにいはれて、ぷッと痩せた頬を膨らせし獨言、

『元來の小鳥もあれば、やがて大鳥になる幼な鳥も雛鳥もある』

この小鳥が他日の大鵬となりて天下に羽を伸すとは、我も人も神樣にも知れない、やはり何の前では小鳥のまゝの翼を縮めながら、今度は小平次に向ひ嘴を尖らしかける、

『世間の噂に武士の子といふもの、行きも還りもならぬ時は、人にも告げず腹を切ると聞き及ぶ、また敵と思へば生命を抛げ出して、打つか打たれるかの二事と聞き及ぶに、こなた、ようも今まで無事に生きて居られた、もし城を脱け出る時、せめて一太刀、や、兩刀を取上げられたといへば、せめて腕にでも脛にでも機よくば咽喉笛へ喰ひ付て、追ッ手の奴に追はれながら逃げ込めば、それこそ窮鳥の懷中で、主人の殿は捨てゝ置かれぬに、惜しい事ぢや、べらべらその色紬で來られては盲目よりも間違うた門違ひ、津島祭りの人形代りに僞はれるより外はあるまい、はゝゝゝ我等なら叶はぬまでも賣れ殘りの針で、ちくりと刺してやる』

頭を下げて居た小平次、さも憎氣の横目に睨みて、

『よけいな事』

『よけいな事とは』

『入らざる智惠は借らぬ』

『三才兒も辨へた事を智惠といふか、もし智惠と思へば、借したらもないが、自然に溢れて出る』

小六は面白げの微笑を浮べながら、二人を押へ付けるやうな力聲で、

『無用、爭ひ無用ぢや』



小六の目には坂田小平次を何と見たか、いづこへなりとも勝手次第と一月分の路用を與へ、二日の間に篤と身の置きどころを考へ世の中の方角を定めて行けとの言葉、いよいよ二日の間に人知れぬ心の底の刃を磨ぎ出した小平次、今までも幾度か覗うて見たが、幾度か隙を窺うて見たが、岩

壁に對ふが如く押戻されるやうになり、頸の上を大石に押へられるやうで身の自由を失ひ、加之も例の痛奴が平張付て居て邪魔になる、然し主人の前で言ひ爭うた事が結句の幸ひ、もう蒼蠅く口も出すまいと思へば、やはり平氣に纏ひ付て饒舌りかける、

『かう無事に養はれて居ても、まだ今に針賣の口上辯が殘りて、うかと舌が過ぎまする、ははゝゝ』

小平次は生命がけの二日で、わざと無言のまゝ返答もしないが、ます〱口を出して來る、

『心易さが爭ひの基で、別れて見れば戀しいもの、もう二日となれば猶更に名残りが惜しい、これから前途どこへ行かれる、三里や四里は見送りまするぞ、年は上でも、こなたは苦勞なく育ちて旅馴れぬ人、年下でも十二の時から野山に寝て來たもの、いふ事は、無益でない、わけて冬空に向ひ寒風に當る身、雨にも雪にも冷えぬ工夫は百姓の打藁を腹に卷て、いかに乾いても水は飲まぬ事、朝は日の出ぬうちに歩み出し夜は日の暮れぬうちに塒を定め、主人殿より下さるる一月の路用は二月にも三月にも引伸して、但し身の落着は一日も早う、かげながら祈かけて念じまするぞ、半乞食に馳け歩いた針賣と違ひ、こなたは落ちても氏ありげの生來、どこの里でも木屑のやうにはされまい』



いかにも情らしう懇ろに心切らしいが、その顔を見ると人を人とも思はぬやうな横着さで、やはり小面の憎いところがある、されど心の張り弓、矢を番へた時で、的は此奴でない、

『數々の心添、嬉しう受けまするが、浪々の果敢なさも日が經てば、次第に馴れる事』

『や、その覺悟さへあれば、野犬の餌食にもなるまい』

そろ〱本來の憎まれ口を叩き出したが、小平次は苦笑ひの顔を反けて相手にならない、

『今夜かぎりの身、ちと早いが、ゆるりと寝たい』

夕飯を終るや否、まだ日の暮れきらぬ宵の内に片隅へ蒲團を引出し、後ろ向きに寢ながら、をり／＼溜息の漏れて來るのは、また賴む樹下に雨漏りし悲しさを歎くやうで、心細い行末の思案に餘るやうで、その枕に伏せた襟首は女のやうに細く白いが、二千の武者ありといふ清洲の城中で、これほど大膽不敵に入り込だものはない、

蓮華寺の鐘の音に夜は更けて、母屋も表小屋も裏小屋も寢靜まり、ひッそりとせる中に木枯しの音のみ冴渡り、吊り行燈の火も隙間より吹き來る風に瞬いて薄闇い丑滿頃、京人形を横へたやうな小平次の頭は次第に蒲團の中から動き出して、畫ける如き美少年の顏に額越の半眼を開き、じろ／＼と四邊を見廻したのは、鬼の目を怒らして人間の生血を吸はうと覘ひ寄る時よりも物凄い、

ソッと半身を起して、傍の寢息を窺へば、晝中の口ほどでもない奴、野山の夢に馴れた身の寒くもないらしく、木枕を跳飛して蒲團の外に手も足も投げ出した大の字形の高鼾、

片手を伸して火の氣のない火鉢を引寄せ、灰を掴み出して用意の紙に三包みは第一まづ剛敵への目潰しで、それを懷中へ入れ、下着を其まゝ長袖は襟首に結び



の寢卷にして居た兩の合せ、からげた裾を締め直した腰帶に固く挾み、城を脱け出す時に朋輩の情誼で與へられたといふ匕首の袋を解き、わざと急に音高く足を踏出して見たが、まだ石佛を仆した如く、前後も知らず寢入りて目を覺さない、

もし怪めば厠に行くといふ當意即妙も用なく、すッと入口の戸を引開けて、小平次の姿が外へ出たと共に、むくりと小さい黒蛇のやうな鎌首を持ち上げて、のろ／＼と這ひ出した、

この裏小屋から母屋へは戸締りもない内側續きの板敷通ひで、武

運の神よ守らせ玉へと小平次の忍び込むや否、小さい影は聲も立てず後も追はず其まゝ板敷傳ひの縁の下へ消え失せたが、召使ひ幾人の寢息を窺ひながら忍び行く上よりも早く、この邊が主人の居間と心得て、こつ〳〵と下から叩き出した音に、ふと目を覺した小六、鼠の業かと思へば、二三度も咳をする聲、深夜の曲者ならば、わざと下より叩いて音を立てる筈なく、まして咳をする筈がない、ふしぎな事と思ひながら、その不思議に慌てる男でなく、驚いて跳ね起きる男でもない、靜かに枕頭の刀を引寄せて夜具の中に入れ、壁に向うて寢て居た顏を縁端の方に向け直し、目を閉ぢつゝ耳を澄せば、虫の這ふが如く幽かに此方へ近づいて來る人の忍び足、その縁端の障子、一尺ほど音もなく開いて、まだ全身を現はさないが、ちらと此方の燈火をうけた半面は坂田小平次、



これで床下から叩いた音も知れた、いかにも素早く油斷なく時に取ての才覺、うい奴と心に笑ひながら、我一息で吹けば飛ぶやうな身を以て、この小六正勝の寢首を搔かうとは、あまりに大それた向う見ず奴、どうして寄るかと、いよ〳〵寢入りし顏、

小平次は固より生きて還らぬ覺悟で、たとひ首にせずとも、清洲の城の恥辱を一身に引受けて來た武士の冥加、せめて急所の一刺、よもや皮肉は鐵石でもあるまいと、そろ〳〵這ひ込み、まづ左手に目潰しの一包み、ぴかりと右手に匕首、生命は無いものにしても、この剛敵に落着て掛れず、漸く胸に氣は焦りて小六の細目を開けて居た事が分らない、

四尺餘りの處まで這ひ寄るや否、まるで蜻蛉でも追ひ拂ふ如く、寢ながら夜具の中より無言の手を横に振り出した小六、不意の大喝一聲を喰うたよりも恐ろしく五體を震はした小平次、もはや免れぬ絶體絶命の死物狂ひで、ぱッと目潰しの灰を叩き付け匕首の鋒鋩もろとも蝗のやうに飛掛りし筈の身は、もぬけの殼の夜具の上に轉げ込で、無我夢中に起き上らうとすれば、はや既に磐石の下敷、小六の大力に押へられて自害する手も動けない、加之も頭上より笑ひ聲、

『はゝゝあの彦五郎は合戰の下稽古に來て、おのれは寢首搔きの手習ひに來たか、まだ修行が足らぬ』

小平次は苦しい息の下より、『仕、仕、仕損じました上は』

『仕損じでない、顏にも姿にも似ず、この小六を覘ひに來た不敵さは天晴れの業ぢや』

『御成敗、御成敗』

『成敗するほどの奴でない、生けて歸すぞ』

『生きて、生きて清洲へ、歸れませぬ』

『いや、歸すやうにして歸すぞ』

抑へられた磐石の重みは取れたが、骨身を拉がれたやうで、もはや再び働く勇氣も力もない、其まゝ顔も上げず打伏して、『兄は殺されませぬ、男色の事も僞はり、こなた樣には清洲の織田信友、いかやうな道ならぬ人にせよ、小平次には主で御座りまする、叶はぬまでも捨身に入り込みました、おなさけを受けるほど猶更、苦しう思ひまする、是非に御成敗、せめて戰場の討死と心得、先立ちし親にも、聊かの申譯が立ちまする』

首肯た小六の目には、却つて一滴の涙がある、

『まだ年行かず身は弱々しいが心の持ちやう肝の据りやう、いかにも惜しい奴不運な主に仕へたぞ』

『仕へましたる以上、他に好運の主を羨みませぬ』

『や、その一言は出來したぞ、但し、同じ生命を抛げ出すならば、迚も叶はぬ小六の首を覘はうより、その捨身に主を諫めてこそ、先立ちし親にも賞められる、この蜂須賀村へ入らざる武者を押して來た事は兎も角、氏ある織田家の本流として、あたら一城の主人になりながら、無理難題に年貢の重ね取、地頭の權威に民百姓を惱ませ、身の放埒に人妻も娘も馬草の如く城中へ取入れると聞及ぶ、その主の前で捨身の切諫せよ、戰場の働きは腰腰達者な奴の業、無道の主の諫め死には大の髯男よりも幾層倍、あはれに痛々しう見えて効驗があるぞ、馬前の屍ばかりが忠義であるまい、血迷うて犬死すな』



小平次の頭は猶更ます〱伏して、ぴたりと疊へ押付けた、

『狼狽た愚か者、死場所の御教訓を蒙り、無き一命を戴いて、此まゝ清洲へ歸りまする』

『もう夜明けに間もあるまい、直ぐ立て、いや、下着のまゝらしいぞと上着を取出して手早く、人目に掛るな』やう〱あげた小平次の目より、ぼろ〱と涙が落ちて來る、

『これで今生、これで再び、御意を得ませぬ』

『坂田小平次といふ名は、いつまでも覺えて居るぞ』

『冥加に心得まする』

『人は死する時が大切、確とせよ』

男泣きに泣きながら身を起した小平次、腰を屈めたまゝ後退りに立去るや否、ひよこりと障子の外より例の小さい黒い顏、こゝへ來いと間近く呼寄せて、

『清洲勢の押寄せた時、宙を飛で來たよりも今夜の床下で、あの一藝は面白い、なか／＼の才覺ぢや、はゝゝゝ』もぐり込だ緣の下の四つ這ひで蜘蛛の巣の懸りしぐらゐ構はぬ筈の麁末な顏でも、本人は氣になるらしく、頻りに面を押拭ひながら右の拳を見て居るのは、一生懸命に叩いた痛みが殘るらしい、

『その場の加勢にも及ばぬ奴と思ひまして』

此奴この小さい身體で何の加勢、まご／＼すれば却て邪魔になるともいへず、小六は笑ひながら、



『いや、あれで大の加勢ぢや』

まだ明鴉も塒を離れぬ時刻で、人も起きず、やう／＼東天の白みかゝりし頃、坂田小平次は手早く身支度を急ぎ、そッと背門の裏木戸より出ようとする時、いつの間に來た小六は背後より聲かけて、

『情を賣るではない、かりそめにも主を諫めて死する人見送りまするぞ』

小平次、たまらない、其まゝ大地に坐して、また泣き出したところへ、また素早く走せて來た十五の小粒、いかにも大人らしく手を取て引起し、

『男、男、男』三度、男と呼で無理に裏木戸を押出したが、いさ戰場となれば亂軍の中で名もない雜兵のため組伏せられても仕方のない身で、他日の豐太閤に手を取られ阿淡兩國の祖先となりし蜂須賀正勝に見送られたのは、この坂田小平次、たとひ非道の主の刄に打たれても冥途への大手柄、うよ／＼と押合ふ戰國亡者の中でも肩身が廣く威張り步ける、（つゞく）



謙信の義俠

橋爪彦七

一

それは、中秋月明の夜のことである。川中島の彼方妻女山の頂上に陣を敷いた上杉謙信は、滯陣の欝を散ぜん爲か、それとも胸底にふかく書策の成つた悦びからか、眼下に瞰下す海津城に、指す敵武田信玄の守將高坂昌信が、數千の貔貅を伏せて虎視眈々としてゐるのを他所事の樣に眺めながら、從士を相手に夜能を催してゐた。

鎧光陣營の篝に輝くところ、蓋世の英傑謙信が、遠征の身をもうち忘れたものの樣に、悠々として舞ひ進むのである。雄大な、そして喩へやうのない壯嚴さに、並居る將士は恍惚として醉ひしれてゐる。

——と、その時、張り廻された陣幕の外に、黑衣覆面の武士が現はれた。彼は何故か月光の下に身を曝すのを怖れるが如く、頻りに四邊を氣にしながら、然し覆面の奥に光る炯々たる眼光は、始終何物かを搜し求めつゝ、ピツタリと陣幕に寄り添ふと、そのまゝ其處に蹲つてしまつた。

二

『殿!』

陣幕の裡では、夜能の陶醉を破る凛とした聲が、將士の背後から流れた。

『左馬助かッ。』

それは、殆ど待ち疲れてゞもゐたかのやうな聲が、そしてあれほど平然と舞ひ續けてゐた謙信の唇から迸走つた。

『はッ、只今立ち歸りました。』

聲と共に、振り返る將士に輕い會釋を投げて、ブイと謙信の前に出たのは、かねて武田方の本據甲州に放つてあつた上杉方の間諜、謙信の從士宇野左馬助である——夜能は一時中止されてしまつた。

『如何ぢや、情況は?』と、謙信の底力ある聲が左馬助を促した。

『はッ、殿御察しの通り、敵の本國甲斐はもとより、出城持城の一切が愴惶として動いて居りまする。』

『うむ、果してさうであつたか、信玄ほどの人物がその動搖を見するについては、餘程の難事を控へたと見ゆる、で、その仔細は?』

『たとへば轍鮒の急とでも申しまするか、甲州一圓、食鹽一握りもござりませぬ。』

『何と申す、送鹽が停つた!?』

『はッ、隣國一同申合せ、武田が山國を

絶好讀物

■成田篤著 **陸海軍腕くらべ**
陸海軍首腦人物の月旦、軍情の内幕話、隱れたる軍事秘話等陸海軍に關する各種問題を面白く描破す。
定價一圓八十錢（送料十錢）

■加藤咄堂著 **雄辯法講話**
我國隨一の雄辯家加藤先生が體驗より生める大名著！現代に活躍せんとする者は何人も見よ！
定價貳圓（送料拾四錢）

■井關十二郎著 **立身成功の近道**
著者自らの苦學成功の體驗と世界的成功者の名訓に基き、最も具體的に立志成功の秘訣を說述す。
定價壹圓八拾錢（送料拾貳錢）

■佐藤紅綠著 **東西婦人觀**
各種各樣の女性を拉し來りて縱橫に解剖し、觀察す、實に昭和女性の新經典とも云ふべき大名著。
定價貳圓（送料拾貳錢）

■鶴見祐輔著 澤田謙譯 **現代日本論**
識見、熱情、名文、一世に卓出せる著者か現代日本の眞相を解剖し批評す、全同胞必讀の大快著！
定價壹圓六拾錢（送料八錢）

■日下部四郎太著 **異國行脚**
祕密の探訪、痛快な觀察、輕妙な文章、一讀居ながら世界の事情がわかる、眞に稀代の大快著！
定價二圓八十錢（送料十四錢）

■日下部四郎太著 **一人行脚**
諸國の信仰、迷信、傳說を隈なく探り、見當り次第に槍玉にあげて頗る皮肉に而もトテモ面白く話す、
定價二圓五十錢（送料拾四錢）

■鶴見祐輔著 **北米遊說記**
偉人傳あり、世界花形人物評あり、居乍ら世界を知り識見を高め人格を磨く萬人必讀の最良書。
定價貳圓五拾錢（送料拾四錢）

■松村松年著 **驚異と神祕の生物界**
生物界に起る珍しい話、不思議な話等を多數の挿畫入で面白く說述す。到る處で大好評
定價貳圓參拾錢（送料拾貳錢）

■林田龜太郎著 **政界側面史**
明治維新後の政界の變遷や、西郷木戸大久保を初め功臣、元勳、大人物の大活躍の實際を語る。
定價參圓（送料十六錢）

○圖書目錄申込次第送呈。
全國信用ある書店にあり

東京本郷駒込坂下 大日本雄辯會講談社發行 （振替東京三九三〇）

僥倖に、食鹽の供給を絶つて自滅を謀るとござります。』

『……』

『殿！ 今日も經ますれば、その總ては食鹽に渇し、人心麻の如くに亂れませう、外征の士氣は阻み、鋭氣は挫け、信玄の威令は衰へまするが必定、この時一氣に襲ひ撃ちまするならば……敵國を往くに草を刈るがごとく……』



『……』

謙信の沈默はいつまでも續く、滿座寂として聲だにない――と、左馬助が稍急き込んで云つた。

『殿！ 如何でござりますッ。』

その時、正にその時であつた。謙信が怒氣心頭に發した聲は、雷霆の如くに響き渡つた。

『恥を知れ左馬！ この謙信は卑怯未練の戰はせぬぞ！ そもや天文十六年の秋、武田上杉初度の對陣この方、十五年の歳月は兩國干戈の間に過ぎたりと云へ、謙信いまだ一度として義を缺いた覺えは無い。勿論人體には一日として食鹽なくてはかなはぬ、隣國これを供給らぬとあらば、この謙信が進んで送る！ 越後の國の津々浦々に有らん限りの食鹽を求め、屹度武田を救うて見するぞ！』

烈々として火を噴く謙信の一句々々には、義血が溢れ、俠血が漲つてゐる。この襟度――この器量――明日にもあれ雌雄を決せんとする敵を、自ら救はうとする謙信の偉大さは、ハタと左馬助の胸を衝つた。

三

突如、そのとき人々の耳を掠める異様の呻き聲が、陣幕の外に起つた。

謙信は、徐かに陣幕の傍に寄つた、そして左手に高く引き揚げる幕の下に、その地上に、叢を紅にして腹一文字の美事さを見せる武士があつた黒衣――覆面――それぞ最前から謙信を撃たんとして、陣營近く忍び寄つた刺客、剽悍無比の甲州武士ではないか。

一同は驚破とばかりに立ち上らんとした。が謙信は無言のまゝでそれを抑へると、

『勇者ぢや……眞の勇者ぢや……』と呟くやうに云つて眼をしばたゝいた。

眞の勇者――謙信の義氣に衝たれて、その使命を果し得ず、一死を以てそれに代へた勇者の名は、遂に知る由もなかつた。然し、彼とても決して徒死したのではない。その翌日から越後の國では、甲州に送る食鹽のかますを造るのに忙殺されてゐた。（をはり）

絶好讀物

■ 成田篤 著　陸海軍腕くらべ
陸海軍首腦人物の月旦、軍情の内幕話、隠れたる軍事秘話等陸海軍に關する各種問題を面白く描破す。
定價一圓八十錢（送料十錢）

■ 加藤咄堂 著　雄辯法講話
我國隨一の辯論家加藤先生が體驗より生める大名著！現代に活躍せんとする者は何人も見よ！
定價貳圓（送料拾四錢）

■ 井關十二郎 著　立身成功の近道
著者自らの苦學成功の體驗と世界的成功者の名訓に基き、最も具體的に立志成功の秘訣を說述す。
定價壹圓八拾錢（送料拾貳錢）

■ 佐藤紅綠 著　東西婦人觀
各種各樣の女性を拉し來りて縱横に解剖し、觀察す、實に昭和女性の新經典とも云ふべき大名著。
定價貳圓（送料拾貳錢）

■ 鶴見祐輔 著　澤田謙 譯　現代日本論
識見、熱情、名文、一世に卓出せる著者が現代日本の眞相を解剖し批評す、全同胞必讀の大快著！
定價壹圓六拾錢（送料八錢）

■ 日下部四郎太 著　異國行脚
秘密の探訪、痛快な觀察、輕妙な文章、一讀居ながら世界の事情がわかる、眞に稀代の大快著！
定價二圓八十錢（送料十四錢）

■ 日下部四郎太 著　一人行脚
諸國の信仰、迷信、傳說を隈なく探り、見當り次第に槍玉にあげて頗る皮肉に而もトテモ面白く話す、
定價三圓五十錢（送料拾四錢）

■ 鶴見祐輔 著　北米遊說記
偉人傳あり、世界花形人物評あり、居乍ら世界を知り識見を高め人格を磨く萬人必讀の最良書。
定價貳圓五拾錢（送料拾四錢）

■ 松村松年 著　驚異と神秘の生物界
生物界に起る珍しい話、不思議な話等を多數の挿畫入で面白く說述す。到る處で大好評
定價貳圓參拾錢（送料拾貳錢）

■ 林田龜太郎 著　政界側面史
明治維新後の政界の變遷や、西鄉木戶大久保を初め功臣、元勳、大人物の大活躍の實際を語る。
定價參圓（送料十六錢）

○圖書目錄申込次第送呈。
全國信用ある書店にあり

東京本鄉駒込坂下　大日本雄辯會講談社發行　（振替東京三九三〇）

僥倖に、食鹽の供給を絶つて自滅を謀るとござります。』

『……』

『殿！　今旬日も經ますれば、敵國の總ては食鹽に渴し、人心麻の如くに亂れませう、士氣は阻み、銳氣は挫け、信玄の威令は衰へまするが必定、この時一氣に襲ひ撃ちまするならば……敵國を往くに草を刈るがごとく…』

『……』

謙信の沈默はいつまでも續く、滿座寂として聲だにない——と、左馬助が稍急き込んで云つた。

『殿！　如何でござりますッ。』

その時、正にその時であつた。謙信が怒氣心頭に發した聲は、雷霆の如くに響き渡つた。

『恥を知れ左馬！　この謙信は卑怯未練の戰はせぬぞ！　そもや天文十六年の秋、武田上杉初度の對陣この方、十五年の歲月は兩國干戈の間に過ぎたりと云へ、謙信いまだ一度として義を缺いた覺えは無い。勿論人體には一日として食鹽なくてはかなはぬ、隣國これを供給らぬとあらば、この謙信が進んで送る！　越後の國の津々浦々に有らん限りの食鹽を求め、屹度武田を救うて見するぞ！』

烈々として火を噴く謙信の一句々々には、義血が溢れ、俠血が漲つてゐる。この襟度——この器量——明日にもあれ雌雄を決せんとする敵を、自ら救はうとする謙信の偉大さは、ハタと左馬助の胸を衝つた。



突如、そのとき人々の耳を掠める異樣の呻き聲が、陣幕の外に起つた。

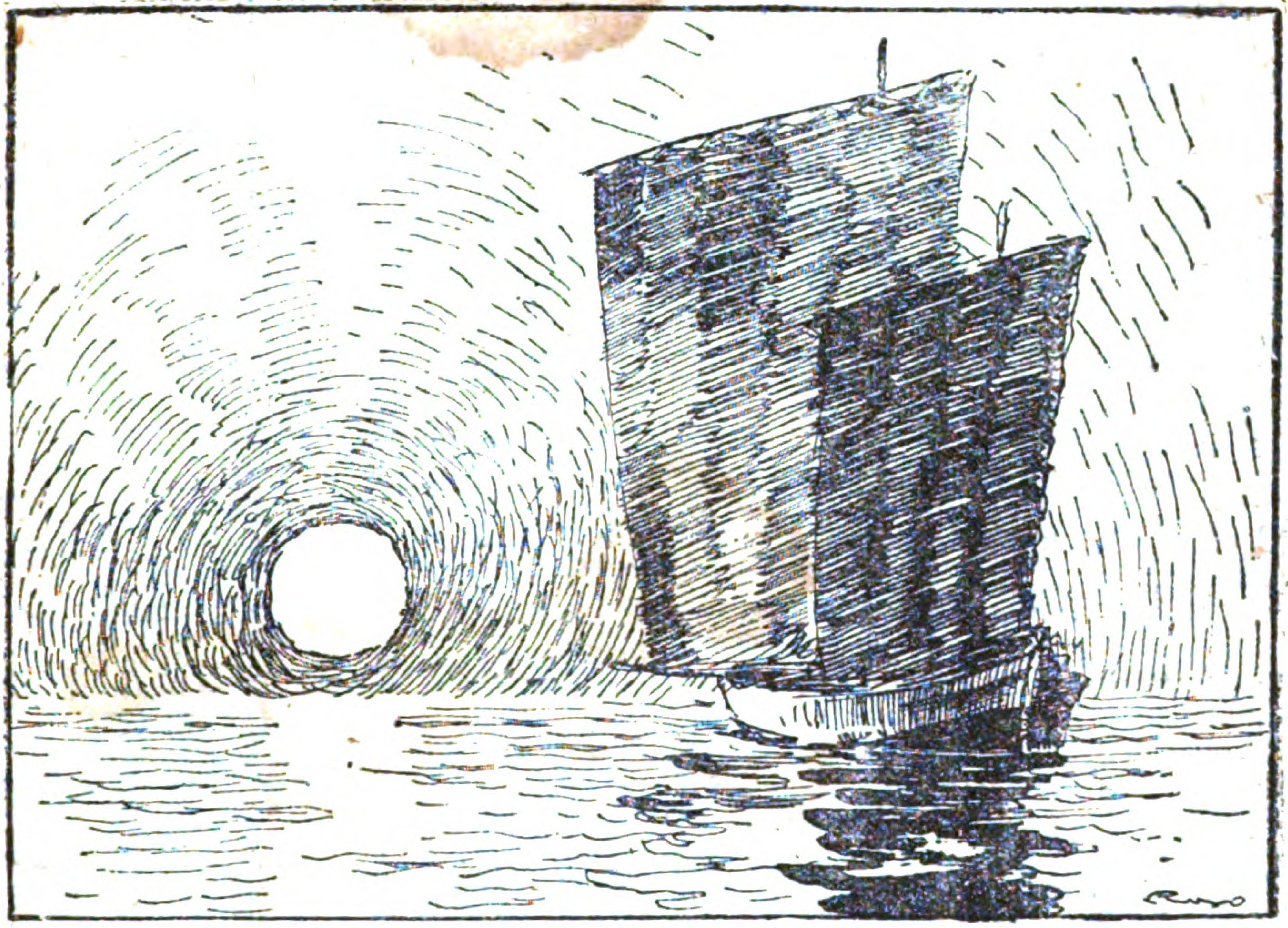
三

謙信は、徐かに陣幕の傍に寄つた、そして左手に高く引き揚げる幕の下に、その地上に、叢を紅にして腹一文字の美事さを見せる武士があつた黑衣——覆面——それぞ最前から謙信を擊たんとして、陣營近く忍び寄つた刺客、剽悍無比の甲州武士ではないか。

一同は驚破とばかりに立ち上らんとした。が謙信は無言のまゝでそれを抑へると、

『勇者ぢや……眞の勇者ぢや……』と呟くやうに云つて眼をしばたゝいた。

眞の勇者——謙信の義氣に衛たれて、その使命を果し得ず、一死を以てそれに代へた勇者の名は、遂に知る由もなかつた。然し、彼とても決して徒死したのではない。その翌日から越後の國では、甲州に送る食鹽のかますを造るのに忙殺されてゐた。（をはり）



青春

中村武羅夫

田中良 畫

見知らぬ青年

汽車は、横濱のステーションを出ると、間もなく、程ケ谷と戸塚との間のトンネルにかかつてゐた。すこし上りになつたので、平坦なところを走つてゐる時よりか、速力が鈍ろく、何んとなく、苦しさうに喘いでゐるやうに感じられた。

美沙子は、二等車の左側のクッションに腰を降してゐた。直ぐ眼の下に汚い小流れが流れてゐる。水も枯れ〴〵になつて、岸には盛りを過ぎた雜草の類が、群がり繁つてゐた。榛だの、榎だの、松だのの大木が、すく〳〵と繁つて、一と筋の白い道が走つてゐるのであつた。

美沙子は、それが、どんな道だか氣にも止めなかつたけれども、隣りの乘客たちの話しを聞くともなく聞いてゐると、それが、東海道であることが分つた。何百年もの昔から、同じ道が斯うしてつゞいて殘つてゐるのだと思ふと——そして、その道は、

さま〳〵な人々が、さま〳〵な思ひを抱いて通つて來たのだと思ふと、一種の深い感慨に耽らずにはゐられなかつた。

道の兩側には、ぽつ〳〵と家が建つてゐた。二階家もあれば、平家もあつた。トタン葺きの家もあれば、瓦屋根もあり、古めかしい草葺きの家もあつた。草葺きの家の棟には、素枯れかゝつたやうな一八が、群がり繁つてゐた。

『あの家など、あそこに、何時からあゝしてあるのだらう？』

美沙子は、やつぱり深い感慨を以つて、眺めずにはゐられなかつた。どんな時代にも、どんなところへ行つても、人間の生活があるのだと思ふと、美沙子は、不思議な感激に胸を充たされて、瞼の中が自然と熱くなつてくるのであつた。

汽車は、喘ぎ〳〵上りになつた線路を走つてゐた。美沙子が見てゐる木や、草や、建物や、それは、次々に移り變つて行つた。汚い小流れだけが、線路に沿うて、見え隱れしてゐた。

不意にトンネルに入つたと思ふと、直ぐに明るみへ出た。今度は、下りの勾配になつたので、速力が、二倍も三倍も早くなつた。汽車は風を切つて、矢のやうに走つた。窓外の景色は、次から次へと、移り變つて行くのであつた。

内地に渡つても、上野までは、そんなでもなかつたが、トンネル一つ越すと、景色でも、空の色でも、すつかり變つてゐることに、美沙子は、眼を見張らずにはゐられなかつた。空は明るく、山なんか小さくて、圓く軟らかで、まるで築山のやうな感じだつた。それ等の山に生えてゐる木々の小さなこと、どんなところにでも、田なり畑なりが作られてゐること、美沙子は、北海道の自然などに比べると、すべてが、何んだか箱庭じみた感じがするのであつた。

『どちらまで、行らつしやるんですか？』

不意に聲をかけられて、美沙子は、初め自分のことではないと思つてゐた。が、彼女は、熱心に窓外の景色に見惚れてゐた眼を、ちらと振り向いて見ると、一人の青年が微笑を含んで、彼女に話しかけてゐるのであつた……

美沙子は、びつくりしてしまつた。暫らくの間は、返事をすることも出來なかつた。汽車の中などで、馴々しく口を利いたりする者に、油斷をしてはならないといふことは、雜誌などでも何遍か讀んだことがあるし、出發の時も、くれ〴〵も注意されて來た。彼女は、突然そんなことを訊かれて、直ぐに返事をして好いものかどうか、分らなかつた。當惑さうに、顏を伏せてしまつた。

『逗子へ行らつしやるんぢやありませんか……』

青年は、別に、惡る者とも思へなかつた。顏立ちや姿なんかも上品だし、口の利き方なども、優しくて叮嚀だつた。彼は、美沙子が默つてゐるにも拘らず、同じやうな笑顏で言つた。

『え。』

美沙子は、微かに頷いた。上品に見えたり、口の利き方などの優しいのが、反つて、油斷がならないのではないかと、不安でもあつたが、相手に幾度も口を利かせて、自分だけが、何時

までも默つてゐるわけにも行かなかつた。美沙子は、務めて答らず觸らずに、警戒しい〳〵答へた。

自分が、逗子へ行くといふことを、どうして知つて居るのか、美沙子には、それも不思議でならなかつた。

『逗子は、どちらへ行らつしやるんですか……』

青年は、一層優しく、一層馴々しく訊いた。

『……』

だが、美沙子は、默つてゐた。いろんなことを、餘り馴れ〳〵しく訊かれたりすると、餘計、氣味が惡るかつた。彼女は、その青年が何處から乘つたのか、ちつとも氣がつかなかつた。東京驛から乘つたのか、それとも、横濱驛から乘つたのか、彼女は、自分に口を利かれるまでは、その青年の存在なんかには、全く氣が附かなかつたのである。美沙子のやうな若い女性にとつて、素性も分らない、見知らぬ若い異性から、不意に口を利かれることぐらゐ、氣味の惡いことはなかつた。

『別莊へ行らつしやるのですか?』

青年は、美沙子が怯えたやうな表情をしてゐるのにも頓着なく、どん〳〵質問を追求した。けれども、彼の態度は物軟らかく、ひどく叮嚀なので、無遠慮だと感じさせるやうなところは、ちつともなかつた。

『いゝえ。』

美沙子は、出來るだけ口數少なく、出來るだけ深か入りしないやうに、警戒を怠らなかつた。

『ぢや、ホテルですか?』

『えゝ。』

『ホテルと言へば、××ホテルより外にはないから、あそこへ行らつしやるのでせう……』

『えゝ。』

『僕も、逗子の××ホテルへ行くんです。』と青年は、急に眼顏を輝かせるやうにして言つた。

『……』

美沙子は、何んと言つていいか、分らなかつた。彼女は、びつくりしたやうに眼を見張つて、青年の顏を仰いでゐた。

『それで、逗子には、暫らくゐらつしやるんですか?』

『いゝえ。』

『直ぐお歸りになるんですか?』

『えゝ。』

『何ん日ぐらゐ、滯在される豫定なんです……』

『分りませんの。』

『どうしてですか?』

青年は、美沙子が、自分に話しかけられるのを、何んだか迷惑がつてゐるらしい樣子を見て取つて、ちよつと不快さうな表情をしたが、直ぐに思ひ返したやうに、朗らかな調子に返つた。

『向うへ、人が參つてゐるものですから……』

『ホテルへですか。』

『えゝ。』
『ご兩親でも？』
『いゝえ。』
『ぢや、叔父さまか何かですか。』
『さうぢやございませんの。』
美沙子は、青年の執拗さが、だん〳〵煩くなつて來た。殊に、いろんなことを立ち入つて訊かれるのが、迷惑でもあれば、不安でもあつた。
何んのために、人のことを、そんなに根掘り葉掘り訊かなければならないのだらうと思つた。自分が、何處の誰だかといふことを、はつきり名のりもしないで、人のことばかり、いろ〳〵立ち入つて訊くのは、失禮ではないかと、溫和しい美沙子も、少しむつとせずにはゐられなかつた。
『お怒りになつたのですか。』
青年は、ちつとも厭な顏をしなかつた。調戲ふやうな眼附きをして、美沙子の顏を覗き込んだ。
『いゝえ。』
美沙子は、まさか、怒つてゐると正直に答へることも出來なかつた。
『ぢや、僕を、氣味惡るがつてゐらつしやるのでせう。』
青年はさう言つて、朗らかに笑つた。
『……！……』
美沙子は、自分が何んだか調戲はれてゐるやうな氣がして、厭だつたので、窓の外の景色に眼を遣つてゐた。
汽車は、大船ステエションの少し手前のところを走つてゐた。
『こんな風に、突然、お話しをしかけて、屹度、氣味惡るがつてゐらつしやるかもしれませんが、僕は、決して怪しい者ぢやないんです………』
『………』
『あなたは、ずゐぶん、遠方からいらつしたのですね。』
『えゝ。』
『北海道からいらしたのでせう。』
『えゝ。』
美沙子は、思はず眼を見張つて、青年の顏を見詰めずにはゐられなかつた。あら、まあ、どうしてそんなことまでご存じなんですの、と思はず言はうとしたけれども、そんな風に口を利いては、はしたない氣もしたし、相手につけ込まれさうな氣もしたので、ぢつと我慢した。けれども、彼が、どうしてそんなことまで知つてゐるのだらうかと思ふと、全く不思議でもあれば、餘計、氣味が惡るくもあつた。
『僕が、どうして、そんなことを知つて居るのか、あなたは、びつくりしてゐらつしやるのですね。』と、青年は笑ひながら言つた。
『えゝ。』
『だが、何んでもないんです。種も仕掛けもないんです。』

『……』

美沙子の言葉は、ともすれば、途切れ勝ちだつた。

『あなたが、北海道からいらしたことを、僕が、どうして知つたか、そのわけを、お話ししませうか。』

『えゝ。』



『そのわけは、あれなんですよ。』

言ひながら青年は、頭上の網棚に載つてゐる小型のスーツケースを指した。それには、赤帽に預けた時の、函館だとか、青森だとかいふ札が、そのまゝ垂れ下つてゐた。

『まあ。』

美沙子も、思はず噴き出すところであつた……

『ね、種も仕掛けもありはしないでせう……』

青年は、美しい眼元に、優しい微笑を含んでゐた。

『あなたは、最初に、わたしが、逗子へ行くんだらうとおつしやつたでせう。』

『確かに、さう言ひました。』

『ぢや、それは、どうしてお分りになりましたの？』

『あゝ、そのことですか。』

青年は、笑つてゐるだけで、直ぐには答へようとしなかつた。

『どうして、お分りになりま　　の？』

『それだつて、何んでもないことなんです……』

『でも、不思議ですわ。』

美沙子は、何時の間にか、だん〳〵打ち解けた氣持ちになつて、馴れ〳〵しく口を利いてゐるのであつた。

『そのわけを、お話して見ませうか。』

『えゝ。』

『僕が、わけを話しても、厭な奴だとお思ひにならないでせうね。』



『まあ、どうして？』

『厭な奴だとお思ひにはならないでせうね。』と、青年は繰返した。

『そんなこと思ふものですか。』

『ぢや、お話しませう。』

『どうぞ。』

美沙子は、心からほんたうに、そのわけを聞きたいと思つた。

『あなたは、切符をお買ひになる時のことを、覺えてゐらつしやいませんか。』

『切符を買ふ時のことと申しますと？』

と美沙子は、怪訝さうな眼差しをした。

『東京驛で、切符をお買ひになる時のことです。』

『さあ、あの時、どんなことがありましたか、わたし、はつきり憶えてゐませんけども……』

美沙子は、何かを思ひ出さうとして、小首を傾しげてゐた。

『さうでせう。』

青年は、にやりとした。

『あの時、何か、ありましたんでせうか……』

『いや、別に。』

『特別に、何も覺えてゐるやうなことは、なかつたと思ひますが。』

『たゞ、あの時、僕は、あなたが切符をお買ひになる後ろに立つてゐたんです。』

『まあ。』

『あなたは、切符をお買ひになると、ちよつと僕の方を振り向いて、ちらとごらんになつたんですけれど、それは多分、偶然だつたんでせう。そのまゝ、さつさと行つておしまひになりました。』

『さうでございまして。』

美沙子は、ちよつと顏を赧らめた。

『だから、あなたは、ご存じないのです。けども、僕は、あなたの脊後に立つてゐたものだから、あなたが逗子までの切符をお買ひになつたことが、ちやんと分つたのです……』

『まあ。』

美沙子は、やつぱり呆れたやうに眼を見張つて、青年の顏を眺めてゐた。彼女のその視線の中には、輕く青年を非難するやうな氣持ちが、表はれてゐた。

『どうぞ、お赦し下さい。僕は、何にも、あなたの跡をつけて、あなたの行らつしやる先きを、知らうとしてゐたわけぢやないんです。そんな故意にしたことではなく、偶然のことですから、どうぞお氣持ちを惡るくされないで、お赦し下さい。』

青年は、美沙子の眼差の中に現はれた非難の色を見て取ると、ちよつと恐縮したやうな樣子で、謝つた。

彼のその態度は、ちつとも厭味なところがなかつた。高雅で、紳士的で、純情さを示してゐた。

美沙子は、この青年を疑つたり、警戒したりしてゐたのが、だん／＼、惡るかつたやうな氣がして來た……

『それは、よく分つてゐますわ。』と、美沙子は慌てて辯解した。

『お分りになつてゐて下されば、ほんとに仕合せなんですが、初めてお逢ひしたばかりで、突然、話しかけたりして、屹度、僕をへんな奴だと思つてゐらつしやるのだらうと思ふと、何んだか臆病にならずにはゐられないんです……』

青年の表情には、眞率な色が溢れてゐた。彼が、決して怪しい人間でないことは、だんだん、美沙子にも、はつきりと感じられて來た……

『僕は、東京の芝の方に居るんです。夏ぢゆう逗子へ行つてゐたんですけれど、一度歸つて、また出かけて行くところなんです。けども、今度は、一泊か二泊で、直ぐ東京へ歸らなければなりません。』と、青年の話しは、だん／＼自身のことに觸れて行つた。

『さうでございますか。』

美沙子は、逗子といふのは、どんなところか知らなかつたけれども、避暑地であつて見れば、そんなに廣い土地ではあるまいと思はれた。

それに、夏ぢゆう避暑に行つてゐたのだとすれば、ひよつとしたら、この青年が、信一郎と知り合ひの仲かもしれないといふ氣がして、ちよつと確かめて見たいといふ誘惑を感じたが、それもあまり無遠慮な氣がして、躊躇してゐた。

『僕は、河合愼吾といふんです。まだ帝大にゐるんですが、もう直き卒業なんです。』

河合といふ青年は、微かに苦笑しながら、自己紹介をした。

『まあ、河合さんとおつしやいますの。』と、美沙子はすつかり安心した。

『どうぞよろしく。』と、青年は頭を下げた。

『わたしこそ……』と、美沙子も輕く頭を下げた。

汽車は、ちやうど、北鎌倉のステエションを、出たばかりのところであつた。

信一郎の態度

『この次は鎌倉、それから、次が逗子なんです。』

河合は、窓の外に移り行く光景にちらと眼を遣つてから、説明した。

『ぢや、もう直ぐでございますのね。』

逗子のステエションを降りれば、直ぐ信一郎に會へるのだ。厭でも應でも、もう直きに信一郎に會へるのだと思ふと、美沙子の胸は、何んとなくときめかずにはゐなかつた。

『眞つ直ぐに、ホテルへ行らつしやいますか……』と、青年は訊いた。

『えゝ。』

『逗子は、初めてゞすか？』

『えゝ。』

『ぢや、僕は、自動車で行きますから、お差支へなかつたら、ご一緒に參りませうか……』

『えゝ。』

『それとも、どなたかお迎へに出てゐらつしやるでせうか。』

『いゝえ。』

美沙子は、微かに頭を掉つた。自分が、今、わざ〳〵北海道から出て來たなどといふことは、信一郎は、まだ知らないでゐるに違ひない。それだのに自分は、見知らない土地の逗子まで、わざ〳〵出かけて行くのも、たつた一人の信一郎に會ふためであり、信一郎を頼りにして出かけて來たのだと思ふと、美沙子は急に、涙含ましいやうな心細さを、感ぜずにはゐられなかつた……

彼女は、自然と兩方の瞼を、熱く濕らしてゐた。

『××ホテルにゐらつしやるといふのは、どういふ方ですか？』

河合は、それが氣になるのか、或ひは、話題が途切れることを恐れるのか、また、それを訊いた。

『……』

美沙子は、何んだか、岸本信一郎が居るといふことを、言ひ

難い氣がしたので、默つてゐた。

『お友達ですか？』

『えゝ。』

『僕も、夏ぢゆう××ホテルに居たものですから、ひよつとしたら、あなたが訪ねて行らつしやるその人を、知つてゐるかもしれないと思ふのですが。』

『……………』

『何んといふ方ですか？』

『……………』

『お差支へなかつたら、おつしやつて見て下さいませんか。』

『あの、岸本といふんですけれども。』と、美沙子は漸く言つた。

『岸本君！』

青年の聲は、突つ走つた。

『ご存じですか。』

『ぢや、あなたの訪ねて行らつしやるのは、岸本信一郎君なんですね。』

『えゝ。』

『知つてるどころぢやないんです。夏ぢゆう、僕は、一緒に遊んでゐました。尤も、僕は、すこし遅れて逗子へ出かけて行つたんですけど、それでも、ずゐぶん一緒に遊んだものです――ぢや、岸本君が、ステエションまで迎へに來てくれてはゐませんか。』

『わたし、突然行くものですから。』

『ぢや、岸本君は、あなたが今日行らつしやることを、知らないんですね。』

『えゝ。』

『どうして、最初に知らせて置かなかつたんです？』

『だつて、突然、出て來たんですもの。』

『それにしても、途中から電報でもお打ちになれば、よかつたぢやありませんか。』

『それが、もう東京へ歸つてゐらつしやることとばかり、思ひ込んでゐたものですから……』

『では、近頃、ちつともお手紙の往復は、なさらなかつたのですか？』

『わたしの方からは、何遍も／＼出したんですけれども。』

美沙子は、暗憺たる氣持ちになつて、顏を伏せた。

『それだのに、岸本君からは、返事がなかつたんですね。』

河合も、ちよつと暗い表情をした。

『えゝ。』

美沙子は、岸本から返事が來なかつたなどといふことを、はつきり答へるのは、ちよつと恥ぢのやうな氣がしたけれども、隱すわけには行かなかつた。

『ぢや、岸本君は、やつぱり、山口男爵の未亡人と、夢中になつてゐるのかしら。』

河合は、不圖、獨り言のやうに口を辷らして、溜息を吐いた。

美沙子は、その言葉を聞き洩らすわけには行かなかつた。彼女

女の胸は、異様にときめいて來た

『山口男爵の未亡人とおつしやいますと……』

美沙子の一生懸命の眼が、ぢつと河合の顏を見詰めた。

『いや、何んでもないんです……それよりも、僕は、あなたのことなら、確か岸本君から聞いたことがあると思ふんですが……』

河合は、ひどくどぎまぎしたが、漸つと言ひ紛らした。

『わたしのことを、岸本さんから、どんな風に、お聞きになりましたの？』

美沙子の顏が、見る／＼うちに、柔らいで來た。

『月の好い晩でしたよ。二人は、海岸を散歩してゐました。すると、突然、岸本君が、僕には、北海道に許婚の人が殘してあるんだと、話し出したんです。』

『まあ。』

美沙子は、思はず顏が火照つて來るのを、どうすることも出來なかつた。

『今、考へて見ると、それは、あなたのことだつたんですね。』

『…………』

美沙子は、默つてゐた。

『岸本君は、あなたのことを、非常に懷かしがつてゐました。』

『それは、ほんとでせうか？』

美沙子は、思はず一生懸命になつて訊いた。

『本當です。』と、河合は力を籠めて頷いた。

『でも、何んだか…………』

『お疑ひになるんですか。』

『別に、疑ふわけぢやありませんけれども…………』

『こんなことを、僕が嘘を吐いて見ても、仕方がないぢやありませんか。』

『まあ。』

『もう直き、お會ひになれば、直ぐ分ることですからね。』

河合がさう言つた時、汽車は、ちやうど逗子のプラットホームに、長々と停まつた時であつた。

美沙子は、その問題について、もつと何にか言ひたいと思つたけれども、言ふ暇がなかつた。

彼女は、追つ立てられるやうにして、汽車から降りなければならなかつた。網棚からスーツケースを下ろさうとすると、河合が取つてくれた。

『僕が、持つて出て上げませう。』

河合は、美沙子が、赤帽を呼ばうとするのを、無理に押し留めて、自分が持つてくれた。

『どうも濟みません。』

美沙子は、感謝の頭を下げずにはゐられなかつた。

『いや、何んでもないんです。これくらゐな物を赤帽に預ける必要なんか、あるもんですか。』

河合は、自分の荷物なんか、一つも持つてゐなかつた。

彼は、改札口を出ると、直ぐに自動車を呼んだ。

ステエションから、××ホテルまでは、五分とかゝらなかつた。玄關を入つて行くと、河合は、
『岸本君は、居ますか？』と、直ぐに訊いてくれた。
『やあ、入らつしやいませ。』
顔馴染みらしいボーイが、飛んで出て來て、河合の手にしたスーツケースを、受け取つた。
『岸本君は？』
河合は、何よりも先きに、そのことを訊くのであつた。それは、自分のために訊くのではなく、美沙子が、どんなに氣を揉んでゐるかしれないと思ふと、早く確かめて見ずにはゐられなかつた。若い女が、たつた一人で、遠い北海道から遙る〴〵斯うして訪ねて來たことを思ふと、河合は、出來るだけ親切にしてやらなければ、と思つた。彼は、最初に、美沙子が不安に感じたり、警戒したりしたやうな惡い人間ではなかつた。眞面目な、良家の青年だつた。
『岸本さんは、只今、ゐらつしやいませんが……』と、ボーイは何氣なく答へた。
『留守？』
河合はさう言つて、美沙子を顧みると、彼女は、打ちのめされたやうに、弱々しい表情をして項垂れてゐた。
『只今、お出かけになつてゐらつしやいます……』と、ボーイは言ひ直した。
『ぢや、このホテルを、引き上げたわけぢやないんだね？』
『はあ、今朝方、お出かけになつて、まだお歸りにならないのです。』
ボーイは、意味ありげな微笑を含んだ眼で、ちらと河合を見た。
『ぢや、とに角、部屋に案内して貰はう……』
が、河合は、素知らぬ顔をしてゐた。
『どうぞ。』
ボーイは、直ぐに先きに立つた。
『岸本君が留守でも、ちつとも心配することはないんですよ。』
河合は、ひどく悄氣切つてゐるやうな美沙子を、振り返へると、慰めるやうに優しく言つた。
『えゝ。』
美沙子は、微かに頷いてゐた。
『岸本君が留守でも、行つてる先は、大抵、見當がついてゐます。』
『分るでせうか？』と美沙子は、やつぱり不安さうだつた。
『とに角、山口男爵未亡人のところへ、電話をかけて見ませう。』
『……』
美沙子ははつとして、直ぐには、口が利けなかつた。
河合は、先刻、汽車の中でも、山口男爵の未亡人と、ちよつと口を辷らした。美沙子が追求すると、巧みに話しを逸らしてしまつたので、詳しく聞くことが出來なかつたが、今また、彼が



の口に依つて、山口男爵未亡人といふことが言はれた。美沙子は、その未亡人と岸本との間に、何か別別な關係があるやうな豫感がして、彼女の小さな胸は、たゞならずときめいて來た。

『心配しないで、僕に委してお置きなさい。決して、あなたのために悪いやうには、取り計らひませんから。』

河合は、また、慰めるやうに言つた。

二人は、一と眼に海を見晴らせる、廣々とした氣持の好い部屋に、案内された。眞ん中には、椅子や卓子が置いてあり、窓際には、ソファーが置いてあつた。秋の澄み渡つた空の向ふには、くつきりと箱根連山が見え、既に頂には、白い雪を載せた富士の姿が、嶄然と聳えてゐた。

『好い部屋が空いてるんだね。』

河合は、ボーイに向つて話しかけるのであつた。

『只今、空いてゐるものですから、夏場と違ひまして、どんな部屋でも、ご自由に選擇出來ます。』と、ボーイは愛想よく言つた。

『斯ういふ避暑地は、夏場はどんなに混んでゐても、今時分になると、がら空きになるんだね。』

『どうも仕方ありません。忙しい時は馬鹿に忙しいし、暇な時は馬鹿に暇ですし。』と、ボーイは笑つてゐた。

『さうかと言つて、お客樣を、平均させるわけにも行かないしね。』

『ほんたうです。――ぢや、ご用がありましたら、どうぞお呼び下さい。』

言ひ棄てゝ、ボーイが出て行かうとすると、河合も、

『僕も、ちよつと電話を掛けて來う。』と言ひながら、二人は、揃つて出て行つてしまつた。

美沙子は、たつた一人で、廣い部屋に殘された。

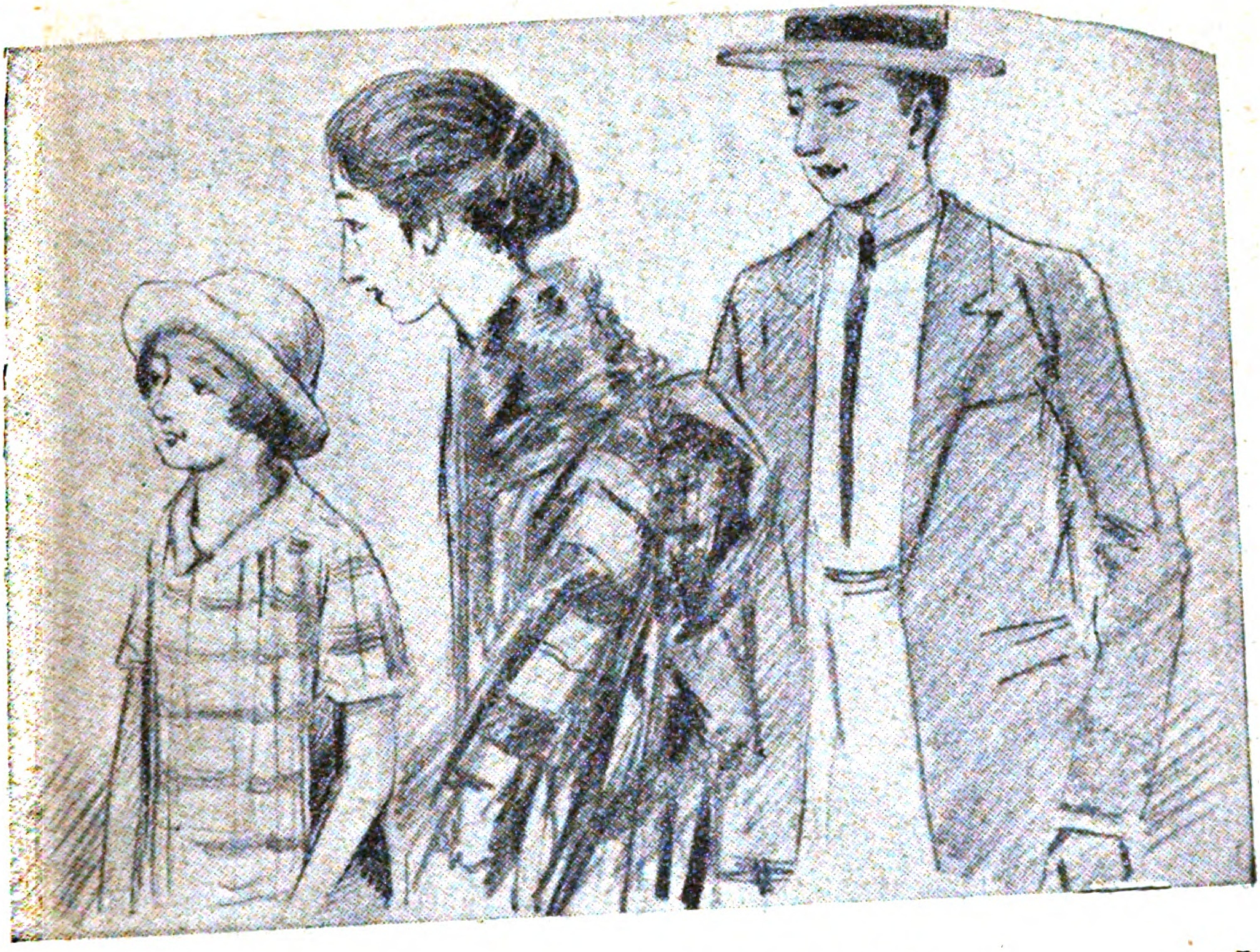
折角、北海道から訪ねて來たのに、東京へ行つても、逗子へ來ても、直ぐに、信一郎に會へないことは、美沙子に取つて、物足りなくもあれば、心細くもあつた。近頃、自分の方からいくら手紙を出しても、信一郎の方からは、ちつとも消息がなかつたことといひ、東京へ訪ねても、逗子のホテルへ訪ねても、彼が留守のために會へないことといひ、何んだか、信一郎が自分に對して、冷淡になつて來たやうな氣がして、美沙子は、悲しく遣瀬なかつた。

美しい景色を見ても、立派なホテルの立派な部屋に通されても、美沙子の心は、ちつとも樂しまなかつた。河合と一緒にたつたから、まだよかつたやうなものの、もし、彼と一緒にならなかつたら、この上、どんなに心細い思ひをしなければならないだらうと思ふと、美沙子は、初めて河合に言葉を掛けられた時、彼に對して、疑つたり、警戒したりせずにはゐられなかつた自分を、恐縮しないわけには行かなかつた。

『岸本君の居るところが、分りましたよ。』と、河合は、にこにこしながら部屋に入つて來た。

『どこに居らつしやるのでせう?』と、美沙子も胸を躍ら

した。
『今、電話をかけて見たんです。』
『どちらへ？』
『山口男爵未亡人の別莊へ、かけて見たんです……』
『そしたら、そこへ居らつしやいましたの……』
『やつぱり、そこに居ました。』
『その、山口男爵の未亡人とおつしやるのは、どんな方ですの？』
美沙子は、そんなことを訊くのは、ちよつと氣が咎めたけれども、やつぱり、訊かずにはゐられなかつた。
『有名な山口男爵の未亡人なんです。大ブルヂョアですよ。』
『岸本さんは、どうして、その方とご存じなのかしら。』
美沙子は、獨り言のやうにして、訊いて見た。
『逗子に居る青年で、その未亡人を知らない者はないんです。』
『まあ、そんなに有名な方ですの。』
『有名ですとも。』
『あなたもご存じ？』
『よく知つてゐます。夏ぢゆうは、僕なども、やつぱり一緒になつて遊んだものです。』
『まあ。』
『美しくて、氣が置けなくて、魅力に富んだ婦人です。』
『お若い方？』
『さうですね、何にしろ未亡人ですから、三十過ぎてゐないことはないんでせうが、ちよいと見ると、二十代ぐらゐにしか見えない若々しさなんです。』
『まあ、そんなにお若い方。』
美沙子は、びつくりしたやうに、眼を見張つた。勿論、彼女は、初めて河合の口から、山口男爵未亡人と聞いただけで、何んとなくそれは若い人のやうな氣がしてゐたのであつたが、しかし、二十代にしか見えないくらゐ、そんなに若い婦人であるとは、ちつとも思はなかつた。
美沙子は、河合から、男爵未亡人のことを詳しく聞けば聞くほど、餘計、氣にならずにはゐなかつた。
『あなたが、北海道からお見えになつたことを話したら、岸本君、ずゐぶん、びつくりしてゐましたよ。』
『さうでございませうね。』
『急いで歸つて來るさうです。』
『こゝから、だいぶ離れてゐますの？』
『さうですね、葉山ですから、ちよつとあるにはありますが、何に、田舍のことですから雜作ありません。』
河合は、事もなげに言つたが、しかし、二十分待ち、三十分待ち、一時間待つても、直ぐ歸つて來る筈の信一郎は、なかなか歸つて來なかつた。
美沙子は、だん／＼焦り／＼せずにはゐられないと同時に、いよいよ信一郎の態度を、疑はずにはゐられなかつた。
『もう歸つて來なければならない筈ですが、どうしたんでせ



う？』

河合も、そは〳〵して落ち着かなかつた。

或る復讐

二時間近くも經つてから、漸つと、信一郎は歸つて來た。

扉を輕くノックしたと思ふと、背丈の高い信一郎の姿が、部屋の中に入つて來たが、美沙子は、最初に彼を見た瞬間、何んだか別人を見たやうな氣がした。冬休みの時に、北海道へ歸つて來た時分の若々しさ、清純さは、今や、信一郎の何處にも、見ることが出來なかつた。彼の顏は、ひどく疲れて、荒んでゐた。頰のあたりには老人のやうな皺が寄り、眼の光なんかどんよりと濁つて、青春時代の潑剌たる元氣は、何處にも見ることが出來なかつた。

何にが、信一郎の若さを奪ひ、何にが、彼の青春を、そんなにまで荒廢させたのか、美沙子は不思議な氣がして、眼を見張つたまゝ、しばしは、何も言ふことが出來なかつた………

『まあ、ずゐぶんお變りになりましたのね。』

椅子から立ち上つた美沙子の口から、最初に發せられたのは、その言葉だつた。さう言つた時、彼女の眼は、自然と熱い涙を以つて充たされて來た。

『そんなに僕、變つたでせうか。』

信一郎は、微かに笑つた。笑ふと同時に、彼は椅子に着いたが、ちつとも元氣がなかつた。まるで老人のやうに、動くこと



も、話すことも、笑ふことも、何も彼も懶さうに見えた。

『どこか、ご病氣でもなすつてゐらつしやるのぢやありませんの？』

美沙子には、信一郎が病氣でもしてゐるとより外、思へなかつた。

『いゝえ、僕は、どこも悪くはありません。この通り健康です。』

『さうでせうか。』

『どうして？』

『でも、ひどく疲れてゐらつしやるやうですもの。』

『それは、屹度、夜更しばかりつゞけてゐるせゐかもしれません。自分では、そんなに疲れてゐるとも思ひませんが、長い間の不自然な生活のために、疲れたやうに見えるのかもしれません。』

『そんなに、今でも、夜更しをなさらなければならないほど、ご勉強がお忙しいのですか？』

『いや、勉強ぢやないんです。』

信一郎は、默々としてゐる河合の方をちらと顧みて、苦笑した。

『まるで、十年もお歳を召したやうよ。』

『あなたの眼には、そんなに見えますかね……』

信一郎は、自分の近頃の生活を、不圖反省せずにはゐられなかつた。或冷たい淋しさと、悔恨に似た感情が、彼の頭を走つた。

『身體を、お大事になさらないと、いけませんわ。』
美沙子も、何んだか涙含ましい氣持ちになつた。
『それはさうと、あなたは、何んだつてこんなに突然出て入らしたのです？　びつくりしてしまつた。』
信一郎は、思ひ出したやうに、話頭を轉じた。
『わたしが出てまゐりましたのは、突然ぢやありませんのよ。』
『さうですか。』
信一郎は、呑み込めない表情をしてゐた。
『もう前から、何遍も〳〵お手紙を差し上げました筈ですが。』
『あゝ、手紙ですか。手紙なら、東京の方から廻して來てゐますから、間違ひなく受け取つてゐます。』
信一郎は、すこし顏を赧らめて言つた。手紙は受け取つてゐたけれど、彼は、ちつとも讀んではゐないのである。封も切らずに、デスクの引出に押し込んだまゝにしてあるのであつた。
彼は、こんなことなら、讀んで置けばよかつたと、心の中で後悔した。
『そのお手紙に、わたしが、今度、こちらへ出てまゐることも書いて置いた筈ですが……』
『見ました〳〵。確かに書いてありました。僕は、つい、浮つかりして、それを忘れてゐたのです。』
信一郎は、慌てて、いゝ加減な出たら目を言つて、その場を誤魔化した。
『お手紙にも書いて置いた通り、わたし、お迎へに出てまゐりましたのよ。』

『還へに？』

『えゝ。』

『僕は、北海道へ歸らなければならないのですか。』

信一郎は、顔を蹙めた。

『一度は、お歸りにならないといけませんわ…………』

美沙子は、靜かに、優しく、駄々つ兒の弟に對する姉のやうな態度で言つた。

『僕は、今は、歸りたくないんです。』

『あら、何故？』

『北海道の生活は、とても、僕には、堪へられさうもありません。』

『何故でせう？』

『一度、都會生活の沁み込んだものに、北海道のやうな原始的な生活が、辛抱出來るものですか。』

『いゝえ、それならこそ、あなたは、反つて北海道へお歸りにならないと、いけないのですわ。』

『どうして？』

『あなたを疲れさせ、あなたの青春を凋ばませ、あなたを不自然に年を取らせたのは、不自然な都會生活だと思ひます。あなたは、健康だとおつしやいましたけれども、しかし、ほんたうに健康な者の眼から見れば、あなたの身體も心も、病氣してゐらつしやるも同じことですよ。』

『…………』

『ですから、あなたは、この際、北海道へ歸つて、ほんたうに原始的な生活の中で、休養もなされば、元氣も恢復なさらなければなりません。今のあなたにとつては、北海道の生活に親しむだけでも、北海道の空氣を呼吸するだけでも、どんなに好いことだかしれないのです。』

『だが、北海道へ歸ることは、考へものだと思ひます。』

暫らく沈默してゐた信一郎は、軈て、顔を擧げて言つた。

『何故？』

美沙子は、靜かに、けれども屹として反問した。

『北海道に歸つたところで、とても、辛抱出來さうもないのです。』

さう言つて信一郎は、さびしく笑つた。彼の笑ふのは、泣くやうに弱々しく見えた。

『君は、都會生活に中毒してゐるんだ。』

それまで、默々として一言も口を利かなかつた河合が、その時、微笑を含んで、口を挾んだ。

『さうかもしれない。』

信一郎は、無氣力に苦笑してゐた。

『いや、都會生活に中毒してゐるといふよりも、あのマダムの魅力に中毒してゐるのかもしれない。』

『マダム？』

『山口男爵の未亡人さ。』

『冗談を。』

信一郎は笑ひながら、僅かに反抗した。

『いや、冗談ぢやないんだ。僕は、本氣で言つてるんだ。』

河合は、眞面目になつて言つた。

『僕は、マダムの魅力なんかに中毒してゐるとは思はないね。』

『どんな中毒患者だつて、中毒患者それ自身は、自分の中毒狀態に、氣が附きはしないんだよ。』

『第一、あのマダムに、われ〳〵を中毒させるやうな毒があるかどうか、それも分らないぢやないか。』

『野に咲いてゐる美しい草花にだつて、恐ろしい毒を含んでゐるものがある。ひら〳〵と舞うてゐる綺麗な蝶にだつて、やつぱり恐ろしい毒を潛めた奴がある。あのマダムの美しさ、優しさだけを見て、その中にどんな毒が潛んでゐるかを、君が氣が附かないのも無理はない。』

『ぢや、君は、マダムが、恐ろしい毒を持つてゐるといふのだね。』

『僕は、斷言するね。僕もマダムの毒に中毒しかゝつたことに氣が附いたものだから、急いで避けたのだ。けれども、君は、すつかり中毒してゐる。君のやうに、自然で純粹な青年は、ちつとも免疫素を持つてゐないから、餘計、激しく中毒症に罹り易いのだ。僕は、決して惡いことを言はないから、ちやうど、美沙子さんが迎ひに出て來られたのを幸ひ、一度、北海道へ歸るんだね。君は、ほんたうに、ひどく健康を害してゐる。肉體の健康も健康だが、精神の健康を害して居る。今のうちに、いい加減に眼を覺まして自愛しないと、取り返へしがつかないことになる。青春時代は、誰だつて、一度や二度は、過つた道に踏み込まないとは言へない。けれども、大事なことは、早く眼が覺めるか覺めないかだ。迷ふことも、過つた道に踏み入ることも、それが悟道に入る機緣になれば、決して悔むことも、悲しむこともありはしないのだ。だが、醒めることが大事だ。惡いことは言はないから、一度北海道へ歸りたまへ。そして、ほんたうに健康を恢復した眼で、もう一遍、今までの生活を振り返つて、よく眺めて見たまへ。同時に、もう一度、美沙子さんを、はつきりと見直したまへ。迷つたまゝで、眼の醒める機會もなく、判斷を過まると、どんな怖ろしいことになるかしれないのだ。半年や一年で、眼の醒めるのは、まだ遲くはない。一年二年と過ぎ去つてしまへば、もう取り返へしはつかない。われわれの青春は、再び歸つて來ることはないのだ。』

河合の言葉には、惻々として人を動かす眞情が籠つてゐた。彼は、涙含んだやうな眼をして、眞心から熱心に言つた。

『よく考へて見よう。』

頭を垂れて、何か考へ込んでゐた信一郎は、やがて顏を擡げると、重々しく一言言つた。美沙子の純情、河合の誠意は、彼の心を、激しく動かすと同時に、鞭打たずにはゐなかつた……

× × ×

中一日措いて、信一郎は、たうとう、美沙子と一緒に、北海道へ歸ることになつた。彼は、その日の朝の汽車で、東京へ歸

る河合と一緒に、一應東京まで歸り、二三日のうちに、北海道へ旅立つことに決心した。彼は、何んだか、長い間壓されてゐた夢から、急に醒めたやうな氣がした。避暑の時機が過ぎ去ると同時に、だん〳〵周圍がさびしくなつて來てゐた山口男爵未亡人樣子は、信一郎が北海道へ歸るといふことを聞いて、ひどく反對すると同時に、凡ゆる媚態を以つて、信一郎を、自分の傍に引き附けようとしたけれども、しかし、一旦北海道へ歸ると決心した信一郎の心を、飜すことは出來なかつた。

すが〳〵しい秋晴れの朝だつた。信一郎、河合、美沙子と、三人が揃つて、逗子のステエションへ行つて、改札の時間が來るのを待つてゐると、一臺の自動車が、入口の前へ停つた。

中から降りて來たのを見ると、それは、竹内と、鶴子と、冴子の三人だつた。

信一郎は、早くも三人の姿を認めたが、何んだか、遠い夢の中で見た人に逢ふやうな氣がして、ぼんやり眺めてゐた。

『あら、岸本さん。』

冴子は、岸本の姿を認めると、懐しさうに叫んで、彼の側に驅け寄つた。

『あゝ、冴子さん。』と、信一郎も大きく眼を見張つた。

『まあ、それでも、まだ、わたしを憶えてゐて下すつたのね。』と、冴子は晴れ〴〵と笑つた。

『これは、どうも恐れ入りましたね。』と信一郎は、冴子の無邪氣な言葉にも胸を刺されて、顔を赧くした。

鶴子と美沙子とは、別の方で挨拶をしてゐた。河合と竹内とは、やつぱり、逗子では親しい仲なので、笑ひながら何にか話しをしてゐた。

『あのね、お姉さまは、竹内さんとエンゲーヂなすつたのよ。』

お喋りの冴子は、默つてゐることが出來なかつた。姉と竹内との婚約を、この場合、岸本に知らせることは、冴子にとつては、或る復讐でもあつた。

『それは〳〵、どうもお目出度う。』

信一郎は、何に氣なく笑ひながら言つたけれども、その胸には、或る痛みと、微かな寂寥とを感ぜずにはゐられなかつた。

『まあ、イヤね、冴子さんは。こんなところで、何も彼もお喋りしては。』

鶴子は、眞赤になつて妹を窘めたけれども、しかし、彼女の顔に輝いてゐる喜びは、隠すことが出來なかつた。彼女は、戀を失つた逗子で、再び新たな戀を得たのである。

『それは、ほんたうにお目出度う。この方が、冴子さんですの？』

にこ〳〵してゐた美沙子は、さう言ひながら、生き〳〵した態度で冴子の側に近づくと、握手をした。

『えゝ、わたし冴子ですのよ。あなた、北海道からいらした美沙子さんでせう？』

冴子も、心から打ち解けた親しみのある調子で、握手を返へした。

竹内も、河合も、にこくしながら、厚意と愛とに充ちた眼で、その光景を眺めてゐた。それは、ほんたうに、青春の喜びと感激とに充ちた、一場景であつた。

『斯うなつて來ると、一人さびしいのは、僕だけだな。ははははゝ。』と、河合は蟠りもなく笑ひながら、頭を掻いた。

汽車に乗り込む時間が來た時、六人は、揃つてプラットホームに入つて行つた。

× × ×

同じ若い人々であつた山本や、酒井や、小田や、鳥村や、荒川は、どうなつたであらうか。また、土人といふ渾名を持つた鶴田や、山嵐の渡邊は、どうなつたであらうか。彼等は、それぞれ結婚をし、生活をし、そして、彼等の道を歩いて、だん〱一人前の男になつて行く……

避暑の季節の過ぎた、淋しい海岸に殘された静子の許へは、もう寄り附く者もなかつた。彼女は、直きに華かな都會生活の中に歸つて行くであらう。

だが、叔母であり養母である人の轉地に附き添うて來た静子だけは、どんな淋しい秋が來ても、冬が來ても、皆な一緒に、東京へ歸つて行くわけに行かなかつた。吹雪の夜の宿屋の出來事、逗子の海岸の夕暮れのこと、それは、恐らく、彼女の青春の樂しい思ひ出となつて、どんな場合にも、彼女の胸から消え失せることはないであらう……（終）

大政治家の「達磨問答」

政界の長老たる山本達雄男、かつて貴族院で簡易保險法案に對し、政府に攻擊の矢を放つた。

『法律を制定して、その資格を定めたいのは、丁度達磨を作つて眼を入れさるが如きものであります』

佛作つて魂入れずの譬を巧に應用しての鋭い論鋒、すると政府方の遞相田健治郎男、



山本達雄男

『山本君は資格を定めさることを攻擊されましたが、山本君の修正意見なるものは、折角入れた達磨の目に釘を刺すやうなものであります』

滿場は此一句にドツと笑ひくづれた。そして、流石は大政治家同士なればこそと感嘆久しうした。

然らば、一體この變通自在な問答はどうして出來るのであらうか。いふまでもなく、兩男とも雄辯の妙諦を極め得てゐるからである。日本では從來兎角この雄辯なるものを輕視するの傾きがあつたが、普選以來、頓にその眞價が認められ、全國的に辯論熱が澎湃として漲り來つたことは驚嘆すべきものがある。然もそれが一時的の流行ではなく、精神修養、知識開發と相俟つて、眞摯に研究されつゝある事は、最も喜ぶべき現象といはねばならぬ。



田健治郎男

此の際に於て、年年辯論の發達に盡瘁し來つた雜誌「雄辯」は、先月號より定價値下げを斷行、一冊五十錢とし、同時に內容に大改善を加へ、宛ら新創刊の意氣を以て打つて出た。果然！滿天下に大評判の渦を捲き起し、九月號は發賣後幾日ならずして賣切れの盛況を呈した。同誌は十月號には更に一大飛躍をなすべく、演說に、傳記に、修養記事に、苟くも愛國救世の熱情に燃ゆる人々の必讀すべき良記事を滿載してゐる。

○商科大學教授　[illegible]末氏曰く

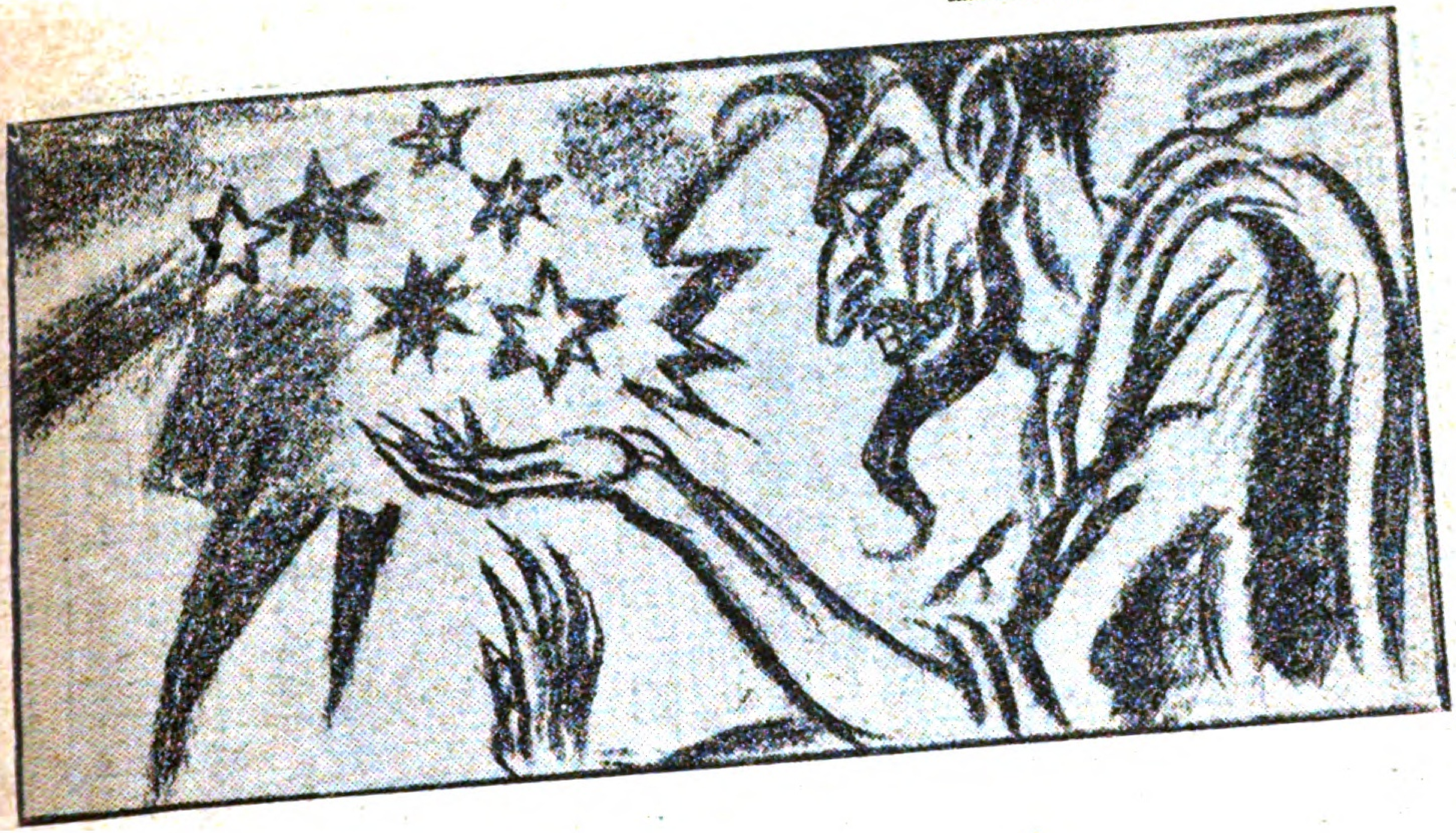
世界の雜誌中『雄辯』を標榜せる雜誌は他に其の例を見ない。普選の今日、我等の武器は唯三寸の舌であることを確信し、今回の大英斷大壯擧の『雄辯』の將來を切に祝福する。

○衆議院議員　中島彌團次氏曰く

『雄辯』十九ケ年間の大努力が生んだ雄辯家は中央に地方に幾百あるを知らざるべし。彼等が本年二月二十日に行はれたる總選擧に際して我國民の政治的知識を開發し、最初の普選の基礎を造るべく偉大なる功を樹てしことは私の痛感する所である。

マスター・オブ・アーツ　笠井重治氏曰く

國民を覺醒せしめ國運を進展せしむるには雄辯の力を措いて他に何物もない。眞の雄辯家の輩出に依つて初めて我が國を此の國難より救濟することが出來ると思ふ。即ち雄辯報國の時代は到來した。余は衷心より『雄辯』更生を祝賀する。



探偵冒險

七妖星

保篠龍緒
齋藤五百枝畫

襲撃の襲撃

棄手紙

餘りの殘忍に躊躇する吉岡の鍬を奪つた怪紳士が、發止一擊、洞の土砂を壞して濛々立ち上る土烟が洞內一杯に立ち込める直前、彼等が暗中で流石の暴虐殘忍さに躊躇をしてゐた時、死んだやうになつて穴の中に橫へられてゐた泉矢品子の身體が魔物に見込まれたやうに音もなくスル〳〵と土壁の中へ引き込まれて行つた。

死の土砂が凄まじい勢ひで落下した刹那には彼女の上半身は壁の中へ喰ひ込まれてゐた

『安心なさい、救ひに來たんです』

若々しい力ある聲が彼女の耳の傍で囁くやうにいつた。

『見ず知らずの他人ですが、不圖した好奇心からホテルで貴女方の話を立聞し

て、ついて來たんです』と彼は女を抱くやうにして暗黑な穴の壁から彼女を引き出しながらいつた。『萬事うまくいつた。此處へ横穴からもぐり込んで、壁拔けをやらうとは、いつかな彼奴等でも氣がつくまい……や、どつこいしよ……もう大丈夫……さ、手足を自由にしてあげます……』

彼女を地上に横へた。カチッと音がすると後手に縛られた女の纖弱な手の所へ懷中電燈の光が丸く輪を描いた。

『や、ひどく縛りやあがつたな』

ボーッとした薄明りにナイフの刃がキラリと光つた、とプスり繩が切れた。丸い光は手から足へ、……

『これで完全に自由になりました。……奴等は人殺をした氣になつて、此の暗闇の中を幽靈に追かけられ乍らビク／＼もので夢中になつて逃げて行きをつた。が、……有難い大和尙の引導も斯うなると、ちと滑稽だ、ハッハ……愉快々々……いかゞです、別にお負傷はありませんか？』

『え……あ、ありがたう……』と彼女は聞き取れない程の細々とした弱々しい聲で答へた『でも……踝が……石に當つて……アッ痛痛……』

……落ちて來た土砂に叩かれたので足を少し痛めたやうです……

『足を？……何に、大した事はありません。さ……こんな穴の中にもゐられません……出ませう……立たうとして頭を上げると天井に打付けますよ…這ふのです……さ、いらつしやい』

青年は先に立つて小さい洞穴を這ひ出した。懷中電燈の光が彼女の前に小さい光を投げて四邊がボーッと薄明るくなつた。無氣味なじめ／＼した洞の中を女は痛い足を引ずり乍ら默々として青年の後について這つて行つた。

一曲り二曲り三曲り、漸くの事で死の洞穴から脫け出して生の空氣を吸ふ事が出來た。助かつた！ ホッとした安心が彼女の全身に流れる。と同時に極度の緊張から極度の弛緩へ移つた精神の激動に彼女の體力は之を支へるだけの力が拔けてしまつた。

『あ、あなた！』と女が叫んだ。

『え？』

『何んだか……目まひが……氣絕しさうです』

よろ／＼として男の腕に倒れかゝつた。

『氣絕？ 氣絕なさい……知覺を失ふ程いゝ休息はありません』

彼女は堪へようとしても堪へられなくなつた。激しい息づかい、二三度ウームと唸つて青年の腕に抱かれたまゝ氣絕をしてしまつた。

『この方がいゝや。どりや、小笠原一味の生臭坊主共が手紙に驚いて女の生死見屆けにバタ／＼騷いで來ぬ内に、生きた幽靈はさつさと闇に消え失せよう。闇にまぎれて失せにけり……

……か』

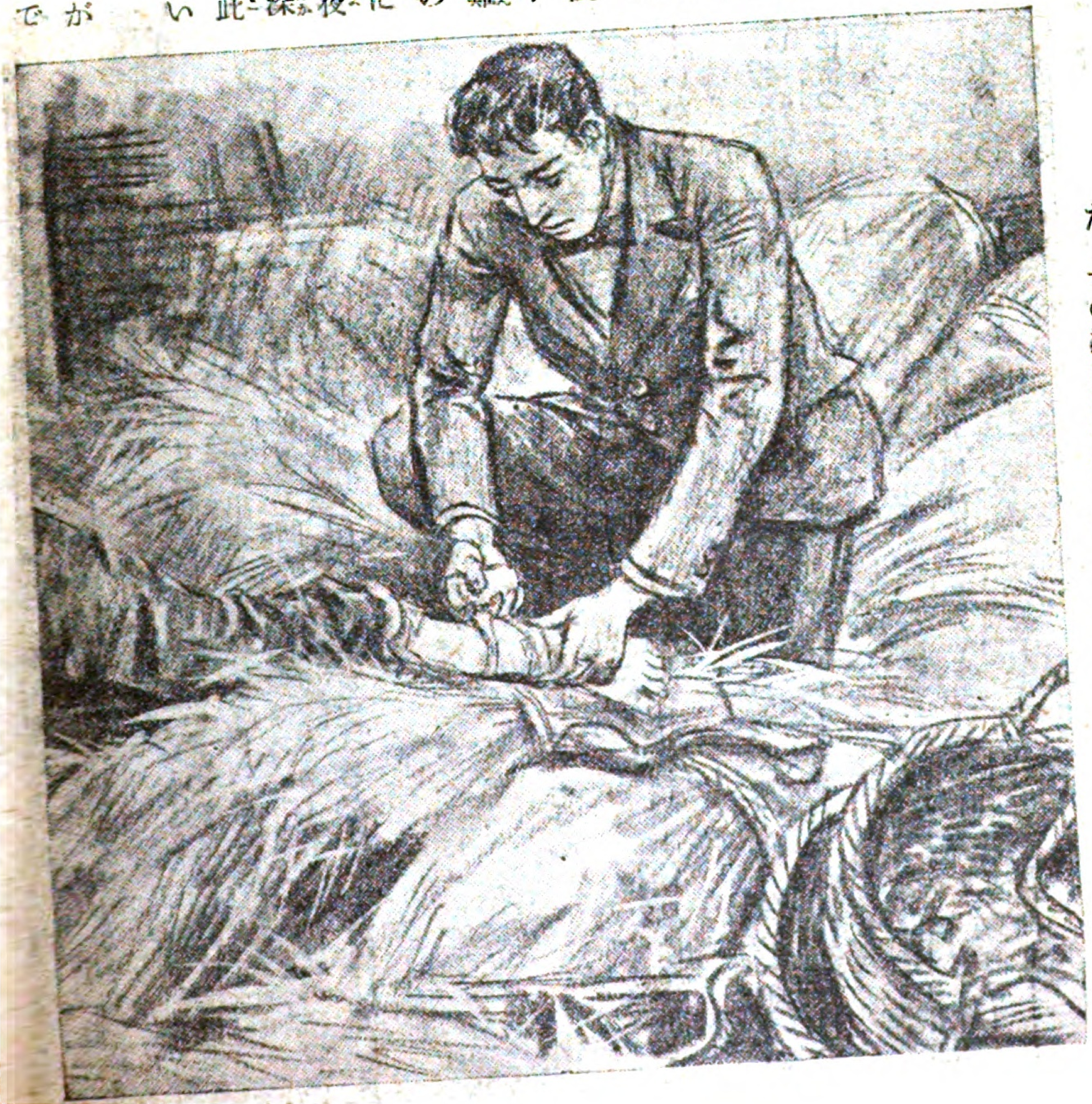
果然、石波艶子の名を借りて、怪寺の座敷に怪しげな女文字の手紙を殘したものは、どうやら此の青年であるらしい。何故

の爲めに？　何の目的で女を助け、怪げな手紙を置いて來たのか。

青年は輕々と女を抱き上げた。月もない鎌倉の奥山道、鼻をつまゝれても分らないやうな深夜の闇を、案内知つた大通りを歩くやうに確かりした足取りで、矗々と立つ杉の樹、雜木の間をくゞつて道もない道を分けながら悠々と歩き出した。

『何が幸になるかわからないものだなあ！』と青年は闇の中で獨語しながら呟き始めた。『その昔學生時代に、此處の山寺へ飛込んで避暑旁ゝの坐禪三昧、和尚の警策でポカ〳〵頭を叩かれ、雪峰是什麼と來やあがつたね、末後の句、君が爲めに說く、明暗雙々底の時節、同條生也共に相知る、不同條死還つて殊絕す、……はつはつは……この難問に屁古垂れて此の山の中を隨分うろついたものだつた。それが今日になつて役に立たうとは夢にも思はなかつた。全くだね、南北東西歸去來、夜深うして同じく見る千巖の雪だ、今ぢやあ、夜深うして同じく見る古山の苔といつた方がいゝ。此の邊、苔がすべりよるからな……や、どつこいしよ』

彼は獨言ながらズン〳〵山を登つて行つた。が何しろ女ながら一人を抱へて夜の山道を登るのである。しと〳〵と全身が汗ばんで來た。然し彼は元氣よく登つた。女の嫋かな肉體を緊と自分の胸に抱きしめてゐると、した



やかな、柔かな、しつとりした肉體の觸感と、肩に頭をつけた女の黑髮の油の匂ひ、蠱惑的な女人の肌の匂ひ、それが血の氣の多い青年の全體へ流れつたはつて來る。

やうやうの事で山を越すとやゝ平らかな畑地へ出た。鎌倉の海から渡つて來る冷かな潮風が彼の汗ばんで上氣した頰を撫でた。彼は一刻も早く女を安全な場所に置く爲めに、彼は勇躍して田畑を走りぬけ、最初から用意してあつたと覺しき小さい納屋へ運び込んだ。

納屋といつても林にかこまれた一軒屋、破れ果てゝ住む人もなく、お百姓さんが不用の農具や藁や秣の置場に使つてゐる所、三日に一度か一週間に一度位、お百姓さんが來たり來なかつたりする程度の物置小屋である。

積み重ねた藁の上へ女を臥かすと、入口の戶を閉め、梁から下げた繩へ懷中電燈を結びつけた。さうしていざといふ時の用意か、腰につけてゐた包を開くと水壜が二本、ウイスキーの小壜に名物鎌倉ハムのサンドウイチが四五箱を取り出した。

臥かされた女は漸く人心地がついたか目をあけてニツコリ笑ひながら片手をついて身を起し、暗闇に動いてゐる青年を眺めた。



『氣がつきましたか、まづウイスキーでも一杯召上れ』

水を割つたウイスキーを持つて女の傍へ來た青年の顏が始め

て懷中電燈の光に浮んだ。

アツ！　その人は！

快男子、品川隆太郞！

『まづ此處まで來れば安全第一です。十二時間の安全と安眠が出來ます。誰も邪魔のない人里離れた山の小屋、ゆつくり御休みなさい。……といふ處で、僕はまだ御紹介を申上げてありませんね。僕ア大井高一と申します。……實はね、不圖した事で、一昨夜、海岸を散歩中に、小舟の陰で怪しげな連中の大それた陰謀をすつかり聞いちまつたんです、始めはよく解らなかつたが如何するかと思つて見てゐると昨夜……つまり今夜ですが、あんたが大雲寺へ出かけるとかいふやうな樣子でせう。何をするのかと思つて先廻りをして大雲寺で樣子を見てると果然、あの騷ぎです。あの時飛び込んでもいゝんですけれども、萬一相手が大勢で、やりそくなつたら大變ですから學生時代に案內知つた山の中を利用して活躍したんです。でも、まあ助けられてよかつたです。今夜は兎に角、此處で一晚明かして、明日になつたら、町から俥を呼んで來て上げます……』

何故か品川は大井と變名した。相手が小笠原一味に關係のある女性である。石波艷子であれば尙更のこと、人違ひの泉矢品子でも敢て本名を名乘るに及ばない。

彼は小笠原一味の動靜をさぐつてゐた。そして鎌倉へ尾行して大雲寺の秘密をさぐり、泉矢品子の冒險から彼等の言葉を盜み聞いて遂に泉矢品子を助ける方策を樹てると同時に置手紙を殘して軸を奪つた。かくて彼は石波艷子と目される泉矢品子に近づいて彼女一味の牙城に突入しようと謀つたのが今夜の作戰である。

彼の計畫はマンマと成功した。彼は梁に吊した懷中電燈の光りで、納屋の藁束を寢床代りに敷詰めた上へ彼女を橫へて、彼女の足の傷を丁寧に繃帶してやつた。

密閉した納屋のむし暑さ、ウイスキーに上氣した女の頰は紅に、下着の上部をまくつて眞白い胸をはだけた女の乳房のふくらみ、呼吸ごとに美しい曲線を波打つ女の肩、然も彼女のおだやかな呼吸は傍近く寄りそつてゐる彼の唇を擽はすやうにかすめてゐた。

やがて彼女は美しい微笑を頰に殘した儘重く垂れた眼瞼を再び閉ぢてスヤ〳〵と眠つてしまつた。

品川は身動きもせずヂツとその寢顏を見てゐた。三十分許り經つた。

彼は靜かに包を引寄せて中から大雲寺から奪つて來た「七佛」の軸物を取り出し、音のせぬやうに開いて中の文句を讀んでゐた。そして彼はその軸につけてあつた風鎭を二つも取り出して見てゐた。がそれも暫くの間、再び包に包んで、尙ほ暫くはぢつと考へてゐたが、その儘女の傍へ突伏して寢るともなしに彼も亦眠に落ちてしまつた。……

ゴーン！　ゴーン！、何處の寺でならすのか、鐘の聲を一つ一つ夢現に數へながら品川隆太郞は不圖目を醒した。目を醒し

て腕時計を見た。

『や、もう七時になるのか？　すつかり寝ちまつた』

閉めた窓の隙から、破れた屋根の隙から、日光の光がサンサンと差し込んでゐた。

『ヤツ！』と彼は叫んではね起きた。『どこへ行つたらう？』

傍に寝てゐた泉矢品子がゐない。入口の戸を開けるとパツと小屋の中へ陽が一杯に入つて來たが、泉矢品子の姿は見えなかつた。

戸外へ出て見た。影さへ無かつた。

足が痛むといつた。負傷して歩行に困難らしかつた彼女は？　何として默つて逃げるやうに消え去つたのか。死から生へ救ひの主に言葉一つかけず、一言の禮さへいはずに、早くも身をかくして仕舞つた。死の刹那に聲一つ立てなかつた彼女、生の救ひに嬉し涙一滴こぼさなかつた彼女、彼が拾つた謎の女は、美事、彼の心ゆるした油斷を見澄まして、早くも消えて仕舞つた。

『失敗つた！』

といふ言葉が彼の口から洩れると同時に、

『失敗つた！　やられた！』

といふ叫びが再び口を突いて出た。

盗られた！　さうだ。包が無い。昨夜大雲寺から奪ひ取つて來た七佛の軸、それから風鎮、美事にしてやられてゐる。あの軸に何かの謎があらうと睨んで手に入れたのも束の間、女の偽めに謀つて謀られた。

さてはあの女！……

不圖包を置いてあつた傍の藁の上に一枚の紙切がある。拾つて見ると、

私の救ひ主に御禮を申します、然し再び私と會ふ事を望まないで下さい。あなたの計畫は斷念した方が、あなたの御爲めと存じます。

赤いハートの印をつけ棄手紙一通！

格鬪

流石の品川隆太郎も茫然として立すくんだ。命の恩人として完全に摑んだ一方の秘密階段と覺しき女性、と思つたのも一炊の間、夢から醒めれば、切角手に入れた奇怪な軸物も奪はれ、敵には美事に裏をかゝれてしまつた。素人探偵、目も當てられない醜態である。

『よしッ！　敗陣の樹て直しだ！』

と彼は叫んで小屋を飛び出すと、その儘山を分けて大雲寺へ向つた。

大雲寺に近づいて暫らく中の様子を窺ふと人の氣配がしなかつた。

『さては、あの青面で恐れをなして引上げたか』

品川は一通り大雲寺の中を調べて見ようと決心をした。萬一を要心して縁の下から忍び込んだ。縁が高いので中は割合に明



るかつた。
泉矢品子が七佛の軸に手をかけて床の間から陷入れられた穴が大きく開いてゐた。彼はその中へ入つた。穴は三疊の廣さで、相當格鬪の跡が見えた。一亙り見渡した時に隅の方に白い封書樣のものが半ば土に埋まつてゐた。引出して見ると芝區愛宕下町三丁目一岩下方吉岡進殿と書いて、差出人は小笠原であつた。
彼は中味を

出してチラと讀んだが、思はず微笑を洩した。
『いゝものが手に入つた』
獨語しながらポケットに藏めて穴の中から床の端に手をかけスツと座敷へ上つた。
無人とはいひ條彼は本能的に足音を忍ばせながら座敷を拔けて、勝手に出、廊下を通つて本堂へ行つた。
須彌壇の前を通つて再び座敷の方へ引き返さうとした時、パツと背後から飛び付いた奴があつた。
『ウーム……』
不意の油斷、柔道の手で喉を扼されて、品川隆太郎、思はずタジ〳〵と唸りながら退いた。
『ウーム』
强力に引ずられて絞め上げられるのを僅かに兩足を踏張つて堪へ乍ら、敵の頭を取らうと片手を廻したが、相手はピタッと自分の脊に顔をつけてゐて取らせない。
品川の喉は益々絞められる。靜脈がふくれて來、頭がガンガン鳴り出すやうな氣がした。駄目だ。彼は出來るだけ息を吸ひ込んだ。
『エイツ！』
絞め上げてゐる男の右肘を兩手で掴んで、滿身の力を籠めて强引に腰をひねつた。
背後から組みついた敵がズル〳〵と前に上り出た。彼は男の頭を掴んで捻つた。

『誰れだツ！　貴樣は？』
『……』
品川と同年輩位だが、勞働者風の下品な奴だつた。無言のまゝ再び飛びかゝつて來た。
『生意氣に來やがつたな。こいツ！』
品川は相手の飛込んで來るのを受けると同時に大外刈で本堂の床の上へいやといふ程叩きつけた。
『ムツ！……ち、畜生！』
猛然と起き上つた男の手には短刀がキラリと光つた。
『危いツ！　此の野郎ッ！』
本氣になつた品川はパッと怪漢の手を掴んだ。二人は暫く揉み合つた。
バタリ、短刀が落ちた。
落ちると同時に足拂ひで怪漢を再び叩き付けると、その儘入り身になつて男の兩腕を捻ち上げた。
『靜かにしろ、馬鹿野郎！』
昨夜品子を縛つた繩の殘りがその儘に棄てゝあつたので、彼は幸ひと許りそれを取つて怪漢を縛り上げてしまつた。
『こつちへ來い』
品川はやゝ得意になつて怪漢を引立てゝ座敷へ戻つた。
『やい、連中は、何處へ行つた？』
『知らねえ……』
『知らねえ事があるか。白狀しろ』

品川も慣れないだけにあせり氣味であつた。
『誰れだ貴樣は？ 姐御をどうしやがつた？』
『姐御？』
品川は考へた。姐御？……石波艶子？……すると、此奴は小笠原一味ではない。石波の部下だな？
『まあ、待て、騒ぐな』
やゝ落付いて來た彼は、怪漢の身體檢査を始めた。バット一箇と、蟇口とマッチと其他雜品がある許りで何も持つてゐなかつた。彼は蟇口を開いて見た。十七八圓入つてゐるらしかつたが、中に紙片が一枚入つてゐた。引出して見る。
明夜十時、中井集合
下に赤いハートの印がついてゐた。
『貴樣は石波の部下だな。石波は昨夜、小笠原一味に捕へられた』
『何ッ！ やられた？』
『捕へられて、此の裏山の洞穴の中へ生埋にされた……』
『チ、畜生ツ！ やりあがつたなッ！ ウ、ウヌッ！』



齒を喰ひしばつて飛びかゝらうとした。
『が、まあ落付いて話を聞け、生埋にされたが……或る事情で俺が助けた。』
『何ッ！』
『助けて或る處に隱してある。が然し生かすも殺すも俺の手の裡にあるんだ。』
『嘘をつけッ！』
『嘘と此處の大雲寺の坊主の頭はまだいうた事がない』と品川

は悠々話をつゞけた。『俺は小笠原の一味でもなければ、お前達の味方でもない。といつて俺は探偵でもない。俺は小笠原と石波の關係を昨夜立ち聞いて面白くなつた。俺は冒險が好きだ。秘密が好きだ。いはゞ道樂だ。道樂で女を助けたが、話の次第によつては、誰れにでも味方をする。俺は小笠原に談判をする積りで、此處へやつて來たが小笠原はゐないで、貴樣が飛び出して來た。飛び出して來たから、俺は氣が變つた。俺は貴樣に談判することに決めた。俺は兩方の仕事の邪魔はしないよ。何の秘密か知らないが、お互が命がけでやつてゐる。そいつを傍で見てゐるのが面白いんだ。何も知らんで見てゐたんぢやあ面白くない。一通り心得て見てゐたいんだ。だから俺は貴樣に聞く。訊いた事に素直に返事をすれば、俺はそれで滿足だ。女も助けようし、貴樣も勝手にさせてやる。どうだ？　返事をするか？』

『何をいやあがるんだ。小供ぢやあるまいし、そんな馬鹿々々しい話に乘せられるけえ、チッ！』

『何がチッ！　だ。俺は眞劍だぞ。俺は變り者だ。事件が面白さうだから俺は見物をしたいんだ。見物をお斷りだといやあ、こつちも御斷りだ。お斷りだが斷つておくぞ。俺は知らねえ、何も知らねえよ。女は生埋から助けてある處に縛つたまゝある。貴樣もこの儘にして俺は歸るよ。女は水



一滴飲めないから死ぬかも知れん。貴樣は小笠原一味の手に落ちるかも知らない。勝手にしろ。のみならず、都合によつたら警察へ知らせておかう……それから先は俺は知らない……乘ら

たきや、誰に乘らないがいゝ。貴樣の勝手だ……』

品川は脅かしておいて腰を浮かして立ち上り、そのまゝ振り向きもせずつか〳〵と出て行きかけた。

『ま、待つてくれ！』

怪漢が呼んだ。

『用か？　俺のいふ事を聞くんなら待たう。その他のことなら俺ア聞かない』

『ま…待つてくれ。聞くよ。聞くから待つてくれ』

『きくか？　よし』

品川は戻つて來た。

『おやあ、手取早く訊くぞ。俺には目的がない。見物だからな……で今貴樣の蟇口から手紙が出た。十時中井集合とある。これはなんだ？』

『…………』

『返事がいやか。俺は此の手紙を見たから聞きたくなつたんだ。何だ、こりやあ？』

『今夜の十時に落合の中井驛へ集合するんだ』

『何の爲めだ？』

『深くは知らねえが……下落合に住んでるオペラ女優の家へ行つて、その女優の持つてゐる七ツの寶石を奪るんだ』

『何だ、七ツの寶石つてのは？』

『何か知らねえ。その寶石に大きな秘密がかくされてゐるつて話しだ。永い間搜してゐたんだが、一昨日、漸く解つたんだそうだ。その他のこたア、こちとらは知らねえ。姐御の命令で働いてるんだ。姐御より外に知つてるもたあ、ねえ』

『フム。何といふ女優だ？』

『佐々木直江といふんだ』

『大勢で行くか？』

『俺共に三人だ、その他に姐御が行く筈になつてゐる』

『それから石波艶子といふのは如何いふ女だ』

『姐御だ』

『姐御は解つてる。素性を訊くんだ』

『素性？　素性なんさあ知らねえ』

『では石波……』

いひかけて彼は急に口を結んだ。玄關に人聲がする。大雲寺の和尚などが二三人歸つて來たらしい。ドヤ〳〵と玄關を上る氣配……

『あつ！　歸つて來やがつた』

といひも終らぬに早くも唐紙がガラツと開く。

『アツ！』といふ叫び聲。

聲より早く品川は床の間の穴へパツと飛び込んだ。

襲撃の襲撃

品川隆太郎は大雲寺を飛び出ると跡は野となれ山となれ。妖婦石波艶子一團が七ツの寶玉を目的に女優の家を襲ふといふ。七つの寶玉の秘密は何？　何かしら其處に今度の事件の鍵があ

りさうに思はれた。彼は謎の妖婦の襲撃を襲撃し、一旦は逃げられた彼女を取押へて、小笠原との關係から彼等の求めてゐる秘密の目的物を探知しようと決心をした。

東小路子爵の伯父と名のつく小笠原重光に直接腕づくで正面衝突は今の處出來ない。寧ろ彼小笠原の敵である石波の方から證據を握つて堂々と戰つて行かなければならない。

彼の策戰は先づ石波を倒し、彼女の口から秘密を掴んで、子爵が瀕死の際に預けた白玉の謎を解かねばならない。

汽車の中でぐつすり眠つた品川は青山の自宅へ歸つて一切の準備を備へた。そして尾行の有無を念入に調べてから、夜の九時、高田馬場から中井驛へ下車した。

中井驛の前のそば屋へ飛び込んで女優佐々木直江の家を訊いたら直ぐ解つた。下落合のずつと奥に淋しく離れた文化住宅の一軒建。婆やと二人きりの生活ださうだ。

停車場から二十分位はかゝる。山一つ越えた先きの森を脊負つた畑の中の一軒家で、二百坪に餘る庭には立派な花壇がしつらへてあつた。

まだ起きてゐるらしくカーテンの隙から灯が洩れて、ビクターの蓄音機のオーケストラが聞えてゐた。夜中といひ條四邊に遠慮はいらないのでソプラノを練習してゐた。低い石垣を乘り越して裏手へ廻つた。文化住宅だけに戸締りは嚴重である。

『いつそ女優に會つて事情を話さうか』

と再び表へ廻らうとすると、道の彼方に話聲が聞えて來た。

『もう來たな?』

と花壇の影に身を忍ばせた。

『大出は如何したんだらう? まだ來ないんだが、首領は二人でやれといふが……』

『女優一人の始末だもの、俺は婆やをやる。君は女優をやれ』

『首領は?』

『もうぢき來るだらう。仕事がすんだら笛で合圖をすれば、家の中へ入る事になつてゐるんだ。何しろ昨夜の一件で疲れてゐるんだから……』

『それにしても幸運だつたな。命は助かる。秘密の風鎭は手に入るさ……』

『風鎭は皆手に入つたのか?』

『六ツ手に入つたんだが、今一つ一番肝心のが手に入らないんだ。小笠原の方で最初六つ持つてゐて、今一つを手に入れる爲めに非常に苦心してゐたんだが、それを首領の腕で大山良夫を鹽原で殺らして二つ奪り、春木貢太郎を色仕掛でだまして二つ召し上げて、殘る二つを奪りに大禪寺へ出かけてマンマと敵の術中に陥つたんだ』

『でもよく助かつたなあ』

『ほら、いつぞや東小路の令孃をさらつた時助けに來た學生見たやうな奴がゐたらう? 彼奴が助け出したんださうな』

『何んだつて助け出したんだ』

『色氣があつたんだらうよ。……が然しそいつがあの軸と風鎭

を持つてゐたといふから、無論此度の事件を嗅ぎつけて令孃へ心中立をしてゐるんぢやあないかと思ふ……があんな小倅に何が出來るものか』

『でも、此の間は勇敢だつたぞ』

『小倅は恐くないが、あの犬には弱つた。つまりは學生上りの猪武者さ』

『女優は美人だつてぢやあないか?』

『凄いぞ。……七ツの寶石さへ奪れば、用濟なんだが、用が濟んだら一寸失敬するか?』

『贊成だね……や、見ろ、まだ起きてらア、……ピーピーピーッてやつてるぜ』

『好都合だ。少しはジタバタしても近所へわかりつこはねえ……だが、都合によると少し手荒にせにやあ、渡すまいぜ』

『何んだつたら殺すさ。命には代へられないから寶石は渡すよ。』

『受取つたら、笛を吹くまでの間に一寸愉快をさせて頂くとしよう……』

『では……呼出をかけるぜ……ベルを探して置いて……入口の扉が開いて婆さんが出て來たら、俺が飛びかゝる、君は中へ飛び込んで一氣にやつちまひな』

『O、K』



彼等兇漢二人は入口のベルを押すと共に素早く玄關口の影に身をひそました。

間もなく玄關の扉が細目に開いて婆やが顔を出した。

『おや、誰もゐなさらんか?』

いひながら扉から出した顔を、横からヌッと出た手が喉をグ

ッと摑んだ。

『ウッ』苦しさに踠くと同時に一人の男は扉を開いて中へ飛び込んだ。

バタ〳〵といふ音と共に二人の悪漢は家の中へ入つた。品川は叢から入口の扉の影まで進んで内部の様子を窺ふ。

『アッ！』と女の叫び聲、『誰れです、あなたは？』

『静かにしろ。聲を立てると殺すぞ、……お前の持つてゐる七ッの寶石を出せ……さ、七ッの寶石だ、……文字を彫り込んである七ッの寶石を出せッ！』

『……婆、婆やア！』女は泣聲になつた。

『婆やも糞もあるかッ！ 石寶を渡せッ』

『アレーッ！ 泥棒ッ！ 人殺しッ！』

『ウヌッ！ 抵抗するかッ！』

椅子の倒れる音、バタ〳〵といふ足音、息づまる女の叫び聲。それに混つて蓄音機が恐ろしい響を立てゝジャツズを奏してゐた。

今は猶豫はならぬ。品川は扉を蹴開いて中に飛び込んだ。と玄關から寝室へ通じる扉が開け放たれて男が戸棚を捜してゐた。彼はいきなり飛び込み様にグワンと當身を喰はした。



ウッ！といつて男は仰ぞつた。

寝室から書齋へ走る。丁度兇漢が女優を膝の

下に組みしいて兩手で喉を摑みながら、苦しみに悶搔く女の顔へ顔を押付けるやうにして、

『阿魔ッ！　寶石はどこにある！　いへッ！　云はないとッ……』

一蹴した品川は火の出るやうな鐵拳で兇漢のこめかみを一擊した。

アッ！　と悲叫して男は一旦摑んだ手を放したが、品川の飛びつく間に早くも立直つて組付いて來た。ムンズと組合つた二人が床の上へ轉々したがそれも數秒、……品川はスックと立ち上つた。相手は微かな呻き聲を立てゝ床の上に倒れて身動きも出來なくなつてゐた。

彼は失神したやうになつて倒れてゐる女優佐々木直江を抱き起した。殘酷な殺人魔の兇手も案じた程の迫害を加へてゐなかつた。

『直江さん』と彼は優しく呼んだ。『御安心なさい。僕が御助けします……



……僕は密行の刑事です……騷いではいけません。まだ同類があるらしいから、そいつ等を捕縛します。靜かにして寢ていらつしやい』

彼女は僅かに首を動かして、目に感謝の意を表した。

品川隆太郎は當身で倒れてゐる奴を書齋へ引ずつて來て用意の細引で二人の男を高手小手に縛り上げ、嚴重に猿轡を喰ました。

應接間には婆やが縛られて猿轡を喰ませられてゐた、彼は婆やを助けてやらうかと思つたが、下手をして騷がれても困ると思つたので暫くの間だからとその儘にしておいた。

それから今一度寢室へ戻つて、

『佐々木さん、どんな事が起つても聲一つ立てゝはいけない。よろしいか。僕は今一人の共犯者を此處へ誘き寄せて縛り上げて、此の謀殺事件を調べるからね……いゝですか。聲を立てると命まであぶ

なくなるから……』

よつく念を押しておいた。女優は恐しさに歯の根も合はずガタガタ慄へてゐた、が品川の言葉はよく了解したらしかつた。

彼は兇漢二人から武器を取り上げた。ピストルを一挺づつ持つてゐた。

それからポケットから呼笛を取り出すと、玄關の所まで行つてビーッと低く吹いた。吹いてヂッと耳を澄ました。

門を乗り越える音がする。

『來たなッ！』

彼は寢室の扉をしつかり閉め書齋の扉を半開きにして靜かに待つてゐた。靜かな足音だ。が玄關の扉がスーと開いた、來たな。よしッ。斯うなれば妖婦石波艶子と品川隆太郎二人の勝負だ。が然し寢室で少しでも音を立てられたら……



彼の胸には石波艶子を脅迫して彼等が狂奔する秘密の眞相を知らうといふ謀策を抱いて、待つてゐた。心臓がドキ〲と波をうつ。頭がわく〲するやうだ。

書齋の扉がスーッと開いた。

來たッ！石波艶子、洋装の姿も輕やかに悠然と室内へ一歩を入れた。

『アッ！』といふ低い叫び聲。

彼女は見た。第一にヌッと室の中央に腕組をして突立つてゐる品川隆太郎の凛然たる姿を見た。つゞいて縛り上げられて息も絶え〲に倒れてゐる二人の部下の姿を見た。彼女はサッと顔色を變へたが、敢て逃

げようともせずヂツと棒立になつて品川の顏を見詰めた。品川は餘りにも剛膽不敵の彼女の態度にいさゝか氣を呑まれた形だつた。双方無言。二分、三分……

『今朝はひどい目に合つたぞ』と品川がいつた。

『昨晩は難有う御座いました』と女が受けた。『今夜の仕義は、これは何んだ』と品川は底力のある聲で押した。『一寸必要な品が御座いまして、使の者を出しました』と平然とする。

『使の者に人殺しをさせるか？』

『人殺し？』と彼女はとぼけた。

『默れッ！』と大喝。『佐々木直江は慘殺されたぞ』

『誰れが殺しました？』

『此奴等二人で。石渡艶子！　春木貢太郎を殺し大山良夫を殺し子爵東小路行輝を殺し且つ又罪もない女優佐々木直江を殺した。惡魔。殺人鬼。今夜といふ今夜は俺は承知出來ない……』

『あなたは誰れです』

『俺は品川隆太郎だ。東小路子爵慘死の現場に來合せて、最後の遺言を頼まれた男だ。俺は子爵が瀕死の言葉を守つて、貴樣達が血を流して搜してゐる秘密を搜してゐるんだ。だから俺は昨夜、貴樣を小笠原一味の手から救つた……が今夜は……今夜は容赦はしない。……が、貴樣の知つてゐる秘密をいへば、俺は貴樣だけの命はゆるしてやる』

『………』女は無言の儘ぢつと品川を見詰めてゐた。

『厭か？　俺は子爵の、遺言で、秘密を搜ればそれでいゝ。人殺しの大罪は天が許さぬ。俺は天を信じる。俺は今直ぐに貴樣を警察の手へ渡すとはいはない。その代り、云へ。貴樣の知つてゐる七ツの寶石と七ツの風鐸の秘密をいへッ！』

彼はツカ／＼と進んで彼女の肩を鷲掴みにした。

彼女は蒼白な顏をして默つてゐた。

『厭か、いはないのか？　よろしい。俺は子爵の言葉を重んじて、敢て警察沙汰にはしない積りだつたが、云はなければ仕方がない。俺は腕力に訴へても貴樣はじめ一味全部を一からげにして警察へ叩き込んでやる』

彼は全意志を込めてグイ／＼と力一杯押し進んだ。『今朝も、貴樣の部下を大寒寺で捕へた』

『あの……大出を？……』と初めて口走つた彼女の顏には少からぬ狼狽の色が見えた。

『大出を捕へて、今夜の事を白狀させた。白狀したから明日の朝はゆるしてやる事にした。が今夜、貴樣がいはなければ、それまでだ……來いッ！』

彼はいきなり彼女を抱き上げた。丁度前夜深森の中を抱き上げたやうに輕々と抱き上げるとそのまゝ玄關の方へ進んだ。

『この儘、俺は近所の警察へ貴樣を叩き込んで、貴樣の共犯者大出初め一味の連中が殺人の數々を告發してやる……さ、どうだ、秘密を告白するか、それとも斷頭臺で死刑にされるか…』

彼はグイ／＼と玄關を戸外へ出ようとした。

『ま、待つて下さい』とたまり兼ねたか彼女が叫んだ。彼女は觀念したか。或は他の方策を思案したか。

『まつて下さい』と再びいつた。

彼は再び彼女を書齋に擔ぎ戻つた。さうして倒れた椅子を足で起して、其處へ彼女を押し込むやうに腰かけさせた。

『よう御座んす。どうせ、妾の運が惡かつたんだ。御話しませう。でも、此處でなくてもいゝでせう？』

『此處だ。今直ぐだ。慘殺された女優の魂の涙にぬれてゐる、此の室だ、さ、話せ』

品川隆太郎は火のやうに激しく攻めかけた。

『では、最初から御話しませう』

妖婦石波艶子が血を流し、人を殺して恐ろしい流血の大秘密、今談らうとする……品川は息を吞んだ。（つゞく）



感謝感激

○

◆本號に於て讀者諸君に誇り得るもの〻一つは谷脇素文畫伯筆『新繪本柳樽』を添付し得たことである。云ふべからざる可笑さの裡に一脈の氣品を失はぬ筆趣は素文畫伯獨特のものである。此の味を出す爲には四度も下繪を描きかへられ、三週間の晝夜、精根の限りを盡して仕上げられたものである。素文先生近來の傑作であり、これがこれ川柳漫畫の神髓である。

○

◆かつて本誌に掲載、大喝采を博した戯曲『高野長英』の作者松居松翁先生は、わが劇作壇の巨匠であることは皆さん御承知の通りである。その松居先生、いつも口癖に御自分のことを愚老々々とかく老人がつてゐられるが、なかなかどうして壯者に讓らぬお元氣である。明年の春から京都に住居を移されるといふ噂に、どうした御都合からですと聞けば、『隨分戯曲も書いてきたが、省みて松居が死後に殘すもののなきを恥ぢてゐる。で、明年春から京大のさる教授の研究室へ通うて勉強することにした。まア老骨に鞭打つて二ケ年位ミッチリと世界各國の劇のテクニックを研究する考へだよ…』老いて益々旺んなる、眞摯なる先生のこの意氣には殆ど敬服の外はありません。

御挨拶

敬愛なる讀者の皆樣より御懇切御鄭重なる暑中見舞を山と頂戴致しましたこと編輯局一同たゞ／＼感謝の外は御座いません。然るところ編輯の多忙と混雜に紛れ定めし御挨拶漏れも隨分あつたこと〻恐察して居ります。甚だ勝手千萬ながら玆に誌上を藉りて更めて厚く御禮申し述べます。終りに讀者諸賢の御淸福を祈り益々彌々弊誌に御聲援を賜りますやう偏に御願ひ申し上げます。

○

◆三上於菟吉先生はふだんから胃弱と痔病に惱んでゐられる。その病勢がこのぢうとみに烈しくなつたので、何よりも好きな泊りがけの散策もばつたり止して、專ら牛込の御自宅に靜養中である。時恰も十月號の〆切り間際に病氣と聞いたので、原稿が間に合はぬやうなことになりはしまいかと編輯局一同すこぶる危惧してゐると、あべこべに豫定日より五日も早く原稿が出來て來た。記者、先生に謝辭を述べると『いつもより早かつたといふとを君は不思議がるのかね、病氣つてものは人間をえらい努力家にするものだよ。病苦を紛らすには害作でもする外はないぢやないか。』

讀者通信

◆逐號の大發展、大慶至極です。本部員一同は航海の慰安として先づ何よりキングを大歡迎して居ります。樂しみに讀みつ〻而も常識が啓發される此のキングが、破格に低廉な五十錢とは感謝に堪へないとです(驅逐艦長月　坂口安平)

◆キングを求めて拔き讀みをしたことがない。何故といつて、どれもこれも皆先きに讀みたい面白いもの許りだもの(大鵬丸　遠藤生)

◆創刊號より口繪の泰西名畫を集めて四十枚溜つた。金で買ひ蒐めるとしたら大層な値段だと思ふ。實に素敵な珍寶となつた。(大阪松井生)

◆烏滸がましいがキングの爲に殊勳を樹てた自慢話。先日私の近町へ『萬花地獄』の活動寫眞がやつて來た。友人六人を誘うて出掛けた。皆堪らなく面白さうに陶醉してゐる。こ〻ぞと「この寫眞を見て面白かつたものはキングで續きを讀め、キング一册たつた五十錢で愉快な小說が滿載されてゐる」と拔からず勸誘、全部キング黨へ入黨させた。(千葉　久保田秀穂)

◆血は湧き肉は躍る！號を重ねて

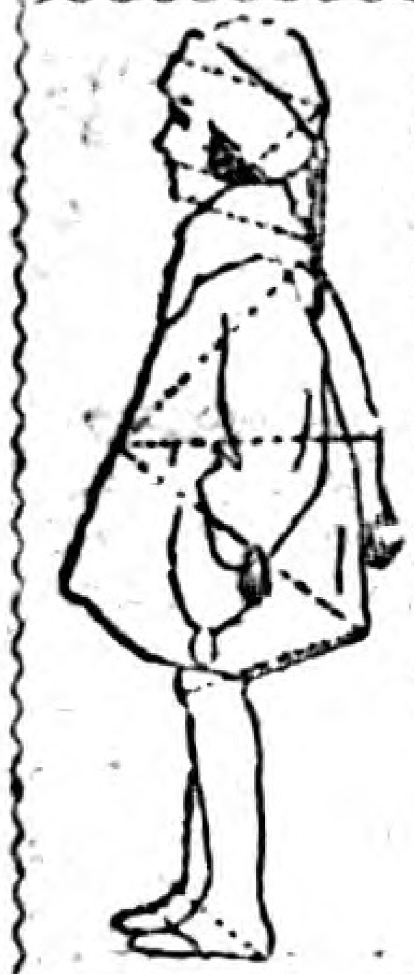
病氣のお蔭さ…。

内証話

○

◇輕井澤に二荒伯を訪問しようと夜行で出掛けたのさ。と、生憎だ一と足違ひで日光へお立ちだといふ後だつたので、早刻また日光へ追撃を試みた。さて日光へ着いたが宿所が知れない。警察やら郵便局やらを煩はして片ッ端宿屋を調べて見たが判らない。ひよつとすると御料林でキャンプ生活をされてゐるのぢやなからうかといふ話に、果敢ない望を繋いで雨中を御料林へ出掛けたと思ひ給へ。が。馬返しまで行くと危險に就き自動車通行罷りならぬとの其の筋のきつい御達しで、遂々車から降されて仕舞つた。仕方なく滑りがちな雨の險坂をテクテク登つて行く途中、大風雨に遭ひ、傘もさせぬことゝなつて全身濡れ鼠さ。幾度か立往生させられた時は、いやはや泣けて來さうになつたよ。だが、泣いたとて誰も來てくれぬ山道だ、キング魂で頑ン張り通して辛うじてキャンプに辿り着いたが、そこに伯を見つけ出した時は——實に地獄で佛の思ひがあつたネ、とはY君の述懷をその儘。

本誌九月號娛樂室三三七頁凸坊の惡戯「切れた繪」のお答をウッカリ落しました。淸ちゃんの繪は次の通りでした。



○

◇編輯局内濛々煙が絶えない。敷島二ッ以上の愛煙家はFさんKさんYさんOさんIさんMさん等である。中でもKさんMさんと來てはまさに岡蒸氣で、まづ煙の絶レツこがない。此の人達が一日に敷島三ッ宛。一ッ組に至つてはLさんAさん始め十一名に達する。さて以上、三ッが二人、二ッが四人、一ッが十一人で一日二十五箇である。頭のよいところで暗算して見たら金にして金四圓五十錢月に百三十五圓、年に壹千六百二十圓を煙にしてゐるわけである。實に驚くべき不經濟家が揃つたものである。正に怪しからぬことである。更にキングを創刊して以來三ケ年と十ケ月、此の間の煙代が六千二百十圓也…と計算してゐる時、給仕、お茶ッ！あ暗算が壞れた。

○お断り

◇去る三四兩月誌上募集の「科學、怪奇、探偵、冒險小説」は應募者豫想以上の大多數であつた。爾來愼重嚴選の上愈ゝ茲に優秀篇と認むるもの凡そ百篇を選出することが出來た。更に最後の嚴選により當選者を確定し、來月號にはその芳名を掲載する豫定である

◇去る七月號誌上募集「實生活萬般に關する實際談」の當選者は本誌上に發表の豫定でありましたが、これは又應募者豫想以上の多數にのぼりし爲め、その選に意外の時日を要し、遂に次號廻しの止むなきに至りました。二つとも遅れて甚だ恐縮ですが不惡御諒承願ひ上げます。

益ゝ佳境に入つた「萬花地獄」の痛快さ。小枝角太郎一味の行末やそも如何？吉川英治先生によろしく。(大分　渡邊梢)

◇キングを愛讀して恰度二年目になる。その間最も魅きつけられた讀物は「死よりも强し」である。遉に世界的新人と謳はれて人氣を一身に背負ふ才人鶴見祐輔氏の作品である。その一言一句はよく人生行路の苦樂を洞察、描寫してあつて而も興味津々たるものがある洵に我等青年に好箇の讀物である(兵庫　永吉忠雄)

◇記者先生には此の炎暑を如何にお凌ぎですか。屹度キングの爲汗みどろで働いてゐらつしやることと存じます。それを想うて私も一生懸命に家業を扶けて居ります。そして夜分の暇にキングを拜見して居ります。(愛知　荻野嘉市)

◇一昨年のことでした。工場で作業中、不圖した不注意から右手を切斷されて生れもつかぬ不具者となり、人生に希望も勇氣も慰安も失つて了ひました。幾度か死を思うたとでしたが、友人の好意でキングを贈られて讀むに至つて始めて飜然悟るところがありました。爾來キングを唯一の師友として心の修養に努め、且つ慰められて居ります。キングは私にとつて更生の神であります(岐阜　住田重吉)

刮目して 素晴らしき

感謝！只感謝！

大飛躍！又大飛躍！今や日本はおろか世界到る所、凡そ日本人の住むところ「キング」の入らぬ所は無い。實に痛快極まる大發展、破天荒の大躍進振りと申さねばなりません。洵に之れ！絶大なる滿天下諸賢の熱誠、同情、聲援!!吾等編輯局一同は眞に衷心より感奮興起、更に緊褌一番、今や熱烈至誠を籠めての大々的活動を續けつゝあります。左に掲ぐる項目は次號に掲載する特輯記事のほんの一端に過ぎませんが、何れも天下を熱狂させる素晴らしい大記事大計畫たることを信じて疑ひません。

國威發揚 明治大正昭和大繪卷

維新以來、赫々たるわが國威を海外に發揚したることそも幾度ぞ。その誇るべき數々の事件中特に萬人が牢記して永久に忘るべからざる大事件を活寫したる極彩色、高雅美麗の大繪卷である。筆者は悉く當代一流の畫伯――辻永、和田英作、小堀鞆音、中村不折、石川寅治、山口蓬春、小寺健吉、尾竹國觀、花島勝一の諸大家が腕に撚りを懸けて描かれた大傑作、正に萬世に傳ふべき名畫譜！

名士名流熱涙物語

名士名流が國を念ひ世を念ふ熱烈の涙、人情道義に咽ぶ深刻純眞の涙、それは實に我等を感動せしむる最上最高のものであらねばならぬ。親しく名士名流の門を叩き、曾て感動感激に身を震はせて慟哭せる事實談を蒐めたるもの。正に感激の最高場面！再び得難き金玉の大記錄！

お待ちあれ

次號の盛觀！

名人達人 藝道の極致驚嘆物語

凡そ一藝の蘊奥を極め藝道の極致に達した名人達人の技には、眞に人間技とは思へぬ絶妙の境地がある。たゞ驚嘆感嘆の他はない。茲に東西古今に亙り、各界名人達人の玄妙の神技、驚嘆措かざる物語を蒐集す。眞にこれ次から次へと語り傳ふべき感嘆物語！ 萬人熱狂の名物語である。

偉人傑士の少年時代

偉人と言はれ傑士と呼ばるゝ人物は、その少年時代に於て、果して如何なる心掛けを持ち、如何なる機會を掴み、如何なる事柄に發奮蹶起して青雲に乘じたるか？ 偉傑が發奮出世の動機、苦闘試錬の活物語こそは正に立志處世の祕鍵である。涙ぐましき感激あり、匕首肺腑を貫く底の力強き大教訓あり、一讀惰夫をも起たしむる一語千金の大讀物！

尚以上の外 續々と新計畫を畫策工夫中であります。連載讀物に至つては、何れも次號より場面新展開！ いよ〳〵興味の絶頂に達します。清秋讀書の好機、キング十一月號は一段の活氣を帶び精彩を放ちます。刮目して御期待あれ!!

茲に特に滿天下に高唱すべき快報は

今秋、御登極の盛儀を行はせらるゝに際し、本誌は恭しく此の曠古の大典を壽ぎ奉る意味に於て、來る十月中旬破天荒の臨時増刊を發刊致すことであります。やるからには天下をアッ！ と言はせねば已まぬキングである。必ず御期待下さつて今より御吹聽下さいます樣切にお願ひ致します。

科學小話

千萬年後の人間

地球の進歩發達は百年毎にあらゆる物象に想像以上の變化を與へてゐるとは、ダーウキン進化論の云ふ所だが、今後千萬年もしたら人間の姿はどんな奇拔なものになるだらう。米國ハーバード大學教授レイモンド博士は、斯う云つて居る―『文明の進歩は人類の齒を奪ひつゝある。そこで、齒がなくなると食物を液化して嚥下し易い樣に口が變形する。次に身體の毛髮がなくなるが、これは身體に保温具が整頓するためで、男女とも象牙の玉の樣に見事な禿頭となるであらう。又足指の如きも漸次退化して、第四第五指は接合して了ふであらう。未來人は智力の點に於て素晴しい頭腦の所有者となり、自然病弱になりはせぬかと疑はれるが、恐らく、より進んだ食物榮養と完備した運動とによつて、歩一歩、肉體を完成し、原始人の如く現代科學の想像し得ぬまでに肉體が健全になるであらう。……』（中川思水）

海水中の黄金

海水の中には莫大な黄金が溶け込んで居る―これは學者間の定説で、其分量は、海水一噸中に、金、〇、〇〇八六匁との事だ。海水一立方哩は四十二億五百萬噸で、世界中の海水は三億萬立方哩と言ふから、此勘定で行くと、海水中に溶けて居る黄金の總量は、驚く勿れ、實に四百萬億噸となる譯だ。

何と諸君！金一匁の値段を五圓と假定して、之を通貨に換算したらどの位になるだらう。暇に任せて計算して見るのも、チョツと一興があるであらう。（相原延久）

脊穴で子を育てる蛙

造化の妙と云ふか、自然の恵と云ふか、自分の脊中の穴で子供を育てる、珍らしい動物がある。それはピパ、又はスリナム、トードと云ふ一種の蛙で、南アメリカのスリナムと云ふ處に棲息してる。

繁殖期になると、此蛙の雌の脊は柔かくなつて、小さな穴が點々と一面に開いて、恰度、熟れた蓮の蕚と云つた形になる。かうなると間もなく此雌蛙は、水邊の柔い濕地を選んでは、ぽつ〳〵と卵を産み落して行く。此卵を見付けた雄は、それこそ後生大事と、雌の脊中の穴にその卵を運び入れ蓋をする。

卵は此中で約三ケ月の間に孵化し、親と同じ形體になるまで、蝌蚪の時代を悠々と暮して行く。

この雌蛙の中には六七十匹の子供を此穴で孵み育てる樣な大きいのも居ると云ふが、かの腹の袋で子供を運搬するカンガルーと好一對の面白い動物だ。(臼井春子)

ピラミツドを現代式で造れば

世界名物の一として、埃及文化の昔を語るかのピラミツドは、高さ約五百呎、面積十三平方エーカーの間に、九千萬立呎の石材が三稜形に積重ねられて居るが、古代の埃及王は、之を造るために、約十萬の奴隷を二十年間に亙つて使役したとの事である。

處で、此驚くべきピラミツドも、現代式の機械力と設備とを以てすれば、恐らく一年間で造り上げることが出來よう。勿論それは石の代りにコンクリートを用ふので、偉大な混和裝置の下に、一日數千噸を注ぎ込み、外壁には花崗石を積み上げる樣にするのである。

毎日一千の人員を要して、一人四弗と見ると、この大ピラミツドも百二十萬の費用で、約一年間に出來る譯である。

處が古代の埃及人は之を造るために、僅に二十萬弗あれば充分であつた。即ち二十萬弗で十萬の奴隷を二十年間使役することが出來た譯である。(窪田菊次)

○愚かなるものは知識と訓誨とを輕ず。　ソロモン

本社代理部直輸入

世界的大流行の 支那遊戲 麻雀（マージャン）

◇新着支那製器具特賣



牛骨製厚肉上等極彩色の逸品
何れも上等容器計數器付

▼一號 特價 貳拾五圓
▼二號 特價 貳拾八圓
▼三號 特價 參拾圓
▼四號 特價 參拾五圓
▼五號 特價 四拾圓
荷造送料內地四十錢領土九十錢
▽麻雀解說書 一圓 送料二錢

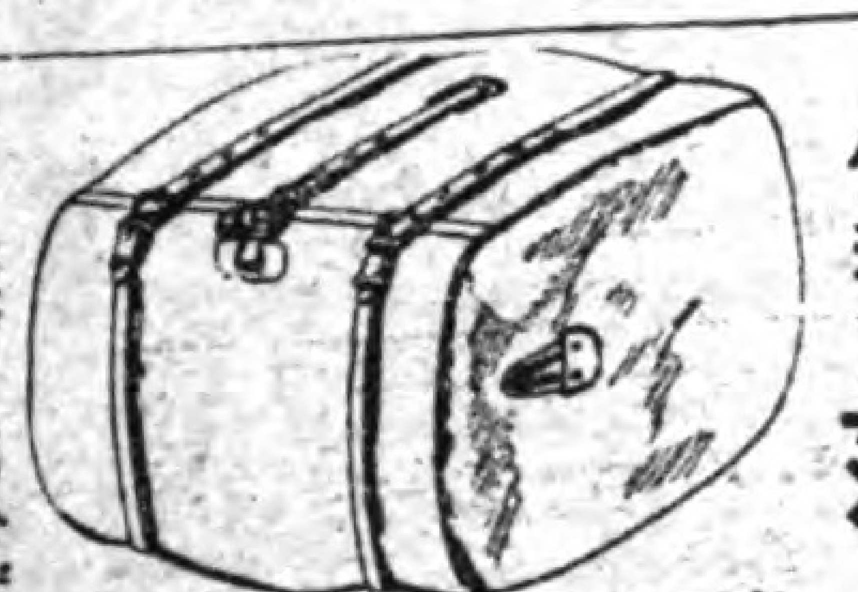
輕便自動マッチ

獨逸製「スプラ」



頭部の紐を强く引くと發火石によつて風雨中でも完全に點火する輕便マッチ、燃料はキハツ油ですが一回數滴注入して置けば四五日間は保つ。在來品と異り發火完全で永久使用に耐え得るのです。**壹圓二拾錢**（送料十二錢）發火石は別に五個一組**拾五錢**送料二錢。

旅行、移轉、保存に便利な蒲團袋



夜具は旅行や移轉の際の運搬には勿論、保存にも大變厄介なものですがこの蒲團袋を用ひれば、その取扱ひは非常に樂であります。一枚以上五六枚まで一人で手輕に完全に包め、パンドで締めれば別に紐等を用ひずとも運搬至極便利で又何處へ放り出しても安心、厚地上等ズック製故完全に保護せられます。上製**九圓五十錢**、特製**十一圓**（特製は防水裝置につき）送料內地四十錢、領土六十錢）。

寢ながら讀書の出來るブックスタンド



雜誌、書籍はその大小に拘らず總てこれに用ひられ、横向きでも仰向きになつても、寢ながら樂々と書見が出來ます。角度の加減、回轉高低自由、病人は勿論、身體の疲勞した場合には大層重寶であります。

◆**一臺で六種に使用出來る**
◆寢讀二通り◆音樂演奏殊に尺八琴等の譜面臺となる◆卓上書見臺◆筆記用に便利◆書架となる◆氷のう吊

上製 **三圓五拾錢**
並製 **三圓**
三種用 **二圓五拾錢**
（送料內地三十錢臺樺滿鮮七十五錢）

埃よけ、虫よけ、濕氣よけ

新案特許 洋服保存器（簡便な洋服箪笥代用品）



背廣用 上 **一圓八十錢** 並 **一圓五十錢**
外套用 上 **二圓** 並 **一圓七十錢**
（送料內地廿五錢領土六十錢）

極く丈夫な紙で圖の樣に作られてあります。內部へ洋服を吊り下げ、口を閉ぢれば外氣を完全に遮斷しますから絕對に蟲食ひなどの生ずることなく皺にもならず完全に保存することが出來得る重寶なものです。上製は入念の吊金具付き並製は中に木製洋服かけを添付

◆家庭クリーニング液

洋服でも和服でも一着十錢で手輕にクリーニング出來る



只この液を汚れの程度によつて五倍乃至十倍に薄めて强いブラシで生地を洗つて行けば、それでよいのです。洗濯やに出せば二三圓もかゝるクリーニングが此液で家庭でも御やりになれば一着分僅に十錢位で御子樣の洋服でも帽子でも絹物の着物でも何んでも生地を損する御心配はありません。一瓶（洋服十着分）壹圓送料內地十五錢領土五十錢

最後の小片まで綺麗に削れる ——安全——鰹節削り器



鰹節を差込んで只ハンドルを廻しさへすれば少しも骨を折らなくてどんな小片でも最後迄美しく削れます。內部で三枚の刄が廻轉する故在來の品の數倍の能力があり而も樂で綺麗で危險もなく鰹節の無駄が全く無く時間も勞力も省けるから新時代の家庭は勿論料理店等には是非共お備へ下さい。鐵製ニッケル鍍金二圓五十錢送料四十錢領土八十錢

講談社代理部
東京市本鄉區駒込坂下町
振替口座東京六六二九



神經衰弱　病弱老衰　不感症……
生殖不能等を根本的に治療する……
新若返り藥『精壯』の權威と効驗

東京漢藥研究會長　織田華光

若返り法秘訣記

人間にしても他の動物にあつても、身神發育維持のために、實に必要缺くべからざる要素に、ホルモン内分泌と云ふものがあります。之は體内樞要の部分男子の睾丸、女子の卵巢、男女兩性とも腦下垂體、松果腺、甲狀腺、胸腺、副腎、膵臟、胃粘膜、腎臟、脾臟、頸腺、子宮等と共にあるそれ〴〵のホルモン腺といふ腺から絶えず産出する内分泌液で、その作用は精神、肉體兩方面の發達を促し、消極的には體内の有害物を破壞し、積極的には身神の生育保健につくすもので、若しいづれかのホルモンが、僅かでも調和を亂したり、過不足を來したならばそれが即ち疾病を起す根強い原因となると申します。就中神經衰弱、生殖不能、老衰、記憶力減退ヒステリー等の眞原因は、實に男女生殖ホルモン腺即ち睾丸、卵巢等のホルモン産出不完全や濫費消耗のためであります。

精壯の神神的作用

されば今日迄困難とされた神經衰弱、生殖器障害、ヒステリーの如き難症も亦絶對不可能とされし老衰者を若返らす事も、生殖ホルモン腺の機能を旺盛にすれば譯なく解決出來ると申します。

此の學説が英國のスターリング氏に依つて發表されるや、世界の學者は爭つて此のホルモンの働を盛にする藥劑の研究に着手し永らく研究されつゝあつたのでしたが、嬉しい事には昨年新發見された『精壯』は此の學説にことごとく一致する世界唯一の特効藥で、服用後直ちに體内各種のホルモン腺に作用しその榮養となり、それ等の機能を活潑にし内分泌を盛大ならしむるもので、精壯が如何なる偉力を有するか又如何なる人々に愛用されるかは已に本誌上にもしば〳〵發表した通りで、『精壯は實に百藥の王だ』とまで各方面の方より無上の稱讃を賜つて居る位で、その驚くべき効驗は自然に然も眞氣持よく、人體内に神秘に宿つて居る吾人の春身の清き泉たる各種ホルモンの刺戟覺醒をば圓滿完全に絶えず湧きたゝしむるに偉効ある新高貴藥で之を服用する事に依り清き美しき血液は不斷に胸に高鳴り、幸福な人生が展開し心身共に立派な男子であります。優しい女子でも然も思ひ切つて働け愉快に暮せ豐かなる性の幸福を與へられ、容貌にも活氣を帶びて頭腦がよくなり血行が整つて健康もよらず一生をば常に青春の光榮の中に生きる事が出來得るのであります。左樣な譯で不肖華光はこの光榮を深謝すると同時に更に一大確信の本に不幸な方を御救ひしたいと存じて居る次第であります。

此の『精壯』を御希望の方は左記代理部にて一手に御取次ぎを願つて居ります。
藥價　小瓶（六十錠入）約一週間分、金二圓五拾錢　大瓶（百八十錠入）約三週間分、金七圓送料内地十五錢、領土五十錢、東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ。

實驗報告は紙面の都合上省略別册になつて居りますから御入用の方は御申込下さい

夏まけ……夏期の消化不良、胃腸病者は勿論……

特に虚弱體質者に奇効ある

近頃愈々大好評の「にんにく精」

惡臭なく女子供も容易にのめます

「にんにく」の球根が虚弱な身體を丈夫にし胃腸を整へ、その活動を旺盛にし、從て食慾を増加させて、元氣を回復せしめ、精力を増進し、殊に夏まけを防ぎ、冷性などに非常な效果を奏することは、古來人のよく知る處であり、且又幾多の實例により證據立てられて居ります。專門家の說によると「にんにく」には非常に强い殺菌力と解毒の效があるといふ事で、尙之を榮養價値の方面から見ましても、ヴイタミン含有量の豐富なことは、野菜類の中でも第一位であります。實に「にんにく」は整腸に又强壯榮養料として實に貴重な理想的自然藥であります。

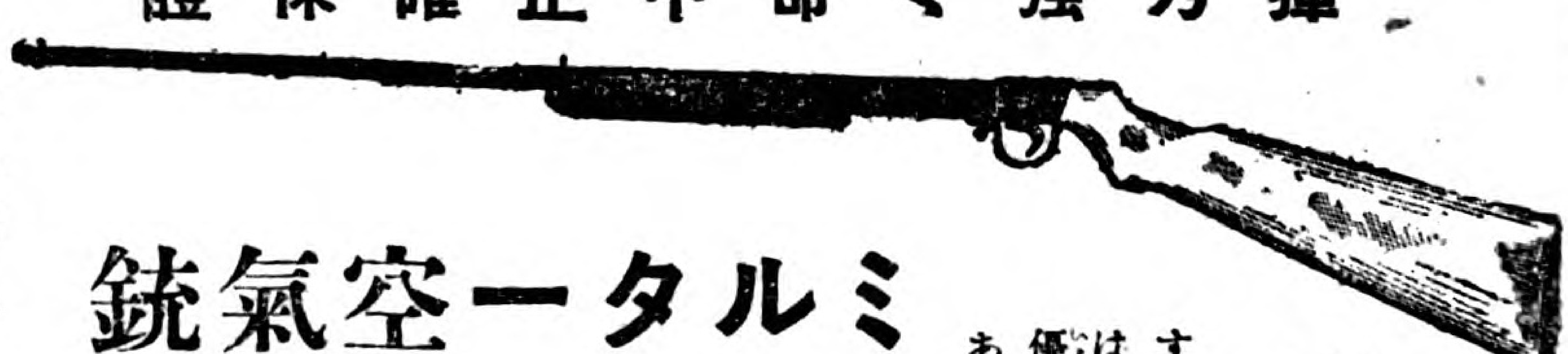
然し、「良藥は口に苦し」と云ふ古諺の如く此貴重な自然藥もその儘では苦辛く臭氣の强烈な爲に、折角その效果は知られ乍ら餘り用ひられません。これは誠に遺憾なことであります。

如何にすれば、何人でもこれを容易く攝取することが出來るかと、苦心されたのが工學士關口定伸氏で、永らく研究された結果、此「にんにく精」卽ち「にんにく丸」を創製されました。「にんにく丸」は生の「にんにく」の有效成分を抽出しそれを服みよい丸藥としたもので、生の儘と同樣の效果があり、その上臭氣も消されて、服用後に口中から惡臭を出さないと云ふのが特長であります。從つて子供にでも容易に用ひられ、一日二三十粒用ひれば生の「にんにく」を二三個用ひたのと同樣の效果が見られるのであります。之により身體が見違へる程丈夫になつたのや病弱の體質を改造したと云ふ樣な實例は澤山あります。特に胃腸を整へることが妙で、夏まけ夏やせの甚しい人もこれを用ひるとメキメキ恢復することは從來の實驗で明瞭に認められました。胃腸の弱い人、病弱に嘆く人、精力元氣なき人、冷え性の御婦人など是非御試みになる樣お推めいたします。

「にんにく丸」三百粒入（十日分）壹圓七十錢　九百粒入（三十日分）四圓五十錢、送料內地十五錢領土五十錢、東京市本鄕區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替口座東京六六二九へ御申込下さい）

好期來る!!　御用意は早く！

彈力强く命中正確保證



ミルター空氣銃

ミルター銃は何れも中折式で彈丸は元込故常に彈力强いのが特長です、大形ミルターは六分板三枚位は打貫く偉力が優にありますから小鳥は勿論、大抵の鳥類を打つことが出來ます、銃身は細形黑色磨上げ構造頗る堅牢で永く狂ひの出ることがないのが特長

大形　二十圓（荷造費四十錢運賃先拂）

BSA青年用　十五圓

小形　十二圓五十錢（送料內地七十錢領土一圓廿錢）

△BB彈　一函　四十錢

△チョク彈　五百個入　四十五錢

△ツヅミ彈　五百個入　一圓廿錢

彈丸送料一種　內地　十二錢　領土　四十五錢

東京市本鄕區駒込坂下町

大日本雄辯會代理部

振替東京六六二九番

今が最も難關の……喘息患者鬪病術

誰にも出來る安全手輕な治療法

一記者

□此季節が喘息の最難關

暑からず寒からず普通の人なら食慾もズットと進んでこんな結構な季節はないのに喘息の人に取つては、唯今が最難關生死の境、實に地獄の一丁目なのであります。

然も喘息の苦しい事は今更申すまでもない事でこの患者は、あちらでも、こちらでもゼーゼーと傍で見る目も氣の毒な、苦しみと悶えを訴へて居られます。

斯樣に喘息は苦しい病氣でありながら世の多くの方々の中には不治の持病と諦めて終生を苦しみ通した人も少くありませんが、近來醫藥の進歩の結果合理的な療法もあれば又怠らない平素の養生攝生によつてその發作を未然に防ぐ事も決して六ケ敷い事ではなく、元來喘息は病氣の性質上發作の兆ある毎に、押へ押へして行けば今の難關も極めて氣輕に一度の苦しみもなく通り抜ける事も出來るのでありますが、喘息が特に之から秋にかけて起り易い理由も醫學上から專門的な說明は別として本誌記者の實驗した所によれば以下二つの事情に依る事が最も多く然も恐るべき事であると解せられます。

□喘息發作誘因は冷刺戟が恐しい

喘息を起した後でその發作を誘ひ起した原因卽ちあれでやられたか、之で失敗したかと必ず思ひ當る事があるに相違なく、然もこれ等の誘因の中で最も覿面に來るものは冷氣で、爲めに感冒と同時に起つたり又は感冒に續いて始つたり或は喘息が起つて來ると鼻が塞つたり鼻汁が出たりする事も間々ありますが、之等の小發作の時には、注射なり服藥するなりして喘息が鎮まれば同時に消失する事によつても、喘息の前驅的兆候である事は明白で以上を通して考へますと喘息は正しく冷刺戟によつて起る發作的疾患であると言ひ得るのであります。

□身體の弛緩した時に發作し易い

然らば喘息は嚴寒時及嚴寒地方に最も多いかとも察せられますが、事實は却つて夏から秋にかけて氣候の變り目が最も恐しく然も起され易いのであります。

それは暑中の跡を受け患者の身體各部は極度に弛緩してゐる秋から冬にかけて氣候の激變、冷氣忽然として來るなどの事が最大の原因で從つてこの季節は喘息患者に取つては最も御用心を必要とする時であります。

此季節の發作豫防法

然らばこの最難關を如何にして切抜けたらよいか左に記者の實驗談と多數同病者からの報告を綜合して少しく申述べて見ませう。

冷氣に對して慣れること……一喘息の誘因の最大なものがこの冷氣であると分つて見れば喘息氣のある者は先づこの冷氣に

對する方法を講じておかねばなりませんが、それには第一に冷氣に對して十分慣れることが肝心で常に意を之に用ひて喘息豫防上に注意し恐るべき最大の誘因である冷刺戟に十分抵抗し得る樣平素から少し宛でも身體に冷刺戟を加へて置くといふ事も一方法で或は冷水摩擦をするとかそれさへも出來ない方は朝なるべく早く起きて冷たい空氣を吸ふ事などにも出來る最良の方法であります。

尚冷水で顏を洗ふとか、頭を冷すなどもよい方法ではありますが、爲めに苦痛を感じたり呼吸困難を來したりする樣では却つて害にならないとも限りません、兎に角、自身の體質に相談して最もよい方法を選び氣長に然も永續的に行ふ事に依つて十分な効果も擧げ得るわけであります。

冷氣を防ぐことも亦大切……冷氣に對して慣れる事が肝要であると同時に之を前以て防ぐ事も亦大切な事で特にこの時期になりますと氣候は實に目まぐるしい程變化しますから朝に夕に氣温の變り目には面倒でも衣服を調節し場合によつては、足袋のやうなものまで充分に警戒し身心を弛緩せしめぬ樣心がける事は喘息豫防上大切な要諦であります

喘息の最新治療法

よく注意に、注意をして居りましても喘息は無論幼兒にも何時襲つて來るかも知れませんし五年十年と言ふ樣な痼疾になつて參りますと以上の注意丈では、とても安心出來るものではありません、これ以上は是非藥の力に依る事で藥と一概に申しましても一時的な頓挫藥もあれば、苦痛押への注射もありその他所謂廣告文句ほど効果のないものも少くありませんが何れにしても一時的のものや習慣性のものは最初から避けねばなりません。

然し茲に數年來その成績を報道し讀者諸賢に大確信をもつて御推奬して居ります喘息名藥として評判の高い喘息エキスはこの場合も聲を大にして御奬め出來る最良藥で本社で御紹介以來已に滿六ケ年を經過し安全無害而も習慣性とならず効力の著しい事は喘息藥中随一の名聲を博し其の愛用者全國津々浦々迄及び最早科學的試驗の合格品であります。

又喘息エキスの姉妹藥として生れましたムラセ氏錠の方は既に參ケ年前より發表に係るもので本誌を通じて御希望者のみに御取次いたして居りましたが、愈よ御好評を得之ならばと確信もつきましたので今般特に御奬めする次第であります。

□最も合理的な二藥の應用法

喘息エキスは發作を起した時の頓挫に卓効を表しこのムラセ氏錠はその兆をさへ起さない樣に平素の持藥として研究されたもので即ち色々と注意して居ても氣候の變化に堪へられない時でゝも何時も用心深く持藥されますならその強い消炎吸收等の作用により時候の急變にも堪へられ轉地の方なら單に本劑の服用丈でもこの轉地を知らぬ間に安々と過される事も出來ます尚頑症の方は發作の苦しみを著しく輕減させ苦しみを未然に防ぎ遂ひにはその病氣の根本に向つて治療も出來る筈であります。萬一愈々發作の兆が見えた時には、喘息エキスを一匙用ひれば僅々十分乃至二十分位で効果は的確に表はれ、將に襲はれんとした病苦から免れる事が出來る全くウソの樣な事實であります。

どうぞこの記事を御一讀なされた方々は合理的なこの適効藥を以つてこの秋を御無事に御過しなされます樣今回特に記者より御願ひ申上げます。(以上)

喘息エキスは全國有名な藥店にも販賣いたして居りますが價は卅回分二圓五十錢六十回分四圓八十錢百回分金七圓でムラセ氏錠は小(約二十日分)金二圓、大(約四十日分)金三圓五十錢、送料は何れも一箇につき內地十五錢鮮土五十錢、その發賣元は東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)です。

婦人病冷え症胃腸病を始め
其他百餘種の病氣に折紙付き卽効!
ラヂウム温灸治療法
熱くなく、痕を殘さぬ氣持よい温灸器の發明

艾療法の効能

温灸は、一般灸の缺點である熱いこと瘢痕を殘す事、これらに改良工夫し、誰にでも氣持よく極く手輕に治療出來る樣にしたものでその効能に付いては今更申上げるまでもなく、十何年來の慢性胃腸病、神經衰弱症、貧血症、リウマチス等が夢の如く治つたと言ふ實例が少なくありません。

然もこの温灸器は在來品のあらゆる不備を完全に補つたもので、棒狀に壓縮した艾を入れ、獨特のラヂウム罨法藥を裝置して懷爐同樣に腹部に當て、上から帶でおさへて置きますと、執務中でも睡眠中寢返りしても差支なく懷爐兼用となつて、お手輕に家庭で治療が出來ます。發表以來愈々大評判となりました。

=名士に歡迎さる=

普く名士の御愛用を受け、或は賞讚され或は推奬されるのを見ても、如何に本治療法の誠實、的確かゞおわかりでせう。

現に海上ビル内東邦電力會社に於ては副社長松永安左衞門氏以下常務の竹岡陽一氏理事宮川竹馬氏總務課長青柳有美氏經理課長山縣氏其他高級社員方の御愛用賜り尚東京電力株式會社常務進藤甲兵氏專務宮口竹雄氏庶務課長山崎金作氏營業課長久光公正氏は三個も又土木課長石井次郎氏外三十餘名御試用を戴き「これは便利だ重寶だ」と御推奬、又麹町區富士見町一丁目の濱田家の老母は始めて使用して肩のコリを忘れたと非常に喜び富士見町一帶に大宣傳十七個も紹介。

芝區白金三光町八一川部電機工場の老母

は從來ぜんそくに悩され毎年二回も注射して來たものが約三週間本器を使用し見違へる程に恢復したと禮を述べました。

又府下十條の小島きよ氏は毎年半歳位の臥床をする程の胃腸病もこの温灸器を使用してから風邪一つ罹かぬ身になつたと大喜び。



=驚くべき効驗=

大峯行者、行法院、關口西明師は全國に多數の信者を有し『弘法大師ごむそう灸』の名師として、名高く患者達は手を觸れた丈でも治る』とまで灸治療を信じて居る有様なのに今回このラヂウム温灸の奇効を賞讃せられ特に推奬狀を寄せられた程であります。

その効驗の偉大なる事は今更喋々する迄もない事で、冷症、不姙症、便秘症、貧血症などの恢復した例は少くなく日々感謝狀は机上に山を爲して居ります。殊に胃腸病、消化不良常習便秘、痔疾、肩のコリ、氣管支諸症、不眠症、神經痛、腰痛等で御困りの方は是非一度御試し下さい。必ず喜ぶべき結果が得られます。

ラヂウム温灸治療器（特効艾ラヂウム罨法藥二週間分付）　價 三圓八十錢　送料 内地十八錢 領土五十錢

補給用特効艾及ラヂウム罨法藥
二週間分　一圓五十錢
五週間分　三圓二十錢
送料内地各十五錢 領土五十錢

尚ほ皆樣のおすゝめにより、此の度更に研究特製丸型、桐箱入りを作りました。これは床の間にお置きなつても差支ない樣立派に致しましたもので、特効艾も更に小型に壓縮し、温灸治療器も精選金屬製丸型となつてをります。桐箱の中に全部附屬品を入れてありますから、お持運びに便利であります。

丸型特製温灸器（上等桐箱入）
特効艾ラヂウム罨法藥二週間分付　價 八圓五十錢　送料内地四十五錢 領土八十錢

補給用特効艾及びラヂウム罨法藥
丸型特製用五週間分　二圓七十錢　送料内地二十錢 領土六十錢

御入用の方は御申越次第實驗報告及び說明書を差上げます

發賣元　東京市本郷區駒込坂下町四八　大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）

無毛 薄毛 拔毛に

悩まれる人々の福音

◇新學說に依る内服榮養と毛生作用◇

數多い毛生藥の中で最も効果確實であると評判されて居る毛髮の内服榮養藥「セラシン」は毛髮の發育に必要な特殊榮養物で之を内服しますと毛髮は愈々發育するのみならずよくその毛根を養つて新しい毛を誘發させ、事實この「セラシン」は從來の塗布藥等と異り直接毛髮の發育を助長する故その効果も著しく、或る人の如きはあらゆる藥物物理療法でも寸効のなかつた禿頭が「セラシン」の服用によつて美しい毛髮になつた例や産後の婦人の拔毛に用ひて前にも増した毛髮美を得た等の例も少くありません。内服藥であつても全然副作用等を起す心配もなく安心して御推め出來るものでこの「セラシン」に依り今日まで幸福になられた方々も少くありません、價は一ヶ月分五圓外用一瓶三圓（送料内地十五錢領土五十錢）内外併用すれば一層有効です。本社代理部で御取次します（振替東京六六二九）

諸君！お喜び下さい!!

讀者諸君！
肥馬天に嘶き、萬物成熟の秋となりました。小誌キングは皆様の絶大な御聲援に依り發展！又發展、嶄然として天下の雜誌界を風靡して居ります。

讀者諸君！
茲に欣快なお便りがあります。その一は別項豫告にもその一端を示すが如く、本誌十一月號に於て、素晴らしい大計畫の下に幾多の特別記事を苦心編輯して以て天下の視聽を盡く集めんとしてゐることであります。

讀者諸君！
更に又今秋行はせらるべき曠古の御大典に際し、これを奉祝する爲めに、五百の社員敢然として立ち、キング創刊以來初めての一大臨時增刊を刊行することになりました。

讀者諸君！
これに盛るところの記事讀物は、一字一句皆光り輝いたもので、どれを讀んでも面白く爲めになる底の優秀篇ばかりです。そして我が出版界に未だ曾て類例のない破天荒の大部數出版の計畫です。

讀者諸君！
この臨時增刊こそ眞に一世を驚倒させずにはおかぬ大壯擧です。刮目してお待ち下さい。いよ／＼發賣された日の天下の大驚異！　天下の大評判！　尚詳細は十一月號誌上で發表いたします。

定價表（平月號）

冊數	國內・滿洲・支那	送料	外國（送料とも、）
一冊	金五拾錢	參錢	金六拾八錢
四冊	金貳圓	不要	金貳圓六拾錢
八冊	金參圓九拾貳錢	不要	金五圓拾貳錢
十二冊	金五圓七拾六錢	不要	金七圓五拾六錢

特大號の場合は右定價の外で、其差額は右表の外に申受けます。但し前金にて數ヶ月分御拂込の分はその御預りの中より差引計算いたしますから、其都度御送金下さるには及びません。

謹告

○弊社の圖書雜誌の御註文は總て前金の事○振替貯金にて御送金は口座受入手數料金壹錢御同送の事○郵券代用は必ず一割增の事○雜誌代前金相切れ候節は最終の雜誌帶封に「前金切」の印を捺し次の前金領收まて發送停止○前金は本誌到達を以て領收の事と御承知の事○外國行郵税は一冊拾八錢申受候○御注文書狀宛名は「大日本雄辯會講談社營業部」の事○郵税不足又は未納の郵便物は請取不申候○弊社發行諸雜誌廣告料は御照會次第詳細に御報知可申上候

昭和三年九月三日印刷納本
昭和三年十月一日發行（第四卷第十號）

編輯兼發行人　長谷川卓郎
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川（二二五・二二六・二二二七／七〇八八・三五九六・五九八一／二六〇・一五一一・（長）五二〇）

元取次店
東京堂・東海堂・北隆館・大東館



青山 田中光顯閣下著

〔四六判 函入　定價貳圓　送料十錢〕

維新風雲回顧錄

第十一版發賣

見よ、氣魄ある筆致！烈々人に迫る感激！

維新回天の眞相一目瞭然！

本書は假想の稗史に非ず、小說に非ず、悉くこれ維新史の大舞臺に風雲を叱咜せる木戶、大久保、坂本、伊藤、山縣等、幾多の志士烈士が鮮血を以て彩られたる最高頂場面！

讀め、何人も！　見よ[illegible]

『維新風雲回顧錄』を讀む　蘇峰　德富猪一郎

此書の特色は、當事者が其の閱歷を自ら物語りたる事だ。固より從前から此種の著述は皆無ではなかつた。されど未だ此書の如く直截にして痛快なるものを見出さない。繰り返して云ふ、此書の特色は實にその痛快なる所にある。それは青山老伯が精神を打籠めて語つたからだ。即ち著者の滿腔の熱血が注がれたからだ。云々

（國民新聞紙上に激賞！）

東京本郷駒込坂下町（振替東京三九三〇）

大日本雄辯會講談社

御申込次第圖書目錄進呈

THE KING
Published monthly by the Dainippon Yubenkai Kodansha, Hongo, Tokyo, Japan.
Entered as second class mailmatter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月廿日第三種郵便物認可 昭和三年九月三日印刷納本 昭和三年十月一日發行（毎月一回一日發行）